

経路歩行実験に基づく
都市の様相の分析とモデル化に関する研究

北 雄介

もくじ

第1章 序論	1
1. 1 研究の背景	3
1. 1. 1 われわれの心への探求	3
1. 1. 2 街歩きと街づくり	3
1. 1. 3 現代都市の行き詰まり	4
1. 1. 4 新しい都市・建築デザイン方法の要請	4
1. 2 研究の目的と方法	6
1. 2. 1 都市の様相のモデル化	6
1. 2. 2 実際の都市における様相のあらわれ方の分析	6
1. 2. 3 都市のデザインに資する知見の獲得	7
1. 3 既往研究と本研究の位置づけ	8
1. 3. 1 都市のイメージ研究	8
1. 3. 2 歩行実験を用いた研究	8
1. 3. 3 街路空間の記述	10
1. 3. 4 都市の様相の記述	11
1. 3. 5 ワークショップとしての歩行調査	12
1. 4 研究の流れ	14
第2章 都市の様相についての基本的概念の構築	15
2. 1 哲学と様相論	17
2. 1. 1 存在論	17
2. 1. 2 認識論	19
2. 1. 3 実存主義の哲学	21
2. 1. 4 プラグマティズム	22
2. 1. 5 可能世界意味論	25
2. 1. 6 都市と建築の様相論	27
2. 2 都市論・空間論	31
2. 2. 1 ゲシュタルト心理学	31
2. 2. 2 ケヴィン・リンチの『都市のイメージ』	32
2. 2. 3 現象学的空間論	34
2. 2. 4 街路論	37
2. 3 本研究における都市の様相概念	40
2. 3. 1 様相概念	40
2. 3. 2 都市の様相	44

第3章 経路歩行実験 47

3. 1 実験の構想	49
3. 1. 1 様相の記録	49
3. 1. 2 言葉と様相	49
3. 1. 3 実験という状況	50
3. 2 実験の詳細	51
3. 2. 1 3つのルート	51
3. 2. 2 日程	57
3. 2. 3 被験者	58
3. 2. 4 実験の流れ	58
3. 3 得られたデータ	60
3. 3. 1 記録用紙と記録方法	60
3. 3. 2 記録データの整理	62

第4章 記録の重ね合わせによる都市の様相の記述 65

4. 1 領域分割グラフの作成とエッジ・エリアの検出	67
4. 1. 1 領域分割グラフの作成	67
4. 1. 2 エッジ・エリアの検出	68
4. 2 領域評価グラフの作成	74
4. 3 様相・領域表現をもとにした様相因子の抽出	76
4. 3. 1 様相と様相・領域表現、様相因子	76
4. 3. 2 様相因子の抽出	76
4. 4 領域表現によるエリアの様相の記述	84
4. 4. 1 領域表現のエリアへの振り分け	84
4. 4. 2 エリアの様相の記述	84
4. 4. 3 コネクターとシフターによるシークエンス記述	85
4. 5 様相表現プロットグラフの作成	88

第5章 記述データに基づく都市の様相の分析 91

5. 1 記述・記録データの基礎的分析	93
5. 1. 1 領域分割グラフの分析	93
5. 1. 2 領域評価指標間の関連性の分析	94
5. 1. 3 記録量の変化の分析	95
5. 1. 4 被験者間の記録傾向のばらつき分析	96
5. 2 エッジ・エリアとそのシークエンスの分析	98
5. 2. 1 エッジの分析	98
5. 2. 2 エリアの分析	100
5. 2. 3 エッジ・エリアのシークエンスの分析	102

5.3 様相を表わす言語の分析	108
5.3.1 様相因子指標を用いた分析	108
5.3.2 自己組織化マップによる分析	116

第6章 フレーム概念に基づく都市の様相の分析 123

6.1 分析の準備	125
6.1.1 フレームの関連理論の導入	125
6.1.2 フレームと様相	132
6.1.3 典型的な記録の分析	133
6.1.4 分析の組み立て	136
6.2 短期的フレーム	139
6.2.1 気づき	139
6.2.2 類似と差異	143
6.2.3 短期的フレームの書き替え	148
6.3 長期的フレーム	150
6.3.1 言葉にあらわれるデフォルト構造	150
6.3.2 デフォルト構造からのずれ	151
6.3.3 デフォルト構造の進化	156
6.4 身体的フレーム	158
6.4.1 行動による様相把握	158
6.4.2 二つの座標系	158
6.4.3 内と外	162
6.4.4 アトラクター	163
6.4.5 諸感覚のはたらき	169
6.5 フレームの志向性	171
6.5.1 志向性の明確な表現	171
6.5.2 フレームにおける願望	174
6.5.3 可能世界の志向	178
6.6 フレームの社会性	182
6.6.1 個人的フレーム	182
6.6.2 社会的フレーム	182

第7章 時間的・空間的コンテクストを導入した各ルートの総合分析 187

7.1 京都の時間的・空間的コンテクスト	189
7.1.1 平安京とその変遷	189
7.1.2 中世都市としての成熟	191
7.1.3 明治以降の激動	192
7.2 ルートIの総合分析	198
7.2.1 ルートI周辺の時間的・空間的コンテクスト	198

7. 2. 2 エッジ・エリアごとの分析	202
7. 2. 3 ルート全体からの考察	208
7. 3 ルートⅡの総合分析	211
7. 3. 1 ルートⅡ周辺の時間的・空間的コンテキスト	211
7. 3. 2 エッジ・エリアごとの分析	217
7. 3. 3 ルート全体からの考察	225
7. 4 ルートⅢの総合分析	227
7. 4. 1 ルートⅢ周辺の時間的・空間的コンテキスト	227
7. 4. 2 エッジ・エリアごとの分析	234
7. 4. 3 ルート全体からの考察	243

第8章 都市の様相のモデル化 247

8. 1 様相のモデル化	249
8. 1. 1 可能態	249
8. 1. 2 経路	251
8. 1. 3 フレーム	253
8. 1. 4 身体	254
8. 1. 5 共有	255
8. 1. 6 全体の関係性	256
8. 2 都市の様相の空間的なあらわれ方のモデル化	257
8. 2. 1 街路	257
8. 2. 2 自然と地形	258
8. 2. 3 建物の機能	259
8. 2. 4 建物の属性	259
8. 2. 5 アトラクター	260
8. 2. 6 アクティビティ	261
8. 2. 7 その他の要素	262
8. 2. 8 様相の全体性	262
8. 2. 9 全体の関係性	263
8. 3 都市の様相と時間に関する考察	266
8. 3. 1 時間と様相	266
8. 3. 2 都市のデザイン	266

第9章 結論 269

9. 1 結論	271
9. 1. 1 各章のまとめ	271
9. 1. 2 全体の結論	273
9. 2 本研究の展開可能性	276
9. 2. 1 調査・研究手法としての面展開や汎用化	276

9. 2. 2 方法や理論のデザインへの活用	276
9. 2. 3 関係分野や異領域への応用	277
参考・引用文献一覧	281
発表論文一覧	287
あとがき	289
Appendix	293
Appendix-A 実験時の配布資料・記入用紙サンプル	295
Appendix-B 全記録データの被験者別一覧	302
ルート I	303
ルート II	325
ルート III	353
Appendix-C 様相表現プロットグラフ	379
Appendix-D 京都の都市史年表	419
Appendix-E 歩行実験の手法の展開例	426

第1章 序論

本研究は、われわれが都市において感じ取っている曖昧で全体的なことがらを「様相」(modality)という概念をもとに読み解こうとするものである。序論では、この研究を進める上での背景をはじめ、目的と方法、既往研究との関係、そして論文全体のアウトラインを提示する。

1.1 研究の背景

1.1.1 われわれの心への探究

本研究の構想は、筆者自身の街歩きの体験に基づいている。旅先の街で思いもしなかったような美しい光景に出合ったときの高揚感や、夜中にうらぶれた通りに迷い込んでしまったときの心許なさ。街路を歩く中でこうした感情がどのように湧き上がってくるのかを、本研究では明らかにしたいと考えている。

こうした感情に対しては建築や道といった固定的構築環境の影響はもちろん大きいであろうが、人の流れ、風や気温、音やにおいといった流動的要素、あるいはその人の気分、性格や過去の記憶に依存する部分もあろう。つまりわれわれの感情は単に環境によって決定されているとも、われわれが決めているともつかず、非常に複雑なプロセスの結果生じてきているものだと考えられる。

このわれわれ自身の感情については、人類が常に興味を持ち、学問的探究を続けてきたものであった。街を歩くときに限らず、何か思惟したり、あるいは日常生活を送ったりする中で、一体われわれは何を、どのように感じているのだろうかという疑問である。この疑問の解決のために哲学や心理学をはじめとするさまざまな分野で研究が進められてきたのであるが、それらはいまだに完結していない。人体の複雑なメカニズムや宇宙の果てが解明されようとも、われわれ自身の心は依然大きな謎であり、飽くなき探求の対象であり続けているのである。本研究もまた、この流れの中に位置している。

1.1.2 街歩きと街づくり

先に筆者自身の街歩き体験について述べたが、このような原体験は多くの人々に共通のものであり、また彼らを魅了してきた。街路を逍遥しながら美しい景色を楽しみ、また思索に耽ったり、あるいは食事や芝居に出かけたりすることは都市居住者の何よりの楽しみである。ベンヤミン(Walter Benjamin)¹や永井荷風²らの作品は、こうした街歩きの中で生まれてきたものであった。彼らの流麗な文章の中には街を歩く喜びが体現されており、また都市のもつ機微や時代の雰囲気などに対する鋭い観察録にもなっている。

現代都市では街路の大部分は自動車に占拠され、街を歩くことの楽しみは忘れられつつあるように思われる。しかし近年、歩くことに対する社会的関心が再び高まっている。日本や世界の都市での「街歩き」を誘う本が出版され³、数々のテレビ番組も放送されている⁴。また健康志向を背景にウォーキングがブームとなり、四国八十八カ所のお遍路や熊野古道のような旧蹟を巡る旅の人気も根強い⁵。

こうした楽しみを街づくりへとつなげようという活動も、各地でスタートしている。たとえば観光客のための街歩きマップの配布などがそうである。車で観光地を巡るのではなく、じっくりと街を歩き、観光名所だけではない街の新たな魅力を見つけてもらおうというものである。また観光客にもましてそこに住む地元の人たちが街のことをよく知り、街に愛着をもつことで、街づくりへとつなげてゆこうという活動がある⁶。歩くことは都市を身体化する営みであり、街を知り、愛し、そしてそこに理想を描く手助けになる。

さらに、普段生活しているこの街自体を、歩いて暮らせる街に変えてゆこうという活動も始まっている。自動車に占拠されがちな街路を人々の手に取り戻すことで安全で快適な暮らしを実現しようというのが活動の趣旨となる。京都市でも現在、「歩くまち京都」を目指し、さまざまな調査や社会実験

が行なわれている⁷。

このように、歩くということは普遍的な魅力をもっており、また新しい時代の魅力的な都市づくりのための重要なテーマにもなっている。

1.1.3 現代都市の行き詰まり

さまざまな街づくり活動の背景には、現代都市の抱える課題が見え隠れする。景観の破壊、中心市街地の衰退、地域コミュニティの弱体化といった問題が叫ばれ、各地で盛んに議論されているのである。いずれも、新しく何かをつくるというより現在あるものの質や価値にかかわる問題である。

たとえば本研究のフィールドとなる京都でも、街並み景観問題が起こっている。歴史ある町家や寺社と現代的なビルやマンションが混在し、京都らしい景観が失われつつあるのである。これに対し行政の対策は高さや容積率といった個別の要素の規制に限定され、建物のもつ全体的な質や、その建物が街並みにどう調和するのかといようなことを十分評価できていない。一方町家を建て替える側も、敷地の中で順法であればどのような建築を建ててもよいという敷地主義に則っている。周囲のコンテクストを逸脱したデザインやボリュームの建築が生まれ、方々から非難の声が上がり、「つくる側」と「守る側」との二項対立の構図が生じている。そして重要なことは、建物が不揃いになるだけではなく、街の魅力や活気まで失われていることである。

わが国は、高度成長の時代から21世紀型の低成長期にさしかかっている。求められるものが量から質へとシフトしていることは明らかである。しかしわれわれは、新しい時代に対応する新しいパラダイムをいまだに提示できないでいる。上述したような都市の諸問題は、日本を画一的に支配した高度成長のスキームが、都市のデザイン方法として通用しなくなってきたことを示している。とりわけ現代都市はさまざまな人間、さまざまな要素が居合わせる複雑な場であり、機能主義や要素主義に基づく従来の計画手法では制御しきれない一面がある。

1.1.4 新しい都市・建築デザイン方法の要請

このような現状において求められているのは、新しいデザイン方法の提示である。新しい時代の都市や建築の在り方を考えなければならない。

再び上述の街並み問題にひきよせて考えると、これは建築単体のみを対象とする方法論では解決しない。われわれは普段、個々の要素にもまして曖昧な全体性、つまり様相を感じ取っているからである。本当に魅力的な街は、一つひとつの建築の集合であることを越えた独特の質を持っている。この質が何であるかを考え、それを生み出してゆくデザイン論が必要である。これまでの慣習的な見方にとらわれず、われわれの実感に即して都市デザインのビジョンを探究することが、次の時代を切り拓くための鍵を握るのではなかろうか。

なお建築デザインの領域に限ると、デザイン論の転換はすでに始まっていると言える。たとえば2000年には、「ギャラリー・間」において10組の若手建築家らによる『空間から状況へ』と銘打った連続の展覧会が行なわれたが、そこでは近年の建築家たちの態度として、「建築を『空間』的な造形に還元しオブジェクト化するのではなく、建築の外部に注目し、周辺の『状況』との関係を含めて再定義すること」「都市のリアルをつかまえ、デザインに接続すること」が指摘されている⁸。また、2011年から2012年にかけて東京都現代美術館で開催された『建築、アートがつくり出す新しい環境—これからの“感じ”』と題する展覧会では、建築家とともに現代美術のアーティストが参加し、建築やアート作品が生み出す「環境」や「感じ」について探究している⁹。かつてのような機能論や空間構成論に代わって、「森のような」「ふわりとした」といったような感覚的な言葉を手掛かりに建築をデザインする若手建築家が、次々と出現している。

しかし建築家・隈研吾はこのような手法について、社会に対する説明性や実行力の不足を指摘している¹⁰。彼らの方法は建築家自身の中で完結しており、混沌とした都市の現状を打開する方法論には到達していないと考えられる。これに対し、「状況」や「感じ」で表わされる事象の理論体系を構築しようとしているのが、建築家・原広司である。原は『機能から様相へ』と題された小論において、近代建築を支配した機能論に代わり、これからの建築が依って立つべき概念は「様相」になると宣言している¹¹。

以上のことから、複雑で曖昧な様相をうまく捉えるような理論を構築することは、これからの時代の都市や建築のデザインにとって重要なテーマとなっていると言える。

¹ 『パサージュ論』（第1巻～第5巻，今村仁司・三島憲一他訳，岩波書店，2003.）など。

² 『新版 断腸亭日乗』（第1巻～第7巻，岩波書店，2001～2002.）、『ふらんす物語』（岩波文庫，2002.）など。

³ 海外旅行ガイドブックの定番となっている『地球の歩き方』シリーズ（ダイヤモンド・ビッグ社）をはじめとして、『大人の街歩き』シリーズ、『いい旅・街歩き』シリーズ（いずれも成美堂出版）など、旅行ガイドブックの多くには歩くというキーワードが用いられている。特徴的なシリーズとしては、海外主要都市について発行されている、情報を絞って本を薄くしながらも都市地図が大きく見やすい『歩く』シリーズ（キョーハンブックス）や、日本国内各都市について散歩ルートを紹介し、ルートの高低差まで掲載している『散歩マップ』シリーズ（成美堂出版）などがある。

⁴ 「世界ふれあい街歩き」（NHK）、「プラタモリ」（NHK）、「モヤモヤさまぁ〜ず2」（テレビ東京）など。

⁵ さまざまなことを発見し、それを紙に記しながら歩くという本研究の実験方法に対しても、被験者から「楽しかった」という感想を得ることができた。

⁶ たとえば神戸市では、商店街や市場を巡り、魅力を「再発見」するツアーが商工会議所主催で行なわれている（あるっ神戸！ ホームページ（<http://arukobe.com>））。1. 3. 5の「ワークショップとしての歩行調査」で紹介する活動もこの系列に属する。

⁷ 歩くまち京都推進室 ホームページ（<http://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/soshiki/9-5-0-0-0.html>）

⁸ ギャラリー・間編：空間から状況へ，TOTO出版，2001，p.9.

⁹ 妹島和世＋西沢立衛/SANAA・長谷川祐子企画・監修，三宅拓也他編：建築、アートがつくり出す新しい環境，ACCESS，2011.

¹⁰ [建築2010/2011] 総括と展望，GA JAPAN，vol.108，A.D.A. EDITA Tokyo，2011，pp.67-68.

¹¹ 原広司：機能から様相へ，空間〈機能から様相へ〉，岩波書店，1987，pp.209-242.。なお原の様相論については2. 1. 6で詳しく説明する。

1.2 研究の目的と方法

1.2.1 都市の様相のモデル化

本研究の第一の目的は、1.1.1で述べたわれわれの心の複雑なはたらきを理解するために、いくつかのモデルを提示することである。モデルとは、言葉やダイアグラムによって、複雑な現象を簡略化・抽象化し、わかりやすく説明できるような理論体系を指す。人間の心の内的プロセスについてはその動きを直接覗きこむことはできないが、本論ではプロセスを仮説的にモデル化し、その妥当性を実証的に検討するアプローチを展開する。

本研究では、「様相」という言葉を手掛かりとしてこのモデルを構築する。様相という語は日常的に、「時代は多極化の様相を呈している」のように用いられ、「ものごとの在り方、在り様」といった意味を指し、曖昧さや全体性を含意している。本研究ではこの概念を都市というフィールドに応用し、われわれが都市において感じ取る曖昧な全体性を様相と捉え、研究を進める。

このモデルは人間の感覚や思考の本質にかかわるものであり、それゆえに幅広い分野で研究が行なわれてきた。たとえば様相という概念そのものについては哲学や論理学において研究され、理論的精緻化が進められてきた。またわれわれの心の問題については哲学に加え心理学や認知科学、言語学や社会学といったさまざまな分野で研究が繰り返されている。本研究では、こうしたさまざまな領域の知見を横断的に取り上げ、それをもとにモデルをまとめてゆく。そして次小節で述べるような分析によってそれを発展させるのである。

1.2.2 実際の都市における様相のあらわれ方の分析

都市は今どのような現象としてあらわれ、そこでわれわれは一体どのような様相を把握しているのだろうか。このことを、実際の都市空間において具体的に確認する必要がある。実際の都市と様相のあらわれとの関係を見出すことが、本研究の第二の目的となる。

このためには、われわれが都市において感じ取っているその内容をいかに正確に知ることができるかが鍵になる。そこで本研究において開発した手法が「経路歩行実験」(walkthrough experiment)である(写真1-1)。これは被験者たちに実際に、京都市内に指定した3つのルート歩いてもらい、そこで把握した様相について、把握した場所に対応づけて自由に紙に書いてもらうというものである。また歩行終了後にはルート全体を振り返り、様相の変化を要約する記録もしてもらう。

この方法はごくシンプルなものである。しかし記録の内容を全く限定しないことと、書かれた言葉が空間的座標をもつことでデータは複雑性を増す。歩行終了後のマクロな視点で書かれたこともあわせ、きわめて豊穡なデータが得られている。

そしてこれをもとに、様相について分析(analysis)することができる。その方法には大きく二つあり、まずは被験者間に共通した様相の記述(description)である。記述とは、曖昧模糊とした様相というものを可視的に描き出すことである。多数の被験者の捉えた様相を重ね合わせ(superimpose)、定量化することによってこれは可能となる。この記述を媒介として、様相を分析することができる。そしてもう一つの方法は、定量化する以前の生身の言葉を分析することである。言葉は様相のもつ機微を豊かに伝える道具であり、その裏には様相把握のメカニズムが見え隠れしているのである。

本論における実験や分析手法の構想は、上記の第一の目的に従って構築するモデルがもとになっている。同時に分析によって得られた考察が、既存モデルの修正や新しいモデルの構築を要請すること



写真1-1 経路歩行実験の様子

もあろう。つまり本論は、常にモデル化と分析とがセットになって進行する。分析を進めながら、モデルは成長する。

1.2.3 都市のデザインに資する知見の獲得

上の二つが本研究の直接的な目的になる。しかし様相の仕組みがわからずとも、われわれは様相を把握することはできる。それでは何のために様相をモデル化したり分析したりするかというと、それはデザインというより高次の目的を見据えているからである。本論では具体的なデザイン方法の提案やその実践までは行なわないが、デザインに役立つ知見を提供してこそ、1.1で述べたような社会背景に対する直接的に有用な研究となるだろう。

実験データの分析により解明できるのは、限られたルートの、現代という一定の時間における様相である。それに加え時間的・空間的コンテクスト—われわれが都市をデザインしてきた歴史—についての知見を加え、これまでの都市の広域的な変遷が現代の被験者たちの捉えた様相にどのように影響しているかを探る。このような総合的な読み解きを通じて、込み入った現代の都市問題を解決するための様相論的デザイン方法 (modal design method) の端緒を開きたい。

さらに本研究では、われわれの培ってきた記憶 (memory) について大きく取り扱う。記憶には知識や価値観が含まれ、われわれが様相を把握する際の背景となる。これはいわば、われわれ自身の「都市を見る目」でもある。つまり美術品には鑑定士が、ワインにはソムリエがいるように、都市観察の熟達者というものも考えられるのである。都市に対する鋭い観察眼をわれわれがもつことが、都市をよりよくデザインしてゆくための技能へとつながることは言うまでもない。この知識や価値観は、街を歩き、さまざまな様相を把握し、それについて考え、議論することで鍛えられる。本研究の実験や分析は、そのための手段にもなると考えている。

1.3 既往研究と本研究の位置づけ

先述の通り、本研究で捉えようとしている様相概念は、哲学をはじめ認知科学、社会学、言語学や歴史学などあらゆる領域と関係を取り結ぶ。これらとの関連の考察は第2章以降に譲ることとして、ここでは本研究の直接の対象である都市領域において、様相やそれに近い概念がどのように研究されてきたかを振り返る。

1.3.1 都市のイメージ研究

まず都市の認知研究のパイオニアとなっているのが、リンチ (Kevin Lynch) である。1960年に出版された『都市のイメージ』(The Image of the City)¹は言うなれば都市研究の金字塔であり、都市論をはじめ建築論や地理学、心理学その他の分野にも多大な影響を与えた。

リンチは都市をイメージアビリティ (imageability ; イメージのしやすさ) によって評価することを試みた。そのためにボストン、ジャージーシティ、ロサンゼルス²の三都市において聞き取りを中心とした調査を行ない、都市のイメージ形成に支配的な要素を抽出した。この研究結果については2.2.2で詳述するが、ここでは彼の研究方法について触れておく。リンチはこの研究のために、以下のような多彩な調査方法を用いている²。

- A. 事務所でのインタビュー
- B. 都市の風景の写真の照合調査
- C. 現地での目的地への道案内調査
- D. 現地で道を尋ねる調査
- E. 理論を熟知した一人の調査者による現地踏査

リンチはこれらの多彩な方法を互いに照合し、膨大な量の自由発話と自由描画の丁寧な読み解きによって自らの仮説を実証した。

またリンチの目は常にデザインの実践へと向けられている。この調査でもリンチは、都市のパブリックイメージを評価するための汎用的手法の構築を目指している。そして実際にリンチは、自らの理論を駆使して数多くの実施プロジェクトを手がけている³。このような態度は、都市研究において是非必要とされるものであろう。

日本の都市においては志水英樹の研究が知られている⁴。志水は横浜、渋谷などの駅のホームで、街の中にあるものとして思い浮かぶ要素を答えさせるエレメント想起法によりインタビュー調査を行なった。それをもとに、想起頻度や想起順序の特徴、空間構造や業種が想起に与える影響などについて、さまざまな統計解析手法を用いて探り、可視化している (図1-1)。

リンチの研究はイメージアビリティという仮説に則りながら、われわれがイメージしている都市像の研究に焦点を当てている。志水の場合も同じことが言える。それに対し本研究では、実際の都市空間の中に立ったときの、そうしたイメージをも含みこんだ全体的な心象を様相として扱い、さらにそれが街路を歩くに従ってどのように移り変わるかについても探究する。また様相やイメージの生じるプロセスの理論的モデルを構築することも、本研究の特徴である。

1.3.2 歩行実験を用いた研究

次に、本研究と同じように実際の空間を被験者に歩かせる歩行実験の手法を用いた既往研究について概観する。

歩行実験の初期的な事例も、やはりリンチらの研究に見られる⁵。リンチらは、27名の被験者にボストンの1街区の周囲1周と内部の路地を、実験実施者に感じたことを話しながら歩いてもらった。ま

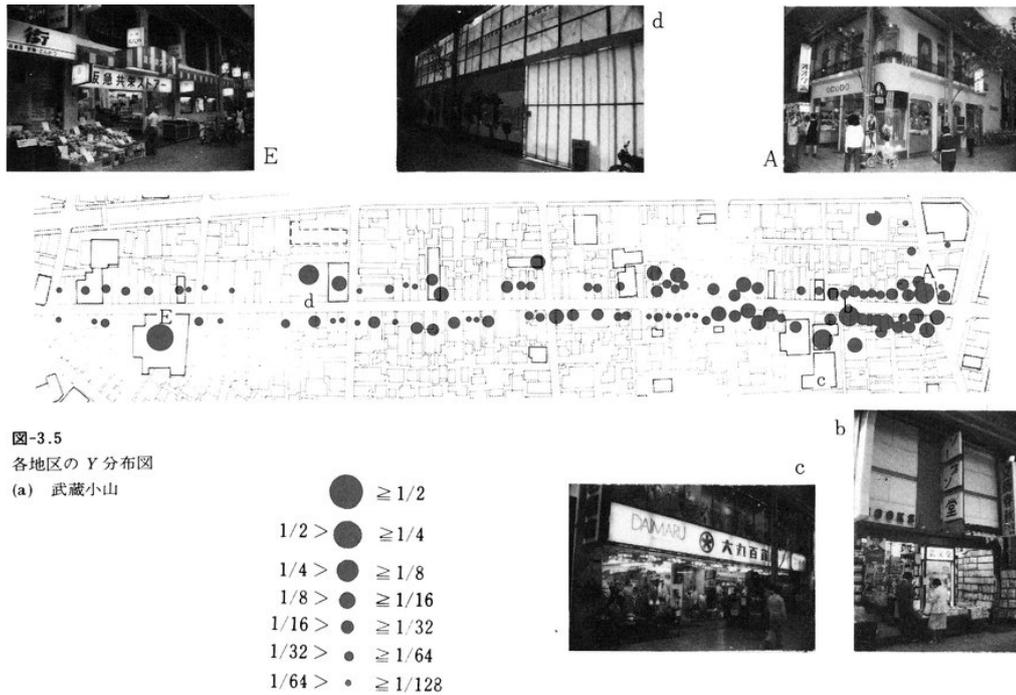


図1-1 来街者にとってイメージの強いエレメント (志水英樹：街のイメージ構造，技報堂出版，1979，p.24.)

た歩行後には全体のシーケンスについて思い出して話してもらおう。これらの録音データをもとに、印象に残りやすい要素を定性的に割り出している。建物と空地、路面やショーウィンドウなどが視覚的に重要であることを示し、また秩序の必要性を訴えている。

次に注目される重要な研究が、アプルヤード (Donald Appleyard) とリンチらが共同して行なった高速道路の研究である⁶。ボストンの高速道路を車で走った被験者に、インタビューやスケッチにより印象的なエレメントを挙げてもらい、それを独自の表記法でシーケンスに記述する (図1-2)。またこの研究では単に記述、分析するだけに留まらず、わかりやすく魅力的な視覚環境をつくる高速道路のデザインを提案し、それが実現した場合の景観シミュレーションも行なっている。

また環境心理学 (environmental psychology) の分野でも、歩行実験を用いた研究がいくつか行なわれている。まず船越徹らの神社や寺院の参道空間についての探究がある⁷。歩行や写真提示による実験と、空間構成の分析を組み合わせ、膨大なデータの統計的処理によって主要な「心理因子」の析出 (図1-3)、シーケンスの記述や参道空間の類型化などを行なった。

また大野隆造らは、東京・表参道の街路空間において歩行実験を行なって雰囲気異なる部分に分節してもらった研究⁸ (図1-4) や、キャンパス内の経路における圧迫感の増減について調べた研究⁹を行なっている。前者においては模型による視環境シミュレーションとの比較をし、後者においては建物や地面といった各要素の可視量との関連を探るなど、雰囲気と物理的環境との関係について探究

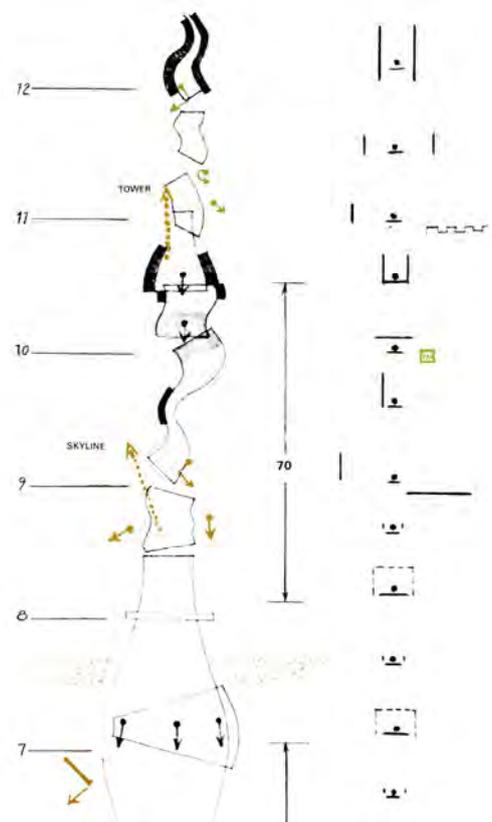


図1-2 高速道路の空間体験
(Appleyard, D., Lynch, K. and Meyer, J.R. : The View from the Road, The MIT Press, 1971, p.30.)

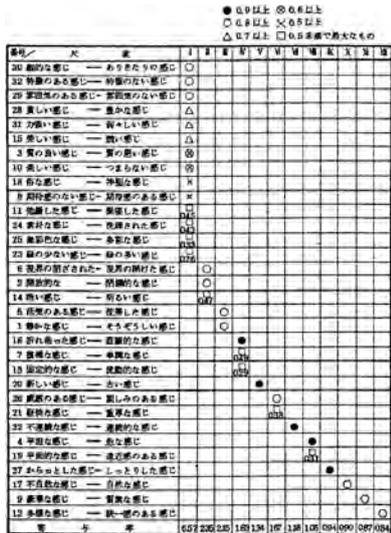


図1-3 形容詞対の因子分析

(船越徹・矢島雲居・積田洋・真利曜子：参道空間の研究(その3) 神社空間における空間意識の分析(心理因子分析), 日本建築学会大会学術講演梗概集(建築計画・農村計画), vol.53, 1978, p.620.)

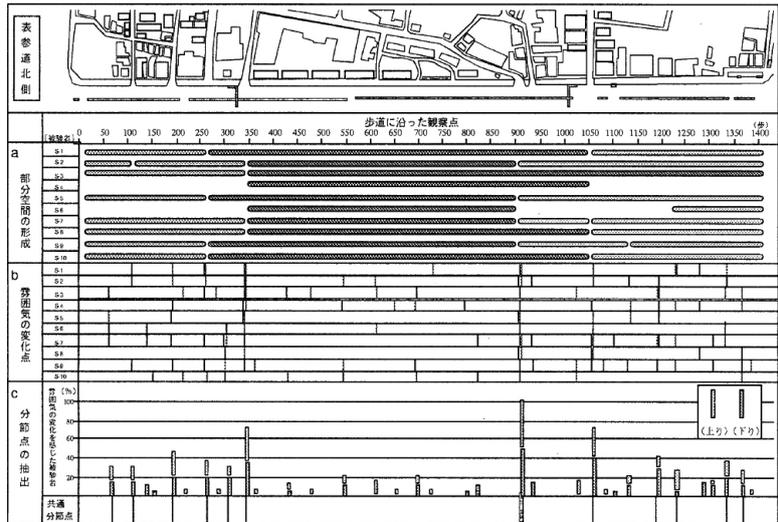


図1-4 表参道での歩行実験による空間の文節

(箭内亮一・長谷川論・小林美紀・大野隆造：環境視情報の計測に基づく街路空間の分節化に関する研究：その1 実空間実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1, 1998, p.942.)

した。

街路空間での歩行実験としては他に、積田洋らの研究がある¹⁰。選定した11の街路空間を歩いてもらう中で、約200mおきに設定された対象地点において、SD法による評価および印象的なエレメントの指摘をしてもらう。そこから主成分分析による指標の分類や、クラスター分析による地点の類型化などを行なっている。

リンチやアプルヤードの研究は大変魅力的ではあるが、定性的分析に留まっている。船越、大野、積田らの研究はここに定量的分析を持ち込むことでより実証的な方法としているが、「物理量—心理量」という二元論に基づいて分析するという科学観をとっている。彼らの研究は安定した構図のもと迅速なデータの取得、分析が可能であり、空間の類型化のような目的には適っているが、そのような科学観に基づく発想は、様相のもつ曖昧で捉え難い部分をそぎ落としてしまうことが懸念される。また研究者側であらかじめ指標を限定するSD法は、その形容詞対の集合により心理の全体性を測定しようとしているが、全体的で曖昧な様相とは、部分の集合によっては措置できないと考えられる。形容詞だけではなく副詞や助詞の使い方、また世界の中で何に注目するか、といったようなところにも様相はあらわれていると考えるべきである。

本研究ではこれらの研究を参照しながらも、定性的分析と定量的分析を総合的に活用するとともに、二元論的世界観を乗り越える分析やモデル化の方法を構想したい。

1.3.3 街路空間の記述

本研究は都市の中でも特に街路空間を舞台とし

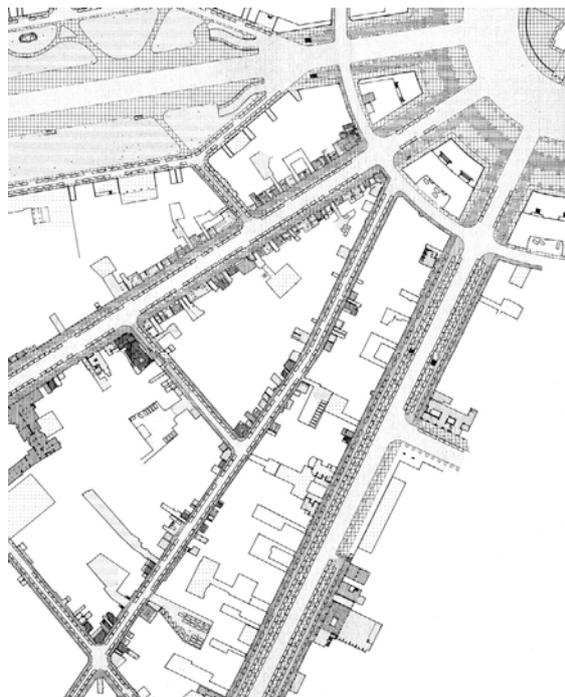


図1-5 ハリの公共的にアクセスできる空間の記述(部分) (Anderson, S. (ed.): on STREETS, The MIT Press, 1978, p.293.)

たものである。前項でみた諸研究でも街路の様相の記述を行なっているが、分析のためにはより多角的な視点からの街路空間の記述が欠かせない。

アンダーソン (Stanford Anderson) は、都市のプランを公共性の視点から記述している¹¹。図1-5は誰にでもアクセスできる空間を示しているが、この空間は街路に限らず、敷地や建築の中へと侵入している。その他、居住者や勤務者など特定の人のみがアクセスできる空間についても塗り分け、人間行動との関連を論じることで、これらの空間の配置がさまざまな活動のポテンシャルになることを述べている。

歩行中に目に入る情景の記述に関しては、シール (Philip Thiel) による方法がある¹²。空間の視覚環境を、歩行者を中心とした上下、前後、左右の六面に振り分けた図で示す (図1-6)。それに歩行者自身の歩速やターンなどの動きを加え、縦一直線に連ねて描くことで、シーケンスを表現している。

これらの記述法は、単に空間の物理的側面の記述に留まらず、アクセシビリティや空間体験といった人間とのかかわりの中での特定の視点を定めて空間を描き出している。本研究は様相という複雑な事象を扱うだけに、多様な方法での記述が求められると言える。

1.3.4 都市の様相の記述

原広司は、都市と建築における様相について探究している。その理論的枠組みは第2章で詳述するが、原研究室では様相論を都市分析に応用しようという研究も進められている。それが「都市領域の様相論的研究」という連続研究である¹³。

ここでは航空写真、建物密度、高層ビルの可視性、街路パターン、街路景観、タクシーの運行といった多様なデータを題材とし、都市の領域性、多層性や多義性などについて、場、経路、距離、位相空間といった原の様相論にとって重要なトピックを交えながら論じている。そしてもう一点大きな特徴が、ただ現実の状況をそのまま可視化するに留まらず、数式やプログラム言語を駆使した数理的モデルが提案されていることである (図1-7はその一例)。数理化には何らかの単純化が伴っており、そこにはマクロな傾向を把握する様相モデルへの関心が認められる。

なおこの一連の研究では「意識としての都市」というテーゼがうたわれているが、都市の物理的な現象の記述を通じて都市の様相を浮かび上がらせようとする、物理主義的なスタンスをとっている。それゆえ、人間の意識的な側面を直接記述する手法はほとんどとっておらず、そこが本研究との大きな違いとなっている。

空間構成要素の位置		上	下	上と下				
		側方	左	前	右	左と右	左と前	前と右
左	前	右	左と右	左と前	前と右	左と前と右		

図1-6 シールの空間構成の記述方法
 (小柳武和・篠原修・田村幸久・中村良夫・樋口忠彦：土木工学体系13 景観論，彰国社，1977，p.135.)

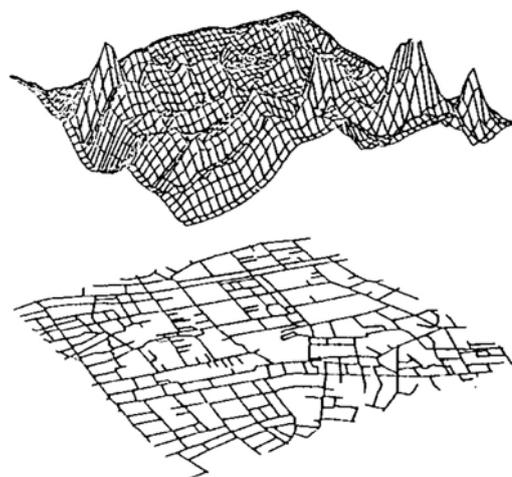


図1-7 神楽坂の経路の曲折性の記述
 (金尾朗・原広司・藤井明・曲淵英邦・工藤和美：都市領域の様相論的研究：その5 都市における経路の曲折性，日本建築学会大会学術講演梗概集 F，1987，pp.455-456.)

1.3.5 ワークショップとしての歩行調査

京都CDLは、「京都断面調査」という一連の歩行調査を行なった¹⁴。京都の大学生を中心に有志で集まり、各回のテーマによって決められたルートを一日かけて歩くことで、新しい京都像を浮かび上がらせようという活動である。そこではシークエンスを記述することに加え、皆で街歩きを楽しむことや、データを魅力的にビジュアル化することにも重点が置かれている。

都市の「感情地図」(emotion map)を作成しようと試みているのがアメリカのアーティスト、ノルド(Christian Nold)である¹⁵。サンフランシスコやパリ、グリニッジといった世界各国の都市で街歩きのワークショップを開催し、感じたことを文字やスケッチで表現してもらったり、感情の起伏を計測装置で測ったりする。そしてそれを美しい地図に反映し、市民や観光客に配布するのである。図1-8がその一例であるが、ノルドは都市ごとにさまざまな調査手法を導入し、表現も多彩である。

これらの活動では、皆で歩くという行為を通じて都市を体感し、そしてまた様相を皆で共有可能なかたちで可視化している。可視化による共有はデザインへの大切な第一歩であり、また何かを意識して歩くことは自らの感性を鍛えることにもつながる。

この理念は本研究の隠れたテーマでもある。京都CDLやノルドらの活動は、分析とモデル化の先に本研究が目指すべき道の一つを示していると言える。

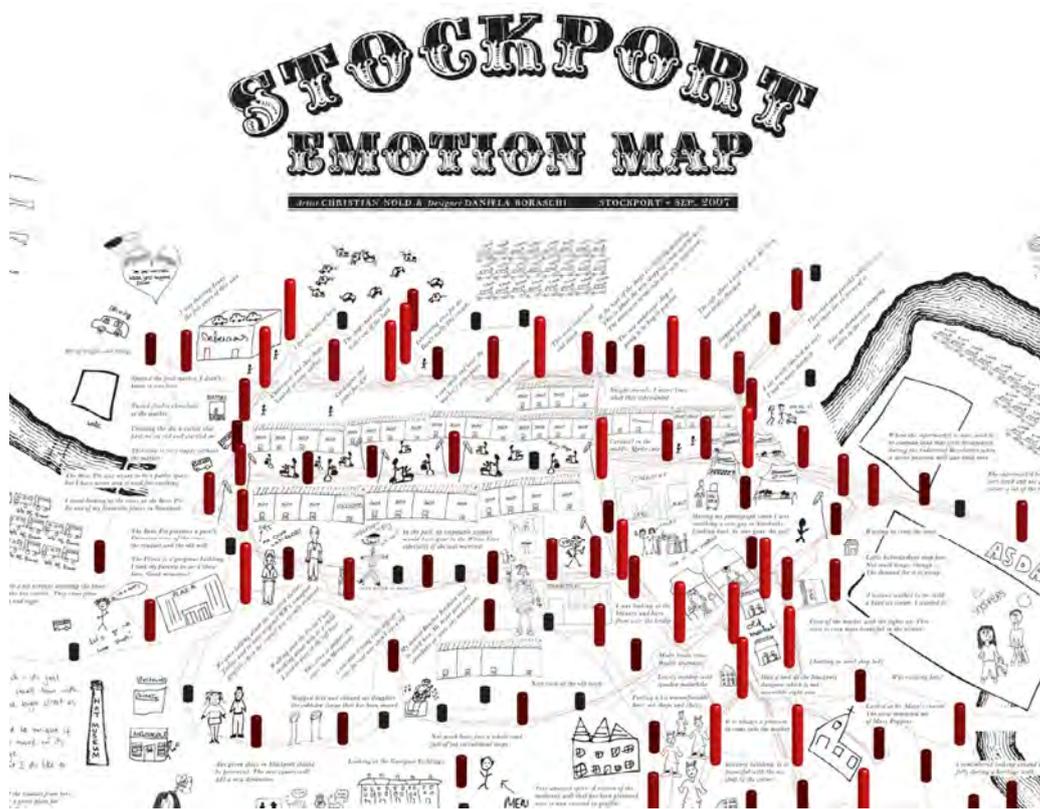


図1-8 スtockポート(イギリス)における、ワークショップ参加者のスケッチや言葉を用いた感情地図(部分)
(Stockport Emotion Map ホームページ (<http://stockport.emotionmap.net/>))

¹ Lynch, K. : The Image of the City, The MIT Press, 1960. 邦訳は リンチ, K. : 都市のイメージ, 丹下健三・富田玲子訳, 岩波書店, 1968.

² 注釈1の後者の文献, pp.181-199。ここでは各手法について調査内容をより詳しく挙げておく。

A. 事務所でのインタビュー(対象:選定した市民 ポストン:30人 他2都市:各15人)

i) その都市についてまず思い浮かべるものの列挙
ii) 都市の中心部の地図の描写

- iii) 毎日の通勤路の説明
 - iv) 都市の中心部で独特なエレメントの列挙
 - B. 都市の風景の写真の照合調査 (対象: Aの参加者の一部 ポストンのみ: 16人)
 - i) 写真の分類
 - ii) 写真の認知と説明
 - iii) 地図上への配置
 - C. 現地での目的地への道案内調査 (対象: Aの参加者の一部 ポストンのみ: 16人)
 - i) その道を選んだ理由や目印の説明
 - D. 現地で道を尋ねる調査 (対象: ランダムに声をかけた通行人 ポストンのみ・20人程度)
 - i) 目的地への道順、目的地の認知方法、かかる時間の説明
 - E. 理論を熟知した一人の調査者による現地踏査 (各都市)
 - i) 五つのエレメントの地図上への描写 (メジャーなものマイナーなものを区別)
- なおこのうちA-i)とA-iv)は「エレメント想起法」、A-ii)は「認知地図法」、A-iii)およびCとDは「wayfinding法」としてのちに一般化された手法である。
- 3 リンチ自身、他の都市プランナーとともにCarr, Lynch and Sandell, Inc.という事務所を設立し、建築・都市設計を手掛けている (<http://www.carrlynchsandell.com>)。
 - 4 志水英樹：街のイメージ構造，技報堂出版，1979。
 - 5 Lynch, K. and Rivkin, M. : A WALK AROUND THE BLOCK, *LANDSCAPE*, vol.8, no.3, 1959, pp.24-34.
 - 6 Appleyard, D., Lynch, K. and Meyer, J.R. : The View from the Road, The MIT Press, 1971.
 - 7 船越徹他：参道空間の研究 (その1～その15), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1977～1989.
 - 8 箭内亮一・長谷川諭・小林美紀・大野隆造：環境視情報の計測に基づく街路空間の分節化に関する研究 その1 実空間実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1, Vol.1998, 1998, pp.941-942. および 小林美紀・長谷川諭・大野隆造：同研究 その2 環境視情報の計測, pp.943-944. および長谷川諭・添田昌志・小林美紀・大野隆造：同研究 その3 模型シミュレーションによる検証, pp.945-946.
 - 9 大野隆造：環境視の概念と環境視情報の記述法 環境視情報の記述法とその応用に関する研究 (その1), 日本建築学会計画系論文集, No.451, 1993, pp.85-92. および 大野隆造・辻内理枝子・稲上誠：屋外空間での移動に伴い変化する感覚の連続的評定法 環境視情報の記述法とその応用に関する研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集, No.570, 2003, pp.65-69.
 - 10 積田洋・関戸洋子・菅原綱治：指摘量分析によるエレメントの特性とエレメント構成の類型化 街路空間における「気配」の研究 (その1), 日本建築学会計画系論文集, No.583, 2004, pp.47-52. および 積田洋・関戸洋子・濱本紳平：心理量分布図による街路空間の雰囲気と指摘エレメントの相関分析 街路空間における「気配」の研究 (その2), 日本建築学会計画系論文集, No.607, 2006, pp.41-48.
 - 11 Anderson, S. : Studies Toward an Ecological Model of the Urban Environment, on *STREETS*, Anderson, S. (ed.), The MIT Press, 1978, pp.267-306.
 - 12 Thiel, P. : People, Paths, and Purposes: Notations for a Participatory Envirotecture, University of Washington Press, 1997. および 宮宇地一彦：人間移動に伴う視覚的シーケンスの研究 (その1)：ショッピングモールを事例として, 日本建築学会計画系論文報告集, No.440, 1992, pp.99-109. および 小柳武和・篠原修・田村幸久・中村良夫・樋口忠彦：土木工学体系13 景観論, 彰国社, 1977.
 - 13 原広司他：都市領域の様相論的研究 (その1～その18), 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1985～1995.
 - 14 京都げのむ編集委員会：京都げのむ no.1,3,4,5, 京都CDL, 2001～2005.
 - 15 Emotion Mapホームページ (<http://www.emotionmap.net>)

1.4 研究の流れ

本論全体の流れを図1-9にまとめる。

まず第2章では、様相に関する既往の議論を振り返ったのちに、本研究における様相概念を構築する。これが実験と分析に先立つさしあたりのモデルとなる。次に第3章では、行なった経路歩行実験について詳しく述べる。

この後分析を行なうが、その流れはいったん二つに分かれる。まず第4章と第5章は主に定量的分析にあたる。第4章では、実験で得られたデータから様相を可視的に記述する。第5章ではこの記述データをもとに統計的手法による分析を進める。ここでは主に、実際の都市空間の在り方に即したモデルを打ち立てることとなる。第6章では一転して、被験者たちの残した一つひとつの言葉を定性的に分析する。ここでは言葉の語用論的な読み解きを行ない、様相把握の仕組みに関するモデルを発展させる。そして第7章では第6章までの知見を合流させ、さらに時間的・空間的コンテキストを読み込んで、各ルートを詳細に分析する。ここでは都市のマクロな地域の歩んできた長期的なプロセスと、現代の特定のルートにおける様相把握との関係が検証される。

第8章では分析過程で抽出した多数のモデルを統合し、都市の様相に関する総合的なモデルの構築を試みる。そして最後に、第9章で結論を述べる。

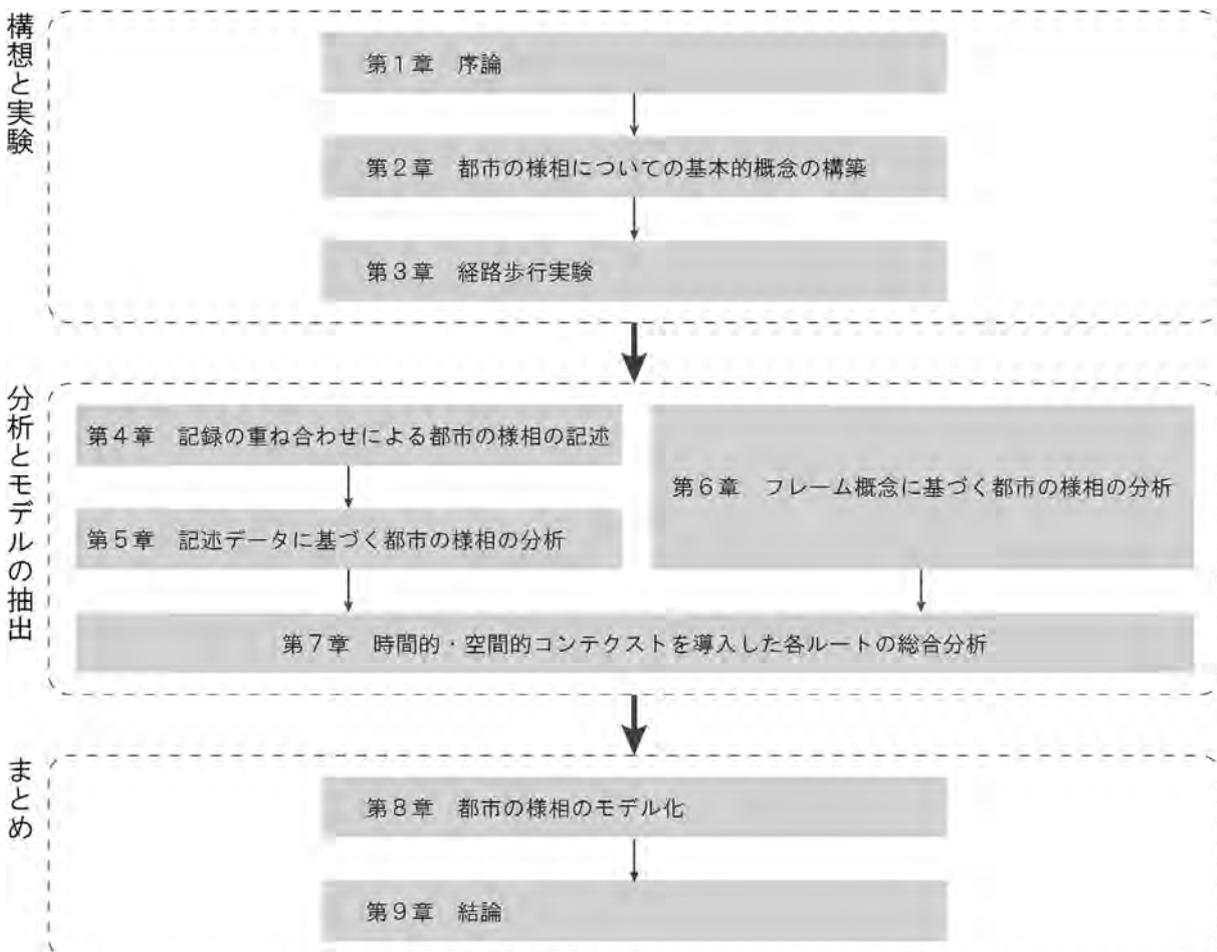


図1-9 本研究のフローチャート

第2章

都市の様相についての基本的概念の構築

本章ではまず様相やそれに関連する既往の理論を概観し、しかるのちに、本研究における都市の様相の基本的な概念モデルを提示する。

本研究では、第1章でも触れたように「われわれが感じ、考えることがらの全体的な在り方」といった意味合いで様相という概念を捉える。この概念を都市空間というフィールドへ実践的に適用し、さまざまな知見を得るために、本章では以下のようなテーマについて探究したい。

- ・これまでの様相に関する議論がいかになされてきたのか
- ・われわれが日常、いかにして様相を把握しているのか
- ・都市の様相の特性とはどのようなものか

まず最初の論点について、様相という概念はこれまで主に哲学(philosophy)を中心に、論理学(logic)、言語学(linguistics)、心理学(psychology)、美学(aesthetics)などの諸領域において論じられてきた。さらに二番目の論点、つまり何かを感じ、考えるというその現象も、まさにこれまで広い意味での哲学が説明しようとしてきたことがらであったと言える。そこで2.1では、主に哲学の流れに沿って様相とその把握についてのこれまでの議論を振り返る。

そして三番目の論点である都市の様相については2.2で、都市や街路、空間や場所などに関して重要な示唆を与える諸研究を取り上げる。

2.3ではこれらの既往理論をもとに、それに対する筆者自身の立場を示し、本研究における基本的な様相概念のモデルを構築することを試みる。このモデルは、第3章以降の経路歩行実験による様相の解読のさしあたりの基盤となるが、その解読を踏まえて深化されることとなろう。

2.1 哲学と様相論

古典的な哲学の流れをきわめて大まかに整理すると、古代ギリシャに始まる存在論(ontology、あるいは形而上学(metaphysics))と17世紀のデカルトを旗頭とする認識論(epistemology)の流れに大別できる。これらを起点として19世紀以降、ヨーロッパにおいては実存主義(existentialism)の哲学、アメリカにおいてはプラグマティズム(pragmatism)の哲学などが展開されている。本節では、これらの諸派における、様相に関する議論を概観する。

2.1.1 存在論

存在論は古代ギリシャに起こり、以降キリスト教の神学思想と合流して近代に至るまでの哲学の主流を占めた。そこでは「存在とは何か」「真なることとは何か」「世界とは何か」「存在とは何か」が問われることとなる。ここではプラトン(Plato)のイデア論とアリストテレス(Aristotle)の様相論、そしてそれに続く様相論理学の流れを取り上げる。

(1)プラトンのイデア論

プラトンの考える「イデア」(idea)とは、事物の本質として存在する原型のことである¹⁾。われわれが描く実際の三角形は、たとえば一枚の紙に鉛筆で描かれたものとなるのであるが、これは、われわれが純粋な心の中に、二次元平面上に幅のない直線で描かれた三角形のイデアをもっているから描けるものであるとプラトンは考える。

イデアは個々の事物のように生成消滅するものではなく、永遠に変化しないものである。そしてプラトンは、具体の世界を離れ、イデアだけからなる世界の存在を説く。個物は、イデアから借りてこられた形相(eidos; エイドス、形)と、一定の質料(hyle; ヒュレー、材料)との合成物にすぎない。たとえば机は、抽象的な机のイデアのもと、天板に四本足のついた形相と、木などの質料によって実

際に製作されることとなる。

プラトンの、普遍的な概念がそれ自体として実在するという考え方は実在論 (realism) と呼ばれ、その後の哲学の一つの潮流となる。

(2) アリストテレスの可能態理論

アリストテレスは、プラトンに師事しながらもそのイデア論を批判している。プラトンは、形相と質料の結びつきは外的・偶然的なものと考えていた。しかしアリストテレスは、たとえば木材にも机の天板に向いているものと足に向くものがあるように、質料は何らかの形相を可能性として含む状態にあると言う。この状態が「デュナミス」(dynamis; 可能態) であり、そして可能性が現実化された状態を「エネルゲイア」(energeia; 現実態) と呼ぶ²。エネルゲイアは現実存在している事物あるいは運動を、デュナミスはものごとの運動や転化の原理あるいはその事柄を遂行する能力を指す³。そしてさまざまな事象はデュナミスを起因、エネルゲイアを目的とした進行のうちに理解される。存在をただそのものとして捉えるのではなく、時間上の運動として考えるという態度である。

この考え方を命題について形式化しようとする試みが『命題論』および『分析論前書』においてなされており⁴、そこで様相 (πόρσησις) なる言葉が登場する。つまり、命題の記述方式として単純様相 (~である)、必然様相 (~が必然である)、許容様相 (~があってもよい) の三つを考えるのである⁵。ここでの様相は、命題の述語の在り方に相当する。これにより、エネルゲイアは単純様相および必然様相に、デュナミスは許容様相へと投射される。

なおアリストテレスは、抽象概念の実在性についてもプラトンの実在論とは異なる立場を示している。彼は『カテゴリー論』において、概念を実体、量、質、関係、場所、時、体位、所持、能動、受動という十の単位に分類した⁶。さらに実体は、まさに「それ」と指さされる個物としての第一実体と、抽象物としての第二実体に分けられる。アリストテレスはこのうち第一実体こそ真の実体であり、抽象的な第二実体はそれに劣ると考えた。のちの唯名論 (nominalism) につながる思想である。

(3) 様相論理学

アリストテレス以降、様相を可能態や論理学の観点から理解する試みは、スコラ学 (Scolasticus)、オッカム (William of Ockam)、クザーヌス (Nicolaus Cusanus) らによって継承される。そして19世紀以降の記号論理学の成立によって、様相は論理式で表現されることとなる。この記号論理学について、オールウッド (Jens Allwood) らの記述⁷をもとに簡単にまとめておく。

記号論理学は命題論理学 (propositional logic)、述語論理学 (predicate logic)、様相論理学 (modal logic) の三体系に大別される。

① 命題論理学

命題論理学は、単文からなる命題を基本単位に、その命題間の関係を論じるものである。二つの命題 p, q について、

- $\sim p$ …否定。 p ではない
- $p \& q$ …連言。 p かつ q
- $p \vee q$ …選言。 p または q
- $p \rightarrow q$ …含意。 p ならば q
- $p \equiv q$ …同値。もし p ならば、かつそのときに限り q

といった結合子 (propositional connectives) ⁸を定義し、「 $(p \vee q) \& \sim (p \& q)$ 」といった複雑な文の真偽を、もとになる命題 p, q の真偽を手掛かりとして推論する。

②述語論理学

次に述語論理学では、命題の中身にまで言及する。すなわち命題論理学において単に p と表現されていた命題を、 $P(t_1, t_2)$ のように表わす。ここで P は述語定項 (predicate) と呼ばれ、その名の通り命題中の述語を指す。 t_1, t_2 は項 (argument) であり、主語や目的語に相当する。 $P(t_1, t_2)$ は2つの項をもつ2項述語であり、たとえば「 t_1 は t_2 より大きい」といった命題がこれに当てはまる。より抽象化し、特に1項述語について述語と項を変項としたものを $\Phi(x)$ と表わす。

述語論理学のもう一つの特徴は、量化子 (quantifier) の導入にある。これは、個体変項 x に対し

- ・全称量化子 $\forall x$ …すべての x
- ・存在量化子 $\exists x$ …ある x

を付加することで、

- ・ $\forall x F(x)$ …すべての x について F である
- ・ $\exists x F(x)$ … F である x が少なくとも一つ存在する

といった量の表現を可能にする。述語による命題表現に対し、この量化子および結合子を加えることで、命題論理学よりも複雑な文の真偽を問えるようになるのである。

③様相論理学

様相論理学ではさらに、必然を表わす「 \square 」、可能を表わす「 \diamond 」という二つの様相演算子 (modal operator) が導入される⁹。

- ・ $\square p$ … p であることが必然である
- ・ $\diamond p$ … p であることが可能である

これにより必然性 (necessity) と可能性 (possibility) という二つの様相が表現され、取り扱える文の内容はより豊富化されるに至った¹⁰。「明日雨が降るかもしれない」「すべての人間は必ず死ぬ」といった、量化や様相を含む命題を表現し、形式的に扱うことができる。「明日雨が降るかもしれない」における「雨」はアリストテレスの言う可能態である。アリストテレスによりほぼ完成していた様相のアイデアが定式化され、数学や言語学に広く応用されるようになったのである。

2.1.2 認識論

存在論が「真の存在」についての探究であったのに対し、近代以降の哲学の一大テーマは「真の認識」である。人間が何を知らうのか、確実な知識とは何か、いかにすればそれを拡張できるのか。これらの問いの背景には産業や科学の急速な発展があり、哲学もまた、科学に対する理論的な裏づけの道具となったのである。

認識論の初期の流れは合理主義 (rationalism) と経験主義 (empiricism) に大別でき、次に両者の融合ないし批判的乗り越えを目指したのがカント (Immanuel Kant) である。以下、それぞれについて述べる。

(1) ルネ・デカルトと合理主義

デカルト (René Descartes) は、経験的な認識に対して数学の明晰性を加え、普遍的で確実な認識を得ようと試みた¹¹。その方法論は以下のように要約できる¹²。

- ・私が明証的に真と認めたもののみを真として受け入れること
- ・私が吟味する問題のおのおのを、できるだけ多くの、かつ適切な小部分に分かつこと
- ・私が認めた真であることを起点に、私の思想を順序に従って導くこと
- ・何ももの見落とすことがなかったと確信しうるほどに、完全な枚挙と通覧を行なうこと

デカルトはこの信念をもとに、存在に対する徹底的な懐疑の姿勢をとる。外界を疑い、理性を疑い、身体をも疑う。しかるのちに、そのように疑っている「私」の存在の確実性に気づき、「われ思う、ゆえにわれ在り」という有名なテーゼに至る。そして精神と身体は明確に二分され、「私」は身体を必要としない絶対的精神として存在することとなる。そのような私にとって、世界における物体は理性（主観）の認識対象である客観として認められることとなる。

デカルトの「私」を起点とした思考と明晰な論理展開は、その後の科学思想を大いに基礎づけた。たとえば主客二元論や要素還元主義といった発想は、現代科学においても大きな力をもっている。定量的な記述や単純なモデルの構築は解析のための強力な武器である¹³。それと同時に、デカルトの思想はそれ以降の哲学に対し「いかにしてデカルトのモデルを打破するか」という共通の動機さえ与えることとなった。これが心身問題（mind-body problem）と呼ばれるものである。

(2) ジョン・ロックと経験主義

デカルトは、生得的な観念を基盤として人間の理性のはたらきがあると言う。対するロック（John Locke）¹⁴は生得観念を否定する。人間は生まれたままの状態ではタブラ・ラサ（tabula rasa；白紙）であり、すべての知識は経験に由来すると主張するのである。これがいわゆる経験主義である。

ロックは、経験主義の立場から独自の様相論を展開している。まず経験から得られる観念は、単純観念（simple idea）と複雑観念（complex idea）に区別される。単純観念は感覚から得られる受動的な観念であるが、それに対し心が力能を発動させることで複雑観念が得られるのである。そしてロックは、複雑観念が様相（mode）、実体（substance）、関係（relation）に還元されるとしている。その様相とは、「どんなに複合されていても、そのなかに自分自身で存立するという想定が含まれず、実体に依存するものと、言い換えれば実体の性状と考えられる複雑観念」と定義され、三角形、感謝、殺人、量、距離、形、場所などを具体例として挙げている。

ここでの様相概念は、ロック本人も認めているように、それまで論理学において論じられてきた様相概念とは風合いが異なる¹⁵。必然、可能という命題の在り方ではなく、存在（実体）の性質のように捉えられているのである。言い替えれば、事物の在り方を捉えるという意味において、その対象が命題の必然性から、あらゆる事物全体へと拡張されたことになる。また、経験主義の主張に準じ、人間を主体とした認識的な観点から捉え直されていることは確かである。なお、様相のもつ可能態としての性質は依然保存されていると見てよい。

合理主義思想は科学に対して数学性を与えたが、経験され、観察される事象を通して科学的認識に迫る経験主義は、科学に実証性というもう一本の柱を与えた。こうして、実験や帰納法に基づいた科学が打ち立てられる。

(3) イマヌエル・カント

合理主義と経験主義の成立を受けて18世紀ドイツに登場し、それらの合流を試みたと目されるのがカントである¹⁶。

カントは事物の認識に対し、デカルトの想定したような客観性や、イデア的な普遍概念を否定する。先天的な形式は対象ではなくわれわれの主観の中にこそ存在し、われわれはそれによって対象を構成するのだ、という構図を発見する。つまりわれわれが認識するのは、われわれの外に存在する「物自体」（Ding an sich）ではなく、「現象」（Erscheinung）にすぎないのだ。これが、カント自らが「コペルニクス的転回」と自賛する発想である。

この対象構成プロセスを、カントは直観と悟性のはたらきによって説明する。まず、直観によってわれわれに与えられるものは単なる多様にすぎず、対象としての統一性をもっていない。この状態に

対して統一づけのはたらきをするのが悟性である。たとえば風が吹けば木々が揺れるという際の因果関係は、風と木々の間にあるのではなく、悟性においてはじめて認識されるものである。悟性には以下の四つの先天的なカテゴリーが与えられている。

- ・分量 (Quantität) …総体性・数多性・単一性
- ・性質 (Qualität) …実在性・否定性・制限性
- ・関係 (Relation) …実体性・因果性・相互性
- ・様相 (Modalität) …可能性・存在性・必然性

カントはこのカテゴリーを形式論理学における判断表から導いている。実際、このカテゴリーのうち分量は記号論理学での量子子に、性質と関係は結合子に、様相は様相演算子にそれぞれ対応すると言える。よってここでの様相は様相論理学における扱いと同じように見える。しかし様相が命題の客観的な在り方を指すのではなく、人間の悟性に内在する先天的形式の一つであるというところに、コペルニクス的転回の成果が見て取れる。

こうしてカントは、われわれの認識の外にある、つまり現象界の外にある形而上学を放棄した。その流れは現象学をはじめとする現代哲学への潮流となる。

2.1.3 実存主義の哲学

本研究では、ごく日常的にありふれた様相把握を論じてゆきたいと考えている。つまり街がきれいだとか、コーヒーが美味しいとか、そういった類いの現象である。しかし存在論では主に絶対的、必然的な真理を巡って、認識論では主体にとって明晰、確実な知識についての議論が繰り広げられており、不明確で恣意的な側面のある日常的な感情や思考については考察の対象とならなかった。

そのことを扱おうと試みたのが、19世紀にあらわれた実存主義の哲学である。実存 (existenz) とは普遍概念やものごとの本質の以前の、人間の存在のことである。実存主義の創始者とされるキルケゴール (Søren Kierkegaard) は「私にとって真である真理を発見する」という、自分自身の実存を起点として思索を繰り広げた¹⁷。このキルケゴールの視座はその後さまざまに展開しており、実存主義という領野の境界さえ定かではないが、ここでは本論の様相概念にとりわけ関連の深いベルクソン (Henri Bergson) の思想と現象学 (phenomenology) について述べる。

(1) アンリ・ベルクソンのイマージュ論

実存に関する思索のために、ベルクソンは哲学者たちの論争を知らない素人の観点に立ち、「観念論や実在論が存在と現象に分けてしまう以前の物質を考察する」ことを宣言する¹⁸。

そのための概念が、イマージュ (image) である。イマージュとは素朴な常識が信じている通りの物質を指す。イマージュは目を開けば見え、閉じれば見えなくなるが、しかし依然として存在する。私が直接知覚しえない地球の裏側の物質もまた、イマージュである。

イマージュの体系には二種類ある。まずさまざまなイマージュが関係しあってできる体系で、それは宇宙の全体である。宇宙は、われわれのよく知っている自然法則に従う決定論的体系である。もう一つは、その宇宙における私の知覚というイマージュの体系であり、そこでは「私の身体」という特別なイマージュが中心を占める。すべてのイマージュは私の身体に従って規定され、宇宙に非決定性がもたらされることとなる¹⁹。

伝統的に、前者の体系は唯物論的実在論者、後者の体系は主観的観念論者によって主張されてきた。彼らが互いに非難しあってきたのが、心身問題の歴史である。しかしベルクソンは、この二つのイマージュの体系が各々自足して共存すると措定することで、心身問題の乗り越えを試みた。

ベルクソンはまた、意識 (conscience) について考える。意識にはあらゆる生命がもつ本能的意識と、

われわれ人間だけがもつ知性的意識がある。このうち本能的意識は、外的な世界との法則的な作用・反作用を繰り返すのみである。一方、知性的意識の本質は選択の能力にある。つまり可能的行動の中から現実的行動を思惟によって選び取るのであり、この行動の間の距離が意識なのである²⁰。そして、その選択は私の身体という特別なイマージュにおいてなされる。その意味で、身体は行動の中心である。行動することで選択した反作用を外に返すのである。

この選択は、過去の経験つまり記憶 (souvenir) を根拠とする。記憶は過去のイマージュの残存であり、それが意識へと影響する。そればかりか、現在私が知覚 (perception) しているイマージュに混入しさえする。つまり現在の知覚も、記憶に支えられたものにすぎない。そしてその知覚はまた、時の流れに従って次々と記憶へと化す。このようにベルクソンは、われわれの認識が時間的構造をもち、記憶と大いに関連することを説いている。

(2)現象学

現象学はフッサール (Edmund Husserl) を源流とし、以下ハイデガー (Martin Heidegger)、サルトル (Jean-Paul Sartre)、メルロ=ポンティ (Maurice Merleau-Ponty) らに受け継がれるが、ここでは彼らの思想を合わせ、簡単にまとめておく。

デカルト以降の哲学や科学においては、知覚や情動といった概念を既定のものとして用い、現象を客体として俯瞰する態度がとられてきた。しかしフッサールは、そうした態度や世の常識、あらゆる先入観を既知のものとして受け入れることを拒み、自我と経験的世界との自然的なつながり (定立) をいったん停止する「現象学的還元」(Phänomenologische Reduktion) を試みる。

この視座に立つと、われわれは世界を客体として見るのではない。われわれは世界の中に住まい、そこですべてを経験する。このわれわれの在り方を、ハイデガーは「世界-内-存在」(In-der-Welt-sein) と呼ぶ。

ここで問題となる心的現象—意識—について、フッサールは「志向性」(Intentionalität) という概念を導入する。意識は常に「何ものかについての意識」であり、何かに向かっているのである。フッサールは志向性を二つに分類する。すなわち、判断したり自発的に立場を定めたりする場合の「作用の志向性」と、世界とわれわれの生との自然的な統一を形成する「働きつつある志向性」である²¹。われわれは後者の受動的志向性に基づいて、かつ前者の能動的な志向性を発揮しており、それをハイデガーは、世界-内-存在の「被投的企投」(geworfener Entwurf) と呼ぶ²²。

このときのわれわれと世界との接点、志向性の原点について、メルロ=ポンティは身体を設定する。身体は世界-内-存在の媒質であり、われわれは身体によって、世界に住みつく。いっさいの知覚には身体経験が介在し、私の身体は世界についての潜在的な知となる。

現象学では、世界の記述を重要視する。メルロ=ポンティの言葉を借りると、世界は「いかなる分析にも先だって、そこに存在する」²³からである。カントの言うように構成したり、あるいは分析したりする対象などではなく、時間的変化も前提ではない。ただわれわれの身体を起点として、記述すべきなのである。このような現象学的方法的態度はあらゆる分野へと開かれており²⁴、実際に、精神分析、心理学、社会科学、また建築や空間の理論にも応用されてきた (2.2.3で述べる)。

現象学の考え方は、本研究でも大いに参照するところである。よって2.3.1の様相理論の構築の際に、再び現象学に触れることとする。

2.1.4 プラグマティズム

実存主義の哲学はわれわれの世界認識についての思索を展開しており、その意味では西欧伝統の認識論の系譜にある。一方、同時代にアメリカで起こったプラグマティズムは実用主義などと和訳され

るように、われわれの実際の行動に注目する。ここで概念は、行動と関係づけられることによりはじめて有意義性をもち、実際の効果や結果が重要視されるのである²⁵。

ここではまずプラグマティズムの創始者であるパース (Charles Sanders Peirce) の思想を取り上げ、しかるのちに本論の立場により近いジェイムズ (William James) のプラグマティズム、およびトランザクショナルリズム (transactionalism) に触れる。

(1)チャールズ・S・パースのプラグマティズムと記号論

パースはプラグマティズムに基づき、知識の進化や真理の探究のプロセスの解明を試みた²⁶。その際の重要な理論立てとなるのが記号論²⁷ (semiotics) である。記号論では、われわれが認識するあらゆるものごとを「記号」(sign) という概念で捉え、人間の思考や行動について探究する。

パースによる記号の定義は、「誰かに対して何かの代わりになるもの」と要約できる。たとえば、「長針と短針の両方が真上を指した時計」は、「12時」ということの代わりになる。しかしこの「12時」はさらに、「昼ごはんの時間だ」という解釈をも人にもたらし。この場合の「12時」「長針と短針の両方が真上を指した時計」「昼ごはんの時間だ」はそれぞれ、「記号」(sign)「対象」(object)「解釈項」(interpretant) と呼ばれ、この三項関係がパースの記号論の根底をなす(図2-1)。

この三項関係は、動的なモデルである。記号はまず最初の解釈項を生むが、その解釈項はまた記号となり、次なる解釈項を生むのである。このことが繰り返され、無限の記号過程 (semiosis) が発生する(図2-2)。そして探究の果てに、最終的な解釈項へと到達する。この解釈項の変遷の過程が、パースの探究プロセスの全体像である。この探究過程の途上においては、実際には知識は常に誤りを含む可能性がある。これは「可謬主義」(fallibilism) と呼ばれる考え方である。

またパースは記号論によって、フッサールらとは異なる方法で現象を解明しようとしている²⁸。パースの言う「現象」(phaneron) は「心に現れるいっさいのものの総合的全体」と定義される。そしてあらゆる現象を理解するためのカテゴリーとして、「一次性」(firstness)「二次性」(secondness)「三次性」(thirdness) という三つの存在様式 (mode of being) を与えている。

一次性とは何かそれ自体のものであり、他のいかなるものとの関係ももたない。「質」「単なる現われ」「可能性」「潜在性」「現在の瞬間」などが含まれる。たとえば「赤さ」がそれである。赤さだけでは外的実在をもたないが、概念としては実在するとパースは考えている。

二次性は、何か他のものとの関係しているがいかなる第三のものも含まないものであり、個性や単一性を有する。「実在」「関係」「現実性」「時間」「過去」などがそれである。二次性の本質はその強制力にあり、理性や法則を伴わず存在し、あるいははたらきかけるものである。

三次性は、第二のものとの第三のものとの関連づける、媒介や中間性としてのものの在り方である。「表象」「法則」「一般性」「連続性」「理性」「習慣」「未来」などが該当する。普遍的な法則の在り方はす

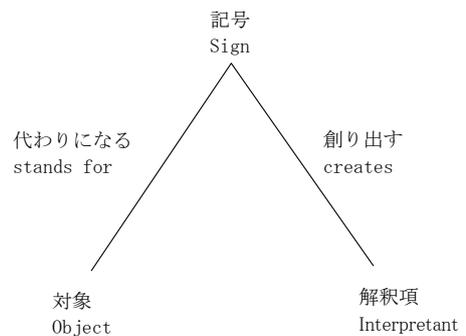


図2-1 三項関係としての記号 (門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究，東京大学学位論文，1997，p.47.)

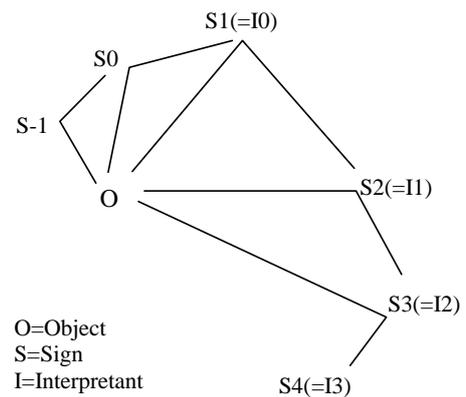


図2-2 記号連鎖 (同上)

べて三次性である。コミュニケーションも送り手と受け手の他、音声や言語表記を伴う三次性の現象である。

パースの言う現象は本論で扱う様相に近い概念である。パースのアイディアは、様相を事物間の関係によってカテゴライズしようというものであると言える²⁹。

(2) ウィリアム・ジェームズのプラグマティズム

ジェームズはパースのプラグマティズムを拡張し、かつ独自の体系をつくりあげた³⁰。ジェームズにとって真理とは、実際に役に立つことである。何かを新しく経験したときは、はじめはそれが真かどうかはわからないが、その効力が確かめられたときに真となる。真理とは出来事によって真となされるのであり、これは真理の真理化の過程である。

われわれが日常の判断の拠り所としている常識とは、このようなプロセスを先祖代々続けてきたものである。実際生活にはそれで十分であり、絶対的な真理を探究する厳密な哲学は必要ないとジェームズは考える。諸派の哲学に対してプラグマティズムは中道を行き、あらゆる学説を必要に応じて採り入れ調和させる。プラグマティズムは事実と具体性に固執するが、實在論的な抽象観念であっても、現実的に価値があるのであればそれを認める。それは宗教や神秘的体験に対する態度においても同様であり、役に立つのであれば是非受け入れようとするのである。

このような考え方は、科学的な真理の探究におけるプラグマティックな方法を追求したパースとは見解の違いがある³¹。しかしジェームズのプラグマティズムこそが、アメリカ人の功利主義精神を如実に表わし、その後のアメリカ哲学の出発点となったのも確かである³²。また本研究も、さまざまな分野、さまざまな立場の学説を必要に応じて採り入れるという、きわめてプラグマティックな態度をとることになる。

(3) トランザクショナリズム

パースの記号論を受け継いだ思想家の一人に、デューイ (John Dewey) がいる。デューイは、生物体と環境的対象は独立したものとして扱われるのではなく、生物体＝環境の全体の系としてみなされるべきだと考える。そして、生物体と環境の間の刺激と反応は因果律によって規定されるのではなく、同時的で相関的なものと捉えられる³³。このような系を、デューイはトランザクション (transaction) であるとしている。

このデューイの考えなどを踏まえ、トランザクショナリズム³⁴の思想をまとめているのがアルトマン (Irvin Altman) らの論文³⁵である。それによると心理現象へのアプローチとして特性 (trait)、相互作用 (interactional)、有機体 (organismic)、トランザクショナルの四つのアプローチがある³⁶。特性論は個人の心的体験を分析するものであり、相互作用論はデカルト的主客二元論の立場に立つ。有機体論はさまざまな部分から成る全体を系とみなし、その系全体の振る舞いの法則性を観察するものであり、自己組織化理論やオートポイエーシス理論を基礎づける。そしてトランザクショナリズムは、系は部分の集合ではなく局面 (aspect) から成るものとして捉える。また観察者さえ現象の局面をなすものとして取り込まれ、系は創発的に変化していく。こういった前提の上で事象の記述や理解を行なおうというのがトランザクショナリズムの立場である。

このような考え方は現象学と相通ずるところがある。太田裕彦は、現象学的心理学とトランザクショナリズムの研究アプローチを比較分析している³⁷。それによると、共通性としては主客二元論の否定、事象の克明な記述、観察者の参与性などが挙げられる。一方、違いとしてはまず、トランザクショナリズムは時間的変化を考慮に入れ、変化する構成そのものを分析しようとする点がある。次に、トランザクショナリズムは折衷主義的な態度をとり、プラグマティックな方法や定量的分析も援用する。

最後に、研究領域全体の目標として、現象学的心理学がやはり現象学にならない本質の直観を目指すのに対し、トランザクショナルリズムは研究間に通底する構造や理論の構築を試みるという違いがある。

トランザクショナルリズムはいまだまとまった学問体系をなしておらず、また理念の実際上の扱いは難しい³⁸。しかし近年建築・都市の研究への導入が始められており、本論のスタンスとも大いに通ずるところがあると考えている。

2.1.5 可能世界意味論

さてここで、様相についての議論に話を戻そう。記号論理学成立の前後にあっても、様相論理学の地位は決して高くなかった。たとえばカントは論理学について、認識を実質的に増大する道具とはなりえないと述べている³⁹。厳密な論理的明晰さを求める分析哲学においても、曖昧さにかかわる様相論は不人気であった。その状況を変え、20世紀後半の様相論を大きく発展させたのが、可能世界意味論 (possible world semantics) である。

(1) 可能世界意味論の基本的な考え方

まず可能世界とは、「世界がありえたかもしれない在り方」を指す⁴⁰。われわれが暮らしているこの現実世界をはじめ、想像上の世界、過去の世界や未来の世界をも包括する概念である。可能世界は、実際にそうなりそうかどうかには関係なく、あるものと措定できる。たとえば「私がもし鳥だったら」という表現がよくあるが、私が鳥である世界は一つの可能世界として成立する。

ただしこの可能世界なるものは本当に実在するのか、という問いに対しては二通りの考え方がある。まず一つが可能主義であり、現実世界の他にあらゆる可能世界が具体的に実在すると考えるものである。ルイス (David K. Lewis) が提唱したものの、以降ほとんどの哲学者がこれに反発している。しかし宇宙における生命誕生の必然性を説明できるなど⁴¹、魅力的な見方ではある。

もう一つが、クリプキ (Saul A. Kripke) を中心とした現実主義と呼ばれる立場である。実際に存在するのは現実世界のみで、可能世界はあくまでフィクショナルな存在として捉える。可能世界は科学的に発見されたり、質的に与えられたりすることも必要なく、ただ約定される⁴²。また、この世界のすべての要素についての可能世界を考えることもできるし、たとえば3つのサイコロの目など、限られた要素のみに関して考えることもできる。多くの哲学者が同意しており、本論も現実存在する都市空間において様相を論じることから、この現実主義の立場をとる。

さて、各可能世界の関係は、到達可能性 (accessibility) R によって規定される。ある可能世界 w の中で可能な変容を w 自身に対して施すことで w' に移ることができることを、 w から w' に到達可能であると言い、「 wRw' 」と表わす。

この考えのもとでは、命題の真偽は各可能世界と相対的に評価される。ある世界で真である命題も、他の世界で真であるとは限らない (たとえよく似た世界であっても)。そして様相論理における二つの様相は以下のように扱われる。

- ・ある可能世界 w において必然的に真 $\Leftrightarrow w$ から到達可能なすべての可能世界において真
- ・ある可能世界 w において真であることが可能 $\Leftrightarrow w$ から到達可能な可能世界のうち少なくとも一つの可能世界において真

このように、一つの可能世界における命題の諸様相を、到達可能な世界における真偽によって理解できるのが、このセオリーの大きな魅力である。同様に、以下のことも導ける。

- ・命題 $p \Leftrightarrow p$ が真であるような可能世界の集合
- ・性質 $f \Leftrightarrow f$ であるような個体の集合 (個体については後述)
- ・関係 $r \Leftrightarrow$ 関係 r をもつような個体のペアの集合

これらは、概念や因果関係の实在性を放棄し、それをすべて可能世界の構造に帰するという、物理主義 (physicalism) 的な態度である。因果関係を否定したヒューム (David Hume) のような懐疑論への回答でもある。

(2) モデル論と意味論

ではその可能世界の構造について、より詳細に論じよう。その全体的な枠組みは、「モデル」(model) の概念によって与えられる⁴³。その全体像を図示したのが図2-3である。

まず「フレーム」(frame) F を、可能世界の集合 W と到達可能性 R の組 $\langle W, R \rangle$ として定義する。フレームは、どのような可能世界があり、そうした可能世界の間での到達関係はどうなっているかを示す、いわば骨格に相当する部分である。

可能世界は表現 (expression) e によって表わされており、その e が指し示す対象は個体 (individual) d である。すると、 e と d の写像関係を示すものが e の意味 (meaning) に相当するものであり、これは割当関数 (assignment function) f と呼ばれる。ここで、 f は質的な概念であり、意味論の一般概念で内包 (intension) と呼ばれ、一方 d は直接に指示できる個物を指し、外延 (extension) と呼ばれる。この内包 (意味) の問題はそれまでさまざまな哲学者を悩ませてきた難題だったのであるが、可能世界意味論においては表現と個体との間に割当関数を設定することで、内包を外延の枠内へと解消していると言える。

そしてモデル M は、フレームに個体の集合 D を加えた、 $\langle W, D, R \rangle$ で定義される。抽象的骨格であったフレームに加え、可能世界の具体的なあらわれが記述されるのである。たとえば、同じ「金星」という外延に対し、朝と夜 (異なる可能世界) では「明けの明星」「宵の明星」という異なる表現が与えられるというような、複雑な現象を説明できるようになる。

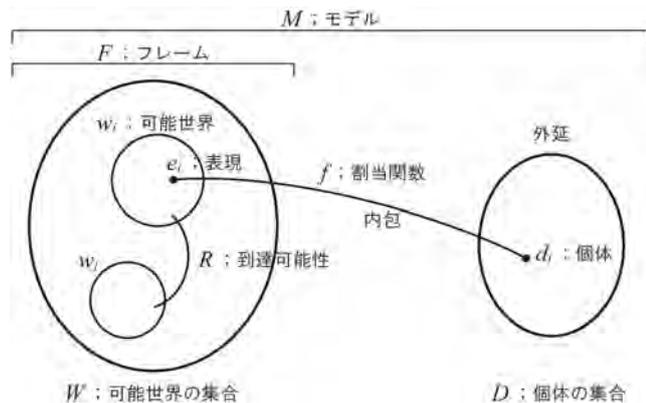


図2-3 可能世界意味論の枠組み

(門内輝行: 街並みの景観に関する記号学的研究, 東京大学学位論文, 1997, p.422.より作成)

(3) 可能世界意味論の応用

以上が可能世界意味論の基本的な解釈であるが、到達可能性 R に与える役割をアレンジすることで、さまざまな論理的体系を得ることができる。その一例として、日常言語に織りこまれる時制を扱うための、「時制論理」(tense logic) について述べる⁴⁴。

時制論理においては、諸要素を以下のように設定する。いずれも様相論理のアナロジーによって理解することができる。

- t …時点。可能世界 w のアナロジー
- T …時点 t 全体の集合。可能世界の集合 W のアナロジー
- $<$ …時間的前後関係 (前<後)。到達可能性 R のアナロジー
- P …過去時制の演算子。様相演算子のアナロジー
- F …未来時制の演算子。様相演算子のアナロジー

任意の原子文 (時制を含まない命題) を ϕ とすると、時制は以下のように表現される。

- ある時点 t において $P\phi$ が真 $\Leftrightarrow t' < t$ であるような少なくとも一つの時点 t' において ϕ が真
- ある時点 t において $F\phi$ が真 $\Leftrightarrow t < t'$ であるような少なくとも一つの時点 t' において ϕ が真

つまり、「京都で雨が降った」という言葉が時点 t で真となるのは、 t 以前のある時点 t' で「京都で雨が降る」が真であるときである。

日常言語は、形式言語とは異なりその言葉が発せられる場所、時間、そして話し手といった文脈に依存して意味が決定されるという特徴がある。時制論理は、その文脈を論理的に扱う可能性の一端を示したわけである。この考えをさらに推し進めたのがモンタギュー文法 (Montague grammar) である。モンタギュー文法では、可能世界 w 、時点 t 、場所 p 、行為者 a 、その他さまざまな文脈に対して、次のような指標 (index) i を設定する⁴⁵。

$$i = (w, t, p, a, \dots)$$

命題の真理値は、可能世界、時点、場所、行為者という多様な文脈を総合した指標に対して相対的に決定されることになる。モンタギュー文法は自然言語を厳密な論理的理論に至らしめようとするために、独自の可能世界意味論の創出を試みている。その詳細は難解であるためここでは省略するが、世界の捉え方や言語の意味の読み取り方に関して大変魅力的な考え方である。なぜならば本論ではまさに、具体的なある時間、場所において、被験者によって発せられた文脈依存の言葉を扱うからである。

2.1.6 都市と建築の様相論

以上の議論は、哲学、論理学などにおける比較的抽象性の高いものであった。原広司はこのような哲学的考察を合流し、建築・都市という具体的な空間を語る上での中心的概念として様相を位置づけようと試みている。原は建築家として多数の作品を手掛けると同時に、1970年代から継続的に世界各国の集落調査を行なってきた。原の様相論はこれらの活動をもとに展開される空間に根ざした理論であり、本研究に対しても示唆するところが大きい。

また、門内輝行は原とともに様相論を研究し、そして記号論を手掛かりに日本全国の伝統的街並みの景観を読み解いている。様相に関しても、豊富な考察が見られる。

そこで本小節では、原と門内の様相論について概観する。

(1) 可能態としての様相

原は、アリストテレスやカントらと同じく可能態の概念を重要視する。われわれの意識が形成する世界を可能態として捉える概念が様相である⁴⁶。またこの様相を可能態たらしめる根拠として時間を挙げている。原の論じるのは空間の様相論であり、そこに時間の流れを重ね合わせたのであるが、時間と空間の軸をはっきり打ち出したのが原の様相論の一つの特色と言える。

次に、様相という言葉の指す対象に踏み込んだのが以下の文である。

一かような反省、見直しによって、抽出された事項の多くは、事物の状態や空間の状態の見えがかり、外見、あらわれ、表情、記号、雰囲気、たたずまいなどと表記される現象であり、(中略) これらの表記が指し示している空間の現象を、〈様相 (modality)〉と呼んでみたい。⁴⁷

様相概念の用法について、カントが悟性の先天的形式のカテゴリーの一つに留めたのに対し、原は空間の把握の全体的な構えにまでその枠組みを広げていることがわかる。ここに様相は、命題の在り方といった空虚なものではなく、中身をもつことになる。その中身は曖昧で未分化ではあるが、確かに空間における現象を指しているのである。

一方門内は、街の「たたずまい」とか「アイデンティティ」といったグローバルな意味の在り方を様相と呼んでいる⁴⁸。原と同じく全体性を指す概念である。さらに門内は、様相が情景の変化のうちにあらわれてくるものであると指摘する。連続体にはその内部において変化が内在し、そこで様相は顕在化する。変化や差異は、様相があらわれる際のキーになっていると言える。

(2) 経路の横断

様相を理解するための概念装置として原が提示しているのが、「経路」(route, path)の「横断」(traversing)である。経路とは一般的に有向グラフで表現される道筋であり、われわれはそれに沿って移動(横断)する。経路は現実世界における空間上の移動、時間的移動、そして思考の移り変わりなどの可能的移動にも適用可能である。

— 馴れ親しんだ継時的に変化する一連の情景図式は、〈経路〉によって束ねられた様相として把握される。⁴⁹

— トラヴァーシングは、観測者を地上に下ろし、「道」pathにしたがって移動させてみる。(中略) 実際に空間のなかを通過する体験をそのまま記述する、といった目標をもっている概念です。⁵⁰

現象学が「世界-内-存在」を唱えたように、様相の把握も、人間が抽象観念を離れ時空間からなる世界の内に定位したときに生まれる。この時点での様相は「部分的な、さしあたり全体化された」様相であるにすぎない。そこに連続性を与え、意味のあるまとまりに束ねるのが経路の一つの役割である。

そして経路をたどる中で、われわれは異なる世界を横断することがある。原は領域(domain)概念を用いて図2-4のスケッチを残している。

この図は大変示唆的なものである。というのも、先述した通り変化や差異は様相把握にとって重要な概念だからである。各領域において何らかの固有の様相があらわれると仮定すれば、その領域と領域の断絶点である境界(boundary)で大きな変化が見出され、様相が顕在化するに違いない。

門内は、同様のプロセスを「可能世界の間を移動する経路」として構想し⁵¹、次のように記している。

— 情景はいつも「~しようとしている」状態にあり、われわれはつねに次なる変化を予想しているのである。そして、この予想を基盤として固有の様相が現れるわけである。⁵²

記憶の中から想起される世界、予想される世界も可能世界として捉え、現実世界との重ね合わせにおいて、様相があらわれるというのが門内の考え方である。

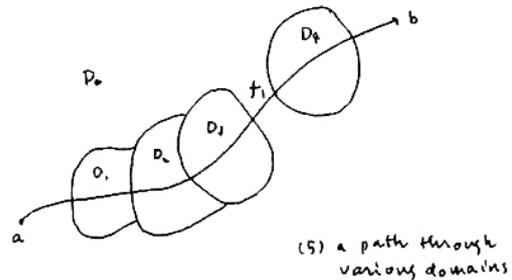


図2-4 経路上における領域横断のダイアグラム
(原広司: 空間の文法「横断(1)」, GA JAPAN, vol.35, A.D.A. EDITA Tokyo, 1999, p.121.)

(3) 情景図式

門内の指摘した記憶と予想のシステムは、本論においても非常に重要である。それに関して原は、「情景図式」という概念を用意する⁵³。原は、図像の集合を図式と呼ぶ。図像は単なる絵、あるいはその部分であるが、図式はその図像同士が集まって一つの構造をなしたものだと言える。そして、体験した図像は記憶の中に蓄えられる。その記憶は一般に不鮮明になるが、また意識的に思い出すことで、復活することもできる。こうした意識のはたらきに応じて変化する図像の系列の枠組みを、原は情景図式と呼ぶ。

この鮮明さの度合いという構図は、現在の体験にも適用できる。つまり、ある情景を詳しく見ることも、漠然と見ることもできる。情景図式は時空を結びつける概念であり、経路も情景図式を束ねるものとして構想される。

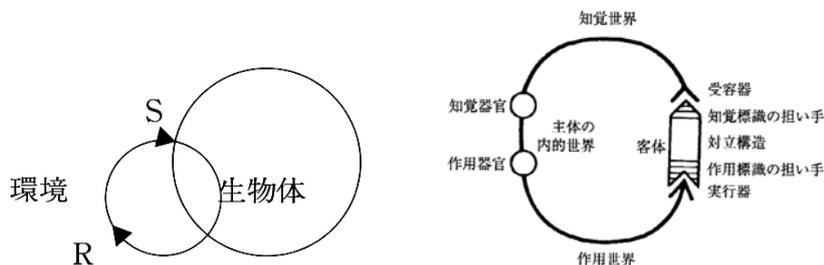
¹ 木田元: 反哲学史, 講談社学術文庫, 2000, pp.85-86.

² 注釈1の文献, p.106.

- 3 アリストテレス：形而上学，アリストテレス全集12，出隆訳，岩波書店，1971，pp.161-165, 289-320.
- 4 アリストテレス：カテゴリー論・命題論・分析論前書・分析論後書，アリストテレス全集1，山本光雄・井上忠・加藤信朗訳，岩波書店，1971.
- 5 注釈4の文献，p.184。ただし、アリストテレス自身は単純様相、必然様相、許容様相にあたる言葉を直接は用いておらず、各様相は訳者の補注によるものである。つまり、アリストテレス以降に体系化された論理学において用語が整理され、その文脈からアリストテレスの言説が再解釈されていることになる。
- 6 注釈4の文献，p.6.
- 7 オールウド，J.・アンデソン，L.-G.・ダール，O.：日常言語の論理学，公平珠躬・野家啓一訳，産業図書，1979.
- 8 結合子の表記についてはいくつかの方法があるが、オールウドらの表記法に準ずる。述語論理学についても同様。
- 9 オールウドらは「□」と「◇」に代わって「*N*」と「*P*」を用いているが、ここではより一般的に用いられ、かつ表記としても見やすい「□」と「◇」を採用する。
- 10 ヒューズらは、必然性と可能性に、偶然性と不可能性を加えて「様相概念 (modal notion)」とし、この四つの様相概念と真偽の関係を右のように図示している (ヒューズ，G.E.・クレスウェル，M.J.：様相論理学入門，三浦聰・大浜茂生・春藤修二訳，恒星社厚生閣，1981，p.21. より作成)。記号論理学では通常、「*p* かつ $\sim p$ 」「円い正方形が存在する」などの不可能命題を除いた上で、可能性と必然性について議論される。
- 
- 11 デカルト，R.：方法序説，谷川多佳子訳，岩波文庫，1997.
- 12 注釈1の文献，p.135.
- 13 第1章で述べた都市についての既往研究の多くも、暗黙のうちに、この了解のもとに進められている。たとえば、1. 3. 2で述べた船越らの研究では、「物理量」「心理量」という尺度を設定し、その間の関係を定量的に分析している。また多くの研究に用いられる「主体」「客体」という考え方も心身二元論に基づく。私の精神を絶対視して主体とみなし、環境を客体とするのである。
- 14 ロック，J.：人間知性論 (二)，大槻春彦訳，岩波書店，1974.
- 15 そのため訳者によっては「様態」と訳す場合もある。たとえば加藤卯一郎訳 (ロック，J.：人間悟性論 (上)，岩波書店，1940.)。
- 16 岩崎武雄：カント，勁草書房，1958.
- 17 岩田靖夫：ヨーロッパ思想入門，岩波ジュニア新書，2003，pp.208-209.
- 18 ベルクソン，H.：物質と記憶，ベルクソン全集2，田島節夫訳，白水社，1965，p.6.
- 19 注釈18の文献，pp.28-30.
- 20 澤瀉久敬：ベルクソン哲学の素描，世界の名著53 ベルクソン，澤瀉久敬責任編集，中央公論社，1979，pp.32-34.
- 21 メルロ＝ポンティ，M.：知覚の現象学，中島盛夫訳，法政大学出版局，1982，p.20。後者はメルロ＝ポンティの言う知覚に相当する。あらゆる行為がそこから浮かび上がる、背景としての知覚である。
- 22 木田元：現象学，岩波新書，1970，p.93.
- 23 注釈21の文献，p.6.
- 24 注釈22の文献，p.8.
- 25 笠松幸一・江川晃：プラグマティズムと記号学，勁草書房，2002，p.7.
- 26 注釈25の文献 および 門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究，東京大学学位論文，1997.
- 27 記号論はプラグマティズムの流れにおいてパースが、言語学の流れにおいてソシュール (Ferdinand de Saussure) がほぼ同時期に構想したとされる。学問体系の呼び名について、英語では伝統的にパースに始まる系譜に対しては「semiotics」が、ソシュール由来のものには「semiology」という用語が用いられ、わが国でもこの両者を「記号論」「記号学」と訳し分けてきた (注釈26の文献，p.14。ただし異なる見解を示す研究者も存在する (注釈25の文献，p.ii.など))。本研究では、便宜的に「記号論」に統一することとする (門内も論文タイトルには「記号学」を用いるものの、本文中では「記号論」を主に用いている)。なお記号論のモデルは研究者ごとにさまざまなパターンがあり、ここで示す三項関係に留まらない豊富な理論体系が存在する。
- 28 注釈26の文献，pp.41-44.
- 29 パースはさらに、記号の三項関係と存在様式の三分類の組み合わせによって、「記号それ自身」「記号と対象との関係」「記号と解釈項との関係」のそれぞれについて、一次性、二次性、三次性の分類を行なっている。このようにパースの記号論はものごとの間、カテゴリーの間などにある関係性を追求するところに大きな特徴がある。
- 30 ジェイムズ，W.：プラグマティズム，梶田啓三郎訳，岩波文庫，1957.
- 31 創始者パースはこのことを嘆き、新たに自説を「プラグマティシズム」(pragmaticism) と呼び直したほどである (注釈25の文献，p.53.)。

32 注釈30の文献, pp.234-235. (訳者解説)

33 このモデルは「反射弧」と呼ばれ、下左図のように図示される(注釈25の文献, p.66。図中Sは刺激(stimulus)、Rは反応(response)を意味する)。なお生物学者ユクスキュルもこれと似た考え方を提示している(下右図;ユクスキュル, J.・クリサート, G.: 生物から見た世界, 日高敏隆・羽田節子訳, 岩波文庫, 2005, p.19.)。



34 transactionalismに対しては、「相互浸透論」という和訳があてられる場合がある。しかし「相互」という言葉自体に二元論を想定させるきらいがあり、実際日本の研究者の間でも呼び名は分かれている。本論では、カタカナの「トランザクショナリズム」の語を用いる。

35 Altman, I. and Rogoff, B.: World Views in Psychology: Trait, Interactional, organismic, and Transactional Perspectives, Stokols, D. & Altman, I.(ed.), *Handbook of Environmental Psychology*, John Wiley & Sons, 1987, Chap.1, pp.7-40.

36 注釈35の文献 および 舟橋國男: 建築学における「トランザクショナリズム」を巡る一考察, 人間・環境学会誌, vol.26, 2010, p.51.

37 太田裕彦: 現象学的心理学からみたトランザクショナリズム, 人間・環境学会誌, vol.26, 2010, pp.66-67.

38 舟橋は、トランザクショナリズムや相互浸透論を掲げた研究にも主客二元論的把握を思わせるものが多いと指摘している(注釈36の文献, p.55.)。またムーア(Gary T. Moore)は、トランザクショナリズムの立場であっても、実際の研究方法としてはインタラクショナルな取扱にならざるを得ないと述べ、ワーナーとブラウン(Carol M. Werner and Barbara B. Brown)はトランザクショナリズムの観点はフレキシブルであり、一つの研究がすべてをカバーすることはできないとしている(同文献, p.52.)。

39 飯田隆: 言語哲学大全Ⅱ 意味と様相(上), 勁草書房, 1989, p.13.

40 クリプキ, S.A.: 名指しと必然性, 八木沢敬・野家啓一訳, 産業図書, 1985, p.20.

41 三浦俊彦: 可能世界の哲学「存在」と「自己」を考える, 日本放送出版協会, 1997, p.184.

42 注釈40の文献, p.51.

43 注釈26の文献, pp.422-423.

44 飯田隆: 言語哲学大全Ⅲ 意味と様相(下), 勁草書房, 1995, pp.166-170.

45 モンタギュー(Richard Montague)自身が示した指標概念は、 $i = (w, t)$ という二項によるものである。これに対し、ダウティらが $i = (w, t, s)$ (s は発言の話者)という拡張を提案し(ダウティ, D.R.・ウォール, R.E.・ピーターズ, S.: モンタギュー意味論入門, 井口省吾他訳, 三修社, 1987, p.152.)、 $i = (w, t, p, a, \dots)$ は飯田による(注釈44の文献, p.171.)。

46 原広司: 様相と経路, スペースデザイン, vol. 352, 鹿島出版会, 1994, p.53.

47 原広司: 空間〈機能から様相へ〉, 岩波書店, 1987, p.224.

48 注釈26の文献, pp.421-422.

49 注釈47の文献, p.231.

50 原広司: 空間の文法「横断(2)」, GA JAPAN, vol.38, A.D.A. EDITA Tokyo, 1999, p.116.

51 注釈26の文献, p.426.

52 注釈26の文献, p.422.

53 原広司: 集落の教え100, 彰国社, 1998, p.215.

2.2 都市論・空間論

前節では、様相やわれわれの認識に関する諸理論を振り返った。それらの多くは都市空間だけではなく、会話や思考など、日常生活のあらゆる場面に適用できる可能性がある。しかし本研究で扱うのは、都市空間の歩行局面における様相である。ゆえに空間、特に都市空間に焦点を当てた研究について見ておかなければならない。

まず2.2.1では以降の空間論の礎の一つとなっているゲシュタルト心理学 (Gestalt psychology) について概観する。次に2.2.2では、都市研究に大きな足跡を残したリンチ (Kevin Lynch) の『都市のイメージ』を、2.2.3では実存主義的な見地から空間や場所の本質に迫ろうとした、現象学的空間論の系譜の研究を取り上げる。そして2.2.4では本研究の直接の舞台である街路空間についての諸研究を見る。

2.2.1 ゲシュタルト心理学

ゲシュタルト心理学は、ヴェルトハイマー (Max Wertheimer)、ケーラー (Wolfgang Köhler)、コフカ (Kurt Koffka) らのドイツ人心理学者によって1910年代に創始された心理学の一学派である。そのキーワードであるゲシュタルト (Gestalt) は「独立したものとして実在し、その1つの属性として何らかの形状あるいは形態を有する、具体的な個別の特徴を持った実体」と定義される¹⁾。つまり全体の中での有意味なまとまりをゲシュタルトと呼ぶのである。

そのうち特に、認知的にまとまりをもつ視覚的な図形に関して「図」(figure) という用語が当てられる。その背景は「地」(ground) と呼ばれ、あたかも図の後ろ一面に敷かれているような印象を与える。有名な「ルビンの壺」(図2-5) では図と地が反転する。また、二つの異なる見方があっても、二つのものを同時に図と見ることはできず、必ず一方が図、一方が地となることも示されている。

図として捉えられやすい図形の性質としてさまざまな法則が明らかにされたが、その代表的なものをメッツガー (Wolfgang Metzger) の記述²⁾をもとにまとめておく。

- ・閉合性 …取り囲まれたものの方が開いたものよりも図となりやすい
- ・近接性 …近いもの、あるいは小さいものの方が図となりやすい
- ・単純性 …円や正方形のような単純な図形の方が図となりやすい
- ・連続性 …なめらかな連続をなす線で囲まれている図形の方が図となりやすい
- ・類同性 …似ているものは互いに寄り集まって図となりやすい
- ・対称性 …シンメトリーな図形の方が図となりやすい
- ・凸形性 …凸図形の方が凹図形に比べて図となりやすい
- ・同幅性 …図形内で同じ幅をもつ図形の方が図となりやすい
- ・下方性 …下から立ち上がる図形の方が上からぶら下がる図形に比べて図となりやすい
- ・意味性 …意味のある図形 (文字や図2-5の壺、人の顔など) の方が図となりやすい

ゲシュタルトの性質には、いくつかの興味深い現象がある。

たとえば、上記の条件はしばしば競合し合うが、そのような場合見る人の意図によって図地反転が起こる。通常図となりにくい方の図形を、意図的に図と見ることもできる (そのような見方は長く続

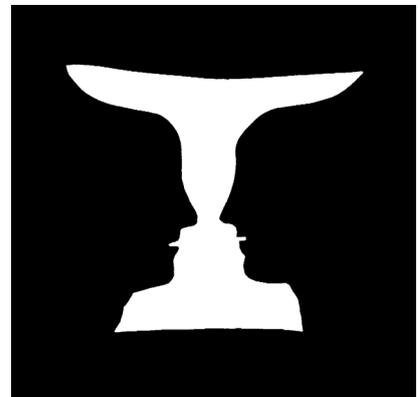


図2-5 ルビンの壺

(Rubin, E.: Visuell wahrgenommene Figuren: Studien in psychologischer Analyse, Gyldendalske Boghandel, 1921, p. Abb.3.)

かないが)。このように図地の関係は、人の意図とも関係しながら時間的に変化する。

また、これらの条件を満たす図形は単に図となりやすいだけでなく、秩序があり、より好ましいと感じられる傾向がある。それゆえにゲシュタルトの法則は、単なる視覚現象の分析だけではなく選好現象やデザインの理論にも応用される。

さらに、図と地という関係は日常生活において複層であられる。たとえば図2-5では二つの図形が拮抗しているが、この図形自体が論文の白い紙面に対する図となっている。その論文は図2-5に対し地であると同時に、論文が置かれている机に対する図となる。このように図と地の原理は複雑に折り重なりながら、われわれの視環境理解の基底をなしている。

ゲシュタルト心理学では、一つの図形に対し二つの見方があることや、その見方がわれわれの意図や好み、記憶と関連していることが示された。このことは主体と客体を峻別し、その間にある恒常仮定 (constancy hypothesis)³を前提する二元論的な伝統心理学に対する反証にもなった。

2.2.2 ケヴィン・リンチの『都市のイメージ』

都市の認知研究の嚆矢であるリンチの『都市のイメージ』(The Image of the City)⁴について、1.3.1では主にその研究方法について触れた。ここではその研究内容を詳述し、リンチの描いた空間論を明らかにする。

(1)都市のイメージの骨子

都市のデザインに対するリンチ以前の探究には、ルネッサンス・バロック期に始まる美学的探究や、コルビュジエ (Le Corbusier) に代表される近代建築家による機能的探究などがあった。これに対しリンチの着眼点は、都市は美的、機能的なものであるとともに、人々がイメージするものであるということであった。

イメージは、人がその場所に住み、年月を過ごすに従って徐々に形成される。それは元来個人的なものである。しかし、同じ都市に暮らす人々の間には、ある一定の共通したイメージがあるのではないか。そのような「パブリックイメージ」(public image)を知ることができれば、すぐれた都市をデザインする方法がわかるのではないかとリンチは考えた。

そのすぐれた都市の条件としてリンチが設定するのが、イメージアビリティ (imageability; イメージのしやすさ)である。これは、人々にとって明瞭なイメージを喚起する性質であり、独特な部分からなる相互関係のパターンとしてあらわれる。それはまた、レジビリティ (legibility; わかりやすさ)やヴィジビリティ (visibility; 見えやすさ)とも関連する。

リンチはまた、環境のイメージを三つの成分に分解する。それがアイデンティティ (identity; そのものであること)、ストラクチャ (structure; 構造)、ミーニング (meaning; 意味)である。アイデンティティとは対象物が他のものと見分けられる独立性、ストラクチャは対象同士あるいは対象と観察者との関係であり、そしてミーニングは観察者にとっての意味である。こう分類した上でリンチは、アイデンティティとストラクチャのみに分析対象を絞り、ミーニングを問わないという方針を立てる。というのも、アイデンティティとストラクチャは対象の物理的形態との関連において分析できるが、意味は同一の形態を前にしても人によるばらつきが大きく、複雑であるからだ。

リンチは意味の問題を避ける態度をとるが、これは研究の初期段階における便宜的態度であり、意味を軽視するのではないことを強調している。評価尺度をイメージアビリティに絞っていることも同様で、美しさや刺激、選択といった観点の重要性を否定するわけではない。視覚的形態のイメージ分析に対象を限定することで研究の先鋭化を目指した、リンチの方法論的態度と言える。

(2)5つのエレメント

リンチは、ボストン、ジャージーシティ、ロサンゼルス等の三都市において、住民からの聞き取りを中心とした調査を行ない、都市のイメージを構成する5つのエレメントを抽出する。それが、パス (path ; 道路)、エッジ (edge ; 縁)、ディストリクト (district ; 地域)、ノード (node ; 結節点、集中点)、ランドマーク (landmark ; 目印) である。

パスは人が通る、あるいは通る可能性のある道筋である。リンチによると、パスは5つのエレメントの中でも特に卓越したものであった。人は主に道を手掛かりに、都市のイメージを構成するのである。方向性、始点と終点のはっきりしたパスは、イメージアビリティの高いパスとなった。その一方、曲がっていることに気がつかないほどの微妙なカーブ、少しずつ離れてゆく二本の道、複雑な交差点、規則性の乱れ、一方通行などはイメージを混乱させるものとして指摘された。

エッジはパスとはみなされない線状のエレメントである。一般に二つの地域間の境界であり、横から参照される。ボストンを包むように流れるチャールズ川、シカゴの面するミシガン湖、あるいは都市を分断する高速道路などがその典型とされる。ただしエッジは切り離す障害であると同時に結びつける縫い目となる場合もあり、またエッジであると同時にパスともなりうる。

ディストリクトは、人が内部に入ることができ、ときに外部からも参照される大きな都市地域を指す。そのディストリクトを決定するのは、内部でのテーマの連続性である。テクスチャ、形態、用途、住民、騒音…といったあらゆる要素がテーマとなりうる。そしてわかりやすいディストリクトは、いくつかの特徴からなるテーマの単位をもっている。ディストリクトはパスに次ぐ支配的エレメントであり、都市や人によりパス以上に重視される場合があった。

ノードはその中に入ることのできる重要な焦点である。そのうち一つのパターンはパスの接合によるものであり、交差点や鉄道駅が該当する。広場のような歩行者空間があれば、ロータリーのような自動車交通の結節点も含まれる。もう一つのが、テーマの集中によるパターンである。用途や形態、テクスチャなどの集中によりノードが形成される。特に、テーマの顕著な集中によって周囲を象徴し、周囲にディストリクトを形成する場合はコア (core ; 核) とも呼ばれる。

最後のランドマークは観察者から離れて存在する点であり、通常外から参照される。ランドマークに必要なのは特異性であり、背景との対照である。周囲より大きいとか、目立つ形態であるとか、飛びぬけて古いとかいったものである。歴史的意味づけもランドマークを強化する。人の都市内の移動はこのようなランドマークのシークエンスに従っているものと見ることもできる。実際に都市を歩き回る際にもランドマークは重要なのである。

以上のような5つのエレメントが、都市では共存している。その様子を都市の平面図上に描いた一例が図2-6である。この図は、ボストンのパブリックイメージを捉えている。

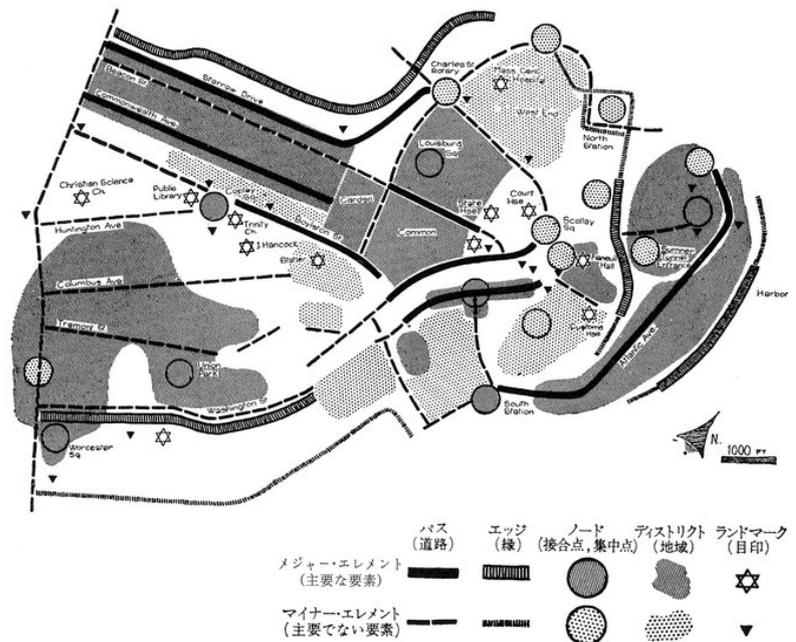


図2-6 現地踏査から引き出されたボストンの視覚的形態 (リンチ, K.: 都市のイメージ, 丹下健三・富田玲子訳, 岩波書店, 1968, p.22.)

各エレメントは、ノードとランドマークが互いを引き立たせたり、パスがディストリクトを分断したりするように、互いに強めあったり、ときに破壊しあったりしている。この関係を良好にすることこそが、都市のイメージアビリティを高めることに他ならない。

2.2.3 現象学的空間論

先入観や形而上学を否定した上で世界の存在を考える現象学的思索は、20世紀後半にさまざまな分野へと広がった。空間論に関しても、近代的な機能主義的空間計画論への反動として空間の本質を見直そうという動きがあらわれ、現象学的空間論の探究が開始された。

ここでは、主に建築空間についての現象学的考察を展開したノルベルグ＝シュルツ（Christian Norberg-Schulz）と、現象学的地理学の文脈で捉えられるレルフ（Edward Relph）およびトゥアン（Yi-Fu Tuan）を取り上げる。いずれも現象学を広い枠組みで解釈し、実践的な研究を展開している。

(1) クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ

ノルベルグ＝シュルツは、実存的空間（existential space）と建築的空間（architectural space）について議論を展開している⁵。

空間は実存の諸相の一側面である。人間は空間に定位し、行為は必ず空間を占める。実存的空間とはこのような意味における空間であり、人類に共通する社会性、普遍性をもった空間的原型である。

そして建築的空間とは、実存的空間の具体化されたものである。実存的空間が公共的性格を有するがゆえに、建築もまた公共の世界に奉仕すべきものとされる。また、環境のイメージは実際には完全ではなく、常に改善への願望も含んでいる。そのような願望を叶えるのも建築の役割である。

このようなシンプルな枠組みのもと、ノルベルグ＝シュルツは実存的・建築的空間のそれぞれについて、諸要素と段階性について論じる。

実存的空間の諸要素は、中心（center）、方向（direction）、区域（area）の三つに還元される。これはリンチの指摘と同様であり（中心はノードとランドマーク、方向はパスとエッジ、区域はディストリクトにそれぞれ対応）、またゲシュタルト心理学にも根拠を得ている。すなわち、中心は近接性（および閉合性）によって場所（place）⁶を、方向は連続性によって通路（path）を、区域は閉合性によって領域（domain）を形成する。

まず中心は個人にとっては家、公共にとっては聖域に代表される。拠点や目標、また行為のなされる空間である。そして未知なる外界と対照をなす、既知の内部でもある。建築的空間において具体化された中心の例が、ピラミッドやストゥーパである。コロッセオや中世都市の広場は、ともに集まるという社会性や安全性を具現化している。

次に、方向はあらゆる場所にそなわっている。神聖や自然征服を示す垂直性、行動世界である水平性、時間と関連した前方や後方。また、太陽の運行や川の流れなどにより、自然的にも形成される。とりわけ通路は、出発点と目標点を結ぶもの、あるいは付随する諸要素をつなぎとめる軸としてあらわれる（原らが探究した経路の概念と相同である（2.1.6））。建築的空間においては、たとえば教会の内部空間は一つの通路であり、終点に祭壇という目標が据えられる。街路においても、バロックの都市計画のようにさまざまな核をつなぐ放射状道路が形成されることがある。

最後に、区域である。区域は混沌の中の秩序である。境界で囲まれ、また内部が自然的、あるいは人工的な同一性をまとうことで、領域は成立する。

この根源的な三要素は相互に結合しあって実存的空間を形成する。たとえば開口は、場所に与えられた方向性であり、そこで内外が会う。場所や通路で満たされた領域は高密度なもので、よく知っていて、安全性を感じることができるとともに、周囲の低密度な領域に対する図となる。それが建築的

空間に見事に昇華された例として、中世ヨーロッパ都市がある。それは、中央に教会が垂直にそびえ（場所）、広場と街路がネットワークをなし（通路）、そして城壁により閉合する（領域）という典型的形態をもつ。

次に空間の諸段階について。ノルベルグ＝シュルツは実存的空間を大きく五段階に分ける。

- ・地理学的段階 …ヨーロッパ、国、地方のような抽象的で認識的な段階
- ・景観的段階 …自然的で、主に図と地の関係における地となる
- ・都市的段階 …人間の社会的活動、人工環境によって形成される、既知で高密
- ・住居的段階 …私的空間、内側、実存の中心的な場所、そこから出発しまた回帰する場所
- ・器物的段階 …手や身体のスケールに相当し、直接に機能と結びつく

この世界には部屋や街や地球などさまざまなレベルの空間があるが、ノルベルグ＝シュルツはそれを連続的に捉えることを否定した上で、このような五段階を提唱したのである。景観は文化的対象、都市は社会的対象、住居は精神的対象、器物は物理的対象という実存の構造と自然的に対応しているためである。

このような諸段階もまた、建築的空間へと写像される。地理学的段階は万里の長城や記念建造物のように、実用的目的によって構造を与えられる。景観的段階における具体化は自然の場所の分節に相当する。ピラミッドは人工の山であり、またバロック式庭園は景観の幾何学化にあたる。都市的段階では中心、方向、区域の三要素の活用がみられる。都市の境界限定、街路、広場などである。これらがトポロジー的關係をもつことはリンチが示している。

住居的段階は内部的で閉合的である。この内部空間であることが建築としての住居の本質である。ノルベルグ＝シュルツはベンチャーリ（Robert Venturi）の「建築は内力と外力が出会うところを生じる」という言葉を引用し、そのことを説いている。そして器物的段階は、ある特別な雰囲気住居に賦与する。

この諸段階はまた、三要素と同様に複合して全体を形成する。本質的に内部空間である住居も都市においては量塊となり、また都市は公共的内部空間であるとともに景観においては高密な図となる。各段階は相互に表象しあっているのである。

さらにノルベルグ＝シュルツの論じた概念として欠かせないのが、「ゲニウス・ロキ」（genius loci）である⁷。地霊とも訳されるこの言葉は、場所に備わった本性という意味をもつ。ノルベルグ＝シュルツは偉大な都市はゲニウス・ロキに特徴づけられて建設されてきたと言い、また建築に求められるのはゲニウス・ロキを読み取り、それを具体化することだと述べる。

これは環境の中に人間がポテンシャルを見出すというギブソン（James J. Gibson）のアフォーダンス（affordance）⁸の概念と通ずるところがあろう。われわれにとって場所はそれぞれ固有の意味づけを有しており、それがあつた種の様相を醸し出すと考えられる。

(2) エドワード・レルフ

レルフとトゥアンは、1970年代にほぼ時期を同じくして登場した。当時地理学の分野では自然科学に裏打ちされた計量的モデルが優勢であったが、それでは人間にかかわる複雑な諸現象を説明できないという限界も見え始めていた。また同時に、機能主義的計画論の破綻も指摘されるようになってきた⁹。

それゆえレルフの著書には、現代的空間に警鐘を鳴らす批判的論調が色濃い。その根拠となるのが、「場所」（place）という概念である¹⁰。

レルフにとって場所と空間は別物である。空間は不定型で触知できず、記述や分析も不可能である。空間は場所の背景にすぎない。しかし場所はわれわれが日常的に知っているものであって、意味の拠り所である。場所には精神があり、そしてその精神は景観において目に見えるかたちで表象される。

では場所の精神とは何か。レルフはそれを、人間の意志とのかかわりにおいて説明する。現象学において意識は志向性をもち意志となるが、場所は、意志の生じる文脈ないし背景であり、また場所自体も意志の対象、意志の焦点である。よって、場所は機能主義者の言うように機能的重要性をもつだけでなく、同時に実存的にも重要なのである。

意志の焦点としての場所は、意志の積み重ねによりその意義を増す。それが愛着である。愛着によって、人間にとっての場所の性質は変化する。習慣や伝統的儀式は愛着のあらわれであり、場所の安定性と継続性を表現する。そのような愛着は共同社会と密接に関係する。共同体と場所は、互いが互いのアイデンティティを補強する。注意すべきは、このような現象がすべて時間的な過程を含んでいることである。つまり場所は現在だけでなく、過去や未来にかかわる。

このような場所観を抱くからこそ、レルフは現代の景観を「没場所性」(placelessness)のものだと嘆くのである。意志の深みを欠き、多様性や意味、アイデンティティを喪失した景観。どこに行っても同じような外見、同じような雰囲気のある都市。そのような没場所的景観に対しレルフは、「ディズニー化」「博物館化」「未来化」「サブトピア」「テレビ道路」「企業化」…といった独自の言葉を使い、舌鋒鋭く攻撃している¹¹。

(3)イーフォー・トゥアン

トゥアンもやはり、場所と空間を峻別する¹²。場所とは安全性であり、愛着の対象であり、休止である。空間とは自由であり、憧れの対象であり、運動である。空間はよく知り具体性を帯びることで場所となり、空間内の運動に休止があるたびに場所となる。

トゥアンにおいても一つの主要なテーマが経験である。経験は現実を知り、それに構造を与える諸様式であるが、一般に感情と思考の複合で表現される。経験は外的世界に向けられる志向作用であるが、同時に世界から作用を受ける受動的な面もある。そして経験は、学ぶことや危機の克服を含意している。

それでは空間はいかに経験されるのか。まず空間は、その中で運動する余地があるものとして経験される。そしてその運動の方向づけのために、自己を中心とした大まかな座標軸が設定される。その座標空間において、形と大きさをもった立体的な諸物を経験できる。経験は常に、運動とともにある。また当然、経験は時間的でもある。運動とは状態間の時間的推移であるからだ。

そうした経験の中で、場所は運動の休止であり、運動の刻みつけである。ときに時間の可視化となる。古いものを保存するのは、時間を保存しているのだ。そうして人は場所に対して愛着を抱くようになる。この考えは、トゥアンの提示した主要な概念「トポフィリア」(topophilia; 場所への愛)¹³へとつながってゆく。

このように、ほぼ同時期に場所についての思索を開始したレルフとトゥアンが、ともに愛着という概念に収斂していったことは興味深い。真の愛着によって、現代にはびこる没場所性を回避し、豊かな空間を築くことができる。ノルベルグ＝シュルツの言うゲニウス・ロキにしても、場所の丁寧な読み取りを要請している¹⁴。彼らの視座は1970年代以降、ローカリズム、都市アメニティ政策、ポストモダンといった動きへと展開された¹⁵。

なお、彼らのセオリーはほとんどが欧米の空間の分析に由来していることに、注意を要する(特にノルベルグ＝シュルツのモデルはヨーロッパ伝統都市の占める比重が大きい。またリンチもフィール

ドはアメリカである)。日本の空間では少し異なった状況が生じている。たとえば日本の聖域は都市の中心に垂直性をもって立つのではなく、都市のはずれに、平面的に隔たった場所にある。住居の内外は一枚の壁で隔てられるのではなく、生垣、庭、縁側、襖といった空間装置によって連続的に仕切られつつ結ばれる。これらは槇文彦が「奥の思想」として指摘している日本の空間特性である¹⁶。またバルト (Roland Barthes) は、東京の中心 (皇居) が空虚であることを、驚きをもって論じている¹⁷。このような例からもわかるように、われわれ日本人は日本人に独自の実存的空間をもち、場所に対する感覚をもっている。

2.2.4 街路論

街路空間についてはさまざまなアプローチで研究が展開されており、第1章でもすでいくつか紹介してきた。たとえばリンチや船越らの研究は認知的観点から、スタンフォードやシールの研究は記述的観点からのもので、ベンヤミンの『パサージュ論』はパリのパサージュについての文学的、社会学的な考察であると言える。

街路の在り方は近現代に入って大きく変わってきている。特に第二次大戦後は、街路は自動車交通に占領され、沿道には均質な建築や派手な商業広告が溢れるようになっており、それに関する批判的考察も盛んである。たとえばシュライバー (Hermann Schreiber) は『道の文化史』において、交易、戦争、開発、国家統治、聖地巡礼といったさまざまな目的でつくられた古代の道から、近現代の鉄道や高速道路に至るまでの道の歴史を綴ることで、街路のもつ本来の意味を問い直そうとしている¹⁸。シュライバーの関心は主に都市間を結ぶ道にあるが、都市内におけるよりヒューマン・スケールな街路のあらわれを建築論的に考察したものにルドフスキー (Bernard Rudofsky) の研究があり、日本では竹山実がそれを試みている。本小節では、この両者の研究について詳しく述べる。

(1) バーナード・ルドフスキー

ルドフスキーはウィーンに生まれ、30歳以降をニューヨークで過ごした建築家・批評家であるが、その論調はアメリカの街路への批判と、ヨーロッパやアフリカ、アジア諸国のバナキュラーな街路への称賛に満ちている。『人間のための街路』¹⁹が出版された1969年当時のアメリカの街路は、自動車による占拠が甚だしく、ごみで溢れ、犯罪も多発している状況であった。さらに時代を遡った19世紀のマンハッタンでは、街路は不浄を極め、放し飼いにされた豚たちが清掃員の役割を担っていたほどだという。

一方ルドフスキーが「西欧文明を覗くためのバックミラー」²⁰と呼ぶイタリアをはじめとしたヨーロッパ諸国では、街路はまるで家の中のように常にきれいに清掃され、多くの街では市中心部への自動車の乗り入れを規制している。キャノピーやアーケード、ガレリア、階段、橋、迷路、美しい舗装、噴水、カフェといった魅力的な要素が散りばめられた街路は、人々の活気やドラマに溢れている。ルドフスキーが「人間のための街路」で企図したところは、こうした批判と称賛を徹底することで、アメリカ人たちの目を開かせることにあった。

ルドフスキーによると、街路とは (平面的な) エリアではなく (立体的な) ボリュームである。周囲の環境と切り離すことはできない。そして母体であり、都市の部屋である。このような言及は、建物を単体としてその内部を快適にするだけでなく、建物同士が呼応し合って、建物と建物の間にできる街路空間の魅力を高める必要性を訴えている。

しかし都市は、そこに住む人々の考えや理想、国民精神およびその欠如をそのまま表わすものでもある。単に空間というだけではなく、表現なのである。自動車偏重のマンハッタンの街路には、商業と競争を重んじるアメリカ人の精神が現出している。都市空間は人々の価値観や記憶によりつくり、

また人はその都市空間において知らないうちに表現を受け取り、価値観を形成する²¹。

またこの本から教えられるのは、街路空間の絶え間ない変化である。筆者は2011年に、ルドフスキーの記述から40年を経たマンハッタンを訪れたが、街路は人々の魅力的な活動に溢れ、車の流れも京都に比べて幾分も整然としているように感じられた（当然これも、筆者の目を通した感慨にすぎないが）。世界的に、特に19世紀から21世紀にかけての都市の変貌は目覚ましいものがある。自動車や高層建築のような技術が導入され、都市人口が爆発的に増加するとともに数々の問題が発生し、また解決が図られてきた。そして、われわれの記憶や価値観も大いに変容してきたのであろう。

(2)竹山実

竹山は、われわれにとっての街路の多様な意味を考える²²。

最初に、訪問者にとっての街路である。見知らぬ都市に最初に訪れた者の意識は、まずその街路に広がる風景に集中される。街路に沿った建物であり、繰り広げられる活動である。街路とは訪問者の関心を都市へと導く通路となり、都市における自らの位置づけを伝えてくれる。ルドフスキーもそうであったように、竹山も街路を表現体として捉えようとする。

表現の受け取り方は訪問者によって異なる。その例として竹山は、夏目漱石とバルトの記述を紹介する。ロンドンに留学した漱石は、その住宅街がどこも整然と立ち並び、同じ構造、建築なので錯乱したことを記す。逆にバルトは、東京において住所表示や通り名が意味をなさず、経験によってその異質性を身につけるしか方法がないと嘆く。同質性の支配する西洋、異質性の支配する日本という粗い区別をすれば、一方から他方への訪問者はそのイメージ構造の違いに戸惑ったのである。

次に市民にとって街路とは、あらゆる出来事のあらわれる場所である。まず、通勤や立ち話、物の売り買いといった日常生活の場である。そして表現体としての強さゆえに、祝祭や暴動の舞台ともなる。そこでの振る舞いが厳しく規制されることもあれば、私有化されることもある。こうした出来事の起こる場という意味での街路を、竹山は「生活体」としての街路と呼ぶ。

さらに街路をつくる立場もある。その視点で竹山は、ルネッサンスやバロックの都市、近代都市や京都などの街路計画を分析している。

このように街路はわれわれに対し、その立場や状況に応じて多様な意味を呈するのである。

¹ コフカ, K. : ゲシュタルト心理学の原理, 鈴木正爾監訳, 福村出版, 1988, p.785.

² メッツガー, W. : 視覚の法則, 盛永四郎訳, 岩波書店, 1968。ゲシュタルトの法則については注釈1の文献など複数の文献で報告されているが、その組み合わせには定説はない。また一個の図形として図になりやすい条件と複数の図形同士でまとまりやすい条件を分けて論じる場合もある。本論で挙げる10の法則は、メッツガーの文献から筆者が抽出したものである。「○○性」という呼び名についても定説がなく、他文献を参考にしながら筆者が決定した。

³ 外的な刺激と内的な感覚の間に一定の関係性があるという仮定。初期的な科学的心理学において優勢であった。

⁴ Lynch, K. : *The Image of the City*, The MIT Press, 1960. 邦訳は リンチ, K. : 都市のイメージ, 丹下健三・富田玲子訳, 岩波書店, 1968.

⁵ ノルベルグ=シュルツ, C. : 実存・空間・建築, 加藤邦男訳, SD選書, 鹿島出版会, 1973。厳密には、ノルベルグ=シュルツはまず五つの空間概念を区別している。これらの体系は具体と抽象、情報量の大小という段階構成を描く。

- ・実用的空間 …肉体的行為の世界
- ・知覚的空間 …心理的、個人的で不安定
- ・実存的空間 …社会・文化的で、安定した環境のイメージを形成する
- ・認識的／建築的空間 …具体的な物理的世界で、思考や創造の対象となる
- ・抽象的／美学的空間 …純粹論理的で、下位の諸空間の記述の手段となる

⁶ ノルベルグ=シュルツにとっての「場所」の概念は、のちに「空間」とその「性格」を包括するものとして捉え直され、彼の思惟の中心的な概念となっている（ノルベルグ=シュルツ, C. : ゲニウス・ロキ 建築の現象学をめ

ざして、加藤邦男・田崎祐生訳、住まいの図書館出版局、1994.)。

7 注釈5の文献，p.66. および注釈6の文献。

8 6. 5. 3 (3) 参照。

9 レルフ，E.：場所の現象学，高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳，ちくま学芸文庫，1999，pp.328-341. (訳者あとがき，高野)

10 注釈9の文献。

11 注釈9の文献，pp.187-292. および レルフ，E.：都市景観の20世紀 モダンとポストモダンのトータルウォッチング，高野岳彦・神谷浩夫・岩瀬寛之訳，筑摩書房，1999.

12 トゥアン，Y.：空間の経験 身体から都市へ，山本浩訳，ちくま学芸文庫，1993.

13 トゥアン，Y.：トポフィリアー人間と環境，小野有五・阿部一訳，ちくま学芸文庫，2008.

14 こういった視点には、場所に力があるとしたアリストテレスのトポス (τόπος；場所) 論との相同性が指摘できる。アリストテレスによると、トポスは物体が占めているが、物体の存在ごとにふさわしいトポスというものがある。たとえば火は上方、水や土は下方といったように。そしてトポスには、その本来のトポスへと物体を動かす力がある (アリストテレス：自然学，アリストテレス全集3，出隆・岩崎允胤訳，岩波書店，1968，pp.141,419.)。

15 注釈12の文献，pp.408-409. (日本語版解説，ベルク，O.)

16 槇文彦他：見えがくれする都市，SD選書，鹿島出版会，1980，pp.197-230.

17 バルト，R.：表徴の帝国，宗左近訳，ちくま学芸文庫，1996，pp.52-55.

18 シュライバー，H.：道の文化史 一つの交響曲，関楠生訳，岩波書店，1962.

19 ルドフスキー，B.：人間のための街路，平良敬一・岡野一字訳，鹿島出版会，1973.

20 注釈19の文献，p.15.

21 都市を表現体として解釈する試みが、都市記号論 (urban semiotics) において行なわれている。たとえばバルトはソシュールの記号論を応用して都市をエクリチュール (écriture；書かれたもの、表現体) として分析している (バルト，R.：記号学と都市の理論，篠田浩一郎訳，別冊国文学・知の最前線「テキストとしての都市」，前田愛編，學燈社，1984，pp.47-61.など)。その他、都市記号論の一連の試みについては門内がまとめている (門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究，東京大学学位論文，1997，pp.156-164.)。

22 竹山実：街路の意味，SD選書，鹿島出版会，1977.

2.3 本研究における都市の様相概念

以上、哲学と様相論、および都市論・空間論を概観した。そこで本小節ではここまでの議論を踏まえ、本研究の依拠する理論的立場を明らかにしておく。様相という概念をいかに捉えるのか、そして特に都市の様相とはどのようなものかということについてのさしあたりのモデルを示す。

2.3.1 様相概念

(1) 既往の様相概念のまとめ

まず哲学の流れから、様相なる語の使われ方を振り返っておく。

アリストテレスをはじめとする論理学上の定義では、様相は存在ないし命題の在り方について、可能態と現実態という観点のもとに構想された概念である。その導入以前は存在とは絶対的なものだと考えられていたが、可能態の考えはものごとの在り様に不確実性ないし可変性を与え、はっきりとわからないこと、過去のことや未来のことへの言及を可能にした。そこには世界を時間的に把握する態度があらわれている。

これはそのままカントの先天的形式のカテゴリーの一つへと継承された。様相は、分量、性質、関係に対し、可能性、存在性、必然性のいずれかの様態を与える。ただしカントにとってカテゴリーは人間の悟性に内在している。様相は主体による対象構成のプロセスに包含され、普遍概念としての扱いであった論理学とは方針を異にした。またロックは、同様の認識論的枠組みの中で、**mode**という語をほぼ「性質」に近い意味で用いた。

可能世界意味論の構築は様相論を飛躍的に発展させた。可能世界というものを約定することで、様相は可能世界の束へと換言される。そしてそれが明快なモデル構造にまとめられることとなった。可能世界は拡張的解釈の余地のある概念で、記憶や予想、雰囲気といった曖昧な世界の表現可能性を含んでいる。

このような様相を、可能態を想定する時間的態度を保持しながらも、空間上に、いや空間における体験の上に展開したのが原である。原にとって様相は、見えがかりや雰囲気、たたずまいといったフuzzyな事象ではあるものの、命題に対する単なる補助的な役割を脱し、確かに中身をもつものとなる。これが空間的展開の成果である。

以上の既往理論の中で常に基調となっていたのは、様相という言葉に何らかの「ものの在り方」といった意味合いが託されていることと、その在り方が決して確実なものではなく、可能態としての不確実性を備えていることである。つまり様相は、きわめてうつろいやすい (**ephemeral**) ものとして理解される。

しかし何の在り方を指すのかは定まっていない。存在論においては客観的命題、認識論においては認識されるものごと、原や門内においては全体的な雰囲気といったように、順次拡張されてきたようにも思われる。これまでそれぞれの哲学者、研究者が打ち立ててきた様相論は、それぞれの主張に応じた「立場」だという一面がある。本研究でも都市の様相を論じるにあたって、どのような立場をとるべきかを考えたい。

(2) 本研究における様相概念

本論でとるべき立場として一つ考えられるのは、存在論的な視点から都市のうつろいを記述することである。人が往来し、風が吹き、建物が建て替わり、産業が勃興する様子を対象として外から眺め、その各エレメントの様相を都市全体の系と関連づけながら論じることは、魅力的な作業であると思われる¹⁾。

しかし多くの都市論者が述べているように、都市を複雑化しているのはわれわれ人間という主体である。都市もうつつろえば、われわれもまたうつつろ。このわれわれの存在を組み込まねば、都市を語るには片手落ちになろう。そこで筆者がとるべきは、原の立場である。自らの時間—空間的体験の中で浮かび上がってくるものとして様相を理解する。そしてそれを都市の中に展開すれば、複雑な都市に対するわれわれの曖昧で可変的な捉え方を、様相という言葉でひとくくりにできるだろう。「このあたりはいい雰囲気だ」、「あの街は随分寂しくなった」、そういった全体的理解について具体的中身や理由に立ち入ることなく語れる概念、それが様相である。

ただし原の様相論にも多少の補足を加えたい。というのは、原の考える様相は、外見、雰囲気やたたずまいなど、すべて初源的なものの在り方を指示している。しかし、それに対する理解、解釈や意味の発生は知覚とともに始まっており、プロセスとしては切り離しえないのではないか。「このあたりはいい雰囲気だ、緑が多いからだろう」、「あの街は随分寂しくなった、昔はよく家族で行ったものだが」などと思慮を巡らすのが日常的な感覚であろう。そしてそのような解釈や意味づけによって、全体的な様相も刻々と姿を変える。

原が記号論や可能世界意味論を好んで用いたのは、意味という曖昧な概念を使うのはなるべく避けたいという考えからであった²。リンチもミーニングの問題は回避している。しかし都市の様相を実際的に解明しようとする、どうもそういうわけにはゆかないように筆者には思われる。

そこで本論では、「われわれが把握することがらの全体的な在り方」という意味で様相を捉えたい。ここでの「把握することがら」は、原の言うような雰囲気やたたずまいを含むのはもちろんのこと、建物や人といった個別の要素に注目することや、そこに意味や解釈を加えることも包含している。ただし重要なのは、様相が指すのはこれら一個一個の意味や要素ではなく、その全体的様態だということである。いくら要素を挙げて描写しても、把握している様相の全体性そのものには到達できない。

(3)現象学と様相

さて上述の定義に非常に近いものに、パースの「現象」がある。パースは現象を読み解くためにものごとの在り方を一次性、二次性、三次性に分類した。本論では様相を、一次性、二次性、三次性の入り混じった全体的な現象として捉えており、パースの現象観と符合する。そしてまた様相は、フッサールらの現象学の捉えようとした現象とも通じ合うところがある。よってここでは、現象学に対する筆者の立場を明らかにしておきたい。

現象学の魅力はまず、人間をその内に含みこんだ世界観にある。すなわち主体（人間）と客体（環境）は不可分である。ここでは人間は「世界-内-存在」として世界に住まう。そして、その住まう仕方が「身体」である。人間は、身体を起点として世界を「志向」し、そこに意識が発生する。

この「世界-内-存在」「身体」「志向」といったキーワードは、本論にとって非常に示唆的である。これらの考えを採り入れると、様相とは世界に人間が身体をもって定位し、それを志向するときに生じるものだと考えられる。先の定義に照らすと、われわれが把握するのは「世界について」であると同時に「世界において」のものである。そこでは身体そのものも世界に含みこまれ、そして身体の在り方が様相の把握の仕方にある種の基準をつくり出すであろう。また志向性は様相が世界を受動することに留まらず、われわれが自身の様相にはたらきかけ、把握の仕方を変えることをも可能にする。

また現象学では方法として、形而上学や先入観、一般的常識をいったん括弧に入れる「現象学的還元」を行なう。まさに実感していることから世界を考えようという視点は、本研究における様相観と符合する。

しかし、先入観を取り外した実感というものが本当にわれわれの日常に実感していることかという、そうではないのではなからうか。つまりわれわれは、先入観や常識を目いっぱい抱えた状態で、

実感しているのだ。それらを考慮に入れないでは、本当のわれわれの実感には迫れないだろう。

フッサールらの現象学は、厳密学たらんとしている³。真理の体系である世界を、ラディカルな思索によって捉えようとしている。しかし本研究はそうではない。すべては誤りを含みうるとするパースの可謬主義、あるいは客観的真偽を問わないジェイムズのプラグマティズムに従う。ある人が暑いと言い、ある人が寒いと言ったとする。そう思ったことは各人にとって真であろうが、絶対的真偽については判別不可能である。様相という意味での真偽は各人によって相対的（かつ暫定的）に決定される。様相は、意味が固定化されないことと関係している。

これに関してはベルクソンの世界観も興味深い。彼の言うイマージュとは素朴な常識が信じるところの物質であるが、宇宙の全体すなわち客観的なイマージュの体系と、私の身体を中心とした主観的なイマージュの体系がともに存在するとしている。われわれの実感に近い世界観である。

現象学は、厳密性を求めさえしなければ開かれた面もある、魅力的な思想である。実際、2.2.3で挙げたような現象学的空間論が展開されており、本研究も、広い文脈では現象学的態度をとっているとえよう。

(4)われわれと世界

次に、様相が生じるプロセスについて考える。

世界は、空間の時間的な流れとして解釈できる。この両者の構造に類似性があることはリンチが指摘しているが⁴、大きな違いは、時間には過去から未来へ向かう絶対的な方向性があることである。未来は可能性の海であるが、ベルクソンの言うようにその未来をたえず現在が侵蝕し、過去へと送りこむ。こうして現実世界は次々と確定してゆく。たとえば今われわれは、「織田信長の存在しなかった可能世界」を自由に想像することはできるし、そうなることもありえたが、実際には織田信長は存在し、彼のいる世界が現実世界として確定したのである（われわれの信じている史実が正しい限りは）。

このような時間-空間モデルの中に人間も動物も、都市も鉛筆も、位置づけられる。そして様相は、時空間世界の中に人間が、その身体を通じて定位するときに生まれる。時間・空間・人間に規定される様相の姿である（図2-7）。

これはちょうど、可能世界 w 、時点 t 、場所 p 、行為者 a からなる指標 $i=(w, t, p, a)$ に相対的に真理値が決定されるという、モンタギュー文法の考え方に一致する。様相がどのようにあらわれるかは可能世界、時間、空間、人間により異なり、様相は必然的に可能態となる。ここで可能世界意味論における現実主義の立場をとれば w は基本的に現実世界であるが、記憶や空想の世界を構想することもできる。だから実は、様相は図2-7の世界像を飛び出して把握することさえできる。

では彼が見ている現実世界とはどのようなものか。主体の周りに広がる世界について、主客二元論的立場では一般に、環境（environment）という言葉があてられる。しかし、人間が世界に定位すると、世界それ自体もすでに物自体の体系で記述される客観的世界ではなく、彼による不確定性を抱えた世界へと変貌している。またその世界を見ているのは彼であり、同じ環境と訳される語でもどちらかというときsurroundingsに近い見方となる。

これをより正確に表わしていると思われる言葉は、生物学者ユクスキュル（Jakob von Uexküll）の「環世界」（Umwelt）である⁵。環世界とはある主体から眺めた世界であり、その身体を中心とし

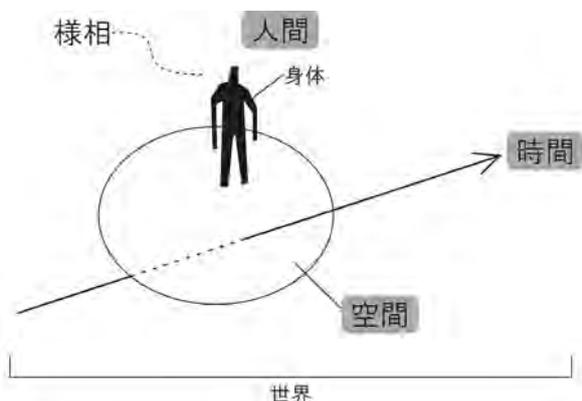


図2-7 様相発生の基本モデル

て形成される。人間にとっては食事と団欒の場であるダイニングルームも、ハエの環世界ではただ餌と宿敵のみがある空間である。またいかに美しく整えられた都市も、喉が渴いている人にとってはカフェや自動販売機を探して歩くだけの世界となろう。

このように、環世界は主体によって、また主体の現在の状況、目的や願望によってその意味合いを異にする。それは現象学という志向性と関連する（特に目的や願望は能動的な「作用の志向性」にあたる）。この志向性をもって、人間は環世界を経験し、そして様相を把握する。

(5) 経路

このような世界を経験を理解するために、原の提案した経路という概念装置を導入する。経路は、人間がそれに沿って横断する道である。経路は始点と終点をもつ一本の有向グラフで表現されるが、それが指示する内容については実に柔軟性に富む。

まず原初的には時間的経路である。時間の過去から未来へ向かう運動を、経路が指し示している。人間がひとところにたたずむとき、時間は朝から夜へ、また朝へと過ぎてゆき、春の次には夏がやってくる。次に空間的経路である。たとえば人間が歩いて家から職場へと移動するとき、彼が描く道は一本の経路となる。また現実的な時間・空間だけではなく、可能世界間を横断する経路を構想することもできる。ある可能世界から、到達可能な別の可能世界への移動はまた経路である。記憶をたどることも、空想に没入することもまた経路である。

このうち空間的経路については、時間を止めて空間においてのみ移動することはできないから、空間的経路の横断は実際には時間的経路をも伴う。可能世界間の経路にしても、記憶や空想という実際の行為を考えれば時間的である。つまり時間的経路は、すべての経路に関係する根源的なものであると考えられる。そして後戻りしないという時間の制約により、様相は本質的に一回性のものとなる。

この経路は、様相のうつろいを理解するための概念モデルになっている。まず経路は様相を束ねる。様相とは時間的に不断に生じている曖昧な現象であるが、経路上に連続する様相が束ねられるという考え方によって、様相にある程度の構造をもたせることができる。いわばゲシュタルトの概念を時間上に展開したものである。またこの束ねるという作用は経路の連続性、そこであらわれている様相の類似性に依拠している。

さらに様相把握は、経路上で連続的でありながらも、実際にはある種の不連続点を含む。この不連続性は、われわれが様相を把握するためのキーになる。たとえば街路を歩く中で「賑やかになったな」と感じる時のことを考えよう。静かな場所では人は、賑やかさについてはほとんど考えていないだろう。そこに人が増え音楽が鳴り始めると、「賑やかになったな」と思う。しかしその後同じような賑やかさが続くと、その人はまた賑やかさのことは忘れてしまうだろう。様相は、静かだとか賑やかだとかいう世界の状態を指すのではなく、音を知覚している感覚器のはたらきを指すのでもなく、その世界で人が「賑やかになった」と思うところに依拠するものである。この過程では「なった」の部分が重要であり、その「なった」ときに特に、様相がはっきりとあらわれるのである。

このことを、差異のある領域の間の経路による横断を表現した原のスケッチ（図2-4）を一般化すると、図2-8のようなダイアグラムを描くことができる。世界 W_i , W_{i+1} , …と表現されているのがそれぞれ類似性により束ねられた領域である。それぞれの世界においても確かに何らかの様相は生じているのであるが、領域感の差異こそが、特に様相を際立たせることになる。

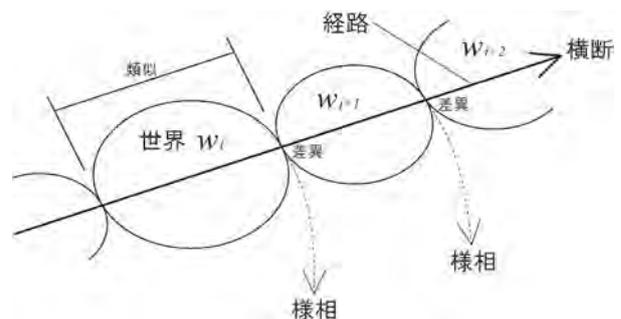


図2-8 経路の横断による様相の把握

ここでの経路が横断しているのはやはり第一義的には時間であるが、先にも述べたように空間にも、可能世界のいずれにもとれる。このとき楕円で表わされた領域はそれぞれ、時間軸上で異なる世界、空間的に異なる世界、そして別の可能世界というようになる。

(6) 記憶

このモデルは時間や空間を表わしてはいても人間を含んでいない。人間はこのような世界からどのように差異を見出しているのだろうか。静かな世界と賑やかな世界、二つを横に並べて見比べているのだろうか。そうではない。人間は世界の中に在り、そこを時空間的に移動している。賑やかだと感じる世界にいるときは、静かな世界は記憶の中にあるのみである。

ここに、門内の指摘するような記憶や予想のメカニズムが必要となる。ベルクソンも、記憶と知覚とが常に混合しあっていると述べている。このメカニズムは様相のモデル化に対して決定的な役割を果たす。

記憶や予想を理解するために、知識工学者ミンスキー (Marvin Minsky) の提唱した「フレーム」(frame) という概念を導入したい。フレームとは「形にはまった状況を表現するためのデータ構造」であり⁶、記憶として蓄えられている。われわれは、常に記憶されているフレームと目の前の状況との照合をしながら何かを感じ取り、考えている。その意味でフレームは過去の記憶であると同時に未来への予想ともなる。そしてその予想が目の前の世界と一致しなかったときに様相ははっきりと把握され、同時にフレームは修正され、より役に立つ知識構造となってゆく。

先ほどの例で見ると、まず静かな世界ではそれに対応したフレームが、無意識のうちにつくられている。そして賑やかになりはじめると、静かだというフレームと賑やかな世界との差異によって様相が把握される。しかしこのときに把握した様相がまた記憶へと流れ込むとフレームが書き替えられ、賑やかなことはやがて意識しなくなってしまふ。このように、様相発生の契機は世界間の差異ではなく世界とフレームとの差異なのである。すると先ほどの図2-8は、図2-9のように発展させることができる。

なおこのフレームの問題については、第6章でより詳細に論じることとする。

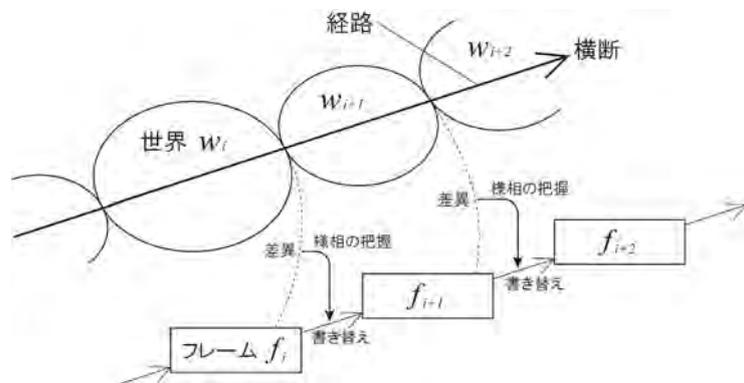


図2-9 経路モデルのフレームによる発展

2.3.2 都市の様相

これまで示してきたのは様相概念の一般論に近く、日常会話や音楽鑑賞などの場面でも適用できると考えられる。本小節では、特に本研究が対象とする都市の様相の特質について考察する。

なおここでは、都市の中でもとりわけ街路における様相を重点的に扱う。本論の考察の直接の対象だからである。ただ本論も、街路における様相を手掛かりに都市全体の様相を解明しようという意図をもっている。

(1) 高度な複雑性

街路にはさまざまなものが表象している。街路沿いには建物が立ち並び、地形や植物、看板や駐車

場といった要素が配されている。街路の上にはわれわれと同様に歩く人がおり、走る車があり、路上にはマンホールが、上を見上げれば空が見える。また街路では、雑踏の音や虫の声を聞き、民家の夕食のにおいを嗅ぐこともある。つまり街路とはさまざまな事物がそこに居合わせる複雑な空間である。そこに身体をもって定位したとき、われわれは様相を把握することができる。

また、ルドフスキーや竹山が指摘しているように、都市は表現体である。一つひとつの建物や看板にはそれをデザインした人の志向性や願望、あるいは社会のシステムや価値観が表現される。そしてさまざまな作者によるさまざまな意志をもった表現が混じり合い、都市という表現体は極度に複雑なものとなっている。特に様式が無力化し、都市をつくるシステムが多様化した現代都市においてはそれが顕著である。

(2)空間的経路性

街路は経路である。都市の中を線状に伸びていっており、われわれはそれに従って歩く。歩みを進めるごとにシーンは展開し、様相はこの経路に沿って次々とあらわれることになる。そしてまた、われわれのフレームも次々と変化する。先ほど、経路は根源的には時間的であると述べた。しかし同時に都市における街路の体験は、必ず空間的経路性 (spatial routeness) をもつ。会話や音楽鑑賞における様相把握との大きな違いである。

このように経験としての街路は一本の経路をなすが、実際の街路は平面的あるいは立体的に展開し、分離や交差を繰り返している。人間の街路経験は常にこの中から特定の経路を選択して行なわれているのであるが、その経験を繰り返し記憶を重ねることで、やがて都市を面として捉えることができるようになる。この面構成と、上述した作者の多様性が様相の複雑性をいや増し、単一作者でシーケンスも限定されている音楽や文学のような表現体とは大きく異なってくる⁷。

(3)公共性

前小節のモデルには時間・空間とともに人間が含まれているが、この人間としては基本的に個人を想定してきた。様相とはそれぞれの人に固有に訪れるものであって、すべてを他者と共有 (share) することはできない。様相のうちいくばくかが他者と共通している (in common) という方がより正確な表現だと考えられる。

しかしなお、本研究にとって様相の共有というのは興味深いテーマである。なぜなら都市や街路は、誰もが体験することのできるきわめて公共性の高い空間だからである。先に述べた表現体としての街路という視点からも、都市は多くの人々が何らかの意志を表現し、またそれを把握する場なのである。

様相は決して空間に付随するものではない。その立場からすれば、「都市の様相」 (urban modality) ではなく「都市における様相」 (modality in cities) という語の方が正確であろう。しかしあらゆる都市にはある程度共通の様相のあらわれ方があるはずであるし、また各都市の中のそれぞれの場所においても、たくさんの人が訪れる中で彼らが共通して抱くような様相があるだろう。つまり、都市における様相にはある種の傾向 (tendency) が見出せると考えられる。このような属人性を越えた、都市という場所と強い関係をもつ様相を捉えるとき、それを「都市の様相」と呼ぶこととしよう。本論で探究するのは、このような公共的な様相である。

公共的な様相を知るためには、多数の人々の捉える様相を重ね合わせ、その中でどのような傾向が見られるかを分析する手段が有効である。リンチらも行なった方法で、実証主義の基本的な考え方である。本論でもこの重ね合わせによって、都市の様相に迫りたい。

以上が本論の依って立つ基本的な様相観である。その一面は哲学的、理論的な立場であり、もう一面は都市に対する実践的立場であった。本研究はこれらの立場の融合を目指す。なんとなれば都市の様相とはあまりに全体的、曖昧であり抽象的思索を必要とする一方、われわれの生活における実際的なあらわれでもあるからである。

よって本論では、様相が曖昧であり可能態であるという見方をしながらも、ときにそれを定量化し、分析することも辞さない。これは、論理実証主義的科学観と現象学的世界観との間のあの相克の、中道を行くことに相当する。そして、本章でも取り上げたようなさまざまな分野の知見を総動員して、都市の様相を解説するのである。

その解説のための屋台骨となる方法が、「経路歩行実験」である。続く第3章ではこの実験について詳述しよう。

¹ 1. 3. 4で挙げた原研究室の取り組みがこれにあたる。原は本章で述べたような様相論的立場をとりながらも、都市そのものの物理的記述を行なうことで様相に迫ろうとしている。

² 原広司：空間の文法「予定」、GA JAPAN, vol.24, A.D.A. EDITA Tokyo, 1997, pp.116-117.

³ メルロ＝ポンティ, M. : 知覚の現象学, 中島盛夫訳, 法政大学出版局, 1982, p.1.

⁴ リンチ, K. : 時間の中の都市 内部の時間と外部の時間, 東京大学大谷幸夫研究室訳, SD選書, 鹿島出版会, 2010, p.160.

⁵ ユクスキュル, J.・クリサート, G. : 生物から見た世界, 日高敏隆、羽田節子訳, 岩波文庫, 2005.

⁶ ミンスキー, M. : 知識を表現するための枠組, コンピュータービジョンの心理 第6章, ウィンストン, P.H.編, 白井良明・杉原厚吉訳, 産業図書, 1979, p.238。なお可能世界意味論のモデル理論におけるフレームとは異なった用法である。

⁷ リンチ, K. : 都市のイメージ, 丹下健三・富田玲子訳, 岩波書店, 1968, p.1.

第3章 経路歩行実験

本章では、行なった「経路歩行実験」(walkthrough experiment)について示す。まず3.1では様相論に基づく実験の構想について記し、次の2節で実験の詳細と得られたデータについて述べる。

3.1 実験の構想

3.1.1 様相の記録

第2章で打ち立てたモデルを検証しさらに発展させ、実践的な知見を得るためには、データが必要である。しかし探究の相手は曖昧模糊とした様相である。データを得るために考えるべき点が二点ある。一点は、いかにわれわれの把握する様相に近いデータが取れるのかということ。そしてもう一点が、可視化したり定量化したりできるようなデータにしなければならないということである。

まず限りなく様相に近づくために、時間・空間上への人間の定位によって様相が生まれるとするモデルをそのまま適用し、都市空間に人をおろすことを構想した。そして、経路に沿って人を歩かせてみる。普段われわれが街をぶらぶらと歩いている状況を、そのまま再現するのである。しかも多数の被験者を歩かせることでデータの重ね合わせを可能とする。なお今後、選定した経路を特に「ルート」(Route)と呼ぶ。

被験者は各々ルートを歩きながら、捉えた様相についてその場で用紙に記す。これは原の言う「記録」(record)¹である。記録は様相の可能態としての性質を奪い去り、固着させる。本論ではこの歩きながら行なう記録を「様相表現」(modal expression)と呼ぶ。

様相表現は何の縛りもない自由記述であり、SD法のような研究者側が用意した指標群による評価と比べ、より生身の様相に近いデータを与えることとなろう。また特定の主体によって記されたものであるが、特定の時間、特定の場所にも結びつけられている。つまり言葉が時空間上に断続的に言葉が定位している。これは、会話や文学などの一般的なテキストの読み解き研究とは大きく異なる本論の特徴である。

ただし自由記述はかなりの悪構造データで、読み解きは一筋縄にはゆきそうにはない。可視化と定量化のためにも、経路の歩行プロセスに何らかの構造を与えるデータが必要である。そこでルートを歩き終わった後にも、ルートを振り返って記録を追加してもらうことにした。フレームに記憶されている様相を追体験し、それを要約してもらおうという試みである。

まずは「領域分割」(area division)、これはルート中で特に様相に大きな変化が見られた場所で経路を区切るといふものである。この分割の考え方はもちろん、異なる世界を経路に沿って横断してゆくという図2-8のモデルと対応しており、連続した経路を分節して理解することにつながる。続いて分割によって生じた各領域に対し、「領域評価」(area evaluation)、「領域表現」(area expression)を記入してもらう。領域評価とは実験者が提示する7指標による評価であり、大まかな様相の定量化に資する。領域表現は被験者が自由に言葉を使って領域の様相を表わすもので、その場で捉えた様相表現よりも広い範囲を要約するという性質がある。

以上のように、実際の都市空間に多数の人を歩かせることと、その場で把握した様相の記録とそれに構造を与える要約的記録の両方を得ることが、経路歩行実験の骨子である。

なお必要があれば、様相表現と領域表現を合わせたものを「様相・領域表現」と総称する。

3.1.2 言葉と様相

ここで一つ考えなければならないことがある。言葉による様相の記録は、はたして本当に様相に近づく手段として有効なのであろうか、ということである。

様相とは、途方もない全体性を指す。一方、言語体系は本質的に有限性を内包しており、言語を用

いて様相のすべてを説明しきことは不可能である。言葉は様相の一断面を示す、表現のツールに過ぎない。しかも言葉は一気に何万字も書くことはできず、ただ一文字ずつ手を動かして書くしかない。必然的に、記録されるのはある程度以上の強い印象を受けたときに限られ、ここに閾値が存在する。

ただしそう認めたとしても、自由記述による記録には大きな利点があると考えられる。というのも、この方法によって被験者の把握した様相のうち強い印象の部分、いわば「様相の上澄み」だけをうまくすくえるのだ。もし様相のすべてが言葉になるとしたら、その分析はほとんど不可能となろう。しかし記録という方法はその有限性により、無限にある様相の断面をうまくふるいにかけてくれる自動抽出装置になっている。

そしてまた、抽出のおかげで定量化もできるし、さらに多くの人の言葉を重ね合わせることが可能であり、それによって共有された様相に近づけることができる。閾値は量的にも質的にも個人差があると考えられるが、重ね合わせによって解消できる。このように、確かに言葉はツールに過ぎないのであるが、そのツールは非常に有用な一面をもっているのだ。

ただし、言葉で記録することそのものが様相の把握の仕方を規定している面は考慮すべきである。使用する言語によって認識や思考が異なってくることは、言語学において「サピア-ウォーフ仮説」(Sapir-Whorf hypothesis)²として知られている。実験で記録される様相は日本語の体系に対して相対的なものであることに注意が必要である。

3.1.3 実験という状況

もう一点懸念すべき点がある。実験という特殊な状況が、被験者の様相把握を歪める恐れがあるのだ。無理に何かを感じようとしたり、自分が感じていることをどう言語化するかを意識的に考えたりしてしまう。実際「交通量多かった。ふだんはそんなに変化に気づかなそう」(被験者220)という言葉も見られた。

ただしこれも、重ね合わせることである程度の解消が可能であると考えている。また1～2時間ほどかけて長いルートをじっくりと歩いてもらうことで、記録するという行為自体も身体化し、ある種の自動記述 (automatic writing)³のような状態を実現することができる。この手法によって多くの記録を集めることで、それをもとにした広い知見を得ることができる。

なおこの実験の方法は、様相の解読という目的以外にも、記録しながら歩くという行為が都市のより深いレベルでの理解につながり、ひいてはデザインへの貢献につながるという期待がある⁴。

¹ 原広司：様相と経路，スペースデザイン，第352号，鹿島出版会，1994，pp.57-58.

² ウォーフ, B.L.: 言語・思考・現実, 池上嘉彦訳, 弘文堂, 1988. および 松本曜編, 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修: 認知意味論, シリーズ認知言語学入門 第3巻, 大修館書店, 2003, pp.251-253.

³ あたかも自らの意識とは無関係に動作を行なうことを指す、シュルレアリスム (Surréalisme) の手法である。この手法によって生み出された代表的な作品に、ブルトン (André Breton) の文学作品『溶ける魚』(シュルレアリスム宣言・溶ける魚, 巖谷國士訳, 岩波文庫, 1992.) がある。

⁴ リンチは、1.3.2で取り上げた実験手法が研究の他にもデザイナーのトレーニングや、普通の人々がより環境を感じ取るための教育の仕組みになると述べている (Lynch, K. and Rivkin, M.: A WALK AROUND THE BLOCK, LANDSCAPE, 1959, p.24.)。

3.2 実験の詳細

3.2.1 3つのルート

(1) 京都と3つのルート

本論は経路歩行実験に基づいた研究手法のパイロットケースとなるが、その実験の対象地として京都を選定した。その主な理由は以下の四点である。

- ・ 古都でありながら現代都市でもあるため歴史の重層により街並みはさまざまな表情を見せ、街路の経験に多様性がある
- ・ 有名な観光スポットが各所に存在し、都市全体としても一種独特の社会的イメージが託されており、様相と記憶（フレーム）との関連性の分析が期待できる
- ・ 直交グリッドを基本とする街路構造や三山に囲まれた地形など都市構造が比較的明確で、これと様相との関連性の分析が期待できる
- ・ 筆者自身が京都を生活と研究の拠点にしており、その身体化された知識はルート選定や分析に効果を発揮する

さらになるべく多様な知見を得るために、歩行経路はある程度のバラエティをもっていることが望ましい。その際に都市化の度合いによって様相が大きく異なることが予想されたので¹、京都市の中から都市化の度合いが異なり、またさまざまな興味深い場所を含むような3つのルートを、十分な予備調査を踏まえて選定した。

図3-1は3ルートの位置と概形を示している。ルートⅠは大通りの四条通を東進するもっとも都市的なルート、ルートⅡは住宅地主体であるが文教地区や伝統的街並みなどを含む。そしてルートⅢは自然豊かな嵯峨の地を通っており、嵐山や鳥居本という観光地も沿道にある。次頁以下で、それぞれのルートについて詳しく述べる。

なおルートの長さは日常的な歩行のスケールの範囲内で、被験者の心身の疲れも考慮し、4km程度を基本とした。ただしルートⅠは一直線に変化に乏しいことや、人混みの中を歩き続けるストレスを考え、他の2ルートよりも距離を短く設定している。

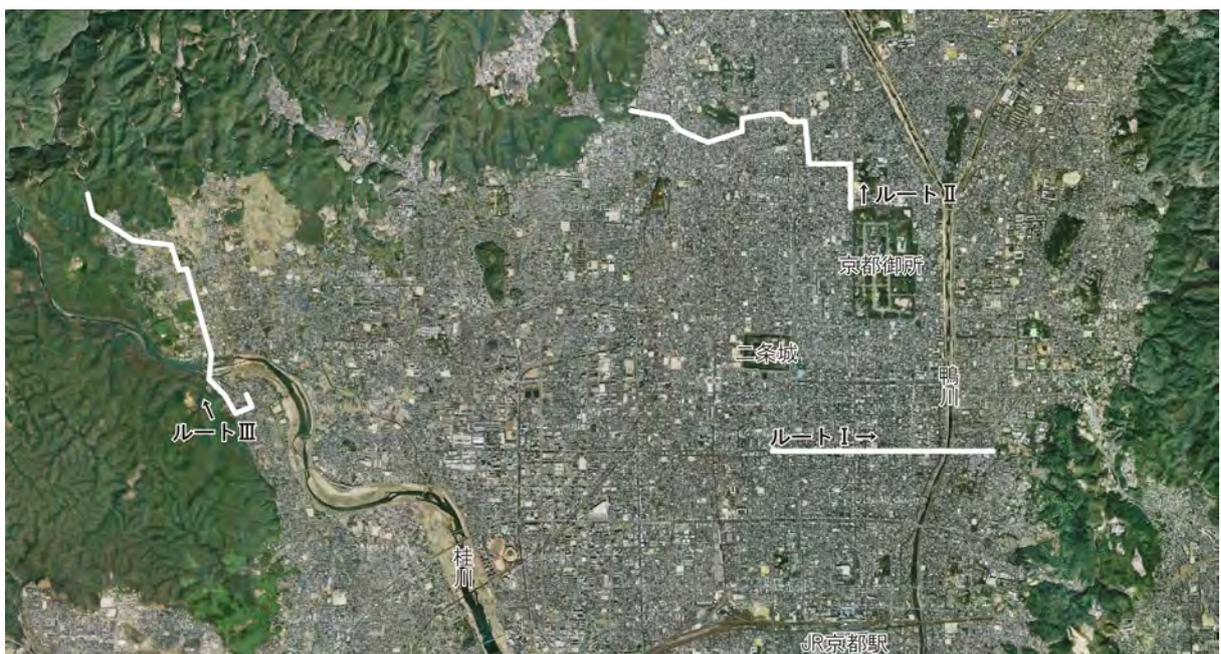


図3-1 各ルートの概形と位置関係 (googleマップ (<http://maps.google.co.jp>) より作成)

(2)ルート I

四條大宮の交差点（京福電鉄四條大宮駅前）から、四條通の南側歩道を東に進み八坂神社に至る、約2.7kmのルートである（図3-2²⁾）。3ルートの中でもっとも都市的なルートであり、烏丸通周辺のオフィス街、河原町通周辺の繁華街、祇園の観光地などを含んでいる。また、街区の内側に入らず常に「ガワ」³⁾の部分の大通りを歩くこと、ルートが一直線であることも特徴である。

もっとも商業的な開発の進んだ都心部の大通り沿いの様相を調べるのがこのルートを選んだ主な狙いである。四條通に沿ってあらわれるオフィス街、繁華街、観光地などの個性的な各地域の把握のされ方はどのようなものかを調べたい。またこれらの各地域には平安京以来の長い歴史があり、その影響についても検討したい。

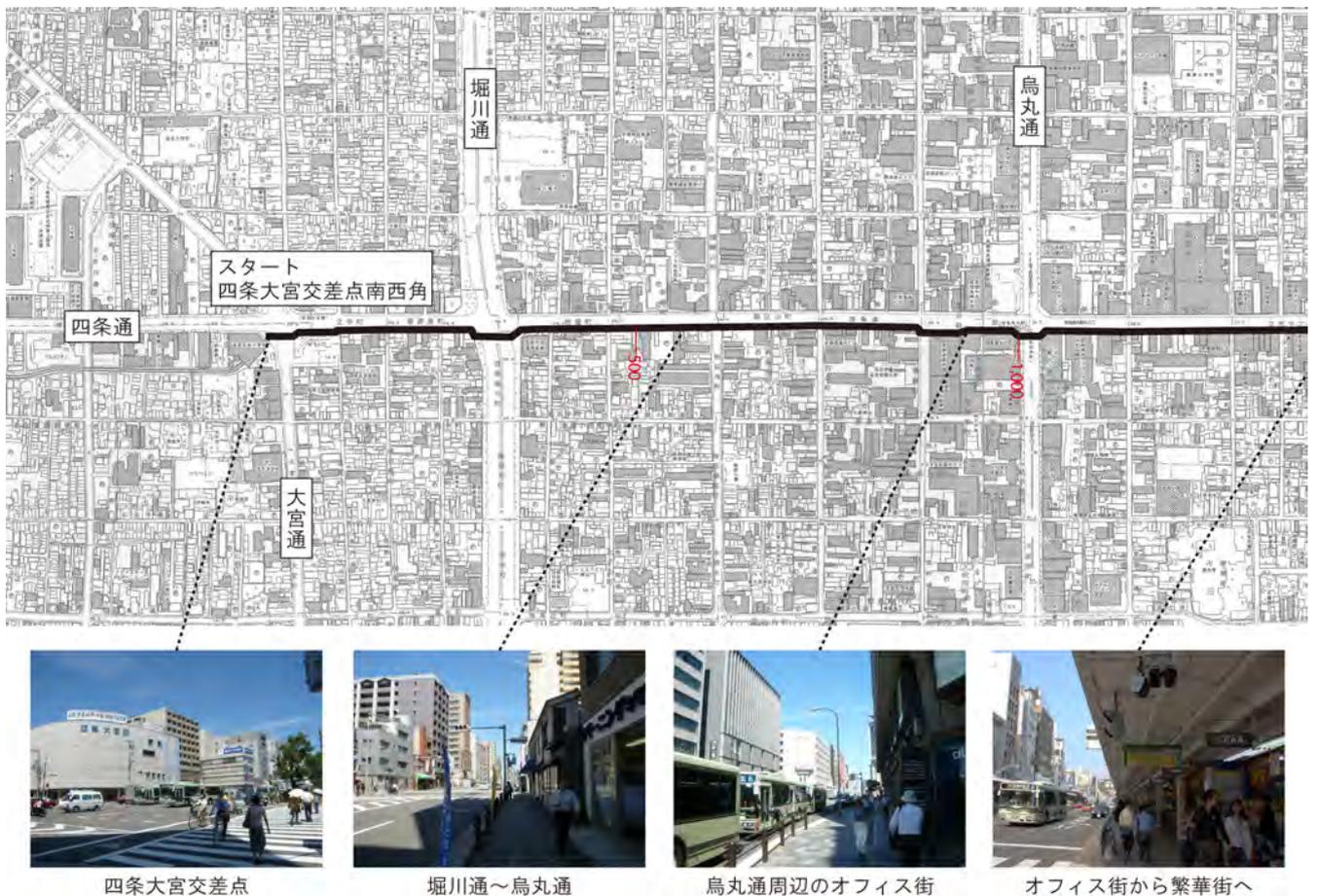
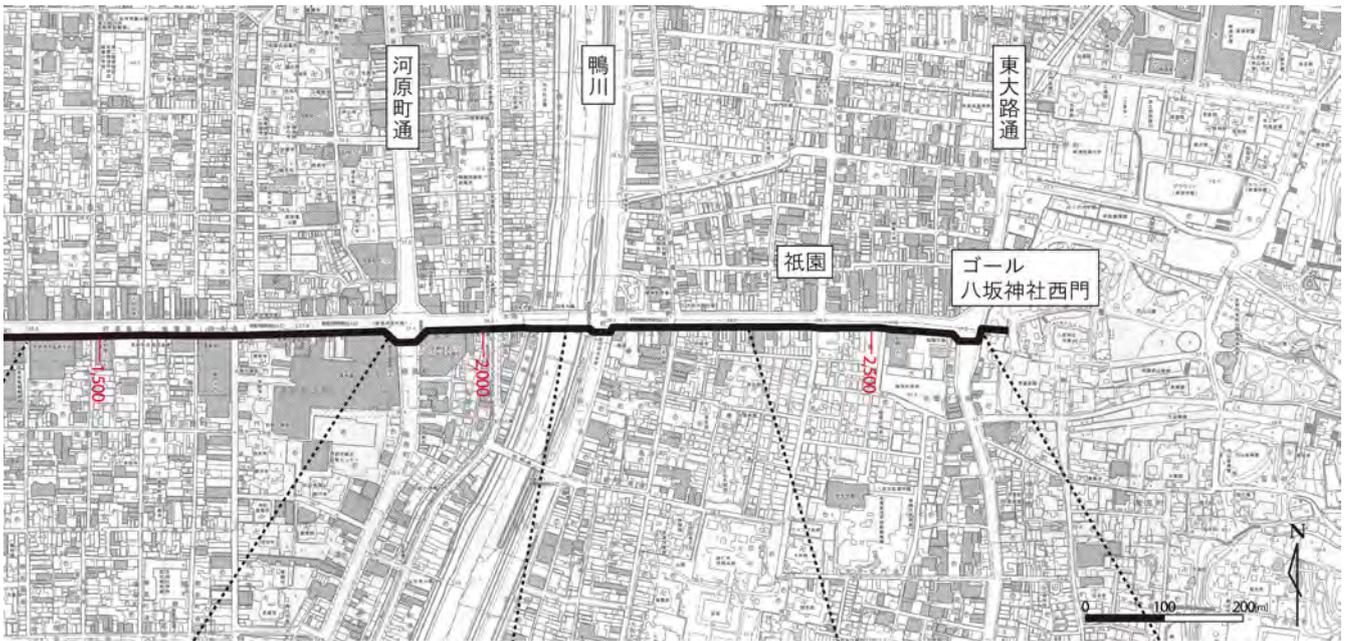


図3-2 ルート I（都市計画基本図（京都市都市計画局発行、



四条河原町交差点



四条大橋



祇園のアーケード下



八坂神社

京都府立総合資料館蔵、2004～2011年⁴⁾より作成)

(3)ルートⅡ

烏丸今出川交差点から烏丸通をしばらく北上し、その後は街区の中を折れながら進み、金閣寺の東の入口に至る約4.0km（図3-3）。同志社大学周辺の文教地区、茶道の家元が並ぶ小川通、金閣寺への参道などを含むが、全体的には住宅地が主体となっており、都市化の度合いは中程度である。

新旧の住宅が入り混じりながら密集するという日本の都市の典型的風景における様相を調べるとともに、住宅と商店、住宅と寺社、住宅と学校といった融合についても探究するためのルートである。また、入り組んだ路地や坂道、「山アテ」の構図をとる通りなども含めてルートを設定した。

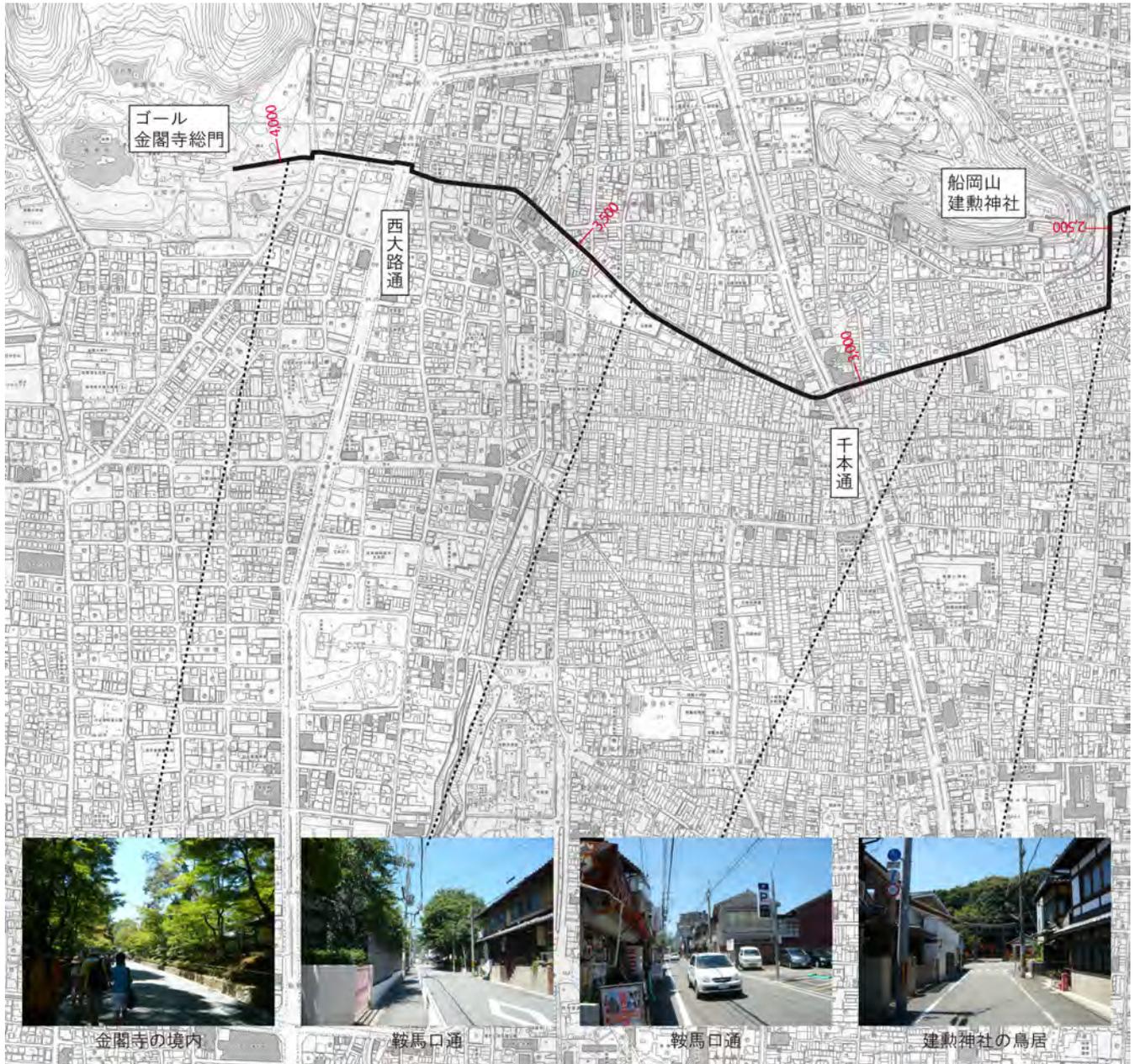
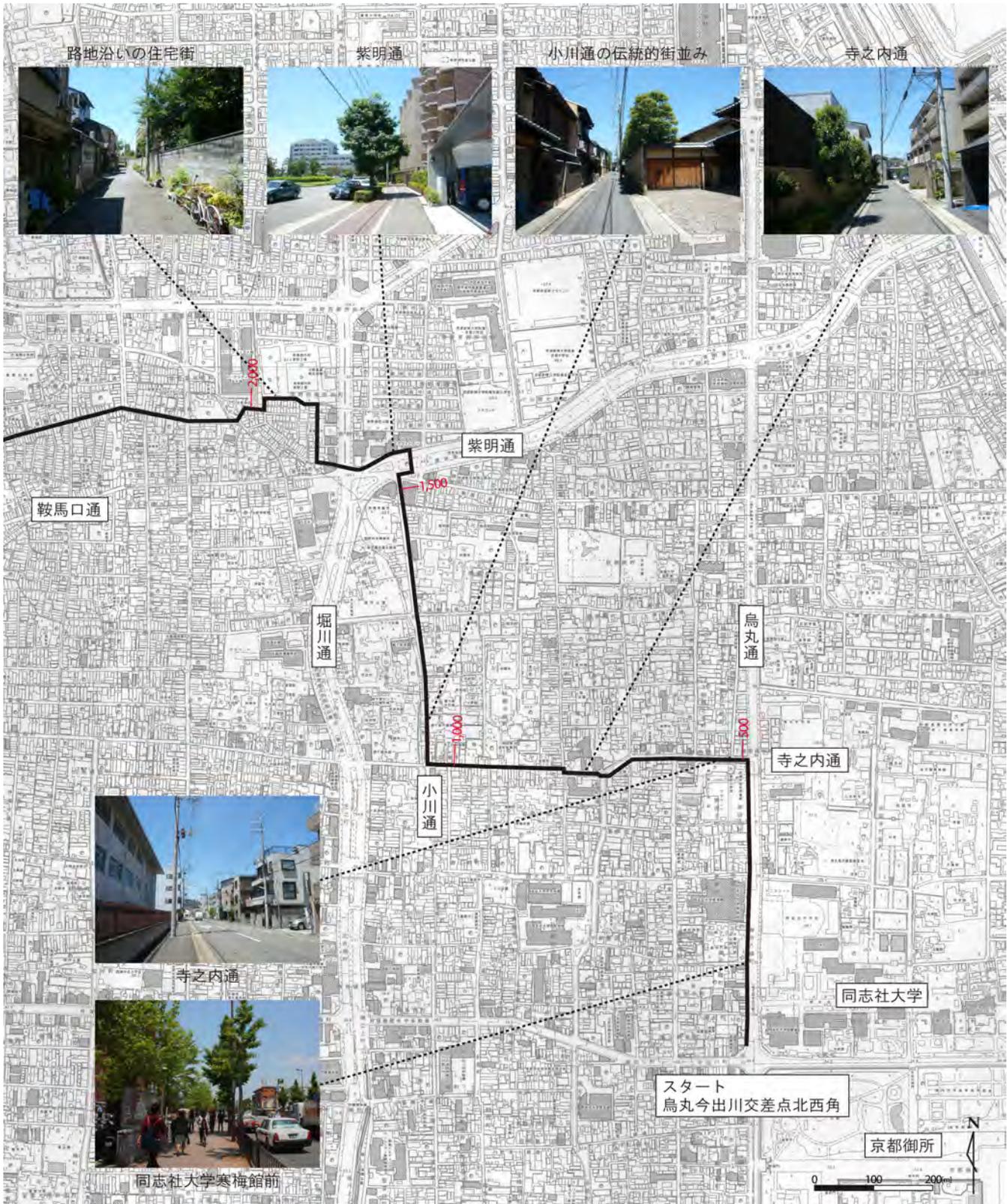


図3-3 ルートⅡ（都市計画基本図（京都市都市計画局発行、



京都府立総合資料館蔵、2010～2011年)より作成)

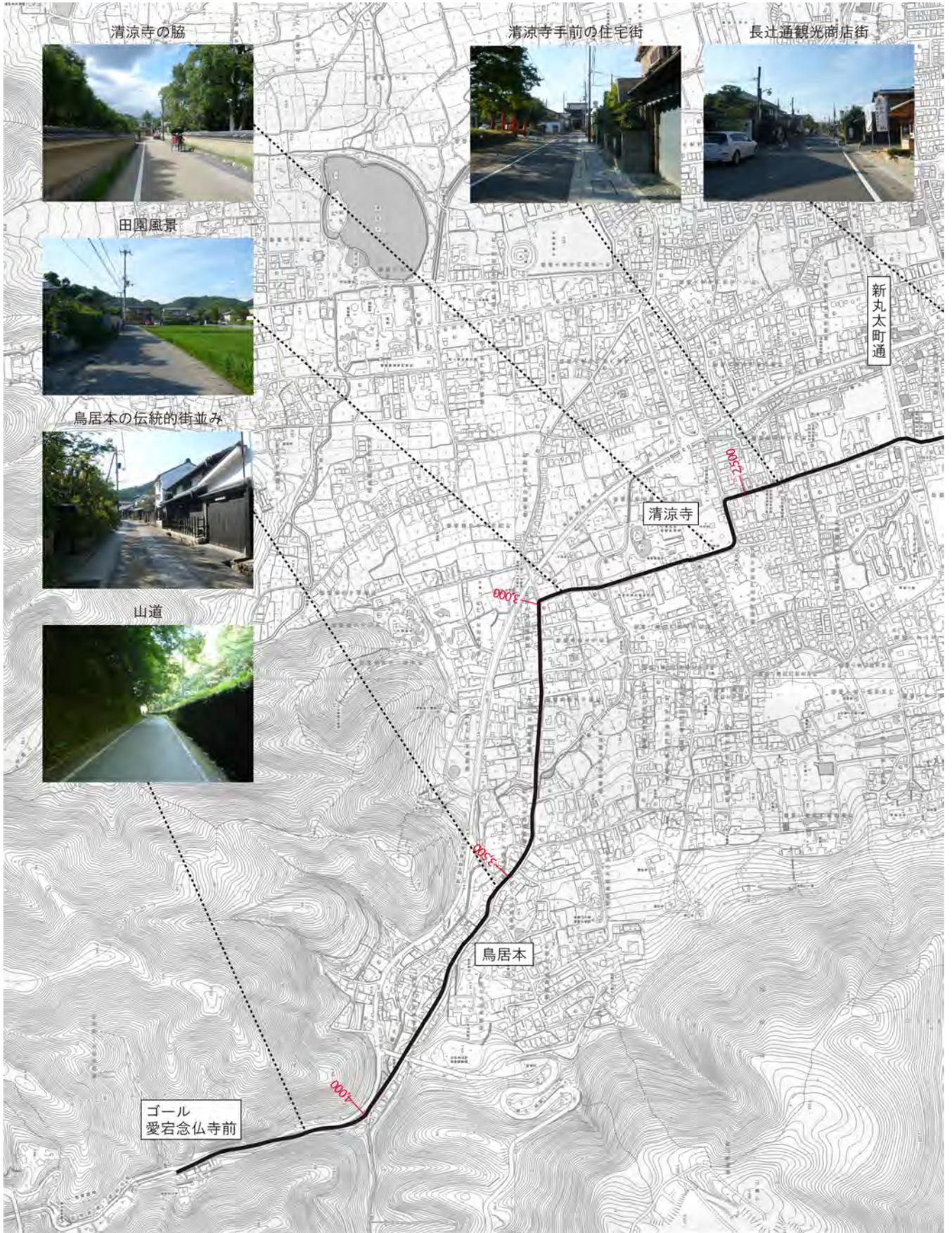




図3-4 ルートⅢ（都市計画基本図（京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵、1997年～2011年）より作成）

(4) ルートⅢ

阪急電鉄嵐山駅をスタートし、住宅街をいったん南下したのちに北上し、渡月橋や嵐山の観光地を通り最後は鳥居本に至る約4.3kmのルート（図3-4）。3ルートの中でもっとも都市化の度合いが低く、中には田畑や山林も含み、住宅街も概ね閑静なものである。

都市の外縁部で、間近に迫る山々、美しい眺望が印象的な桂川⁵など自然環境が大きな意味をもつ地域における様相や、またそこにおける観光地のあらわれ方を探ることなどがこのルートの狙いである。

3.2.2 日程

実験は2007年の7月下旬から8月上旬にかけて行なわれた。ルートごとの日程は以下の通り。

ルートⅠ：2007/8/6(月), 7(火), 8(水) いずれも15:30～

ルートⅡ：2007/7/24(火), 26(木), 30(月) いずれも10:15～

ルートⅢ：2007/7/29(日), 8/4(土), 5(日) いずれも15:30～

人通りや気象状況などの条件をなるべく合わせるために、3ルートの実験日程はそれぞれ平日の午後、平日の午前、休日の午後というように統一した。8/26の実験中に一時雨が降ったがそれ以外は天

候に恵まれ、晴れ～曇りの気象条件であった。気温は概ね30度前後であった。

厳密に言えば全被験者のおかれた時間・空間は、気象条件に人の多さなどの諸条件も含め、日によって、そして被験者の歩くペースによっても異なる。ただしこの差が実験結果の実証性を損ねるほどのものではなく、多数の被験者の記録を重ね合わせることで条件の差異は解消できると考えている。

3.2.3 被験者

(1) 概要

被験者は京都大学、同大学院において建築を学ぶ学生を中心に、すべて学生から募集した。実人数56人、のべ人数は84人となっている。ルートごとの被験者構成の概略、および被験者のルート間重複の状況を表3-1、図3-5に示す。ルートごとの被験者数は同数とすることが望ましかったが、日程調整の都合上できなかった。しかしそれによりルートごとの実証性が著しく異なることはないと考えている。

表3-1 ルートごとの被験者構成の概略

	総数	総数のうち 建築系	総数のうち 大学院生
ルートⅠ	30	28	14
ルートⅡ	29	27	19
ルートⅢ	25	20	9
合計	84	75	42

(2) 被験者集団の設定理由

この被験者集団の設定に至った経緯を述べておきたい。

世界には多種多様な人間が存在し、それぞれが異なった仕方様相を把握している。本来被験者の選定は彼らをよく代表すべきである。しかしばらばらすぎてもいけない。あまりに各自のフレームが異なると、その共通部分が少なく、フレームと様相把握との関係が難しくなるからである。

そこで被験者のプロフィールを絞ることとした。筆者も所属する建築系の学生を中心にするとしてこの絞り込みは、拘束時間の長い実験に多くの被験者を集めなければならないという実務上の制約があったことももちろんであるが、他の被験者集団と比較して以下のことがすぐれている。

まず観光客は、京都の魅力をたっぷり紹介したガイドブックを手「いいものを見よう」という意気込みをもって訪れるため、かなり美化された様相把握をすることが懸念される。逆に長く京都に住んでいる人だと各所を知りすぎているため、他の人にはわからないような土着の知識を記録するか、または慣れ切ってしまっているためほとんど何も感じないというような恐れがある。その点、対象とした学生は京都在住歴が数年程度の人がほとんどで、観光客と地元民のちょうど中間的な様相の捉え方を期待できる。また建築系の学生は都市に対する好奇心が旺盛で、空間への感受性も高い。このことはまたデータを歪める要因ともなるが、なるべく多くの記録によって幅広い知見を得るためにはかえって好都合であろうと判断した。

なお今回は経路歩行実験のパイロットケースであり、今後さらに被験者の幅を広げるか、あるいは代表性の高い被験者集団を簡易的に選ぶ方法を探るといった方向性が考えられる⁶。

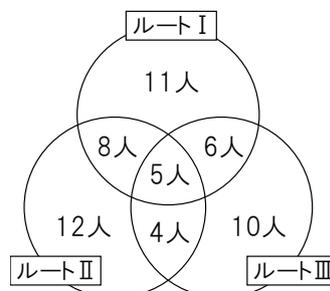


図3-5 被験者のルート間重複状況

3.2.4 実験の流れ

実験の具体的な流れについて説明する。

- ①各日程10名前後の被験者を集合場所に集め、説明用紙、記入用紙、カラーペンなどを配布する（写真3-1 / Appendix-Aにすべての説明用紙と記入用紙の一例を掲載）。
- ②実験概要や記入方法などについて、説明用紙および口頭にて約10分間の説明をする。

なお、実験における指示では「様相」や「把握」などの難解と思われる言葉は使用していない。作

業内容の指示は「雰囲気がかわったと思ったらマークしてください」という表現にとどめ、その具体例により、感じたあらゆることがらを記入してほしいということを示している。

- ③被験者に指定のルートに沿って歩いてもらう。被験者には適度に散らばり、互いに干渉しないよう要請する（写真3-2）。
- ④歩行中に捉えた様相について記録してもらう（写真3-3）。
- ⑤規定ルートを1時間～2時間半程度で歩き終え、ゴール地点に着いた被験者から順番に、3.1.1で述べた領域分割、領域評価、領域表現を記録してもらう（写真3-4）。
- ⑥記入のミスや漏れがないかを、実験者および実験を熟知したアシスタントがチェックする。



写真3-1 実験スタート地点に集合



写真3-2 ルートの歩行



写真3-3 様相表現の記録



写真3-4 領域分割、領域評価、領域表現の記録

- 1 都市化の度合いと様相との間に大きな関係があることについては、実際に第7章などで明らかになっている。
- 2 本論文に掲載しているルート沿いの写真は、2012年の5, 7, 8月に撮り直したもので、実験から5年が経過している。建物の建て替えなど大きな変化があった場所の写真を使うことはなるべく控えているが、それでも当時の状況とやや異なる場合がある。
- 3 街区構造について、大通り沿いの部分は「ガワ」、その内側の狭い街路に沿う部分は「アン」または「アンコ」と俗称される（小林重敬・山本正堯：新時代の都市計画3 既成市街地の再構築と都市計画，ぎょうせい，1999，pp.4-6.など）。現代の京都は、このガワとアンコのギャップが明確にあらわれている都市である。
- 4 都市計画基本図は毎年更新されるわけではなく、場所によって更新年が異なるので、これらをつなぎ合わせて用いている。
- 5 スタートから1,300m付近で差し掛かるこの河川は、渡月橋より上流では「保津川」、下流では「桂川」と呼ばれるが、本論では河川法上の正式名称である桂川に統一する。
- 6 リンチも、『都市のイメージ』の付録において同様の考え方を示している（リンチ，K.：都市のイメージ，丹下健三・富田玲子訳，岩波書店，1968，pp.195-197.）。

3.3 得られたデータ

3.3.1 記録用紙と記録方法

記録用紙、記入例は次頁の図3-6のようなもので、実際にはA4縦向き用の紙である（Appendix-Aに一例を掲載）。左にルート周辺の地図¹が載っており、被験者はこれを頼りに自らの場所を特定し、捉えた様相についてカラーペンで書き込んでゆく。進行方向は下から上の向きである。

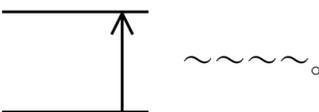
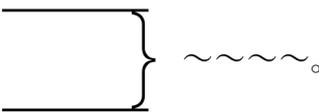
なお1ページに記載される地図は距離にして500m前後に相当し、用紙のページ数はルートごとにそれぞれ6, 8, 9となっている。被験者は、これをバインダーにとめたものを持って歩く。

図3-6中にはデータの名称も表示している。地図上とその右に書き込まれる記号や言葉が「様相表現」で、歩行中に随時書き込んでゆく。さらに右側部分の「領域分割」「領域評価」「領域表現」は、ゴール地点に到着した後に全体を振り返って記入する。以下それぞれについて説明する。

(1) 様相表現

歩行中に被験者が把握した様相について、その都度、地図の中からその場所を特定し、自由記述したものである。記録内容としては沿道の建物や木々といった視覚的要素だけでなく、音やにおい、そして「なんとなく感じた」といったようなことまで、あらゆることを自由に書き込むことができる。また様相を把握した場所により、表3-2のような4つの記録方法を使い分ける。

表3-2 様相表現の4種類の記録方法

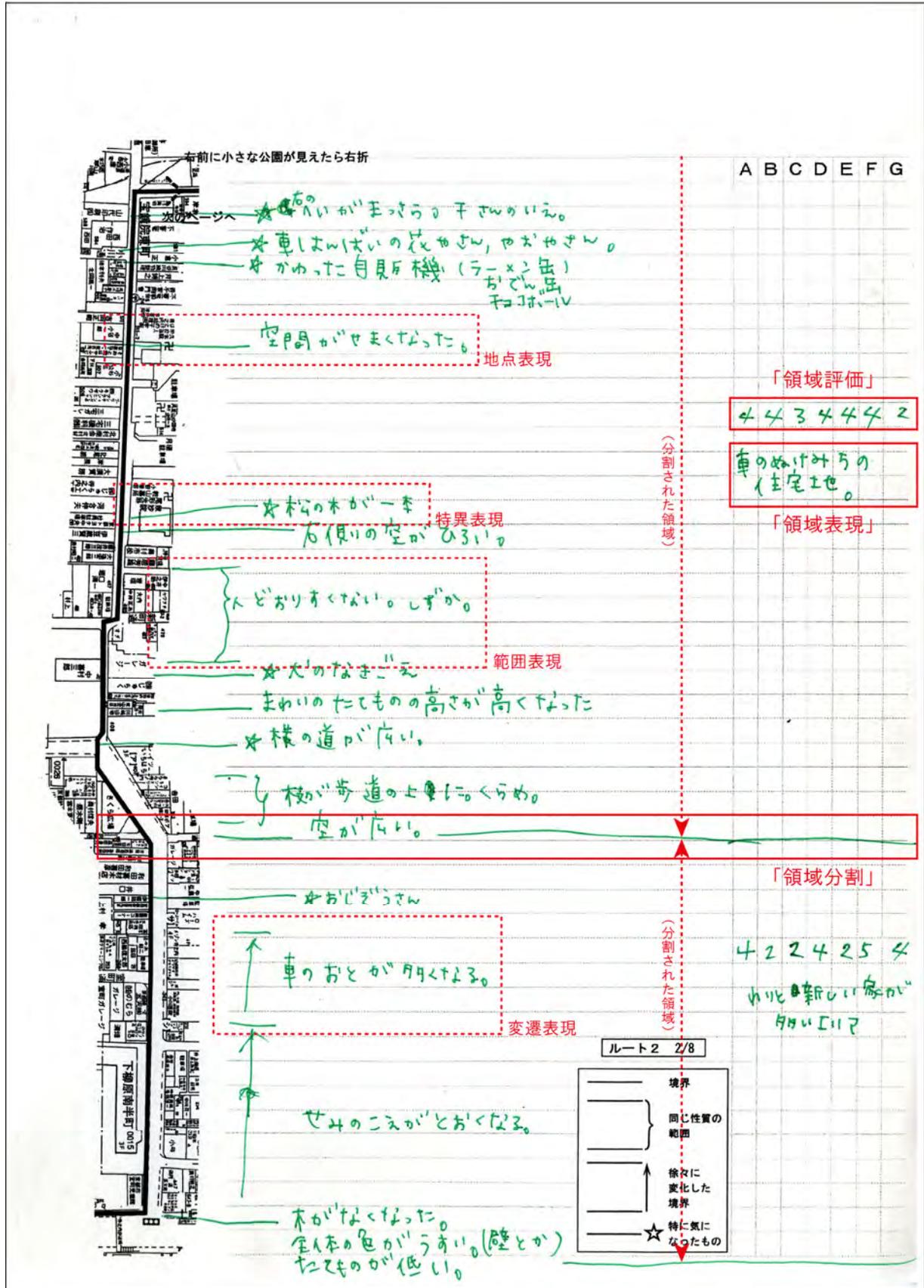
名称／説明	凡例
①地点表現 (point expression) ある一点で様相の変化を感じた場合。	
②変遷表現 (gradual expression) ある範囲で徐々に変化を感じた場合。	
③範囲表現 (range expression) ある範囲内が同じような様相に感じられた場合。二つの地点表現の合成とも考えられる。	
④特異表現 (uniqueness expression) ある場所だけ周囲とは違う特異な様相を感じるが、その場所を過ぎても様相の変化がないという場合。	

(2) 領域分割

歩行中に記入された「地点表現」「変遷表現」または「範囲表現の始点あるいは終点」の中から、特に様相の変化が顕著であったものを、歩行後に選んだものである。横線を用紙いっぱいひくことで表現される。これにより、ルート全体はいくつかの領域に分割される。いくつの領域に分割するかは被験者の自由である。

(3) 領域評価

(2) で分割した各領域について、表3-3左の7指標それぞれについて、同表右の5段階尺度で評価したものである²。



地図

歩きながら書く「様相表現」

歩き終わって書く部分

図3-6 記入例とデータの説明図

☆	1,514		ガラス張りが増えた																
—	1,610		この辺を境に人が非常に増えた／ジャンルを問わずギャルが多いと思います。																
—	1,952		スケールが小さくなったように思います	鴨川中心にまとまっているエリア	5	3	5	5	5	5	5								
☆	2,002		楽しげ《左》																
—	2,072		川、自然																
—	2,146		建物がでてる	観光地のための場所のようなエリア	4	3	3	5	3	4	3								
]	2,146	2,684	観光地です。／観光客多いと思います／土産ものばかり																
☆	2,426		京都らしい町並み《右》																
☆	2,520		広がった																
—	2,680		自然																

本章では経路歩行実験の構想と詳細について述べた。様相はわれわれが把握することがらの全体的な在り方というきわめて曖昧な概念であるがゆえに、あらゆる実験には限界が付きまとう。しかしここで構想した実験は、本来の様相にもっとも近づく手段であると考えている。また、言葉による様相の表現、実験という状況の特殊性などの弊害と考えられることさえも、様相の分析とモデル化という目的に即した有用なツールとして読み替えられる。

ただし実験の方法も、重ね合わせによる記述や分析の手法とセットで構想されたものである。よって、その有効性は次の第4章以降の分析結果によって検証されるべきである。

- 1 ゼンリン住宅地図 京都市中京区・東山区・上京区・北区・西京区・右京区，ゼンリン，2006.をもとに作成。
- 2 形容詞を用いた評価では、SD法のように形容詞を対にして用いるのが一般的な方法である。しかし形容詞対にはその両極性が担保されるかどうかという問題点があり、被験者にとっても煩雑になりやすい。本論では単極の形容詞による評定を採用し、「1. とてもあてはまる」から「5. まったく違う」の尺度を用いることで各指標間の尺度の等間隔性を担保している。なお単極の形容詞尺度を用いた研究としてはKüller, R.: *Environmental Assessment from a Neuropsychological Perspective, Environment, Cognition, and Action –An Integrated Approach-*, Gärling, T. and Evans, G.W. (ed.), Oxford University Press, 1991, pp.111-147.などがある。また心理学的研究では、膨大な数の形容詞対を用いてSD法を実施し、因子分析により主要な評価軸を探り出す手法がよく採用される。1. 3. 2で述べた船越らの参道空間研究はその代表例である。船越らは参道空間の写真による評定実験では、最初に300の形容詞対を収集し、そこから絞り込んだ32対で実験を行なった上、因子分析によって「特徴因子」「開放性因子」「アクティビティ因子」など17の因子を検出した(図1-3)。そしてこの17因子を、参道空間のシークエンスの評定実験に活用している(船越徹・矢島雲居・積田洋・真利曜子:参道空間の研究(その3) 神社空間における空間意識の分析(心理要因分析), 日本建築学会大会学術講演梗概集(建築計画・農村計画), 1988, pp.619-620. および 同論文(その4) 神社の参道空間におけるシークエンスの分析, pp.621-622.)。本研究の手法は、記録の簡略化のためにあらかじめ語を7つに絞り込んだものである。次にこの7指標の選定基準を述べる。まず文献(Kasmar, J.V.: *The development of a usable lexicon of environmental descriptors, Environmental aesthetics*, Cambridge University Press, 1988, pp.144-155. および Ladd, F.C.: *Perceived Quality of Residential and Industrial Environments: Research Needs and Priorities, Perceiving Environmental Quality*, Plenum Press, 1976, pp. 149-157.)にある形容詞のうち都市分析に有用であると思われるものを選び出し、さらに筆者が必要と考えるものを付け加え、分類した(下表)。そしてこの各グループから代表的なものを選定した(表3-3左)。Fの「○○らしい」はルートがすべて京都市内であり、京都らしさとは何かを問う議論が広く行なわれていることから「京都らしい」とした。またGは被験者がその場で感じたことではなく以前からの知識を問う特殊な指標であるが、記憶と様相把握との関連を探るために採り入れた。

群	内容
A群: 善悪・好み	いい雰囲気だ／生き生きとしている／心地よい
B群: まとまり	まとまりを感じる
C群: 印象	印象に残っている／独特だ
D群: 公共性	オープンな雰囲気だ／公共的な雰囲気だ／楽しい／にぎやかだ／親しみやすい
E群: 秩序	秩序がある／きちんとしている／規則的だ
F群: 地域性・時代性	○○らしい／洗練された／都会的だ／現代的だ
G群: 知識	以前からよく知っている
H群: その他	高密度だ／複雑だ／豪華だ／おしゃれだ／広々としている

- 3 何かが見えることによって様相が変化した位置ではなく、その見える対象を地図上に直接指示したケースが多かった。この記録方法への対策は今後の課題の一つである。

第4章

記録の重ね合わせによる都市の様相の記述

本章では、経路歩行実験によって得られた4種類のデータをもとに、都市の様相を記述する。この記述とは、すべての被験者の記録を重ね合わせ、被験者間で共有された様相を可視的に表現することである。

記述を大きく分けると、歩行後に記した3データに基づくマクロ記述（4.1で領域分割、4.2で領域評価、4.4で領域表現を用いる）と、歩行中の様相表現によるミクロ記述（4.5）となるが、その間に様相表現や領域表現に使われる言葉の分類が必要となる（4.3）。

4.1 領域分割グラフの作成とエッジ・エリアの検出

まずは歩行後に様相の大きく変わった場所を記してもらった「領域分割」のデータをもとに、ルート全体の様相の変化の記述を試みる。

4.1.1 領域分割グラフの作成

まず、任意の被験者 n に対し、領域分割のたびに値が1上昇する関数 D_n を定義する。

$$D_n = \begin{cases} i & (x_i \leq x < x_{i+1} \mid x_i \text{が不連続分割}) \\ i-1 + \frac{x-x_i}{x'_i-x_i} & (x_i \leq x < x'_i \mid x_i \sim x'_i \text{が連続分割}) \\ i & (x'_i \leq x < x_{i+1}) \end{cases} \quad \dots(1)$$

※ i は領域分割番号、 x_i は i 番目の領域分割のスタートからの距離。 $i = 0, 1, 2, \dots, x_0 = 0$

このとき「不連続分割」と「連続分割」の区別がある。この実験では、4種類の様相表現の記録位置のうち「地点表現の位置」「変遷表現の全体」「範囲表現の始点」「範囲表現の終点」のいずれかを領域分割に用いることができる。このうち「地点表現の位置」「範囲表現の始点」「範囲表現の終点」を選んだものは様相の急激な変化を示す「不連続分割」と呼び、「変遷表現の全体」を選んだものは様相の連続的な変化なので「連続分割」と呼ぶ。この二つでは、 D_n の上昇の仕方が異なることになる（図4-1）。

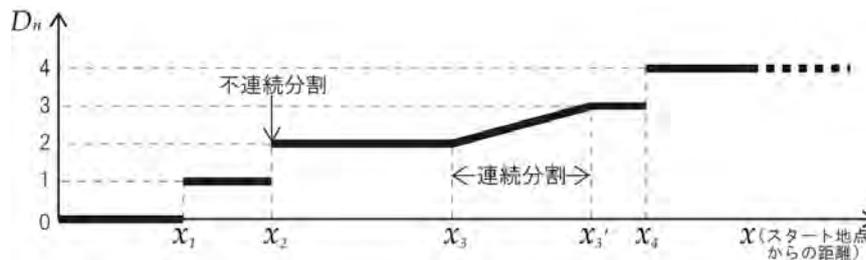


図4-1 D_n の説明図(3番目の領域分割のみを連続分割とした場合)

これにより各被験者個人の領域分割を示す関数が作成されたが、全被験者 N 人による領域分割を重ね合わせた関数 D_{all} は、 D_n の相加平均で表わされる。

$$D_{all} = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N D_n \quad \dots(2)$$

これをグラフ化する（図4-2）。横軸にスタート地点からの距離をとり（このことは今後の多くのグラフに共通する）、縦軸は D_{all} 、つまり様相の変化度合いとなる。ゴール地点における D_{all} の値は、全被験者の領域分割数の平均となる。

作成したグラフにわずかでもレベル差が生じている部分は、被験者によって領域分割が行なわれたことを示す。大きなレベル差がある場所は多くの人が領域分割した、つまり様相が明らかに変化した場所である。逆にレベル差が全くない場所は同じような様相で安定していると考えてよい。たとえばルートⅡの1,000m~2,000mに、この二つの場所が典型的にあらわれている。それらの中間で、領域分割が断続的に続きグラフが徐々に変化しているような場所は、様相も徐々に変化する場所であると言える。ルートⅠは全体にその傾向が強い。このように、領域分割グラフの変動は様相の変動と符合し、このグラフによって様相の移り変わりの大まかな傾向を表現できている。

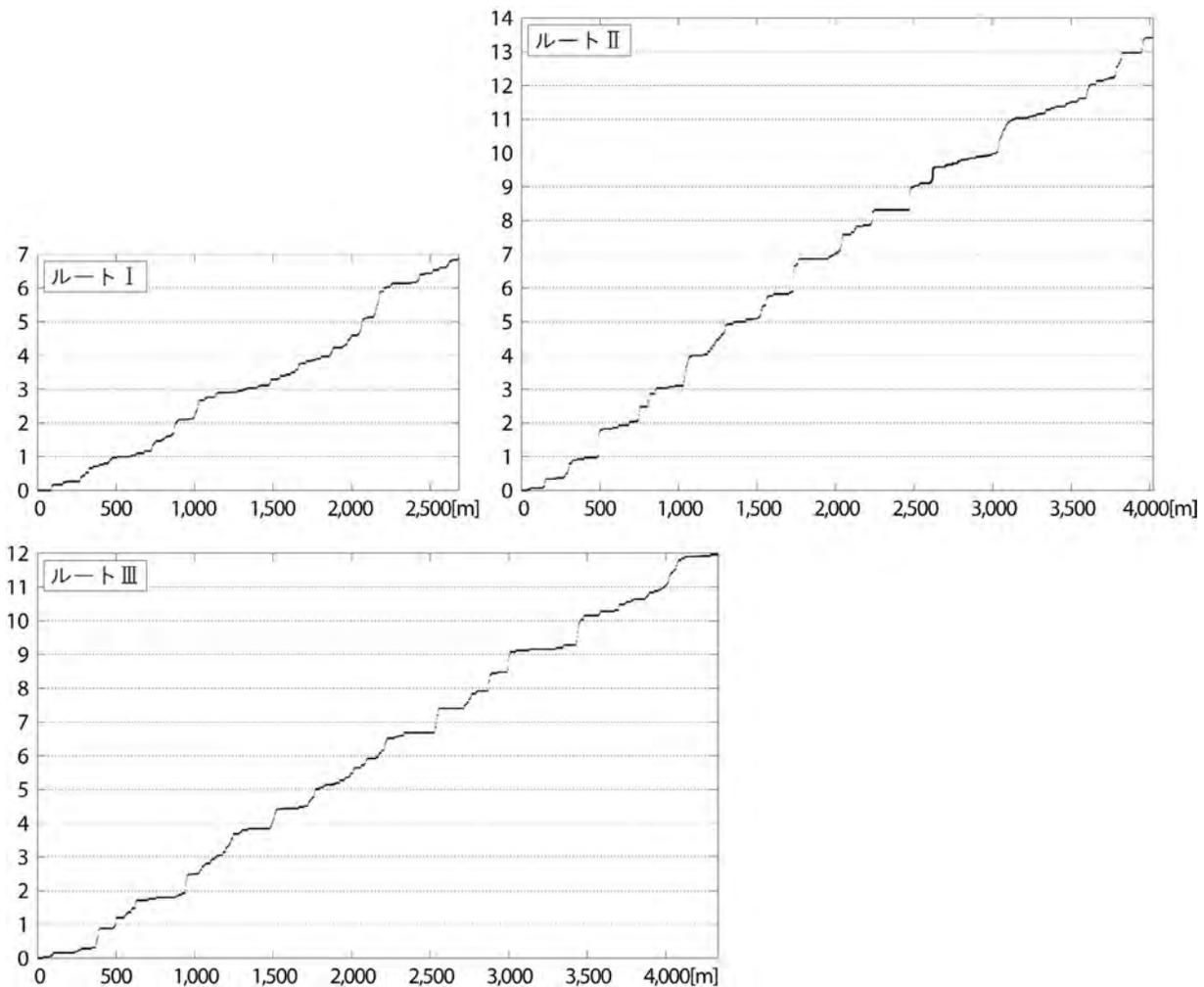


図4-2 3ルートの領域分割グラフ

4.1.2 エッジ・エリアの検出

先述した大きなレベル差のある場所は被験者間で共有された境界であり、第2章の経路モデルに照らすと世界の大きな変節点にあたる。様相は経路上で常に連続的に移り変わっていくが、これをいくつかに分節することは、分析のためにも非常に有用であると考えられる。そこでこのような場所をエッジ (Edge) と名づけ、定量的検出を試みる。エッジでない部分は様相が比較的安定した場所であり、エリア (Area) と呼ぶ。

(1) エッジの定義と検出

エッジは以下のように定義する²⁾。

「前後のグラフの不連続点³から s [m]以上の距離を隔てた範囲 $x_1 \sim x_2$ について、その両端の D_{all} グラフ落差 dD が、閾値 ΔD 以上であった場合、この $x_1 \sim x_2$ をエッジと呼ぶ」(図4-3)

ΔD と s は任意に設定することができ、その値の決め方によって検出されるエッジは異なってくる。この際に重要なのは、グラフから読み取れる直観的印象に違わないようにすることである。今回は3ルートで被験者数に大きなばらつきがないことからまず s を全ルート共通とすることとし、 $s=10$ から10おきに値を増やして検討した。値が小さすぎるとエッジが途切れ途切れになり、大きすぎると広範囲になりすぎるが、検討の結果 $s=30$ を適正値として認定した。

この値に従って、各ルートのエッジ候補となる区間を割り出した(表4-1)。そしてこの表をもとに、以下の値に ΔD を定め、その結果表4-1中のグレーの部分のエッジとなった。

ルート I : $\Delta D = 0.4$ (→エッジ数 5)

ルート II : $\Delta D = 0.5$ (→エッジ数 10)

ルート III : $\Delta D = 0.5$ (→エッジ数 13)

共有された境界を検出するという観点から、過半数の被験者の領域分割が必要となる $\Delta D=0.5$ を基本として考えたが、そうすると、様相の移り変わりがはっきりとしないルート I においては3つのエッジだけが検出されることとなった。これでは分析のために適当ではないと判断し、ルート I のみ $\Delta D=0.4$ を採用した。

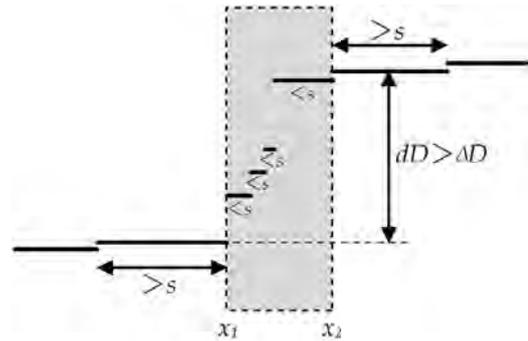


図4-3 エッジの検出の説明図

表4-1 3ルートのエッジ候補一覧

ルート I			ルート II			ルート III		
x_1	x_2	dD	x_1	x_2	dD	x_1	x_2	dD
2,554	2,560	0.067	2,686	2,700	0.069	3,344	3,350	0.080
678	680	0.067	38	56	0.069	3,738	3,748	0.080
1,312	1,332	0.068	614	616	0.069	3,780	3,794	0.080
1,400	1,412	0.069	1,346	1,354	0.071	3,574	3,584	0.120
160	164	0.071	3,370	3,394	0.077	1,282	1,302	0.120
2,512	2,518	0.100	3,706	3,736	0.081	80	100	0.120
592	630	0.100	3,658	3,660	0.103	240	276	0.120
1,064	1,076	0.100	682	686	0.103	3,870	3,894	0.200
1,536	1,544	0.101	3,538	3,548	0.103	3,674	3,704	0.200
1,132	1,146	0.133	3,334	3,338	0.106	1,100	1,140	0.216
1,748	1,806	0.133	3,462	3,494	0.138	2,058	2,098	0.280
788	818	0.133	2,776	2,798	0.142	1,028	1,068	0.299
88	98	0.167	850	856	0.172	480	502	0.320
1,476	1,486	0.168	2,096	2,128	0.241	1,956	2,018	0.361
2,414	2,434	0.233	136	156	0.276	2,716	2,798	0.520
2,602	2,642	0.233	804	818	0.379	2,868	2,890	0.520
392	474	0.240	3,594	3,622	0.414	552	630	0.520
1,862	1,884	0.267	742	756	0.423	1,482	1,522	0.566
726	752	0.300	2,222	2,244	0.448	2,154	2,228	0.600
1,614	1,668	0.323	3,944	3,972	0.448	2,992	3,008	0.600
1,942	2,000	0.367	2,602	2,622	0.483	344	394	0.600
270	352	0.436	270	354	0.552	1,180	1,246	0.623
852	898	0.480	1,956	2,044	0.724	1,698	1,830	0.658
2,038	2,100	0.533	3,776	3,822	0.729	882	958	0.685
990	1,028	0.547	1,506	1,604	0.733	2,528	2,554	0.720
2,140	2,256	1.000	2,470	2,538	0.793	3,428	3,482	0.880
			482	518	0.862	3,926	4,120	1.051
			1,030	1,082	0.897			
			1,160	1,306	0.919			
			1,704	1,766	1.034			
			2,994	3,140	1.093			

(2) エッジの補正と確定

ただし $s=30$ の値をもってしても、実際にはかなり広めの範囲をエッジとしてとってしまう場合もあった。一人だけの被験者の判断や、実際の地点と地図とをよく照合しないままひいたと思われる領域分割線などの影響が大きく出てしまう。今後の分析のためには、両端部における、ある距離以上離れた領域分割を外れ値として除外し、補正することが望ましい。そこで以下のような補正を行なう⁴⁾。

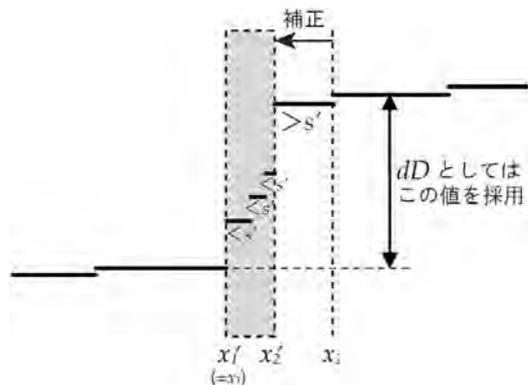


図4-4 エッジの補正の説明図

「検出されたエッジの両端について $s'=s/2$ である s' により再びエッジ検出を行ない、求められた x_1' , x_2' をそれぞれ x_1 , x_2 に対する補正值とする。ただし、エッジ両端の落差 dD については、補正前のエッジ検出で求められたものをそのまま採用する」(図4-4)

図4-4はエッジ終点に一点のみの外れ値が検出された場合の図である。もし複数の領域分割が $s\sim s'$ の距離を隔てながら存在すれば、そのすべての領域分割が除外対象となる。また、両端で補正が行なわれる場合も、どちらにも補正が行なわれない場合もある。

これにより x_1 と x_2 、つまりエッジの範囲が確定する。エッジにならず残された部分がエリアとなる。これらを領域分割グラフに反映したのが図4-5であり、また地図上に表現したものを図4-6に示す。

グラフ形状とエッジの位置の対応状況を見ると、概ね直観に見合う検出が実現されていると言える。ただしエッジの中には距離が短いものや長いもの、落差がかなり大きく多くの人に共有されたものとそうでもないものがあり、さらにエリアとされた中でもエッジに近い部分が見られる。しかし、今後の分析のためにどこかで一意に切る必要がある。エッジやエリアは絶対的なものではなく、分析のための便宜的な記述として考えるべきである。

なお今後、ルートIの2番目のエッジであれば「E I-2」、ルートIIの5番目のエリアであれば「A II-5」というように、「E (エッジ) またはA (エリア)」と「ルート番号」と「ルートにおける何番目のエッジ (エリア) か」の組み合わせによって呼ぶこととする。

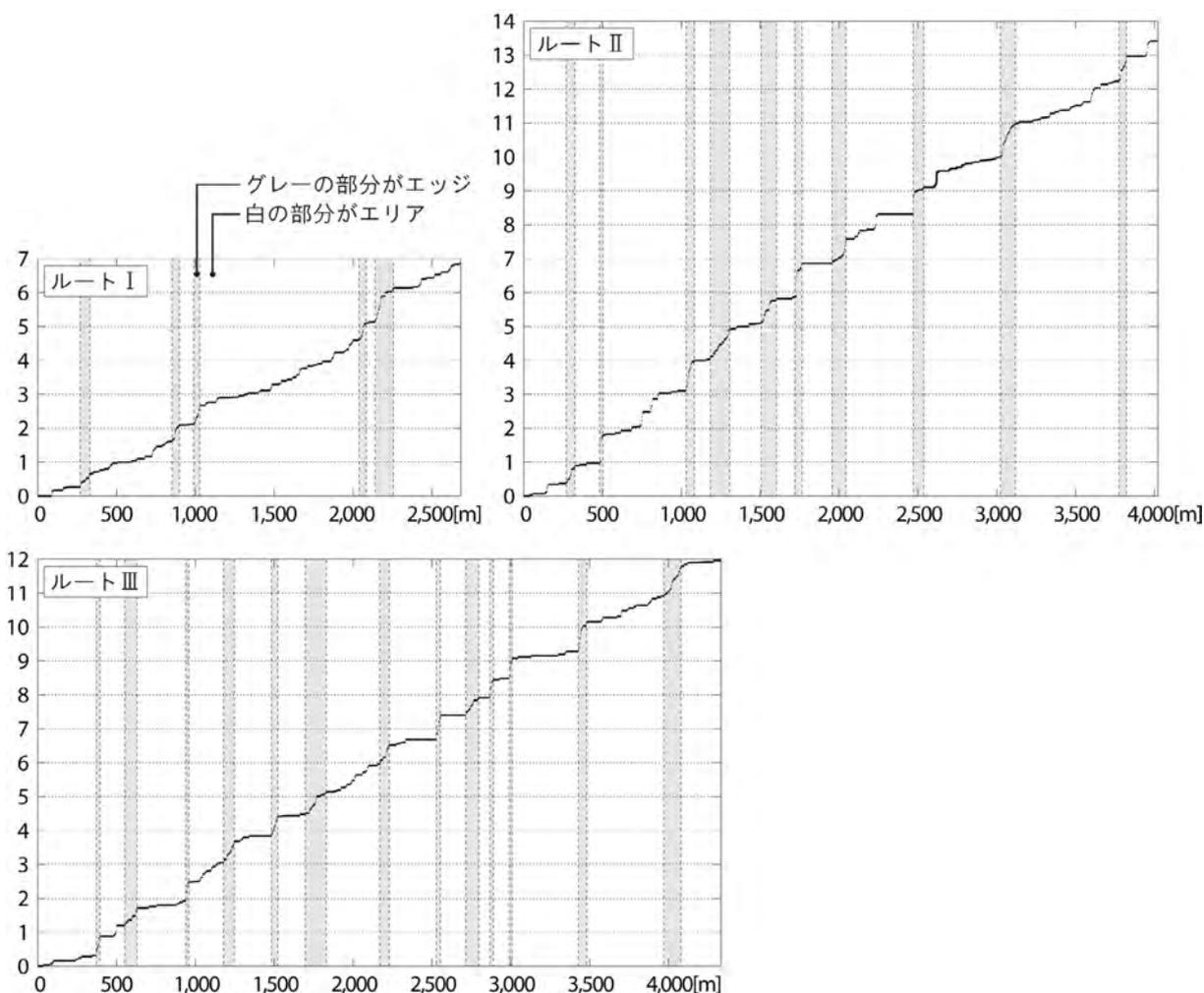


図4-5 3ルートの領域分割グラフとエッジ・エリア

-
- ¹ エッジとエリアは、リンチの定義するエッジやディストリクトと類似の概念であるが、やや意味合いが異なる。本研究が線的ルートを対象としているのに対してリンチのエッジやディストリクトは面上のものだからである。
 - ² エッジの検出に関しては領域内の勾配が閾値以上かどうかで判断する考え方（差分法）や、グラフの不連続的変化をある程度ならしてから検出する方法（局所平均）などがあり、特に画像分析の分野で研究が進められている（高木幹雄・下田陽久：画像解析ハンドブック，東京大学出版会，1991.に詳しい）。本論でもこの方法で実際にスタディを行なったが、①落差の小さなものもエッジとして検出される、②変化は緩やかだが結果的に大きくかわるというエッジ（「EⅢ-6」など）が検出できない、③局所平均をとるとシャープな境界がぼやけ範囲が不必要に広がる、といった問題が生じた。本論は共有された様相を描き出すことに主眼を置いており、 D_{all} の落差を基準に据える方が、より共有度の高いエッジを検出できると考えた。
 - ³ 連続分割はその数が少なく、落差も緩やかになるので、離隔距離算定の対象からは外した。ただし、両端落差を求める際には考慮する。
 - ⁴ つまり、第一段階のエッジの選定に関しては緩い条件でエッジのまとまりを検出し、その後、両端についてのみ厳しい条件で補正する考え方である。
なお今回の実験ではこのようなエッジ検出法が最善だと判断したが、別の実験を行なう場合、サンプル数や分析目的などによって検出法を柔軟に変更する必要があると思われる。

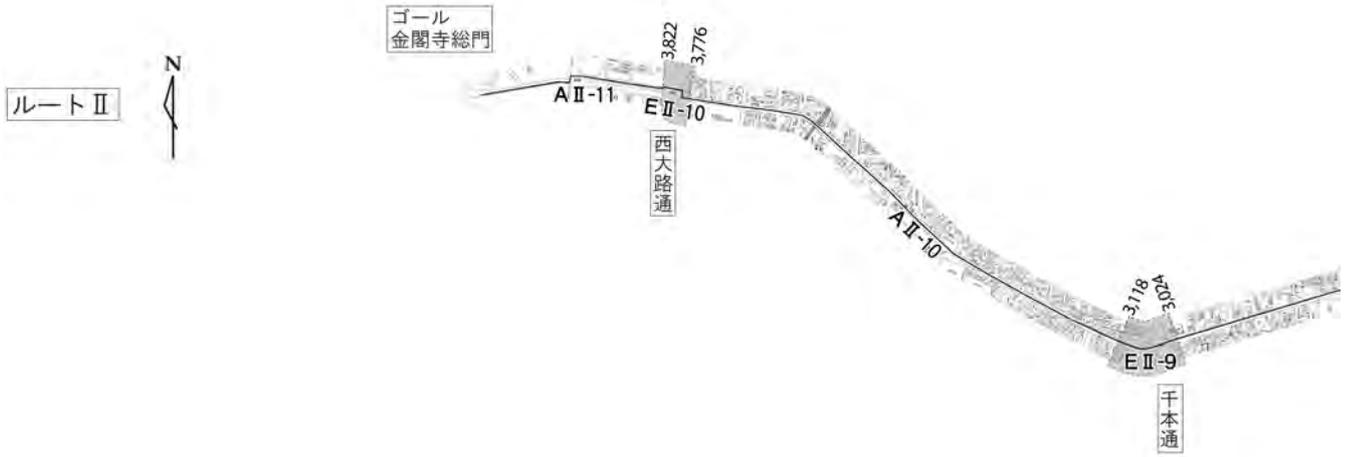
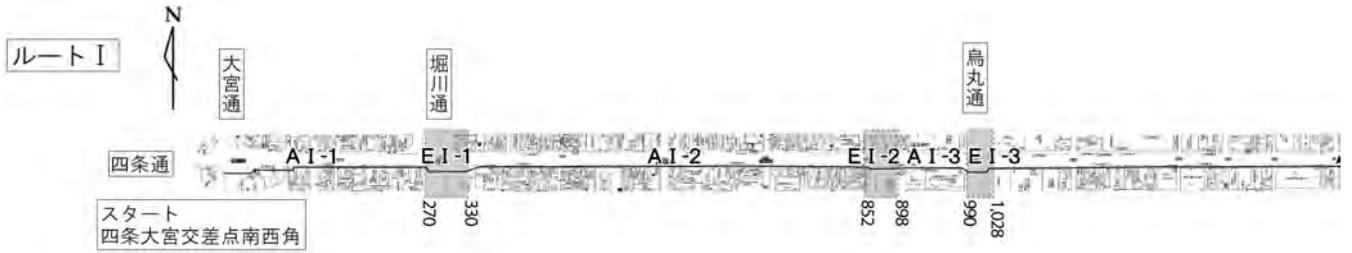
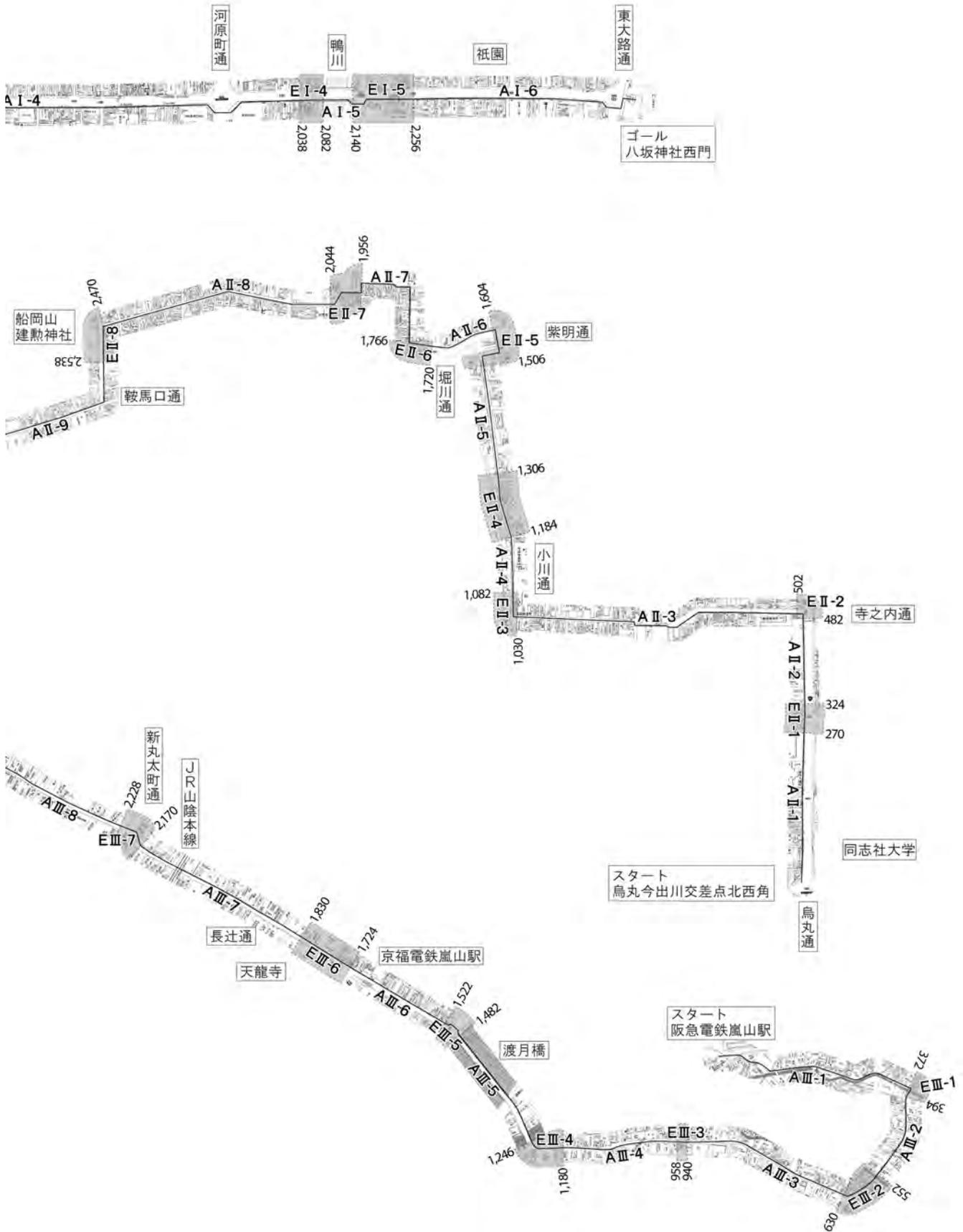


図4-6 3ルート



エッジとエリアの位置

4.2 領域評価グラフの作成

次に、領域評価を用いた様相の記述を行なう。

まず始めに、実験時に用いていた領域評価指標の名称と尺度は被験者が答えやすいように表示していたが、これを分析用に置き替える（表4-2）。名称の置換は今後の表記の簡便化のため、尺度の置換は数値の大小と対応づけるためである。

表4-2 領域評価指標の名称と尺度の置換

名称		尺度		
実験時	分析用	実験時	分析用	
A：いい雰囲気だ	A：雰囲気のよさ	1	5	↑ 高
B：エリア全体のまとまりを感じる	B：まとまり	2	4	
C：印象に強く残っている	C：印象の強さ	3	3	
D：オープンな雰囲気だ	D：オープンさ	4	2	↓ 低
E：秩序がある	E：秩序	5	1	
F：京都らしい	F：京都らしさ			
G：以前からよく知っている	G：事前知識			

そして4.1.1の領域分割の場合と同様の考え方を用い、任意の被験者の領域評価関数 V_n 、その全被験者での平均値 V_{all} を式(3)、(4)のように定義する。

$$V_n = \begin{cases} v_i & (x_i \leq x < x_{i+1} \mid x_i \text{が不連続分割}) \\ v_{i-1} + \frac{(v_i - v_{i-1}) \times (x - x_i)}{x'_i - x_i} & (x_i \leq x < x'_i \mid x_i \sim x'_i \text{が連続分割}) \\ v_i & (x'_i \leq x < x_{i+1}) \end{cases} \quad \dots(3)$$

※ v_i は、 i 番目の領域分割から $i+1$ 番目の領域分割までの領域に対する領域評価値。

$$V_{all} = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N V_n \quad \dots(4)$$

この V_{all} を7指標すべてについてグラフ化する（図4-7）。

これによって、様相の変化の大きな傾向を掴むことができる。またエッジの多くにおいて領域評価グラフに大きな変動が見られ、領域分割グラフと領域評価グラフとの間に対応関係のあることが示唆されている。

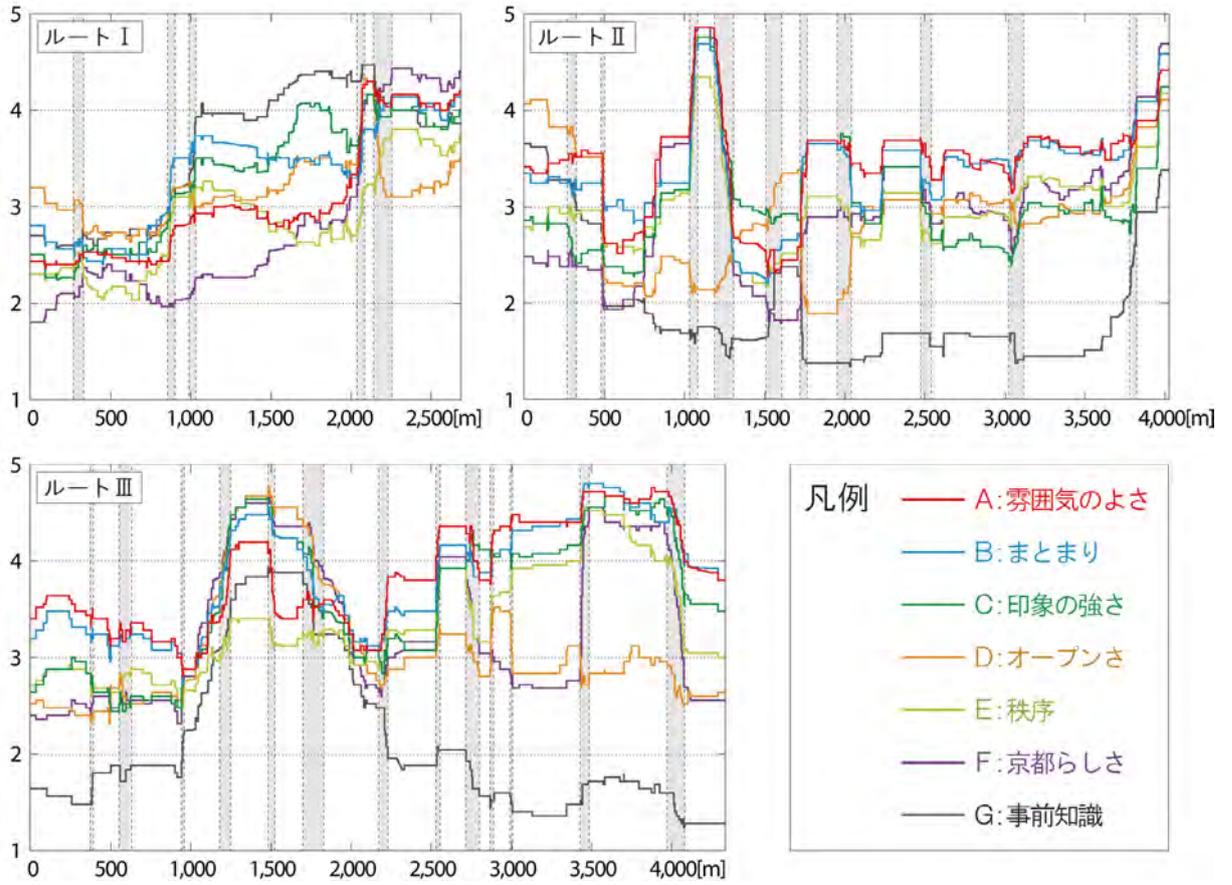


図4-7 3ルートの領域評価グラフ

4.3 様相・領域表現をもとにした様相因子の抽出

ここでは様相表現や領域表現によって様相を記述するための下準備として、様相・領域表現を分解・再構成する。

4.3.1 様相と様相・領域表現、様相因子

3.1.2で述べたように、様相表現や領域表現は様相の全体性の一断面を表わすツールであり、「様相の上澄み」の自動抽出装置である。これを重ね合わせることで、共有された様相の記述が可能となるはずである。

しかし、様相・領域表現はそのまま重ね合わせるにはあまりに非構造的である。たとえば同じ場所で書かれた「小さな家が並ぶ」、「小さな建物の間に背の高い家」という二つの表現は、似てはいるが同じではない。しかしそれぞれの言葉を分解し、「小さい」「家」などの共通項を取り出せば、これは定量化が可能なまとまりとなりそうである。「小さい」と「背が高い」とを合わせて、「(建物の)スケール」という観点からまとめることもできる。

このように様相・領域表現を分解し、取舍選択と統合を進めれば、記述に有効な言葉のカテゴリーが得られる。このようなカテゴリーを「様相因子」(modal factor)と呼ぶ。「住居」「建物のスケール」のようなまとまりのことである。記録された様相表現をいったん様相因子というマイクロなレベルにまで落とし、そこから重ね合わせることで、様相を記述する。様相・領域表現は様相を表現するためのツールであるが、様相因子は記述のためのツールとなる。

一般に因子分析では多次元の尺度から因子を抽出することで、全体的評価を要約する。これと似た操作となっているのが、様相因子の名の由来である。ただし様相因子の場合、様相との間に直接の因果関係をもたないことに注意を要する。

4.3.2 様相因子の抽出

(1) 抽出の進め方

様相因子を決定する方法の一つとして、既存の辞書的分類を援用する手段が考えられる。たとえば生物の分類に用いられる「界—門—綱—目—科—属—種」というツリー分類 (tree classification)¹のようなもので、建築基準法では建築の用途について「一戸建ての住宅」「長屋」から「助産所」「畜舎」に至るまで分類がなされている²。また近年では、コンピュータプログラムを用いたテキストマイニング研究が盛んに進められている³。アンケートの自由記述や一冊の本すべての文章などのデータを対象として、プログラムにより単語レベルに自動的に分割した上で、単語間の共起関係などを分析するものである。

これらの方法は客観性をもっており、大量のデータを捌いて全体的傾向を見る場合や、ある程度構造化された言語データを扱う際には威力を発揮する。しかし様相・領域表現は、個々の場所ごとの様相の移り変わりを記述、分析することが分類の目的である。また同じ内容を書くにしても被験者ごとに表現方法は異なっており、極度に非構造的なデータとなっている。辞書的あるいは機械的方法では記述や分析に有効な分類とはならないと考えられる。

また1.3.2で挙げた環境心理学系の研究では、心理量と物理量というカテゴリーを設定した上で、前者については多数の形容詞対の多変量解析による要約によって、後者についてはシークエンス空間から心理に作用すると思われるエレメントをピックアップすることで、分析対象とする言葉のリストをつくっている。これは定量的分析にもちこみやすい方法であるが、対象をあらかじめ絞り込んでおり、全体性を含意する様相を調べる方法としてはそぐわない。

以上の考察より、様相・領域表現の分類法は被験者により書かれた言葉から立ち上がるものでなければならないことがわかる。またすべての様相・領域表現を、ある一定のルールに基づいて分類し、かつ各因子は記述と分析のために効果的なスケールとなっていることも必要である。

分類としてもっとも一般的に用いられるのは、上述の生物分類などに見られる階層的ツリー分類である。しかしツリー分類をいきなり導入すると、莫大な数のカテゴリーが生まれてしまう。たとえば、 n 個の階層に対しそれぞれ a_i 個の分類があるとすると、すべてを厳密に分類しようとするればカテゴリーの総数は $a_1 \times a_2 \times \dots \times a_n$ となる。また一意に分類できないような言葉、複数要素に重複する性質をもつような言葉が少なからず存在することもこの分類法のネックである。

そこで、次のような二段階の分類法をとることにした。

第一段階：ファセット分類法 (facet classification) ⁴を用い、各記録を細かく要素に分類する

第二段階：その要素の中から、様相因子を分析目的に応じて自由にピックアップする

以下、それぞれについて説明する。

(2)ファセット分類

ファセット分類法はツリーの各階層をそれぞれ「ファセット」に言い替え、すべての分類対象は各ファセットの掛け合わせとして表現する。前述の n 階層の例だと、全事象は n 個のファセットの組で表わされる。各ファセットにいくつの分類が含まれようと、 n 個の属性の対のみによって表現されるのである。図書のそれぞれに「著者名」「書名」「出版年」などのファセットを与え、検索の際にそれらを組み合わせて調べられるというシステムはファセット分類の成果の一例と言える (図4-8)。



図4-8 ツリー分類(左)とファセット分類(右)による図書の分類法

ここでは分類の対象が被験者によって記録された文であることから、基本的な言語構造になぞらえて主部、述部という二つのファセットを採用した。

○ファセット1(以下「F1」):主部

文における主部。視覚、聴覚などで捉えうる環境内の物理的要素が主なものであるが、主体との位置関係や用途など重要な要素については適宜加味する。またファセット内の要素はさらにツリー分類している⁵。

○ファセット2(以下「F2」):述部

文における述部。客観的性質や主観的な印象、心象など。このファセット内でのさらなるツリー分類は困難であったため、やむなく「客観的」から「主観的」までのグラデーショナルな配置に並べて整理している⁶。

この2ファセットに従ってすべての様相・領域表現を分析し、類型として整理したのが表4-3である。これは分類作業前に設定したものでなく、作業を進めながら適宜改良していった、さしあたりの

最終形である。あくまですべての言葉を分類するための仮段階なので、かなり粗い分類になっている。

この表を用いた様相・領域表現の分解の例を示す。

例1)「風流な住宅街」

F1 = 2 (住居) F2 = 61 (風情・風流)

例2)「高いビルの中に、一軒小さな古い家がある」

前半「高いビル」: F1 = 18 (ビル) F2 = 7 (スケール)

後半「一軒小さな古い家」: F1 = 2 (住居) F2 = 7, 13 (スケール,年代)

このように、文がいくつかの文節に分かれる場合は分けて処理する。またF1とF2は多対多対応をすることがあるので、後半のF2のように同一ファセット内の重複とする。

例3)「山が見える」

F1が46 (沿道遠方の植物) か64 (前方の植物) か不明である。このような場合、記録地点と照らし合わせて推測する。左右に見えると思われるなら46、前方に見えると思われるなら64、両方ならばその複合とする。

例4)「きれい」

主部が省略されている。単にF2=46のみとして扱う。何がきれいかを記録地点から推測できるかもしれないが、上記の場合とは違って不確実性が高いので、それはしない。

これらの例にもあるように、記録の中には主部と述部の多対多関係や省略などの複雑な現象が見られる。様相・領域表現はその記録された位置と対応づけられた言葉であり、そのことが文の意味を豊富化させるが、それゆえに被験者も主部を省略することが多い。

またこの分解作業では助詞や接続詞、そして多くの副詞も対象から外している。「少し大きなビル」と「めっちゃでかいビル!」のような様相表現が同じ扱いを受けることになる。しかしこのような程度の差は、重ね合わせによって解消しようという考え方をとる。

(3) 様相因子への再編

次に分解された各要素を、分析上有意な様相因子へとまとめる。つまりファセット分類の過程で見出された、繰り返しあらわれる要素や要素の組み合わせを、似た意味内容をもつものは束ねることで、カテゴライズするのである。その束ねる方法としては、

- ・一つのファセット内の単一要素だけを選択
- ・同一ファセット内の複数要素選択
- ・ファセット間の要素の限られた掛け合わせのものだけを取り出す
- ・これらの複合

といったさまざまな方法を許容し、自由にピックアップできる。考慮すべきは、ただ有用な様相因子となるかどうかということだけである。数や散らばり方、そして様相因子全体のバランスなどを勘案し、様相を説明する因子として適当と判断されたものを抽出した。結果得られたのが表4-4の78カテゴリーである。

ファセットからの抽出過程の例を示す。

例1)「風流な住宅街」

F1 = 2 (住居) F2 = 61 (風情・風流)

⇒[1] 住居 と、[66] 落ち着き・風情

例2)「高いビルの中に、一軒小さな古い家がある」

前半「高いビル」: F1 = 18 (ビル) F2 = 7 (スケール)

後半「一軒小さな古い家」: F1 = 2 (住居) F2 = 7, 13 (スケール,年代)

⇒前半：[6] 業務 と、[12] 建物のスケール

後半：[1] 住居 と、[12] 建物のスケール と、[16] 建物の年代

例3)「大きい家と小さい家が隣り合う」

F1 = 2 (住居) F2 = 7 (スケール)

⇒ [1] 住居 と、[12] 建物のスケール と、[59] 統一性

ただし、「家」は2回出てくるが内容が同じなので1カウント。一方「大きい」「小さい」は異なったものが二つあるので、「大きい」「小さい」の細分類に各1カウント。

例4)「道行く学生が増える」

F1 = 36 (学生) F2 = 2 (数)

⇒[21] 人の数 と、[24] 学生

数自体も増えるので[21]もカウント。また「道行く」は街路において特徴的な行動ではないので[25]には含めない。

完成したカテゴリーについて補足しておく。まず各様相因子もさまざまな言葉の集合であるため、よりミクロな「細分類」を含んでいる。たとえば「[16] 建物の年代」の中には「古い・伝統」「新しい」「懐かしい」「大正・昭和・近代」「年代の混在」の5つの細分類がある。「[16] 建物の年代」というカテゴリーをさらに「建物の新旧」「建物の建築年代の推定」などと分けることもできるが、そうするとまた様相因子の数が膨大になるため、表4-4の78種類に留めた。

また様相因子は「視覚」「聴覚」「嗅覚」「触覚」「印象」「その他」の大分類に分けられ、「視覚」に関しては下位の分類もある。ただし、たとえば蟬（「[34] 沿道の生物」の細分類の一つ）に気づくには視覚だけではなく聴覚も用いることから、この大分類は便宜的な側面がある。

さらに様相因子は相互に複雑に関係しあっており、様相の説明性に関して一次独立ではない。そのことはたとえば、「[1] 住居」とその中の部分集合になる「[2] マンション」の両者が様相因子として採用されていることから明らかである。

さて、このカテゴリーはやはり所与のものではなく、思考錯誤を繰り返した結果のものである。だから、この表そのものにも、都市の様相を表現しうる言葉のリストとして価値があると考えられる。

ただしこのリストはある程度の普遍性をもつであろうと同時に、今回の実験で得られたものに過ぎない。リストはパイロットスタディの結果であり、今後被験者を替えて実験をしたり、他の都市で実験をしたりすればその人、場所に固有の言葉のリストが得られるだろう。このことはアレグザンダー（Christopher Alexander）の開発した「パタン・ランゲージ」（pattern language）⁷⁾に似ている。アレグザンダーも、同名書に記載したパタンは必ずしも普遍的ではなく、各人、各街にとってのパタン・ランゲージをつくるのが望ましいと述べている。

(4) 順表現と逆表現

前項で示した様相因子には、「[16] 建物の年代」で見たように多様な細分類がある。記述のためにはこれでよくても、分析のための最小単位としてはまだ使いづらい。第5章の多変量解析に困難を来しそうである。そこで細分類の整理を試みる。

1つの様相因子の細分類の中から、もっとも主要な表現内容を「軸」として取り出す。そしてこの軸に沿った表現から、その軸の意味内容を直接的に表わすものを「順表現」、その逆の内容を表わすものを「逆表現」としてまとめた。

たとえば、「[12] 建物のスケール」には、①大きい ②高い ③間口が広い ④小さい ⑤低い ⑥間口が狭い ⑦スケールが揃う ⑧スケールが混在 ⑨階数指定 ⑩その他 という、10の細分類があった。

ここで軸を「スケールの大小」に絞り、大きいことを表わす①～③を「順表現」、小さいことを表わす④～⑥を「逆表現」と定義した。そして、この軸とは関係のない⑦～⑩は「中間表現」とし、4.5のプロットグラフ作成の際にはグラフに盛り込むものの、第5章などの定量的分析の段階では排除することとした⁸。こうして、表4-5のように各様相因子の順表現を確定した。

さてこの際に、軸のどちらを順表現とするかについて付言しておく。ザディ (Lotfi Zadeh) はファジー集合理論 (fuzzy set theory) により、カテゴリーを二種類に分類した⁹。一つは「上院議員」のように、そうであるかないかがきっぱりと分かれるものである。もう一つは「裕福な人々」「背の高い人々」のような、裕福さや背の高さに段階があるもので、これは0から1の間のファジーな集合をかたちづくる。表4-5において、「ある・多い・増加」「記録あり」「見える」などが順表現となっている様相因子が多数あるが、これが前者に相当する¹⁰。この場合は順表現の定め方がわかりやすい。

しかし後者の方はどちらを順表現とするか悩ましいものもある。この場合、基本的にはその軸の意味内容を直接的に表わすものを順表現とした。「明るさ」なら「明るい」、「好み」なら「好ましい」などである。一般的にSD法の評価尺度などで正方向に取られる方である。そしてそれでも判断の困難なものは、記録の多かった方を順表現としている。「古い」「静か」「涼しい」などがそれにあたる。

第5章では、ここで割り出した順表現、逆表現の概念を適宜用いて分析する。ただしこの順表現の定義の仕方によって分析結果が左右されるので、順表現の指示内容については常に注意が必要である。

(5) 指示範囲

様相表現については順表現の問題の他に、指示範囲の問題がある。つまりそのあたり全体について述べたことと、一つの建物のみについてなど部分的なことについて述べたことの別である。これは分けて扱うべきことである上に、分析上の興味深い視点となる。

記録のルールからすると様相表現のうちの特異表現だけが部分を指示するはずである。しかし被験者にこのことを徹底させるのは難しく、特に地点表現で部分的なことを表現することが多数あった。そこですべての様相表現について、分析者の視点からも全体と部分を判別した。その上で、最終的な全体と部分の捉え方を表4-6のように定めた。つまり、被験者判断で特異点とされるか、分析者判断で部分とされるかのいずれか一方に当てはまれば、最終的に「部分」として扱おうというものである。

このとき、(2)(3)の例で用いた「高いビルの中に、一軒小さな古い家がある」というような記録の場合、前後半で指示範囲が異なることとなる。この場合前半部分から得られた様相因子は全体を指すものとして、後半部分から得られたものは部分を指すものとして処理される。

今後の様相表現を用いた記述や分析は、適宜この指示範囲分類を用いて行なう。

表4-6 指示範囲の判別

		分析者判断	
		全体	部分
被験者 判断	地点表現	全体	部分
	変遷表現	全体	部分
	範囲表現	全体	部分
	特異表現	部分	部分

表4-3 ファセット一覧表

F1			番号	F2			番号	
記録なし・空間全体			0	記録なし・存在する			0	
視覚	沿道	建物・街並み	用途指定なし	1	客観的 ↑	不在	1	
			住居	2		数	2	
			集合住宅	3		密度・建物間隔	3	
			店舗	4		距離	4	
			デパート	5		固有名詞	5	
			オフィス	6		形態	6	
			金融	7		スケール	7	
			観光	8		素材	8	
			茶道	9		色彩	9	
			工業	10		日本らしい	10	
			教育	11		京都らしい	11	
			寺社・境内	12		地域らしい	12	
			駅	13		年代	13	
			宿泊	14		明るさ	14	
			美術館	15		陰影	15	
			温泉	16		広さ	16	
			病院	17		モチーフ	17	
			ビル	18		建物などのデザイン・模様	18	
			長屋	19		ツラ・セットバック	19	
			その他	20		建物の立ち方	20	
	空地	グラウンド	墓地	21	内部の様子・ショーウィンドウ	21		
			駐車場	22	上り／下り	22		
			公園・広場	23	人の行動	23		
			空き地	24	音の大小	24		
			交通系	25	気温の高低	25		
			田畑	26	湿度の高低	26		
			建物・街並みの付属物	27	臭い・空気が悪い	27		
			塀・壁・門	28	水量	28		
			庭	29	スピード	29		
			サイン	30	方向性	30		
			人	指定なし	左右・側の指定	31	左右の違	31
					観光客	32	街路のどちら側か	32
					外国人	33	公共性	33
					子ども	34	歩きやすさ	34
					学生	35	危険性	35
					動く車(進行方向)	36	グレード・高級感・格式	36
					動く車(直交方向)	37	時間	37
			路面	なし・車道	駐輪	38	メタファー	38
					駐車	39	まとまり・統一／混雑・多様	39
	側道・交差する道	40			都市性	40		
	工事	41			中心性	41		
	その他沿道の人工物	42			裏	42		
	沿道の植物	43			強さ	43		
	沿道の生物	44			重さ・迫力	44		
	沿道遠方の植物	45			きれいな・美しい	45		
	川・水路	46			かわいい・かっこいい	46		
	その他沿道の地形	47			おしゃれ	47		
	左右の見通し	48			汚い・さびれた	48		
	頭上	路面			なし・車道	49	気持ちいい・さわやか	49
歩道					50	生活感	50	
その他					51	緊張感	51	
地形					52	奥行き感	52	
撒き水・打ち水					53	わかりやすさ	53	
アーケード					54	連続感	54	
その他頭上の人工物					55	変化の有無・普通	55	
空					56	驚き	56	
太陽			57	楽しさ／寂しさ	57			
前方			58	不気味・怖い	58			
前方	見通し	前方の寺社	59	落ち着き・安らぎ・のどか	59			
		その他前方の人工物	60	風情・風流	60			
		前方の道	61	季節感	61			
		前方の車	62	親しみやすさ	62			
		前方の植物	63	変・不思議・違和感・珍しい	63			
		人の声	64	気になる	64			
		それ以外	65	目立つ・印象的・特徴的	65			
		自然的	66	とけこんでいる・自然	66			
		人工的	67	つくられた感じ	67			
		自然的	68	いかにも	68			
嗅覚	風	傾向	69	傾向	69			
		気温	70	記憶	70			
		湿度	71	推測	71			
		空気の質	72	錯覚	72			
		天候	73	疲れ・つらい	73			
行為	天候	願望	74	願望	74			
		主観的	75	善悪・好悪	75			
		その他	76	その他	76			
その他	77	その他	77					

表4-4 様相因子一覧表

大分類	番号	様相因子名	ファセットの組み合わせ方法		例	注釈
			F1	F2		
視覚	群建物	[1] 住居	2,3,19		住居の増減など	※1
		[2] マンション	3		マンションの増減など	※2
		[3] 店舗	4,5		店舗の増減など	※3
		[4] 観光	8,14		観光地・土産物屋など	※4
		[5] 業務	6,7,18		オフィス・ビル・金融など	※5
		[6] 茶道	9		家元・茶道具店など	
		[7] 寺社・境内	12		寺社・境内	
		[8] 教育施設	11		小学校・大学など	
		[9] 駅	13		鉄道駅	
		[10] デパート	5		デパート・百貨店など	
		[11] その他単体建物	15-17,20		病院・温泉・美術館など	
		単体建物	[12] 建物のスケール	1-20	7	大きさ・高さ・その混在など
	[13] 建物の素材		1-20	8	木・瓦など	
	[14] 建物のデザイン		1-20	6,17,18	和風・洋風・町家など	
	[15] 建物の色彩		0-20	9	色・派手さなど	※7
	[16] 建物の年代		0-20	13	新しい・古い・伝統的など	
	[17] 建物の密度		1-20	3	建物密度・建物間の距離	※8
	[18] 建物の立ち方		1-20	19,20	セットバック・敷地レベルの変化など	
	[19] 建物の付属物		28		建物に付着する植物・すだれなど	※8
	[20] 建物内部の様子		1-20	21	開閉店の状況など	
	[21] 人の数		32-36	1-3	人の数の増減	※9
	[22] 観光客・外国人		33,34		観光客・外国人	※9
	[23] 子ども		35		子ども	
	[24] 学生	36		大学生	※10	
	[25] 人の行動		23	行列に並ぶ人・休む人など		
	[26] 車の数	37,38,63		車の増減・種類など		
	[27] 空地	21-27,30		公園・墓地・庭など		
	[28] 塀・壁	29		生垣・ブロック塀など		
	[29] サイン	31		看板などの増減・その内容など		
	[30] 工事	42		工事の増減や存在		
	[31] 駐輪	39		駐輪の増減や存在		
	[32] その他沿道の人工物	40,43,54		地蔵・打ち水・バス停・電線・駐車など		
	[33] 沿道の植物	44		木・花・森など	※11	
	[34] 沿道の生物	45		蝉・鳥・犬など	※12	
	[35] 川・水路	47		川・水路・溝など		
	[36] その他沿道の地形	48		崖・敷地レベルの変化など		
	[37] 空	57,58		空・太陽など		
	[38] アークード	55		アーケード		
	[39] 街路の幅	50-52	7	街路の幅・歩道の幅など	※13	
	[40] 街路の色彩・テクスチャ	50-52	8,9	石畳・アスファルトなど		
	[41] 街路の勾配	50-53	22	上り下り・勾配の変化など		
	[42] 街路の形態	50-52	6	まっすぐ・交差点など		
	[43] その他ルート上の街路について	52		参道・橋など		
	[44] 交差する街路について	41		幅・色彩・通りの様子など		
	[45] 明るさ・陰影	0	14,15	雰囲気・明るさ・日当たりなど		
	[46] 空間の広さ・開放感	0	16	開け具合・開放感・圧迫感など		
	[47] 視界・見通し	59		前方・左右の視界		
	[48] 前方の寺社	60		前方の寺・鳥居など		
[49] 遠方の山や森	46,64		前方・左右の山や森など			
聴覚	[50] 音環境	65-67	24	静か・うるさいなど		
	[51] 人の声	65		子どもの声など		
	[52] 人工的な音	66		生活音・車の音など		
	[53] 自然の音	67		蝉の声・川・川のおいなど		
嗅覚	[54] 人工的なにおい・空気質	68,73		食べ物・排気ガスのおいなど		
	[55] 自然のおい	69		緑・川のおいなど		
触覚	[56] 気温	0,71	25	涼しい・暑い・その要因		
	[57] 風	70		風の有無・要因など		
印象	[58] 好み		46-50,76	好き・嫌い・きれい・気持ちいいなど		
	[59] 統一性		40	建物や看板などの統一性		
	[60] 普通さ		56	普通・変化があったなど		
	[61] 調和・特異		64-68	調和・うそくささなど		
	[62] 楽しさ・賑わい		58,59	楽しい・寂しいなど		
	[63] 落ち着き・風情		60-62	落ち着き・風情・季節感など		
	[64] 都市性		41	都市的・田舎っぽいなど		
	[65] 中心性		42	中心・はずれ・つなぎなど		
	[66] 日本らしさ		10	日本らしい・和風		
	[67] 京都らしさ		11	京都らしい		
	[68] 地域らしさ		12	鳥丸らしい・西陣らしいなど		
	[69] いかにも		69	いかにも○○だ・The ○○だなど		
	[70] グレード		37	高級・安っぽいなど		
	[71] 生活感		51	生活感の有無		
	[72] 親しみ		63	親しみがあるなど		
	[73] 裏		43	裏側・裏道など		
	[74] 歩きやすさ		35,36	歩きやすさ・車が危険など		
その他	[75] 固有名詞(場所)	0,21-27,44-48,50-53	5	地域名・山や川の名前など		
	[76] 固有名詞(建物)	1-20	5	店名・駅名など		
	[77] 街路の左右の比較		32	街並みの違い・同一性など	※14	
	[78] 街路のサイド		33	自分の歩いている側・反対側	※15	

※1 複数用途の混在については、それぞれにカウントする(建物用途すべてについて)

※2 「家」「住宅街」および「アパート」「長屋」などはカウントしていない

※3 観光用の土産物店も含むが「観光地」だけのものは除く/デパートを含む

※4 「観光客」のような観光地を示唆する言葉を含む

※5 「ビル」は特定の用途を指示しないが、オフィスなどの用途を示唆するので、ここにカウントする

※6 大小・高低の混在はそれぞれについてカウントせず、「混在」としてカウントした

※7 色彩・年代などについては、空間全体について述べた表記が散見されたが、建物や街並みを要因とするものが多いように思われるので、ここで扱う

※8 隣り合う建物同士の距離の大小は、それぞれ「密度が低い」「密度が高い」とする

※9 自転車は除く/人の属性と数との組み合わせのものは、適宜判断する。たとえば「観光客が増加」は、明らかに人の数も増えていると思われるのでここに含み、「女性が増えた」は、女性の割合が増えただけと思われるため、除く

※10 ここでの学生は大学生のみを指す

※11 「自然」は植物とみならず/生垣や建物に付着する植物も植物とみならず

※12 蝉など、音で判断しているものも含む

※13 [39]~[43]はルート上の街路についての記録のみプロットし、交差する街路は含まない

※14 どちらか片方だけを指定しているものも含む(「左は○○」など)

※15 明らかにそうであると判断できるもののみ。両側を指すものは判断が難しいので省略した/大通り沿いであるルートIと、ルートIIの490mの範囲内においてのみ判断した

表4-5 様相因子と順表現

大分類	番号	様相因子名	順表現の内容
視覚	群建物	[1] 住居	ある・多い・増加
		[2] マンション	ある・多い・増加
		[3] 店舗	ある・多い・増加
		[4] 観光	ある・多い・増加
		[5] 業務	ある・多い・増加
		[6] 茶道	ある・多い・増加
	単体建物	[7] 寺社・境内	ある・多い・増加
		[8] 教育施設	ある・多い・増加
		[9] 駅	ある・多い・増加
		[10] デパート	ある・多い・増加
		[11] その他単体建物	ある・多い・増加
	建物の属性	[12] 建物のスケール	大きい
		[13] 建物の素材	伝統素材
		[14] 建物のデザイン	和風・町家
		[15] 建物の色彩	無彩色
		[16] 建物の年代	古い
		[17] 建物の密度	高い
		[18] 建物の立ち方	記録あり
		[19] 建物の付属物	ある・多い・増加
		[20] 建物内部の様子	オープン
		人・車	[21] 人の数
	[22] 観光客・外国人		ある・多い・増加
	[23] 子ども		ある・多い・増加
	[24] 学生		ある・多い・増加
	[25] 人の行動		記録あり
	[26] 車の数		ある・多い・増加
	その他沿道の要素	[27] 空地	ある・多い・増加
		[28] 塀・壁	ある・多い・増加
		[29] サイン	ある・多い・増加
		[30] 工事	ある・多い・増加
		[31] 駐輪	ある・多い・増加
		[32] その他沿道の人工物	ある・多い・増加
		[33] 沿道の植物	ある・多い・増加
		[34] 沿道の生物	ある・多い・増加
		[35] 川・水路	ある・多い・増加
		[36] その他沿道の地形	ある・多い・増加
	上	[37] 空	見える
		[38] アーケード	ある・多い・増加
	下	[39] 街路の幅	太い
		[40] 街路の色彩・テクスチャ	アスファルト以外
		[41] 街路の勾配	ある・多い・増加
		[42] 街路の形態	記録あり
		[43] その他ルート上の街路について	記録あり
		[44] 交差する街路について	記録あり

大分類	番号	様相因子名	順表現の内容
視覚	全体・遠方	[45] 明るさ・陰影	明るい
		[46] 空間の広さ・開放感	開放的
		[47] 視界・見通し	ある・多い・増加
		[48] 前方の寺社	見える
		[49] 遠方の山や森	見える
聴覚	[50] 音環境	静か	
	[51] 人の声	記録あり	
	[52] 人工的な音	記録あり	
嗅覚	[53] 自然の音	記録あり	
	[54] 人工的なにおい・空気質	いいにおい	
触覚	[55] 自然のにおい	記録あり	
	[56] 気温	涼しい	
印象	[57] 風	ある・強まる	
	[58] 好み	好ましい・美しい	
	[59] 統一性	統一性がある	
	[60] 普通さ	普通・特徴がない	
	[61] 調和・特異	調和している	
	[62] 楽しさ・賑わい	楽しい	
	[63] 落ち着き・風情	落ち着きがある	
	[64] 都市性	都市的	
	[65] 中心性	中心的	
	[66] 日本らしさ	日本らしい	
	[67] 京都らしさ	京都らしい	
	[68] 地域らしさ	その地域らしい	
	[69] いかにも	いかにも○○だ	
	[70] グレード	高級	
[71] 生活感	生活感がある		
その他	[72] 親しみ	親しみがある	
	[73] 裏	裏的だ	
	[74] 歩きやすさ	歩きやすい	
	[75] 固有名詞(場所)	記録あり	
	[76] 固有名詞(建物)	記録あり	
	[77] 街路の左右の比較	左右が同じ	
	[78] 街路のサイド	記録あり	

- 1 中尾佐助：分類の発想 思考のルールをつくる，朝日選書，1990，pp.34-43.
- 2 建築基準法施行規則別紙 (<http://www.kakunin-s.com/dl/kakunin/youtokubun.pdf>)
- 3 金明哲：テキストデータの統計科学入門，岩波書店，2009などに詳しい。
- 4 Canter, D. (ed.) : Facet Theory, Springer-Verlag, 1985. に詳しい。
- 5 ツリーを用いると前述したような問題が生じるが、ファセット内の分類にはツリーを用いるのが現実的には適当である。建築関係のドキュメントの分類法である「CI/SfB分類法」(DNIAS翻訳グループ“建築”：CI/SfB分類法入門，DNIAS Annual Report, vol.27, 1969, pp.2.1-2.2.) など、その例も多い。
- 6 二元論的立場では、「客観的」のものは物理量、「主観的」のものは心理量として扱われる。しかし通常物理量とされる「スケール」でも、この実験の場合被験者が判断したスケール感であって、一概に物理量とも心理量とも言えない。よって、このようなぼかしたグラデーション表記としている。
- 7 アレグザンダー, C. : パタン・ランゲージ—環境設計の手引, 平田翰那訳, 鹿島出版会, 1984.
- 8 「⑦大きさ・高さが揃う」「⑧大きさ・高さがバラバラ」については、「建物スケールの統一性」という様相因子として別途取り出すべきとも考えられるが、「[61] 統一性」という様相因子によって補完されているため、分析段階では最終的に排除した。このように細分類の整理に際しても、様相因子リスト全体のバランスを考慮している。
- 9 レイコフ, G. : 認知意味論 言語から見た人間の心, 池上嘉彦・川上誓作他訳, 紀伊國屋書店, 1993, pp.24-25.
- 10 ただし、たとえば「[1] 住宅」についてもその量や密度などを考えれば連続的であるが、ザディの理論に従い、そのもの単体で考えたときの在り方を基準にしている。なおこのタイプのカテゴリーでは、ファセット分類からの抽出段階でF2を使用していない。

4.4 領域表現によるエリアの様相の記述

前小節で抽出した様相因子を活用して、領域表現による様相の記述を行なう。領域表現は、各被験者が自由に分割した領域（以下単に「領域」と呼ぶ）の様相を要約した自由記述であるが、4.1.2で検出したエリアと対応づけて記述ができれば、共有された領域の様相を記述する有力な手段となる。しかし一人一人の区切った領域と、共有されたエリアとでは、その指示する範囲が異なる。よって何らかの基準で領域表現をエリアへと振り分けなければならない。よってまず4.4.1で領域表現を各エリアへと振り分け、それによって各エリアの様相を記述する。

4.4.1 領域表現のエリアへの振り分け

まずエリアと領域の長さを以下のように定義する（一般的なエリアや領域で考える）。

l_A : エリアの長さ

l_a : 領域の長さ¹

$l_{A \cap a}$: 両者の重複部分の長さ

そして両者のとりうる関係のパターンを描いたのが図4-9である。このうちi)の場合はほぼない。ii)～iv)のうちなるべく多くの領域表現をエリアに分配するため、2段階での振り分けを行なう。

① l_a を基準とした振り分け

まず、被験者の定めた領域長さを基準としたエリアと領域の重複度合い M_1 を

$$M_1 = l_{A \cap a} / l_a \quad \dots(5)$$

とし、 $M_1 \geq 0.5$ となるものをそのエリアに振り分ける。図4-9のi)のケースの領域は一致するエリアへ、ii)のケースの領域はすべて含まれるエリアへと振り分けられ、iii) iv)の一部も振り分けられる。なお閾値を0.5に定めたため、この段階で複数エリアに振り分けられることはない。

② l_A を基準とした振り分け

①でどのエリアにも振り分けられなかったものを対象に、第2段階の振り分けをする。エリア長さを基準とした重複度合い M_2 を

$$M_2 = l_{A \cap a} / l_A \quad \dots(6)$$

と定め、 $M_2 \geq 0.5$ となるものをそのエリアに振り分ける。この場合、複数エリアに振り分けられることがあるが（図4-10）、このすべてのエリアへの振り分けを許す。また、エッジ周辺を一つの領域とした場合など、どこにも振り分けられないものについては切り捨てる（図4-11）。

4.4.2 エリアの様相の記述

振り分けられた領域表現を、4.3で得た様相因子

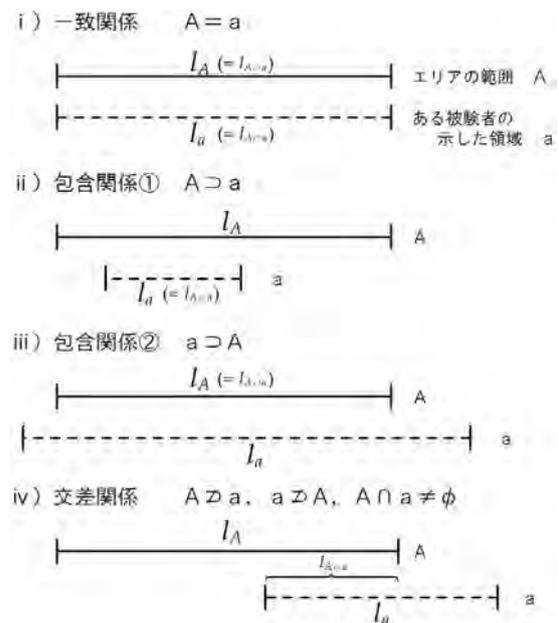


図4-9 エリアと領域の関係

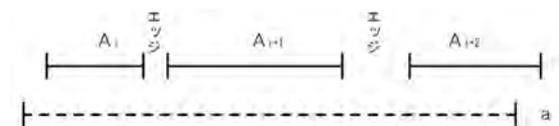


図4-10 複数エリアへの振り分けの起こる場合

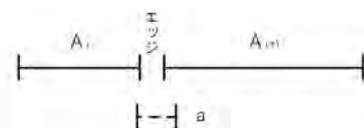


図4-11 どのエリアにも振り分けられない場合

によって分解し、集計する（表4-7）。

ここで「数」とは、振り分けられたもののうちその様相因子を使った領域表現数を示す。しかし各エリアへの振り分け数にはばらつきがあるため、振り分けられた領域表現数に対する各様相因子使用数の「占有率」を算出している。ここで、A I-2の「[59] 統一性」のように占有率がマイナスになっているものがある。順表現、逆表現の差し引きをしているため、逆表現が多いものについては負の占有率となるのである。たとえばあるエリアにおいてある様相因子が、順表現2、逆表現8だった場合、数は「2-8=-6」となり、この-6を振り分けられた領域表現数で割って、占有率を算出する。ただし表4-7の順位は占有率の絶対値によってつけている。

この集計表により、そのエリアの様相がどのような言葉で表わされるかを明らかにすることができた。

4.4.3 コネクターとシフターによるシーケンス記述

先に挙げた表4-7は、ルートIの最初の隣り合う2エリアについての集計表を示している。これをよく見ると、「[3] 店舗」「[50] 音環境」などは両エリアで占有率をほとんど変えていない。一方「[9] 駅」はA I-1にしか見られず、「[59] 統一性」はA I-2になって登場するなど、エリア間に大きな違いもある。このように連続したエリア間に、変わらないものと変わるものがある。

このことに関して、「コネクター」(connector)、「シフター」(shifter)という概念を導入する。門内はコネクターを「情景に一体感をもたらす特徴」、シフターを「情景にゆらぎをもたらす特徴」と定義し、街並みを構成する建物の要素に対してこの言葉をあて、分析している²。本研究では門内の研究から対象を拡張し、様相を捉えるあらゆる言葉に対してコネクター・シフターの概念を適用する。経路上に継起する様相に対し、コネクターは連続性を、シフターは断絶性をもたらすことになる。

この概念をもって、エリアごとの集計表をシーケンシャルにつなげて記述する（図4-12）。なおこの図ではわかりやすくするために、様相因子に対し以下の処理をしている。

- ・ [1] などの番号を外した
- ・ 表現内容を直接表わすような言葉に変更した（例：「[50] 音環境」の順表現→「静か」）
- ・ 逆表現が順表現を上回る場合は逆表現を直接表わす表記とし、占有率と数の符号を全部正にした（例：「[50] 音環境」の逆表現→「音が大きい」）
- ・ 「[75] 固有名詞（場所）」「[76] 固有名詞（建物）」についてはそれぞれのエリアでの具体的な指示内容を「 」で表示し、前後のエリアでも中身が違えば別の言葉として扱うものとした

各エリアには、写真とともに領域表現にあらわれた様相因子を掲載している³。その移り変わりの表記はコネクター・シフターの概念を強く反映している（図4-12凡例参照）。すなわち、連続するエリアの両方で登場するものはコネクターの性質が強く、特に薄いグレーでつながれたものは占有率の増減が10%未満のものを示す。逆に、前後エリア間で共通しないものは直角三角形で示され、特に濃いグレーのものは10%以上増減しているものを示し、シフターの性質が強い。

表4-7 領域表現のエリア別の集計例

A I-1 … 振り分けられた領域表現数は 21

順位	様相因子	数	占有率
1	[9] 駅	9	43%
2	[3] 店舗	4	19%
2	[46] 空間の広さ・開放感	4	19%
4	[62] 普通さ	3	14%
5	[5] 業務	2	10%
5	[27] 空地	2	10%
5	[50] 音環境	-2	-10%
5	[78] 固有名詞(場所)	2	10%
∴	∴	∴	∴

A I-2 … 振り分けられた領域表現数は 47

順位	様相因子	数	占有率
1	[61] 統一性	-20	-43%
2	[5] 業務	18	38%
3	[3] 店舗	10	21%
4	[1] 住居	4	9%
4	[21] 人の数	4	9%
4	[50] 音環境	-4	-9%
4	[62] 普通さ	4	9%
8	[16] 建物の年代	3	6%
∴	∴	∴	∴

ルート I



ルート II



ルート III





図4-12 領域表現によるエリアのシーケンス記述

- 1 領域の長さの算出にあたり、不連続分割の場合はその地点を、連続分割の場合は分割範囲の midpoint を領域の端点と定める。
- 2 門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究，東京大学学位論文，1997，p.315.
- 3 様相因子は、「占有率」の絶対値が5%を超え、かつ「数」が2以上ものを採用するので、エリアごとに採用数が異なっている。また占有率およびそのエリア間の差分については小数点以下を四捨五入しているため、外見上は前後の値の関係が整合しない場合がある。

4.5 様相表現プロットグラフの作成

様相表現も、領域表現と同様に様相因子を用いて分解し、それを記録地点と対応づけたプロットグラフを作成する。このときのプロットする地点としては図4-13に示すように、

- ①地点表現の場合、その位置
- ②変遷表現の場合、中点（(始点+終点)/2）
- ③範囲表現の場合、始点
- ④特異表現の場合、その位置

を採用する。そして記録地点を20mおきの数値に直したもの（つまりスタート地点からの距離を20で割った整数部分）によってプロットグラフを作成する。

図4-14はプロットグラフの一例および説明である。細分類は色によって表わし、凡例を左下に示す。凡例は順表現、中間表現、逆表現に分かれるが、様相因子によっては順表現しかないようなものもある。そして順表現および中間表現は軸の右側に、逆表現は左側にプロットされる。さらに4.3.2(5)で指示範囲が「部分」とされたものは斜線で表示する。なお、すべてのプロットグラフはAppendix-Cに掲載している。

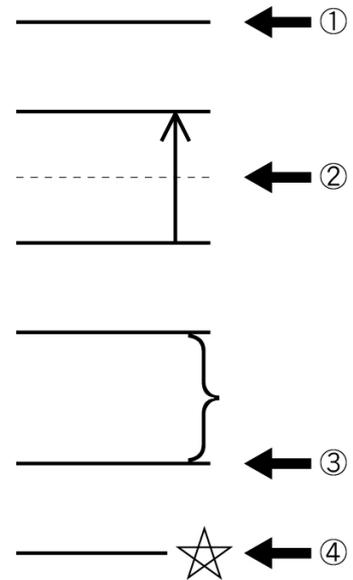


図 4-13
プロットグラフで用いるプロット地点

以上で、都市の様相の記述をすることができた。4種類の記録データに基づく4種類の記述は、第5章以降の分析の土台となる。また曖昧で属人的な様相を多主体で可視的に共有できるような手法を開発したという意義も大きい。

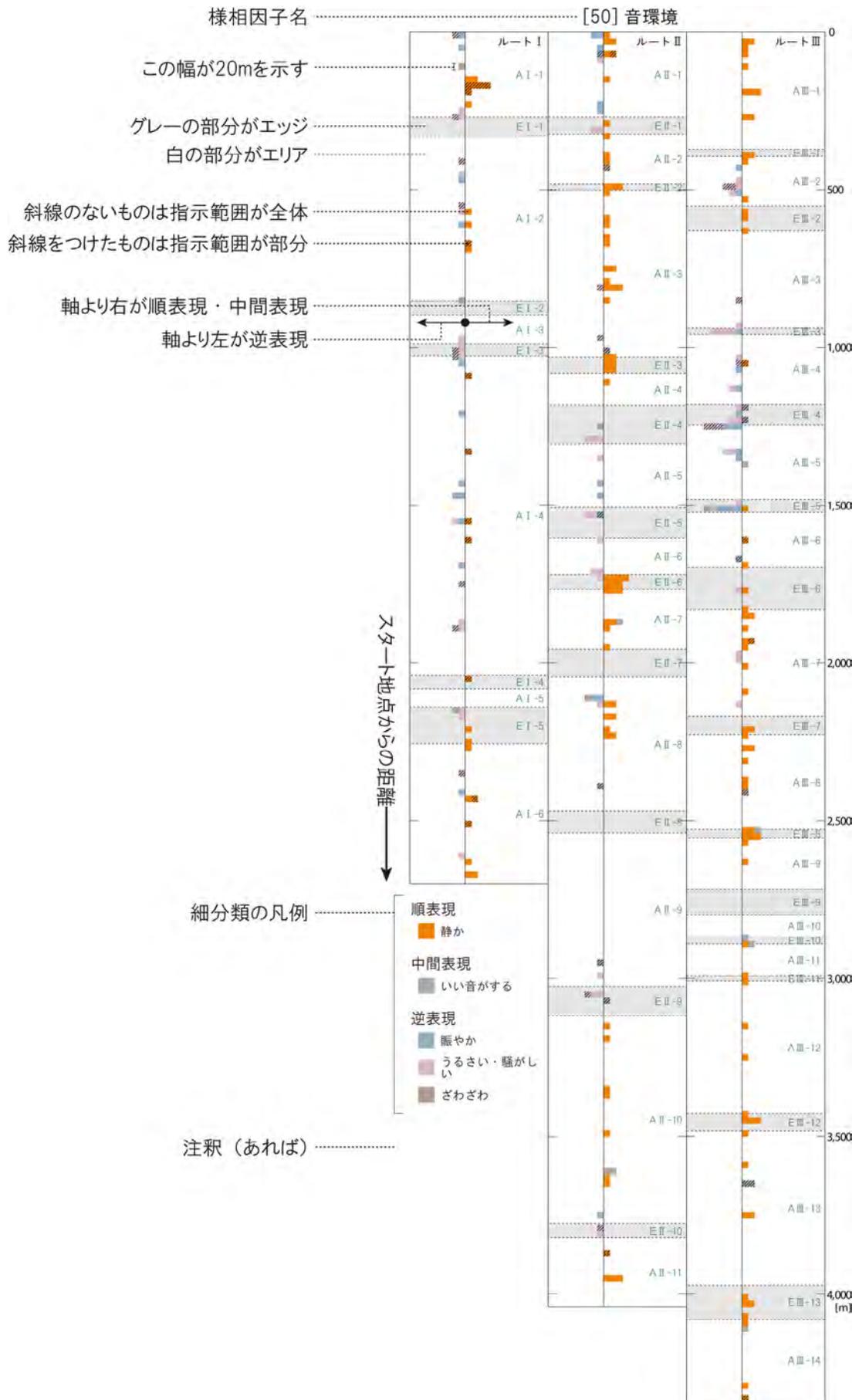


図4-14 プロットグラフの説明図

第5章

記述データに基づく都市の様相の分析

第5章～第7章は、都市の様相を分析し、モデルを構想するパートである。このうちまず本章では、第4章で得られた記述データの分析を通して、都市の様相を読み解いてゆく。

本論では時間・空間・人間からなる世界モデルを考えるが、都市はこのうち空間を充たし、空間において広がっている。経路歩行実験の3ルートは都市空間の中に指定された経路であり、第4章で得られた記述データもまた、様相の空間的なあらわれ方を示している。本章ではこのデータを多彩な手法のデータマイニングによって読み解いてゆくことで、主に様相と空間との関係について知見やモデルを得ることを目的としている。

本章の構成について述べる。まず5.1では記述データについての基礎的な分析を行ない、次節以降への下準備とする。またここでは記録量のルート上での変化や記録傾向の被験者ごとの違いなどの、記述以前の記録データについても考察しておく。5.2ではエッジ・エリアのそれぞれについて分析し、さらにはルート全体のシーケンスの分析も行なうことで、都市の様相のマクロスケールでの変遷を明らかにする。5.3では様相表現と領域表現に用いられた言葉について、様相因子を用いて分析する。

5.1 記述・記録データの基礎的分析

5.1.1 領域分割グラフの分析

最初に領域分割グラフを用いて分析を行なう。第4章の領域分割グラフを再掲する（図5-1）。

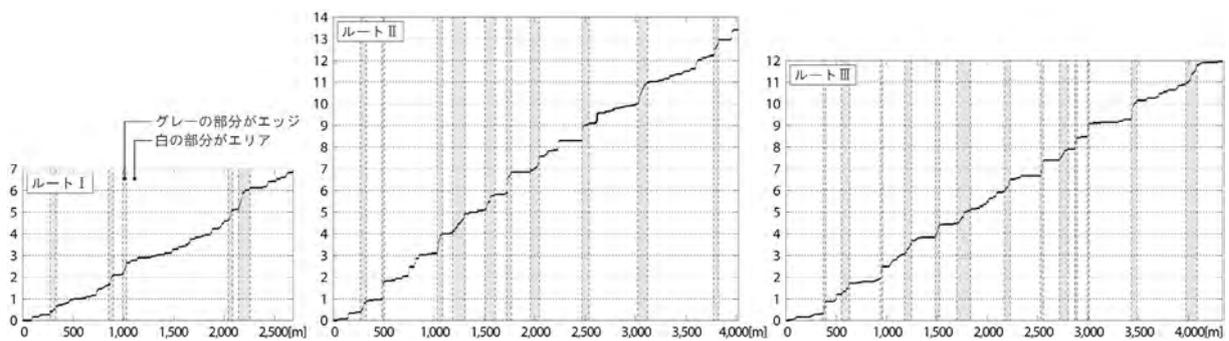


図5-1 3ルートの領域分割グラフ

領域分割グラフの分析のために、基本的な4指標を導入する。

l : 長さ[m]

dD : グラフ落差

S : グラフの傾き[km]。 $1000 \times dD / l$ により定義 (1kmあたりの領域分割グラフの上昇)

l_{a-ave} : 被験者が分割した領域の平均長[m]。 $l / dD (= 1000 / s)$ により定義

これらの指標は、ルート全体にも、エッジにもエリアにも適用できるものである。またグラフの縦軸の値はすでにルートごとに被験者間平均をとったものであったから、以下の分析にはルート間の被験者数のばらつきは関係しない。

4指標の数値を求めたのが表5-1である。ルートごとに、ルート全体における値と全エッジ、全エリアにおける平均値を算出しており、エッジとエリアについてはルート内での数も記している。図5-1と表5-1から、3ルートの大まかな性格が見えてくる。

表5-1 3ルートの領域分割グラフ指標

		数	l [m]	dD	S [/km]	l_{a-ave} [m]
ルートⅠ	全体	-	2,684	6.87	2.56	391
	エッジ	5	304	3.00	9.85	-
	エリア	6	2,380	3.87	1.63	-
ルートⅡ	全体	-	4,022	13.41	3.34	300
	エッジ	10	688	8.34	12.12	-
	エリア	11	3,334	5.08	1.52	-
ルートⅢ	全体	-	4,334	11.96	2.76	362
	エッジ	13	696	8.54	12.27	-
	エリア	14	3,638	3.42	0.94	-

ルートⅠは領域平均長が391mと長い。エッジにおける傾きの値が低く、エッジははっきりとしない。領域分割グラフはだらだらと上がり続ける。被験者間で領域分割の共有の度合いが低いのである。

ルートⅡは領域平均長が300mと最も短い。コンパクトな領域が次々とあらわれる。エッジにおける傾きも鋭い。エリアでの傾きはルートⅠと大差ない値となっているが、グラフを見ればルートⅠのように上昇し続けるのではなく、エリア内に小さなエッジ状の落差が複数見られることがわかる。これを含めて、被験者間での領域分割の共有の度合いが高いルートである。

ルートⅢではエリア平均長は中程度であるが、エリアでの傾きの値が特に低い。被験者間でよく共有され、エッジもエリアもはっきりとしたルートである。

これらの指標を用いたエッジ・エリアごとのさらなる分析は、次小節にて行なう。

5.1.2 領域評価指標間の関連性の分析

領域評価について基礎的な分析を行なう。第4章の領域分割グラフを示しておく(図5-2)。

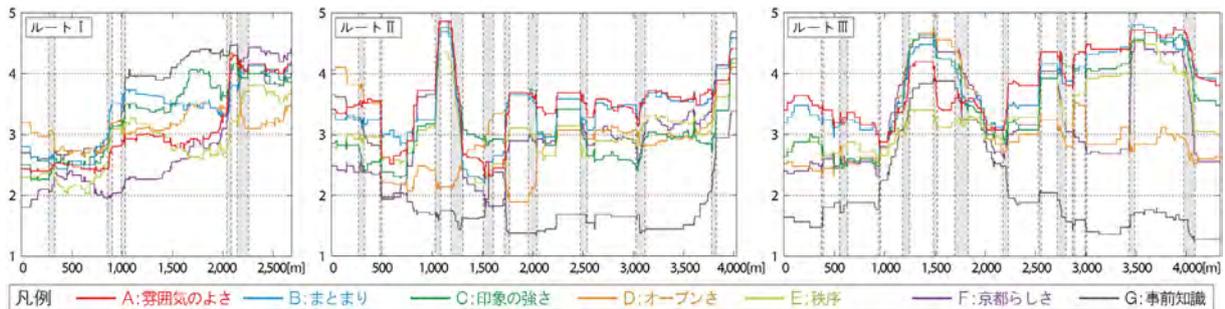


図5-2 3ルートの領域評価グラフ

(1) 相関分析

3ルートの全地点におけるデータをもとに、領域評価7指標の相関係数を求めた¹⁾(表5-2)。

すると、大きくA, B, C, E, Fに相関があり、特に雰囲気のはよさはまとまりや秩序との関連性が強い。またDとGの間にも相関がある。オープンな場所は総じてよく知られているが、必ずしも雰囲気のよさなどの評価は高くないことを示す。

表5-2 領域評価指標間の相関係数

	A	B	C	D	E	F	G
A: 雰囲気のはよさ		0.885	0.730	0.108	0.910	0.762	-0.236
B: まとまり	0.885		0.855	0.267	0.927	0.754	0.034
C: 印象の強さ	0.730	0.855		0.315	0.780	0.733	0.204
D: オープンさ	0.108	0.267	0.315		0.122	0.373	0.655
E: 秩序	0.910	0.927	0.780	0.122		0.737	-0.099
F: 京らしさ	0.762	0.754	0.733	0.373	0.737		0.142
G: 事前知識	-0.236	0.034	0.204	0.655	-0.099	0.142	

(2) 主成分分析

次に、同じく全地点におけるデータを用い、領域評価指標の主成分分析を行なう。Gは歩行前のフレームについて問うやや特殊な指標であるので、A~Fの6指標により分析した。表5-3は主成分負荷量と寄与率である²⁾。

当然ながら先の相関係数と対応した結果となっている。第一主成分は「好印象」、第二主成分は「オープンさ」と名づけることができる。そして第二主成分までの累積寄与率は90%近くに達することから、この2つの主成分で6指標を代表することは妥当である³⁾。2つの主成分は次小節以降の分析にも用いる。

表5-3 主成分負荷量と寄与率

	第一主成分	第二主成分
A: 雰囲気のはよさ	0.952	-0.016
B: まとまり	0.951	0.158
C: 印象の強さ	0.854	0.271
D: オープンさ	0.103	0.982
E: 秩序	0.964	-0.001
F: 京らしさ	0.814	0.345
寄与率	72.0%	16.7%

5.1.3 記録量の変化の分析

(1) ルート全体における変化

様相表現が記録される量の変化を調べるため、各ルートの20mごとの様相表現の記録量を折れ線グラフに表現した(図5-3)⁴。領域分割グラフとエッジ・エリアもあわせて図示している。

グラフはかなり極端に増減を繰り返しており、ある20m区間ではほとんどの被験者が言葉を記すが、次の20m区間ではほとんど記録がないというようなケースも多い。記録する場所としない場所が被験者間で共通していることが伺える。

さらによりマクロな記録量の変遷を明らかにするために、図5-3中に線形回帰直線(点線)を描いている。3ルートとも、後半になると記録が最初の6割ほどに減少する。ルートの構成や疲れの影響もあるであろうが、実験の最初は様相の記録を意識しすぎていたものが、長い距離を歩くことでだんだん慣れて普段の感覚に近づいているとも考えられる。

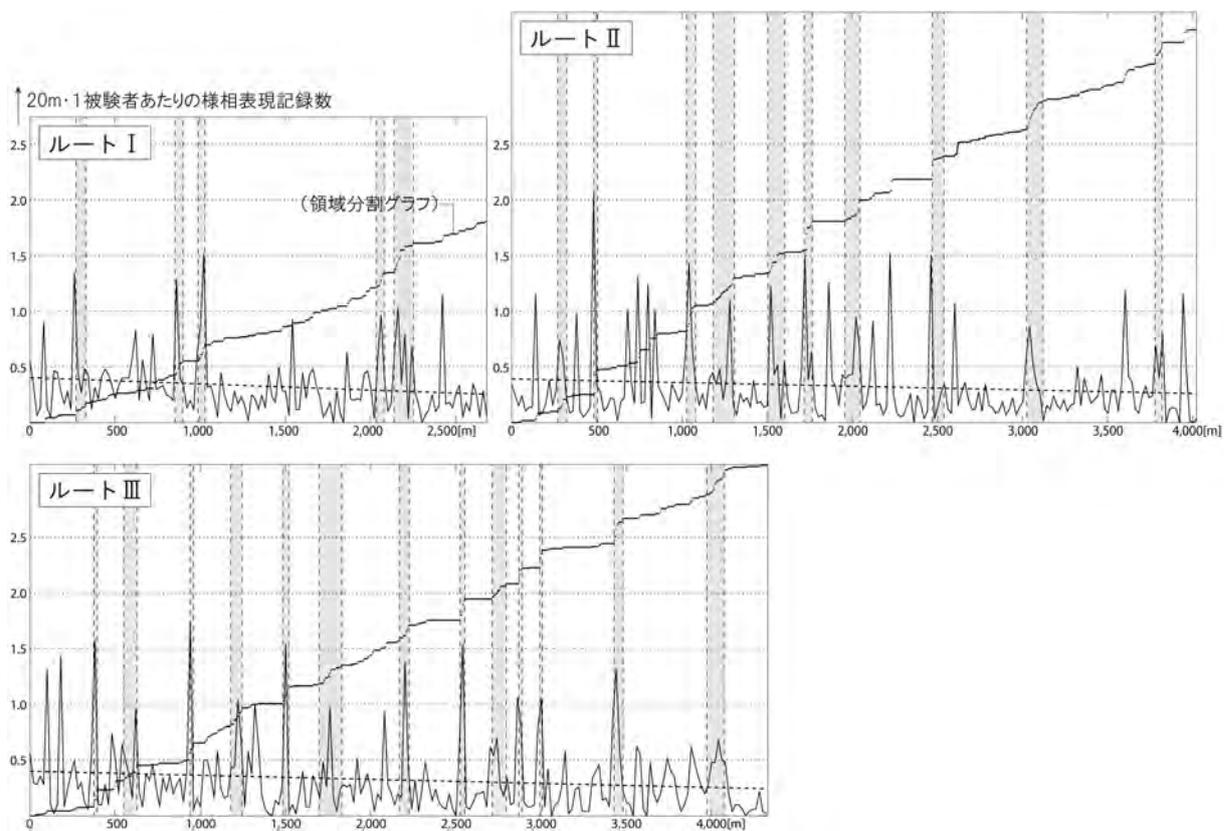


図5-3 ルート全体における記録量の変化

(2) エッジ・エリアにおける変化

図5-3では極端にグラフが上昇する部分のうち多くが、エッジにあることがわかる。エッジにおける記録の集中状況について詳しく検証するため、エッジとエリアそれぞれの内部における様相表現の記録量の変化をグラフで表わした(図5-4)⁵。図5-3と同様の手法を用いて記録量をカウントしているが、より細かいスケールで分析するために区間を2mとし、そして全エッジ・エリアにおいてそれぞれの記録量の変遷を平均したものである。

エッジ内の全地点でのプロット数は2m・1被験者あたり0.072、エリア内では同0.024となっているから、エッジではエリアの3倍もの言葉が使われていることになる。このことから、差異の把握によって様相が顕在化するモデルの有効性が示された。

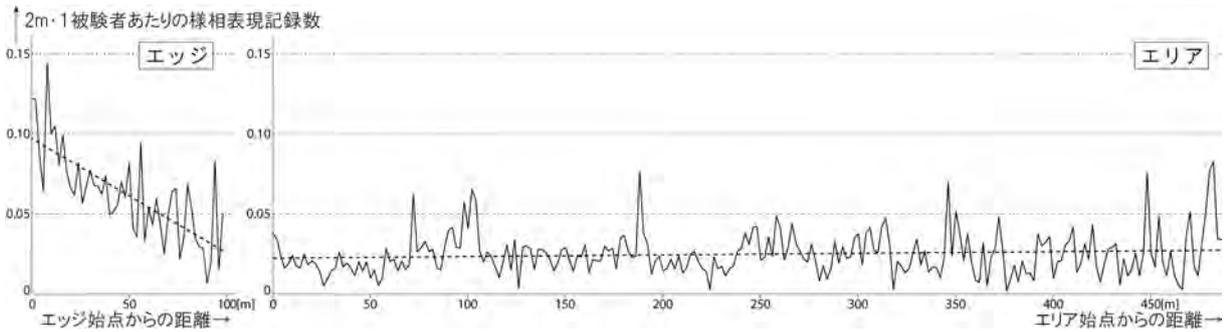


図5-4 エッジ(左)とエリア(右)における記録量の変化

しかも、エッジの特に序盤において記録が集中している。長さの長いエッジは後半に記録数が減少し、そしてエリア序盤も記録が少ない。線形回帰直線を引くと（図5-4中の太い点線）エッジ内では急激な低下傾向が、そしてエリア内では徐々に上昇する傾向が見られる。差異に関して多くの言葉が記録され、その後はいったん言葉が減少し、再びミクロな差異を見つけ始めて言葉が増加するというプロセスのモデルが構想できる（図5-5）。

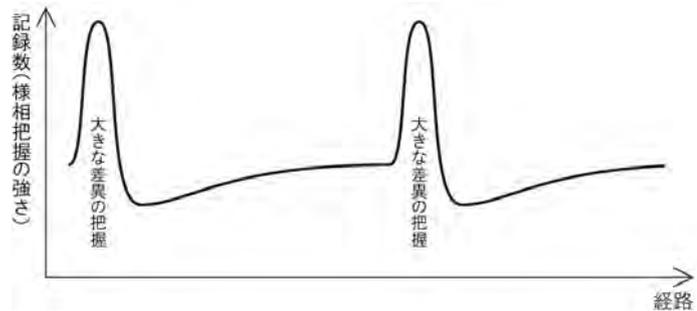


図5-5 経路上における差異の把握と記録数に関するダイアグラム

5.1.4 被験者間の記録傾向のばらつきの分析

本章では共有された様相について主に分析するが、基礎的分析の最後に、被験者ごとの違いについて簡単に触れておく。以下の3つの指標について被験者ごとの値を求め、全ルートデータを合わせて被験者数を区間集計したのが図5-6である。

- ・ 様相表現密度 …100mあたりの様相表現数
- ・ 特異表現率 …様相表現のうち特異表現とした割合
- ・ 領域分割密度 …100mあたりの領域分割数

様相表現密度（図5-6左）を見ると、1~1.5の区間にピークがあるもののグラフは右になだらかに伸びており、非常に熱心にとくさんの記録をする被験者が少なからずいることがわかる。実際の値では被験者104の0.708から被験者114の4.620まで6倍以上の開きがある。この要因には、様相を把握する感受性や、どれほど強く把握すれば記録するかという閾値の差が考えられる。また実験そのものを楽しんでるか、それとも面倒がっているかという差もあると思われる。

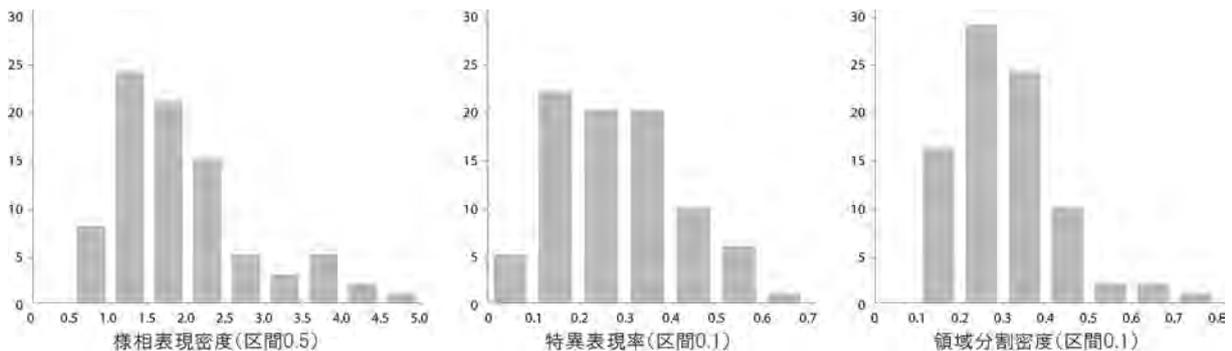


図5-6 3指標の被験者数の区間集計

特異表現率（図5-6中）でも、被験者124の0から被験者113の0.674まで非常に大きな開きがある。特異表現率が低い被験者は全体的な雰囲気や法則を捉える傾向がある一方、高い被験者は法則の破れを指摘したり、自分に興味のあるものを次々と発見したりして歩く傾向があると言える。

領域分割密度（図5-6右）では、被験者102の0.112から被験者210の0.750までの開きがある。領域を大まかに捉える被験者と、細かく差異を拾い出す被験者の違いである。

なお、以上3指標の相関係数（単相関）は表5-4のようになる。様相表現密度は他2指標と弱い相関をもつが、特異表現率と領域分割密度はほぼ無相関である。

このように、様相の捉え方、それに対する表現の仕方には人によってばらつきが大きいことが定量的に理解できる。それを解消するための手立てが、多数の被験者の記録の重ね合わせであった。

表5-4 3指標の相関係数

	様相表現密度	特異表現率	領域分割密度
様相表現密度		0.321	0.440
特異表現率	0.321		0.031
領域分割密度	0.440	0.031	

¹ 全地点において全被験者の全領域評価値の平均を求め、その値に対してピアソンの積率相関係数（単相関）を用いている。

² バリマックス回転により主成分を求めている。

³ 6指標が単純な2主成分に縮約できたことは分析の視点の明確化のためにはよかったが、A、B、C、E、Fの5指標が相関するという結果は評価指標の独立性の低さを表わしている。7指標の選択に偏りがあったことは否めない。少数指標の選定に関してはやはり3.3の注釈3で触れた船越らの研究のように、多数の形容詞対から始めた絞り込みをするのが望ましい。このことは実験の汎用化に向けた課題である。

⁴ 様相表現の20mごとの記録数に対し、指示対象が全体の記録は1、部分の記録は0.5をかけて合算し（順表現・逆表現の区別はなし）、20mあたり、被験者1人あたりに割り戻した数値を求めている。また記録数をカウントする位置としては、4.5で様相因子のプロット時に用いたのと同様の考え方で、以下を用いている。①地点表現の位置 ②変遷表現の midpoint ③範囲表現の始点 ④特異表現の位置

ここで言う記録数は基本的にはAppendix-Bに掲載する全様相表現の数であるが、同じ被験者が同じ場所で記した様相表現のうち「/」で区切られたものについては、その区切られた文の数をカウントしている。「/」は、文章が繋がっていない、別のタイミングで書いたと考えられる、内容が異なるといった場合に用いた区切りである。その基準は非常に微妙なものであるが、全様相表現を通じて、筆者の基準を変えずに区切るよう努めた。

⁵ それぞれのエッジやエリアの始点から2m区切りの地点ごとに、記録数に指示範囲が全体の記録は1、部分の記録は0.5をかけたものを合算し（順表現・逆表現の区別はなし）、その平均をとっている。この際エッジ・エリアの長さにはばらつきがあるので、グラフの右側にゆくほどエッジ・エリアのサンプル数が減少することになるが、サンプル数が5未満になるところでグラフを打ち切っている。

5.2 エッジ・エリアとそのシーケンスの分析

5.2.1 エッジの分析

(1) 領域分割グラフによる分析

① 基本的分析

各エッジにおけるエッジの長さ l とグラフ落差 dD の2指標を用いて、散布図を作成した (図5-7)。

かなりばらついた配置となっている。エッジ検出の際に dD に閾値 (ルート I で0.4、ルート II と III で0.5) を設けた影響もあるが、それにしてもばらつきが大きい。短い範囲で急に様相が変わるもの、そこまで大きくは変わらないもの、あるいはゆっくりとではあるが様相が大きく変化してゆくものなど、エッジにはさまざまなものがある。



図5-7 エッジにおける長さ l とグラフ落差 dD の散布図

② 街路構造とエッジ

第4章の図4-6を見ると、大通りと交差する場所や曲がり角においてエッジが生じやすいことが伺える。実際これらの位置を調べると表5-5のようになる¹⁾。

表5-5 エッジ・エリアと街路構造

	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A	E	A				
	1	1	2	2	3	3	4	4	5	5	6	6	7	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	12	13	13	14
ルート I	x	x				x	x			x	x																
ルート II				c		c				x/3c	x	c	c	4c		c	c	x		x							
ルート III		c		c				c						x		c	c				c					c	

(x: 大通りとの交差を含む c: 曲がり角を含む (複数ある場合は数字で示す))

そこでこれらのエッジの違いを見るために、図5-7内に大通りとの交差を含むエッジ (太く縁取った点)、曲がり角を含むエッジ (グレーに塗った点) を示し、また各々のプロット (両方含むものは除く) の重心を求めて、エッジ全体のものと比較している。これによると、曲がり角を含むものは l が小さく dD が大きい急変型のエッジとなりやすいことがわかる。大通りとの交差を含むエッジは、大通りとその前後がエッジとなるため l が大きな値をとる。ただしここでの差はさほど大きくない。これらのエッジの顕著な違いは、次の領域評価を用いた分析によって明らかになる。

③ エッジにおける領域分割グラフの立ち上がり形状の分析

領域分割グラフを見ると、エッジの中にも急激に上昇する部分とそうでない部分が見られる。そこで、エッジの始点付近でのグラフの立ち上がりの鋭さを示す「立ち上がり係数」²⁾を導入し、グラフ形状の分析を試みる。この係数は、大きな値であるほどエッジ始点付近でグラフが鋭く立ち上がることを示し、負の値をとるとグラフがエッジ終点付近で立ち上がることを示す。図5-8は、立ち上がり係数の高い順からエッジを並べた図である。

これによると値が大きく正の値をとるエッジ (E III-11まで) と0付近のエッジ (E III-1 から E III

-13まで) が同程度あり、大きく負の値をとるものはE II-7だけしかない。つまりエッジの序盤で様相が急変し、後はなだらかに変わるというタイプと、エッジを通じて一定の変わり方をするタイプが多いが、なだらかな変化の後に急変が訪れるタイプは少ない。変化の多くはまず急激にやってくるのである。これはエッジの特に序盤において様相表現の記録量が多いとする5.1.3(2)の分析とも合致する。

特にこの後の(2)②で詳しく分析する曲がり角のエッジは、最初に様相が変わる傾向がある。またルートIのエッジのほとんどで立ち上がり係数の値は0に近く、やはりなだらかな変化が大通り沿いの様相の特徴であると言える。

(2) 領域評価指標の主成分得点による分析

領域評価指標より割り出した2つの主成分により、全地点の主成分得点を求める。そして2つの主成分得点の各エッジの両端(始点と終点)における落差³を求め、散布図に表わしたのが図5-9である。図の中心に近いほどエッジにおける様相の変化が少なく、外側にゆくほど大きいことを示す。また図では再び、大通りとの交差を含むもの、曲がり角を含むものを区別し、さらにどちらか一方のみを含むエッジおよび全エッジについて、原点からの距離の平均値を同心円により示した。

① 大通りと切斷・縫合、領域感

大通りとの交差点で形成されるエッジ(図5-9中でグレーに塗った点)は、原点近くにプロットされたものが多い。先の領域分割グラフの分析では平均よりも大きな落差をもつエッジとなっていたが、この領域評価主成分得点の落差は小さい。大通りの物理的隔たりや車の交通量により、大通りの両側は違う領域だと捉えられるものの、様相そのものは大きく変化しないことが多いとわかる⁴。領域分割グラフによって記述されていたのは、様相の変化であると同時に領域の不連続性でもあったと考えられる。

竹山実は、街路のもつ作用として、「切斷」と「縫合」を挙げる⁵。切斷とはその街路の両側を違った領域に分ける作用であり、縫合とは両側を一体化させる作用である。それぞれリンチの言うエッジとパスに相当するが、あらゆる街路はこの両方の性質をあわせもつと言える。

常識的に考えると道幅が広い方が切斷の、狭い方が縫合の作用が強いと考えられる。ところが上記の分析によると、大通りは領域把握としては両側を切斷

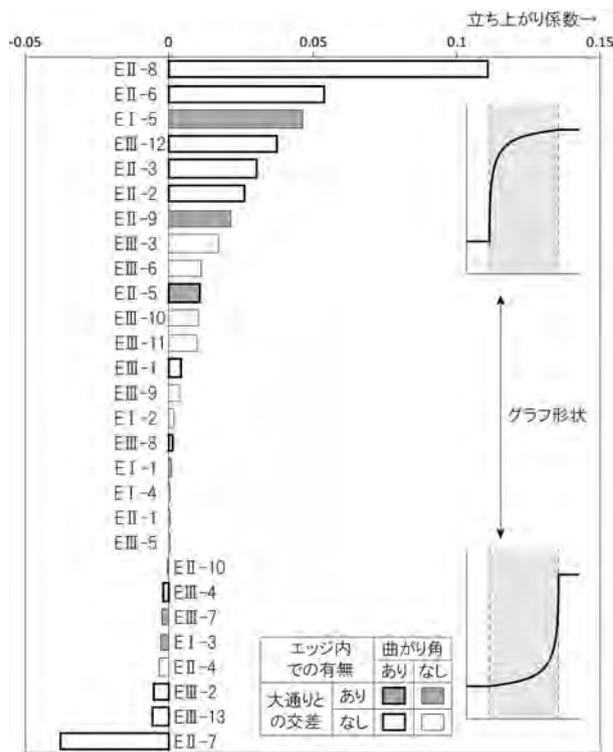


図5-8 エッジの立ち上がり係数のグラフ



※3つの同心円は、表記の3種類のエッジのプロットの、原点からの平均距離を表す。

図5-9 主成分得点のエッジ内落差の散布図

し、様相把握としては縫合する（あるいは切断しない）役割を果たすという興味深い傾向がある。

この領域把握についてのわれわれの感覚を、「領域感」(sense of area) と呼ぶこととしよう。領域感と様相は密接に関係しているが、異なった概念でもある。領域感に関連して、日常生活における「なわばり」(territory)、「近隣」(neighborhood) や「かいいい」の感覚についての研究がなされており⁶、領域感のような感覚は普段の生活行動にも用いられていると考えられる。

京都は直交グリッドの街路網をもち、その街路の中で数本に一本が大通りとなっている。大通りによって分けられた街区の大きなまとまり同士が、それぞれにこのような、領域感と様相にずれのある関係を取り結んでいる傾向が強いと考えられる。

②曲がり角と遮蔽縁

一方曲がり角を含むエッジ（図5-9中で太く縁取った点）は、領域分割グラフの落差とともに、主成分得点においても比較的变化の大きなものが多い。これは、通りごとに建物や道などが異なる装いを見せるという都市的要因の他、角を曲がることにより視界が一瞬で切り替わるという身体的要因も大きいであろう。これにより様相と領域感の変節点が一致する。

ギブソンは、視覚において情報は脳が生み出すのではなく、光の中に含まれているという大胆な仮説を立てた⁷。この考えによると、観察者は自らを取り巻く「包囲光配列」(ambient optical array) の中から情報を抽出すればよい。そしてまた、視対象に関する遮蔽 (occlusion) について考え、隠す面と隠される面を分離する「遮蔽縁」(occluding edge) の概念を生んだ。この理論によれば曲がり角は、われわれに対して急激に大量の新しい情報を提供する強い遮蔽縁となっている（図5-10）。

曲がり角は領域としても様相としても大きな差異を生み出す。ある場所にまっすぐ歩いて到達するのと、角を曲がって到達するのではそこの様相が異なる。様相の移り変わりは街路構造とともに、われわれがいかなる経路で歩くかにも依存していることがわかる。

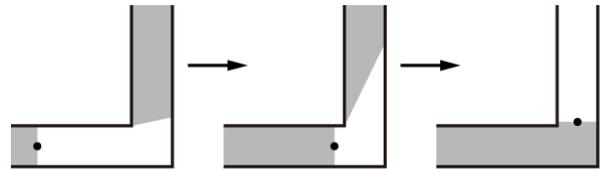


図5-10 曲がり角を曲がるときの包囲光配列の変化(平面図)

5.2.2 エリアの分析

(1) 領域分割グラフによる分析

各エリアについて、 l と dD の2指標を用いて散布図を作成した（図5-11）。

エッジについての散布図にかなりのばらつきが見られたのに対し、エリアではこの2指標に明白な正の相関がみられる。とはいえコンパクトにまとまったエリアと、長くただらと様相が変わり続けるエリアがあり、エリアといっても一口にまとめて語るには常に注意が必要だということがわかる。

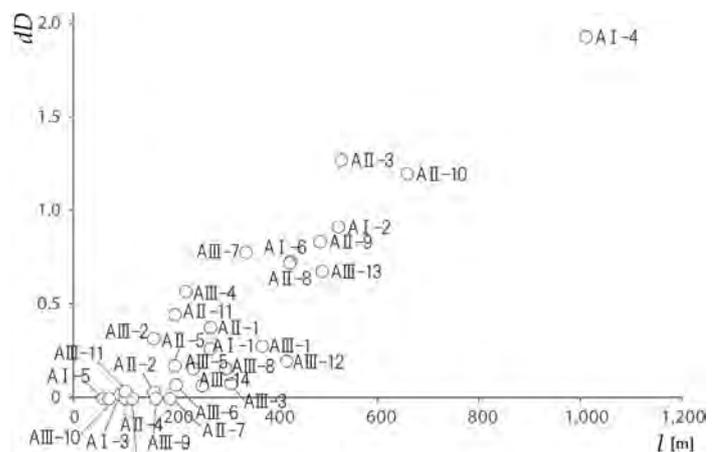


図5-11 エリアにおける長さ l とグラフ落差 dD の散布図

(2) 領域評価指標の主成分得点による分析

続いて各エリア内での領域評価指標の2つの主成分得点の平均値⁸を求め、散布図に表わしたのが図5-12である。

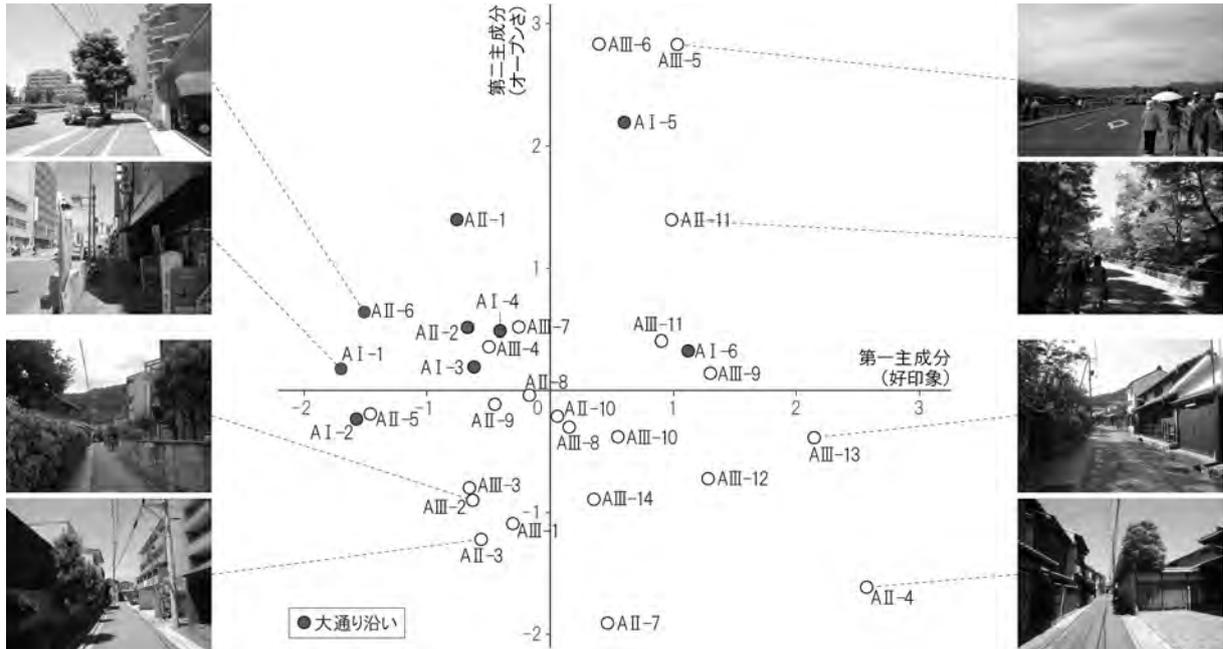


図5-12 主成分得点のエリア内平均の散布図

①各象限の分析

ここで各象限にプロットされたエリアの共通項を探ると、図5-12に写真を挙げるような大まかな分類が得られた。すなわち、「好印象」「オープンさ」とも高い値を示す第一象限には、A I-5（鴨川）、A II-11（金閣寺）、A III-5（渡月橋）、A III-6（高辻通の観光商店街）といった、賑やかな観光地が多い。「好印象」は高いが「オープンさ」は低い第四象限には、A II-4（小川通）、A III-13（鳥居本）をはじめとする伝統的な街並みが入っている。「オープンさ」は高く「好印象」の低い第二象限には、A I-1（四条通）、A II-6（紫明通）といった大通り沿いの道が、そして「好印象」「オープンさ」とも低い第三象限には、どこにでもあるような住宅街が多く含まれている。以上のように、この2つの主成分によってエリアの大まかな分類ができる。

②街路の幅と様相

この中で都市構造との関連を見るとすれば、やはり街路構造についてである。図5-12にグレーの塗りで示した大通り沿いのエリアは、多くがオープンだが印象が良くないことを示す第三象限に属する。第四象限に入ったA I-2（四条通）を含め印象は悪い。そして5.1.1の分析で、ルートIの領域分割グラフがだらだらと上昇することを指摘した。印象が悪く領域感も一致しづらいのが大通りの様相の特徴のようである。一方「好印象」の上位はほとんど細街路が占めており、「アンコ」と「ガワ」の違いが伺える。

ただしA I-5（鴨川）、A I-6（祇園）のような、オープンさと好印象を兼ね備える大通り沿いもある。大通りは人々の活動を引きつけ、都市にバイタリティやイメージアビリティを与える役割も果たしている。

③川を渡るときの様相

大通りとの交差点はエッジになることが多いのに比べて、同じルートに直交する要素である川は、一つのエリアとみなされ、そして好印象でオープンなものとなっている（A I-5の鴨川、A III-5の桂川）。ただし、都市をマクロに見ると川は境界として語られることが多い。都市を観察するスケールを変えると、エッジ・エリアは反転しうる。

5.2.3 エッジ・エリアのシークエンスの分析

(1) 主成分得点による分析

図5-12はすべてのルートのエリアを用いた散布図であるが、ここから各ルートにおけるシークエンスに沿ってエリアをつなぐことができる(図5-13)。これにより、ルートに沿って様相がどのように変化していったかをわかりやすく知ることができる。

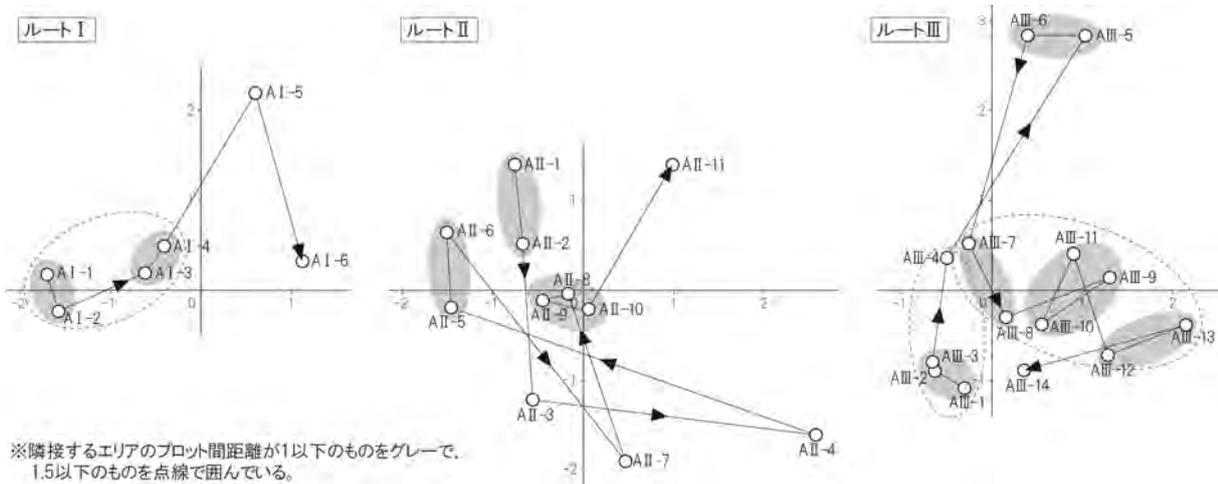


図5-13 主成分得点エリア内平均値のルートごとの変化

この中で、隣接エリア同士のプロットが大きく離れ、その間(つまりエッジ)で様相が急激に変化することもあるが、図5-13中グレーで示した部分のように、隣接エリア間でもあまり様相が変わらないことがある。このとき、それらのエリアはより大きな単位の「マクロエリア」(Macro Area)とも言うべきものを形成している。さらに大きなマクロエリアも想定できる(図5-13の点線部分)。また逆に領域分割グラフ(図5-1)を観察すると、エリア内に小さなエッジ状の部分が見られることがある(ルートIIのスタート地点から750m付近など)。ここでは、より小さな「マイクロエリア」(Micro Area)を想定することが可能である。

つまり領域の概念は本来、幾重もの階層が重なっているものと見るべきである。そのうちのある階層を第4章で定めた基準により「エリア」と呼んでいるが、様相の移り変わりを領域の連続体によって理解するというモデルは、本質的にはマルチスケールなものである(図5-14)。

これは、先の様相と領域感の概念の相違とも関連する。すなわち、エリアのスケールの階層が上がるほど、そのマクロエリア間では領域感としても様相としても切断されている傾向が強いが、下の階層においては領域感としては切断されていても、様相は比較的連続している傾向があると捉えることができる。

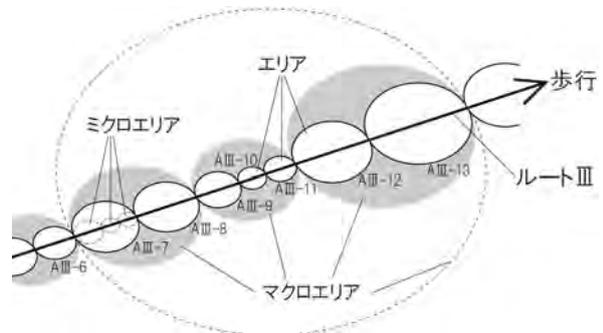


図5-14 領域の階層性のダイアグラム(ルートIIIを例に)

(2) コネクタ・シフターによる分析

4.4.3のシークエンス記述において導入したコネクタとシフターの概念は、経路における様相の移り変わりを理解する上でとりわけ重要な概念である。ここでは、コネクタとシフターを用いてシークエンスを分析する。

まず3ルートのシーケンスについて、図4-12をベースとし、これにエッジ内で記録された様相表現において多く見られた様相因子を加えて記述した(図5-15)⁹。エッジでの様相表現を見るのは、ここでの言葉がエリア間のシフターとなっていることが予想されるからである。さらにエッジ内の様相因子の上位の中で、その前後エリア間での占有率の増減に関係するものをグレーで示し、領域表現と線で結んでいる¹⁰。この図からいくつかの分析を行なう。

①エリア内とエリア間におけるコネクター・シフター

まず領域表現はそのエリア内のコネクターであり、占有率の高いものほどその性質が強いことを示す。そしてエリア間においては4.4.3でも述べたように、占有率の増減によってコネクターとしてもシフターとしても作用する。

ただしコネクター、シフターの両方の性質をあわせもつものも多い。たとえば、AⅢ-3で7%を占める「観光」という言葉は、以後のエリアで順次増加してAⅢ-6で最大値80%を迎え、その後は減少に転じ、AⅢ-9で姿を消す。AⅢ-3～8をつなげるコネクターであるとも言えるし、特にAⅢ-6を他から区別するシフターであるとも言える。コネクターとシフターの間には程度の差しかなく、多くの言葉はその両方の性質を兼ね備えていると考えるべきである。

②エッジにおけるコネクター形成

エッジ内によくあらわれた言葉が次のエリアの領域表現の上位にくる場合、EⅠ-1の「業務」のように、エッジと次のエリアの言葉を線で結んでいる。全ルートを見てみると、AⅡ-8を除くすべてのエッジでこれにあたる言葉がある。これは、エッジにおいてシフターとなった言葉が、次のエリアにおいてコネクターとなっていることを示す。エッジでは差異が把握されるが、そこで差異となっていたことが次の領域をまとめる類似性を担うのである。

逆に、あるエリア内でコネクターとなっていた言葉が次のエリアで大きく占有率を下げていることがエッジ内で記される場合、エッジと前のエリアの言葉を結んでいる。たとえばEⅠ-1の様相因子で5番目に位置する「統一性がある」は、AⅠ-1の「統一性がない」が減っていることを示す。しかしこのようなケースは全体でも5例しかない。エッジは、「前のエリアが終わった」ということより、「(前とは違う)新しいエリアが始まる」ということが把握される場所だと言える。

③コネクターがつなぐ範囲の輻輳性

AⅢ-3で登場する「観光」は、増減しながらAⅢ-8までをつなげる。一方「住居」はAⅢ-1～4とAⅢ-7以降を、「人が多い」はAⅢ-4～6をつなぐコネクターである。このように、コネクターのつなぐ範囲は、入れ子になったり、範囲が交差したりと、輻輳性をもつ。

ここで、コネクターを手掛かりに領域のマクロなまとまりを考えることができる。その際にどのコネクターを軸に置くかで、まとまりの捉え方は非常に複雑になる(図5-16)。

アレクザンダーは、集合の一意的な包含関係によって表わされる「ツリー構造」(tree structure)に対し、各集合が輻輳し合う構造として「セミラティス構造」(semi-lattice structure)を提唱した¹¹(図5-17)。そして近代的都市計画によってつくられた都市がツリー構造をもつものに対し、自然

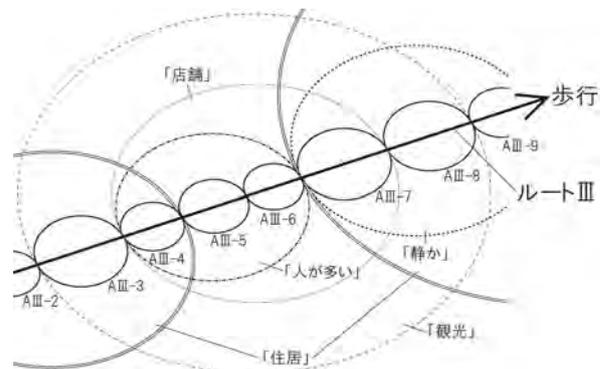


図5-16 領域の輻輳性のダイアグラム(ルートⅢを例に)

ルート I



ルート II

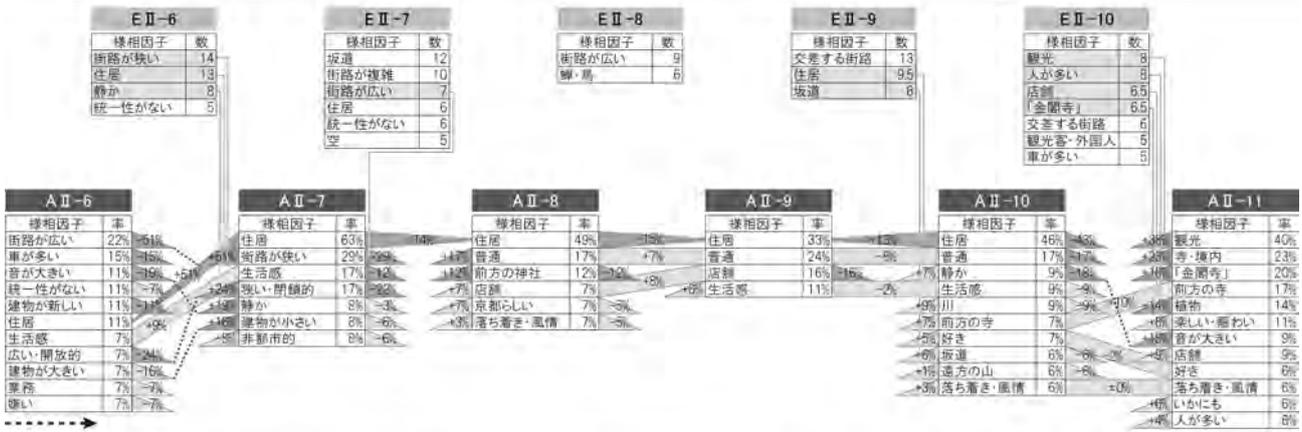


ルート III



図5-15 エッジでの様相表現を

A I-6	
様相因子	率
観光	29%
店舗	25%
京都らしい	23%
「祇園・八坂」	19%
寺・境内	12%
いかにも	10%
「八坂神社」	10%
楽しい・賑わい	8%
建物が古い	8%
観光客・外国人	6%



- 領域表現集計の移り変わり表示の凡例
- 前後エリアに共通し、増減が10%未満のもの
 - 前後エリアに共通し、10%以上増加するもの
 - 前後エリアに共通し、10%以上減少するもの
 - 前後エリアで順表現、逆表現が反転するもの
 - 10%未満減少し、次エリアでは上位にないもの
 - 10%以上減少し、次エリアでは上位にないもの
 - 10%未満増加し、新しく上位に入るもの
 - 10%以上増加し、新しく上位に入るもの

加味したシーケンス記述

につくられた村落などはセミラティス構造となっており、後者の方がより豊かな生活を実現していると主張している。ここでの分析は、実際の都市の領域把握においてセミラティス構造があらわれていることを示している。

なお先に挙げた領域概念の階層構造（図5-14）はツリー構造となっている。これら二つのダイアグラムは、領域に関して異なる見方をとっている。

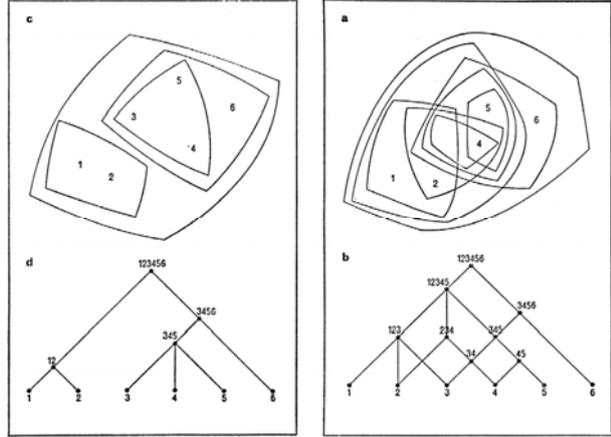


図5-17 ツリー構造(左)とセミラティス構造(右)

(アレグザンダー, C.: 都市はツリーではない, 押野見邦英訳, 別冊國文学・知の最前線「テキストとしての都市」, 前田愛編, 學燈社, 1984, p.29.)

1 「大通り」とは両側合計4車線以上の車道を指し、大通りがエッジとエリアにまたがる場合、大通りの中間地点が含まれる方に振り分ける。「曲がり角」とは進行方向が45度以上変わる場所を指すが、横断歩道を渡るためだけのようない時的な方向の転換は除く。

2 注釈では、これらの値について数式で説明する。まず右表のように記号を定義する。

立ち上がり係数は次の手順で求める。まず領域分割グラフにおいて、エッジの始点と終点を結ぶ直線をひくと（右下図）、この直線は

$$D'(x) = \frac{D(x_{r,n,f}^E) - D(x_{r,n,s}^E - 2)}{x_{r,n,f}^E - x_{r,n,s}^E - 2} (x - x_{r,n,s}^E) + D(x_{r,n,s}^E - 2)$$

として表わされる。このとき始点のDの値を求めるための地点が1地点(2m)ずれていることに注意する。次に、立ち上がり係数Rは各地点でのDとD'との差分の二乗をエッジの区間で平均したものとすが、領域分割グラフの点がD'の直線の上下のどちらかにあるかを勘案し、DがD'よりも大きい場合は係数に加え、小さい場合は係数からひくこととする。つまり絶対値記号を用いて次のように表わされる。

$$R_{r,n} = \sum_{i=1}^{q_{r,n}^E} (D(x_i) - D'(x_i)) |D(x_i) - D'(x_i)| / q_{r,n}^E$$

※ただしx_iはエッジ内の各点で、x_i = x_{r,n,s}^E + 2(i-1)

またq_{r,n}^Eは平均すべき対象地点数で、q_{r,n}^E = (x_{r,n,f}^E - x_{r,n,s}^E) / 2 + 1

3 ここでのエッジでの両端落差とは右図のものを意図している。そのため始点としてとるべき地点が1地点(2m)ずれ、落差は下式となる。

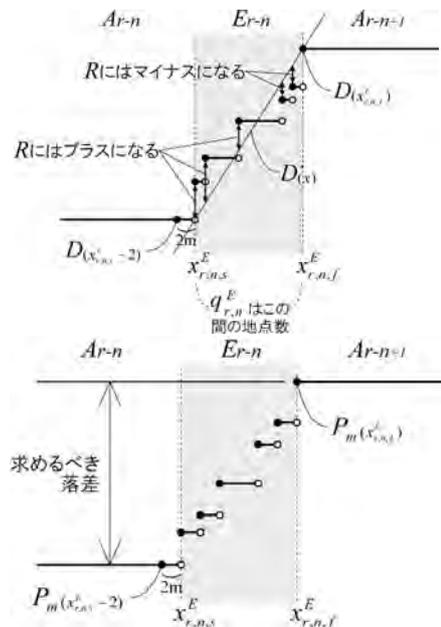
$$P_m(x_{r,n,f}^E) - P_m(x_{r,n,s}^E - 2)$$

4 他に、大通りとの交差を含むエッジはすべてグラフの右側にある（エッジの前より後が好印象になる）ことが指摘できるが、これはルートの場合や歩く向きに依存した、偶然性の高いものと思われる。

5 竹山実：街路の意味, SD選書, 鹿島出版会, 1977, pp.27-32.

6 たとえば、自分のなわばりだと感じる領域(home territory)が家の前の街路の交通量によってどのように変化するかを調べたアプulyードの研究 (Appleyard, D.: Livable streets, University of California Press, 1981,

記号	定義
r	ルート番号 I, II, III
n	当該ルート内におけるエッジ番号またはエリア番号 1, 2, ...
E _{r-n}	ルートrのn番目のエッジ
A _{r-n}	ルートrのn番目のエリア
m	主成分番号 1, 2
x	当該ルートのスタート地点からの距離[m] 0, 2, 4, ...
x _{r,n,s} ^E	E _{r-n} の始点の、スタート地点からの距離
x _{r,n,f} ^E	E _{r-n} の終点の、スタート地点からの距離
x _{r,n,s} ^A	A _{r-n} の始点の、スタート地点からの距離
x _{r,n,f} ^A	A _{r-n} の終点の、スタート地点からの距離
D _{m(x)}	地点xにおける領域分割グラフの値
P _{m(x)}	地点xにおける第m主成分得点



pp.15-28.) や、日本の都市の中に生み出される「かいわい」という曖昧な領域について、その空間的特性や歴史の変遷について詳しく考察した材野の研究などがある(材野博司: かいわい [日本の都心空間], SD選書, 鹿島出版会, 1978.)。

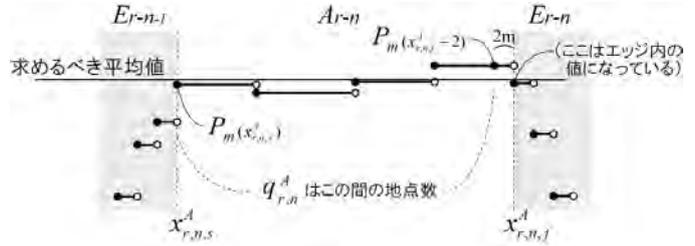
7 ギブソン, J.J.: 生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳, 1985, pp.68-69.

8 ここで求めたい平均値は右図の範囲である。そのため終点としてとるべき地点が1地点(2m) ずれ、平均は下式となる。

$$\sum_{i=1}^{q_{r,n}^A} P_m(x_{r,n,s}^A + 2(i-1)) / q_{r,n}^A$$

※ただし $q_{r,n}^A$ は平均すべき対象地点数で、

$$q_{r,n}^A = (x_{r,n,f}^A - x_{r,n,s}^A) / 2$$



9 エッジでの様相因子は、突出度合いをより鮮明に表わすため占有率ではなく「数」を用いる。その算出には、エッジ内での様相因子の記録数に対し、指示対象が全体の記録は1、部分の記録は0.5をかけて合算し、また順表現と逆表現を差し引きする。その結果、絶対値が5以上のものを図5-15内に表示した。

10 正確にはエッジ内の様相表現上位で、かつエリア間の領域表現において占有率が増加するもののみ、グレーの塗りと線によるつながりを施している。

11 アレグザンダー, C.: 都市はツリーではない, 押野見邦英訳, 別冊國文学・知の最前線「テキストとしての都市」, 前田愛編, 學燈社, 1984, pp.25-46.

5.3 様相を表わす言語の分析

5.3.1 様相因子指標を用いた分析

ここでは様相表現と領域表現について、その言葉の使われ方を表わす「様相因子指標」(modal factor index)を導入して検証する。言葉のカテゴリーごとのあらわれ方の違いや、歩行中の様相把握と歩行後の領域把握における言葉の使われ方の違いなどについて分析する。

(1) 様相因子指標の導入

「様相因子指標」は、様相表現に基づいて5つ、領域表現に基づいて6つのものを導入する(表5-6)。各々の詳細は注釈に示す。また占有率、集中度、順表現率については様相表現と領域表現で共通しているので、必要があれば指標名の後ろに〈様〉〈領〉を付して区別する。

表5-6 様相因子指標の一覧

指標名	説明	様相表現	領域表現
占有率	記録に用いられた割合	○ ¹	○ ²
集中度	どの程度同じ地点・エリアに集中して記録されたかを示す指標	○ ³	○ ⁴
順表現率	順表現として記録された割合	○ ⁵	○ ⁶
全体率	指示範囲が「全体」であった割合	○ ⁷	-
境界率	様相の大きな変化への寄与率	○ ⁸	-
好印象度	好印象につながる度合い	-	○ ⁹
オープン度	オープンさにつながる度合い	-	○ ¹⁰
熟知度	実験以前から被験者によく知られている度合い	-	○ ¹¹

これら合計11の様相因子指標について、全様相因子での一覧を示す(表5-7)。また占有率、集中度、順表現率に関しては様相表現での値に対する領域表現での値の比をとり、それぞれ「占有率比」「集中度比」「順表現率比」と呼ぶ。

なおこの一覧表では、以下のような様相因子を分析対象から除外している(表5-7中のグレーで塗った部分)。

- ・主に記述が目的であった「その他の～」を指す様相因子

- ・様相表現と領域表現の両方における占有率が0.5%に満たないもの(統計的信頼性の観点から)

どちらかのみ占有率が0.5%に満たないものは、満たない方に関しては占有率のみ算出するが、他の値は計算しない(表中「—」と表示)。さらに分析対象となる様相因子においても、各様相因子内の順表現、逆表現以外の細分類(分類時に「中間表現」としたもの)は対象から外している。

ここから様相因子指標を用いた分析に移るが、まず様相因子の全体についての分析をし、次に因子群をカテゴリーに分類した分析を行なう。

(2) 様相因子群全体についての分析

① 指標間の相関性

11指標すべての値が求められた37の様相因子のデータを用いて、指標間の相関係数を求めた¹²(表5-8)。絶対値0.5以上の部分をグレーで表示している。

まず占有率、集中度、順表現率に関しては様相表現と領域表現の同名指標で高い相関性を示す。特に順表現率の相関性は非常に高く、表5-7の順表現率比を見てもほとんどの値が1付近になっている。様相表現に基づく5指標の中では全体率と境界率の間の相関性が目立っている。部分的な要素を指す

表5-8 様相因子指標間の相関係数

		様相表現に基づく様相因子指標					領域表現に基づく様相因子指標					
		占有率 (様)	集中度 (様)	順表現率 (様)	全体率	境界率	占有率 (領)	集中度 (領)	順表現率 (領)	好印象度	オープン 度	熟知度
様相表現	占有率(様)		0.094	-0.083	-0.123	-0.144	0.597	-0.005	-0.091	-0.036	-0.140	-0.090
	集中度(様)	0.094		0.113	0.085	0.009	-0.024	0.659	0.151	-0.032	0.303	0.237
	順表現率(様)	-0.083	0.113		-0.141	-0.115	-0.028	0.228	0.968	0.030	-0.164	-0.219
	全体率	-0.123	0.085	-0.141		0.862	0.189	-0.045	-0.117	-0.052	0.085	0.074
	境界率	-0.144	0.009	-0.115	0.862		0.200	-0.107	-0.075	0.004	0.133	0.106
領域表現	占有率(領)	0.597	-0.024	-0.028	0.189	0.200		0.043	0.024	0.114	-0.174	-0.133
	集中度(領)	-0.005	0.659	0.228	-0.045	-0.107	0.043		0.252	-0.063	0.143	0.189
	順表現率(領)	-0.091	0.151	0.968	-0.117	-0.075	0.024	0.252		0.095	-0.136	-0.201
	好印象度	-0.036	-0.032	0.030	-0.052	0.004	0.114	-0.063	0.095		-0.045	-0.079
	オープン度	-0.140	0.303	-0.164	0.085	0.133	-0.174	0.143	-0.136	-0.045		0.930
	熟知度	-0.090	0.237	-0.219	0.074	0.106	-0.133	0.189	-0.201	-0.079	0.930	

言葉よりも、周囲一帯についての言葉の方が、様相の大きな変わり目において記録されやすいようである。これは、様相が全体性に深くかかわる概念であることの反映だとも言える。領域表現に基づく6指標では、オープン度と熟知度の相関性が高い。5. 1. 2の相関係数の分析ですでに明らかになったことであるが、両指標の意味合いは異なるので分析に導入する。

これ以外では、概ね低い値が多い。これらの指標は、様相因子の分析に適した独立性の高い指標群であると評価できる。

②不在に対する存在の優越

4. 3. 2の順表現の指定の際に述べた「あるかないか」が軸となる様相因子群の順表現率は、100%に近いものが多い。これは、存在が不在に対して大きく優越するということである。「何かが存在する」「何かが増加した、なくなった」ということは、「存在する、増加する」ということに比べて把握されにくい。これは5. 2. 3で指摘した、エッジにおいて次のエリアのコネクターが記されるが、前のエリアのコネクターがなくなることは記されないこととも対応する。

ただしこの中で相対的に順表現率が低い様相因子としては、「[21] 人の数」がある。のちにも述べるように、人は互いの活動には敏感なようである。

③順表現率とフレーム

前項とは逆に、程度が軸になるファジーな集合をかたちづくる様相因子では順表現率の高さが分散している。「[12] 建物のスケール」「[16] 建物の年代」「[39] 街路の幅」「[50] 音環境」「[62] 楽しさ・賑わい」などは様相表現でも領域表現でも値が50%に近く、順表現・逆表現が拮抗している。しかし「[13] 建物の素材」「[14] 建物のデザイン」「[67] 京都らしさ」をはじめ、順表現・逆表現のいずれか一方に偏っているものも多い。

とはいっても実際の都市を見ると、「建物素材が伝統的」「デザインが和風」「京都らしい」という建物や街並みがそうでないものよりもルート沿いに多く見られるわけではない。それにもかかわらず伝統素材や和風デザインに記録が偏るのは、記録されていないことがらが被験者にとって「当然の基準」であるためではないだろうか。つまり、「伝統素材ではない」「和風ではない」といったこと（モルタルの戸建てやレンガ調タイルのマンションなどは当然なので記録せず、「伝統素材」や「和風」（木造、茅葺き屋根など）が見られたときにだけ記録する。たとえば図5-18に示しているのはいずれも戸建住宅規模の街並みであるが、左写真の茅葺きは盛んに記録され、右写真のモルタル、プレファブ素材については全く記録がなかった。一方建物のスケールや年代には「当然の基準」がないためか、大小や新旧を問わず記される。そのため順表現と逆表現は拮抗し、占有率も大きくなっている。

表5-7 様相因子

大分類	様相因子	順表現の内容	様相表現に基づく様相因子指標				
			占有率(様)	集中度(様)	順表現率(様)	全体率	境界率
群建物	[1] 住居	ある・多い・増加	9.7%	0.87	95.8%	85.8%	26.2%
	[2] マンション	ある・多い・増加	1.4%	0.75	100.0%	35.8%	18.5%
	[3] 店舗	ある・多い・増加	9.9%	1.06	92.6%	55.4%	21.5%
	[4] 観光	ある・多い・増加	1.6%	1.14	88.6%	97.9%	50.5%
	[5] 業務	ある・多い・増加	3.5%	1.06	95.1%	66.3%	23.4%
	[6] 茶道	ある・多い・増加	0.2%	-	-	-	-
	[7] 寺社・境内	ある・多い・増加	2.3%	1.33	87.1%	49.3%	22.1%
	[8] 教育施設	ある・多い・増加	1.6%	1.29	94.9%	25.0%	9.4%
	[9] 駅	ある・多い・増加	0.2%	-	-	-	-
	[10] デパート	ある・多い・増加	0.3%	-	-	-	-
	[11] その他単体建物	ある・多い・増加	-	-	-	-	-
	[12] 建物のスケール	大きい	5.9%	0.94	55.4%	74.2%	26.1%
	[13] 建物の素材	伝統素材	2.4%	0.83	79.9%	45.8%	17.4%
	[14] 建物のデザイン	和風・町家	1.7%	0.97	73.2%	44.6%	17.3%
	[15] 建物の色彩	無彩色	1.6%	1.22	53.1%	56.3%	31.3%
	[16] 建物の年代	古い	5.8%	0.85	65.5%	65.2%	27.7%
	[17] 建物の密度	高い	-	-	-	-	-
	[18] 建物の立ち方	記録あり	-	-	-	-	-
	[19] 建物の付属物	ある・多い・増加	-	-	-	-	-
	[20] 建物内部の様子	オープン	-	-	-	-	-
建物の個性	[21] 人の数	ある・多い・増加	4.5%	0.91	78.6%	87.2%	34.4%
	[22] 観光客・外国人	ある・多い・増加	0.8%	0.95	87.8%	93.3%	48.9%
	[23] 子ども	ある・多い・増加	0.6%	0.90	100.0%	39.4%	4.5%
	[24] 学生	ある・多い・増加	0.1%	-	-	-	-
	[25] 人の行動	記録あり	-	-	-	-	-
	[26] 車の数	ある・多い・増加	5.5%	1.11	84.5%	83.5%	38.2%
	[27] 空地	ある・多い・増加	3.0%	0.98	98.3%	23.2%	13.3%
	[28] 塀・壁	ある・多い・増加	1.9%	1.00	99.1%	61.9%	11.1%
	[29] サイン	ある・多い・増加	2.0%	0.65	88.1%	33.6%	10.3%
	[30] 工事	ある・多い・増加	1.1%	1.02	92.4%	23.4%	6.3%
人・車	[31] 駐輪	ある・多い・増加	0.7%	0.72	97.5%	85.0%	10.0%
	[32] その他沿道の人工物	ある・多い・増加	-	-	-	-	-
	[33] 沿道の植物	ある・多い・増加	7.6%	1.08	93.7%	68.7%	24.6%
	[34] 沿道の生物	ある・多い・増加	2.1%	0.81	93.6%	77.4%	31.0%
	[35] 川・水路	ある・多い・増加	2.7%	2.27	95.0%	72.5%	17.8%
	[36] その他沿道の地形	ある・多い・増加	-	-	-	-	-
	[37] 空	見える	1.9%	1.12	86.4%	89.1%	32.7%
その他沿道の要素	[38] アーケード	ある・多い・増加	1.1%	2.39	73.8%	92.3%	50.0%
	[39] 街路の幅	太い	4.7%	1.90	42.0%	98.2%	46.2%
	[40] 街路の色彩・テクスチャ	アスファルト以外	0.9%	1.64	85.5%	94.5%	67.3%
	[41] 街路の勾配	ある・多い・増加	1.3%	0.95	98.1%	96.1%	37.7%
	[42] 街路の形質	記録あり	-	-	-	-	-
	[43] その他ルート上の街路について	記録あり	-	-	-	-	-
	[44] 交差する街路について	記録あり	5.7%	1.50	100.0%	31.5%	9.6%
	[45] 明るさ・陰影	明るい	2.1%	0.77	23.8%	81.7%	29.8%
	[46] 空間の広さ・開放感	開放的	3.0%	0.81	69.9%	77.8%	20.5%
	[47] 視界・見通し	ある・多い・増加	2.1%	0.75	87.2%	82.4%	28.8%
上	[48] 前方の寺社	見える	1.2%	1.17	100.0%	62.0%	12.7%
	[49] 遠方の山や森	見える	4.9%	0.96	97.9%	76.0%	26.7%
	[50] 音環境	静か	4.7%	0.80	56.3%	84.1%	31.2%
	[51] 人の声	記録あり	-	-	-	-	-
	[52] 人工的な音	記録あり	-	-	-	-	-
下	[53] 自然の音	記録あり	-	-	-	-	
	[54] 人工的なにおい・空気質	いいにおい	-	-	-	-	
全体・遠方	[55] 自然のにおい	記録あり	-	-	-	-	
	[56] 気温	涼しい	2.8%	0.96	90.2%	68.7%	22.1%
聴覚	[57] 風	ある・強まる	-	-	-	-	
	[58] 好み	好ましい・美しい	5.3%	0.70	76.6%	47.1%	20.2%
嗅覚	[59] 統一性	統一性がある	3.1%	0.87	18.8%	87.8%	33.7%
	[60] 普通さ	普通・特徴がない	0.7%	0.50	100.0%	97.7%	43.2%
	[61] 調和・特異	調和している	4.8%	0.65	10.5%	23.9%	12.3%
	[62] 楽しさ・賑わい	楽しい	1.7%	0.69	36.4%	73.7%	26.8%
	[63] 落ち着き・風情	落ち着きがある	2.3%	0.69	87.0%	77.6%	37.7%
	[64] 都市性	都市的	0.9%	0.89	36.0%	84.0%	38.0%
	[65] 中心性	中心的	0.2%	-	-	-	-
	[66] 日本らしさ	日本らしい	0.7%	0.70	95.2%	69.0%	17.9%
	[67] 京都らしさ	京都らしい	1.0%	0.87	85.7%	80.4%	41.1%
	[68] 地域らしさ	その地域らしい	-	-	-	-	-
	[69] いかにも	いかにも○○だ	0.4%	-	-	-	-
	[70] グレード	高級	1.2%	0.77	81.2%	61.8%	28.7%
	[71] 生活感	生活感がある	0.9%	0.69	94.5%	85.5%	29.1%
	[72] 親しみ	親しみがある	0.0%	-	-	-	-
	[73] 裏	裏的だ	0.1%	-	-	-	-
触覚	[74] 肌さやすさ	肌さやすい	-	-	-	-	
	[75] 固有名詞(場所)	記録あり	1.5%	1.07	100.0%	60.0%	26.1%
	[76] 固有名詞(建物)	記録あり	4.0%	0.73	100.0%	17.9%	6.6%
	[77] 街路の左右の比較	左右が同じ	5.7%	0.74	23.0%	81.5%	20.3%
その他	[78] 街路のヤド	記録あり	-	-	-	-	

「当然の基準」はフレームのはたらきそのものである。日本で生まれ育ち、京都で学生生活を送ってきた今回の被験者は、伝統的ではない素材を当たり前と感じるようなフレームをある程度共有しており、そして歩行を続ける中でそのことに対する書き替えも起こりにくいのだと考えられる。しかし、もし異文化において育ち、全く異なるフレームをもつ人がはじめて京都の街を歩けば、結果は異なってくるものと思われる。この当然の基準については、第6章で「デフォルト」として詳しく検討する。



図5-18 素材の異なる2つの街並みでの様相因子のあらわれ方

④様相における図と地

一般に、ゲシュタルト心理学の「図」と「地」と言えば、図はかたちとしてのまとまりをもつものであり、地は図の背景として広がっているものである。そして図の方が意識にのぼりやすいものとされる。建物や木々、山などに関する言葉で占有率（様）が高いのは、これらが閉合性や凸形性などの性質により図として浮かび上がりやすいということが一つの要因として考えられる。

しかしゲシュタルトとはそもそも人間の知覚における有意味なまとまりを指すのであるから、記録されたことはすべてゲシュタルトであるとも言える。これを「様相における図」と呼ぶとすれば、これは図形としての図と地とは違うあらわれ方をする。たとえば街路や空は、一般には地として捉えられるが、集中度（様）がかなり高い値を示しており、特に「[39] 街路の幅」では占有率（様）も高い。多くの被験者に共有された「様相における図」だと見ることもできる。

この要因は経路的なシーケンスに求めるべきである。街路の幅が変化する地点で、様相における図としてあらわれる。この場合、地とは変化の前後それぞれにある同一性である。そして変化の度合いがシャープであればあるほど、図と地は際立つ。様相における図と地の概念を考えるには、図形としてのゲシュタルト性に加えてシーケンスを考慮すべきなのである。

(3)言葉のカテゴリー別の分析

①群であられる建物の機能

「[1] 住居」「[3] 店舗」といった群であられる建物において占有率が高い。このことはバルトも指摘しているように¹³⁾、人間がものや空間を把握する際に、その機能を重視する傾向があることに対応している。そして様相表現に比べて領域表現では軒並み占有率が上がる。広い範囲の領域を指し示すためにもっとも支配的なのがこの群建物の機能である。

特に「[1] 住居」は占有率比が高く、占有率（領）は他を大きく引き離してトップになっている。都市の広い範囲を占めるのは住宅街なのである。占有率比が高い値を示すのは他に「[4] 観光」があるが、これについては境界率も高い。観光地は周囲とは際立った違いを示すものと言える。

また機能ごとに好印象度、オープン度、熟知度に際立った違いが見られる。「[1] 住居」はクローズドで知られておらず、逆に「[3] 店舗」「[4] 観光」はオープン度と熟知度が高い。「[2] マンション」「[5] 業務」が多いと印象が悪い。機能はその場所の様相を大まかに決定する。

なお実際の様相・領域表現を見ると、「さびれた商店街」「静かな住宅地」「かわった家」など「特徴+機能」のかたちで記録されることが多い。これらのケースでは表現したいことの力点は、機能では

なく特徴にあると思われる¹⁴。つまり主体は建物機能を無意識に判断し、様相を語るときのベースとして用いていると考えられる。

②単体であられる建物

「[7] 寺社・境内」「[8] 教育施設」といった主に単体であられる建物になると、様相表現と領域表現を通じて集中度は高く、また占有率比も高い値を示す。都市のあらゆる場所に登場するというよりも、数は少ないがその周辺領域を強く特徴づける要素になっていると言える。群建物が全体のベースとなるのに対し、寺社や駅はそのベースの中に点在して都市にアクセントを与えている。

原広司は、空間において周囲に対する求心的な作用を発揮する特異点を「アトラクター」(attractor)と呼ぶ¹⁵。寺社や駅は都市におけるアトラクターとなり、周囲に独特な領域を形成しているのである。

なお原は、広いスケールで見ると市場や、都市そのものもアトラクターになると述べている。よって寺社や駅のようなリンチの言うランドマークにあたるものだけではなく、ディストリクトのような広域のもの、あるいはパスやエッジのような線状のものもアトラクターとなりうる。本論では、都市の様相把握において何らかの方向性をもたらす要素を、ひとしくアトラクターとして扱おうと試みる。このアトラクターの多様性や様相論的な意味合いについては、6.4.4で詳しく検討する。

③建物の属性

沿道の建物の属性については、先にも触れたように「[12] 建物のスケール」「[16] 建物の年代」が占有率〈様〉において飛び抜け、かつ順表現率〈様〉が50%に近くなっている。全体率は70%前後という標準的な値であり、全体の類似性もその中にある差異性も記されていると言える。

しかし、領域表現では年代がスケールの約2倍の占有率となる。領域の全体的様相をより支配しているのが年代の方だと言える。さらに年代は好印象度の値が全様相因子の中でもっとも高い値をとっており、古い街並みほど好ましく感じられるものとなっている。

「[13] 建物の素材」(順表現：伝統素材)や「[14] 建物のデザイン」(順表現：和風・町家)も好印象をもたらす様相因子であるが、年代やスケールに比べ占有率が低い。フレームに当然の基準があることで記録の頻度が限られている。この素材やデザイン、あるいは色彩などがいわゆる意匠設計によってコントロール可能な部分であるが、少なくとも現代都市においては、法規制に左右されがちなスケールや、地域の歴史で決まる年代の方が様相にとって大切なものになっている。

ただし素材やデザイン、色彩は、全体を表わしやすい言葉である年代に包含されているとも考えられる。つまり古い家は木造で町家風、新しいビルはガラスが目立ちシャープ、という傾向があるため年代でこれらを代表してしまうのである。ここにもやはりフレームがはたらいている。

④アクティビティ

「[50] 音環境」「[63] 楽しさ・賑わい」「[21] 人の数」「[26] 車の数」などで占有率が比較的高い。集中度が低く、順表現率が50%近辺のものもあることを見ると、静か、賑やかにかわらず多くの場所を規定する要素となっている。さらに領域表現の移り変わりをコネクター・シフターによって記述した図5-15を見ると、これらの様相因子の占有率がエッジにおいて明確に反転している場所が数多く見受けられる(AⅡ-1~2、AⅡ-6~7、AⅡ-10~11、AⅢ-2~3、AⅢ-6~7)。

そして「[21] 人の数」「[22] 観光客・外国人」「[63] 楽しさ・賑わい」におけるオープン度と熟知度の高さも顕著である。「[50] 音環境」ではこれらの値が低い、この様相因子の順表現は「静か」であるから、やはり賑やかな場所はオープンでよく知られていることを示している。

これらの様相因子群が指し示す人々の活動を、広義の「アクティビティ」(activity)¹⁶と呼ぶことと

する。建物や街路などの固定的環境だけではなく、流動的なアクティビティも様相にとって重要な要素となる。アクティビティの多い場所はオープンでよく知られており、またその変化は様相の大きな移り変わりにつながる。われわれ自らもアクティビティに参加し、その中の一部となっているということも影響しているであろう。このようなアクティビティという切り口は、ハードだけの街づくりでは抜けがちな視点である。

⑤地面・空

前節で街路構造と様相との関連についてさまざまな指摘をしたが、それが様相表現の指標にもあらわれている。つまり「[39] 街路の幅」や「[40] 街路の色彩・テクスチャ」は集中度〈様〉や境界率が非常に高い。また「[37] 空」「[38] アーケード」も同様に集中度〈様〉や境界率が高い。地面と空は視野内で大きな面積を占め、これが変わるところで様相は大きく変化しやすい。共有された図となりやすい要素だと言える。アスファルト以外の路面やアーケードが都市において多くないことも、これらの効果を高めていると考えられる。

また道幅が広い大通りでは印象が悪くなり、オープン度と熟知度が高くなることも、前節での分析結果と合致している。

道幅は他の要素との関係から考えても支配的な要素である。たとえば都市計画の高さ規制だけを見ても、一般的に幅の広い道沿いには高い建物が、幅の狭い道沿いには低い建物が誘導されている。人や車の通行量も街路のスケールとの関連性が高く、それにより音環境も左右される。さらに、通りごとに固有の文化が形成されてきた京都の場合は特に、道は歴史や文化をも背負っている。

ただし5.2の分析で道幅と並んで重要性が指摘された曲がり角については、様相因子としては「[42] 街路の形態」に分類したが、この様相因子は占有率が低く分析対象から外れている。角を曲がるということは身体的な経験であり、またルートが一意に指定されていることからほとんど記録されない。曲がること自体ではなく、曲がって何が起こるかが重要なのである。

⑥自然・地形

自然物は人工的環境である都市の中で際立っており、「[33] 沿道の植物」は占有率〈様〉が全体の中で3番目という重要な様相因子になっている。「[49] 遠方の山や森」が示すように、遠くにあっても指摘されやすい要素である。また「[35] 川・水路」は集中度〈様〉が高く、上述の街路の様相因子と同じような役割を果たしている。オープン度や熟知度の値も高くなっている¹⁷。

自然や地形は、人の手によって大幅に改変されているとはいえ基本的には都市の発生に先立つ要素である。街路と並んで都市の骨格をつくりあげ、現代都市の様相においても重要なエレメントになっている。

⑦印象を表わす言葉

大分類で「印象」に含まれる言葉の多くは占有率比が非常に高く、様相表現よりも領域表現で多く用いられる。全体率の値も低くない。何らかの要素を指摘する様相因子と比べ、領域の様相のもつ全体性をそのまま説明しようとしていると考えられる。

一方、集中度は全体に低く抑えられ、図5-15のエリア別領域表現集計を見ても、建物機能を表わす言葉に抑えられて中位以降にパラパラと見られることが多い。このような印象を表わす言葉はある場所で誰にとっても明らかに立ち上がってくるようなものではなく、歩くうちにぼんやりと生まれてくるものである。同じような様相を把握したとしても、それを表現する言葉が多様に存在することも要因の一つだと考えられる。

よって研究方法としては、このような言葉に対しては形容詞などによる評価指標をあらかじめ定める手段を用いることも有効になると考えられる。1.3.2で挙げたような環境心理学系の研究などで採り入れてられている手法であるが、本研究で用いた領域評価にもその意味合いがあった。

⑧場所性を表わす言葉

「[66] 日本らしさ」「[67] 京都らしさ」「[68] 地域らしさ」「[75] 固有名詞（場所）」は、特定の場所との結びつきをもった言葉である。このうち「[68] 地域らしさ」は様相因子指標による分析対象から外れているが、他の三者ではいずれも占有率比が高く、やはり領域の全体的な様相を示す言葉となっている。「[76] 固有名詞（建物）」の占有率比が低いのは対照的である。

ルート上のすべての場所は日本であり、京都であり、かつそれぞれの地域でもあるのだが、これらの中で「[67] 京都らしさ」が占有率において突出している。場所の固有性を京都というスケールで捉えているのである。これに関連して、認知言語学の分野では「基本レベル効果」(basic level effect)について議論されている¹⁸。たとえば「動物」や「柴犬」よりも「犬」というくくりにわれわれがもっともなじみを覚えるように、言葉の階層分類の中間に用いられやすいレベルがあるというものである。被験者たちは、ルート上のあらゆる場所において「京都」というレベルで場所性を判断している。

「[75] 固有名詞（場所）」の細分類では、地域名よりも通りの名が多くあらわれている (Appendix-C 参照)。京都の中においては、通りも場所を理解する上での重要なレベルになっている。

⑨離散的要素・一時的要素

⑦⑧とは逆に占有率比の低い言葉は、領域を規定するために使われにくい言葉であることを意味する。「その他沿道の要素」の多く（「[28] 塀・壁」「[29] サイン」「[30] 工事」「[31] 駐輪」「[34] 沿道の生物」）や、「[44] 交差する街路について」がそれにあたる。境界率も低い。いずれも沿道にぼつぼつとあらわれる性質のものである。「[29] サイン」「[31] 駐輪」などは集中度（様）も低い。これらはゲシュタルト理論によれば街路に対して図になりやすいエレメントのはずであるが、様相における図としては共有度が低い。

また「[34] 沿道の生物」の「蟬」、「[56] 気温」の「涼しい」といった夏ならではの言葉についても、様相表現としてはあらわれても領域の様相を規定しない。

塀やサインは街路や建築からなる空間の主要構造に対して付随するものとして、また季節的なことならについては空間との関連性の弱い一時的なものとして捉えられていると考えられる。これらの言葉はともに、歩きながら把握する様相の中には入り込んでくるが、領域という空間的まとまりを規定する要素としては力をもたないものである。

⑩ミクロな差異を表わす言葉

「[59] 統一性」「[61] 調和・特異」の順表現率は低い。つまり「ごちゃごちゃしている」「特異なものがある」という逆表現が優越している。これは言葉そのものの性質が原因だと考えられる。つまり「不統一」「特異」はミクロな差異の存在を語る言葉である。差異を把握するのが様相把握の基本モデルであるから、これらの言葉はそもそも記録されやすい。これは、「[77] 街路の左右の比較」についても当てはまり、左右が違うという方が記録されやすくなっている（「右手に大きなビル」「左手に山が迫る」など）。

またここで留意すべきなのが、これらの言葉があるまとまりのある領域同士の差異ではなく、領域内部の差異を示していることである。前小節で述べた領域概念の階層構造はあらゆるスケールにおよぶ。差異を見出して分節することは人間のものごとの理解の仕方の本質的な一面である。

5.3.2 自己組織化マップによる分析

次に、様相因子間の類似性の分析を試みる。本小節では、コホネン (Teuvo Kohonen) ¹⁹によって開発された自己組織化マップ (Self-Organizing Maps ; SOM) を利用する²⁰。

自己組織化マップは多次元データを二次元に写像してマッピングする手法である。そしてマッピングされたデータのプロパティごとの値の大小は、プロパティの数だけ描画される「特徴マップ」のカラーグラデーションによって表現される。またマッピングの平面においては x 軸、 y 軸は特に意味をもたず、位置の意味づけはすべて特徴マップによって表わされる。

データの分類手法としては他に、階層クラスター分析によるデンドログラムや主成分分析による主成分得点散布図などが広く用いられている。しかしいずれも多次元データを極度に単純化する方法であり、複雑な性質や関係をもつ様相因子の分類には適さない面がある。それに対して自己組織化マッピングは特徴マップによって複雑性を担保することで、類似関係を豊かに表現できる²¹。

ここでは様相表現と領域表現のそれぞれについて、自己組織化マップにより分析する。

(1) 様相表現における様相因子のマッピング

様相表現については、5つの様相因子指標の値を用いて自己組織化マップを作成した (図5-19) ²²。5つの特徴マップを見ると、様相因子指標ごとにある一定の傾向が出ていることが読み取れる。また様相因子プロットを見ると、5.3.1での分析と関連づけながらある程度の意味的なグルーピングができる。それが図中に示したA~Fである。

Aは地面、頭上にある様相因子で、集中度〈様〉や境界率の高かったものである。Bは沿道のシークエンスを形成する主要な様相因子で、占有率が高い値となっている。建物の機能やいくつかの属性、および植物が含まれている。Cは沿道に離散的にあらわれる様相因子で、集中度、全体率、境界率が低く、一時的、付随的なものとみなされる。ただし「[13] 建物の素材」「[14] 建物のデザイン」「[15] 建物の色彩」なども、伝統建築が離散的にしかあらわれないことが影響し、ここに含まれている。Dは人、車や音などのアクティビティを示す様相因子である。占有率や全体率が高い。Eは領域内のミク

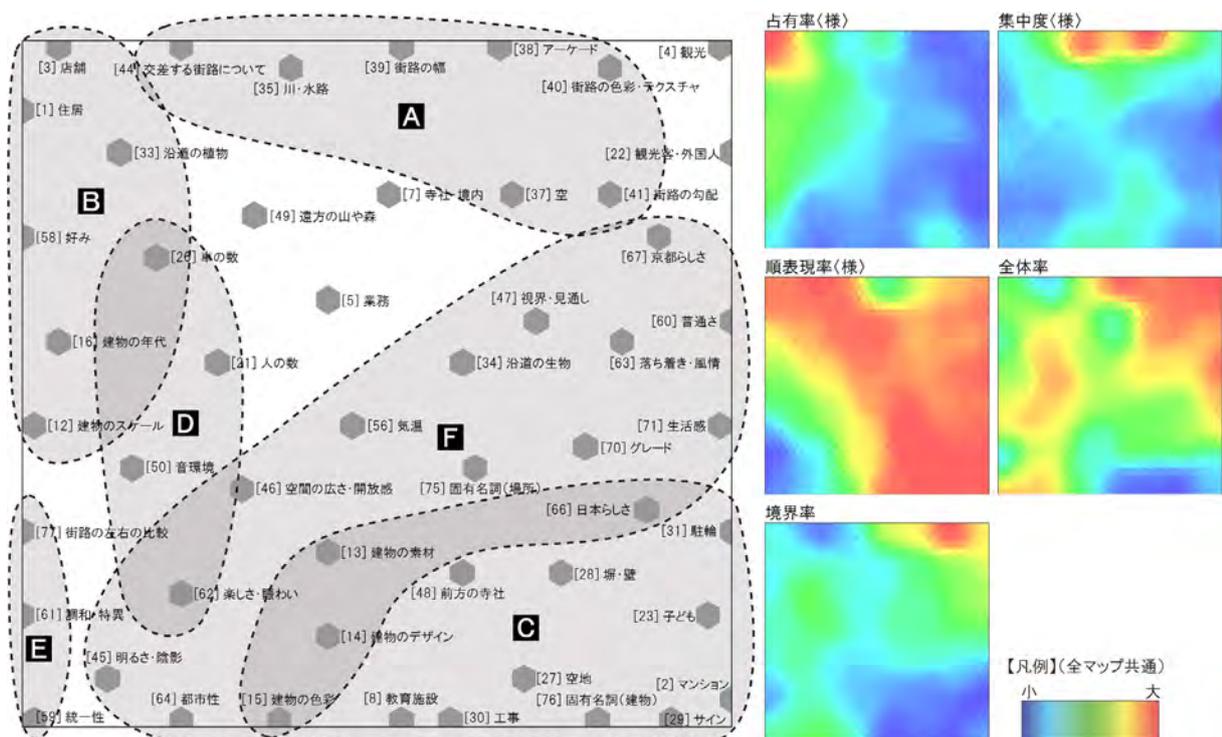


図5-19 様相表現の様相因子指標に基づく様相因子の自己組織化マップ

ロな差異を語る言葉の群が見られ、順表現率が低い。そしてFには様相の全体的な印象を語る言葉が広がっている。全体率が高く、また占有率や集中度は高くない様相因子群である。

このA～Fは、都市の歩行者の視野において、図5-20のように模式化することができる。AやBがコネクタやシフターとして全体の流れをつくり、CやEがミクロな差異をつくり出す。これらに加え流動的なDも大きく影響しながら、全体的な雰囲気であるFが形成される。つまり視野内で似た位置づけをもつ要素は、様相における役割もある程度共通していると言える。これはわれわれが空間を把握する座標系とも関係した、興味深い現象である。

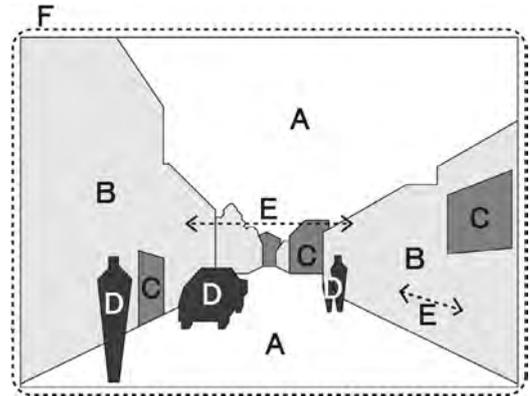


図5-20 カテゴリーA～Fの視野内でのあらわれ方

(2) 領域表現における様相因子のマッピング

続いて領域表現については、全エリアでの占有率の値を用いて自己組織化マップを生成する²³。まずプロットが図5-21である。

「[1] 住居」と「[3] 店舗」が大きく離れるなど、先ほどとは違ったプロットであることが伺える。プロットを観察すると、右上の「[5] 業務」「[9] 駅」「[64] 都市性」「[46] 空間の広さ・開放感」「[12] 建物スケール」などの集まりは四条通のオフィス街（A I-1～3）を連想させる。同様に左上は祇園（A I-6）や嵐山（A III-5～7）といった観光型商店街を、左下は静かで緑豊かな住宅街を思わせる。このように、エリア別占有率に基づくプロットは、空間と強く対応している。

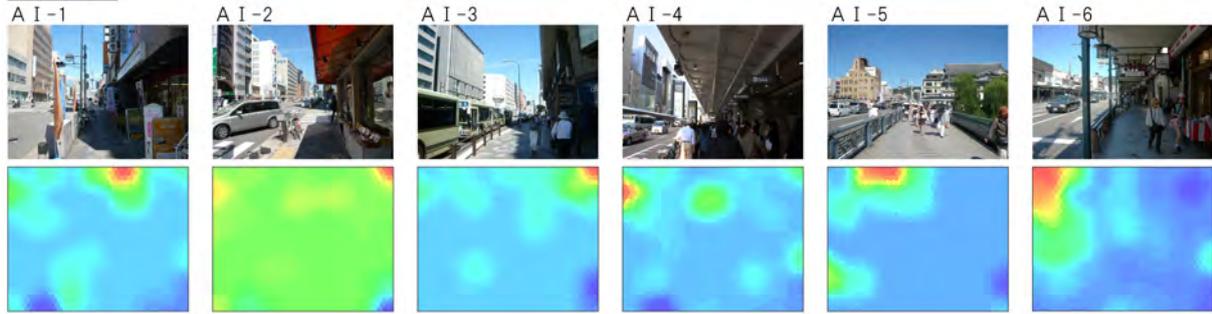
このことを特徴マップが如実に表わしている（図5-22）。各特徴マップはエリアを表わしており、そのエリアの強い特徴を物語る言葉が赤（逆表現の場合は青）になっている。たとえば祇園（A I-6）では左上の一角が濃い赤になっている。またA III-1～3の特徴マップはよく似通っており、A III-4～7もそうであることは、先の主成分得点の項で示されたエリアの階層構造と一致している。

つまり第4章の図4-12で言葉の変遷として記述されたシークエンシャルな様相の変化が、濃淡のマップによっても示されたのである。地域の診断マップのようなツールに発展する可能性があり、このような点も自己組織化マップという手法の興味深い一面である。

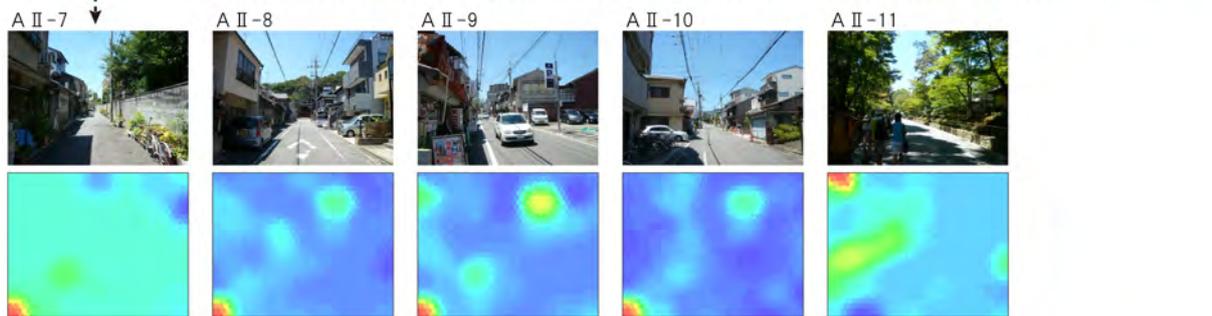
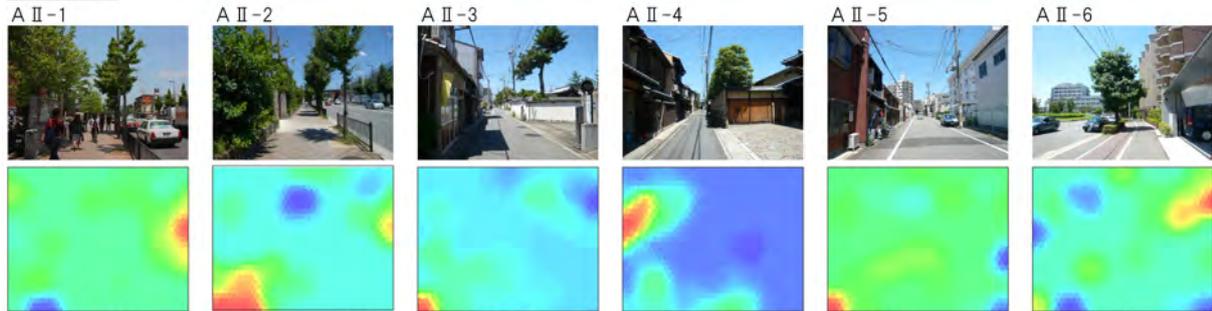


図5-21 領域表現エリア別占有率に基づく様相因子の自己組織化マップ

ルート I



ルート II



ルート III

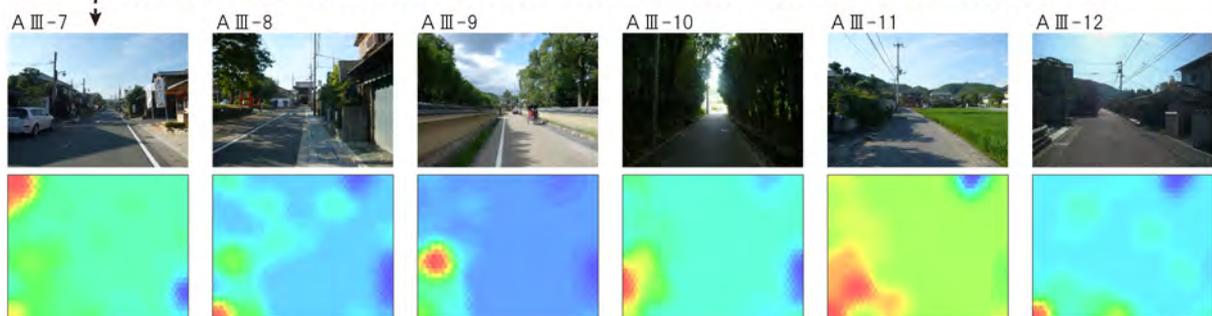
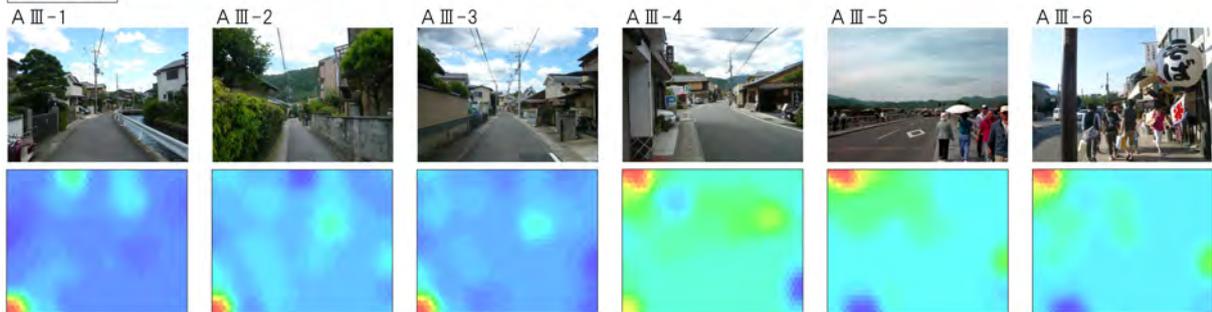




図5-22 エリアごとの特徴マップによるシークエンスの記述

以上で、記述データの分析を終える。全体を通して、都市空間とわれわれの把握する様相との間にさまざまな関連が示唆された。領域分割や領域評価、領域表現という要約的記述データから様相のマクロな構造が浮かび上がり、そして言葉についての分析を行なうことで都市の様相の意味的側面が明らかになった。定量と定性、マクロとミクロを自由に横断しながら分析を展開できるのが、本研究の方法の大きな特長だと言える。

ここでの分析結果は第7章の総合的分析などにおいて再び活用し、第8章にてまとめる。

- 1 全5,882の様相表現の中で、当該様相因子が含まれるものの占める割合。この5,882という様相表現の数は、5.1の注釈4において述べた「/」で区切られた数をカウントしている。
- 2 各エリアに振り分ける前の全951領域表現の中で、当該様相因子が含まれるものの占める割合。領域表現数は5.1の注釈4の「/」のような区切りは用いていないので、被験者の記した領域表現の数を単純にカウントしている。ただし記録もれがあったものは、この数から除いている。
- 3 プロットグラフに使用する20m区切りの分布をもとに算出する。まず一般に、統計値のばらつき具合を表わす「二乗平均平方根 (RMS)」は、 n 個の数の組 $\{P_i\}$ ($i=1,2,\dots,n$) に対して

$$RMS = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n P_i^2}$$

と定義される。ここで

n : 順表現プロット地点数 (20m区切)

m : 逆表現プロット地点数 (同上)

$P_{j,i}$: i 番目の順表現プロット地点における順表現プロット数

$P_{g,k}$: k 番目の逆表現プロット地点における逆表現プロット数

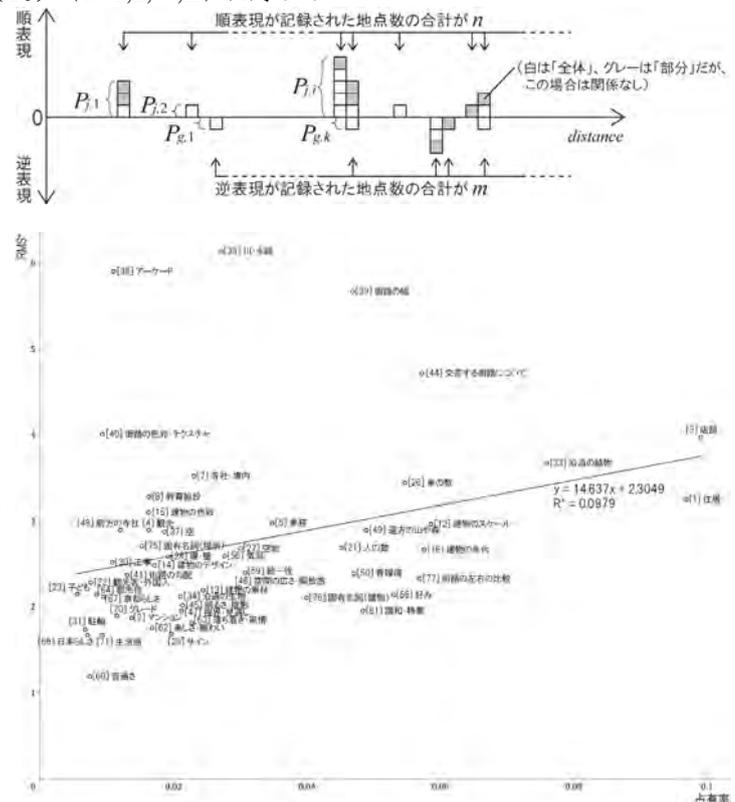
とおき、 RMS の順表現・逆表現合成値 RMS^* を定義する (右図)。

$$RMS^* = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n P_{j,i}^2 + \frac{1}{m} \sum_{k=1}^m P_{g,k}^2}$$

この値を実際に求めると、占有率が大きいほど RMS^* が大きくなる傾向があった (右下図)。占有率が大きくなるとプロットが同一地点に重なりやすくなるためである。様相因子間での占有率の分散が大きいいため、 RMS^* を直接用いるのは適当ではない。

そこで記録数の影響をならす処理を行なう。様相因子の占有率を x 、 RMS^* を y とする線形回帰式 $y=Ax+B$ を求め、 x に各様相因子の占有率 x_i を代入して得られる y_i をその様相因子の「標準値」と呼ぶ。集中度は

$$\text{集中度} = RMS^* / \text{標準値}$$



として定義する。実際にこの手法を適用すると、線形回帰式は
 $y = 14.637x + 2.3049$
 となった。この式をもとに各様相因子の集中度を算出している。

3 様相表現の場合と同様に、

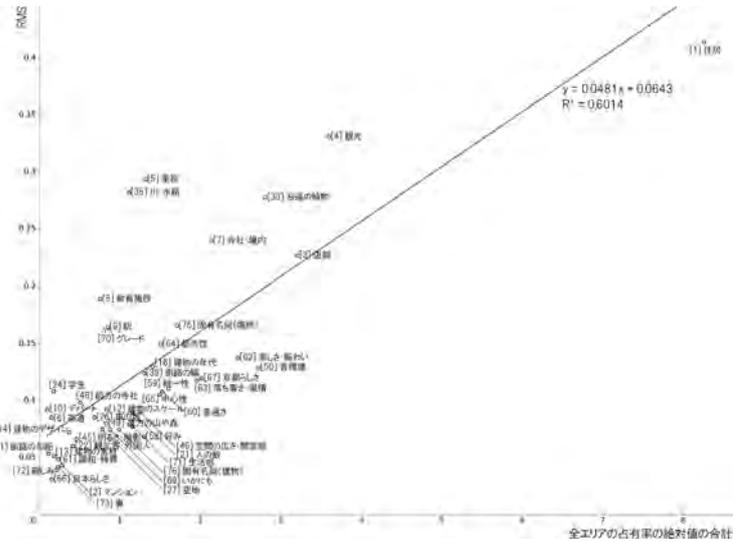
$$RMS = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n P_i^2}$$

n : その様相因子が使われたエリア数
 P_i : その様相因子が使われた*i*番目のエリアにおける占有率 (順表現、逆表現差し引き後)

により RMS を計算する。すると、先ほどと同様に占有率が大きいほど RMS が大きくなる傾向があった (右図)。そこで、各様相因子の全エリアにおける占有率の絶対値の合計を x 、 RMS を y とする線形回帰式 $y = Ax + B$ を求め、 x に各様相因子の全エリアの占有率の絶対値の合計 x_i を代入して得られる y_i をその様相因子の「標準値」と呼び、集中度は

$$\text{集中度} = RMS / \text{標準値}$$

として定義する。実際にこの手法を適用すると、線形回帰式は
 $y = 0.0481x + 0.0643$
 となった。この式をもとに各様相因子の集中度を算出している。



- 5 様相表現における、様相因子ごとの「順表現記録数/総記録数」。
- 6 領域表現における、様相因子ごとの「順表現記録数/総記録数」。
- 7 様相因子ごとの「指示範囲が全体の記録数/総記録数」。全体・部分の別は4. 3. 2 (5) に従う。
- 8 類似の指標である以下の v-a) と v-b) の相加平均値とする。v-a) は個々の被験者を、v-b) は被験者間での共有をベースに置いている。個々の被験者だけにベースを置くと被験者の恣意性が、共有だけをベースに置くと分析者の恣意性が強く影響するので、その中間をとったものであると言える。
- v-a) 領域分割率
 その様相表現を記録した場所で被験者が領域分割した割合。この場合、領域分割されたとカウントするのは、以下の4つである。①地点表現の位置で不連続分割された場合 ②変遷表現で連続分割された場合 ③変遷表現の始点で不連続分割された場合 ④範囲表現の始点で不連続分割された場合
- v-b) エッジ内率
 様相表現の記録された位置がエッジの範囲内にある割合。「エッジの範囲内」とはエッジの始点と終点を含む範囲とし、以下の点がエッジ内にあるかどうかで判断する。①地点表現の位置 ②変遷表現の midpoint ③範囲表現の始点 ④特異表現の位置
- 9 5. 1. 2 で求めた第一主成分得点を各エリア内の全地点で平均し、エリアの領域表現における様相因子の占有率との間で求めたピアソンの積率相関係数 (単相関)。
- 10 注釈9の操作を、第二主成分得点で行なったもの。
- 11 注釈9の操作を、領域評価指標「G : 事前知識」で行なったもの。
- 12 ピアソンの積率相関分布。
- 13 バルトは、われわれの社会の生産するものが機能的な意味を帯びるのを避けられないことを指摘している (バルト, R. : 零度のエクリチュール 付・記号学の原理, 渡辺淳・沢村昂一訳, みすず書房, 1971, pp.134-136.)。
- 14 この問題は、以下のような被験者206の一連の記録の中に典型的に見ることができる (表の見方については6. 1. 3 参照)。表千家、裏千家の連なる伝統的な街並み (A II-4) から殺伐としたA II-5にさしかかる、小川通のシークエンスにおける記録である。

被	R	種	始	終	表現
206	II	—	1,046		交通量がへる/古い感じの建物が多い
		領	1,058	1,260	まさしく京都って感じの住宅地
		☆	1,174		木が多い
		—	1,184		前に高いビルが見える
		領	1,260	1,524	工事の音のきこえる道
		—	1,260		<u>古い家がへりだす</u>
		—	1,292		道が広くなり、交通量がふえる

—	1,360	家がへり、店がふえる
—	1,416	大きな建物が目につく
—	1,524	一気に交通量がふえる／周りの見通しがよい／緑も少しふえる

下線を付した二文のうち、前者の「古い家がへりだす」は、住宅街ということは保持された（コネクター）まま、「古い」が「へる」（シフター）ことで様相が変化している。よってこの文は主に、「古い」が「へる」ことを主張しており、「家」は階層のカテゴリーで一つ上位の「建物」と置き替えてもよい。実際1,046m地点で被験者は、「古い感じの建物が多い」という言葉を用いている。一方後者の「家がへり、店がふえる」では、「家」という建物の機能そのものがシフターとなっている。この文では「家」が「へる」ことは重要で、「建物」による置換もできない。つまり、二つの文では「家がへる」という部分は共通していても、その主張の力点が異なっている。様相因子の考え方はこのような差異をほぼ無視し、単語を機械的に拾うことで定量化をしようとするものであった。一方第6章では、単語同士のつながりや文同士の関係なども勘案した上で定性的な分析を試みている。

15 原広司：空間の文法「場(2)」, GA JAPAN, Vol.29, A.D.A. EDITA Tokyo, 1997, pp.98-99。原はこの概念を数学の力学系分野から引用している。アトラクターの数学的定義については、ヒルシュ, M. W.・スメイル, S.・デバネー, R. L. : 力学系入門：微分方程式からカオスまで, 桐生伸他訳, 共立出版, 2007, p.316.など。

16 SD法を考案したオズグッド (Charles E. Osgood) らによると、多くの意味研究において多数の形容詞対は評価性因子 (Evaluation)、力動性因子 (Potency)、活動性因子 (Activity) によりまとめられる (岩下豊彦：SD法によるイメージの測定 その理解と実施の手引, 川島書店, 1983, pp.12-13.)。また近年では、建築設計の分野においてもアクティビティという語が一般的に用いられるようになってきている (小嶋一浩：アクティビティを設計せよ！—学校空間を軸にしたスタディ, 彰国社, 2000.など)。

17 好印象度の値については「[33] 沿道の植物」で比較的高いが、「[35] 川・水路」ではそれほどでもなく、「[49] 遠方の山や森」に至っては負の値になっている。自然が多いと好印象につながるという常識的な感覚とやや食い違っている部分がある。これは、AⅢ-1～3 (山が西に迫る狭小住宅街で、AⅢ-1では水路も見られる) やAⅢ-14 (鳥居本の街並みを抜けたのちの暗い山道) などで第一主成分得点の値が低かったことが影響している。他には「[61] 調和・特異」の好印象度が低いことも説明しづらい。本論の実験は、3つのルートを使ったとはいえ抽出されたエリア数は31にすぎず、78の様相因子のすべてに対し汎用的な知見を得るにはサンプル数不足の面もある。このことも考慮に入れて、分析を進めている。

18 辻幸夫編, 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修：認知言語学への招待, シリーズ認知言語学入門 第1巻, 大修館書店, 2003, pp.95-98.

19 コホネン, T. 他：自己組織化マップ, 徳高平蔵他訳, シュプリンガーフェアラーク東京, 2005.

20 本研究では、Viscovery社のソフトウェア「Viscovery SOMine 5.1 日本語版」を使用した。

21 たとえば本小節(1)の様相因子指標による分析を、主成分分析により試みると右表のようになる。固有値表を見ると第一、第二主成分の負荷量を見ても特性が掴みづらい。また第三、第四主成分も寄与率が高く無視できない。5指標の独立性が高いからである。

固有値			
	固有値	寄与率	累積寄与率
第一主成分	1.918	38.4%	38.4%
第二主成分	1.178	23.6%	61.9%
第三主成分	0.979	19.6%	81.5%
第四主成分	0.696	13.9%	95.4%
第五主成分	0.229	4.6%	100.0%

このように、自己組織化マッピングという手法は主成分分析と異なり明確な2軸の定義のない非線形な表現であり、プロパティと同数の特徴マップによって散布図の特徴づけがなされる。だから独立性の高いプロパティを用いる今回のケースや、本小節(2)のような多数のプロパティを用いる場合に特に威力を発揮する。様相を分析しようとするときさまざまな角度からの指標が必要となることや、データとして採用する空間の数が膨大になることがあるため、様相という対象と自己組織化マッピングという分析手法は、相性のよい組み合わせであると言える。様相の複雑さ、曖昧さを表現し、自由な読み取りを許容してくれる手法である。

主成分負荷量		
	第一主成分	第二主成分
占有率<様>	-0.208	0.754
集中度<様>	0.415	-0.068
順表現率<様>	-0.189	-0.776
全体率	0.899	0.080
境界率	0.923	0.030

22 ここでは占有率<様>が0.5%以上だった51の様相因子を用いる。また、様相因子指標間には独立性において差があったため、マップ作成時の重要度の値に対して重みづけを施した。まず5指標の相関係数を求め、各様相因子指標にとっての相関係数(単相関)の絶対値の和をとる。その値が最小のものを重要度1とし、絶対値和の値に反比例して重要度を変更した。すなわち他指標との相関性の高いものは独立性が低いものとみなし、重要度を下げたのである。具体的には下表のようになった。

	相関係数					絶対値の和	重要度
	占有率<様>	集中度<様>	順表現率<様>	全体率	境界率		
占有率<様>	1.000	0.005	-0.160	-0.110	-0.120	1.395	1.000
集中度<様>	0.005	1.000	0.071	0.131	0.261	1.468	0.951
順表現率<様>	-0.160	0.071	1.000	-0.197	-0.175	1.604	0.870
全体率	-0.110	0.131	-0.197	1.000	0.789	2.227	0.627
境界率	-0.120	0.261	-0.175	0.789	1.000	2.346	0.595

23 占有率<領>が0.5%以上の45の様相因子を用いる。今回は全エリアを等価に扱い、重要度はすべて1とした。

第6章

フレーム概念に基づく都市の様相の分析

前章では主に、実際にあらわれている都市空間と様相との関係性について分析した。しかし様相は空間に宿るものではなく、われわれの記憶や行動などとの関連の中で生じる指摘された。本章では、そのような人間の様相把握のプロセスや仕組みに迫りたい。

その分析において特に重要なのが、記憶や予想を司るシステムとして2.3.1で提示した「フレーム」の概念である。様相は過去から切り離されたある瞬間に生じる情動のようなものではなく、われわれの生という時間的なシークエンスの中で把握される。そのシークエンスを記憶として蓄え構造化し、様相把握の際のベースとなっているのがフレームである。本章では様相把握の全体的な仕組みを構成しているものとしてフレームを捉え、そのはたらきについて分析する。

具体的にはまず6.1で既往の議論を概観し、フレームに関する理論的枠組みを強化する。次に典型的な記録を一つ取り上げて分析し、以後の論述の枠組みを設定する。その枠組みに従い、6.2以降で分析を展開する。

フレームは様相把握の裏に隠れた構造であり、それを指定することで様相把握のプロセスが説明できるという一種の仮説である。したがって本章では、前章のような記述データではなく、より生身の様相に近い様相表現と領域表現を直接読み解いてゆくことになる。様相因子の考え方は様相・領域表現を単語のレベルで分節することで言葉を定量的に重ね合わせることを可能にしたものであった。しかしここでは個々の被験者の記録した文全体の意味、あるいは文と文との関係の網の中にある意味について考察し、その中に共通した仕組みを見出そうというもので、いわば定性的な重ね合わせにあたる。言語学における意味論 (semantics) と語用論 (pragmatics) の違いにも対応する。既往研究に多く見られるSD法のような手法からは観察できない側面に光を当てており、様相の定量的記述とともに本研究の独自性となっている。

6.1 分析の準備

6.1.1 フレームの関連理論の導入

(1) 記憶に関する議論の広がり

記憶や予想に関しては、主に19世紀以降さまざまな分野において議論され、相互に影響しながら発展してきた。

哲学では、存在論や認識論の時代にはあまり中心的なトピックではなかったが、近代以降はこの問題が盛んに扱われている。たとえば2.1.3で述べたように、ベルクソンは記憶と知覚は常に混じり合いながら、時間的に進行すると考えた。また記号論者パースの探究の理論は、最終的に得られた解釈項が習慣 (habit) であるとしている¹。習慣とは記憶のプラグマティックな解釈だと言える。

心理学では、子どもの発達段階を研究したピアジェ (Jean Piaget) がよく知られている。彼の中心概念に「シエム」 (scheme) がある²。シエムとは一般化された行為を指し、人間はシエムを用いて行為³し、外的環境に適応しようとする。主体は、シエムによって内的機構と外的環境との統一体を形成することができる。そして、認識した諸対象や自らの行動を次々にシエムへと取り込んでゆく「同化」 (assimilation) と、同化したシエムをまた次なる対象に適応させる「調節」 (accommodation) という二つの作用によってシエムの体系をつくりあげてゆく。シエムの考え方はナイサー (Ulric Neisser) へと継承され、またノルベルグ＝シュルツの実存的空間論にも応用が見られる⁴など、多彩な広がりを見せている。

また、言語学においても記憶研究は盛んである。言葉とは常にその人の記憶を下敷きにして発せられているからである。発話に必要な記憶については、言語の語用論に迫る認知言語学 (cognitive linguistics) の領域で、一般に「背景知識」として論じられている⁵。たとえばレイコフ (George P. Lakoff)

は、「理想化認知モデル」(idealized cognitive model ; ICM) という概念を提唱した。たとえば「週末」という言葉は、太陽の一巡の動きをもって「一日」、連続した七日を「一週間」とすることや、そして五日の勤労と二日の休暇という慣習的な暦を知っていることで、はじめて理解できる⁶。これらの知識はすべて、レイコフの言う理想化認知モデルである。似た考え方としてパースは、記号の対象理解に必要な記号にかかわる以前の経験である「付帯的経験」(collateral experience) について言及している⁷。

心理学や言語学と関連して重要なのが、知識工学(knowledge engineering) の分野である。この分野では、人間のような高度な能力をもった人工知能(artificial intelligence) を開発するために、人間の思考や行動のプロセスに対する研究が盛んに行なわれてきた。その目的のため、記憶の蓄積システムの構造化に特徴があり、心理学や言語学との間で相互に影響しあってきた。のちに詳しく述べるシヤンク(Roger C. Schank) やミンスキー(Marvin Minsky) らの試みはその代表例である。

さらに社会学(sociology) では、社会的に共有された記憶について議論されている。たとえばゴッフマン(Erving Goffman) は、行為の観点からフレームを定義した。ゴッフマンは、われわれが他者と共在(copresence) する状況に対し、「ドラマトゥルギー」(Dramaturgie) という演劇由来の理論を援用する。人は普段ごく自然に振る舞っているように見えても、実は演技をする「パフォーマー」であり、また同時に他者の演技を見る「オーディエンス」の役割を担っている⁸。そしてフレームとは、出来事の流れを何らかの組織だった意味あるシーンとして経験させる原理とされ⁹、状況にしつらえられた社会的構造である。

以上の諸分野では主に観察やシミュレーション的な実験を行なうことでモデルを構想しているが、記憶研究はそれだけには留まらない。ミクロな脳内物質の性状や挙動に関するニューロンレベルの研究や、脳の一部に障害を与えた動物を用いた実験による研究を通して、生命科学(life science) においても展開されているのである。

これらの研究に共通して見られる特徴は、記憶や予想を担う何らかのシステムの存在を仮定することである。2.3.1で導入した「フレーム」は、まさにそのことであった。このシステムに関して既往研究で盛んに議論され、本論でも明らかにすべきトピックは以下の三点に要約される。

- ・内部構造 …記憶はどのような仕組みや構造で蓄えられるのか
- ・プロセス …記憶の蓄積、予想の生成、そして様相把握はどのような過程でなされるのか。またそのときフレームはいかに利用され、そして進化するのか
- ・社会性 …様相把握、記憶や予想は異なる主体間でどのように共有されたり、あるいは食い違ったりするのか

ここからは、これらのトピックに関してとりわけ重要と考えられる6人の研究者の理論を重点的に取り上げる。

(2) アンリ・ベルクソンの記憶に関するモデル

ベルクソンは、宇宙のイマージュと身体を中心としたイマージュという二つの体系を起点として、知覚と記憶の時間的進行を示している(2.1.3を参照)。これに関してベルクソンは、いくつかのダイアグラムを提示している¹⁰。

まず図6-1は時間と空間のモデルである。水平線ABは空間におけるすべての同時的対象を含む、イマージュの全体系である。われわれにとっては潜在的知覚である。一方、垂線CIは時間的に継起する諸瞬間の配列である。そして二軸の交点Iこそが、現実的知覚である。ABは運動体であって、知覚したと思ったIは、その瞬間に過去へと流れ込んでゆく。そして未来は、いまだに消費されていないエネ

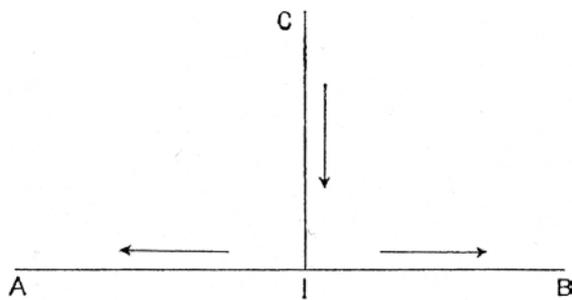


図6-1 時間-空間モデル

(ベルクソン, H.: 物質と記憶, ベルグソン全集2, 田島節夫訳, 白水社, 1965, p.161.)

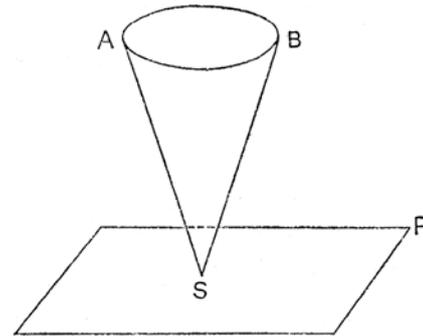


図6-2 記憶モデル

(同左, p.172.)

ルギーとして、イメージになるのを待ち構えている。

次に、二つのイメージの体系を記憶との関連で示したのが図6-2である。水平面Pは宇宙に関する私の現実的知覚を指し、宇宙のイメージの部分となす。円錐SABは記憶の全体である。そして、頂点Sは私の現在を指し、宇宙のイメージに出会う私の身体が集中する場所である。平面P内のイメージからの作用を受け、反作用を返している。行動の中心であり、行動が通過する地点である。しかしその行動も、記憶の全体に支えられて成り立っている。一方純粋な記憶である底面ABも、行動の遂行をみる点Sにまで下りてこないことには再現されえない。われわれが日ごろ抱く一般観念というのは、この行動(S)と純粋記憶(AB)の間であって、常に浮動している。

この円錐SABは、フレームというシステムの全体を指す。ベルクソンのモデルは、フレームと時間、身体などとの関連をうまくモデル化していると考えられる。

(3) ラリー・R・スクワイヤの記憶分類

フレームの構造に対する示唆を与える研究として、記憶研究のさまざまな文脈で引用される神経科学者スクワイヤ(Larry R. Squire)による記憶の分類法を取り上げる¹¹。

スクワイヤは、それまでの心理学、神経科学の知見や自身の実験結果をもとに、時間による分類、内容による分類という二つの方法で記憶を分類している。まず前者について、記憶は短期記憶(short term memory)と長期記憶(long term memory)に分けられる¹²。短期記憶は、情報を入力されたときの特殊な状態のまま一時的に(1~2分間程度)保存するシステムにあたる。容量は限られており¹³、不安定なためさまざまな要因で攪乱されやすい。そのうち重要な記憶のみが、より安定した、永続する可能性のある長期記憶へと選択的に移行される。

長期記憶は比較的安定しているが、長い年月の間に変化もする。この変化は、単なる忘却の線形的プロセスではなく、一つの事象についてある側面は忘れられ、残った面は逆に強化されるという「固定」のプロセスにより説明される。

内容による分類では、大きく宣言的記憶(declarative memory)と手続的記憶(procedural memory)に分けられる。宣言的記憶は事実や出来事、命題やイメージに関するものであり、より認知的で、内容について話すことが容易な記憶である。宣言的記憶はさらに、エピソード記憶(episodic memory)と意味記憶(semantic memory)に分けられる。エピソード記憶は自伝的な人生の出来事であり、特定の時間、場所と結び付く。意味記憶は世間一般の知識であり、時間的目印がない。

一方、手続的記憶は技能に相当する。歩き方とかズボンのはき方とかいった身体化された記憶の他、すでに獲得している宣言的記憶の概念操作の方法もこれにあたる。試行の反復によりゆっくりと成立するが、慣習になるためその手続内容の説明には苦勞する。特定の時間や場所に関係せず、長期記憶と短期記憶の区別もない。

(4) ロジャー・C・シャンクのスクリプト

知識工学者シャンクは主にエピソード的な記憶について探究しているが、その理解、形成、想起を担うのは「ダイナミック・メモリ」(dynamic memory) であるとし、常に柔軟で可変的な記憶構造を提案した¹⁴。その中で中心的なシステムとなるのが、「スクリプト」¹⁵ (script) である。和訳すれば「台本」であり、決まり切った活動の順序を指す。スクリプトは経験の繰り返しによって形成される。スクリプトに従うことで、その都度計画するよりも、思考の作業量を大幅に削減することができる。

図6-3はそのスクリプトを図示した例である。標準的な活動過程の周りに、それとは異なる例外的で特殊な記憶が集まる、中心性のある構造をなす。

シャンクはまた、理解と想起の過程について考える。何かを理解することは、単に新しい知識を取り入れることではなく、以前経験

したもっともよく似た現象を思い出し、それと現在の状況とを結びつけることである。よって、理解することと想起することは表裏一体、同時的な関係にあり、同一の記憶構造を用いていると考えられる。記憶との関連が強い出来事ほどよく理解され、またスムーズに想起されることとなる。

そしてスクリプトは予想を生み出し、それがガイドラインとなって理解がなされる。しかしときに予想は失敗する。そこで予想と現実とのずれが顕在化し、また記憶に蓄えられる。特に重要な失敗については、スクリプトの例外として記憶されるか、新しいスクリプトとなることもある。図6-3の中心軸と周辺の特例事例は、それぞれもっとも一般的な予想と、その予想に失敗した経験を表わしていることになる。失敗を説明することでスクリプトはその精度を高めてゆく。

ただしスクリプトは、必ずしも記憶を形成する確固とした単位として蓄えられているわけではない。むしろシャンクは、「レストランスクリプト」のようなものは記憶されていないと言う。それに関連する場面があらわれるたびに、必要に応じて組み立てられるのがスクリプトである。

(5) マーヴィン・ミンスキーのフレーム

シャンクのスクリプト概念が主にエピソード記憶を対象としたのに対し、ミンスキーのフレーム¹⁶はより広い文脈に使われる。

ミンスキーはフレームを知識ネットワークとして理解する。

まず、フレームは「節点」(node) と「関係」(relation) からなる階層ネットワークと考える。上位階層はその状況において固定されている事項であり (たとえば「レストランで食事をする」)、下位ほど可変的である (たとえば「何を食べるか」)。下位レベルの節点には多くの「スロット」(slot) があり、特定の例やデータで割り当てを必要とする¹⁷ (たとえば「レストランで注文する飲み物」)。割り当てられるそのもの自身もより小さな「サブフレーム」(subframe) であり、フレームのネットワークは無限の階層構造をなす。

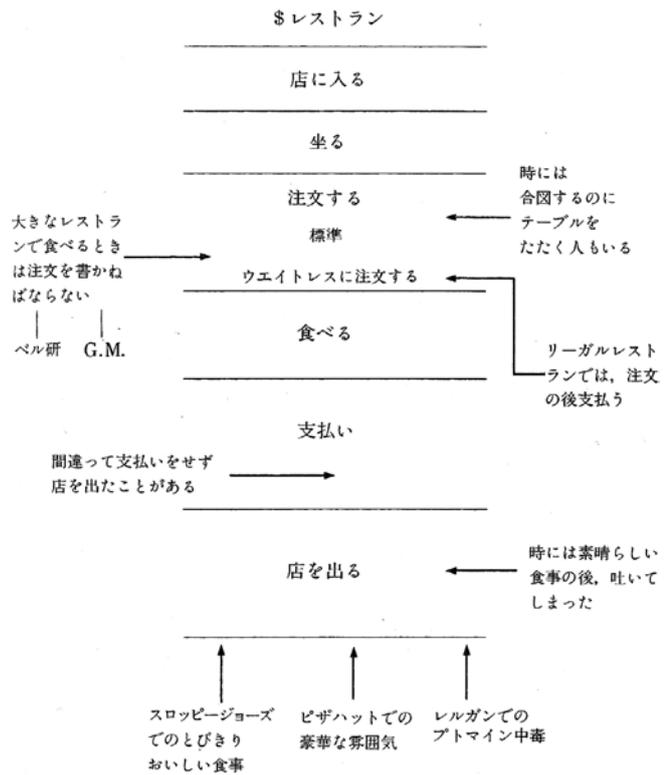


図6-3 レストランのスクリプト
(シャンク, R.C.: ダイナミック・メモリ 認知科学的アプローチ, 黒川利明・黒川容子訳, 近代科学社, 1988, p.45.)

スロットには、どのような値が割り当てられるべきかという「条件」(condition)を定めることができる(「レストランで注文する飲み物」の場合は飲み物というのが条件になる)。各スロットは通常、あらかじめ「デフォルト値」¹⁸(default)という既定値によって埋められている(同例の場合ワイン、コーヒーなど)。このデフォルト値は、シャンクも言うようにその都度考える量を削減してくれるすぐれたシステムになっている。さらに、状況の進行に応じてスロットへの割り当てを要求する機構として、「デモン」(demon)を想定する(たとえばレストランに行った話を聞いている人が、「何を食べたのか」ということが気になること)。

このように書くとフレームはリジッドな階層構造を形成するかに思われるが、そうではない。まず、選択される節点やスロットは任意であり、目的や文脈に依存する。たとえば「鳥」というフレームのスロットには、通常「姿」や「行動」にはスロットとデフォルト値が設定されるが、「重さ」「羽の素材の分子式」のようなスロットは要求されない。また、レストランに行く前に必ず髪を切る人にとってはレストランフレームと美容室フレームが直接的水平関係をもつなど、その配列関係も任意であり、ツリー構造に限定されていない。

以上のようなミンスキーのフレーム理論はFRL(Frame Representation Language)言語¹⁹などによるコンピュータ言語での実装へと展開された。門内輝行はこれを応用し、伝統的街並みのファサードをフレーム・システム(frame-system)として記述する言語を構築している²⁰。この門内の記述で特に興味深いのは、次のような二種類のフレーム間関係である。

- ・ A-KIND-OF …上位フレームの一例であることを示す
- ・ PART-OF …上位フレームの一部であることを示す

A-KIND-OFで結ばれる上位、下位の関係は、一般にクラス(class)とインスタンス(instance)の関係と呼ばれる。クラスは類、インスタンスは個体に相当する。そして、このインスタンス同士はパラダイグマ(paradigma)の関係にある。一方、PART-OFの関係で結ばれる上位、下位のフレームは全体と部分の関係にあたり、部分同士の関係はシンタグマ(syntagma)と呼ばれる²¹。

さらに、これらの階層関係のすぐれているところは、上位フレームから下位フレームへと情報を遺伝(inherence)することができることである。たとえばA-KIND-OFの関係なら、人間一般(クラス)に言える「二本の手、二本の足、直立歩行」などといった値が、あなたや私といったインスタンスにも適用される。PART-OF関係であれば、人間の体の全体に言える「血液が流れている」という値を、腕という部分にも遺伝させることができる。この遺伝は記憶すべきスロットの数を大幅に減らすことのできる仕組みである。

以上のことを図示すると、図6-4のようになる。この図では略図的にツリー構造で示しているが、実際のネットワークはさまざまな関係が輻輳し、複雑なセミラティス構造を示すことになる²²。たとえば言語についての知識構造であれば、意味的な階層構成に加え、音韻や綴りの類同関係、語の発生過程など、さまざまなネットワークの重なりが想定される。

またミンスキーは、パラダイグマ関係にある諸フレームは図6-5のような体系をとると主張している。すなわち、よく似て

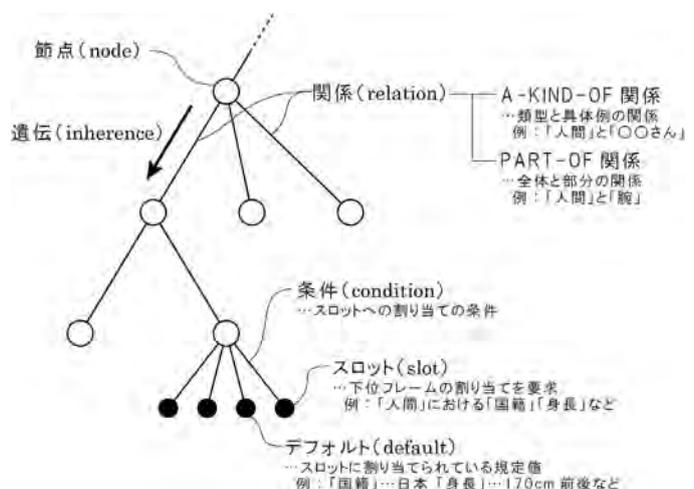


図6-4 フレームの知識構造
(ミンスキーおよび門内の記述をもとに作成)

いる要素同士がその差異によって互いを弁別するという「類似と差異のネットワーク」²³である。膨大な数の知識のすべての組み合わせについて差異を記すのではなく、似たもの同士のみを近くに置き差異をマーカーとすることで、効率的かつ柔軟な体系を構成できる。

ミンスキーは次に、フレームのはたらくプロセスに言及している。短期記憶はすべてが完全に記憶されるのではなく、選択的に長期記憶に移されるのであるが、そのとき、既存のネットワークの中にうまく位置づけられるもののみが、フレームとして長期記憶に保持されるとミンスキーは主張する。記憶されるフレームはより上位のフレームに結びつけられ、また自身のスロットにはデフォルト値（弱くではあるが）当てはめている。

さて、認知過程におけるフレームのはたらきは、照合（**matching**）処理として表現される。まずある状況に直面したとき、その状況にもっともよく似たフレームが探し出される。次に、現在の状況がそのフレームのデフォルト値で説明可能かどうかという照合が行なわれる。このときに用意されたフレームは、次なる状況を受け入れる構えをなす。シャンクのスクリプトと同じく、予想を生み出しているのである。

予想がうまく適合したときは、フレームやそのデフォルト値は信頼度を増し、より強固なものとなる。しかし予想が外れたとき、フレームは揺さぶりを受け、何らかの対応を迫られる。デフォルト値の割り当てをやり直す他、フレームの一部のスロットを無視することで拡大解釈したり、あるいは類似と差異のネットワークの中から別のフレームを探したりするといったものである。

この処理の結果、もともとのフレーム・ネットワーク自体も修正される。個々のスロットあるいはフレームごとの取り替えがなされたり、新しいフレームをつくる必要が生じたりするのである。ただしそのプロセスは車のパーツを別の既製品のパーツで取り替えるような単純なものではなく、仮説的に新しいフレームを生成し、それがうまくゆくか確かめた上で、古いフレームを取り外すといった慎重なものである。ミンスキーによると、こういった困難への対応方法もフレームに埋め込まれている。フレームは単なる知識構造ではなく、自律的に機能し、また進化（**evolution**）する機構なのである。

ところでこのようなフレームの運用は、特段意識しなくても行なえるものである。体の動かし方を正確に知らなくてもズボンをはくことができたり、机のかげになって椅子の足が一本見えなくても椅子は四本足だと判断できたりすることなどがそれである。われわれはこのような過程を習慣や常識として簡単に済ませる。しかしそうしたものが実は、非常に複雑な内容を含んでいることは驚くに値する。ミンスキーは、「余計なことをせずきちんと動く複雑なプロセスよりも、うまく動かない単純なプロセスの方に気がつく（＝意識にのぼる）ことが多い」と述べている²⁴。

(6)アルリック・ナイサーのスキーマ

認知科学者ナイサーはギブソンの包囲光配列のアイディア（5.2.1）をもとに、対象を見る段階ですでに情報を探索し、選択するような能動的なシステムがはたらいっているという考え方を示した²⁵。

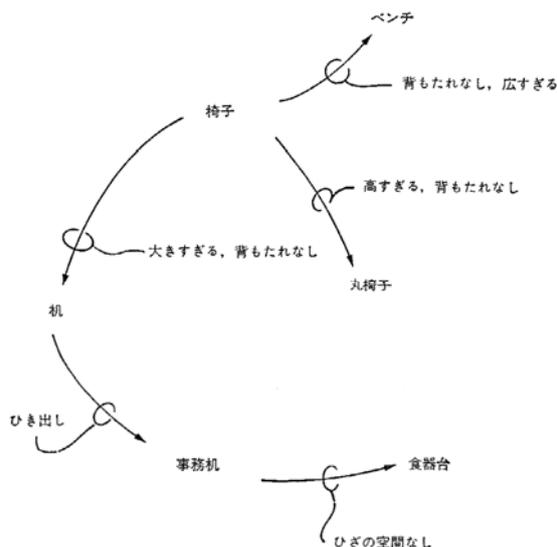


図6-5 フレームのなす類似と差異のネットワーク
 (ミンスキー, M.: 知識を表現するための枠組, コンピュータービジョンの心理 第6章, ウィンストン, P.H. 編, 白井良明・杉原厚吉訳, 産業図書, 1979, p.296.)

ナイサーは知覚を図6-6のような循環プロセスで表現する。

「スキーマ」²⁶ (schema) は知覚の依存している心的構造であり、フレームと同様の意味合いをもつ。スキーマは頭や目の動きによる探索を方向づける。それによって光の配列の中から、観察者は対象を利用可能な情報として抽出し、この情報によって、スキーマは修正される。この循環プロセス全体を、ナイサーは知覚と呼ぶ。

スキーマは予期を形成する機構である。予期することでどのような情報を抽出するかを決めている。環境に内在する情報の中で、スキーマの構えにあるもののみが抽出されるのである。もちろん予期せぬ刺激が突如与えられることもある。しかしそれは、循環を引き起こすスターターの役割を果たす。

また循環は時間的に持続する。情報によってスキーマは刻一刻と修正を受け、進化する。同時にスキーマは、情報を保存することができる。この意味でスキーマはやはり、記憶と予想の両者を担うシステムである。

このスキーマは単一のものではない。情報の種類だけスキーマがあると言ってもよく、スキーマ同士の間に関係性も想定されている。その中で空間把握に関して興味深いのが認知地図 (cognitive map) に関する考察である。ナイサーは認知地図を「定位スキーマ」 (orienting schema) と呼び、スキーマの一種に数えている。定位スキーマは移動を伴うような広い範囲の空間構造を与える。一方、現在いる場所における知覚循環を支えるスキーマを「対象スキーマ」 (object schema) と呼び、二つの循環の関係を図6-7のように表現する。

両循環は入れ子構造をなす。外側の循環は移動時のプロセスを説明しているが、マクロな定位スキーマの形成もその場ごとの対象スキーマの蓄積によるものである。また逆に、対象スキーマもより大きな構図の中で決定されている面もあると考えられる。よって図中の内外を分かつ点線は曖昧なものであろう。また対象スキーマ、部屋スキーマ、建築スキーマ、都市スキーマ…といった複層入れ子を仮定することもできよう。

柔軟な構えをもつ循環モデルを仮定することで、時間的プロセスやマルチスケールモデルを無理なく扱えることや、行動をその中に含ませることができるのが、ナイサーのモデルの特長だと言える。

(7) モーリス・アルヴァックスの集合的記憶

社会学者アルヴァックス (Maurice Halbwachs) は、「集合的記憶」 (collective memory) の概念を提唱した²⁷。彼は記憶は社会集団に帰属すると考える。たとえば小学校のときの思い出は、クラスの皆で共有している。自分に関する個人的な記憶だと思っても実は両親から何度も聞かされたことであつたり、新聞や会話から得た情報であつたりする²⁸。つまり同じ集団に属する成員は記憶を共有しており、個人の記憶の総体は、彼が属する多様な集団の重ね合わせにより規定されることになる²⁹。

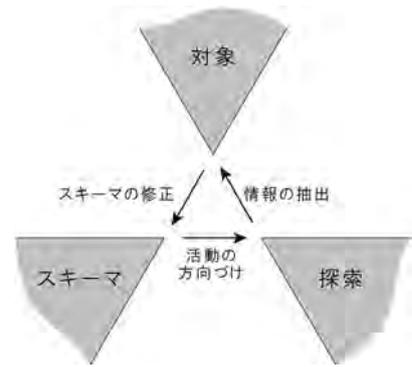


図6-6 知覚循環
(ナイサー, U.: 認知の構図 人間は現実をどのようにとらえるか, 古崎敬・村瀬旻訳, 1978, p.21. より作成)

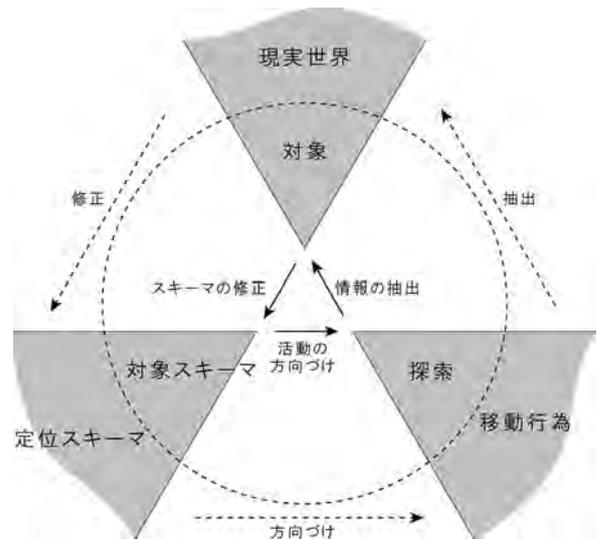


図6-7 入れ子状の循環 (上の文献, p.119. より作成)

この考えを採り入れると、ミンスキーらによって階層構造と類似・差異構造によって表現されていた知識ネットワークは、集団のネットワークとしても記述できる可能性がある。そうすると、属する集団を読み解くことで、その人の記憶についてもある程度たどることができるだろう。

さて、アルヴァックスにおいても一点興味深いのが、集団と空間とのかかわりについての思索である。彼によると集団と空間は相互に作用し合う関係にあり、集団は空間を変え、また空間は集団を規定する。この関係の中で記憶も変化する。しかし空間は長時間持続できるほどに安定しており、記憶の拠り所となる。それゆえに、社会的集団が利用するところになる。たとえば偉大な王や歴史的出来事などを記念してつくられた建築や石像は、民族の記憶を後世へと伝える。一つひとつの家屋も、そこに住む家族の記憶の根付く場所である。このように考えると、都市とは集合的記憶の宿る場所であり、その集積体なのである。

このことに関してはリンチも同様の指摘をしており³⁰、また2.2.3で挙げたノルベルグ＝シュルツ、レルフ、トゥアンらの探究した「場所」の概念とも通じ合う。都市と記憶や意味、愛着といったものの関係は、現代都市においてきわめて重要な論点であることが改めて伺える。

6.1.2 フレームと様相

以上で記憶に関するこれまでの議論を概観した。スクリプト、フレーム、スキーマ、あるいはシエムや理想化認知モデルなどさまざまな用語が見られたが、本論ではフレームの語でこれらを代表して論じる。その上で、様相論の立場からのフレームの捉え方を示し、概念の補足しておく。

(1) 既往理論の捉え方

フレームは様相把握を支えるメカニズムであり、われわれの生活において常にはたらいっている内的プロセスである。そのプロセスに関しては、シャンクのスクリプト（図6-3）、ミンスキーの照合、ナイサーの知覚循環（図6-6）などによって説明されている。また記憶と時間、あるいは身体との関係についてはベルクソンのダイアグラムやスクワイヤの分類がすぐれている。

フレームは知識の構造である。しかも単に静的な構造ではなく、動的で柔軟なものと考えべきである。これについてはミンスキーや門内の考えをまとめた図6-4の階層構造や、図6-5の類似-差異モデルによって説明されている。またフレームには、それ自身のうちに、どのようにはたらくか、またどのように自らを進化させてゆくかという機構も埋め込まれている。

そして記憶の共有という点においては、記憶の所属を集団へと帰したアルヴァックスの理論が興味深い。特に都市は人間の集団がつくりあげ、集団の住まうところであり、2.3.2でも指摘したように社会や集団に関する思考は欠かせない。

本論ではこれらの多様な考え方を適宜参照しながら分析を進めたい。というのもこれらのモデルは相互に衝突するものではなく、フレームの仕組みやプロセスについて異なる側面から捉えたものであり、それぞれに現象への説明力をもつと考えられるからである。

(2) フレームと様相との関係

様相は、時間・空間の中にわれわれが定位したときに生じるものであることを第2章で述べた。その定位が身体を媒体としており、身体を中心に環世界が形成されることも述べた。

そして経路に沿ってわれわれが移動することで、様相もさまざまに変化する。この経路的うつろいを下支えするシステムがフレームなのである。つまり様相はその都度の環世界に応じて不連続に生じるのではなく、時間的に連続しているが、フレームは過去の様相を保存したり未来の様相を予想したりすることで、その連続性を担保する。原の言う様相を「束ねる」役割を、フレームは担っている。

また様相とはわれわれが把握することがらの全体性であった。フレームもこの全体性の把握に向き合うシステムであると考えべきである。知識工学の諸理論やスクワイヤの記憶分類のような捉え方は、ともするとフレームが理解や問題解決のための構造化された知識体系だという解釈につながりかねないが、本論ではフレーム自体も様相と同様に漠とした全体性を指しうるものだと考える。「なんとなくいい雰囲気だな」という曖昧な表現の裏にも、フレームのはたらきがある。

以上のようにフレームは様相を束ね、それをゆるやかに保持する。フレームにはさまざまな知識やかつて把握した様相が記憶となって連なっており、可能世界のネットワークだと考えることもできる。

(3) 活性と不活性

現在の環世界において捉える様相が、フレームのはたらきによって変容することもある。たとえば一年前に一度会ったきりの相手に再会する前は、どんな髪型でどんな目で、眼鏡はかけていたかどうか、何を話したかなどを志向的に思い出そうとする。本論では様相を、われわれの把握していることがらの全体的な在り方と捉えるから、このようにフレームの中身を探ることで様相も変容する。

ただし毎日顔を合わせる母親に会う前には、そんなことをしなくても母親を認識できるし、会話もできる。このように当たり前のことを当たり前として処理できる能力は、フレームのすぐれた性質としてジャンクやミンスキーが指摘したものであった。

本研究では、フレームの中身が調べられたり疑われたり意識されたりしている状態を「活性」(active) プロセス、フレーム内で当たり前に進行する過程は「不活性」(inactive) プロセスと呼ぶこととする。活性プロセスは様相の捉え方を変容させる。ただもちろん、活性と不活性の間は連続的であると考えられる。またこのように考えると、フレームとは様相の可能態として活性化を待つものとも言える。

(4) デフォルト構造

ミンスキーは、さしあたりの既定値をスロットに導入する機構としてデフォルト値という考えを示した。フレームを不活性のうちに用いることができるのは、このデフォルト値という仕組みのおかげである。

ただし様相という大きな枠組みについて考えるとき、デフォルトの考え方は拡張すべきだと思われる。たとえば先の母親の例では、母親の髪型や目などのスロットの他、これまでの母親と話したときの状況、そのときの気分、あるいは父親や他の人たちとのマクロな人間関係なども含めた全体的な在り方が、デフォルト的に母親像をつくっているはずだからである。このような安定的なフレームの構造を、本論では「デフォルト構造」(default structure) と呼ぶこととする。デフォルト構造は、スロットに割り当てられたデフォルト値の信頼性が高いだけでなく、フレーム間の関係やシステム全体における位置づけもうまく定まっているフレーム(群)のことである。母親のような具体的な対象に関する知識でなくても、たとえば言語体系のような、他のフレームのための基準ともなる、抽象的で普遍性な知識もこれにあたる。さらに、あるときに捉えた全体的な様相がそのままフレームに保存されていることも考えうる。

新しく得た知識も、既存のデフォルト構造と対応づけられることで、安定的にネットワークに組み込まれ、長期間記憶されることとなる。このような組み込みを、本論では「組織化」(organization) と呼んでおきたい。組織化はものごとをよく理解することと関係し、ある種の法則化を伴っている。

6.1.3 典型的な記録の分析

ここでは表6-1のありふれた記録を例にとって丁寧に分析することで、単純な記録の裏にもフレームのはたらきを読み取れることを示す。

表6-1 本小節で分析する典型的記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
303	Ⅲ	—	3,000		大きな家が増える	5	1

なお本章では表6-1のようなデータを繰り返し用いて分析をするが、その凡例は表6-2の通りである。よって表6-1の記録は、被験者303がルートⅢのスタートからちょうど3,000mの地点（写真6-1）で、「大きな家が増える」という言葉で地点表現を記録したということである。またそのときの領域評価は、A（雰囲気のよさ）が5、G（事前知識）が1であったことも示されている。このAとGの値は、被験者のその場所に対する評価と事前の記憶を知るための参考として用いるデータである。



写真6-1 ルートⅢの3,000m地点

表6-2 本章で用いるデータの凡例

略記	意味	略記	意味
被	被験者番号	始	始点
R	ルート番号	終	終点(範囲表現、変遷表現、領域表現の場合のみ) ³¹
種	記録の種類	表現	様相表現または領域表現の内容 ³²
	— …地点表現	A	領域評価の「A:雰囲気のよさ」の記録地点における値 ³³
	↑ …変遷表現	G	領域評価の「G:事前知識」の記録地点における値
	} …範囲表現		
	☆ …特異表現		
	領 …………… 領域表現		

また6.2以降の各表には、表タイトルの右に全記録（様相表現5,882、領域表現951、合計6,833）のうちどれだけの記録に当該トピックの表現が見られたかという「記録数」を記している。フレームの作用は通常不活性のうちに進行するので記録に直接あらわれるとは限らず、記録数が少ないものの中にも重要なものがありうることに注意が必要である。しかしそれぞれのパターンの重要度を示す一つの指標にはなるはずである。

さて表6-1の典型的記録の背景として以下のようなフレームが想定される。

(1) 記録の必要条件となる基本的フレーム

被験者が記録をできるのは、以下のようなフレームを被験者がもっていることが前提となっている。

- 日本語の使い方、書き方
- 実験の流れや記録方法
- 歩き方やペンの使い方
- 記録用紙に示されている地図上のうち、自分のいる位置の判断方法

まずAは、捉えている様相を記録するためにどのような語を、どのような順序で配置するべきかを知っていることを示す。このことがあらゆる様相の表現を可能とし、また同時にその表現の可能性を制限もしている（3.1.2参照）。

言語の習得が長い年月をかけて行なわれてきたのに対し、Bの実験方法については当日はじめて教えられたものである。しかし説明を受けて既存のフレームと結びつけられ、この記録の時点ではある程度の組織化をみているはずである。

Cはより身体的であり、スクワイヤの言う手続的記憶に相当する。

そしてDは、記録用紙の地図と周囲の状況を照らし合わせて理解していることを示す。地図という鳥瞰的な情報と、実際に見える建物名、道路や川の形状などの虫瞰的な情報とを照らし合わせて自分のいる位置を特定しているとみられ、高度な空間把握能力が発揮されている。

(2) 記録したということ

様相は掴みどころのない曖昧な全体性である。それを言葉で表現しようとするれば、いくら言葉を連ねても書ききれない。しかしその中で特に「大きな家が増える」と記録したということは、この被験者が把握している様相の特に顕著な一面として認識し、またフレームとの結びつけによってそれを理解していることを表わしている。このとき、「大きな家が増える」ということは、活性化され様相としてあらわれているとともに、フレームに組織化されてもいる。

(3) 地点表現としての記録

「大きな家が増える」ということを地点表現で記録したことは、この地点を境にして前後で世界が異なっていることを示唆する。「この地点より先は、この地点より前に比べて大きな家の数あるいは割合が増す」ということである。これは、事実をありのまま捉えていると同時に、すでにその法則化を済ませているものと見ることができる。地点表現 (—)、変遷表現 (↑)、範囲表現 () および領域表現は一般的にこの法則化の意味合いをもち、特異表現 (☆) はその法則の例外を示す。

(4) 「家」

この言葉は、自らの環世界にあらわれているその物体を「家」として認識していることを示している。やはり「家」という既存フレームとの結びつけが必要である。われわれは簡単に「家」という言葉を使っているが、その際には、建物の形状やスケール、素材、配置、表札の有無や内容、居住者、あるいは周囲の状況なども含め総合的に判断していると考えられる。ミンスキーのフレーム観に照らすと、図6-8のような知識ネットワークが「家」のデフォルト構造を形成していると考えられる。

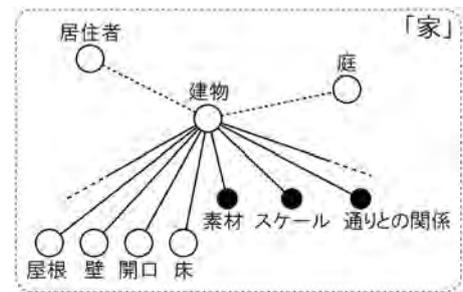


図6-8 「家」のデフォルト構造のイメージ

(5) 「大きな」

「大きな」という言葉は、図6-8の「家」のデフォルト構造の中の「スケール」というスロットを占めると考えられる。そしてこの「大きな」という言葉の使用には二つの要因が考えられる。一つは「家は普通これくらいの大きさ」というデフォルト値があり、目の前の家がそれに比べて大きいため、「大きい」という言葉が発せられたというものである。もう一つは、これまで歩いてきたルート沿い（特に直近の場所）にある家との比較である。「このあたりの家はこれくらいの大きさ」という記憶がフレームに形成されつつあり、それとの差異によって「大きい」とされたという見方である。

この二つのことは、スクワイヤの言う長期記憶と短期記憶に対応づけることができる。実際には、この両者が混じりあってフレームを形成していると考えられるべきだろう。これを経路のダイアグラムに反映すると図6-9のようになる。比較的強固な長期のデフォルト構造に、ルートを歩く中で形成、進

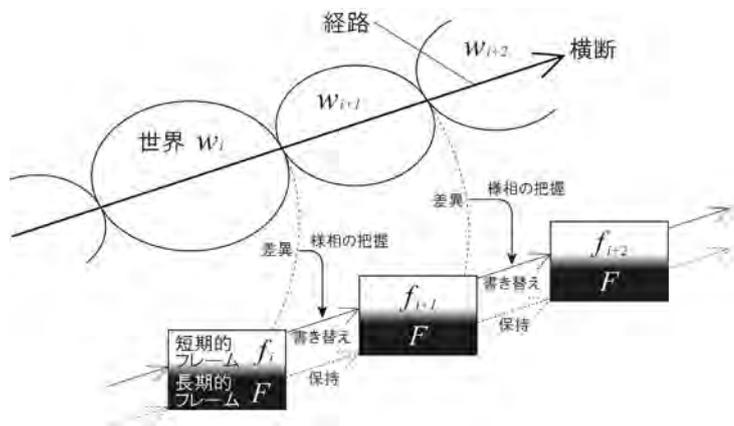


図6-9 短期的・長期的フレームのダイアグラム

化し、あるいはすぐに忘れられるような短期の記憶が次々と折り重なっているのである。

また重要なのは、長期・短期のどちらにせよ比較を用いている点である。比較によって類似と差異を見出すことは、様相把握のもっとも基本的プロセスの一つである。

(6)「増える」

最後に、「増える」という言葉はそれ自体として時間的な差異や変化を含意している。これまでのルートと比較して、「大きな家」の数あるいは割合が増したのだと考えるのが妥当であろう。先ほどの場合とは異なり、明らかに経路上の短期的記憶が主である。

以上のように、被験者がごく当たり前に行なったなにげない記録も、実は非常に複雑なフレームのはたらきによるものであることが見て取れる。

6.1.4 分析の組み立て

前小節のようなフレーム理論を用いた分析を、全様相・領域表現データについて行なった結果、さまざまな知見を得ることができた。次節以降に詳述するが、ここでその概要を記しておく。

①短期的フレーム

まずは「大きな家が増える」の記録の裏にあった「このあたりの家はこれくらいの大きさ」のような、短期的にどんどん書き替えられるフレームについて分析する。具体的には様相把握やフレーム書き替えのための重要なシステムとして「気づき」と「類似と差異」を提示する。

②長期的フレーム

次に「大きな家が増える」に見られた「家」「標準的な家の大きさ」のような、長期的に形成されたフレームについて分析する。これは、安定した知識体系であるデフォルト構造の問題と深く関連する。デフォルト構造そのものが記録にあらわれることは少ないが、逆接や驚きなどの表現の裏にもデフォルト構造を見て取ることができる。

③身体的フレーム

われわれは身体によってこの世界に在り、様相を把握している。特に空間とのかかわり方において身体は重要である。「大きな家が増える」の例でも、地図という鳥瞰的な見方と、自らの身体を中心とした虫瞰の見方という二つの空間把握方法をうまく組み合わせていることがわかった。本論では身体を肉体化された長期的フレームであると捉え、空間や様相とのかかわりについて考察する。

④フレームの志向性

様相は決して環境によって一意に決定されるものではなく、われわれは世界に対する態度—志向性—を示しうる。この志向性は、フレームの組み方やその運用方法として理解することができる。ここでは、志向性が各人の様相把握に個性を与えている例や、世界への願望や空想としてあらわれている例について分析する。

⑤フレームの社会性

フレームは原初的に個人的なものであるが、多くの人に共有されている部分もかなりある。①～④についても個々の被験者の記録を取り上げながらも、その間にある汎用的なシステムを探究している。

ここでは、フレームや様相把握の個人性や社会性について再度考察する。

①②が知識構造という意味でのフレームの分析にあたり、③までを含めたものがフレームの分類になる。④はこれらの運用の仕方について、⑤はその主体間関係についての分析である。6.2以降の節構成を表6-3にまとめる。トピックはツリー状に分類されているものの、相互に関係しあっている。

表6-3 6.2以降の組み立て

節	小節	項	目
6.2 短期的フレーム	6.2.1 気づき	(1)気づきと様相	
		(2)前方への気づき	①視界の変化 ②記憶との関係 ③アトラクター性
		(3)後方への気づき	
	6.2.2 類似と差異	(1)経路上の一地点での類似と差異	
		(2)経路上の連続的空間中での類似と差異	
		(3)経路上の離れた地点での類似と差異	①全体的な傾向 ②類似 ③差異
6.2.3 短期的フレームの書き替え	(1)文の線条性 (2)経路上の文の連なり		
6.3 長期的フレーム	6.3.1 言葉にあらわれるデフォルト構造	(1)「らしさ」の表現	
		(2)「いかにも」と「普通」	
	6.3.2 デフォルト構造からのずれ	(1)逆接表現に見るずれ	
		(2)驚き (3)疑問	①疑問の表現 ②疑問に対するアブダクション ③空間的経路性による疑問の解消
		6.3.3 デフォルト構造の進化	(1)固定化 (2)書き替え
6.4 身体的フレーム	6.4.1 行動による様相把握		
	6.4.2 二つの座標系	(1)身体中心の相対座標系	①座標軸 ②距離
		(2)鳥瞰的な絶対座標系	
	6.4.3 内と外		
	6.4.4 アトラクター	(1)アトラクターの抽出とマップの作成 (2)アトラクターマップの分析	①類型 ②形態・スケール ③参照方向 ④記憶との関連 ⑤競合や差異
		(3)アトラクターの様相論的解釈	
6.4.5 諸感覚のはたらき		(1)諸感覚の関係 (2)長期的フレームを介した諸感覚の連動	
6.5 フレームの志向性	6.5.1 志向性の明確な表現	(1)表現のスタイル	
		(2)歩くうちに生じる志向性	
	6.5.2 フレームにおける願望	(1)行動への願望 (2)デザインへの願望	
		6.5.3 可能世界の志向	(1)可能的時間
	(2)可能的空間 (3)可能的行動		
6.6 フレームの社会性	6.6.1 個人的フレーム 6.6.2 社会的フレーム		(1)今回の被験者に共有されたフレーム (2)マスメディアによる社会的フレームの生成 (3)「京都市らしさ」の分析

1 笠松幸一・江川晃：プラグマティズムと記号学，勁草書房，2002，p.47.

2 ピアジェ，J.：ピアジェに学ぶ認知発達科学，中垣啓訳・解説，北大路書房，2007，pp.16-41.。なおピアジェの用いた類似の概念に「シエマ」(schema)がある。シエマはたとえば町の地図のような単純化されたイメージであり、シエマが行為的なものであるのに対し、シエマは視覚的なものである。ピアジェはシエマとシエマを使い分けているものの、英語や日本語に訳出される際には両方がシエマとされることが多く、前掲書の訳者の中垣はこのことが混乱を招いていると批判している。本論では中垣の方針に従い、シエマとシエマを区別する。

3 この場合の行為とは思考(内的行為)を含む。

4 ノルベルグ＝シュルツは、実存的空間は安定したシエマの体系であり、社会的な環境のイメージであるとしている(ノルベルグ＝シュルツ，C.：実存・空間・建築，加藤邦男訳，SD選書，鹿島出版会，1973，p.40.)。

5 レイコフの他に類似のタームとして、フィルモア(Charles J. Fillmore)の「意味フレーム」(semantic frame)、

ラネカー (Ronald W. Langacker) の「認知領域」(cognitive domain) などがある。

6 レイコフ, G.: 認知意味論 言語から見た人間の心, 池上嘉彦・川上誓作他訳, 紀伊國屋書店, 1993, pp.79-80.

7 注釈1の文献, pp.34-36.

8 椎野信雄: ドラマトゥルギイから相互行為秩序へ, ゴフマン世界の再構成, 安川一編, 世界思想社, 1991, pp.38-39.

9 安川一: 〈共在〉の解剖学, ゴフマン世界の再構成, 安川一編, 世界思想社, 1991, p.10.

10 ベルクソン, H.: 物質と記憶, ベルクソン全集 2, 田島節夫訳, 白水社, 1965.

11 スクワイヤ, L.R.: 記憶と脳 心理学と神経科学の統合, 河内十郎訳, 医学書院, 1989.

12 短期記憶の中から、さらに短時間の記憶バッファーに相当する直接記憶 (immediate memory) を分離する考え方もある (注釈11の文献, p.145.) が、ここでは短期記憶と長期記憶による二分法を用いることとする。

13 ナイサーは容量に限界があるのではなく、スキーマの同時利用ができないだけで、習熟により上達すると考えている (ナイサー, U.: 認知の構図 人間は現実をどのようにとらえるか, 古崎敬・村瀬旻訳, 1978, pp.103-109.)。

14 シャンク, R.C.: ダイナミック・メモリ 認知的科学的アプローチ, 黒川利明・黒川容子訳, 近代科学社, 1988.

15 注釈14の文献では「台本」と訳出されているが、シャンクを参照している他文献では和訳せず「スクリプト」の用語を用いるのが一般的で、ピアジェのシュエム、ミンスキーのフレームなども一般にカタカナのまま扱われるので、本研究でもそれに従う。またシャンクは、同書でスクリプトの他に場面 (scene)、MOP (memory organization packet; 記憶組織パケット)、TOP (Thematic Organization Points; 主題による組織化の要点) といった概念を提唱しているが、いずれも未完成の理論と考えられ、他文献での引用も少ないため、ここではスクリプト概念のみを用いてシャンクの理論を要約する。

16 ミンスキー, M.: 知識を表現するための枠組, コンピュータービジョンの心理 第6章, ウィンストン, P. H.編, 白井良明・杉原厚吉訳, 産業図書, 1979, pp.237-332.

17 スロットをもつ節点をミンスキーは特にターミナル (terminal) と呼ぶが、簡単のため本論ではスロットの語のみを用いる。

18 注釈16の文献では単に「デフォルト」と訳出されているが、6.1.2に述べる「デフォルト構造」との違いを明確にするために、ここでは「デフォルト値」の語をあてる。

19 Roberts, R.B. and Goldstein, I.P.: The FRL Primer, A.I. Memo 408, MIT, 1977.

20 門内輝行: 街並みの景観に関する記号学的研究, 東京大学学位論文, 1997, pp.466-471.

21 パラディグマ、シンタグマの用語についてはバルトを参照 (零度のエクリチュール 付・記号学の原理, 沢村昂一訳, みすず書房, 1971, pp.157-159.)。

22 5.2.3に挙げたアレグザンダーは都市構造の分析においてセミラティス概念を提唱していたが、ミンスキーも、フレーム間の結びつきの自由さについて都市構造とのアナロジーにより説明している (注釈16の文献, pp.297-300.)。都市構造と知識構造との相同性を示唆しており、大変興味深い。

23 この用語は門内の提唱しているものである (注釈20の文献, pp.398-400.)。門内によると、魅力的な街並みを分析すると、この類似と差異のネットワークが幾重にも形成されている。なおミンスキー自身は「類似ネットワーク」の語を採用している (注釈16の文献, pp.293-297.)。

24 ミンスキー, M.: 心の社会, 安西祐一郎訳, 産業図書, 1990, p.26.

25 注釈13の文献。

26 注釈13の文献では「図式」と訳出されているが、注釈15と同様の理由で本論では「スキーマ」の語を用いる。

27 アルヴァックス, M.: 集会的記憶, 小関藤一郎訳, 行路社, 1989.

28 新聞の書き手・読み手のような、互いに相手を知らないような場合も集団としていることから、アルヴァックスの集団概念はかなり広義なものと思われる。

29 さらにアルヴァックスは、集団の中の個人の立場によって記憶が異なることも指摘している。たとえば学校のクラスの思い出は生徒によってはただ一つのかげがえのないものであるが、先生にとってはクラス形成は毎年繰り返される慣習にすぎないのである。よって集団は「不均等に分有された感情に基づく集団」であり、ここに記憶の多様性や不連続性が生まれる (注釈27の文献, pp.7-11, 43-44.)。

30 リンチ, K.: 時間の中の都市 内部の時間と外部の時間, 東京大学大谷幸夫研究室訳, SD選書, 鹿島出版会, 2010, p.164.

31 変遷表現によって領域分割 (連続分割) がなされた場合、それまでの領域の終点=次の領域の始点が幅をもつこととなる。その場合、変遷表現の始点と終点の midpoint をとり、その値が奇数になった場合は偶数に切り上げたものを、当該領域表現の始点または終点として表示する。

32 様相表現の場合、同地点の記録のうち分析に関係のない部分は除いている。

33 その記録地点または始点が含まれる領域の領域評価値を用いる。Gも同様。

6.2 短期的フレーム

本節では、歩くうちに次々と書き替えられる短期的フレームの仕組みを明らかにする。

短期的フレームの変遷は様相把握と緊密に連動している。様相の把握とともにフレームは大なり小なり書き替えを受け、同時にそのフレームが次の様相把握への構えをなすからである。したがって、短期的フレームは様相と同様にきわめて経路的な現象であると言える。

ルートという経路に沿った短期的フレームの活用の有力なシステムとして、「気づき」と「類似と差異」を取り上げる。このうち類似と差異については、差異が様相把握のキーであると何度も述べてきたように、本論でも中心的な概念となっている。しかしその差異にも気づかなければ意味がない。気づきもすべての様相把握における根源的な原理である。本節ではこの二つのトピックについて述べた後に、6.2.3では記録の流れの中に見る短期的フレームの変容について考察する。

6.2.1 気づき

(1) 気づきと様相

世界の変化は様相があらわれる基本的な仕組みである。しかし客体としての世界の変化ではなく、世界とフレームとの関係においてわれわれが把握する変化こそが様相にとって本質的である。たとえ物的世界が変化していても、それに気づかなければ様相は変わらない。逆に物的世界が変化していなくても、何かに気づけば様相は変わる。そして短期的フレームも書き替えられる。

表6-4の例は気づきによる様相の変化を明示的に表わしている。

表6-4 気づきの記録〈記録数:全様相・領域表現〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
229	II	—	1,234		<u>いつのまにか</u> 、伝統的な建物のところからぬけて少し雑然としている	1	1
205	II	—	2,238		緑が <u>見えて</u> なんとなく安心感	4	2
320	III	☆	586		ヒグラシとかの虫の鳴き声に <u>気づいた</u>	4	4
322	III	☆	690		左右を見ると坂のとちゅうにいることに <u>気づく</u>	2	1
325	III	—	2,318		仁王門が <u>見えてきて</u> 、また観光地のような感じに思えてきた(街並は変わらないが)	4	1
305	III	—	2,984		右ななめ前にフツとちがう林を <u>発見!!</u> 《右》	5	1

たとえば被験者229の記録からは、実際に伝統的エリアから抜け出た地点と、それに気づいた地点にずれがあることが明確に読み取れる。様相は、経路上のさまざまな気づきの集合の上に成り立っている。すべての様相表現は、気づきの記録なのである。

(2) 前方への気づき

表6-4の被験者325の言葉には、前方の寺の門というただ一つの建築に気づいたことで全体的な様相が変わったことが記されている。この前方の特定要素に関する気づきについては様相因子「[48] 前方の寺社」「[49] 遠方の山や森」で分析したが、プロットグラフ(Appendix-C)を見てもわかるように、同じ対象であってもその気づきの位置はばらついている。ここでは気づいた位置と気づきの対象の位置を示したプロットマップを作成し(図6-10)1、さらなる分析を試みる。

① 視界の変化

気づきの位置のばらつきは、視界の変化によって規定される面が大きい。ルートIの堀川通で見える北山、ルートIIの角を曲がって見える船岡山と建勲神社、ルートIIIのスタート直後の視界の開け、

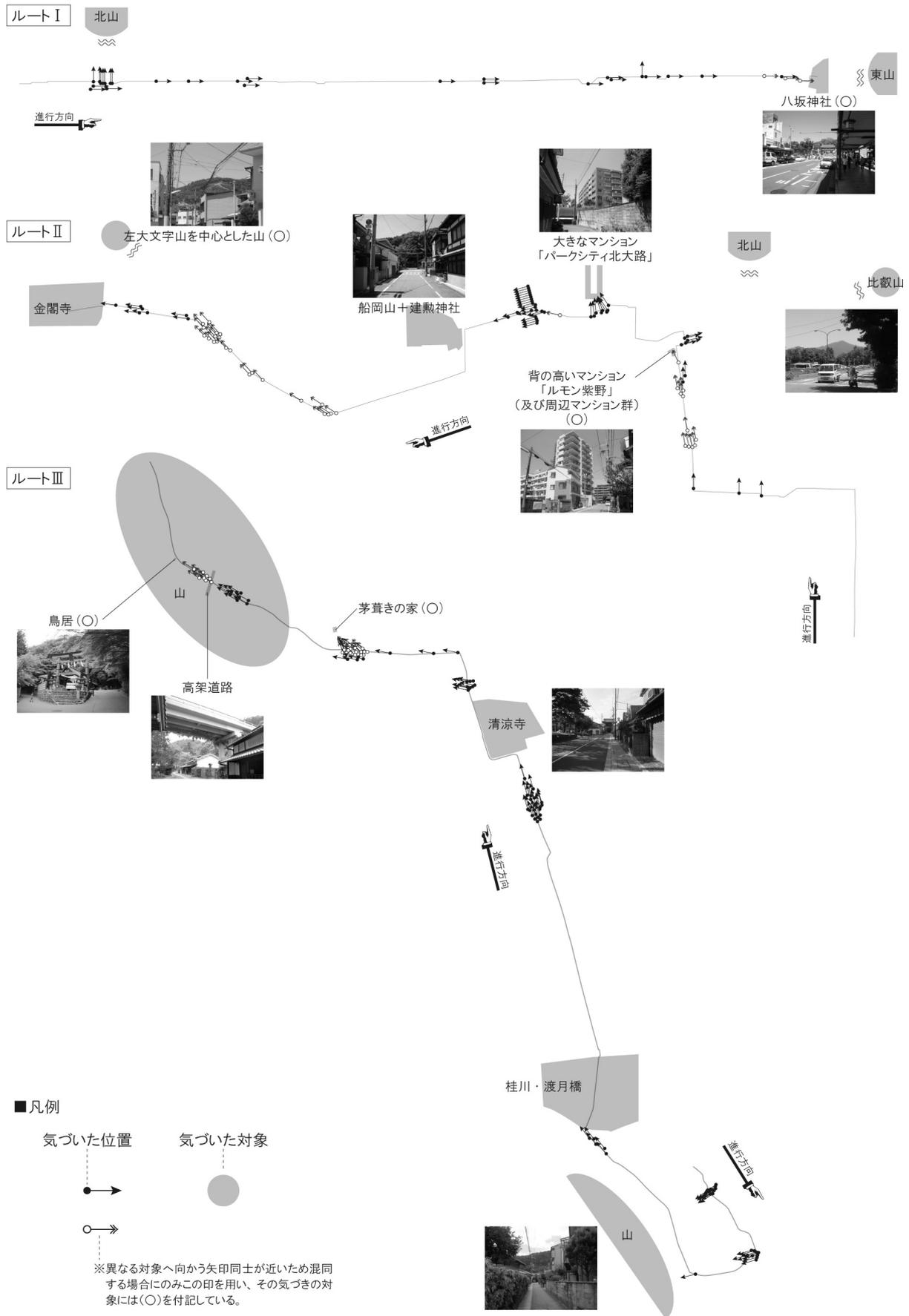


図6-10 遠方からの気づきの記録のプロット

あるいはその後の曲がり角で目に入る西山、建物の切れ目で急に見える茅葺きの家などは、気づきの地点が集中する。ギブソンの言う遮蔽縁の効果でもある。ルートⅢの清涼寺の手前には明確な曲がり角はないものの、道が微妙に曲がっているため気づきの位置は比較的集中している。

一方ルートⅠの東山、ルートⅡの左大文字山についてはかなり遠いところからずっと見えているため、気づきの位置は離散的である。東山は最後までルートを歩けば必ず目に入るはずなのに、ずっと見えているためか、最後まで記録しない被験者もいる。

②記憶との関係

よく知られているものほど遠くから気づかれやすい。その代表が東山である。単に「山」ではなく、「東山」と名指されることが多いのもそれを表わしている。ルートⅡの紫明通で一瞬目に入る比叡山も、気づいた人数こそ少ないが、そのような例である。鈴木信弘らは、記憶により遠くから気づくことができるという現象を「跳ぶ記憶」として指摘している²。

一方、船岡山や左大文字山では様子が異なる（表6-5）。

表6-5 船岡山と大文字山に関する気づきの記録（記録数：船岡山21/大文字山22(うち二段階は7)）

被	R	種	始	終	表現	A	G
229	Ⅱ	—	2,230		目の前に森がみえる	4	1
214	Ⅱ	—	2,232		森が見える	4	1
207	Ⅱ	—	2,234		曲がると先に山(?)が見える	5	1
225	Ⅱ	—	2,234		正面に山?	5	1
220	Ⅱ	—	2,234		奥に山みたいなのが見える《通りの先に山、神社、鳥居が見えるスケッチ》	4	4
206	Ⅱ	—	3,096		前方に山、森and学校が見えだす	3	1
		☆	3,570		「大」の文字が見えちよっとテンションup	3	1
212	Ⅱ	☆	3,490		前に見える山が“大文字”って気付いた!	2	1
209	Ⅱ	—	3,084		正面に山	4	1
		☆	3,538		左大文字が見える見える	4	1
211	Ⅱ	}	3,058	3,328	向こうに見える山の名は?タカオ山かな	4	1
		☆	3,436		こっちに見えたのは、左大文字だったか!	4	1
214	Ⅱ	—	3,370		山が見えた	4	1
		☆	3,534		左大文字	4	1
220	Ⅱ	—	3,184		道がビョーな坂になっていることに気づく。奥に山と学校みたいなのがうっすらと見える	3	1
		—	3,538		大文字が見える《左大文字山のスケッチ》	4	1
229	Ⅱ	—	3,534		目の前の山に気がついた。安心する。	4	1
		☆	3,908		大文字がすごく近くにみえてびつくり!!	4	1

これらの様相表現は、ほとんどが領域評価Gの値が1、つまり被験者にとってなじみのない地域で記されたものである³。船岡山は「森」とされたり、山であることに疑いをもたれたりしている。最終的に「船岡山」と名指したのも2人の被験者のみであった。また船岡山は三山で囲まれた京都盆地の内側にある小山である。山は外周にあるというデフォルト的な空間構図が裏切られ、山が突如あらわれたことに対する戸惑いもあったものと思われる。

左大文字山は16人がその名を使ったが、はじめはただ山と認識していたものが近寄って「大」の字が見えると左大文字山だと気づく、二段階の気づきという現象が見られた。この現象は視界の変化と記憶の両方に関係している。

③アトラクター性

遠くからの気づきは、のちに述べるアトラクターの特徴の一つにもなっている。遠くから気づくこ

とで、それに近づいてゆくという方向性を生じせしめるのである。

ただしそれほど強いアトラクターとは言えないが気づきの対象となったのは、ルートⅠの北山、ルートⅡの北山、比叡山、二つの大きなマンション、ルートⅢの高架道路と鳥居である。二つのマンションと高架道路は目立って大きい人工物で、被験者たちからの評価が非常に低い。原の用語で言うと、アトラクターというよりむしろ遠心力をもつリペラー (repeller) ⁴⁾に近い。

さて、前方にある建築や山といった目立った要素とは別に、これから向かう街路の様相について何らかの気づきを示した例もある (表6-6)。

表6-6 前方の街路に関する気づきの記録 (記録数:91)

被	R	種	始	終	表現	A	G
123	I	—	140		堀川通りが見える、車が 多そう	3	1
123	I	—	282		この先の四条は 混んでそう に見える	3	1
126	I	—	724		前方の景観 が都会って感じ	3	2
109	I	—	1,544		行く先の車 の量が気になってくる	3	5
102	I	☆	966		四条のアーケードが見え始める、 あ、四条だ というかんじ	1	2
216	II	—	1,420		向かいの大通り の音とともににぎやかな雰囲気	1	4
306	III	☆	2,728		前方 に木のトンネルが見えてくる、涼しそう	4	1

前方の街路への気づきは、これから向かう世界についての予想を生み出している。どのような世界かということをおおむねフレームに組織化しているとも言える。気づきはその場での様相を変えるだけでなく、経路に沿って広い領域を理解させるのである。

この現象は、記録されたものだけを見てもルートⅠで特に多い。ルートⅠは真っすぐで先が見通せ、さらに多くの被験者になじみがあることから、前方をたやすく予想できるのである。被験者102の言葉などは明らかに過去の記憶との結びつけである。

(3) 後方への気づき

表6-7 後方への気づきの記録 (記録数:不可算)

被	R	種	始	終	表現	A	G
119	I	—	578		工事中。 そういえば トラックの音が 気になっていた 。全体的にうるさい。	2	1
101	I	☆	620		ローソン (大通りのわりにコンビニが少ない)	3	4
109	I	☆	782		ふと電柱に気づく、 今までの道にもあったことに気づく	3	4
123	I	☆	1,118		車の音もすごいけど、アーケードに音楽が 流れてることに気がついた	2	1
119	I	☆	1,134		横の通りに電線が。 そういえば 大通りには電柱がない。	2	1
229	II	↑	302	394	いつのまにか 、両側とも緑がおいしげってる感じに。	4	1
229	II	—	1,234		いつのまにか 、伝統的な建物のところからぬけてで少し雑然としている	1	1
226	II	☆	2,712		わんこの前足だけ見える。 そういえば 犬が少ないなあ…と思う	4	3

組織化が後方へ向かうこともある (表6-7)。たとえば被験者119の電線の例では、交差する道路の電線を発見したことで、電線、電柱に関するフレームが活性化され、ルート上の電柱の不在に気がついた例である。ある場所での気づきを受け、それを経路上の広い範囲へと一般化し、後ろへも遡って領域を組織化している。短期的フレームもまた修正される。

記録の過程を考えると、変化表現 (↑)、範囲表現 () で書かれた言葉はすべて、その終点のあたりから振り返って組織化して書いたのであろうと思われる。つまり後方領域の組織化という現象はかなり普遍性をもつのである。領域表現も同様で、ルートすべてを歩き終わった後で改めて領域を組織化した言葉であった。

ジェイムズは、個人的な「意識の流れ」について考察し、それを文章にたとえて説明している⁵。ピリオドで閉じた文章は意識の流れの「実質的部分」(substantive parts)であり、また次の文章が始まって閉じる前のやや曖昧な状態は「推移的部分」(transitive parts)と呼ばれる。この推移的部分には、概念化され名づけられる以前の「感じ」(feeling) というものが含まれている。

様相は、根源的にはこの推移的部分の段階である。それを、あるときに実質的部分へと組織化し、言葉に落とす。比喩的に表現するならば、都市においてわれわれは経路にピリオドをつけながら歩いているのである。

以上で述べてきたように、気づきは様相把握の基本的な仕組みになっている。しかし気づくか気づかないか、どのタイミングで気づくかは人により、また時により異なり、このことが様相に不確定性を与える一要因になっている。さらに、前方や後方への気づきは領域の把握にダイナミズムを与えている。

これらを経路のダイアグラムにまとめると、図6-11のようになる。ここで世界を点線で示しているのは、これらの領域や境界は気づきに依存し、不確定的だからである。

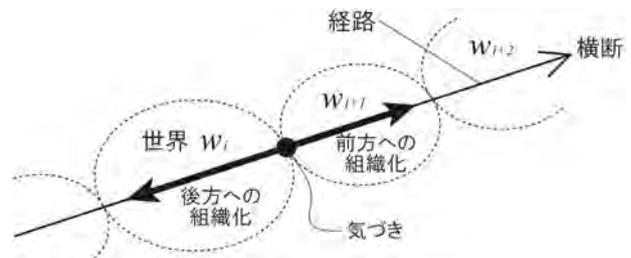


図6-11 気づきに関するダイアグラム

6.2.2 類似と差異

類似と差異に基づく様相の把握は、短期的フレームに基づくもう一つの重要な原理である。この現象はさまざまなスケールで記録にあらわれているが、以下マイクロからマクロへと分析を進める。

(1) 経路上の一地点での類似と差異

まずは、経路上のある場所での類似と差異に関する記録である。歩かなくても把握できるであろうタイプである。もっとも多かったのは、通りの左右に関するものであった(表6-8、様相因子「[77] 街路の左右の比較」も参照)。

表6-8 通りの左右の類似と差異に関する記録 (記録数: 左右どちらかのみ308/類似81/差異53)

被	R	種	始	終	表現	A	G
101	I	}	84	280	北側 は金融系の店が立ち並び、 南側 は新しい感じの商店街の様	2	4
109	I	}	2,426	2,520	南北 で雰囲気がちがう	4	5
217	II	—	56		東側 学生の賑やかさ、 西 のさびしさ	2	5
304	III	↑	1,736	1,820	左側 寺/ 右 はお土産屋減、民家増	4	2
325	III	—	3,586		左 が木の茂み、 右 は変わらず。	5	1
114	I	}	2,632	2,664	南北 にゴチャゴチャした町並がつづく。	4	4
218	II	—	218		大学が 両側 に。	3	5
207	II	—	388		両側 に緑が多い	4	1
322	III	—	2,756		左右 に草木が生い茂り、やたらうす暗い	3	1
307	III	—	4,116		左右 の山から鳥の鳴き声が聞こえてくる	4	1

表6-8には左右両方について述べたものを挙げたが、左右どちらかだけを含む表現にも差異を表わすの意が込められていることを勘案すると、差異についての表現は類似性の表現よりも多い⁶。左と右は、上と下や前と後とは違って人間の身体にとって等価に置かれている。それゆえに常に比べられる軸となる。

ルートと交差する街路についての記録も、歩いている街路との差異を示唆するものが多い(表6-9、

様相因子「[44] 交差する街路について」も参照)。

表6-9 ルートと交差する街路についての記録〈記録数:254〉⁷

被	R	種	始	終	表現	A	G
109	I	☆	160		通りをのぞくと意外と静か《左》	3	4
115	I	一	380		へこんだ道。ここだけくらい、すずしそう。《右》	3	5
119	I	☆	390		ビルやマンションしか表には見えないが、小道に民家が見えた。《左》	2	1
122	I	☆	762		辻子。ここだけ低くなっているし、建物もかわら屋根だし→(奥がすずしそう。)そこだけ雰囲気違う	2	4
117	I	☆	1,274		奥は街中ぼくない《右》	4	5
129	I	}	1,998	2,016	木屋町は緑が多い	3	5
114	I	☆	2,054		先斗町だけちょっとおちついている。《左》	1	4
125	I	一	2,426		花見小路は“京都”に来たという感じがめっちゃする	4	3
307	Ⅲ	☆	3,140		横に抜ける道の奥に緑がおおい茂っているように見える	4	1
320	Ⅲ	☆	3,698		右手の道がコンクリになっている、山に入っていく感じがする道	5	3

ルートIでは、明らかに歩いている四条通との差異が念頭にあると思われる表現がかなり多く見られる。多くの被験者が共通して記録したものもある(ルートIで時折見える町家の並ぶ細い路地や、花見小路通など)。ルートIIやIIIではそのような意図をもった表現ほとんど見られない。大通りによって生じるガワとアンコの著しい差が如実にあらわれている。

(2) 経路上の連続的空間の中での類似と差異

経路上での類似と差異は、コネクターとシフターとも対応する重要な原理である。まず「大きな家が増える」の例でも見たように、多くの様相表現は差異についての表現である。短期的フレームに記憶された世界と眼前の世界とを見比べるというパターンである。

表6-10 経路上の連続的空間での差異の記録〈記録数:地点表現2,592/変遷表現283〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
102	I	↑	192	270	開けてきた	1	2
101	I	一	1,660		人の数が格段に増える	4	5
127	I	一	2,176		観光地のような感じになりはじめる。/外人がふえる、人がふえる	3	2
113	I	一	2,440		建物が日本的ではなくなった	4	5
223	II	一	1,558		広い道路にでて車が多くなる	1	4
211	II	一	3,954		急に涼しくなる	5	5
303	III	一	1,238		観光地の雰囲気増す	5	5
313	III	↑	3,122	3,326	住宅が高級化+巨大化	5	1
318	III	一	3,338		畑が多くなる	3	2
307	III	一	3,446		広々としたところからせまい路地に	5	1
311	III	↑	3,580	3,722	だんだん登っていく	5	1

表6-10の記録は、すべて地点表現(一)や変遷表現(↑)によって記されている。この二種類の記録は本質的に差異を表わす方法なのである。逆に、範囲表現(})と領域表現は、領域内の類似性を表現している(表6-11)。

表6-11 領域内の類似の記録〈記録数:範囲表現1,234/領域表現951〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
122	I	}	684	736	両側に高い建物がない	2	4
127	I	}	1,864	1,932	信号待ちの人が多し/ティッシュくばりも多い	3	3
211	II	}	854	1,036	寺や古い店など、地域特有の産業を持った人々が生活している感じ	4	1
221	II	}	1,042	1,296	町屋がたち並ぶ京都らしいふんいき	5	1

217	II	}	3,080	3,796	全体としてなんだかムニャムニャした感じ	3	2
305	III	}	1,338	1,484	観光客が多い／川の音が大きくなる／鳥もとんでる	4	4
310	III	}	2,350	2,538	人通りがほとんどない／車は時々通る	4	1
101	I	領	870	1,660	品格のあるオフィス街	4	5
121	I	領	1,660	1,974	すっげー人が多くなってにぎやかなエリア	2	5
211	II	領	490	682	白いコンクリートジャングル	1	1
315	III	領	2,544	2,790	お寺空間、おちつきがあり美しい。	5	1

さらに特異表現（☆）によって類似性の破れを指摘したり、類似と差異の両方について記したりすることもある（表6-12）。両方の記録は、ミンスキーのモデル（図6-5）そのものである。

表6-12 類似性の破れおよび類似と差異の両方についての記録〈記録数：特異表現1,773/類似と差異の両方22〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
117	I	☆	252		一つだけ高い《右》	2	3
107	I	☆	498		ワンルームっぽいこのマンションがいささか異彩をはなつ、 <u>ここ</u> だけ少し生活臭《左》	4	5
114	I	☆	1,090		長刀鉾。 <u>ここだけ</u> アーケードのカタチがちがう《左》	5	2
107	I	☆	1,234		大丸のたてものは <u>まわりより</u> 古いかつい《左》	4	4
213	II	☆	2,554		<u>通りは殺風景なのに</u> 、「KUSAKABE CLINIC」はオシャレな造りだった。	1	1
220	II	☆	3,600		川、セミの声、古い家/ <u>この一帯だけ</u> 、なかなか良し	4	1
309	III	☆	700		<u>ここだけ</u> 白カベ、石組み《左》	4	1
126	I	↑	1,278	1,458	行き交う人々の年齢層は <u>相変わらず</u> だが、高齢者の服装が若干、 <u>若々しいものになった</u>	2	2
220	II	}	818	1,034	寺とか保育園とかがあつて微ミョーに <u>変わってる部分がある</u> 気がするけど <u>全体としてそうでもない</u>	3	1
223	II	—	3,058		<u>先ほどと同じ</u> 住宅地だが窓の格子などが <u>ところどころに</u>	4	1
205	II	—	3,634		正面に大通りを通る車が <u>見えるようになった</u> ／町は依然 <u>静かな</u> ままだ	5	3
320	III	—	942		人や車が多くてさわがしくなった／道幅は <u>変わらない</u> けど車通りが <u>多くなった</u>	4	4
311	III	↑	952	1,064	<u>基本今までと同じ</u> 街並だけど、だんだん山が広く <u>見えてくる</u>	4	3

(3) 経路上の離れた地点での類似と差異

類似と差異による記録は、気づきと同様に距離を飛ばすこともできる。図6-12はルート上で距離の離れた地点での類似や差異の表現の記録位置を、地図上にプロットしたものである⁸。図内には参考としてエッジの位置も示し、さらに具体例として取り上げる記録には番号を付している。ここからいくつかの分析を行なう。

① 全体的な傾向

図を見ると、このような比較の起こる頻度はその参照元と参照先との距離に大まかに反比例していると考えられる。当然もっとも多いのは、直前との比較ということになる（図6-12には反映されていないが）。

また三つのルートとも、比較が生じる場所はある程度偏りがある。ルートI、ルートIIでは前後半で大きく切れている（その境目はそれぞれA I-3、A II-8付近）。5.2.3で示したように領域概念は入れ子構造をなすが、そのもっとも大きな区切りとして、この境目でルートを大きく二分する構図も考えられる。

② 類似

左右の比較や連続的空間での比較とは異なり、差異よりも類似の表現の方が多い。「再び」「久しぶ

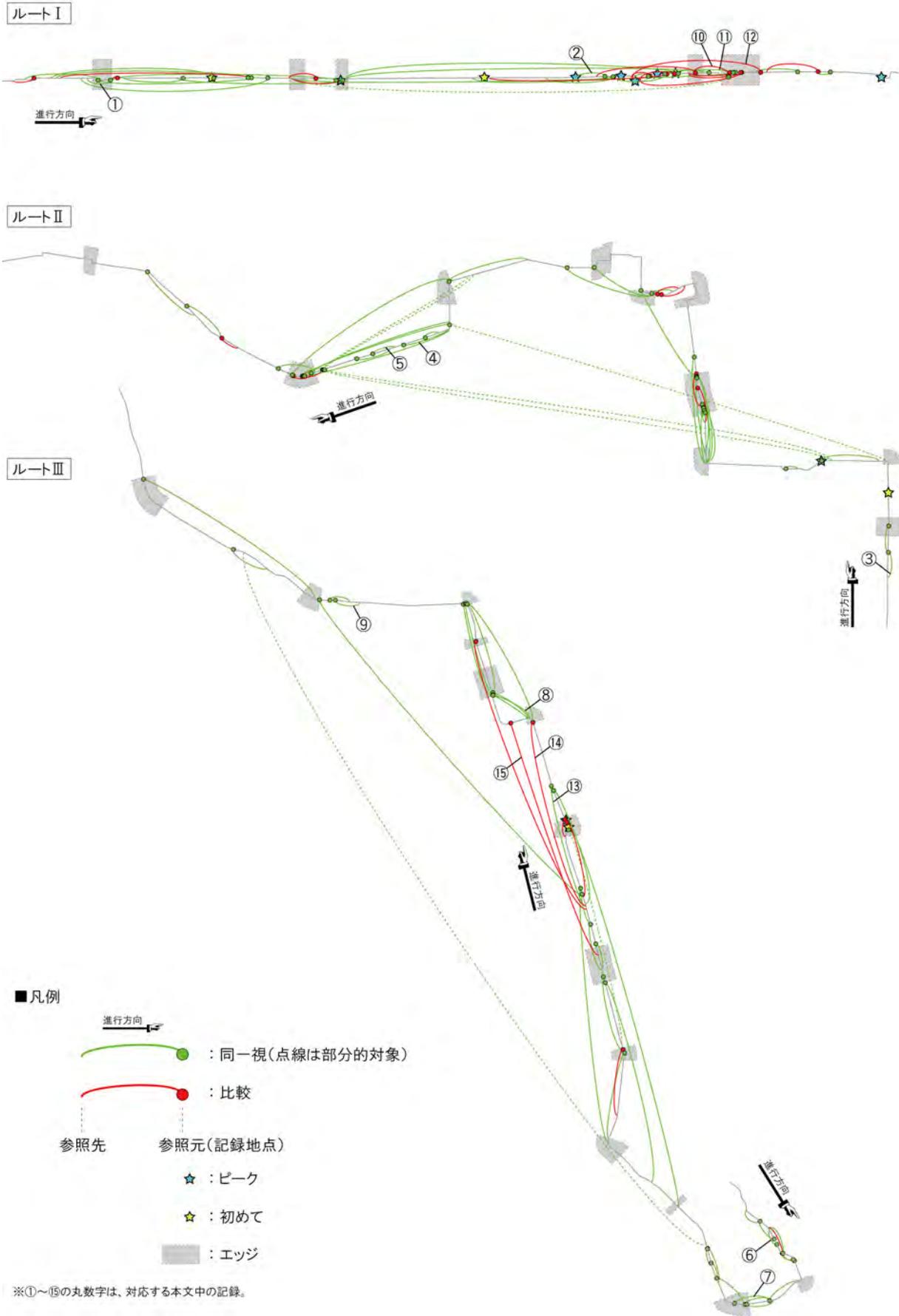


図6-12 離れた地点での比較や差異を表現した記録のプロット

りに」などとした表現がこれにあたる（表6-13）。

表6-13 離れた地点の類似の記録（記録数:89）

	被	R	種	始	終	表現	A	G
①	122	I	}	326	434	ビルが 再び 両側に。	2	4
②	113	I	↑	1,704	1,854	左側のいったん低くなったビル群が また だんだんと高くなっていった	3	5
③	202	II	—	222		寺から また 大学になってモダンな感じ	4	2
④	228	II	↑	2,752	2,904	再び 小さい商店が増える	5	3
⑤	229	II	—	2,846		戸建てに もどる	4	1
⑥	318	III	—	240		水 戻る	4	2
⑦	324	III	—	596		道も狭くなり、 再び 落ち着いた住宅街へ	4	1
⑧	322	III	—	2,716		アスファルトに 戻る	3	1
⑨	316	III	}	3,384	3,438	また 大きな家がつづく	5	2

いったん見えなくなったものがまた出現するというパターンが多く、また参照元と参照先の距離は比較的短い。ルート上で形成した記憶がある程度フレームに残っていて、似た状況が再度訪れたときに照合が行なわれているようだ。中期的なフレームが形成されていると見ることもできる。

③差異

全体に類似性の指摘が多い中で、特に差異を指摘する対象になりやすい傾向があったのが、ルートⅠの河原町周辺と祇園、ルートⅢの嵐山と清涼寺周辺である（表6-14）。

表6-14 河原町周辺と祇園および嵐山と清涼寺周辺の比較の記録（記録数:河原町と祇園4/嵐山と清涼寺4）

	被	R	種	始	終	表現	A	G
⑩	128	I	—	2,168		橋を わたって から「京都らしさ」売りの店多い←祇園のアーケードも。	5	2
⑪	118	I	—	2,182		また 町中に、 でも アーケードが緑で少し落ちついた感じ	3	4
⑫	102	I	}	2,258	2,430	こっこの アーケードは、烏丸～河原町とちがって通り側に柱がある。キャンチじゃない。	5	5
⑬	303	III	—	2,332		前を見ると清涼寺の門/ また 観光地の雰囲気始まる	4	4
⑭	301	III	—	2,528		嵐山 より道が広くて人少ない、店もないし、なんとなくいい感じ	5	1
⑮	301	III	—	2,602		庭、緑が 嵐山 よりきれい	5	1

「似ている」ことも「違う」ことも記録されており、コネクターとシフターの考え方にも通ずる。繁華街や寺院中心の領域というわかりやすい類似性が、差異の発見をも誘発している。

以上のように、類似と差異は様相の把握における基本的原理である。また差異の表現はその前と後のそれぞれにおける類似性を含意し、類似の表現はその範囲の前後との差異を含意する。類似があるからこそ差異は把握され、差異があるからこそ類似も引き立つ。このように類似と差異は常にセットになっている。

そして類似と差異の指摘はさまざまなスケールでなされることもわかった。このことを経路のダイアグラムで表現すると、図6-13のようになる。これまでダイアグラム内に表記してきた「世界」は連続的空間において見出される類似と差異に基づいているが、よりミクロにもマクロにもこの構図は見る事ができる。図5-14で示したように領域概念はマルチスケールであるが、類似と差異の概念も同様である。

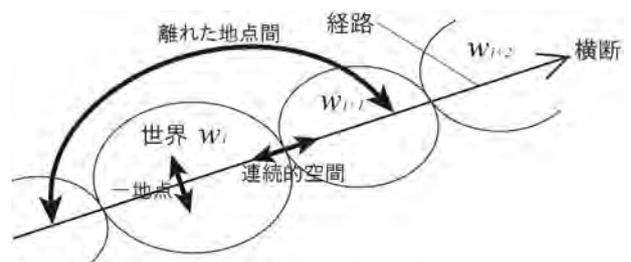


図6-13 類似と差異に関するダイアグラム

6.2.3 短期的フレームの書き替え

記録は何らかの様相の把握を表わしているが、様相が把握されると短期的フレームは書き替えられる。つまり、すべての記録はフレーム変更の記録でもある。経路を歩く中でわれわれは何かに気づいたり類似や差異を見つけたりするが、フレームはその際の基準になるとともに、常にフィードバックを受けるのである。

書き替えプロセスの汎用性を示すため、ここでは被験者の記した一つひとつの文、あるいはそのつながりの中に、フレーム変更の足跡をたどる。

(1) 文の線条性

記録とは、様相を説明するために紡ぎ出した言葉を次々と用紙に書きつける営みである。しかしさまざまなことを感じ、フレームとの照合を達成したとしても、それを同時に、一挙に記録することはできない。言葉は時間の流れの中で、直列につながり合わせてゆくしかないのである。このことは言語学において「線条性」(linearity)として論じられている⁹。

このような時間と言葉との結びつきの中に、フレームの変化を見て取れる。たとえば、記録の中で「も」という助詞に注目すべきである(表6-15)。

表6-15 助詞「も」を用いた記録(記録数:295)¹⁰

被	R	種	始	終	表現	A	G
207	II	—	3,784		急に交通量が増える／人も多くなる	3	1
320	III	☆	3,886		木々がおいしげっている、竹林もみえる	5	3
119	I	☆	794		銚子、京都っぽい。／隣の工事も足場が木材。	1	1
201	II	—	1,520		大通りになり、店もでてきた	3	4

最初の被験者207は「増える」ということをまず車について述べ、次に人を追加した例である。被験者320は両方見えるという点で追加している。被験者119の例は「京都っぽい」に関する追加であるが、京都っぽさという曖昧な価値判断を含み、足場が木材であることが京都っぽいというのもフレームの作用による。なお被験者201の記録には、「大通りには店が多い」というデフォルト的なフレームが背後にはたらいっているのではないかと考えられる。

このように「も」で追加する場合、最初の文(文節)を書いた時点でフレームが活性化され、「も」を含む後続の文(文節)はそのフレームの強化を行なっているようだ。クラスを念頭にインスタンスを列挙するという構図でもある。

一方の表6-16のような「は」を用いた追加は、活性化したフレームへの例外事項や但し書きを付け加えたり、フレームをリセットしたりする作用がある。

表6-16 助詞「は」を用いた記録(記録数:370)¹¹

被	R	種	始	終	表現	A	G
101	I	}	84	280	北側は金融系の店が立ち並び、南側は新しい感じの商店街の様	2	4
108	I	—	234		交差点のマンションぐんが見えてくる、高さは同じくらい	1	3
227	II	領	804	1,046	せせこましいが閉そく的な印象はうけない	3	1
220	II	}	2,610	3,052	ほとんど変化らしい変化は感じなかったです。ポツポツとおもしろい店、建物はあったけど	3	1
316	III	領	344	500	少しにぎやかさを感じるが生活臭は大きい	3	2
309	III	}	1,182	1,244	暗くなった／うるさいのはあいかわらず。	2	3

このように、文の線条性は記録に制限を与えもするが、フレームの動きを如実に表わしてくれる巧妙な装置にもなっているのである。

(2) 経路上の文の連なり

線条性の分析は、ルート上のシークエンスへと拡張することもできる（表6-17）。

表6-17 2人の被験者のシークエンス上の一連の記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
110	I	☆	1,254		高級感ありすぎ。浮いている《右》《注:ルイヴィトンのこと》	3	5
		☆	1,292		↑銀行もあるし、うまいコンビ《右》	3	5
217	II	一	804		車多い、危険	3	3
		☆	814		「無事故宣言モデル地区」の張紙《右》	3	3
		☆	960		幼稚園、子どもは車に気をつけましょう《右》	3	3

最初の例は、まず高級ブランド店に気づいてフレームが活性化し、次に銀行を見つけると、そこでお金をおろしてブランド品を買うという様子をイメージすることで「うまいコンビ」という解釈を行った。次の例は車が多いと感じたことが呼び水となって、張り紙について指摘したり（おそらく「無事故宣言モデル地区」なのに車が多いという違和感があったのだろう）、幼稚園を見ても車について園児に注意を促したりしている。このように、ある様相把握で書き替えられ活性化されたフレームは、その後もある程度活性化状態のまま持続し、次なる様相把握を規定する。

われわれは街路を歩きながら、様相把握のたびにこのような短期的フレームの変換を行なっている。次節では知識ネットワーク自体がデフォルト構造として安定した長期的フレームについて詳述するが、この短期的フレームも、知識自体は次々と書き替えられるものの、その変換のプロセス自体は安定して運用されており、不活性化なものである。

また書き替えについて補足すると、これは新しい場所の記憶が蓄えられるとともに古い記憶がすべて消されるようなプロセスではない。経路をたどるにつれて新しい記憶を取り入れると、それが既存の記憶を抑え、フレームにおいてもっとも参照される位置を占めるようになるような、「書き加え」のニュアンスのあるプロセスである。このとき古い記憶の多くはだんだんと薄れていくが、時間が経っても薄れないような大切な記憶が、長期的フレームへと移行されていくのである。

1 遠くからの気づきの多かった対象のみ抽出した。同一被験者が同じ対象について何度も記録した場合は最初の気づきのみを取り出した。プロット対象は様相表現のみとし、今回は4種類の記録方法のいずれかにかかわらず始点を採用し、また対象の20m以上手前から気づいたもののみプロットしている。

2 鈴木信弘・志水英樹・塩田洋：参道空間における視覚・記憶構造に関する研究，日本建築学会計画系論文集，vol.457，1994，p.98.

3 被験者のほとんどは京都大学の学生で、同大学の吉田キャンパス（京都盆地の北東）や桂キャンパス（同南西）周辺で生活しているため、京都盆地の北西に位置する船岡山や左大文字山にはなじみが薄かったと考えられる。

4 原広司：空間の文法「場(2)」，GA JAPAN，Vol.29，A.D.A. EDITA Tokyo，1997，p.98.

5 ジェイムズ，W.：心理学（上），今田寛訳，岩波文庫，1992，pp.211-244.

6 様相因子「[77] 街路の左右の比較」の順表現率（様）は23%である（順表現は「左右が同じ」）。表5-7参照。

7 比較を含意しているかは判断が難しいため、交差する街路について述べたすべての記録数をカウントしている。

8 参照元については基本的に始点を採用したが、参照先については明確に特定できないことも多かったため、推測も交えて臨機応変に判断している。たとえば「再び観光地っぽくなる」のような表現が見られた場合、それより前に「徐々に店が減る」などの観光地を示すと思われる表現の終点付近をもって参照先とする。「徐々に車通りのある通り」とあり、それ以前に「車が多い」などという記録が見つからない場合も、常識的に車が多いと考えられる大通りを参照先とした。

9 池上嘉彦：記号論への招待，岩波新書，1984，pp.135-137.

10 複合助詞「にも」を含む。

11 複合助詞「には」「では」などを含む。

6.3 長期的フレーム

続いて、長期的フレームについての考察を行なう。短期的フレームが主にルート内の記憶に関するものであったのに対し、長期的フレームはルートを歩く前に形成されていたデフォルト構造の問題が中心となる。つまり短期的フレームがルート沿いの経験を記憶し、それをもとに類似と差異の判断をしたように、長期的フレームは生きてゆく中で培ってきたデフォルト構造を基準として、類似と差異を見つけてゆく。

本節ではデフォルト構造が直接言葉にあらわれる場合、そこからのずれによって明らかにされる場合について分析し、さらにそれがいかに進化するかについて述べる。

6.3.1 言葉にあらわれるデフォルト構造

デフォルト構造はもはや当然となっている知識である。それは普通、記録された言語の裏に隠れてしまう。「大きな家が増える」における「家とはこういうものだ」「家はこれくらいの大きさだ」といったデフォルト構造も、記録をもとに分析者が想定したものであった。すべての言葉の裏には膨大なデフォルト構造が潜んではいるが、言葉に表面化されることは少ない。

この前提に立った上で、デフォルト構造が記録にあらわれた数少ない例について分析する。「らしさ」についての表現と、「いかにも」「普通」といった表現である。これらの言葉は、記録の対象がデフォルト構造の条件をよく満たし、ある種のプロトタイプとして把握されたことを示している。

(1)「らしさ」の表現

表6-18 「らしさ」の記録〈記録数:京都らしさ114/その他73〉¹

被	R	種	始	終	表現	A	G
106	I	☆	150		色とりどりの屋外広告物が駅前 っぼい	3	4
107	I	☆	1,920		阪急 らしく ショーケースにこっている《右》	3	3
119	I	☆	2,572		中学校、 らしくない 。《右》	5	4
223	II	—	1,384		右側に団地があり、前方にはけっこう高いマンションも見え、住宅地 っぼくなる	2	1
215	II	領	3,736	4,020	観光地 らしく 、にぎわいのあるエリア	4	4
203	II	—	3,954		観光地といえど寺院 だけあって 木々に囲まれて静寂	4	5
316	III	☆	826		すだれが夏 っぼい 《右》	4	4
307	III	↑	1,046	1,154	料亭が目立ってきて、だんだん観光地 っぼい 雰囲気	4	1
319	III	↑	1,110	1,228	旅館、料理屋がふえ観光地 っぼく なってくる	4	4
302	III	☆	2,332		小学校が、小学校 っぼくない 門《右》	3	1
309	III	☆	3,440		石畳始まる。(真中だけ。)伝建地区 感 が出る。	5	3

表6-18の例では「夏っぼい」という表現を除いて、いずれも建築や地域についての「らしさ」を語っていることが注目される。「[66] 日本らしさ」「[67] 京都らしさ」「[68] 地域らしさ」の様相因子も、その場所に根ざした「らしさ」であった。都市においては、それぞれの空間に記憶やイメージが宿っていると考えることができる。空間に強く依拠したフレームの在り方である。このうち京都らしさについては、6.6.2で詳しく分析する。

(2)「いかにも」と「普通」

空間との関係において特徴的な使われ方をしたデフォルト性の表現が、「いかにも」「The」などの表現（以下「いかにも型」と呼ぶ）および「普通」「どこにでもありそう」といった言葉（以下「普通型」と呼ぶ）である。様相因子の「[69] いかにも」「[60] 普通さ」にも対応するが、ここで再度考察する。

具体的には表6-19のような表現が見られた。二重線で「いかにも型」と「普通型」を分類している。

表6-19 「いかにも型」と「普通型」のデフォルト性表現の記録〈記録数:「いかにも型」61/「普通型」70〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
110	I	領	0	90	いかにも駅前広場の印象	3	5
125	I	}	1,544	1,878	まさに、繁華街	3	4
106	I	領	2,174	2,434	the Gion	4	5
201	II	領	1,060	1,296	これぞ京都って感じのエリア	5	1
211	II	一	2,234		the参道というかんじになる	5	5
206	II	一	3,956		The 金閣寺って感じ	5	1
318	III	領	1,222	1,522	もろ〃観光地〃だけどいい景色のエリア	5	4
321	III	一	1,504		イヨッ! 観光名所	4	5
130	I	領	0	326	これといった特徴のないエリア	2	1
106	I	領	272	460	普通のオフィス街	3	2
129	I	領	750	1,028	どこにでも、ありそうな都市の風景に東山	3	3
218	II	一	278		大学の終わり。ふつうのまちの始まり	4	5
227	II	領	490	804	普通の住宅街	1	1
206	II	領	492	816	ふつうの道	1	1
208	II	一	1,226		よくある住宅地	3	2
307	III	}	98	186	ふつうの田舎の住宅地みたい、セキスイハウスっぽい家が並ぶ	2	1
316	III	領	2,090	2,302	学校と道とコンビニと、どこにでもありそうな風景	3	5

「いかにも型」が「いかにも祇園」「ザ・繁華街」などといったかたちで特定の地名や、その場所の何らかの特性を指すのに対し、「普通型」は「ふつうの街」「これといった特徴のないエリア」など場所の性質を指定しないことが多い。指定したとしても「住宅街」がほとんどである。逆の「いかにも住宅街」「普通の祇園」のような表現はほとんど見られない。この二つの型はプロトタイプの説明という点では共通していても、その使われ方は正反対である。

このうち「普通の街」という言葉は、レルフの「没場所性」の概念と符合する。被験者がそこにかわり合いをもつことのない通過者だという点は差し引くべきであるが、住宅地の没場所化、均質化は確かに進行しているようである。表6-19の「普通型」の記録地点では領域評価Aの値は低く、また5.3.1の様相因子指標一覧表(表5-7)を見ても「[60] 普通さ」は好印象度が低く、「[69] いかにも」は高くなっていることがわかる。また表6-19の領域評価Gや表5-7の熟知度の値はそれと逆の傾向を示している。

さらに、この二つの型の使われ方の違いはアトラクターの有無と大いに関連する。つまり「いかにも型」の表現はアトラクターの存在と、「普通型」表現はアトラクターの不在やアトラクターから離れることと強いつながりがある。二つの型の言葉の出現がアトラクターの配置と実際に符合することは、6.4.4で詳しく分析する。

6.3.2 デフォルト構造からのずれ

前節で述べたようなデフォルト構造との一致が言葉にされる例は少なく、むしろデフォルト構造からのずれ(gap)が見出されたときによく言語化される。逆接表現や驚き、疑問の表現である。

(1) 逆接表現に見るずれ

表6-20 逆接表現を用いた記録〈記録数:208〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
101	I	☆	68		ロータリーが広く開放感があるが、雰囲気は暗い	2	4
119	I	}	458	566	電線が道を横断しているがあまり気にならなかった。	2	1
101	I	☆	620		ローソン(大通りのわりにコンビニが少ない)	3	4
129	I	領	1,028	1,640	町の中心だけど、そんなに人は多くない	2	5
113	I	☆	1,498		カワラだけど西洋的な形をした屋根《左》	3	5
124	I	}	2,204	2,422	人は多いけど河原町の方とは違ってうるさくない	4	4

209	II	—	746		道幅せまくなる、 <u>が</u> 車も多い	4	1
214	II	—	1,604		左右にギザギザしたマンションがある <u>が</u> 人の気配はない	4	1
214	II	領	2,040	2,122	ひらけている <u>のに</u> 空がひくい	3	1
223	II	領	2,126	2,853	新しい家と古い家の差があり <u>ながらも</u> 全体的にまとまっている	4	2
213	II	☆	2,236		建勲神社の石がある <u>が</u> 神社はどこ??	2	1
223	II	—	3,058		先ほどと同じ住宅地 <u>だ</u> が窓の格子などがところどころに	4	1
309	III	}	40	100	右手は高級そうな住宅がある <u>のに</u> 左手はじやりのみの駐車場があつてシヨボイカンジ	4	4
304	III	☆	726		古い <u>が</u> 、なんかレトロでかわいいアパート《右》	3	1
312	III	—	942		交通量がめっちゃ増える <u>わりに</u> 道が狭い	3	1
304	III	領	1,508	1,736	あまり好きではない <u>が</u> 、いろいろお店があつておもしろい	5	5
320	III	—	1,760		人はまだ多い/ <u>でも</u> 活気がなくなった感じが少しする	4	4
323	III	☆	2,312		清涼寺の門が見える、 <u>が</u> 、あまり参道のイメージなし	5	5
324	III	領	3,454	3,972	店が多く観光地っぽい <u>のに</u> 人が少なかった、建物も風景もすごくきれい	5	1
314	III	—	3,810		空がひろくなる <u>が</u> 山もせまってきた	4	1

逆接表現の多くは、フレームからのずれを示す(表6-20)。たとえば被験者101の「ローソン(大通りのわりにコンビニが少ない)」は、大通りにはコンビニエンスストアが多いはずだというデフォルト構造が、被験者209の「道幅せまくなる、が車も多い」は道幅が狭いと車は少ないはず(道幅と車の交通量は比例するはず)だというデフォルト構造が揺さぶられている。車については、この道幅の狭いところで記録が集中する。車の絶対量は常に大通り沿いを歩くルートIにおいて多いはずであるが、車に関する記録の量はルートIでは多くない(Appendix-C参照)。絶対量よりも、デフォルト構造からのずれの度合いという相対量の方がより重要になってくるのである。

これらのずれはしかし、基本的には例外として処理されており、デフォルト構造自体は変化しないと見てよい。シャンクのスクリプトモデルで中心軸の周りに配される例外的ケースの扱いである。中心のデフォルト構造自体を根本的に揺るがす発見は稀有である。

なお記録のミクロなプロセスを見ると、やはり短期的フレームのときと同じように記録の線条性が手掛かりになる。逆接より前の部分がある場でのフレームを形成し、それ以降が否定するという形式をとっている。この逆接表現を「A but B」と一般化すれば、「A and not B」はフレームを指示すると言えそうだ。Aとnot Bの間に慣習的に成立する法則である。

(2) 驚き

表6-21 驚きに関する記録(記録数:288)

被	R	種	始	終	表現	A	G
111	I	☆	778		池坊学園、ふところ深い&赤いじゅーたんで <u>ぎょっ!!</u> とする《右》	4	5
107	I	☆	1,406		とくに何でもないけどメチャデカイ <u>!!</u> 空港みたい《右》	4	4
129	I	☆	2,678		門が工事中だ <u>!</u>	4	3
227	II	☆	858		<u>変な</u> 苗字の家	3	1
213	II	☆	1,234		裏千家学園 <u>って!!</u> ?茶家関係?かと思った	5	1
226	II	☆	2,472		木の鳥居、 <u>めずらしい</u>	4	4
223	II	☆	2,664		よさそうな温泉 <u>!!</u>	4	2
227	II	—	3,602		意外に高い橋で <u>びっくり</u>	4	1
229	II	☆	3,908		大文字がすごく近くにみえて <u>びっくり!!</u>	4	1
302	III	—	104		<u>川!!</u> ひらけた	4	1
302	III	—	1,244		人が多い、音楽(ミスチル <u>!!</u>)流れてる店ある、にぎやか	4	2
309	III	☆	1,500		交通量多 <u>!</u>	5	5
306	III	}	2,706	2,874	セミの声、涼しい <u>!!</u>	4	1
304	III	☆	2,790		<u>こんな</u> ところに病院《左》	5	1
309	III	}	2,872	2,992	里山 <u>!</u>	5	4
309	III	☆	3,390		外壁がピンク <u>!</u> でかい <u>!</u> 《右》	5	4

フレームからのずれは多かれ少なかれ驚きを伴う。表6-21の記録は、デフォルト構造からの大きなずれを示している。また上の例に特異表現の割合が高いところを見ると、大きな驚きを伴うものは周囲一帯の法則の中の例外にもあたることが多いと考えられる。デフォルトからのずれ、経路上でのずれという二つの要素が重なり合う。

さて、この驚きの諸例を見ると、ずれだけでは説明できないものがある。被験者309の「里山！」は、「いかにも型」のプロトタイプとの合致を示していると考えられ、フレームからのずれというよりむしろフレームとの結びつけという面が強い。被験者229の「大文字」、被験者302の「ミスチル」²なども記憶との結びつけである。他にも例はある（表6-22）。

表6-22 既知のものの発見に関する記録〈記録数:24〉³

被	R	種	始	終	表現	A	G
116	I	—	390		<u>意外なところ</u> に京都の有名菓子を売ってるお店があった(『ふたば』)、古いお店	1	3
120	I	—	898		四条烏丸の <u>よく知っている</u> バス停、烏丸に <u>キター!</u> て感じ	4	5
114	I	☆	2,056		ヴォーリス! <u>(あいまいな記憶)</u> 《右》	1	4
118	I	—	2,068		鴨川! <u>見慣れた</u> 景色でほっとする	4	5
211	II	☆	1,624		<u>淡交社</u> ってこんなに大きいんだ	3	5
212	II	☆	3,820		よーじや <u>発見!</u> !《左》	4	1
321	III	☆	1,978		よーじや <u>だっ</u> 《左》	4	5

このように、街歩きをしていると慣れた親しんだ既知のものを発見することがある。しかもそれはしばしば喜びにもつながることが、これらの表現から伺える。

(3) 疑問

① 疑問の表現

表6-23 疑問を表現した記録〈記録数:そのものについて92/理由について47/領域の組織化について18〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
123	I	—	1,076		呼び込み <u>?</u> の人がいた、さすがはんか街	2	1
129	I	☆	2,532		こんな所にスタバあった <u>っけ?</u> 《右》	4	3
108	I	☆	2,436		和風 <u>(?)</u> なへい、とイヌヤライ《右》	3	1
219	II	☆	650		お寺 <u>(?)</u> の屋根がみえた	3	2
217	II	☆	1,210		警察官立寄所 <u>?</u> 長屋 <u>?</u> 《左》	3	4
207	II	—	1,524		大通り <u>?</u>	4	1
205	II	☆	2,390		小学校 <u>(?)</u> が見える	4	2
211	II	}	2,612	3,036	少し一乗寺に似てる <u>かも?</u>	5	5
229	II	—	3,960		あと、さっきまで、こんなに人、あるいてた <u>っけ?</u>	5	4
306	III	☆	868		集合住宅 <u>?</u> 古い旅館 <u>?</u> みたいな建物が目についた《左》	1	1
323	III	☆	882		アパート <u>?</u> 旅館 <u>?</u> 《左》	2	1
309	III	☆	3,972		石垣。セメントでスキマがカタメられている <u>?</u> 《右》	4	4
107	I	☆	376		メモ 四条から少し横にそれると電柱と電線だらけ、 <u>なんでだ??</u>	4	5
211	II	☆	1,502		このビルの傾きは <u>何だ?</u> 《左》	2	1
215	II	☆	1,630		<u>なんか</u> ポコポコしたマンション。バルコニーの曲線が <u>気になるう</u>	2	1
211	II	—	3,674		<u>なぜか</u> 公明党のピラ多し	4	1
313	III	☆	306		丸い窓の家、窓枠は <u>何故か</u> 四角	4	1
307	III	}	654	720	セミの鳴き声が <u>なぜか</u> 気になる	4	1
114	I	}	644	724	混トンとしていてどう書いていいか <u>わからん</u> 。	3	2
229	II	}	1,570	1,702	歩いていて、ポーッとしてしまう。色々あつて <u>よく分からない</u> 場所だ	1	1
211	II	}	1,600	1,730	広くて、いろんなスケールのものがバラバラになっていて <u>よく分からない</u> かんじ	3	5
212	II	}	2,612	3,032	道がまっすぐで特に変化がないので、ときどき地図上のどこか <u>分からなくなる</u>	1	1

表6-23は疑問の表現である。まず二重線で区切った一番上の部分は、「そう言ってもよいのか」「そう呼んでもよいのか」という疑問である。これらの表現の対象の多くは、デフォルト的なものから外れたものである。たとえば被験者306や323が記録した建物は写真6-2のようなもので、多くの被験者が、この建物は何なのかという疑問を表明した。



写真6-2 疑問をもたれた建物¹
 (「googleマップ」(<http://maps.google.co.jp>)
 の「ストリートビュー」より)

二重線区切りの二番目は理由についての疑問である。これらの表現も、デフォルトからのずれや、過剰などに対し、その背景にある理由がわからないことを表明している。

一番下は周囲の様相を組織化することが困難であることの記録である。これらもやはりデフォルト構造的な場所からのずれを表現しており、場所のイメージアビリティの著しい欠如を示している。このような記録がなされた場所では領域評価Aの値は低い。

②疑問に対するアブダクション

上述のデフォルトから外れた建物に対して、被験者は「集合住宅」「旅館」などといった既知のデフォルトの拡張によって仮説を与え、理解しようとしている⁴。そして仮説がうまく当たっているかどうか分からないので、被験者は戸惑いを表明しているのである。理由がわからない場合にも、仮説を提示する場合が多い(表6-24)。

表6-24 理由についての仮説を示した記録(記録数:54)

被	R	種	始	終	表現	A	G
111	I	—	1,018		ここから「四条」っぽいカンジ、 <u>アーケードのせいかな。</u>	4	5
122	I	—	1,400		まだアーケードはつづくが、ここから少し開けた印象/ <u>ビルが低めだから？/山が大きく見えるようになったから？</u>	2	4
126	I	↑	1,620	1,664	人が急激に増える。 <u>大丸に行く人達だろうか？</u>	4	4
203	II	↑	298	490	だんだんと自然が増加(<u>小学校の影響？</u>)	3	4
211	II	}	490	682	このあたり、 <u>色彩制限があるのか？</u> 白、灰ばかり	1	1
226	II	☆	1,476		墓地の奥に大きなビル、 <u>木が少ないせい</u> か、不思議な感じ《左》	3	3
309	III	}	1,602	1,770	風が涼しい。 <u>緑(右手天龍寺の)おかげ？</u>	2	5
306	III	☆	2,192		Time's マート、嵐山で2件目を発見、 <u>嵐山専門のチェーンか？</u>	4	1

ここで、これまで何度か触れてきた推論のプロセスについて、パースの理論を導入しておく⁵。パースはあらゆる精神作用は推論であると考え、その推論を「演繹」(deduction)、「アブダクション」⁶(abduction)、「帰納」(induction)の三つに類型化している。それぞれの形式における推論の進行は、具体例を用いて表6-25のように整理できる。

まず演繹は古くはアリストテレスから論理学で議論されてきた推論形式で、いわゆる三段論法に代表される。演繹は誤りを含まないかわりに、知識も拡大しない。次にアブダクションは、何か驚くべき事実を発見したときにわれわれが行なう仮説の提起にあたる。導かれた仮説はあくまで蓋然的であり、誤っている可能性がある。最後に帰納は、多数のケースからルールを見つける推論である。この場合も導かれたルールは仮説にすぎない。

表6-25 パースによる推論の三形式のそれぞれの進行例

形式	演繹	アブダクション	帰納
推論の進行	(1)この袋から取り出した豆はすべて白い	(1)この袋から取り出した豆はすべて白い	(1)これらの豆はこの袋から取り出した豆だ
	(2)これらの豆はこの袋から取り出した豆だ	(2)これらの豆は白い	(2)これらの豆は白い
	(3)ゆえに、これらの豆は白い	(3)ゆえに、これらの豆はこの袋から取り出した豆ではあるまいか	(3)ゆえに、この袋から取り出した豆はすべて白いのではあるまいか

この分類に基づいてパースは、真理の探究の過程でこの三つの形式が相連なって出現すると述べている。探究は、まず意外な現象の観察から始まる。この現象から受ける驚きを解消するために、可能な説明を与えるアブダクションが第一段階として生じる。次に、この仮説をテストするために結論を収集する必要がある。これが第二段階の演繹である。最後に、このテストの結果を集め、仮説が正しいかどうかを判断する。これが第三段階の帰納であり、めでたく承認された仮説はその後の慣習となるのである。

この理論をもとに表6-24を見ると、これらの記録はアブダクションの過程を表現していると言える。たとえば被験者126の「人が急激に増える。大丸に行く人達だろうか?」という記録において、被験者はまず人が急激に増えたという驚くべき事実を観察し、それに対して「大丸に行く人達だろうか?」という仮説を与えている。フレームとのずれが驚くべき事実として観察され、アブダクションはそれに説明を与えるフレームを仮説的に結びつけるものだと言える。この時点でのフレームは短期的なものであり、安定性は弱い。

この仮説を確かなものとするには、アブダクションに留まらず演繹と帰納のプロセスを経るべきである。しかし表6-24の記録はすべてがアブダクションの段階で止まっている。経路上でのフレームに対するずれは仮説的解釈を促すが、演繹や帰納をすることなく、経路は進行するのである。

ただ同時に、多くの記録が帰納的であるとも言える。たとえば6.1.3では、「大きな家が増える」という表現が一種の法則化であることを述べた。法則化はまさに帰納の作用である。実際、件の「大丸」についても帰納を終えたかのように書いた被験者もある(表6-26)。

表6-26 帰納を終えたような記録(記録数:不可算)

被	R	種	始	終	表現	A	G
118	I	—	1,202		大丸が あるから 人がものすごく多い	3	4

この記録もアブダクションのプロセスを経ているし、記録自体をアブダクションと捉えることさえできる。つまりアブダクションと帰納は継時的なプロセスであると同時に、両義的でもある。

③空間的経路性による疑問の解消

以上のように、街を歩いているときさまざまな疑問や混乱が生じるが、経路はそれに関係なく進行する。よくわからないそれは一体何なのか、理由は何なのか。そのような疑問に対してはアブダクションによって仮説を与え、フレームに弱く結びつけることもあるが、やがては疑問自体を忘れ去ってしまうことも多い。

しかし経路を進んでゆくと、ふとしたはずみで答え(らしきもの)が見つかることがある(表6-27)。

表6-27 疑問が解消されたことについての記録(記録数:13)⁸

被	R	種	始	終	表現	A	G
102	I	}	1,402	1,480	ひらけた(と思ったら車が通ってない)	4	5
322	III	—	2,332		老人の割合が多いと思ったら投票所があった	2	1
322	III	—	2,332		正面にでかい建物が見える、寺?神社? 一釈迦堂だった	2	1
206	II	—	854		ちょっとひらけたかんじがする	3	1
		—	876		(.:かわらの大きな建物)《右》	3	1
211	II	☆	2,200		近くに森が見える《左》	4	1
		}	2,234	2,472	さっきの森は船岡山 だったのか	5	5
211	II	}	3,058	3,328	向こうに見える山の名は?タカオ山かな	4	1
		☆	3,436		こっちに見えたのは、左大文字 だったか!	4	1
211	II	—	3,674		なぜか公明党のピラ多し	4	1
		☆	3,708		と思ったら創価学会が!!なるほど	3	5

何か疑問が生じたのち、その場で、あるいは少し歩いて、その答えを発見する。それによって疑問が解消され、フレームは組織化される。これは空間的経路性の一つの醍醐味であると言えよう。

このように考えると都市の歩行という経験は、着実な推論によって疑問を解き明かしてゆく科学的探究や、語り手の意図を汲みながら読み進める文学読解などのプロセスとは異なる面がある。むしろ、複雑な社会の中でさまざまな驚くべき事実を発見し、あれこれと推論を巡らす、疑問のいくつかは未解決のまま有耶無耶にし、あるものは忘れ、あるものは偶然解決するといったような、われわれの日常生活そのものの感覚に近いものだと言える。

6.3.3 デフォルト構造の進化

短期的フレームが次々と書き替えを受けるのに対し、ルート歩行前に形成されていた長期的フレームは強固で、これが抜本的に改められることは少ない。逆接表現のように例外として処理されるものや、疑問を感じたときのようなフレームの暫定的修正に終わる場合が多い。ここではフレームの固定化の例と、書き替えを受けた数少ない例を取り上げる。

(1) 固定化

経路上の出来事がフレームとうまく照合された場合、そのフレームは修正を受けず、むしろより信頼性を増す。デフォルト構造はより鮮明な像となり、フレームに強固に結びつけられる。この固定化は不活性に進行しているが、記録にあらわれた例が表6-28のような場合である。

表6-28 デフォルト構造の固定化を示す記録〈記録数:12〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
106	I	—	272		いつも感じるが、堀川通など大きな通りはどこでも同じようなふんいきである	3	2
123	I	—	1,076		呼び込み?の人がいた、 さす がはんか街	2	1
107	I	}	2,064	2,142	かも川 やっぱ りキレーわ、川床もなんだか夏っぽい	3	3
220	II	—	3,052		交差点で やっぱ り空がひらける感じがする	3	1
211	II	—	3,822		急に人通りが多くなる、外人も多い/ さす が金閣寺	4	5
316	III	—	344		建設途中の家は やっぱ りいろんな音がしていた《右》	3	2

「さす」が「やはり」などは、既存フレームの内容が再確認されたことを示している。このようなプロセスが日々生活を送る中で着実に進行していると考えられる。またスクワイヤも言うように(6.1.1)、ものごとのある側面はデフォルト構造として強化され、他の側面は忘れ去られるような、選択的な過程でもある。

(2) 書き替え

長期的フレームの書き替えの例を挙げるとすれば、まず都市の変化である(表6-29)。

表6-29 都市の変化によるデフォルト構造の修正を示す記録〈記録数:6〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
129	I	☆	1,040		いつの間にか、新しい建物が できてる 《右》	2	5
129	I	☆	2,532		こんな所にスタバ あったっけ? 《右》	4	3
124	I	—	2,662		八坂神社の門がアイストップになっている、 けど今は 工事中	2	3
301	III	—	100		川は緑が 多くなった	4	5
309	III	☆	1,540		コンビニ あったっけ? 《右》	2	5

よく知っている場所に新しい建物ができたということは、被験者のその場所に関するフレームを変える。アルヴァックスやリンチも指摘しているように、空間は安定し、長時間持続する。そのような

期待があるからこそ、空間の変容は長期的フレームを書き替える。

もう一つの例は、表6-30のような未知のアトラクターとの出会いである。

表6-30 小川通の伝統的街並みとの出会いによるデフォルト構造の修正を示す記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
215	II	}	1,042	1,202	京都っぽーい！	5	1
218	II	—	1,044		急に、古いまちなみに。 <u>びっくりした。</u>	5	1
211	II	—	1,046		<u>突然</u> 、家のスケール、植栽のスケール、色彩が整う	5	1
218	II	領	1,044	1,426	<u>急に</u> 京都らしくなる。歴史の深さを感じる	5	1
227	II	領	1,046	1,271	祇園のような雰囲気 <u>でびっくり</u> 、歴史を感じる	5	1
211	II	領	1,046	1,262	緊張感のある美しさ、 <u>the</u> 茶界	5	1
206	II	領	1,058	1,260	<u>まさしく</u> 京都って感じの住宅地	5	1
201	II	領	1,060	1,296	<u>これぞ</u> 京都っていう感じのエリア	5	1

ほとんど知られていなかった小川通の伝統的街並みとの出会いは被験者に大きなインパクトを与え、歩き終わった後の領域表現で「いかにも」というアトラクター的な記録がなされるまでになった。この経験によって、小川通は被験者たちのフレームに刻み込まれることとなるだろう。「小川通」という新しいフレームが生成され、「京都らしい」「伝統的街並み」「茶道」などの既存フレームに緊密に結びつけられることが想定される。

これらの書き替えの例は、短期的フレームにおいて把握されたことが、フレームにおける組織化によって長期的フレームに移行されるプロセスだと理解できる。その主な要因は、都市の変化は空間の安定性に、アトラクターとの出会いは印象の強さやデフォルト構造との結びつきによるものと考えられる。

1 「らしい」も「らしくない」も含んだ数。推測の意味で「らしい」「[ばい]」を用いていると思われるものはカウントしない。また次項で触れる「いかにも」のような表現も除いている。

2 ロックバンドである「Mr. Children」の意。

3 ここでは多少の驚きや喜びを伴うと考えられるもののみカウントした。記録対象が既知かどうかは被験者本人にしかわからずすべてはカウントできないが、かなりの数になるものと思われる。

4 ミンスキーはこのようなプロセスを「弁解」(excuse)と呼んでいる(ミンスキー, M.: 知識を表現するための枠組, コンピュータービジョンの心理 第6章, ウィンストン, P. H.編, 白井良明・杉原厚吉訳, 産業図書, 1979, pp.290-293.)。フレームとの関連づけがうまくゆかなかったときの対処法の一つで、アブダクションに含まれる。一般に、この弁解の作用により照合はある程度の曖昧さを許容できる。

5 上山春平: アブダクションの理論, 人文學報vol.45—西洋論理思想史の研究—, 京都大学人文科学研究所, 1978, pp.103-155.

6 「仮説推論」などの訳が当てられる場合がある。またパースも前期の理論では主にhypothesisを用い、後期ではretroductionの語を併用することがあるが、本論では、パースの理論として現在もっとも一般的に用いられるabductionの語を、カタカナ表記の「アブダクション」として用いる。

7 四条通に面する大型百貨店である「大丸京都店」。

8 同地点、離れた地点を問わず、一度書いたことが後からの発見で修正された場合をカウント。また離れた地点での記録は合わせて1とする。

6.4 身体的フレーム

身体は、実存主義哲学の主要なタームである（2.1.3参照）。街路の歩行局面においても、人は抽象的な質点として空間中を自由に移動しているのではなく、ボリュームある身体をもって、ある速度で歩いている。この行動する身体を起点として、われわれは様相を把握しているのである。歩き方、視界の広さ、対象との距離の取り方、諸感覚のはたらかせ方…。これらはいわば肉体化されたフレームとして、われわれの様相把握を規定していると考えられる。そしてノルベルグ＝シュルツの説を採り入れると、その把握の仕方には、何らかの普遍的な構図—実存的空間—があるはずである。本節では、これらのことについて分析する。

6.4.1 行動による様相把握

被験者は、歩き、立ち止まり、記録し、疲れて休み、あるいは雨宿りをしながらルートを進んでゆく。記録にあらわれた例は表6-31のようなもので数自体は決して多くはないが、すべての様相把握はこのような行動プロセスの中で起こっている。

表6-31 自らの行動の記録〈記録数:40〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
107	I	—	8		<u>立ち止まっている</u> とけっこう風を感じる	3	4
119	I	—	752		赤い看板…原色系のカンバンが多くて <u>つかれる</u> 。	1	1
102	I	—	1,024		たくさんの歩行者を縫う自転車／ <u>人をよけながら歩く</u>	4	5
102	I	☆	1,136		<u>信号待ち</u> ／ <u>まわりを見る</u> ／東洞院から車がたくさん出てきた	4	5
109	I	}	1,272	1,332	通り沿いを <u>歩く</u> とあつい、店側を <u>歩く</u> とすずしい	3	5
212	II	}	804	854	もっと狭い道なのに車が出てくる／車が通ると <u>ゴックて歩けない</u>	4	1
212	II	☆	2,886		<u>雨やどり</u>	1	1
325	III	—	448		車の音がきこえてきて、 <u>カーブを曲がる</u> と大通りが見えてきた。	4	1
321	III	—	626		山にせまって <u>方向転換</u> 、正面が空に切り換わる	2	1

これらの表現では、立ち止まることで風を感じたり、曲がることで視線が切り替わったりしたことが表現されている。ノルベルグ＝シュルツは、われわれがある場所から別の場所に到達するその「仕方」が人間の世界・内・存在の基本的様相であることを指摘している¹⁾。そこには歩調とリズムがあり、目線の動きや他者との干渉がある。5.2.1で様相が経路の選び方に依存することについて触れたが、その経路上での居方、動き方にもまた依存している。

6.4.2 二つの座標系

身体と空間との関係の基礎として、座標系について分析する。座標系には、その基準点や軸の取り方によって絶対座標系と相対座標系がある。街路の歩行においてわれわれは、この両方を巧みに使い分けていることがわかった。

(1) 身体中心の相対座標系

まず人間の身体性の観点から大切なのが、自らの身体を中心とした相対座標系である。ここから座標軸と距離について考察する。

① 座標軸

われわれにとって空間は普通三次元で捉えられ、その座標軸として

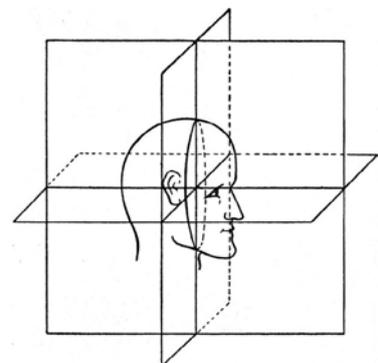


図6-14 人間の座標軸

(ユクスキユル, J・クリサート, G.: 生物から見た世界, 日高敏隆・羽田節子訳, 岩波文庫, 2005, p.32.)

は「上下」「前後」「左右」の三つが支配的である。生物学では、この三軸の基準となる平面が人間の目の高さ、三半規管、正中面となっていることが確かめられている² (図6-14)。この三つの次元が、われわれの周りに広がる環世界に分節を与え、基本的な理解のフレームを提供していると考えられる。

様相・領域表現において座標軸が必ず言及されるわけではないが、試みに「上」「下」「前」「後」「左」「右」の語を直接用いているケースを拾ってみると、表6-32のようなものがあつた。

表6-32 身体中心の座標軸を用いた記録〈記録数：上19/下0/前93/後6/左右352〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
130	I	—	326		ビルが多くなってきて <u>上</u> の視界が少し狭まる	2	1
130	I	—	2,064		歩道の屋根がなくなる。 <u>上</u> の視界が開ける。	5	3
109	I	☆	1,440		田中彌の <u>上</u> が抜けていてここちよい《左》	3	5
214	II	—	876		寺の <u>上空</u> は抜けていてきもちいい《右》	4	1
322	III	—	4,010		<u>上の方</u> に車が走っている音が聞こえる	4	1
105	I	—	270		<u>前方</u> に山が見え、景色が開ける	1	3
206	II	—	1,184		<u>前</u> に高いビルが見える	5	1
208	II	—	3,328		この辺から、 <u>前方</u> に山みえたり、小学校、公えんの木がみえたり、みどりがふえた気がする	3	2
312	III	—	1,930		<u>前方</u> にふみきりがあることに気づく	3	2
306	III	☆	2,728		<u>前方</u> に木のトンネルが見えてくる、涼しそう	4	1
102	I	}	192	270	風が <u>後ろ</u> から抜ける	1	2
229	II	↑	490	550	<u>うしろ</u> から聞こえる大きい道路の車の音がだんだん聞こえなくなっていく	4	1
108	I	☆	352		<u>左</u> 、おくのたてものまでみえる	1	3
113	I	☆	1,400		<u>左手</u> の向こうにアーケードが見える／ <u>右</u> の方の路地はさびれた感じがする	3	5
225	II	}	402	484	<u>左側</u> の緑地でさわやか。草のにおい。	5	4
208	II	☆	1,392		<u>左側</u> に、小さな古めの色／ <u>右側</u> にまっしろな高い新しい建物	3	2
215	II	☆	1,866		道の <u>左側</u> は生活感、 <u>右側</u> は閉じている	3	1
310	III	}	240	372	<u>右側</u> の川がいなかの雰囲気を出して、和む	3	1
317	III	}	596	762	緑が多い(特に <u>左手</u> の山のある方)	4	4
310	III	—	942		<u>右側</u> から来る車で交通量が急に増えた	3	1
322	III	↑	1,608	1,712	だんだん店が減ってきた、とくに <u>左側</u> は店がなくなってきた	4	1
314	III	↑	1,878	1,912	<u>左右</u> ともに店が並ぶ／ <u>左手</u> のみどりが少なくなる	1	1
314	III	}	3,662	3,704	<u>左手</u> はガケのようになっている	4	1

二重線の仕切りは、上下、前後、左右の別を示す。記録数では左右が圧倒的に多く、以下前、上、後という序列があつた。自分を中心に下という言葉を使った表現は見当たらなかった。

上下は都市においてはほぼ空と街路が占め、基本的には地となる。しかし5.3.1で指摘したように街路の幅やテクスチャは境界把握に大きな役割を果たし、シークエンスの中では図として浮かび上がる。また上方の空の抜けはポジティブに捉えられる傾向が強い。座標軸について実存的な見地から考察を行なったトゥアンは、上を神の居場所とする考え方はあらゆる民族、文化に共通しているという³。高密度な都市における空も、そのような独特の意味合いをもっていると考えられる。ルートIの沿道には高いビルが並び、後半はアーケードに覆われているからこそ、たまに見える空がいくつも記録される (Appendix-Cの「[37] 空」のプロットも参照)。

前方には遠くまで視線を飛ばし、寺社や山々を発見する。後ろを振り返ることはほとんどない。しかし6.2.1で述べたように前への視線は予想を生み、来た道を振り返ることは記憶を組織化する。トゥアンも、前と後はそれぞれ未来と過去に対応すると述べている。言語学でも、「過去を振り返る」「問題を先送りする」といったように空間表現から時間表現へのメタファーが活発に起きていることが指摘されている⁴。

左右には主なコネクターやシフターが次々とあらわれ、経路のシークエンスを規定する。被験者は

左右のどちらかを指定して様相を記録したり、あるいは左右を比較したりといったことを活発に行なっている。トゥアンによると、左より右を聖なるものとする傾向は複数の文化で見られるものの、左右は容易に混同される傾向がある。街路空間においても左右は指定や比較のために実用されはするが、特別な意味や価値を見出す座標ではないようだ。

②距離

表6-33 身体と対象との距離の記録〈記録数:82〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
102	I	領	2,170	2,684	ヒューマンスケールのショッピングギャラリー。店が <u>近く</u> 感じる。	5	5
214	II	—	818		車との <u>キヨリ感</u> がup/せまくなった	4	1
226	II	☆	1,882		右手のへいが <u>迫ってくる</u>	4	4
305	III	—	190		セミの音が <u>遠のいた</u>	5	1
312	III	—	542		山が一気に <u>近づいた</u> 感じがした	4	3
313	III	—	554		木の足元が見える程山に <u>近づいている</u>	3	5
307	III	↑	4,110	4,200	交通量の多い道路に <u>近づいていく</u>	4	1

表6-33の記録では建物や車、山や蝉の声との距離が、身体を基準に記されている。文化人類学者のホール（Edward T. Hall）は人間の距離感覚となわばり行動との関係について考察するプロクセミクス（proxemics；近接学）を展開している⁵。その中でホールは、われわれは視覚、聴覚、嗅覚により距離を把握するが、視覚は触覚とも密接に関係し、手触りや温度感覚も重要であることを指摘している。つまり距離感覚は身体ときわめて強い関係性を示す。

またレルフは、身体的な距離が何メートルとか何フィートとかいった客観的、計測可能なものではなく、近いか遠いかという「質」として経験されることを指摘している⁶。つまりわれわれが「把握する」ものなのである。この質的経験にとって、やはり変化が重要である。表6-33の「近づく」「遠のく」という表現は身体の移動に伴う質的距離の変化を言い表わしている。

また表6-33では「迫ってくる」「近づいてくる」などの表現が多く使われている。移動しているのは自分なのに、あたかも塀や山が動いているかのようなようである。他にも表6-34のような例が見られた。

表6-34 対象が動くかのような表現を用いた記録〈記録数:不可算〉⁷

被	R	種	始	終	表現	A	G
115	I	↑	244	280	広場が <u>でてきた</u>	3	5
113	I	☆	526		ビルに <u>囲まれ</u> て閉そく感《右》	2	3
122	I	}	620	652	うしろのマンションが <u>せまってくる</u> 感じ。きゆうくつ	2	4
109	I	領	2,150	2,248	南座に <u>支配される</u> 場所	4	4
223	II	}	1,764	1,864	左側の民家がそれぞれに植木で <u>たのしませてくれる</u>	5	1
210	II	—	2,228		むこうからゲニウスが <u>やってくる</u>	3	1
319	III	—	2,624		寺と山に <u>囲まれ</u> ても静かな感じ	4	3
309	III	}	2,754	2,782	縁には <u>はさまれる</u>	3	2
315	III	領	4,004	4,354	森に <u>つまれる</u> 、暗く、怖い	4	1

われわれはこのような表現を普段なにげなく使っている。しかし実は、自己中心座標の存在を示唆している表現である。

(2)鳥瞰的な絶対座標系

絶対座標系の使用例として代表的なのが、東西南北の方角を用いた表現である（表6-35）。

表6-35 東西南北の方角を用いた記録〈記録数:65〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
101	I	}	84	280	<u>北側</u> は金融系の店が立ち並び、 <u>南側</u> は新しい感じの商店街の様	2	4

102	I	}	192	270	西日が背中にさして暑い	1	2
123	I	—	236		堀川×四条北東のマンションがすごい存在感を出している	3	1
116	I	—	664		右(南)を向くと古い家なみが見える。	1	3
111	I	}	1,658	1,710	南は電気街／北は寺町&新京極	4	5
129	I	}	1,704	1,750	北側の建物の高さが低くおさえられている	3	5
114	I	☆	2,252		ここから南北見るとガラが悪いカンジがする。	4	4
216	II	—	2,062		右(北)側の塀の向こうに空が見える、刑務所みたい	3	1
217	II	}	3,574	3,612	東西《正しくは南北》に視界が開ける	3	2
303	III	}	1,100	1,130	西側に新しい住宅	3	5
303	III	—	1,600		南側《正しくは東側》のお店のひさしが多くなる	3	5

記録数は身体中心座標に遠くおよばないが、内訳ではルート I において圧倒的に多い。四条通をまっすぐ東進するルート自体が、東西南北に敷かれた「碁盤の目」に従う安定した構図だからである。一方碁盤の目が乱れ、ルートも何度も折れ曲がるルート II と III では使用は少なく、方角を誤認する被験者さえ見られた。

さらにルート I では、山を用いた表現も多い(表 6-36)。

表6-36 山と方角を用いた記録(記録数:22)

被	R	種	始	終	表現	A	G
106	I	—	460		このあたりから、向かいに東山が見えた／近くに東山が見えるだけで祇園を想い浮かべる	3	2
107	I	}	272	326	あと北に山が見える	4	5
129	I	—	750		東山が見え始める	3	3
109	I	—	1,544		東山がよく見えてくる	3	5
114	I	☆	2,092		東山近!	5	5
116	I	—	314		北を向くと山と空がよく見える	1	3
129	I	}	2,080	2,132	鴨川、川の音、風、川床、北山が見える	5	5
303	III	☆	1,072		山が西に見える《左》	3	5

このような表現は、京都が東山、北山、西山という三山に囲まれた特徴的な地形をしているところに要因がある。この碁盤の目と三山による構成はわれわれに鳥瞰的な空間構図を与え、京都のイメージアビリティの向上に大きく寄与していると考えられる(図 6-15)。またトゥアンは、このような空間イメージが地図のような媒体によって他者へ伝達されることを指摘している⁸。実際、明治以前の古い地図には三山の姿や一つひとつの峰の名前などをも書き込んだものが数多く見られ(図 6-16が一例)、京都を描いた現代の略地図の多くにも三山が描かれている。

このような構図のもと、京都全体での自分の位置づけを記している例がいくつか見られた(表 6-37)。

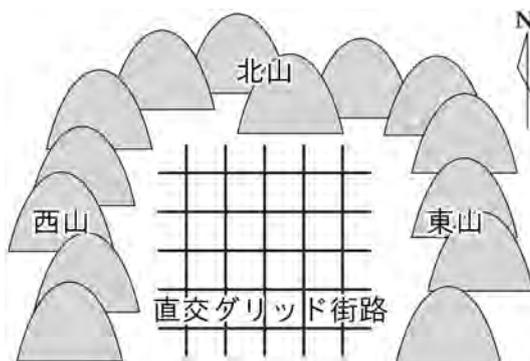


図6-15 京都の鳥瞰的な空間構造



図6-16
1710年前後に描かれた「京都明細大絵図」
(京都市歴史資料館蔵／伊東宗裕：京都古地図めぐり，京都創文社，2011，p.9.)

表6-37 自分のいる場所の京都の中での位置づけを示す記録〈記録数:5〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
211	II	領	286	490	京都らしい(中でも京都の北のほうの)エリア	4	4
226	II	一	1,414		左手と正面に山が見える、北西に来たんだと実感	3	3
308	III	一	2,882		急にど田舎、嵐山から嵯峨に抜けたって感じ	5	2
307	III	領	4,050	4,354	山に囲まれた、亀岡に道がつづいていそうなエリア	4	1

被験者211, 226, 308は京都市の中で特にどの地域、どの方角にいるかを記しており、被験者307は京都から山を越えたところにある亀岡との関係を記録している。

ナイサーはスキーマの入れ子構造を提唱した(図6-7)。またミンスキーも大域的空間フレーム(global space frame; GSF)という概念を提唱している⁹。われわれはその場その場で行動し様相を把握しながらも、同時により広い領域の中に自らを位置づけているのだ。この二者は、ベルクソンの二つのイマージュの体系にも相当する。

保坂和志は、新しい場所に住み始めた後の自らの変化について語っている¹⁰。まずはじめの頃は俯瞰的な図式がなく、街の中の目印をもとに行動している。慣れてくると地図が頭に入り、それを思い浮かべながら歩くが、またしばらくするとその俯瞰図のような余計な手続きは必要ではなくなる。このようにわれわれは、都市に対する馴染みの度合いによって二つの座標系を使い分けている。慣れた場所での行動は俯瞰図を当たり前のものとして不活性に処理できるが、同時にいつでも活性化できるものである。

6.4.3 内と外

芦原義信は、内と外の概念により街路空間を分析している¹¹。内的秩序は基本的に建築の内側にある。ノルベルグ＝シュルツも実存的空間の五段階のうち、住居的段階こそが内的空間であり、実存の中心的な場所であるとしている。しかしヨーロッパの街路空間には内的な秩序が拡張している。街路や広場はインテリアのように飾られ、人々はそこでくつろぎ、社交を楽しむ。都市は城壁で囲まれ、その内部で共同体が完結する。各住居にとっては外的秩序が流入してきており、そのため人は土足で部屋を歩くこととなる。

片や日本では、玄関で靴をぬぐ。住居こそが内的秩序の支配する領域であり、血縁関係で結ばれた家族が共同体の単位となる。日本人にとって街路は外の空間であり、そこを美しく整えようという発想にはならず、ブロック塀の続く街並みとなっていると芦原は指摘する。

この内と外の語は記録の中にも散見され、しかも一貫した傾向を示している(表6-38)。

表6-38 内と外に関する記録

〈記録数:建物19/寺社・境内21/アーケードの下7/山や森42/細い道42/まとまりをもった地域23/その他7〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
212	II	☆	1,130		ショーウィンドウ(壺)／お香みたくないいいにおい／ちょっと入り口あいてて中が見える《左》	4	4
212	II	☆	1,930		家の中から人の声	1	1
214	II	☆	2,668		入ってみたいと思わせる荘厳な門構え《左》	4	1
204	II	一	2,290		神社の参道に入る	4	1
213	II	一	2,472		建勲神社に迫力があり、入ってみたいと思った。	1	1
220	II	領	3,944	4,020	境内	5	5
102	I	一	1,024		アーケードに入る	4	5
105	I	一	1,026		アーケードに入る、暗くなる、閉塞感がある	2	5
110	I	一	2,602		アーケードを抜けた開放感、ひろいなあ	5	5
318	III	}	2,754	2,866	木々に囲まれ森の中のような感じ	2	2
307	III	}	2,802	2,878	木に囲まれてトンネルみたい	4	1
314	III	領	3,984	4,354	山の中の暗いみち	4	1
320	III	一	4,286		山道を抜けた感じ	4	3

222	II	—	490		幹線道路から一本 <u>入る</u> と静かになる	2	2
205	II	—	1,734		路地に <u>入って</u> いった	4	2
227	II	☆	2,528		奥に <u>入って</u> いきたくなる小道	5	1
202	II	—	1,524		大きい通りに <u>出て</u> 雑然としている	4	1
208	II	—	1,524		大きな通りに <u>出て</u> 、いきなり市街地な感じ→ビルetc./車多いけど、緑も多い	5	4
205	II	☆	2,116		徐々に車通りのある道に <u>でた</u>	4	2
322	III	—	4,074		車道に <u>出た</u>	3	1
106	I	領	460	630	東山地域への <u>入り口</u>	3	2
201	II	—	518		住宅街に <u>入った</u>	3	4
226	II	—	1,728		町中に <u>入った</u>	4	4
321	III	—	3,470		伝建地区 <u>突入</u>	5	2
227	II	—	3,060		商店街 <u>脱出</u> 、再び民家	4	1

二重線で区切っている上から順に、「建物」「寺社・境内」「アーケードの下」「山や森」「細い道」「まとまりをもった地域」が「内」として捉えられ、そこに向かって移動するときは「入る」、そこからの移動は「出る」と表現されている。日本語の一般的な用法による制限もあろうが¹²、これらの傾向には被験者間でほとんどぶれがなかった。

建物についてはノルベルグ＝シュルツの指摘の通りである。寺社・境内、アーケードの下や山の中は外部空間ではあるが、取り囲まれていることで内的空間となっている。さらに、細い道が内、大通りが外というのが興味深い。5.2.2において「アンコ」に比べ「ガワ」で様相の評価が低いことを指摘したが、実際にあらわれているスケールや音などの要因と同時に実存的なレベルでの要因があり、人は細い道の方により内的な安心感を覚えるのである。また最後のまとまりをもった地域については、人間が都市を完結したディストリクトの集合体として捉えていることを示唆している。これらの記録の多くが、エッジやその近辺にある。

このような現象に、先に挙げた身体中心の距離感覚が作用していることは明らかである。細い道における距離感覚は屋内のそれと類似し、大通りはとっかかりのない屋外空間なのである。

これに関連して「表」「裏」という言葉については、太い道が表、細い道が裏と表現されるはっきりした傾向があった(表6-39)。また建物のファサードのうち、通りに面している部分を表とすることもわかった(下表の二重線で区分している)。内的秩序をもつまとまりの外皮を表、中身を裏と捉えるようである。ガワとアンコの語もこのことと関連している。

表6-39 表と裏に関する記録(記録数:21)

被	R	種	始	終	表現	A	G
216	II	—	522		<u>裏</u> の雰囲気	2	2
226	II	領	1,226	1,728	<u>ウラ</u> 町エリア	3	3
201	II	}	1,730	2,038	小道が多く <u>裏</u> 道って感じで楽しい	4	2
205	II	}	1,900	1,954	まさに <u>裏</u> 道という感じに	4	2
309	III	}	192	242	<u>裏</u> 路地(?)を <u>通</u> っているカンジ。ワクワク・ドキドキ	5	2
316	III	☆	1,604		少し <u>裏</u> は静かそうでよさげ《右》	1	5
316	III	—	1,762		<u>裏</u> は生活臭しまくり《右》	3	2
113	I	☆	222		<u>表</u> 向きが日本的な建物《右》	2	3
226	II	}	504	578	学校の <u>ウラ</u> 、うす暗い	1	3
221	II	領	1,296	1,522	建物の <u>裏</u> ばかりが面する退廃感漂うエリア	1	1

6.4.4 アトラクター

アトラクターは、都市の様相において方向性をつくり出す要素であり、本章でも遠方からの気づきや「いかにも」「普通」といった表現との関連を指摘してきた。さらにわれわれの身体と関係の深い現象でもある。ここではアトラクターについて総合的に分析する。

(1)アトラクターの抽出とマップの作成

様相・領域表現を詳しく検証した結果、以下のような記録にアトラクター性が認められた。

- A. アトラクターを中心として領域表現がされたり、様相表現でも中心性が表現されたりする
- B. アトラクターの前後の領域表現もそのアトラクターとの関係で記される（「～の周辺」など）
- C. アトラクターとの距離の変化について記録される（「向かう」「近づく」「遠ざかる」など）
- D. アトラクターを通り過ぎた後に不在について記録される（通常不在は記録されにくい）
- E. 「いかにも型」のデフォルト性の表現がなされる

表6-40はその実際の言葉であり、二重線区切りによって上記A～Eの記録傾向と対応している（ただし複数の記録傾向が含まれるものもある）。

表6-40 アトラクターに関する記録（記録数：合計553）¹³

被	R	種	始	終	表現	A	G
130	I	領	1,024	2,064	街の 中心部 エリア	4	4
126	I	}	1,866	1,920	繁華街の 中心的な 雰囲気	4	4
105	I	領	1,988	2,220	鴨川を 中心 とした自然を感じるエリア	5	5
223	II	領	808	1,038	寺が 中心 となる	4	4
221	II	領	3,476	3,618	左大文字がきれいに 見えるエリア	-	-
309	III	領	1,340	1,510	渡月橋 。視界が開けた。	5	5
308	III	領	1,750	2,744	お寺 ゾーン	3	4
317	III	—	2,540		寺の 周り	5	5
128	I	領	0	326	「駅前」のにぎわいを 引きずっている エリア	3	1
125	I	領	1,132	1,544	繁華街の 前 の少し栄えたエリア	3	2
124	I	領	1,874	2,204	河原町の方とぎおんとを分ける 中間地帯	3	4
325	III	領	1,842	2,172	観光地の はずれ	4	1
120	I	↑	682	872	徐々に 街の 中心部 に 来ている 感じ	3	2
109	I	領	730	852	街に 向かって ざわつきだす	3	4
125	I	↑	1,932	2,070	中心部 から 遠ざかって いき、少しずつ 落ち着いて くる	3	4
108	I	—	2,522		前方に山のみどりが 迫って くる	2	1
218	II	↑	2,234	2,472	鳥居に 向けて 聖なる感じが ふえて いく。	5	1
220	II	↑	3,658	3,786	徐々に 金閣寺に 近づく 感じ	4	1
321	III	—	394		道がずっと山まで つづきそう	4	1
308	III	—	1,068		観光地 然として くる	4	4
218	II	—	278		大学の 終わり 。ふつうのまちの始まり	4	5
229	II	—	1,234		いつのまにか、伝統的な建物のところから ぬけて で少し雑然としている	1	1
228	II	—	1,294		いかにもな ゾーン おわり	3	2
317	III	—	2,092		観光地という雰囲気 から 町の 雰囲気へ	5	5
301	III	—	2,764		清涼寺 終わり	3	1
111	I	}	1,658	1,710	「The 京極」的ふんいき	4	5
220	II	領	3,786	3,944	バリバリ 観光地の雰囲気	4	1
308	III	領	1,200	1,750	いかにも 嵐山なエリア	3	5
316	III	領	1,498	1,698	The 観光地、特に思う所なし	1	5

このような条件を満たす様相・領域表現を抽出し、地図上の記録位置と対応させてプロットしたのが図6-17である¹⁴。6.3.1で述べた「いかにも型」「普通型」のデフォルト性表現については、アトラクターとの関連を見るために別の記号を用いて明示的にプロットしている。そしてこの図を整理し、3ルートのアトラクターマップを描き出した（図6-18）¹⁵。ここからいくつかの分析を行なう。

(2)アトラクターマップの分析

①類型

図6-17では、色分けによってアトラクターの類型を示している。大まかに分けると、駅や寺社、学

校のような単体建物、寺社や伝統的街並みのような歴史的景観、山や川のような自然、繁華街や観光地のようなアクティビティを引き寄せる活動の中心がアトラクターになりやすいと言える。

②形態・スケール

アトラクターの形態として、点（主に単体建物）、線（主に山や川、通り）、面（主に区域）がある。それぞれリンチの『都市のイメージ』で言うランドマーク、パスやエッジ、ディストリクトに相当すると考えられる。リンチの考案した5要素はパブリックイメージが集まる場所であるが、アトラクターにもその側面があり、リンチの5要素を包含する概念だと言える。アトラクターは、リンチの構想したエレメントを都市の様相における方向性の観点から考察し直すものである。

また形態ともに、スケールもまちまちであることもわかる。大きなものの方があらゆる方向から参照され、アトラクターになりやすいのは確かである。鳥居や茅葺きの家などは小さなものでもアトラクターとなるのが、これらは象徴的形態をもっている。山や川にしても、周囲から図として浮き出すぐれた形態的特徴をもっているのである。

③参照方向

形態のバリエーションにより、さまざまな参照方向のパターンが生じる。訪れる前から参照されるパターン（ルートⅠの区域アトラクター、ルートⅡの金閣寺など）、その中において参照されるパターン（区域アトラクターやルートⅢ後半の山など）、通り過ぎた後から参照されるパターン（ルートⅡの伝統的街並みが代表的）、横から参照されるパターン（ルートⅢ前半の山が代表的）がある。区域型のアトラクターは、最初は「向かう」ものとして、やがて「その中にある」、「離れてゆく」ものとして認識され、またルートⅢ前半の山は最初は「向かう」、やがて「横にある」ものとして捉えられる。参照形式はルートを進むにつれ変化することがある。

④記憶との関連

訪れる前から参照されるには事前の知識が必要である。ルートⅠの区域アトラクターや金閣寺はよく知られており、訪れる前から予想が生成されるために「繁華街に近づく」などという記録が数多く見られる。一方、知名度の低かった小川通や鳥居本の伝統的街並みは前から参照されず、小川通などは終わった後に「また普通の街並みに戻った」と盛んに表現されることとなる。

また、各ルートのスタート地点となった駅は他の駅と比べてアトラクターになりやすかった。実験の集合場所に来るためにそれらの駅を利用したという、「かかわった」直前の経験が作用していると考えられる。繁華街、観光地やデパートも、訪れ、ショッピングを楽しむといったように被験者が関与できる対象である。一方住宅街は、知名度も低い上にかかわるべきがない。

そしてを図6-17を見ると、6.3.1ですでに指摘したように「いかにも型」「普通型」というデフォルト性の表現とアトラクターとの関係は明白である。前者はアトラクターの存在を、後者はその不在ないしそこから離れることを指示している。二つの型を都市構成論的に考えると、面的に広がる「普通の街」の中に「いかにもアトラクター」が離散的に配されているという多心的都市モデルが想定されよう。

⑤競合や差異

アトラクターが競合していることもある。ルートⅠのオフィス街と繁華街は隣り合い、その間では「オフィス街が終わり、繁華街へ」と記される（さらにこのオフィス街と繁華街が連合して中心部というマクロなアトラクターを形成している）。ルートⅢの天龍寺は、その知名度にもかかわらず観光地

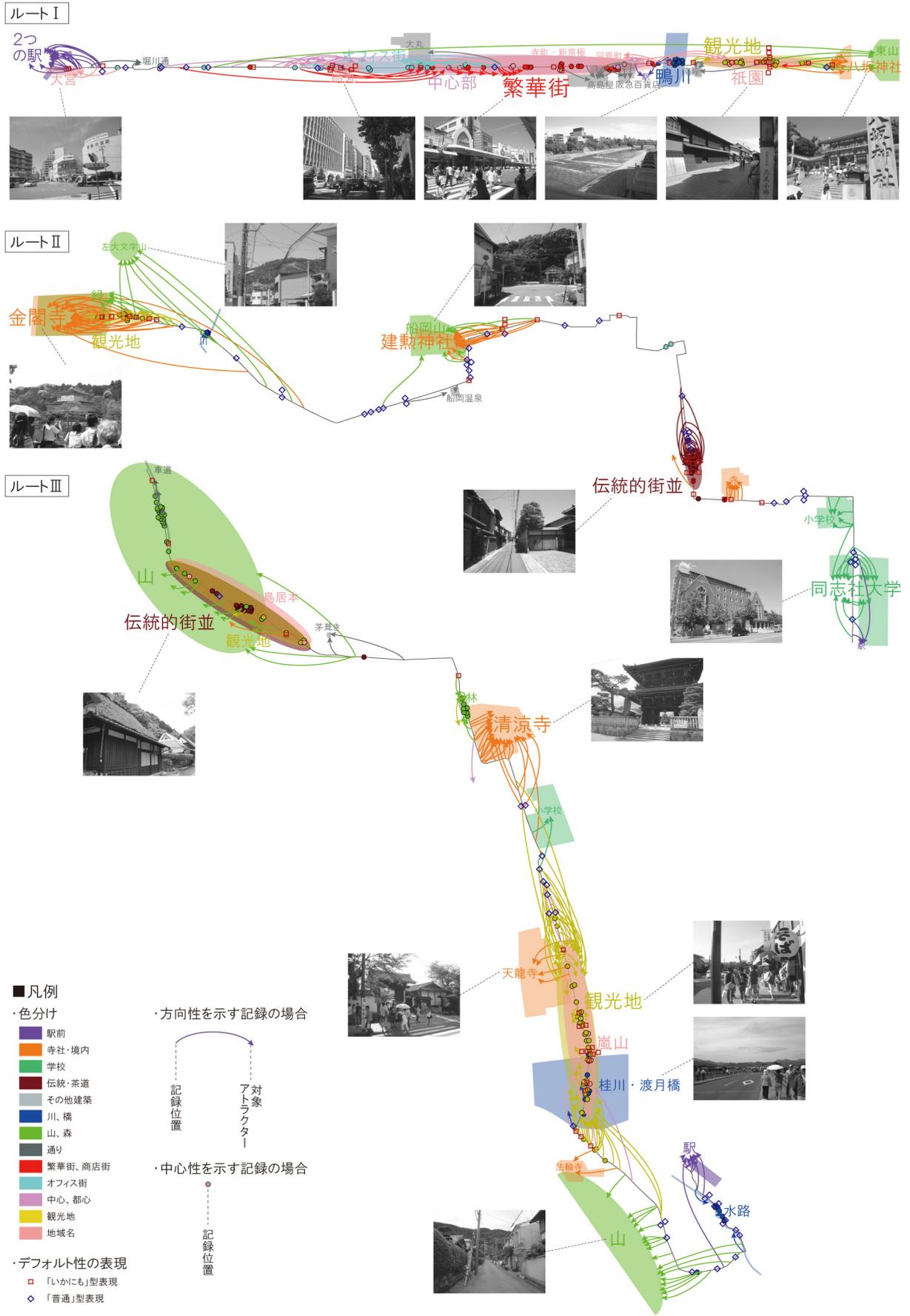


図6-17 アトラクターに関する記録のプロット

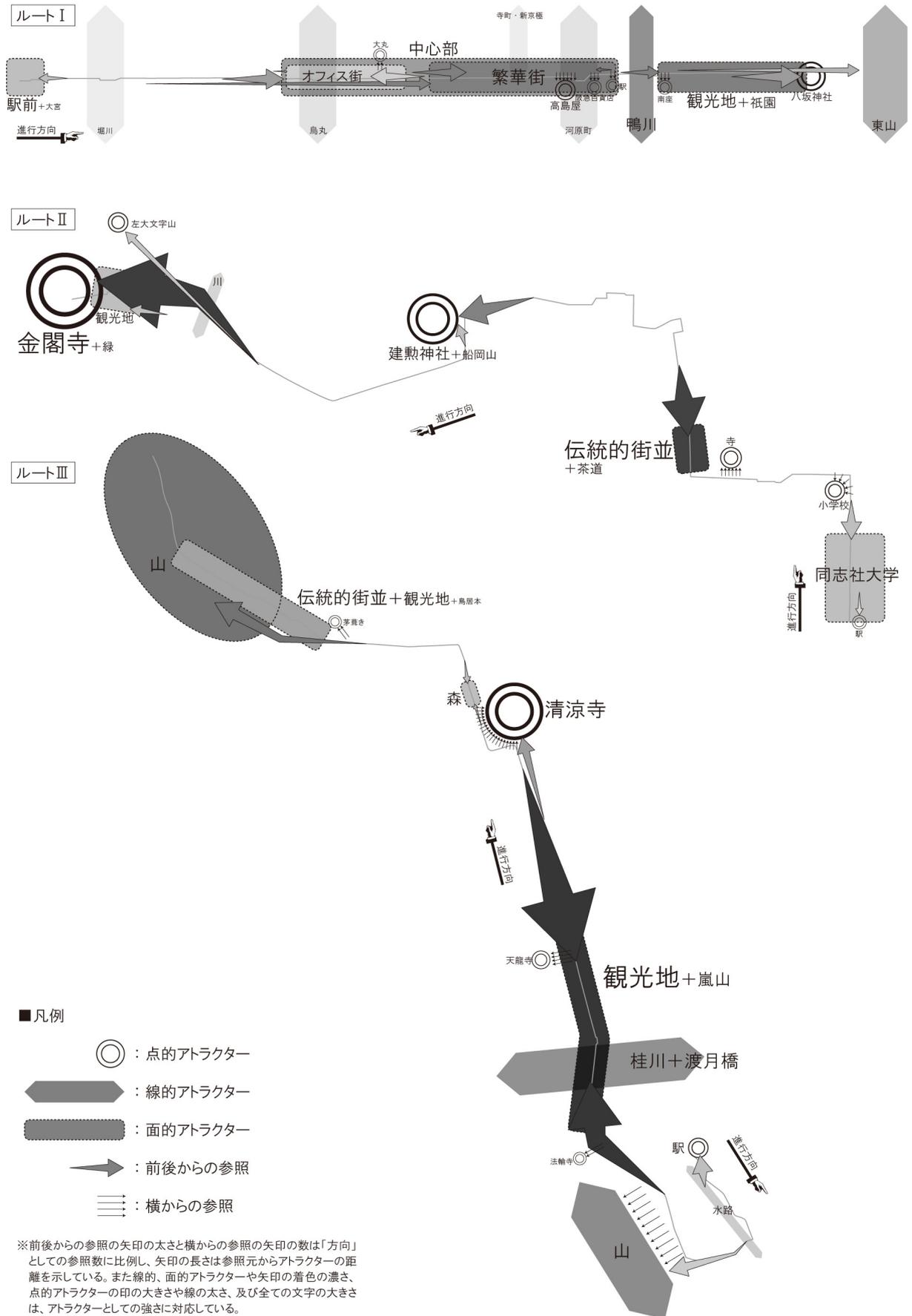


図6-18 図6-17を簡略化して得られたアトラクターマップ

アトラクターに負け、中心性をあまり発揮していない。それに近い京福電鉄嵐山駅に至っては全くアトラクター性がない。

競合の概念をより一般化すると、周囲との差異の大きさがアトラクターとしての強さにつながるものとなる。小川通の伝統的街並みは、その後の非常に評価の低い場所との大きな差異によってここだけが浮き立つことになった。ただし周囲との差異の前提として、アトラクターの内部においては類似性が保持されていることも見逃せない。

ただし天龍寺や京福電鉄嵐山駅が有力なアトラクターとならなかったのは、ルートに対する位置の弱さも原因である。建勲神社や清涼寺はそれほど知名度がなかったにもかかわらず、通りのアイストップの位置にあったから気づきやすく、訪れる前から強いアトラクターとなっていた。天龍寺や京福嵐山駅はルートの横にあり、しかもやや奥まっている。

(3)アトラクターの様相論的解釈

以上の分析より、強いアトラクターとなる条件は以下の五点にまとめられる。

- A. よく知られている
- B. 実際に人とかかわりがある
- C. 内部での類似性と周囲との差異性がある
- D. 象徴的な形態やスケールをもつ
- E. 象徴的な位置にある

このうちB, D, Eは身体との関連が重要なものであるが、Aは長期的フレームと、Cは短期的フレームとの関連が強い。またアトラクターが都市のパブリックイメージの集中する場所だということを考えると、6.6で述べる社会性や公共性にもかかわる概念である。アトラクターはきわめて様相論的なあらわれをすと言える。

そこでこの概念を、経路モデルによって解釈しておく。これまで経路モデルでは何らかの境界が(可能態ではあれど)定められる空間を想定し、これを楕円形で表現してきた。しかしアトラクターのつくる空間は、アトラクター「の周りに」形成されるものである。よって、ダイアグラムは図6-19のように描くことができる。ここでアトラクターの形状は抽象化して描いているが、点でも面でも線でもありうる。またアトラクター自体は経路上になくともその経路の様相においてあらわれうることも示している。

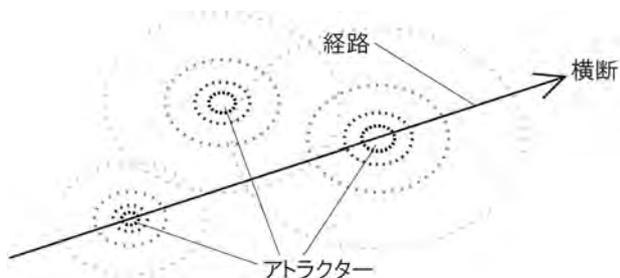


図6-19 アトラクターによる領域形成のダイアグラム

原広司は空間について、「容器としての空間」「場としての空間」という分類を導入している¹⁶。容器とは境界の定められた空間であり、場とは何らかの中心によって形成される空間である。この文脈の中で、原は「場の形成子」としてアトラクターの概念を用いたのであった。これまで用いてきた経路モデルは空間のシークエンスを容器の連続に切り分けて理解しようとするものであったが、多くの被験者のアトラクターへの言及を見ると、場としての都市も考えねばならないことがわかる。

ただし都市の様相においては、この両者の関係は相反するものでなく、相補的だと考えるべきである。門前町は寺社というアトラクターの周りにできた場的な街であるが、「ここから門前町に入った」と感じられたとき、その「ここ」は容器の境界にもなっている。

アトラクターはその周縁との間に方向性をつくり出す。静的に見える都市も、アトラクターの作用により様相としてはベクトル場を形成していることになる。

6.4.5 諸感覚のはたらき

人間は視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といった諸感覚によって世界を知覚する。この諸感覚の使い方もわれわれに対して身体的フレームを与えていると考えられる。

(1) 諸感覚の関係

都市の様相把握における諸感覚の間にあるヒエラルキーは、様相因子の一覧表やその占有率のバランスを見れば明らかである（表5-7）。様相因子は大半が視覚に依存するものであり、次に聴覚、触覚、嗅覚が続き、味覚は一覧表に登場すらない。

視覚は人間の感覚の中でも特にすぐれたものであるが、犬にとっては視覚よりも嗅覚が大事なように、身体的フレームは動物の種によって異なってくる。また人間でも会話のときには聴覚、食事のときには味覚といったように、視覚以外が重要性を増す場面も多々ある。

さてこれらの諸感覚は、別々にはたらくのではなく互いに連動している（表6-41）。

表6-41 諸感覚の連動を示す記録〈記録数:不可算〉¹⁷

被	R	種	始	終	表現	A	G
107	I	☆	570		「カーン、カーン…」建設途中の現場が丸見え《右》	4	5
212	II	}	0	22	店が開いててにぎやか	2	1
212	II	}	22	72	店がしまっていて静か	2	1
206	II	☆	3,368		子供の声がかきこえ、子供と出会う	3	1
314	III	—	1,236		川のにおい／左にきれいな山／右は水にうつるたても	4	1
302	III	—	2,744		林のにおい、ひんやり感がある	5	1

視覚と聴覚、嗅覚、触覚などが同時にはたらき、全体的な様相が把握されている。諸感覚は相互に補完し合い、強め合うはたらきがあると考えられる。

(2) 長期的フレームを介した諸感覚の連動

この諸感覚の連動という点で、表6-42のような興味深い事例が見られた。

表6-42 諸感覚の長期的フレームを介した連動を示す記録〈記録数:22〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
224	II	}	1,866	1,956	緑が見えてすずしい	2	2
208	II	—	1,870		横に見える木が涼しげ	3	2
302	III	—	2,744		林のにおい、ひんやり感がある	5	1
101	I	☆	2,002		高瀬川、水が涼しい気持ちにさせる	4	5
206	II	☆	3,602		川があり、涼しいかんじ	3	1
208	II	—	3,604		川が見えただけで涼しげに	3	2
312	III	☆	3,654		水の音がきこえ、涼しいかんじ	4	2
306	III	}	2,200	2,530	セミの音が夏を感じさせる	4	1
306	III	}	2,538	2,706	セミの声と小鳥の鳴き声が絶妙のハーモニー「夏」だな～！！	4	1
205	II	☆	1,576		車のせいでより暑さを感じる	2	3
205	II	☆	1,820		車で暑さを感じられる	4	2

表は二重線でカテゴリー分けしており、上から順に「緑→涼しい」「川→涼しい」「蝉→夏」「車→暑い」となる。真夏の実験であったことが影響しているが、いずれも、見たり聞いたりしただけで、涼しさや季節感を感じている。この現象は、諸感覚器官同士が直接結合し補完し合っていると考えるべきではない。「川があると水温が低く、風も吹くため涼しい」「蝉は夏の風物詩」というデフォルト的な記憶に基づいているのである。

長期的フレームの仲介によってはじめて、川を見ただけで涼しいように感じるというような、ある種の飛躍が起こっている。ミンスキーの知識ネットワーク理論に照らすと、「川」と「涼しい」が結び

あっていると理解できる。フレームは単なる辞書的知識構造とは異なり、身体的な経験の積み重ねによってネットワークにショートカットが生じていると見ることができる。

-
- 1 ノルベルグ=シュルツ, C.: 実存・空間・建築, 加藤邦男訳, SD選書, 鹿島出版会, 1973, pp.90-91.
- 2 ユクスキュル, J.・クリサート, G.: 生物から見た世界, 日高敏隆・羽田節子訳, 岩波文庫, 2005, pp.29-32.
- 3 トゥアン, Y.: 空間の経験 身体から都市へ, 山本浩訳, ちくま学芸文庫, 1993, pp.68-84. 以下本項におけるトゥアンの言説はすべて同箇所を参照している。
- 4 辻幸夫編, 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修: 認知言語学への招待, シリーズ認知言語学入門 第1巻, 大修館書店, 2003, pp.81-82. ただしその写像の方向が必ず「空間→時間」であることが示すように、空間は時間に比べてわかりやすい体系を提供していると言える。
- 5 ホール, E.T.: かくれた次元, 日高敏隆・佐藤信行訳, みすず書房, 1970.
- 6 レルフ, E.: 場所の現象学, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳, ちくま学芸文庫, 1999, p.46.
- 7 厳密に言えば「大きな家が増える」などもこの種の表現であり、区別が非常に難しいため、不可算とした。
- 8 注釈3の文献, p.142.
- 9 ミンスキー, M.: 知識を表現するための枠組, コンピュータービジョンの心理 第6章, ウィンストン, P. H.編, 白井良明・杉原厚吉訳, 産業図書, 1979, pp.319-321.
- 10 保坂和志: 世界を肯定する哲学, ちくま新書, 2001, p.32.
- 11 芦原義信: 街並みの美学, 岩波書店, 1979, pp.3-12, 28-38, 247-248.
- 12 3. 1. 2 で述べた「サピアーウォーフ仮説」のような言語相対論的な見方に注意すべきである。アメリカ人へのヒアリングによると、英語では道幅と用いる動詞との対応関係は日本語ほど明確ではないという。
- 13 記録傾向間の峻別が難しいため、合計値を表記している。
- 14 具体的には、以下の手順で作成した。
- ①アトラクター性の認められる要素として、単体建物（駅、寺社、学校、その他単体建物）、区域（オフィス街、繁華街、観光地、伝統的街並み、地域名）、自然物（山、川）を抽出する
- ②そのものの中にある「中心性」と、それに向かう「方向性」の概念を用いる。単体建物はその中に入ることがないので原則「方向性」を適用し、区域と自然物は「中心性」「方向性」の両者を適用することとする
- ③様相表現と領域表現の中から、アトラクターを示すものを抽出する。その際の基準は
- (1) 領域表現の主要な言葉として用いられている場合、単体建物の場合「方向性」、区域と自然物の場合「中心性」とする
- (2) 領域表現で「～の周り」などと表現されている場合「方向性」とする
- (3) 様相表現として、「近い」「近づく」「遠ざかる」などの距離表現（関連：6. 4. 2）がされている場合「方向性」とする
- (4) 様相表現として、通り過ぎた後の不在の表現がされている場合「方向性」とする
- (5) 様相表現として、変遷表現（↑）によりそこへの接近が示されていた場合「方向性」とする
- (6) 様相表現として、「いかにも～」などの表現がなされていた場合、単体建物の場合「方向性」、区域や自然物の場合「中心性」とする
- なお、単に「～が見える」といった気づき（関連：6. 2. 1）を示すものや、地点表現（—）、範囲表現（{ }）で「～になる」と表現されているものについてはカウントしていない
- ④地図のルート上にプロットする。その地点として、地点表現（—）、特異表現（☆）の場合はその記録位置を、変遷表現（↑）、範囲表現（{ }）、領域表現の場合は始点と終点との中点を用いる
- ⑤アトラクターの実際の位置を地図上に表現し、「方向性」の記録についてはプロット地点からそこへ向かう矢印を描く
- ⑥「いかにも型」「普通型」のデフォルト性表現については、これらを区別して別途プロットする。なお「いかにも型」としては「The」「完全に」「まさしく」などの他、「京都」「とても京都らしい」など、らしさを強調したものも採用し、「普通型」としては「一般」「どこにでもある」「見慣れた」「特徴がない」などを採用した。また「いかにも観光客が多い」「地面が普通のアスファルトじゃなくなる」のような空間全体を対象としない表現は除いた
- 15 この図は図6-17を単純化したものである。その際ほぼ同じ範囲を指すものは統合し、また図6-17では単体建物として扱ったルートⅠの「2つの駅」、ルートⅡの「同志社大学」は、実際は領域的に捉えられていたためそのように修正している。
- 16 原広司: 空間の文法「場(1)―基本概念」, GA JAPAN, Vol.27, A.D.A. EDITA Tokyo, 1997, pp.134-139.
- 17 諸感覚の連動はかなり複雑に起こっている。たとえば「車が多い」「賑やか」などの記録に視覚と聴覚の両方が使われていると考えられるが、その正確な判別は難しい。そのためここでは記録数を不可算としている。

6.5 フレームの志向性

志向性の概念も身体と同様、現象学に由来する（2.1.3参照）。人間はただ世界を受動的に受け入れるだけではなく、世界にはたらきかける意志をもつ。ミンスキーは、フレームが単なる知識体系ではなくそこに使い方も埋め込まれているものだと述べている（6.1.1参照）。志向性はこのフレームの組織化の仕方、あるいはその操作方法に相当すると考えることができる。一般に価値観や性格と呼ばれる概念と関係し、われわれがいかに様相を把握するかという方向づけをしている。

歩くときにも人間は、常に自らの志向性により価値判断をしており、世界に対する態度を示している。様相・領域表現や領域評価など、被験者の記した記録は志向性のあらわれだと考えられる。ここでは、志向性が記録に明確にあらわれている例を分析する。

6.5.1 志向性の明確な表現

(1) 表現のスタイル

5.1.4でも考察したように、被験者には様相把握の仕方に大きなばらつきがあった。一つひとつの言葉を見ても、非常に極端な表現スタイルをもった被験者が散見された。

表6-43 被験者210の特徴的記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
210	II	—	494		合理主義的／くちゃっ／プレファブ。／白い	2	1
		☆	556		ふとんほす、皆	2	1
		領	804	856	くちゃっとした感じ	3	1
		}	856	974	東京物語／ヘリコプター／しずか／青	4	2
		—	974		町、人、生きている、いつもどおりふつうに	4	1
		↑	1,186	1,290	現実にひきもどされるのか	4	1
		—	1,290		しかしなかなか平成にならない	4	1
		☆	1,334		20世紀の夢／管理	4	1
		—	1,560		ビルビル車どうろ	1	2
		領	1,728	1,762	穴	3	1
		—	1,728		やっと人間にもどれる／おうちだ	3	1
		領	1,762	2,012	村落	5	1
		—	2,228		むこうからゲニウスがやってくる	3	1
		☆	2,462		気をかんじる	3	1
		—	2,472		みんなににみまもられて生きている	4	1
		領	2,472	2,744	はれ	4	1
		—	2,490		むにゆつとのみこまれない	4	1
		—	2,548		はれ	4	1
		—	2,612		宗教(神道)	4	1
		☆	2,662		いい右がきた	4	1
		領	2,890	3,034	時代	3	1
		☆	3,022		ポストモダン／エロイ女の子がいそう	3	1
		領	3,034	3,064	グローバリゼーション	1	4
		領	3,064	3,334	ちゃんと地に足ついて生きている	5	1
		☆	3,186		長屋／愛／おとうちゃん	5	1
		領	3,334	3,598	たすけあって生きている	4	1

被験者210は、とにかく感じたことを短い言葉で記録している（表6-43）。その書き方もまるで書き殴るかのようである（図6-20）。様相を解釈し、しっかりと組織化することはせずに、なるべく生身のまま記録しているように思われる。シュルレアリスムの自動記述に近い。表6-43は、特に理解の難しい表現を抽出したものである。

次に被験者309は多くの批判的表現を記録した（表6-44）。

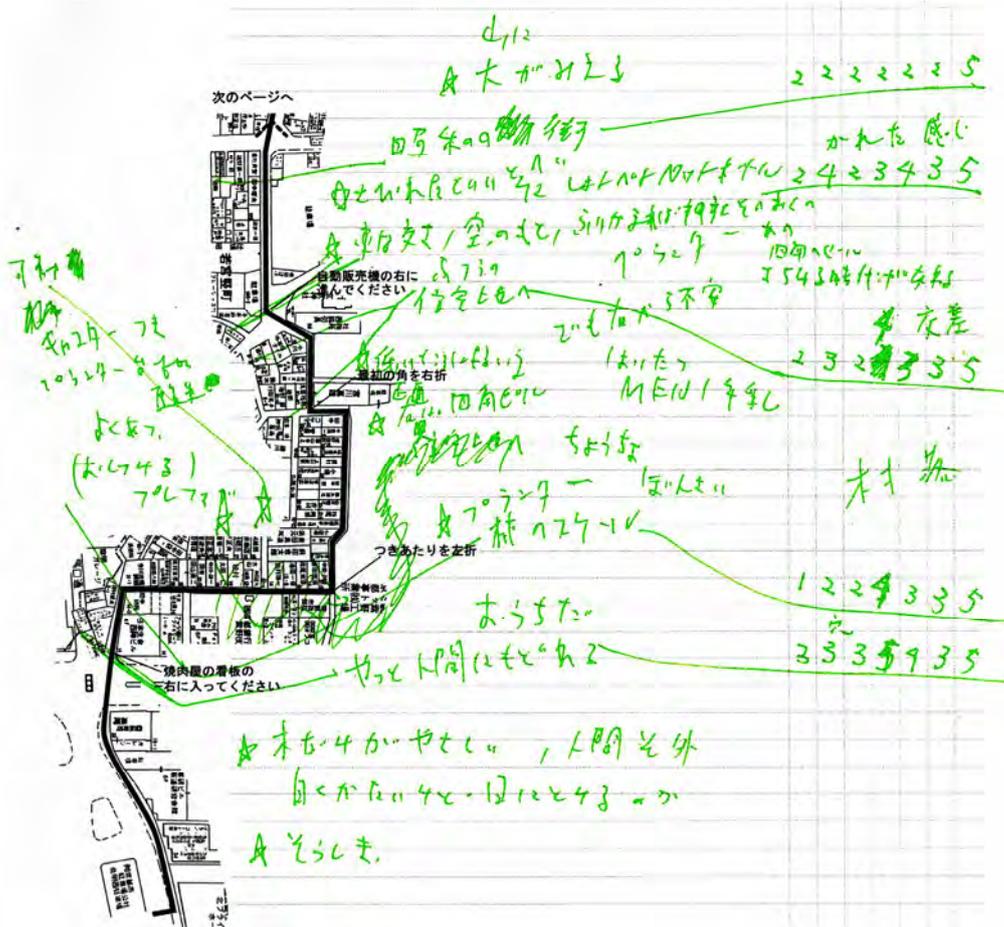


図6-20 被験者210の記録例

表6-44 被験者309の批判的な記録

被	R	種	始	終	表現	A	G	
309	III	}	40	100	右手は高級そうな住宅があるのに左手はじやりのみの駐車場があつてショボイカンジ	4	4	
			☆	452	ショボイ《左》	2	1	
			☆	458	ショボイ《右》	2	1	
			—	496	かまびすしい(バス通り)	4	1	
			☆	568	赤がうるさい。《右》	4	1	
			☆	676	露天なのがづらい。奥にビニールハウスの骨組み。《左》	4	1	
			☆	802	フェンスがイヤ《左》	4	1	
			☆	910	フェンスがイヤ《左》	4	1	
			☆	938	ショボイ《左》	4	1	
			}	944	1,036	安っぽい、ハウスメーカー／うるさい。	1	4
			}	1,036	1,182	そして車輛がうるさい。／混トンとして、よくわからん	2	3
			☆	1,240		わけわからん。やかましい。《右》	2	3
			}	1,244	1,340	「景観に配慮してます」感がある。	5	3
			}	1,510	1,602	商売っ気がすごい	2	5
			☆	1,596		ひばりがキモイ。《左》	2	5
			☆	1,674		景観に配慮している感はあるが、実際にはコワシている(?)、ガンバってるけど、イタイ《右》	2	5
			☆	1,760		ふと、住宅と商店のゴチャゴチャした町並みが見えるのがヘコム。あと、何かの高架が見えた。《右》	2	5
			☆	2,122		外壁がちょっと…ヒク。《左》	1	4
			☆	2,172		スケールアウトしている。《右》	1	4
			☆	2,228		ういてる《左》	4	1
☆	2,370		ハウスメーカー製の家がういてみえる。《右》	4	1			
☆	2,422		白い《屏風のようなスケッチ》がういてる。《左》	4	1			

☆	2,498		看板とかの色を何とかしてほしい。《左》	4	1
☆	2,844		ういてる。《左》	3	2
☆	2,960		集住が見えるのがイヤ。←ういてる／あと白いイスも。	5	4
☆	3,112		畑の向こうの家の塀がういてる。変。《右》	5	4
☆	3,880		デザインを変えるべきだと思う。	5	2
☆	3,954		街灯が一本だけ。ういてる(デザインも、存在も)《右》	4	4
☆	4,010		「京都一周トレイル」ういてるってか田舎くさい。	4	4
☆	4,148		松の木が一本。ういてみえる《右》	2	2

この被験者は記録密度自体が高いが、その中でも批判的表現が特に目立つ。ただしそのほとんどが特異表現であり、また「ういてる」という言葉が多いことから、全体の統一性を重視し、それにそぐわない要素をピックアップして批判する見方をしている。

この他にも、領域表現をすべて建物機能で行なう被験者224、おどけて報告するような口調が目立つ被験者107、地域らしさについて考えながら歩く被験者211などのような例が見られた。これらの特徴的被験者は、各々独特の志向性をフレームにをもち合わせていると考えられる。

(2) 歩くうちに生じる志向性

ただしこのような現象の要因を、被験者がもともと持っていた志向性だけに帰すべきではない。一度記した記録内容が持続される現象も観察されたからである。

表6-45 被験者108の自転車に関する記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
108	I	—	188		道にたくさんの自転車	1	3
		}	406	588	自転車が道にとまっている(多くはない)	1	3
		}	600	720	自転車が道にとまってる	1	3
		}	720	870	自転車がたくさんとまっている	1	3
		}	874	930	人が多い、自転車も多い	1	3
		}	1,008	1,274	バスがうるさい、タクシーがとまっている、自転車が多い	2	3
		}	1,308	1,330	たくさんの自てん車	2	3
		}	1,446	1,472	たくさんのじてん車《左》	2	3
		}	1,484	1,508	たくさんの自転車《右》	2	3
		}	1,580	1,608	自転車が多い	1	5
		}	1,616	1,660	自転車、タクシーが多い	1	5

被験者108は、ルートIのスタートから1,700m付近まで、ずっと自転車について記録している(表6-45)。一度気になりはじめるとしばらく気になったまま持続する。もちろん、都市(環世界)に実際に自転車が多いことも条件となっているが、その実際の量とフレームの作用とが一体にならないと起こらない。歩くうちに生じた志向性だと考えられる。

表6-46 被験者212の足跡の形に関する記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
212	II	☆	2,300		小さい路地に《足跡の形のスケッチ》こういうのがある／通学路??	2	1
		☆	3,118		《足跡の形のスケッチ》←通学路のマーク《左》	2	1
		☆	3,168		《足跡の形のスケッチ》←通学路のマーク《左》	2	1
		☆	3,206		《足跡の形のスケッチ》《左》	2	1
		☆	3,248		《足跡の形のスケッチ》《左》	2	1
		☆	3,330		《足跡の形のスケッチ》《左》	2	1

交差する道に描かれた足跡の形(写真6-3)について、被験者212は執拗に記録し続けた(表6-46、図6-21)。この足跡の形について記録した被験者は他にいなかった。この被験者はささやかな発見に喜びを覚え、以降それを注意して捜そうという気分になったのではないか。この態度がフレームにお

いて活性化し続けている。

このような持続は多くの被験者で見られた現象である。そのうち顕著なものをプロットしたのが、図6-22である¹。記録の対象となった事象は、空間の広さや時代といった全体的なことから、足跡の形や自動販売機など部分的でマニアックなものまで多岐に渡る。

フレームでの活性状態の持続について、言語学では一般に「確認バイアス」(confirmation bias) という用語で議論されている²。自分のフレームに合う部分だけを選択的に情報として取り込みそれ以外の部分は黙殺したり、あるいは状況をフレームに合うよう歪めて解釈したりするような、いわゆる固定観念と呼ばれる現象である。フレームの利用は多かれ少なかれ確認バイアス的であり、ここで紹介した例はその程度の甚だしいものである。

確認バイアスの対象がまた見つければ、その活性状態はより強められることとなる。ナイサーの知覚循環の図式(図6-6)でいうと、循環が回れば回るほどフレームは強化される。たとえば被験者314は、山や緑への活性状態がルート全体を通じて続いている。

しかし図6-22を見ると、しばらく見つからなかったのか、他のものに興味が移ったのか、それとも単に飽きたのか、途中でぱったりと途切れるプロットも多い。たとえば被験者111の建物名や店舗名の記録は河原町通を境に途絶える。それ以降にもなじみのある店舗名があるにもかかわらず、である。突如の活性化やその持続、飽きといった気まぐれな出来事もまた、様相把握のメカニズムの一つである。

なお(1)で述べた歩く前の志向性と(2)の歩くうちに生まれる志向性は、連続的なものと考えるべきである。フレームの長期的作用と短期的作用にも対応する。ここでは明らかに他の被験者と異なるような志向性を(1)として、どちらかといえば環世界の在り方に依存するであろう志向性を(2)として便宜的に区別したまでである。

6.5.2 フレームにおける願望

志向性は、世界に対する自らの態度を越え、世界にはたらきかける願望にもつながる。記録の中に見られたのは大きく、行動への願望とデザインへの願望であった。

(1) 行動への願望

表6-47 行動への願望を示す記録(記録数:16)

被	R	種	始	終	表現	A	G
117	I	一	428		工事現場とかで急に 急ぎ なくなった	4	3
213	II	☆	980		茶道具・問屋「宮帯」に 入り たい《右》	3	1
215	II	}	1,042	1,202	門の奥へ 入り たい。《門のスケッチ》	5	1
213	II	☆	2,404		急に小さな通りがあり、 入 って み たい気がした	2	1
213	II	領	3,042	3,544	かんせいな通り、 住 み み たい	4	1
210	II	☆	3,294		右、独特の昭和初期の家はたちならび領域をなす。ぼくはそこに す み み たい	5	1
212	II	☆	3,820		かき氷、 食 べ み たいなあ《右》	4	1
306	III	☆	560		やき鳥屋 源、つい 立 ち 寄 って しま いたくなるロケーションだっ	4	1



図6-21 被験者212の一連の記録



写真6-3 足跡の形のサイン

					た		
321	Ⅲ	☆	558		家と水路のすき間、歩きたい	1	1
325	Ⅲ	}	1,282	1,354	川幅広く、深呼吸したくなるかんじ。	5	1

表6-47の記録は、被験者が世界にはたらきかけ、世界における自らの在り方を変化させる意志を表わしている。興味深いのは、16の記録のうち実に12までが、路地や建物の中に「入りたい」という内容であったことである。われわれの内への希求のあらわれである。

(2)デザインへの願望

被験者たちの記録の中には、都市や建物のデザインに触れるものが多かった。肯定的な表現（記録数40）よりも、先に挙げた被験者309に代表されるように批判する言葉の方が多かった（表6-48）。

表6-48 デザインを批判する記録〈記録数:102〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
117	I	☆	200		スケールでかすぎ《左》	2	3
111	I	}	626	680	でも北にマンション(でかい)ありすぎて暗い	3	5
112	I	—	730		かんぱんがやたら多く、歩道に圧迫感がある	3	3
114	I	}	1,614	1,804	「正直そのファサードデザインどうなん?」という建物が多い。	1	3
107	I	☆	2,354		パチンコ屋はまったく空気を読めていない存在、違和感丸出し(音も見たため)《右》	5	5
108	I	☆	2,388		洋風のステキなたてものがやねのせいでみえない《右》	4	5
216	Ⅱ	—	1,220		駐車場があつて少し残念な感じ	5	1
221	Ⅱ	—	1,390		この辺りの建物はケツばっか見せてやがる	1	1
223	Ⅱ	—	1,974		右手に、京都にはありえない大きさのマンションが見える	5	1
224	Ⅱ	—	2,000		赤いマンションが見えて景観的に? 《右》	2	2
204	Ⅱ	☆	3,516		趣味の悪い色の家×2	1	1
310	Ⅲ	☆	430		この地域にミスマッチなアルミのシャッター《右》	3	1
308	Ⅲ	☆	1,240		オルゴール館うるさい	3	5
321	Ⅲ	☆	1,240		オルゴールの音大きすぎ	4	5
319	Ⅲ	☆	1,604		美空ひばり館の看板、景観にマッチしていない	4	4
309	Ⅲ	☆	3,456		自治会のテントを何とかしてほしい。《左》	5	3
308	Ⅲ	}	3,808	3,878	陸橋が見えちゃう	5	2

特に、スケールや素材などによって周囲になじまない要素への批判が目立った。たとえばルートⅡの2,000m付近のマンション（写真6-4）は、細い路地のような道を歩いているときに向こうに見えるだけであるが、それでもその大きさから多くの批判を受けている。

このような批判については、フレームに割り当てられているデフォルト値に「普通こういうものだ」ということその他、「こうあるべきだ」という願望が反映されているというように理解できる。その願望と現実とのずれが批判として噴出する。ましてやルートが通っているのは京都である。統一感をもった建物が並ぶ落ち着いた街であるべき、という理想が強いだろう。

ただ被験者の多くが建築を学ぶ学生だったことも影響している。デザインを学び、実践する中で、街を歩く際にもデザイン志向が発揮されているのだ。

この強いデザイン志向は、デザイン主体の意図の読み取りにまで至っている（表6-49）。



写真6-4 路地の奥に見えるマンション

表6-49 デザイン意図を読み取った記録〈記録数:58〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
119	I	—	164		見た目を意識しているのかなと思う店がふえる。“京都”っぽい	2	1

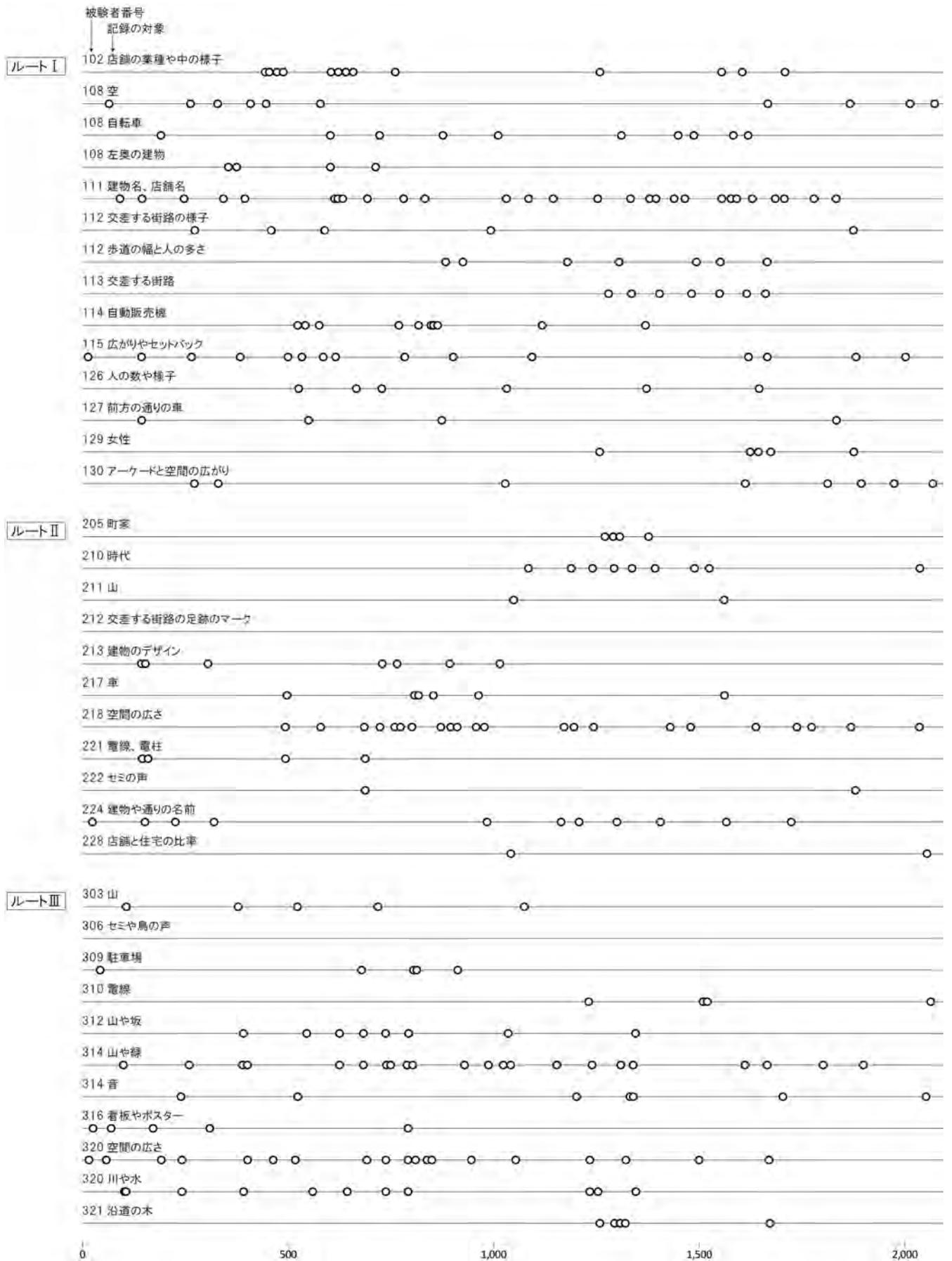
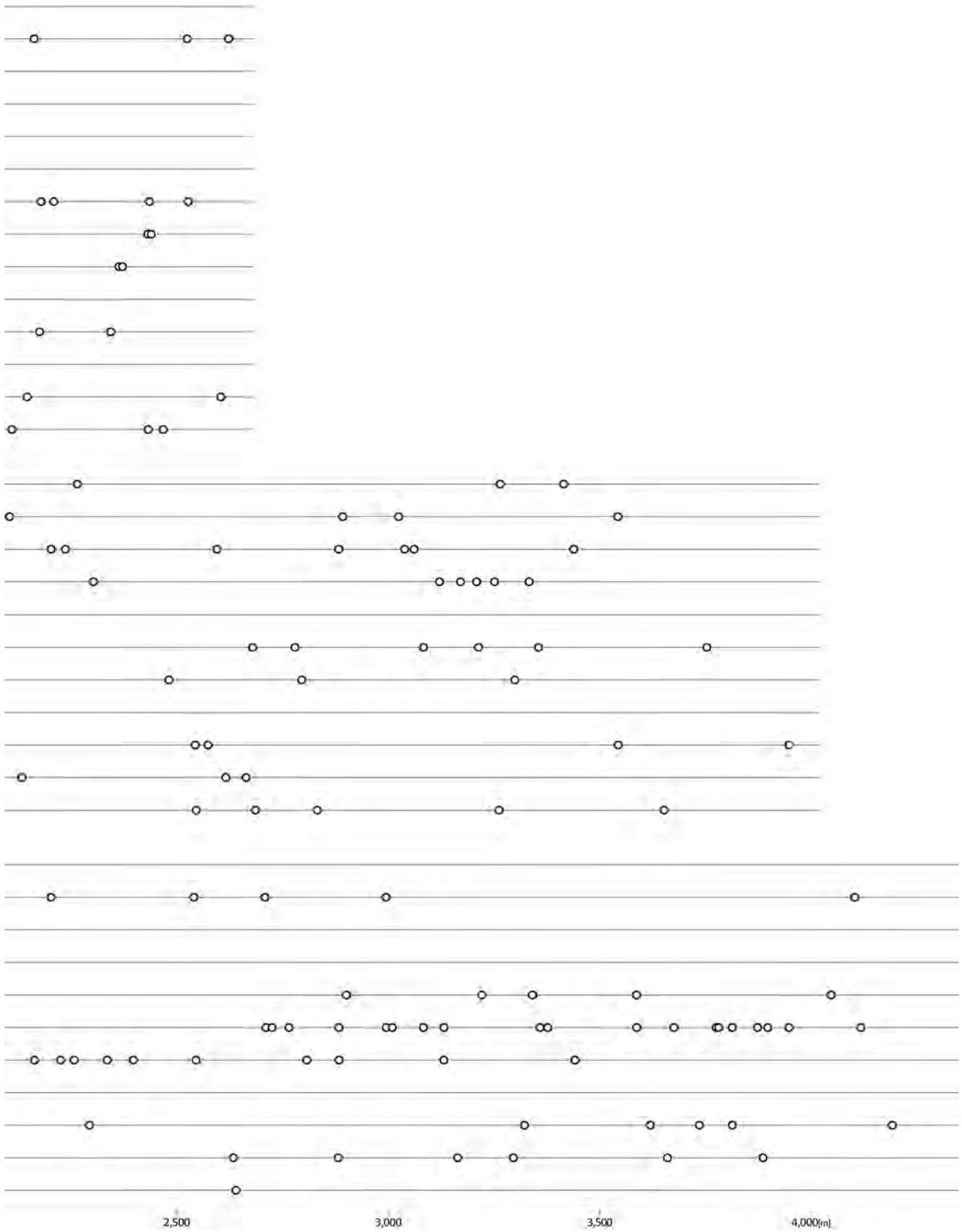


図6-22 持続した



記録のプロット

113	I	☆	208		表向きが日本的な建物《右》	2	3
106	I	☆	638		このあたり少し昔のままの町家を残そうとしている？／予想 きものの四君子が影響しているのでは？	3	2
101	I	☆	700		古い建物やそれをマネした建物がいくつかある	3	4
128	I	—	2,168		橋をわたってから「京都市らしさ」売りの店多い←祇園のアーケ ードも。	5	2
211	II	}	490	682	このあたり、色彩制限があるのか？白、灰ばかり	1	1
216	II	☆	1,738		敷地形状による異形の建築	5	1
204	II	☆	2,572		木造に模した病院	4	1
208	II	—	3,072		古い家とそれにあわせるように建った新しい家が並ぶ	3	2
309	III	}	1,244	1,340	「景観に配慮してます」感がある。	5	3
323	III	—	1,496		商店、新しい素材、うそくさい	2	5
323	III	領	1,496	1,724	観光客目あて、表面のみのデザイン	2	5
312	III	領	3,432	4,044	計画されたような京都のまちなみ	4	2
302	III	—	3,442		つくられた感	5	1
316	III	}	3,876	4,066	(自然を意識させるような町の風景にどこかウソくささを感じる) —これでどうやって言われてるみたいな気がしたので	5	1

やはり統一性に対する理想が強くあり、「統一感について配慮しているのだろう」という意図を読み取る被験者が多い。色彩制限や敷地形状のデザインへの影響を推論しているものもある。

興味深いのは、嵐山の商店街（AⅢ-6）と鳥居本（AⅢ-13）に対してともに「うそくさい」という表現が多数使われていることである。嵐山の商店街は確かに和風建築を模した新しい建物が散見されるが、鳥居本の方は実際に伝統的建築物が多い。ただし1989年の伝統的建造物群保存地区の指定以降に建物の修復や路面の整備が進み、新築の建物にもデザインの規制がなされている。被験者たちがよしとするのはこうした整備された美しさよりも、使いならされた美しさ（AⅡ-4の小川通など）のようである。この本物性（authenticity）は興味深い研究テーマである。

このようなあるべきデザインへの願望は、われわれが何かをデザインする際にもはたらいてくる。様相の把握とデザインには、ともにフレームという同一の機構がはたらいていると考えるべきである。

6.5.3 可能世界の志向

これまででは主に、現実世界に強く依拠した様相のあらわれ方を扱った。ただし、フレームの中身は一種の可能世界である。われわれは可能世界と現実世界との重ね合わせの中で、様相を把握しているのであった。そしてわれわれは自らの意志により、可能世界へ自由に旅をすることができ、そのことが様相をより豊穡なものとしてくれる。本小節では可能的な時間・空間・行動が記録へ表象している例を挙げる。

(1) 可能的時間

① 可能的時間のシミュレーション

表6-50 可能的時間についての記録〈記録数:10〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
116	I	—	754		着物屋さんの前に商品が並べてある、ここで立ち止まって見 てたら通行のジャマになりそう《その様子の平面図スケッチ》	1	3
212	II	—	3,956		もみじの木(秋きれいだらうなあ)	5	1
307	III	}	1,358	1,490	夕日がきれいそう	4	5
307	III	}	2,530	2,716	寺の内はもみじが多くて紅葉がきれいそう	4	1
304	III	}	2,752	2,872	夜はこわそう	5	1
315	III	領	2,790	2,882	深い森、夜怖そう	3	1
322	III	—	2,830		右手に墓、夜は絶対にこわい	3	1
324	III	☆	2,866		墓地、この道は夜通るとすごく怖いと思う	5	1
309	III	—	4,080		人も車もすくない。夜は一人で歩くのは危いかも。	2	2

表6-50の表現は、現在ではない時間についてシミュレーションをしたものである。思い描く可能世界の時間を自由に動かしている。しかしその移動は、森や墓は夜怖いという表現が多く、被験者に見られるように、空間とも対応した共有性の高いフレームの存在が示唆されている。

②小川通における表現

時間軸の移動に関して興味深いのは、小川通（AⅡ-4前後）のシーケンスである（表6-51、写真6-5）。

表6-51 小川通前後の時間表現を用いた記録〈記録数:10〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
214	Ⅱ	領	934	1,032	時代をさかのぼるようなシーケンス	4	1
217	Ⅱ	領	1,064	1,235	静かな落ち着いた雰囲気。昔の京都は、こんな感じ？	5	5
227	Ⅱ	一	1,176		昔にタイムスリップしてみたい	5	1
210	Ⅱ	}	1,186	1,290	昭和	4	1
215	Ⅱ	一	1,202		ふつうの住宅街にもどっていく。	3	1
222	Ⅱ	領	1,212	1,558	ここにきてもう一度普通の住宅街	2	2
222	Ⅱ	一	1,212		現代に戻ってきた！	2	2
210	Ⅱ	一	1,290		しかしなかなか平成にならない	4	1
213	Ⅱ	一	1,296		静かな落ちついた町なみから出、現実の町に戻った感じ	5	1
214	Ⅱ	領	1,354	1,570	現代に戻っていくようなシーケンス	3	1

伝統的街並みにさしかかる前には時間表現はほぼ見られないが、その街並みに入ると「昔にタイムスリップしてみたい」と記され、そしてその街並みから離れるときには「現代に戻る」という表現が目立つ（表6-51ではこの両者を二重線で区切っている）。空間の移動が時間の移動により表現されている。

先に挙げたような「夜」や「秋」へのイメージはシミュレーションの面が強かったのに対し、これらの時代の表現はどちらかというともタフオリカルな側面がある。メタファー（metaphor）とは未知の概念を既知の概念で説明しようとする試みであるが、過去のある時代がもっているイメージを既知概念として利用することで、現在の様相を説明している。



寺之内通(AⅡ-3後半)



小川通(AⅡ-4)



小川通(EⅡ-4)

写真6-5 「時代を遡り、また現代に戻る」と表現される小川通のシーケンス

③都市の変容の不可逆的進行

都市の変容をイメージした記録として、表6-52のような表現が目立つ。

表6-52 「残る」という言葉を用いた記録〈記録数:10〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
112	I	領	0	730	昔ながらの風景の少しのこる静かな中心街	2	3
129	I	領	88	750	大きなビルの合間に昔ながらの店が残るエリア	3	2
103	I	☆	270		とりのこされた町屋	2	4
112	I	}	330	456	昔の町なみが少しだけ残っている	2	3

106	I	☆	456		ときおり小さな通りをのぞくと、パッと見はごちゃごちゃだが昔ながらの町家のスケール感だけが残っているのかなと思う	3	2
215	II	☆	1,474		お墓だ！！墓のすぐ隣に家 墓の向こうにビル、 <u>とり残された</u> ような墓地《左》	3	1
303	III	}	3,894	4,018	かやぶき屋根、昔の感じが残っている	5	1

昔のものが「ある」だけではなく「残っている」という表現である。新旧のものが混じり合う都市も、時間的方向としては古いものがなくなり、新しいものができるという向きに定まらざるをえない。この不可逆性がフレームとしてはたらいだ結果、「残っている」という表現になる。実際に古い建物が多い傾向のあるルートII、ルートIIIに比べ、あまり残っていないルートIで記録が多い点も興味深い。

(2) 可能的空間

6.2.2ではルート内のさまざまなスケールで類似や差異が語られることについて述べた。このような記録の参照先となるのは、ルート内の地点だけではない(表6-53)。

表6-53 ルート外の場所を参照した記録〈記録数:22〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
126	I	}	202	262	田舎の商店街のような雰囲気	3	2
116	I	☆	1,024		銀行の建物の角のデザインが三條通りによくあるのに似ている	3	4
101	I	}	2,152	2,618	伝統的な(古い)商店街(嵐山のみやげ物屋街を上品にした感じ)	5	4
226	II	☆	1,576		道の真ん中に車(駐車場)、 <u>大阪市内(長堀通)</u> を連想《左》	3	3
210	II	—	3,598		フランス的	5	2
226	II	—	3,600		東京の町中のような雰囲気(山がなければ)	3	3
210	II	☆	3,680		右にトル桂坂(数軒)	2	2
309	III	}	2,536	2,618	寺っぽい、 <u>相国寺らへん</u> もこんなカンジ。	4	4
302	III	—	3,582		ひだっぽいイメージ	5	3

ほとんどが「似ている」という表現となるが、これらは実際に似ているものとして同一視するよりも、メタファーによる表現を意図していると考えられる。時間軸の場合もそうであったが、今自分が定位している時間、空間から遠くへ飛ばすほどメタフォリカルとなるようだ。

(3) 可能的行動

表6-54 可能的行動についての記録〈記録数:合計29〉³

被	R	種	始	終	表現	A	G
118	I	—	1,554		服屋が多くて <u>ウィンドーショッピング</u> できる、たのしい	2	4
119	I	—	1,146		<u>買いもの</u> できそうになってくる。	5	1
119	I	—	1,240		貧乏学生には <u>物価が高</u> そうです。	5	1
218	II	領	278	490	少しスケール感さがる、 <u>人の住むまち</u> になってきた	4	5
209	II	—	1,560		<u>車のための道</u> になる	2	4
225	II	領	1,732	2,126	<u>住民以外</u> は入ってこなさそう	3	1
209	II	—	1,736		道がせまくなる/ <u>歩くための道</u> に	4	1
315	III	☆	246		<u>せんたくスポット</u> 《右》	5	1
307	III	領	1,100	1,246	<u>金持ちの観光客</u> が静かにごはんを食べるであろうエリア	4	1
313	III	領	1,724	1,990	<u>雰囲気</u> を味わう料亭エリア	4	5
306	III	}	3,436	3,576	<u>一見さんお断り</u> のオーラを感じる	5	1

表6-54の最初の三例は、ショッピングストリートである四条通において、自分が買い物をするという可能的行動を述べたものである。

ギブソンは、包囲光配列のアイディアに基づき「アフォーダンス」(affordance)という概念を提示した⁴。アフォーダンスとは、光の配列の中に宿されている不変の情報であり、動物に対して提供され

る、行動についての価値である。たとえばドアノブは握ることを、階段は降りることをアフォードする。四条通の例は、買い物のアフォードダンスの存在や不在を語っている。

表6-54の二重線より下は、自らを含む人間一般にとっての、あるいはそこに住む人など特定主体にとってのアフォードダンスを推論した意味合いの強いものであった。たとえば「せんとくスポット」は、街路から水路へと降りる小さな段（写真6-6）にアフォードダンスを見出した例である。実際に洗濯に用いられるかどうかはわからず、生活者の行動の推論である。このように、アフォードダンスの概念は他者の観念や推論のプロセスと関係している。



写真6-6 「せんとくスポット」と記された段

街路の歩行という行為は、空間的経路性によって比較的確固とした現実世界の軸を形成するが、それとは別に可能的な世界軸も存在している。それらはまるで、縦軸と横軸のように折り重なって様相の立ちあらわれる場をつくりあげている。その間の自由な移動を実現しているのもまた、フレームに備わった志向性である。

¹ その被験者の記録に占める割合や、同じ場所での他の被験者の記録、全被験者の総記録数などと照らして筆者が総合的に判断し、顕著な例と思われるもののみをピックアップしている。たとえば「家が大きくなる」「新しい家が増えた」などとたくさん記録している被験者がいても、「家」自体かなり汎用的に記録されている事象であるので、プロット対象とはしていない。また、様相表現だけを対象とし、その活性化したことに関する表現であれば順表現、逆表現などにかかわらずプロットした。地点としては地点表現（—）と特異表現（☆）は記録地点、変遷表現（↑）は中点、範囲表現（ } ）は始点を採用している。

² 辻幸夫編、池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修：認知言語学への招待，シリーズ認知言語学入門 第1巻，大修館書店，2003，p.87.

³ 自らのアフォードダンスと他者のアフォードダンスを峻別するのは難しいため、合計値を表記している。

⁴ ギブソン，J.J.：生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る，古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳，1985，pp.20, 137-157.

6.6 フレームの社会性

ここまでの分析では、フレームを基本的には個人的なものとして捉えつつ、その中に共有された仕組みを見出してきた。本節ではこのフレームの社会性について再考しておく。

6.6.1 個人的フレーム

フレームの社会性を論じる際に、まず個人のフレームについて考察する。記録の中には他者と共有度が低いと思われる属人的なフレームも見受けられた。もっとも顕著な例を表6-55に示す。

表6-55 被験者129の個人的な記憶に関する記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
129	I	☆	896		DIPLOMAXの思い出《右》	3	3
		☆	1,254		ヴァイトン、そういえば永山ゆう子は可愛かったです	2	5

これらの記録は、一見すると意味が理解できない。しかし被験者129へのヒアリングによると、一番目の記録は、そのとき右手に見えた建物でかつて被験者らが「Diploma x KYOTO」という卒業制作の展覧会を開いたことに由来する。二番目の記録は、その展覧会にゲストとして招いた建築家・永山祐子氏について、永山氏の設計した「LOUIS VUITTON 京都大丸店」を見て思い出したそうである。

表6-56 被験者106の東山や祇園についての記録

被	R	種	始	終	表現	A	G
106	I	—	460		このあたりから、向かいに東山が見えた／近くに東山が見えるだけで祇園を想い浮かべる	3	2
		—	1,018		あと、いつもは気にとめなかったが歩道から常に東山が見える。東山地域らしさを生む重要なファクターだと思う	3	5
		—	1,866		高い建物が消え、四条通り両側の店ポの連続性もこのあたりでなくなる／その分、正面の東山が強く意識される	3	5
		—	2,174		鴨川をすぎて雰囲気かわる／南座やちょうちんなど祇園らしさを演出するものはあるのだが、それだけではない祇園らしさが確かに存在しているのである／においもちがう	4	5
		領	2,174	2,434	the Gion	4	5
		—	2,434		祇園のなかでも落ちついた雰囲気になる／祇園甲部らしくなる	5	5
		領	2,434	2,684	the 祇園甲部	5	5

表6-56に示した被験者106は、遠くから祇園や東山に思いを馳せ、祇園らしさについて考察し、さらに祇園の中でもより格の高い「祇園甲部」を弁別している¹⁾。祇園エリアにおいて領域評価のGの値は5を示しており、さらに事後のヒアリングによると、被験者106は祇園の店舗でのアルバイトや、祇園の景観の調査をした経験があり、かなり祇園に精通しているそうである。このような知識や経験が、祇園に関する記録を繰り返させたものだと考えられる。

個人的記憶は、他者にとっては何でもない風景を意味づけられたものへと変貌させる²⁾。

6.6.2 社会的フレーム

(1) 今回の被験者に共有されたフレーム

社会的フレームを考える際に、記憶が集団に属するというアルヴァックスの説を採り入れると、その集団としてはさまざまな種類、規模のものがありうる。その中で、今回の実験の被験者に共有された顕著なフレームがあった。つまり被験者の多くを占める京都大学の建築学科の学生に特有とみられるフレームの作用である(表6-57)。

表6-57 今回の被験者に特有とみられるフレームに基づく記録〈記録数:73〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
216	II	☆	740		織陣《左》	2	2
210	II	☆	744		左にShin	1	2
203	II	☆	746		オリジンが見える《左》	5	1
209	II	☆	746		Shin TAKAMATSU 《左》	4	1
214	II	☆	750		織陣《左》	5	1
210	II	☆	804		左奥にShin	3	1
102	I	}	2,258	2,430	こっちのアーケードは、烏丸～河原町とちがって通り側に柱がある。キャンチじゃない。	5	5
216	II	☆	284		めっちゃ細い建築、幅2000くらい	4	5
212	II	☆	1,980		GLが低い《右》	1	1
216	II	—	2,440		神社の手前で少しキレイめのファサード	5	1

二重線より上はいずれも、京都大学の教授でもある建築家・高松伸氏の代表作「織陣」(写真6-7)が脇道に見えることを意味している。その下の「キャンチ」³「GL」⁴「ファサード」の用語や、長さをmm単位で表現することなども彼ら特有のフレームに強く依存する。デザインを志向したさまざまな言葉もこの作用であることについては、すでに述べた通りである。

なお今回の被験者には「日本人である」「京都在住である」「年齢が10代後半～20代前半である」などの共通項も存在し、これらの特性もまた他の集団とは違った様相把握を促していると考えられる。たとえば「烏丸らしい」「祇園らしい」といった地域性の指摘は京都在住者ならではのもので、また日本語で記録できるのは日本人だからである。こういったさまざまな集団の重なり合いが、一人ひとりの人間の社会的なフレームを規定している(図6-23)。そしてこのような集団に依存するフレームに、個人的な経験や志向性が重なって、個々人のフレームができていると考えることができる。



写真6-7 ルートIIから見える「織陣」

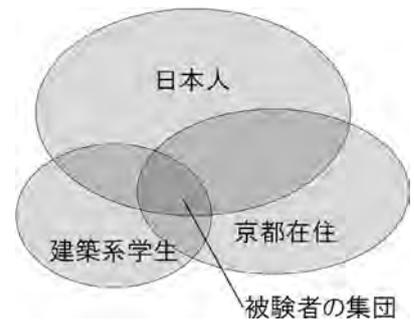


図6-23 社会的フレームのイメージ

(2) マスメディアによる社会的フレームの生成

表6-58 マスメディアに言及した記録〈記録数:16〉

被	R	種	始	終	表現	A	G
107	I	☆	2,378		いつもどおりバカみたいに人がならぶ、たぶん関西walkerでしょう《右》	5	5
216	II	☆	2,662		千と千尋の温泉みたい《左》	3	1
227	II	}	2,682	3,032	山一製麺所、ジブリアニメに出てきそう《左》	5	1
307	III	領	1,246	1,490	ガイドブックにでっかく扱われているエリア	4	5
309	III	}	1,340	1,510	北を見ると、よくパンフで見る景色がある。	5	5
302	III	☆	2,070		taiwa!! CMの! 《右》	3	2
314	III	領	2,992	3,438	テレビにでてきそうな山の近くの田舎	5	1
316	III	☆	3,532		ドラマの庄屋みたいに古めかしくもあり、でもこぎれい《右》	4	2
309	III	☆	3,896		写真でよくある景色が見える。	4	4

記録の中には、表6-58のようにテレビや書籍などのマスメディアを参照するものがあった。情報社会の現代では、マスメディアはわれわれの都市イメージに少なからず影響している。ルートIIIの渡月橋で「ガイドブック」「パンフ」の言葉があるように、マスメディアのつくるイメージは「いかにも型」表現やデフォルト的京都らしさの一因にもなっていると思われる。マスメディアは知識を共有できる手段であり、フレームを社会化させる一つの原動力である。

(3)「京都らしさ」の分析

フレームは集団において共有されるが、集団のメンバーが必ずしも同じフレームをもつわけではなく、共有されたフレームも変わりつつある。実験の中でそれがよくあらわれていたのが、「京都らしい」という言葉である。

京都は平安京の成立以来長きにわたって日本の都であり、天皇が東京に移った現代においても日本の中で一種独特な地位を有している。「京都らしさ」については、伊藤ていじらのまとめた研究³をはじめさまざまな文脈で論じられており、特に都市美の創造を主導する公共セクターにとっては大きな課題となっている。本研究でも領域評価指標の一つとして「京都らしさ」を採用し、また5.3.1では様相因子「[67] 京都らしさ」が場所性を語る上での基本レベルとなっていることを指摘している。

その評価値の動向を見ると、鴨川、祇園、八坂神社、小川通の伝統的街並み、建勲神社、金閣寺、嵐山、清涼寺、鳥居本といったアトラクターのある位置で高い値を示していることがわかる(図6-24)。つまり古来の風情を残す伝統的な街並みや立派な寺社、あるいはそれらと自然とが一体となった風景こそが、共有された「京都らしさ」だということが言える。メディアで報じられている京都らしさや、多くの日本人が抱くパブリックイメージとも合致するだろう。

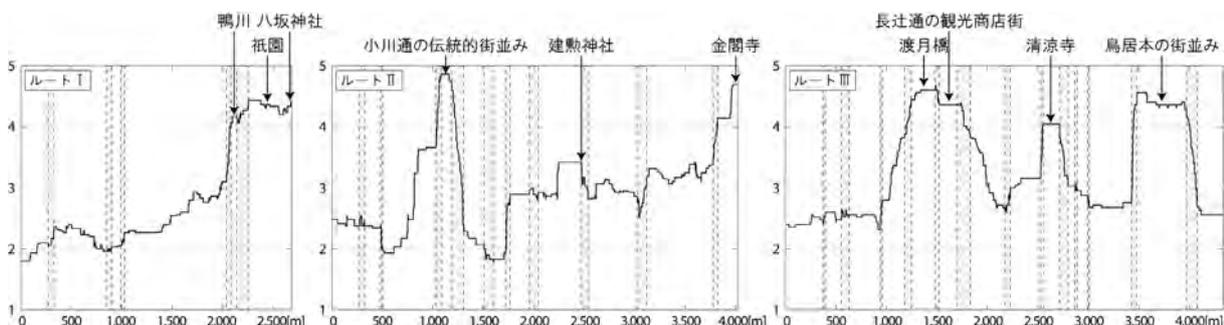


図6-24 「F: 京都らしさ」の領域評価グラフとアトラクターとの位置関係

しかし様相・領域表現をつぶさに見てゆくと、この逆とも思えるような現象がある。表6-59のような「注釈つき」の京都らしさの表現が見られるからだ。

表6-59 注釈付きの京都らしさの記録 (記録数:14)

被	R	種	始	終	表現	A	G
104	I	領	160	506	老舗とビルが混ざっていて、 <u>京都ならではの大通り沿い</u> 。	4	1
106	I	領	164	272	<u>雑多という意味では京都らしい</u> オフィス街	2	2
110	I	領	622	726	町家が少しだけ目立つ。これまではなかったと思う。 <u>新旧の建物が混ざり、いかにも京都</u> 。	3	4
107	I	領	870	1,484	<u>都市京都</u>	4	4
106	I	領	1,312	1,866	the <u>京都のはんかがい</u>	2	5
128	I	領	1,478	1,942	<u>ある意味京都なエリア(都会としての京都、人の集まる街としての京都のイメージにじっくりくる。)</u>	4	4
226	II	領	0	490	広い道の両側に <u>文化の町としての京都らしい</u> エリア	4	5
226	II	領	614	1,040	<u>今の京都らしい</u> エリア	4	3
217	II	}	850	974	寺あり、戸建住宅あり、町家あり、狭い道なのに車が多い、のいかにも <u>現代京都</u>	3	3
205	II	領	1,604	1,734	<u>最近の京都さのある町</u>	4	3
217	II	}	2,222	2,472	いかにも <u>現代の見慣れた京都</u> だなあ、という感じ	4	2
217	II	領	2,222	2,472	古い町家あり、マンションあり、の、いかにも <u>現代の京都</u> という感じ、まとまりのなさが特徴	4	2
308	III	一	1,506		土産物屋多い/観光客うざい/ <u>ある意味ものすごく京都っぽい</u>	3	5
315	III	領	1,546	1,924	観光地的、にぎやか、 <u>京都らしい(観光地という意味で)</u>	3	1

これらの記録位置と領域評価グラフとの関係を示すと、図6-25のようになる。

古い建物があるがゆえに、それが新しいものに建て替わってゆき、新旧入り混じる雑多な街並みができる。また京都が歴史都市であるがゆえに観光客が大挙して訪れる。このような現象もまた、被験者によって京都らしさとされたのである。

新旧入り混じるという意味での京都らしさに関しては、アトラクターがなく、領域評価値での京都らしさも低い部分に集まっている。「普通型」のデフォルト性表現も多い場所である(図6-17)。このような街並みが、現代京都の多くの部分を占めている。京都外の人からはイメージしづらい場所であり、京都に住むことで獲得されたフレームが作用していると考えられる。

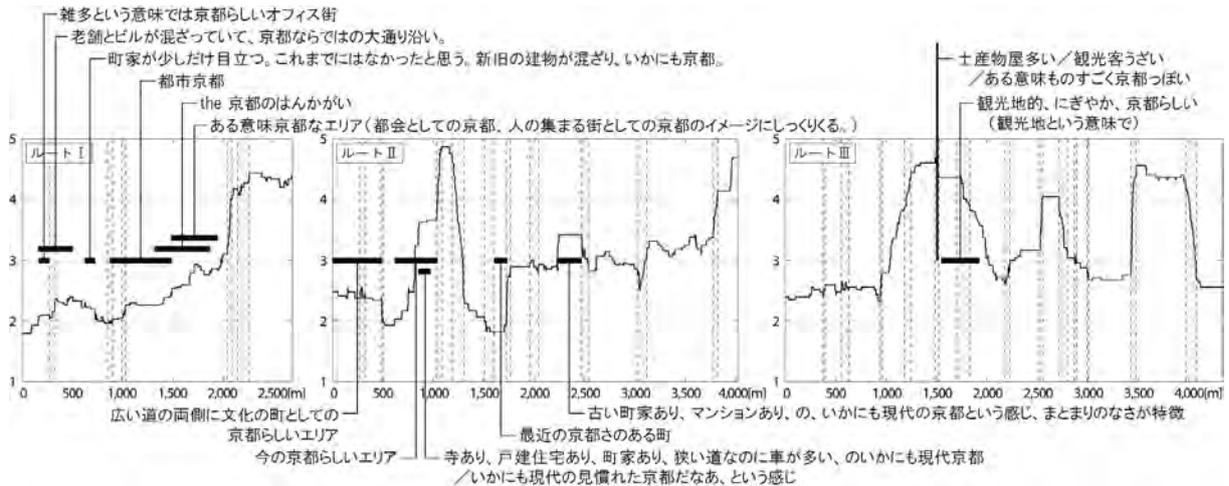


図6-25 「F:京都らしさ」の領域評価グラフと注釈付きの京都らしさ表現との位置関係

レイコフは「社会的なステレオタイプ」について考察している⁶。社会的ステレオタイプとは、たとえば「日本人は勤勉である」のようにカテゴリー全体を理解するために通俗的に用いられるイメージであるが、それが必ずしも正確でないため議論的になることが多く、時代によっても変化しやすいものとされる。注釈付きの京都らしさは、ステレオタイプの京都らしさに対する異議であり、京都らしさの変貌や多様化を示唆している。前掲の伊藤からも京都らしさが時代とともに変化してきており、これからも変化するであろうことを指摘している⁷。

社会的フレームはわれわれの日常生活においては、常識、世論、ムードや流行としてはたらき、社会の様相をつくりあげている。これは強固な構造であるように感じられるが、この「京都らしさ」の例に見るように、人々の間に相克が起り、少しずつ変わり続けてもいる。わずか10年前のテレビ映像を見てもファッションセンスがすでに古くさいことを感じるというのも、この現象である。またバブル崩壊や東日本大震災のような衝撃的な出来事はわれわれが信じてきた「神話」を一瞬のうちに瓦解させ、世に不安をもたらした。社会的なフレームはどれも安定的だと思われている一方で、常に変化する可能性をまとっている。

以上で本章の分析を終える。短期・長期のフレームという、知識構造としてのフレームのはたらきについて述べたのちに、身体に備わったフレーム、フレームの使い方という意味での志向性、そしてフレームの社会性について考察した。そこで見た個々の様相・領域表現はフレームという柔軟な仕組みによって支えられていることがわかったが、全体的な在り方としての様相もまた、フレームの複雑なはたらきのなかであらわれてくるのである。

また自由記述はデータとしては非常に悪構造で、その数も膨大なものであったが、フレーム概念を導入することでそれらの言葉の裏にある構造を深く読み解くことができた。様相の多面性に光を当てることができたと考えている。

ここで得られた知見については、第8章にてまとめを行なうものとする。

¹ 正確には、この被験者が領域分割した花見小路通から祇園甲部が始まるのではない。しかし祇園甲部という一般に祇園乙部に比べて格が高いものとされており、花見小路通を境により格が高くなったという意味で祇園甲部の語を使ったと考えれば納得できる。

² ただし、きわめて個人的な記憶だということが明らかな記録は、他にはほとんど見られなかった。被験者が、過去の記憶ではなくその場で感じたことを書くのが実験の趣旨だと考えたものだと思う。

³ 「キャンチレバー」(片持ち構造)の略。

⁴ 「Ground Level」(地盤面の高さ)の略。

⁵ 京都市：京都のデザイン原理，京都市計画局，1977。

⁶ レイコフ，G.：認知意味論 言語から見た人間の心，池上嘉彦・川上誓作他訳，紀伊國屋書店，1993，pp.100-108。レイコフは社会におけるさまざまなデフォルト的現象を、「社会的なステレオタイプ」の他、理想的な成員でカテゴリー全体を理解する「模範例」(例：野球選手におけるベーブ・ルース)、印象的であるという理由でカテゴリー全体を理解する「顕著な事例」(例：飛行機が1機墜落しただけで、その機種は全部危ないと考える)などに分類して論じている。

⁷ 注釈5の文献，pp.4-11。デザイン活動については、かつて京都における創作の誇りの源となっていた「王城の都市」という価値観が変更を迫られていると述べている。

第7章

時間的・空間的コンテキストを導入した 各ルートの総合分析

本章では、これまでの知見に加えて都市の時間的・空間的コンテキストを導入した上で、各ルートを詳細に分析する。その目的は以下の二点にある。

まず一点目は、本論文で得られた分析結果やモデルを具体的な空間にフィードバックして再検証し、モデルを展開することである。特にこれまで断片的に得られてきた知見を、ルート上においてシーケンシャルに理解することが可能である。

二点目は、面的な空間の広がり、ロングスパンの時間の流れの中で様相を理解することである。経路歩行実験で捉えられたのは指定したルート、現代という時代に限定された様相であった。これに対し空間的コンテキストを考慮することで、ルートの様相をよりマクロな視点から捉えることを可能にし、また特定の経路での考察を都市全体へと押し広げる。そして時間的コンテキストとはわれわれの先人たちが都市をつくりあげてきた歴史であり、これと現代において把握された様相とを照らし合わせることで、これまでの都市デザインがどのような様相を生み出してきたのかが明らかになる。それにより、これからのデザインに向けた知見を得ることも期待できる。

本章の構成は以下になる。まず7.1では京都のジェネラルな時間的・空間的コンテキストを概観し、各ルートの分析に対するマクロな視点を与える。7.2以降が各ルートの詳細分析になるが、その各節の最初に、ルート周辺のコンテキストを詳述する。次にエッジとエリアという分節ごとに総合的に分析し、最後にルート全体からの考察を行なう。これを3ルートについて繰り返す。

なおコンテキストには時間軸と空間軸があるが、各節での読み込みに際しては時間軸を基軸とし、時代ごとの空間の変遷を追うかたちをとる。また年代表記は西暦表示で統一する。

7.1 京都の時間的・空間的コンテキスト

ここではまず、京都全体¹のもっているコンテキスト—京都の都市史—を簡単に振り返る。その際大きく三つに時代を区分して述べる。最初は平安京グリッドプランが敷設されたのちに長い年月をかけて変容する段階、次に豊臣秀吉の都市改造と江戸の治世によって成熟する段階、そして最後が明治維新以降現在に至るまで近代化・拡大路線を走る段階である。なおAppendix-Dには、都市史の詳細を示す年表を掲載している。

7.1.1 平安京とその変遷

(1) 遷都

京都の繁栄の歴史は、794年の桓武天皇の平安京建設に始まる。遷都したばかりの長岡京をわずか10年余りで棄て、中国の都城建設にも用いられた風水や陰陽道に則った「四神相応」の地である当時の山背国が新都として選ばれた。水陸の交通の便、北に置かれる内裏の防御、南斜面の豊穡な土地という、実際的にも理にかなった立地である。船岡山を起点として都市の南北軸が定められ、ここに唐の都・長安に倣った、厳格なグリッドプランが敷設された² (図7-1)。

(2) 平面計画

都は正方位に配され、東西1,500丈(約4.5km)、

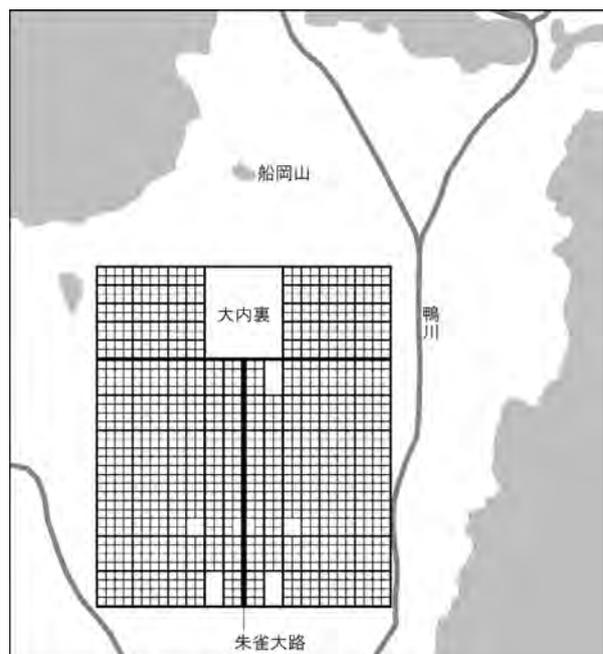


図7-1 平安京のマスタープラン(794年)
(矢守一彦：都市図の歴史 日本編，講談社，1984，p.185より作成)

南北1,751丈（約5.2km）の大きさをもつ³。天皇家の住まう大内裏は北にあって南面し、そこから朱雀大路が南へと延びて羅城門に達する。都市はこの朱雀大路を軸とした、東西対称の構造をもつこととなる。東寺と西寺、東市と西市などの都市施設も東西対称に配されている。

街区は坊条制⁴に従って分割され、一辺120mの「町」、それを32分割した「一戸主」などを単位に貴族や庶民に割り振られ、また街区は町ごとに高さ3~4mほどの築地塀で囲まれていた⁵。街路は最大の朱雀大路で28丈（約85m）、最小の小路でも4丈（約12m）の幅をもつ。朱雀大路は羅城門から大内裏に至るシンボルロードであり、大嘗祭などの祭礼の舞台となった。

(3)平安京の実際

しかしこの幾何学的計画は、必ずしもうまく機能したとは言えない。朱雀大路を筆頭に街路はオーバースケールで、また街区を囲う高い築地塀もあったため、街路は完全に「外」の空間になり、治安は悪化した。一辺120mの街区も使いづらいものであった。15m×30mのスケールをもつ一戸主は奥行きが深く、裏は菜園となっていた。交易が東西の市だけに制限されていたことから、各町に活気が溢れていたとは考えづらい。

(4)庶民による都市改造

このような計画上の欠陥に平安中期以降の支配体制の弱体化が重なったとき、庶民は自らの手で都市改造を始める（図7-2）。

①巷所化

まず広すぎる街路に対して進行した侵蝕、私有地化の動きが、「巷所化」である。巷所は主に菜園となり、やがては家屋がつくられるようになり、街路は狭められた。巷所は無税地であったことも、彼らの開発意欲を刺激した⁶。

②辻子の開発

正方形街区の中に新しい道を通す「辻子」もつくられた。従来の街路よりも狭い、幅員2mほどのものが中心である。形態としては街区を突き抜けるもの、袋地となるもの、あるいは二面から通されL字になるものもあったが、いずれにせよ土地の有効利用を促した。

③町概念の変容

これらと連動して、街区も変貌する。まず庶民の雇用を支えていた宮廷の力が弱まると多くの人は働き先を失い、庶民同士が互いを相手に商売をする自営業スタイルへの変更を迫られる。閉じた町のあり方はこうした文脈にそぐわなくなり、人々は築地塀を取り壊して多くの人の目に触れる街路に向かって開くという選択をしたのである⁷。街区単位のもつまりを指す「町」の概念は、やがて街路を挟んで向かい合う「両側町」へと変貌した⁸。

こうして、街区中心システムから街路中心システムへの切り替えが行なわれた。交差する二街路名に「上」「下」「東入」「西入」を付す京都独特の地名表記法も生まれ

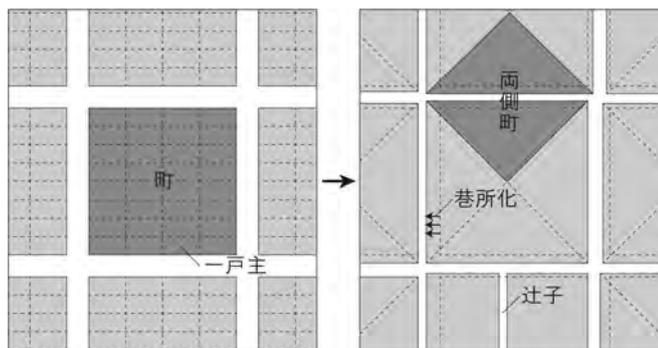


図7-2 平安京から中世京都への街区構造の変化

ている。狭い通りの両側に町家が立ち並ぶ京都の景観の原型は、このときに成立したと言える。

(5) 都市域の移動

平安中期以降には、マクロレベルでも京都は変容する。まず右京は低湿地であったために早々と衰退し、跡には田畑が広がっていた。朱雀大路や大内裏も荒廃する。一方の左京は高密度な居住が進められ、繁栄する。また白河上皇らの院政の拠点として白河地域が開発され、さらに平家による六波羅の武家邸宅群、後白河上皇による法住寺殿など、鴨東の大規模な開発も相次いだ。

重心の東への移動とともに、南北の棲み分けも進む。北の上京には平安京以来の公家衆と、平家以降の武家が居住し、室町幕府が「花の御所」を構えるとそれに拍車がかかる。一方の下京は町衆の領域。街路を中心とした商いの街が、三条～四条あたりの町小路（のちの新町通）を中心に形成された。そして七条大路や八条大路には、生産機能を担う工人町が発達した。

また室町時代には、7.3.1や7.4.1において詳しく述べるように、足利尊氏の天龍寺、足利義満の北山殿、足利義政の東山殿といったように郊外に政治・宗教拠点が次々とつくられていった。上京・下京を中心に京都の多核化が進められた時代なのである⁹⁾。

応仁の乱（1467～77年）によって京都が灰燼に帰すると、上京と下京の分離はより明確なものとなる（図7-3）。そして庶民はさらに結束を強める。上京と下京の市街地のそれぞれに「構」という防壁を設け、両側町を単位とする「町」、その上位単位の「町組」というコミュニティを組織し、自衛に努めたのである。

7.1.2 中世都市としての成熟

(1) 豊臣秀吉の都市改造

戦国の世で覇権を握った豊臣秀吉は、京都の大改造に乗り出す（図7-4）。

① 城郭都市への改造

まず秀吉は、政治・軍事拠点である壮麗な聚楽第を築城する。その周囲に武家町をつくり、徳川家

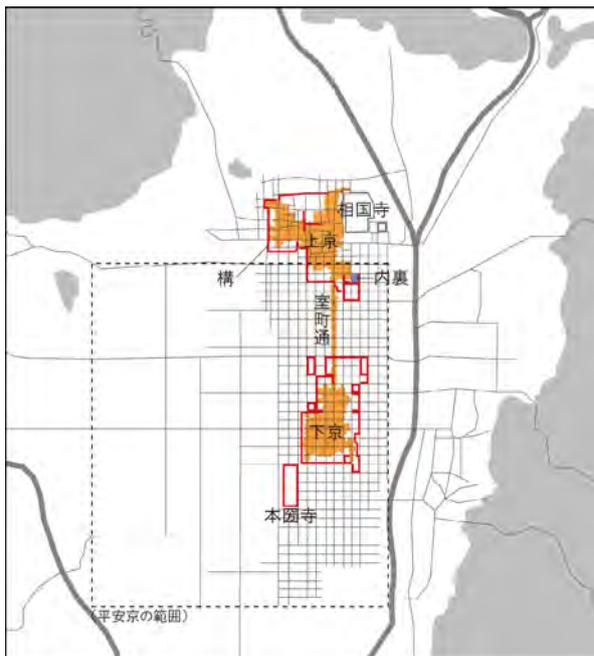


図7-3 応仁の乱後の京都(16世紀前半)

(新創社編：京都時代MAP 安土桃山編，光村推古書院，2006，p.57、
矢守一彦：都市図の歴史 日本編，講談社，1984，p.183より作成)

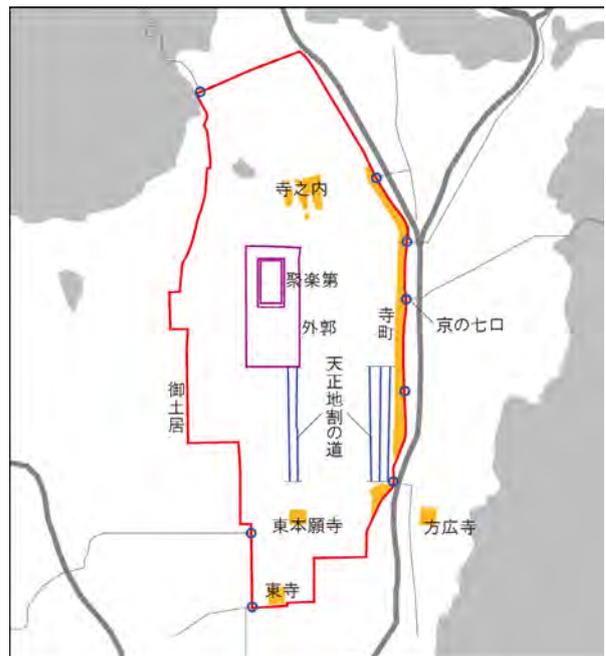


図7-4 豊臣秀吉の都市改造(16世紀後半)

(足利健亮編：京都歴史アトラス，中央公論社，1994，p.68より作成)

康をはじめとする諸大名を住ませた。そして土塁と濠からなる「御土居」を建設した。上京・下京を越えて大きく京都を取り囲み、総延長22.5kmにおよぶ長大なものであった¹⁰。

②職業別の棲み分け

鴨川西岸を南北に伸びる寺町と、上京寺之内に寺院を固める。抵抗勢力であった仏教勢力を統治するとともに、御土居とあわせた第二の防御壁とする意味合いがあった。さらに秀吉は、当時の内裏の周辺には公家町を整備し、町人地の設定もしている。先述の武家町も含めた棲み分け策は、統治や管理を容易なものにした。

③検地と天正地割

この頃になっても奈良時代以来の荘園制の影響は根強く、寺社などの荘園領主の力は強かった。そこで秀吉は厳しい検地を行ない、領主が庶民に課していた地子を免除する。町衆が個々人で土地を所有・利用できる体制が生まれた。また街区の有効活用を促進するため、秀吉は南北に突抜を通した。これが天正地割と呼ばれるものである¹¹。

このような秀吉の都市計画は、その後の各地の城下町の模範にもなった。しかし大胆に見える改造にも、庶民によるまちづくりを引き継いだ点が多い。検地は庶民が勝手に開発した巷所を、彼らのものとして公認した。天正の地割は辻子を応用したもので、さらに御土居も構を拡大したものだといえられる。秀吉は都市の巧みな編集者であったのだ。

(2)江戸時代の京都

江戸時代の平和な治世において、京都は円熟期を迎える。庶民の自治コミュニティは、将軍をトップとする封建体制の末端に巧みに組み込まれる。為政者と住民とが相互に補完し合うガバナンスが、京都においてはじめて実現されたと言える。そこではさまざまな文化が開花した。

町家の普請技術も発達し、棧瓦葺きの屋根の二階建てという現代にも通じる町家建築が通りに立ち並んだ。「街並みを整える」という発想がすでに生じていたことも指摘されている¹²。都市の広い範囲を焼く三度の大火にもめげず、京都は洗練を極めていった。

7.1.3 明治以降の激動

(1)明治前期の京都のパラダイム転換

1853年の黒船の来航は日本に大きなショックを与える。国内で大名が割拠する封建体制から、国家として団結して世界と戦う体制への移行が求められ、明治維新が実現した。そして関東の王化や近代都市の創出といった目的、また元治の大火の影響などもあり東京奠都が決定される。それにより京都は天皇を失い、人口の1/3が流出するほどの精神的、経済的痛手を被ってしまう。

悲壮な議論の中、一地方都市に没落した京都のとるべき二つの道が提示された。一つは東京や大阪に負けじと近代化を進める道。そしてもう一つは培ってきた文化や景観を活かして京都の独自性を発露する道である。現代に至るまでのさまざまな都市計画は、この二つの立場のせめぎ合いの中で生まれてきていると言ってよい。

具体策として京都は、まず琵琶湖疏水の完成（1894年）や番組小学校の成立（1869年）により、近代化への道筋をつける。これらは全国的にも例のなかった進取の事業であり、京都人の士気を上げた。そして1895年に行なわれた第四回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭など、数々のイベントの開催により、多くの人に京都の魅力をアピールすることにも成功した。こうして奠都ショックをなんと

か乗り越えた京都において、変化はいよいよスピードを増す。

(2) 鉄道建設

明治以降、経済の発展や西欧由来の技術の導入により、都市は高密度化と郊外への拡大（図7-5）を同時に経験する。そのために重要となったのが、高速かつ大量に移動を捌く交通網である。大きく分ければ戦前は鉄道の時代、戦後は自動車の時代である。

1876年の官営京都―神戸線を皮切りに、京都と各都市を結ぶ広域鉄道が整備される（図7-6）。現在の京阪電車、阪急電鉄、京福電鉄や叡山電鉄にあたる私鉄各線も営業を開始した。そしてもう一つ重要なのが、都市内交通を担う路面電車である。1895年に京都電気鉄道が、そして1912年には市電が開業し、市民の足を支えた。

(3) 大通りの建設

明治初期の京都の街路は、幅5mほどの空間に歩行者と人力車や馬車が交錯する危険なものであった。これを解消し交通の便宜を図るため、大通りの建設が進められた。大通りは、大きく四段階に分けて発達している（図7-7）。

① 既存市街地の道路拡幅

最初は既存市街地の道路拡幅である。市電の導入と同時に「三大事業」¹³の一環として行なわれた。烏丸通、四条通など七路線を指定し、既存家屋を立ち退かせて拡幅し、中央には市電が通された。特に烏丸通は京都駅から御所をつなぐ、天皇

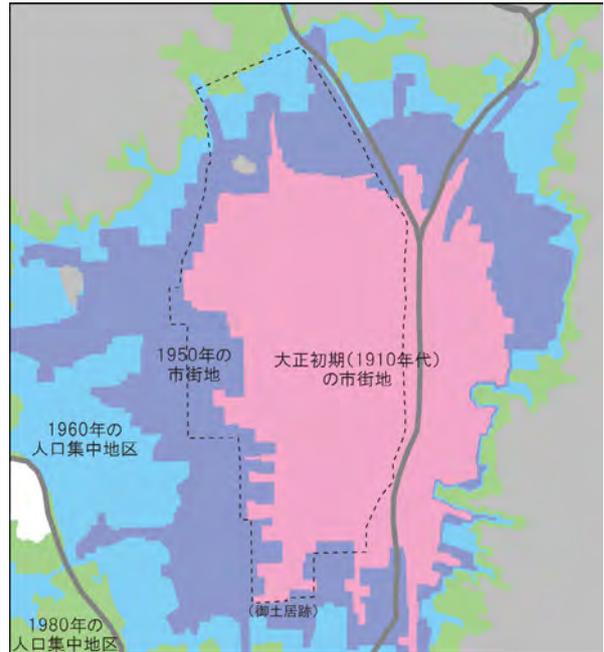


図7-5 20世紀の市街地の拡大
 (建設局小史編さん委員会編：建設行政のあゆみ ―京都市建設局小史一、京都市建設局、1983、付図その6より作成)



図7-6 戦前に開通した鉄道
 (足利健亮編：京都歴史アトラス、中央公論社、1994、p.115より作成)

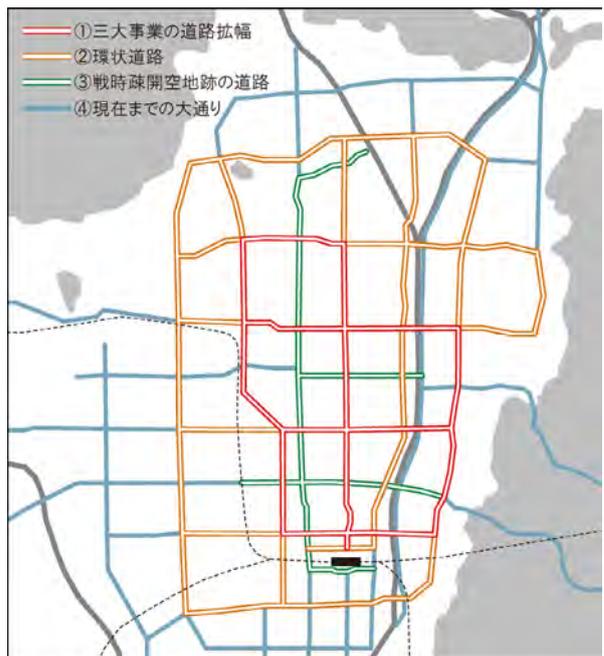


図7-7 現在までにつくられた大通り(合計4車線以上)
 (植村善博・香川貴志編：京都地図図巻、古今書院、2007、p.64、googleマップ (<http://maps.google.co.jp>) より作成)

行幸のためのシンボルロードであった¹⁴。

②郊外の環状道路

郊外部は無秩序なスプロールが進行しつつあった。これに秩序を与えるため、1921年に旧市街の一回り外に環状道路の建設を決定。制定されたばかりの（旧）都市計画法の土地区画整理事業を活用し、環状道路周辺には緑豊かな整然とした住宅街がつけられた。環状道路と第一段階の大通りを結ぶ路線も整備され、市電も大きく範囲を拡大した。

③戦時建物疎開空地跡の幹線道路

戦時中、空襲による延焼を避け消防用地としても役立てるために、京都の各所で建物疎開が断行された（1944～45年）。その中でも堀川通や御池通、紫明通、五条通、八条通では通りに沿った大規模な疎開が行なわれたが、これが戦後に幅員50mの大幹線道路として整備された¹⁵。一般には京都には戦災がなかったと言われるが、実は戦争の影響は大いに受けている。

④戦後の道路網の拡充

戦後の復興期を終え成長路線が軌道に乗り始めると、モータリゼーションが爆発的に進行する。それに伴い市内の大通りが次々と延伸され、多くは大阪や大津、山陰などへと連絡した。高速道路や観光道路、ドライブウェイなども建設される。この流れの中で、市電は1976年に姿を消す。

(4)寺社と学校

近世以前の寺社は信仰の地であることはもちろんのこと、軍事や流通、娯楽などの機能をも担い、政治権力もあった。神仏習合というわが国独特の宗教観によって、寺社は一体となって繁栄した。

しかし明治維新後はその立場を大きく変えている。まず国家神道の形成を目指して発布された神仏分離令によって寺社のつながりは切り離され、それに伴う廃仏毀釈運動¹⁶によって寺院は荒廃した。さらに明治政府は寺社の領主権の剥奪のために上知令を敢行。寺社領を政府に召し上げ、一部は払い下げ民有とする。大寺院は境内地の大半を失い、小寺は統廃合が進んだ。

その後は日本の文化を伝える遺産として保護政策がとられるようになる。現代では美しい建築や庭園、宝物を誇る寺社は観光資源として再発見され、新たな役割を担っている。

一方近代以降の京都に欠かせないビルディングタイプとなっているのが学校である。明治維新直後、コミュニティの単位である町組が改正され、新たに上京・下京各33の町組（番組）が生まれた。そしてその新しい町組を学区として1868年、64の小学校が開業する。

そしてまた1875年に新島襄が設立した同志社大学（当時は官許同志社英学校）を皮切りに京都大学や立命館大学などが開学し、京都は大学の街となった。現在では大学生は京都市の人口の約9.5%を占めており¹⁷、大学の周りには飲食店を中心とする学生街が発展し、ワンルームマンションの開発も盛んである。

(5)景観問題

明治維新後の京都の方向づけの議論として、近代化路線と伝統保持路線の二つがあることを述べたが、この二つの考え方の齟齬により、多くの景観問題が勃発している。木屋町通に市電計画があった際の高瀬川暗渠化問題に端を発し、高さ131mの京都タワー、60mの京都ホテル、同じく高さ60mで大容積の現京都駅ビルの建設の際にそれぞれ反対運動が起こっている。

1980年代以降には、こうしたモニュメンタルな建築物に関する問題に加え、より一般的な街並み、

特に町家の保存に関する議論も活発になっている。都心部を中心に、町家から現代的なビル、マンションへの建て替えが進行し、既存町家とのミスマッチが生じている（写真7-1）。

これに対しては、後述するようにさまざまな規制により対応が図られている。ただしほとんどが量的なもので、景観のもつべき質の誘導が行なえていないと言いが難い。また町家という様式自体が現代的なライフスタイルと相性が悪いことが指摘されており、さらに高い相続税や厳しい耐火・耐震基準が町家の建て替えを促すなど、条例では力のおよばない全国一律の制度の限界を問う声も多い。



写真7-1
町家とマンションとのミスマッチ

(6)現在の都市計画

現在の京都市の都市計画について、ルートの様相の分析に特に関連の深い土地利用、高さ規制、景観政策の三点に絞って簡単にまとめておく¹⁸。

①土地利用

土地利用については1924年の第一回用途地域指定以来、新都市計画法に基づく1973年の新用途地域決定など、順次改訂されてきた。2002年には都市計画マスタープランも制定され、今後の土地利用誘導方針が定められている（図7-8）。この計画を見ると、中心部を商業地区、周縁部を住宅地区、南部を工業地区とし、中心部に職住共存地区、西陣や清水坂に伝統産業地区が設けられるなどしているが、大まかにはこれまでの都市発展を引き継ぎ、それを制度的に固定しようという意図が伺える。また大通り沿いに商業系の用途地域が配され、街路構造との関連が明白である。

②高さ規制

建築物の高さ規制は主に高度地区制度によって定められているが、これは土地利用計画にほぼ準じている。つまり住宅系用途地域には10mをはじめとする低い高さが指定され、商業系用途地域は高い。

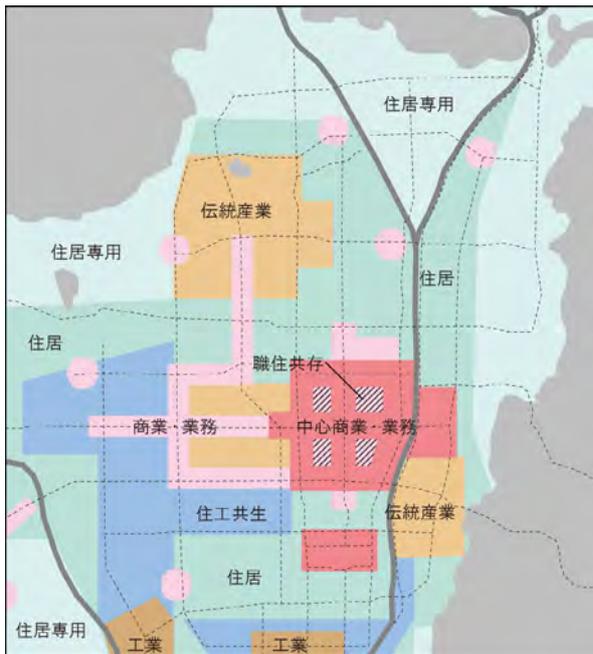


図7-8 都市計画マスタープラン

(京都市都市計画局都市企画部都市計画課編：京都市の都市計画，京都市，2009，p.18より作成)



図7-9 景観の計画に関する地区の概要図

(京都市都市計画局都市企画部都市計画課編：京都市の都市計画，京都市，2009，p.29より作成)

大通り沿いはやはり高い値の指定となっている。この高度地区に加え、近年は景観系の諸規制が重なり制限が厳しくなっている。たとえば2007年の新景観政策では、45mの高さ制限が全面撤廃された。

③景観政策

上述したように景観問題は現代京都の都市計画における最大の論点となっており、京都市はさまざまな政策を打ち出している（図7-9、表7-1）。伝統的な街並みを保全するもの、自然景観を保全するもの、あるいは古来重要視されてきた視点場からの眺望を保全するものなど、京都の多くの地域では、地区指定が幾重にも折り重なっている。

以上、京都のたどってきた時間的・空間的コンテクストを足早にまとめた。都市としての京都の礎は平安京グリッドプランにあるが、その後中世から近世にかけてさまざまな為政者や庶民の手によってゆっくりと改造されてきた。そして明治に入ると、近代化と京都の独自性の発揮という二つのパラダイムのせめぎ合いの中で都市は急速に発展している。そしてこの両者の関係は現代の景観問題にまでつながっている。

またこのようなコンテクストの中で、各ルートの位置づけはそれぞれに個性的である。ルートⅠの四条通はいわば京都の都市史の王道を歩んでおり、現在でも京都の中心地になっている。ルートⅡはかつての上京の中心地からスタートするが、明治以降に発展した地域を通り抜けて周縁部の山に至る。ルートⅢについては本節には登場しないが、京都中心部とはまた違った独自のコンテクストをもって

いる。以上の流れを背景として、次節以降では各ルートそれぞれに対するコンテクストを詳細に調査した上で、様相の総合分析を行なう。

表7-1 京都市の景観に関する地域・地区の一覧
(京都市都市計画局都市企画部都市計画課編：京都市の都市計画，京都市，2009，p.28.)

体系	地域又は地区	区域指定の根拠
建物の高さの規制	高度地区	都市計画法
自然・歴史的景観の保全	風致地区	都市計画法 京都市風致地区条例
	歴史的風土保存区域	古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法(古都保存法) 都市計画法
	歴史的風土特別保存地区	
	特別緑地保全地区	都市計画法 都市緑地法
	近郊緑地保全区域	都市計画法
	近郊緑地特別保全地区(特別緑地保全地区)	近郊圏の保全区域の整備に関する法律 京都市自然風景保全条例
市街地景観の保全・再生・創出	景観地区 美観地区 美観形成地区	都市計画法 景観法 景観法 京都市市街地景観整備条例
	建造物修景地区	
	伝統的建造物群保存地区	都市計画法 文化財保護法
歴史的町並み景観の保全・再生	歴史的景観保全修景地区	京都市市街地景観整備条例
	界わい景観整備地区	京都市市街地景観整備条例
	眺望景観・借景の保全	眺望景観保全地域 京都市眺望景観創生条例
屋外広告物の規制と誘導による都市景観の整備	屋外広告物規制区域等	屋外広告物法 京都市屋外広告物等に関する条例

1 正確には京都の中心部を指し、ルートⅢなどはここに含まれない。まず京都の都市史のメインストリームを理解することを目指す。

2 長安の都市計画には、天文思想、礼の思想、書物「周礼」の理想都市モデル、陰陽五行思想、易経や風水の思想、華嚴経の理想都市モデルなどが反映しており(妹尾達彦:長安の都市計画, 講談社, 2001, pp.137-153, 164-169.)、平安京もこれらのコスモロジーを引き継いでいると言える。ただし長安のプランからもかなりのアレンジが加えられており、さらに平城京や長岡京といった過去の諸京の教訓も生かされている。つまり平安京は、決して長安の単純なトレースではない。

またコスモロジーとは別に、直交グリッドプランそのものの利点として以下のようなものが指摘されている(矢守一彦:都市プランの研究, 大明堂, 1980, p.115. および Stanislawski, D.: The Origin and Spread of the Grid-Pattern Town, *Geographical Review*, vol.36, No.1, American Geographical Society, 1946, pp.106-108. および 材野博司:都市の街割, SD選書, 鹿島出版会, 1989, p.40.より筆者がまとめた)。建設や運用上の実利が多いプランであり、洋の東西を問わず多くの都市において採用されている。

- もっとも初歩的な測量技術でレイアウトが可能
- 土地の配分、所有、および租税の賦課に便利

- ・基本パターンを変更せずに市街地を拡大できる
- ・方形の建築物をもっともコンパクトに収容しうる
- ・軍事的、政治的支配に有利
- ・限定された都市空間の中で、住民の棲み分けが可能
- ・方位が明確で行動しやすい

³ 平安京のプランの詳細については、平安中期に成立した「延喜式」の記述に従うのが一般的である。同書には平安京全体の大きさとして「東西1,508丈、南北1,753丈」が示されているが、記されている街路および街区の大きさをすべて足し合わせると「東西1,500丈、南北1,751丈」となり、矛盾している。このどちらの値を採用するかは研究者によって分かれるが、本論では後者の値を採用する。

⁴ 「左京・右京」－「条・坊」－「保」－「町」－「行・門」という、ツリー状の階層構成による明快な区分制度。

⁵ さらに、築地塀を切り開いて大路に向けて門を設けられるのは三位以上および四位の参議に限られていた（注釈2の矢守の文献、p.198.）。

⁶ 小寺武久：中世京都の都市空間に関する考察（2）—道路—，日本建築学会論文報告集，vol.239，1976，p.133.

⁷ 足利健亮編：京都歴史アトラス，中央公論社，1994，p.11.

⁸ 正確には、街区の空間概念の変化は次の三段階で変化した（秋山國三：条坊制の「町」の変容過程について—平安京から京都へ—，京都社会史研究，同志社大学人文科学研究所編，法律文化社，1971，pp.1-78.）。①条坊制の町が街路に向かって開き、「四面町」となる。②四つの面が共同体を解消し独立し、「四丁町」となる。③街路を隔てて向かい合う丁同士が連合し、「両側町」となる。

⁹ このように上京・下京を中心として小都市が離散的に成立した様子を、山田邦和は「巨大都市複合体」と名づけている（山田邦和：京都都市史の研究，吉川弘文館，2009，p.181.）。

¹⁰ この御土居は必ずしも防衛の目的だけでつくられたわけではなく、鴨川、紙屋川に対する治水の意味もあった。そして農地も広く取り囲むことで首都支配を宣言し、同時に人心を掌握するといった狙いもあったと考えられている（植村善博・上野裕編：京都地図物語，古今書院，1999，p.32.）。

¹¹ 既存市街地に対してではなく、主に応仁の乱で焦土化した街区に適用されているとされているが、現在するこの種の街路のうちどれが秀吉の手になるものかは見解が分かれている（中村武生：豊臣政権の京都都市改造，豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城，日本史研究会編，文理閣，2001，pp.98-100.）。図7-4に示した5本は有力視されているものである。

¹² 丸山俊明：町触、町式目とまちづくり，京・まちづくり史，高橋康夫・中川理編，昭和堂，2003，pp84-85.

¹³ 1908年に開始された第二琵琶湖疏水建設、上水道の整備、道路拡張・市電開通をまとめて三大事業と呼ぶ。

¹⁴ 伊藤之雄：近代京都の改造—都市経営の起源 1850年～1918年—，ミネルヴァ書房，2006，p.145.。設置された大通りのうち烏丸通（丸太町通以南）が15間（約27m）で最大幅員となった。なお丸太町通が烏丸以西で幅員8間なのに対し烏丸以东が12間と設定されたのも、天皇一行が南正面にあたる堺町御門から御所に入るためである。

¹⁵ 他にも高辻通、蛸薬師通、花見小路通、寺之内通、智恵光院通、七本松通などの一部も幅11mの消防道路として疎開対象になった。図7-12や図7-26に確認することができる。

¹⁶ これは必ずしも政府が意図したものではなかったが、全国的な民衆運動となった。

¹⁷ 京都市の統計情報のホームページ（<http://www.city.kyoto.jp/sogo/toukei/>）の情報をもとに、大学生数（大学院生、短期大学生を含む）を人口で除して求めた（データは2010年5月時点）。

¹⁸ 京都市都市計画局都市企画部都市計画課編：京都市の都市計画，京都市，2009. および 京都市都市計画局都市景観部景観政策課編：京都の景観，京都市，2009.

7.2 ルート I の総合分析

7.2.1 ルート I 周辺の時間的・空間的コンテクスト

本節以降が各ルート of 具体的分析となるが、各節の最初の小節ではルート周辺のコンテクストを詳しく読み込む。その流れは、まず明治中期以前を簡単にまとめ、それ以降については仮製地形図（1889年／国土地理院発行、京都府立総合資料館蔵）、都市計画基本図（1922年、1953年、1980年前後、2010年前後¹）の4種／京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵）を用いて約30年ごとの変化を調べる。また現在の用途と道路構造を示す図も使用する。

(1) 明治中期まで(図7-10)

ルート I を構成する四条通は京都の古くからの繁華街である。平安時代から室町時代にかけて、町小路（現新町通）と三条、四条の交わるあたりが商業地域として栄えている。応仁の乱後も、下京は四条室町あたりを中心に広がっている。

下京市域と鴨川の間は、応仁の乱の傷跡の残る荒野であったと考えられるが、ここに着目したのが秀吉であった。平安京城の東端、東山極大路沿いに寺町を形成、また鴨川との間に御土居を建設する。当時の鴨川岸には図7-10に示すような広大な河原があったとされる。この河原は、江戸期の「寛文の新堤」の完成（1670年）後に開発が進み、現在の河原町通や木屋町通、先斗町にあたる地域が開発される。1611年には角倉了以の手になる高瀬川も開通しており、鴨川の納涼床も始まった。

一方、鴨東の歴史において重要なのが、四条通の東端にある八坂神社である。神社は「祇園社」として平安京創設以前から存在していた。元来南向きに正門を構えていたが、平安京ができて四条通が延伸されると西門がメインとなり²、以後四条通のアイストップとして構えることになる。

そして鎌倉時代以降に東山に多くの寺社が創建されると、鴨東は庶民の信仰の場であると同時に田楽、猿楽などの芸能が演じられるようにもなる³。鴨川の河原でもこうした上演がなされる。江戸幕府成立の前後には出雲阿国によってかぶき踊りが持ち込まれ、四条河原から八坂神社までの参道を中心に遊興の街が形成される。江戸初期に成立した南座をはじめ、付近には七つの劇場が立ち並んだ。

江戸時代には祇園新橋など四条通北側の新地もつくられ、鴨東は洛内とかわらないほどに高い密度で市街化されていった。一方四条通南側には広大な建仁寺があったが、上知令によって寺領は大幅に縮小し⁴、開発が進んでいる。花見小路通や歌舞練場も旧建仁寺領にある。なお神仏分離、上知令の影響は祇園社にもおよび、神仏習合を示す祇園社の名が八坂神社に改められた他、境内にあった寺院や仏像がことごとく取り払われ、上知された社領は円山公園として生まれ変わった⁵。

また秀吉によってつくられた寺町でも、江戸時代には寺が境内地を借し出し、そこに数多くの芝居小屋が立地していた⁶。その土地が上知されると1882年、京都府の主導で旧境内地に新たに南北の道・新京極通が開通される。こうして鴨川を挟んだ東西に庶民の文化が花開く歓楽街が成立したことになる。それらを結ぶ四条通の賑わいも相当なものであった。

このような動きの結果、図7-10の示す1889年時点ではかなりの広範囲にわたって市街化が完了している。ただし大宮通以西になると途端に家屋の密度が下がり、田園が広がる。朱雀大路をはじめとした平安京グリッドは崩れたままで放置され、御土居も残っている。湿地であったことと約35万人という江戸時代の人口規模から、スプロールが進まなかったものと考えられる。

(2) 明治後期～大正(図7-10～11)

京都が本格的な近代化へと突き進むこの時期は、四条通も大きく変貌している。三大事業による道

路拡幅と市電開通がその目玉である。

すでに繁華街として完成していた四条通を拡幅することには地元からの反対も根強かった。その理由として買収費用の高さ、繁華街に市電が走る危険、祇園祭との干渉の他、小売業にとっては狭い道こそ店の繁栄につながるという意見があったという⁷。街路スケールと様相の観点から興味深い意見である。事実、拡幅で四条通の空間は大きく変わっている（写真7-2～3）。

烏丸通は行幸道のための拡幅であることを述べたが、すでに中心商業地であったこの近辺に広い通りができることでより発展をとげ、明治末期には七つの銀行の本支店が立ち並ぶ通りとなった⁸。

大宮通の四条以南、千本通の三条以北も拡幅され、この間を結ぶ後院通が新設されている。千本通三条～四条の西高瀬川沿いに形成されていた材木商の同業者たちが、千本通をそのまま南下して拡幅されると同業者町が分断されると反対したのが一つの理由である⁹。ただしそれでもこの位置に後院通を設けたのは、その以前に開通した京都鉄道（のちのJR山陰本線）二条駅への動線を考えたものであろう。こうして京都では珍しい斜め45度の大通りが

誕生した。1889年時点の地図と比較すると、この後院通や市電の壬生車庫は、以前はほとんど田園であった場所に新設されていることがわかる。そして大宮通－後院通－千本通のラインの以西に開発が進行するが、宅地割はかなり不規則になっている。

東大路通も四条や烏丸同様に既成市街地の中を通るが、既存街路のないところを強引に切り開いている部分もある。東山にさしかかって地形の影響も受け、グリッド街路を拡幅した大通りとはやや異なった景観を生み出している。

なお市電に先駆けて京都電気鉄道も開通している。拡幅のための用地買収の出費を避けるため、高瀬川、西洞院川、堀川という人工河川のある通りが選択された。その他、京阪や京福など近郊電車も次々と開業する。

このような交通整備は、郊外から都心に買い物に出るというライフスタイルを可能にした。狭い範囲で完結した都市部は、拡大する市域の中の都心部という位置づけに変化してきている。その中で京都最古の大型百貨店となる大丸京都店が1912年、四条高倉にオープンした。それは大通り沿いの高層化の始まりであり、ガワとアンコという都市構造の始まりでもある。

(3) 昭和初期～戦後(図7-11～12)

大通り建設の第二段階が1921年の都市計画道路であるが、中心部には影響が少ない。ただ唯一、河原町通は拡幅され大きく変化する。市電を木屋町通に敷設する案があったことは先にも述べたが、結局は河原町通が拡幅されるかたちになり、結果的に新たな繁華街を生み出すことになった。戦後には四条河原町南西角を占める高島屋も生まれている。

そして戦中～戦後にかけての重要な出来事が戦時建物疎開であり、幅員50mの堀川通の誕生である。今までの四条通や烏丸通よりも格段に広い幹線道路となる。四条通より北側では東のみ、南側では東西両方が疎開対象となり、四条通の南北で屈曲する形状となっている。

建物疎開は高辻通、蛸薬師通などにもおよぶ。旧市街地で不自然に広い街路は疎開によるものが多い。大宮や三条京阪には交通の要地を守ることを目的とした交通空地もつくられ、戦後にはバスターミナルなどとして転用されている。



写真7-2 四条通拡幅前の四条寺町
(白幡洋三郎：京都百年パノラマ館，淡交社，1992，p.197.)



写真7-3 四条通拡幅後の四条烏丸
(同上，p.196.)

(4) 昭和中期(図7-12~13)

高度成長とともにモータリゼーションが激化するがこの時期で、市電は全廃される。大通りは一気に、大量の自家用車、バスやタクシーで溢れる空間へと変わる。

この時期からは、都市計画基本図に3階建て以上の「高層建築物」¹⁰がグレーの塗りによって示されている。高層化が大きく進行したのもこの期間であったから、分析に便利である。これによると、三井、三菱、三和、住友信託という四銀行が陣取る四条烏丸を中心として、特に南北方向への高層化が甚だしいことがわかる。路面店が圧倒的に有利な店舗と比べビジネス街は高層化しやすいことから生じた現象であろう。四条通も高層化が進んでいるが、やはり銀行、証券会社、保険会社などの金融系が先行している。また、烏丸通沿いのビルの敷地面積が大きいのに比べ、四条通では従来型の短冊状敷地を継承しているものが目立つ。

この旺盛な都心開発の中で景観への関心も高まり、1976年には祇園周辺で二つの伝統的建造物群保存地区が指定される。また四条通や各商店街には、この頃にアーケードも設置されている。

(5) 昭和後期～現在(図7-13~14および図7-15)

四条烏丸を中心とした高層化はより大通りから離れた場所(ガワからアンコ)へ進行。特に北方向に顕著で、古参の三条通や疎開により生まれた御池通の影響が見える。そしてほとんど高い建物がなかった四条通沿いの新町通～大宮通でも高層化が進んでいる。アンコの街区では、1980年前後にはまだ町家だけの街並みも多く残されていたが、現在に至るとほぼすべての街区で町家と高層建物との混合が見られる。景観問題が叫ばれるはずである。

また京阪京都線の地下化に伴い川端通が出現。川沿いの桜並木の下を走る京阪電車は見られなくなったが、踏切が解消されたことで東西交通は劇的に改善したという¹¹。これで市の中心部を貫く大通りはすべて出そろった。そしてまた、地上を走る電車は京福電鉄を残すのみとなった。

なお祇園の劇場街も四条通拡幅に伴い南座だけになっている。また新京極通に軒を並べていた芝居小屋も映画館へと移り変わり、その映画館も減少して現在では2軒が生き残っているだけである。娯楽の多様化やテレビの普及などにより演劇や映画は廃れ、祇園も新京極通も観光色への切り替えがなされている。

以上を振り返ると、四条通の歴史の中には平安京から現代に至る京都の歴史が濃密に詰まっていることがわかる。下京の商業地や祇園の遊興地など近代以前に一般の都市住民がつくりあげた全体の構図は、それぞれビジネス街や観光地という意味づけが付加されたものの、基本的には変わっていない。

ただし交通体系は明治中期以降に劇的に変化し、結果四条通は大通りとなっている。それが店舗やオフィスの集積を呼び込み、他の通りとの差異をいっそう明確なものにしている。

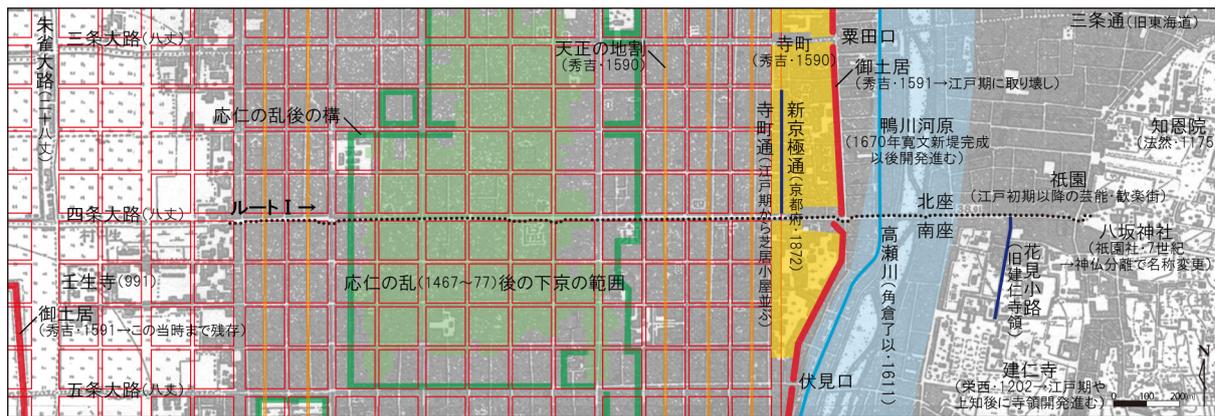


図7-10 1889年の仮製地形図 (国土地理院発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートI)



図7-11 1922年の都市計画基本図 (京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートI)¹²



図7-12 1953年の都市計画基本図 (京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートI)¹³

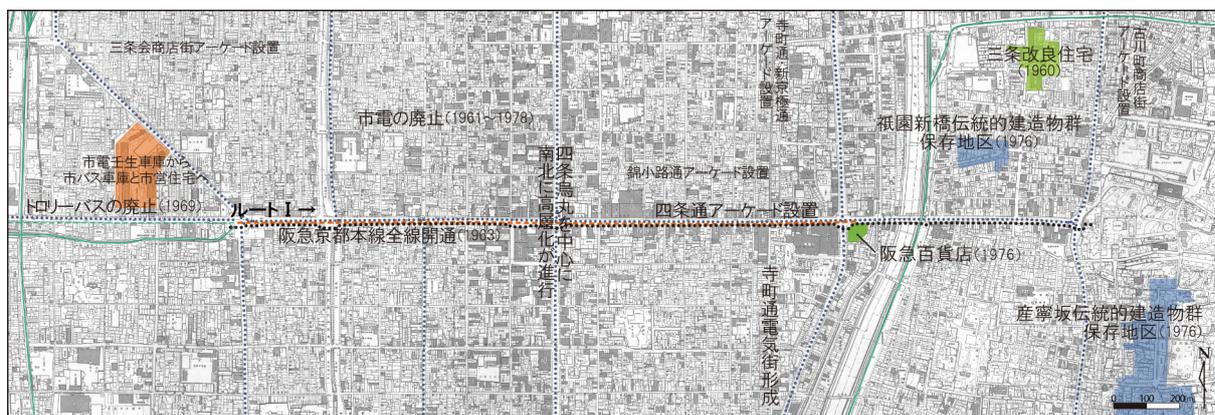


図7-13 1980年前後の都市計画基本図 (京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートI)

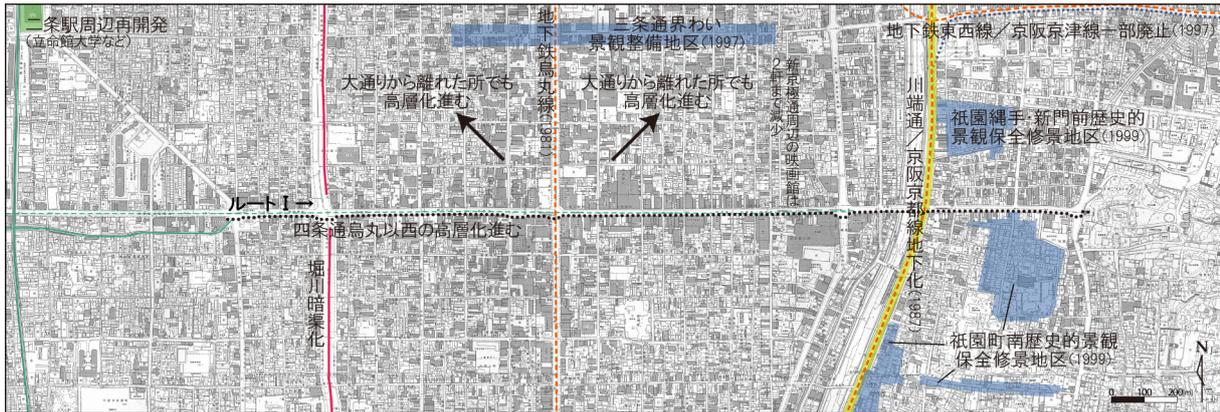


図7-14 2010年前後の都市計画基本図 (京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートI)

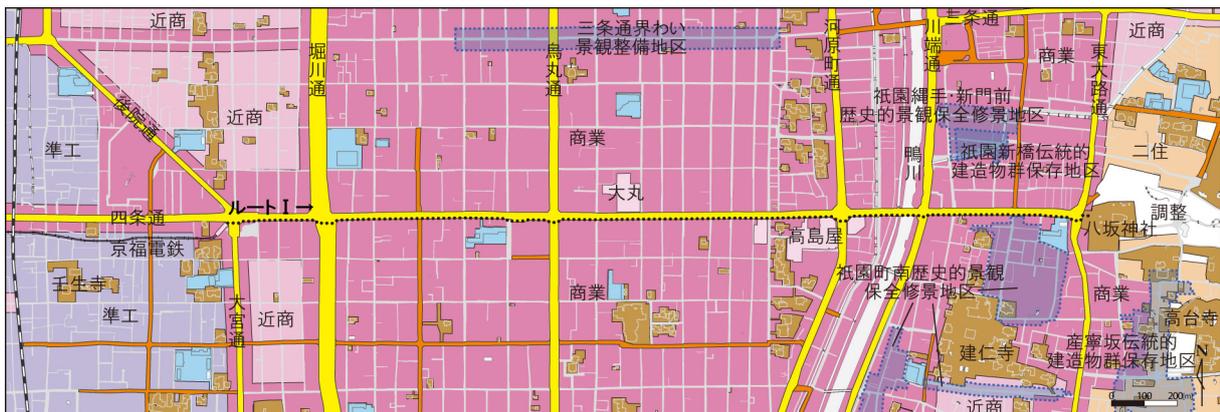


図7-15 2007年の用途および道路構造(ルートI)¹⁴

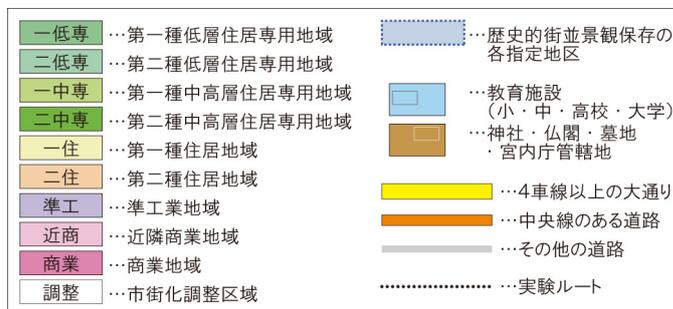


図7-16 2007年の用途および道路構造の図の凡例(全ルート共通)

7.2.2 エッジ・エリアごとの分析

ここからいよいよ、実験からの考察をあわせた総合的分析に移る。分析は、エッジとその次のエリアという組ごとに扱う (ただし各ルートの最初のエリアのみ単独)。なぜならば、5.2.3で示した通り多くの場合エッジでのシフターが次なるエリアでのコネクターとなり、この両者に深いつながりがあるからである。

各エッジ・エリアで用いるデータセットは以下のものである。

- エッジ内の様相表現に見られる様相因子の上位
- エリアの領域表現に見られる様相因子の上位とそのエリア間変化
- エリア内のルート上から撮影した代表的な写真
- 領域分割グラフ (太い黒線)
- 領域評価グラフ (細い七色の線)
- ルート周辺の地図¹⁵ (方位はすべて上が北、必要なコンテキストは地図内に描写)

このうちA, B, CとD, Eはそれぞれ同一の図内に記す。図中や文中に用いる距離の数値はすべて、歩行スタート地点からではなく、エッジ始点からの距離に換算し、領域分割グラフもエッジの始点の値を0とする（ただし各ルートの最初のエリアのみスタート地点からの数値に従う）。

また、ルートの脇に見えるものなどについては適宜写真を補う。

(1)A I-1

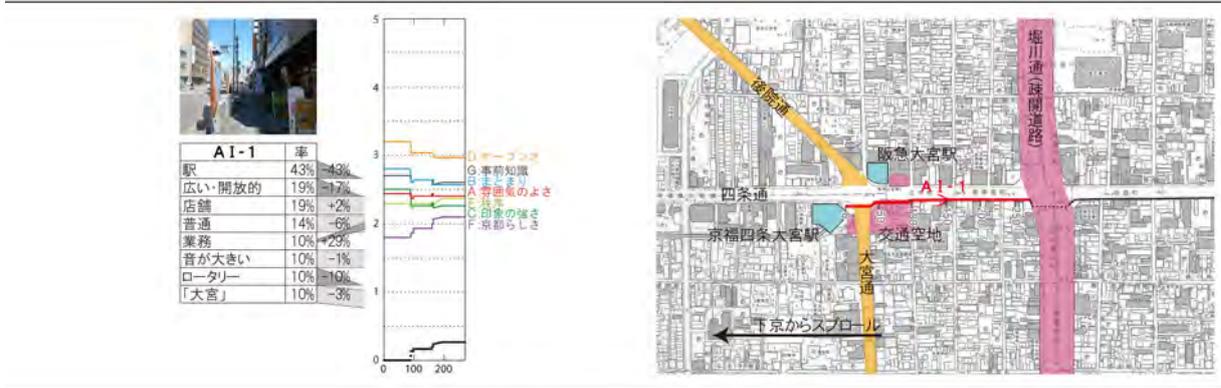


図7-17

①「駅前」というアトラクターの形成

A I-1において領域表現で突出し、次のエリアとの間のシフターになっているのが駅である。他のルートを含め、領域表現で駅の占有率が最大であった。この要因として、四条大宮交差点を挟んで対峙する阪急と京福の二駅が存在すること、疎開空地によるロータリーや斜め方向の後院通も合わせて一つのノードとなっている（写真7-4）ことが挙げられる。そして被験者の多くが実験直前に電車を用いたという身体的要因もアトラクターの形成要因となっていると考えられる。



写真7-4 四条大宮交差点

(2)E I-1~A I-2

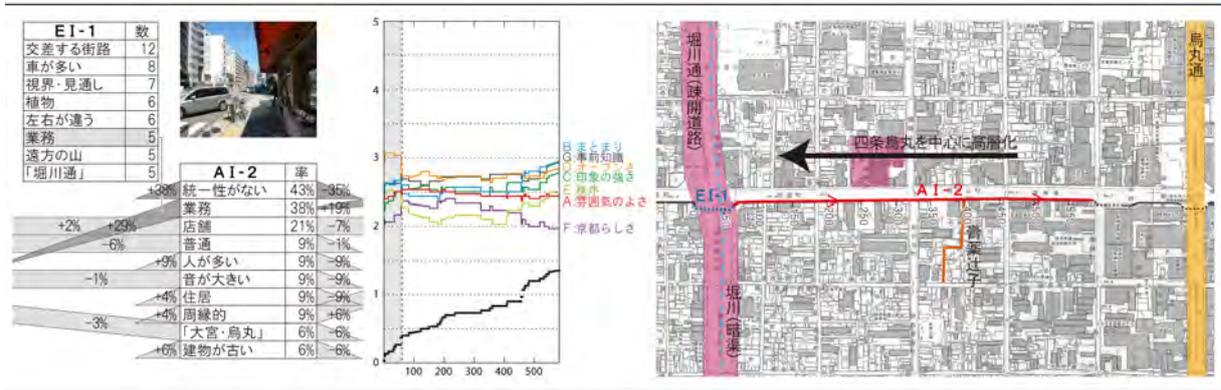


図7-18

①堀川通東西の時間的コンテキスト

E I-1は、堀川通（写真7-5）がそのまま大通り交差型エッジになっている。領域感は切断しても様相は切断しないエッジの典型である。エッジでは堀川通のことばかりが記され、次のエリアのコンテクストにはほとんど触れられていない。

この理由として考えられるのは、堀川通の東西が都市史的に同じような道筋をたどってきたことで

ある。図7-10に見られるように明治半ばごろまでの市街地は大宮通あたりで途切れており、堀川通周辺は街はずれにあたる。その堀川通ももともと川の流れを利用して材木商や友禅染職人の集まる街であったが¹⁶、戦時疎開や堀川の暗渠化によってコンテクストを断ち切れ、今ではその面影もない。そして戦後に四条烏丸周辺からの高層化の波が訪れ、堀川通の東西両方で高層化が進行しつつある。



写真7-5 堀川通

②ミクロな差異によるコネクター

A I-2について見ると領域表現に業務施設、店舗、住居が混在する。様相表現まで目を通すと人、車、駐車場、表示、工事、駐輪、音やにおいなどの記録も多い。結果、「統一性がない」が領域表現のトップを占めるに至っている。不統一性というミクロな差異がコネクターだと言ってもよいほどである。これが低評価につながり、しかも駅のようなアトラクターもなく、領域分割グラフもだらだらと上昇し続ける。

③街路スケールのヒエラルキー

西洞院通と新町通の間にある膏薬辻子（写真7-6）は、ひととき被験者の注目をひいた。被験者たちはこの辻子を覗き込み、「古い」「京都らしい」といった言葉に加えて「涼しい」「静か」「木の香りがする」といったように五感も使って魅力的な様相を把握している。不統一性というコネクターの中で浮き立ち、短期的フレームに対しても大きなずれをもたらしている。幅がわずか2mほどのこの辻子にはまだあまり開発の手がおよばず、小規模な町家が立ち並んでいる。



写真7-6 膏薬辻子

このような辻子は京都で他にも多く、幅6m程度ある平安京由来の街路や、天正地割の突抜などとの違いになっている。これまで京都の街路構造の特徴として大通りと狭い道という分類で論じてきたが、狭い道にも段階がある。そして内的秩序の度合いや開発の進行という時間的変遷も異なってくる。

(3)E I-2~A I-3

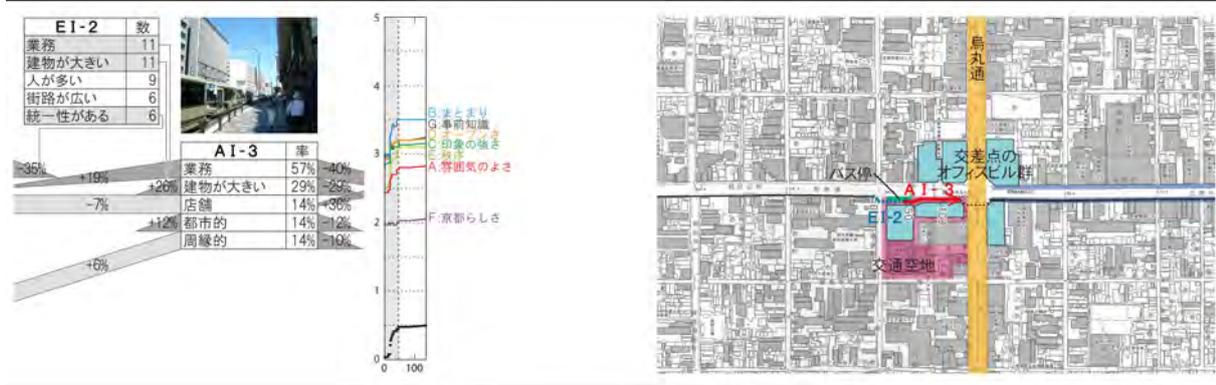


図7-19

①多様な要素が強め合うエッジ

E I-2は、このルートの中では比較的是っきりしたエッジである。前エリアとのシフターとなっているのは「業務」「建物が大きい」で、それがそのままA I-3におけるコネクターとなる。人の増加、

歩道幅の拡大もきている。これらは歩道に設けられたバス停（写真7-7）の効果でもある。バス停は通常ルート上に離散的にあらわれ様相の大きな変化をもたらさない要素であるが、ここでは一つの核となっている。さまざまな要素が強めあって、エッジが形成されているのである。



写真7-7 バス停

②線的アトラクター

烏丸のオフィス街は図6-18でも指摘したようにアトラクターの一つである。そのオフィス街は烏丸通（写真7-8）に沿って南北に伸びるアトラクターとなっている。京都駅からの行幸道として拡幅された結果、銀行やオフィスビルが集積することとなった¹⁷。また四条烏丸南西角の街区も建物疎開の対象となっており、その跡地に大きなボリュームをもつビルが建設されている。



写真7-8 烏丸通

ただし領域表現に「都市的」と「周縁的」が同居するのが珍しい。かなり都市的でありながら、四条河原町周辺の繁華街という意味での中心に向かってゆく周縁地でもある。このアトラクターの重層性については次項で改めて述べる。

(4)E I -3~A I -4

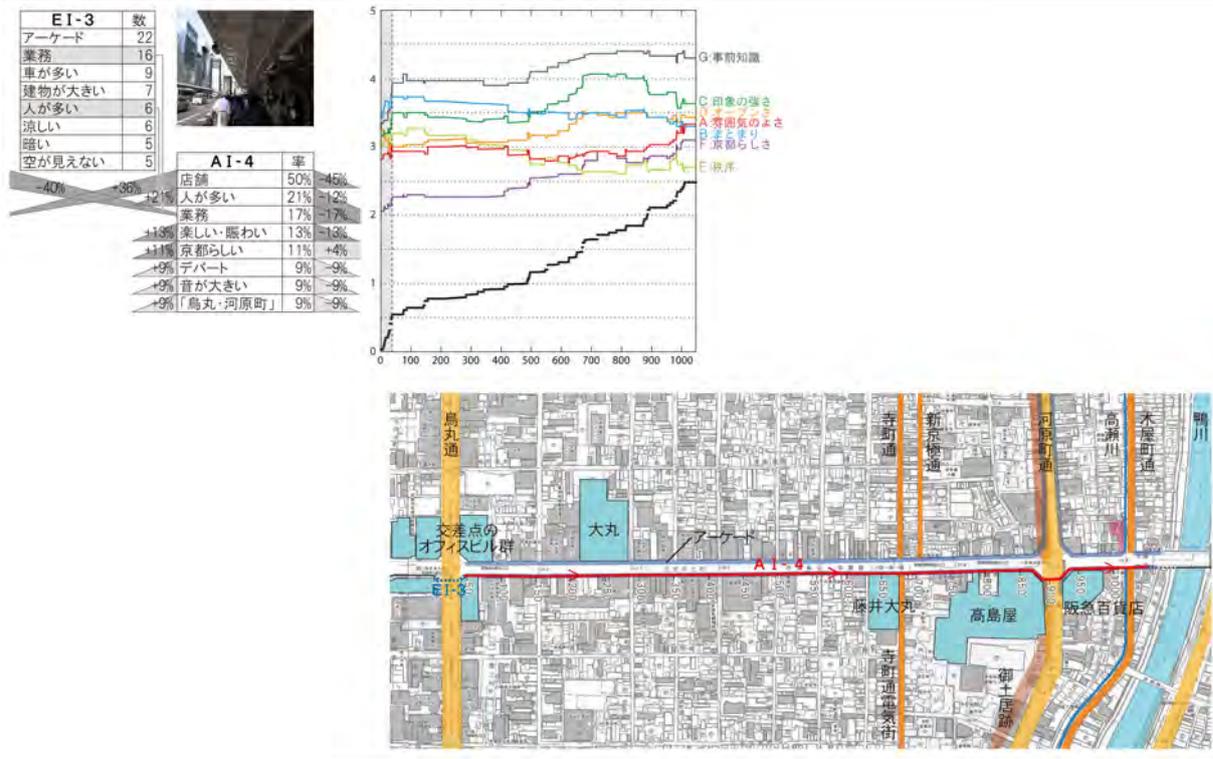


図7-20

①大通りの切断・縫合作用の複雑性

E I -3にあたる烏丸通を中心にビジネス街は東西に広がっており、領域評価値の変動は全体に小さいことから様相としての切断効果は少ない。とはいえ繁華街という新しいアトラクターが登場することや、鋭い変化をもたらす代表的な要素であるアーケードの存在などにより、烏丸通の東西の様相は

同じでもない。切断と縫合の折り重なったエッジである。

またA I-4後半の河原町通はエッジとして検出されていない。通りを挟んで対峙する大きな建物群の存在や繁華街という機能の連続性により両側の様相の違いが少なく、縫合が切断を上回る。

②アトラクターの競合

A I-4は全エリアの中で距離がもっとも長い。領域分割グラフの両端落差が1.93あり、被験者はこのエリア内で平均2回近くの領域分割をしていることになる。領域表現でもかなり多様な要素が入り混じる。

これは烏丸通のビジネス街と寺町通・新京極通・河原町通の繁華街というアトラクターの競合に要因がある(写真7-9~11)。さらにA I-4には飲み屋の並ぶ木屋町通があり、4つの大きなデパートもある。図6-18でも示した

ように、四条通はさまざまなアトラクターの影響圏が折り重なっているところが大きな特徴なのである。これを図6-19で示したダイアグラムに従って表現すると、図7-21のようになる。この結果、アトラクター間において様相が断続的に変わり、領域分割グラフが上昇し続けるという現象が起こっている。

なお歴史を遡ってみても、秀吉の時代にはまだ下京と寺町との間には空白地帯が広がっていた。烏丸通と寺町通の間は、歴史的にも狭間の空間なのである。

③アクティビティの役割

エリア内では、アクティビティについて盛んに記録されている(Appendix-Cの様相因子プロット参照)。人の活動を引きつけるという意味ではビジネス街よりも繁華街のアトラクターの方が強力で、河原町通に向けどんどんと増えてゆく。エリア全体のコネクタでありながら、増えてゆくという面でシフターでもある。人が多すぎて「歩きにくい」という記録も散見され、身体性に依拠した様相把握が行なわれている。

④歴史と様相把握

このエリアは図7-10~14にも明らかなように、かなり歴史の色濃いエリアである。しかし河原町通あたりにあった御土居のことや、かつて四条通を走っていた市電などについて、まったく記録されなかった。つまり現在の様相把握に直接影響するのは歴史そのものではなく、歴史の変遷を経てあらわれている現在の都市の姿なのである。歴史そのものは、知識がなければ様相把握には影響しないものと考えられる。

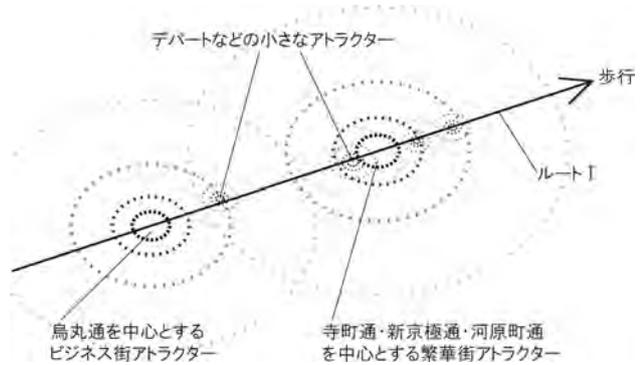


図7-21 ルートIにおけるアトラクターの競合のダイアグラム



写真7-9 A I-4の序盤



写真7-10 寺町通の前



写真7-11 河原町通

(5)EI-4~AI-5

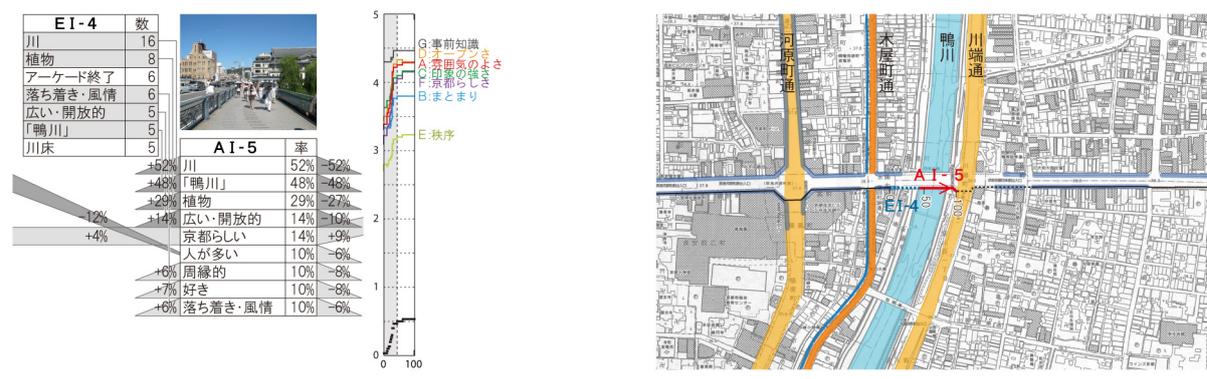


図7-22

①鴨川の全体的様相

鴨川(写真7-12)に差し掛かると川、緑、空といった自然要素に加えアーケードがなくなり川床があらわれ、また音、風、気温といった緒感覚の変化も加わり、開放的かつ落ち着いた全体的な様相をなしている。その結果「雰囲気」など各領域評価指標は急激に上昇する。



写真7-12 鴨川

②大通りと川との違い

川も大通りと同様、ルートと交差する太い線的要素である。次のエリアとのコネクターをほとんどもっていないことから、マクロに見るとある種の境界になっているとも捉えられる。しかし実際にはエリアとして検出されている。鴨川も一つのまとまった領域となるし、アトラクターでもある。これが大通りとの交差とは異なる点である。都市をマクロに見ると、都市の中に独特の様相をもった帯状の領域をつくり出しているのである。

(6)EI-5~AI-6

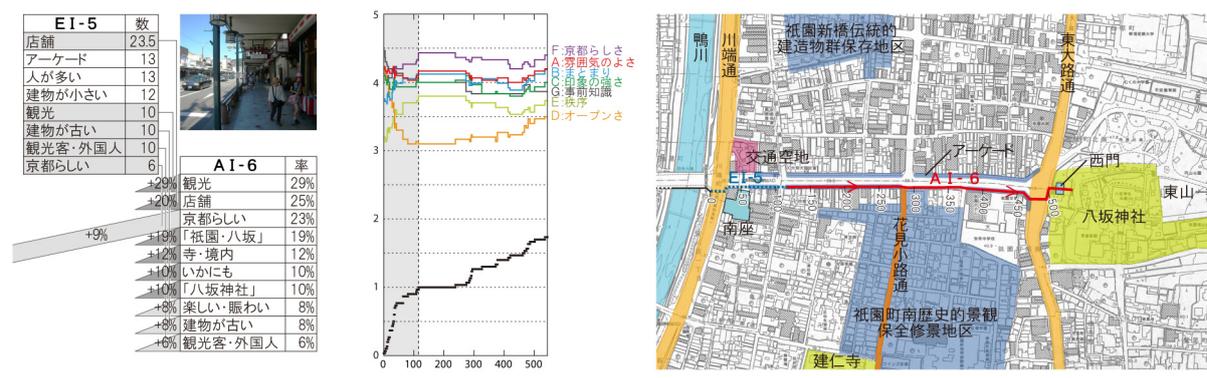


図7-23

①領域への入口としての川

EI-5において、領域分割グラフはまず川端通を渡る際に急激に上昇する。しかし川端通については被験者の記録がほとんどない。車通りについてさえ記されない。

このエッジではもはや関心は次のエリアへと移っていると考えられる。鴨川における空間の広がりや祇園から東山にかけての部分を見通させ、前方領域への組織化を促しているのである(写真7-13)。かつての鴨川も、歓楽街・祇園や信仰と娯楽の地・東山への入口としての意味をもっていた。今でも

残る南座と再び始まるアーケードが、この入口という様相を強めるはたらきをしている。

またこのエッジでは店舗やアーケードについて、鴨川を渡る前との比較が多くなされる（表6-14参照）。ここからも鴨川が切断の作用を発揮していることがわかる。鴨川の前後で見比べると、京都らしさ、雰囲気よさ、秩序などは大きく上昇した。



写真7-13 四条大橋から見た祇園

②全体的様相によるコネクター

A I-6において、領域分割グラフは前半は平らだが、中盤からいくつかの変化がある。花見小路通（写真7-14）があらわれ、アーケードがなくなって開放感が生まれ、人が減少し、東大路通を渡り八坂神社に至る。しかしエッジとして検出されるには至っていない。観光や店舗、そして京都らしさ、祇園や八坂といった地域性のような全体的様相がエリアをバインドしているのである。かつて四条通沿いにも軒を並べていた茶屋も、今ではほとんどが土産物屋（写真7-15）や一般の飲食店に替わっているが、それでも祇園らしさ、京都らしさは確かに残しているようだ。



写真7-14 花見小路通

通りの突き当たりに見える八坂神社と東山は、エリア後半でようやく気づきの記録が増す。その知名度や象徴的位置づけの割にはアトラクターとして弱い¹⁸。領域を支配するというよりは、領域全体の様相に沿うような役割を果たしている。



写真7-15 四条通の土産物屋

7.2.3 ルート全体からの考察

(1)歴史を継承する個性的な領域群

ルートIは大宮駅前というアトラクターに始まるが、しばらくは統一性のないぼやけた様相が続く。その後は烏丸通のビジネス街、寺町通や河原町通を中心に広範囲に展開する繁華街という強力なアトラクターの重なり合いを経て、鴨川でいったん区切られたのちに祇園というもう一つの特徴的エリアへと入ってゆく。ルート全体が大通り沿いで、領域分割グラフは終始だらだらと上昇し続けるが、把握される様相は場所ごとにかなり個性がある。

この全体的な構図は、時間的・空間的コンテキストからかなり説明することができる。烏丸は、かつて町衆によって形成された下京の産業中心地が、烏丸通の拡幅を経てビジネス街へと轉身したものである。寺町や河原町は近世以降の新地で、祇園は八坂神社門前町に始まる歓楽街である。このような基本的構図は今でも生きており、被験者の様相把握を規定している。そして堀川通を中心とするA I-1~2のぼやけた様相も、下京の街はずれという位置づけや、戦時疎開によるコンテキスト分断、戦後の烏丸方面からのスプロール的高層化という歴史的経緯により説明できる。

(2)歴史と現在の様相把握

以上のように、現在の様相は歴史によって大まかに説明できる。とは言え、御土居や市電などの歴史的事実そのものについての言及がないのはA I-3において述べた通りである。京都で数年間を暮らした被験者たちは場所ごとの地域らしさについて語ることはあっても、歴史そのものを語らない。知らないか、もし知っていても様相把握にはほとんど影響していないようである。

都市は、人と人が時間を越えてフレームを共有できる場である。しかし多くの人に共有されるた

めにはただ過去に出来事があったというだけではなく、現在の空間に何らかのかたちであらわれていることが重要なのである。

(3) 交差する街路の諸様相

四条通は直交グリッドに載っているからこそさまざまな通りと交差し、そのことに言及する記録はかなり多い。大通りだけでも、駅前というノードを形成する大宮通、領域感のみを切断する堀川通、切断と縫合の作用をあわせもつ烏丸通、繁華街の中心として縫合作用の強い河原町通、エッジになるものほとんど関心が払われない川端通、全体的様相の中に取り込まれる東大路通というように把握のされ方が異なる¹⁹。

細い道についても断続的に記録される。ガワからアンコ、外から内を覗き込むかたちである。その中でも膏薬辻子のように極端に幅が狭い道は、さらに注目を集めた。

街路の様相のあらわれはその街路単独ではなく、街路を挟んだ両側の空間の類似と差異、あるいは接続している街路同士の類似と差異といった、関係性の網目の中で決まっていると言える。

(4) 四条通のバイタリティ

四条通は多様なアトラクター、多様な街路群を数珠つなぎにして貫き止めている。まさに異なる世界を横断する経路の概念そのものである。だからこそ四条通は、京都のアクティビティの中心となっている。人々の活気がルート全体のコネクターとなり、かつ増減することでゆるやかなシフターにもなっている。

これには明治の拡張の影響も見逃せない。現在の四条通のバイタリティは、大通りとしての象徴性や、それにより与えられる高い容積率に依存していることは確かである。歴史的意味づけが多分に染み込んだ四条通の拡張は、当時さまざまな反対意見にさらされていたものの、結果的には現代京都の活気を形成する一つの英断となった。

ただしもちろん、戦後には自動車が流れ込み、通りの南北が分断されている面もある。雑多な建物が混在し、狭い歩道には人が溢れ、被験者からは不満の声も多い。寺町通付近でさえ、領域評価「雰囲気よさ」の値は3を下回っている（図7-20）。

(5) 四条通のこれまでと将来

現在までの中心市街地の変化を見ると、平安京グリッドをベースにゆっくりと形成されてきた住民主体の街が、明治から戦前にかけて大きく改造され、そしてその後は構造的変化のスピードを下げ、今や固定状態に入ったかのように思われる。鉄筋コンクリート造など昨今の技術でつくられた建物は長寿命な上に、制度の網も都市の柔軟性を失わせる方向に向かっている。各地域で行なわれている景観まちづくり運動も、こうした現実の前にはかなりの苦戦を強いられている感もある。

しかしこのような見方は、現在の固定観念に基づいていると言わねばなるまい。固定観念はフレームの弊害である。実際、わずか半世紀前には四条通沿いでも町家が立ち並び、通りには客を満載した市電が走っていた。空間はどう変化するか予測できない面も大きい。

その意味で注目したいのが、四条通の一部のトランジットモールへの転換策である。現在京都市では、1.1.2でも触れた「歩くまち京都」プロジェクトの一環として、トランジットモール化の実現に向けた社会実験や調査が進められている。もし実現すれば上述の歩みにくさを大きく改善し、南北の縫合作用を強めるなど、歩行者にとっての様相を一変させるであろう。

もちろん過密交通を四条通なしで捌き切れるのかという問題があり、タクシー会社から反対の声も上がっているという。しかし折しも人口減少や若者の車離れが始まっている。かつて市電が京都の街

を大きく変えたように、トランジットモールは京都を席卷する可能性もある。そうなれば、琵琶湖疏水や市電がそうであったように、日本の都市を変えてゆくさきがけとなるであろう。

-
- ¹ 都市計画基本図は定期的に更新されるわけではなく、場所によって更新年が異なるため。1980年前後のものについては1974～1983年、2010年前後のものについては1997～2011年の発行のものを用いている。
- ² 京都市都市計画局編：祇園新橋町なみ調査報告，日本の町並み調査報告集成第9巻 近畿地方の町並み<1>，東洋書林，1992，p.526.
- ³ 注釈2の文献，p.524.
- ⁴ 大場修：近代京都における上知令による寺社境内地の変容と番組小学校への転用：明治期の小学校校舎に関する地方史研究 その11，日本建築学会近畿支部研究報告集．計画系，vol.46，2006，p.798.
- ⁵ 八坂神社編：八坂神社（改訂新版），学生社，1997，pp.150-151.
- ⁶ 大槻洋二：京都・新京極の成立母胎としての寺町：伝統都市の近代における歓楽街形成に関する史的研究 その1，日本建築学会計画系論文集，vol.514，1998，pp.199-206.
- ⁷ 伊藤之雄：近代京都の改造—都市経営の起源 1850年～1918年—，ミネルヴァ書房，2006，p.150.
- ⁸ 京都市編：京都の歴史 第八巻 古都の近代，京都市史編さん所，1975，p.188.
- ⁹ 森谷尅久監修：ビジュアル・ワイド 京都の大路小路，小学館，2003，p.93.
- ¹⁰ 正確には「地上3階以上又は3階相当以上の高さ」の建物を指し、木造建物を含まない。この都市計画基本図の測量方法は、国土交通省の公共測量作業規程 (<http://psgsv.gsi.go.jp/koukyou/jyunsoku/index2.html>) に準じている。
- ¹¹ 大菅直：街路はいかに造られたか—戦後を中心とした京都市街路建設事業史—，京・まちづくり史，高橋康夫・中川理編，昭和堂，2003，p.208.
- ¹² 市電開通など複数年に渡るものについては年代に「～」を付している。
- ¹³ 返還された疎開空地は、都市計画基本図の「×」表記と「建設局小史編さん委員会編：建設行政のあゆみ—京都市建設局小史—，京都市建設局，1983，付図その2」とを照らし、一致する部分を示している。また帯状空地脇の返還部分については省略している。
- ¹⁴ 用途について：2008年のGISデータ（Zmap-TOWN 2 京都市地図データ，ゼンリン）、2007年の京都市の用途地域図・景観保全の指定地区図 (http://www5.city.kyoto.jp/tokeimap/search_main.htm)、およびgoogleマップ (<http://maps.google.co.jp>) をもとに筆者作成。教育施設と寺社については住宅地図（京都吉田地図株式会社）、googleマップの航空写真より敷地範囲を目視確認。教育施設については小学校、中学校、高校、大学を対象とし、幼稚園、保育園および各種専門学校などは含まない。寺社については仏教および神道の施設、天皇陵や御所を対象とし、墓地、社務所、参拝者用駐車場、併設の幼稚園などを含むがキリスト教教会、その他宗教施設は含まない。山林との境界がはっきりしないものについては、建物や参道のある範囲を便宜的に区切っている。景観保全の指定地区については歴史的街並景観保存の指定地区のみ図示し、その他は省略（実際には風致地区、美観地区などの指定がほとんどの場所でなされている。図7-9参照）。道路について：GISデータおよびgoogleマップをもとに筆者作成。googleマップの航空写真より車線数を目視確認。
- ¹⁵ 2010年前後の都市計画基本図をベースにしている。
- ¹⁶ 注釈9の文献，pp.71-73.
- ¹⁷ なお伝統産業としては和装の卸問屋街が烏丸通の一本西の室町通に残っているが、これについて被験者の記録はない。新町通・室町通中心の伝統産業から烏丸通中心の近代的な第三次産業へと転換し、把握される様相にもそれが反映されていると言える。
- ¹⁸ ただし、八坂神社の西門が実験時に工事中であったという影響はある。
- ¹⁹ ただし、大宮通と東大路通については実験のスタート地点とゴール地点の間近にあったことは差し引くべきである。ルートの端点に近いと領域分割されにくいという傾向が考えられるからである。たとえばルート I のゴール地点を円山公園あたりに設定すれば、八坂神社境内～円山公園を一つの領域とみなし、東大路通で領域分割をする被験者はもっと多かったであろう。

7.3 ルートⅡの総合分析

7.3.1 ルートⅡ周辺の時間的・空間的コンテキスト

(1) 明治中期まで(図7-24)

ルートⅠが平安以来の下京の中心地としての歴史をもつのにに対し、ルートⅡは上京、そして室町時代の名残が色濃い。また旧市街と郊外を横断するルートでもある。

平安京プランの基準点と考えられている船岡山がルート沿いにあるが、グリッドプランそのものは一条通を北限とし、それより北には北野天満宮や葬送地・蓮台野がある程度だった。しかし室町時代になるとこの地域は大きく変貌する。まず三代将軍足利義満が三条坊門殿から室町殿(花の御所)に移る。次に義満は室町殿の隣に広大な相国寺を建立(1382年)。義満自身の禅宗への深い帰依があったのであるが、室町王権の力を示す大プロジェクトともなった。これによって、公家衆がもともと多かった上京は、政官の街としてさらなる発展を見せる。

37歳で将軍職を息子義持に譲った義満は次に、鎌倉幕府に功のあった西園寺家の邸宅地を譲り受け、北山殿を建設(1397年)。ここが新たな政治と文化の中心地となる。義満の死後北山殿は荒廃するが、唯一残された舍利殿を中心に義持は禅寺として再生する。これが鹿苑寺(金閣寺)である。

八代足利義政の代になると政治は荒れ、応仁の乱(1467~77年)が勃発。上御霊神社付近での衝突を発端として上京は主戦場となる。寺之内小川のあたりは東軍(細川方)と西軍(山名方)の対峙する一番の激戦地だったという¹。乱が終わると町衆たちは上京を復興し、構を築造。そして乱で四散していた織物業者が西軍の陣地跡に帰還し、大舎人座を形成する。これが西陣の始まりである。

そして豊臣秀吉は聚楽第、寺町と寺之内の寺院集積地、そして御土居を建設する。聚楽第はすぐに破却されるが、御土居の西側部分は鴨川沿いなどとは違って江戸期にもほとんど手つかずで残された。

また同じく秀吉の時代に形成されたのが、小川通の茶道の街である。茶道の大成者千利休は、秀吉と密接な関係にあったが、やがて確執により切腹させられる。しかし利休の子宗淳は秀吉に再興を許され、小川通の地を与えられる。宗淳は大徳寺より利休の茶室「不審庵」をこの地に移す。宗淳の跡は子の宗旦が継ぐが、宗旦は隠居後に不審庵の北に「今日庵」を営む。やがて、この今日庵が不審庵の裏にあることから「裏千家」、それに対し不審庵が「表千家」と呼ばれるようになり、武者小路通小川東入の武者小路千家とあわせて三千家とされる。以後数度の火災に遭うものの、そのたびに旧態を活かして建て直され、代々受け継がれてきている²。

金閣寺北方には左大文字山がある。毎年8月16日に盂蘭盆会の行事として行なわれる五山送り火の一角をなし、普段も大の字に並ぶ火床が見える。この行事の始まった時期は平安時代とも室町時代とも言われ定かではないが、左大文字については、山自体が蓮台野に続く葬送地であったことから鎮魂の送り火が始まったのだという説がある³。

さて、1889年の地図(図7-24)を見てみよう。西陣は主に西方へと拡大しているが、船岡山周辺をはじめとした北方、そして千本通より西は田園地帯のままである。上京、西陣には平安京由来のグリッド街区は見られず、南北に長い街区と東西に長い街区を取り混ぜて構成されている。明治期、西陣織産業は生産工程ごとに高度な分業体制が成立しており、多くの職人が家内労働に依存する零細型の機業を営んでいた⁴。細長い街区には織屋建てと呼ばれる職住共存の小さな借家長屋が並んだ(写真7-16)。

ここで中央が空地になっている街区が多いことに気がつく。こ



写真7-16 織屋建ての街並み

のうち寺之内や智恵光院通以西のほとんどは寺社境内によるものである。しかし他のものは明治維新の影響だと考えられる。つまり幕末には烏丸通周辺には公家地、その西方から智恵光院通近辺までの範囲には武家地が多くつくられており⁵、それが明治維新とともに消滅した結果の中抜け街区だと考えられる。維新のショックを明治中期までひきずっていることを伺わせる。

大宮通は西陣の主要な軸線で、市街地もこれに沿って北に拡大している。千本通は朱雀大路の軸線から船岡山を避けるように西に曲がり、丹波や若狭に通じる長坂口に通じている。金閣寺へは北野神社脇から御土居を抜けさらに北上する参道が確認できる。江戸中期にはすでに金閣寺は地方から参拝客を集めており⁶、参道沿いには門前町も形成されているようだ。一方、船岡山に鎮座する建勲神社は1880年につくられたばかりの新参であり、門前町のようなものは見られない。

同志社大学の前身になる同志社英学校はこの時期にすでに存在している。新島襄は京都府の顧問・山本覚馬の協力を得、山本の所有していた旧薩摩藩邸になる土地を校地として1875年に同校を開いた⁷。これが現在の同志社大学今出川キャンパスであり、建築家・ヴォーリズらの設計した建物が並ぶ(写真7-17)。以後の多くの大学が郊外に広い土地を見つけて開学する中で、いきなり市街地につくられた例は珍しい。同志社大学は開学以降も相国寺旧寺領などを加えて拡大する。



写真7-17 同志社大学の礼拝堂

(2) 明治後期～大正(図7-24～25)

ルートⅠ周辺ではこの時期に市街構造が激変したが、それに比べるとルートⅡ周辺の動きは少ない。市街地の拡大もゆっくりとしたものである。

琵琶湖疏水分線が高野川、賀茂川を越えて伸び、小川(こかわ)から堀川へと合流する。京電北野線が開通し、続いて道路拡幅とともに市電各線が敷かれる。

ルートⅡの終盤を占める鞍馬口通は、この時期に延伸された道である。金閣寺参道へと接続されているが、オリジナルな参道ではない。

1918年に周辺農村部が京都市域に編入されると、次の30年は激動の期間となる。

(3) 昭和初期～戦後(図7-25～26)

まずは既存市街地をぐるりと取り巻く環状道路が計画される。そしてこの道路建設を円滑に進めるために1926年、道路の幅員の10倍に相当する範囲に都市計画法13条による土地区画整理事業地が設定される⁸。1953年時点では、特に北大路通沿いは組合施行により戦前に換地処分が済み、家屋が建てこんでいる。これら事業地の街区割は、一部金閣寺参道などの既存街路によって乱されてはいるが、東西に長い街区が基本となる⁹。紙屋川の流路も整備されている。

次なる激変は建物疎開である。堀川や琵琶湖疏水分線の消防用水としての活用を背景に、堀川通～紫明通が疎開対象となる。これらの疎開空地は戦後に幹線道路として整備されたが、結果的に地域を大きく分断することとなった。なお堀川通の紫明通以北の部分は、土地区画整理事業の時点ですでに広い道が据えられている。堀川通を新しい幹線道路にしようという狙いが戦前からあったのかもしれない。しかしその道よりも広い堀川通～紫明通の建物疎開によって、堀川紫明交差点はいびつな形で接続している。

西陣織産業は戦争による打撃を被るが、朝鮮特需などを背景に復興。化学繊維の使用も始まり、大小の工場もつくられ始める¹⁰。その中で、旧市街地と土地区画整理事業地の間を埋めるように北と西に拡大する。この時期に形成された街区は旧市街地のそれよりも小さく、地形や既存街路に影響を受け

東西南北の軸に沿わない道もたくさん生まれている。そして街区の内部を縫う路地も数多い。

なお1950年には、金閣が青年僧の放火によって全焼するという事件が起こる。しかし金箔もはがれ老朽化が進んでいた金閣は、この事件によりかえって創建当時を思わせるようなきらびやかな姿によみがえり¹¹、以後ますます重要な観光地となってゆく（写真7-18）。



写真7-18 金閣と観光客

(4) 昭和中期(図7-26～27)

モータリゼーションが市電を駆逐、金閣寺周辺には観光駐車場や観光道路が整備される。

開発の遅れていた西大路通周辺も建て揃い、御土居もついに大部分が取り壊されるなど、市街地の充填が進む。この図から建物輪郭線が図示されているが、それを見てみると、西陣の細長街区では背割線できれいに割られ、織屋建ての家屋が立ち並んでいることが伺える。

同志社大学や立命館大学が新キャンパスを開拓し、以前よりあった大谷大学や佛教大学などともあわせ、京都の周縁部らしい大学の多い街となっている。

(5) 昭和後期～現在(図7-27～28および図7-29)

多分にもれず、大通り沿いを中心とした高層化が進行する。特に堀川通は高さ制限が45mに設定され¹²、大規模マンションが連なるようになった。

西陣織産業は苦境に立たされている。工場の市外転出、消費者の和装離れ、また海外製品との競争などによって衰退、通りに響いていた機織りの音もほとんど聞かれなくなっている。機業だけでは立ち行かなくなり、マンションやビルの経営を始める地主も多い¹³。また地図を細かく見ると、織屋建ての街並みの中にかかなりの数の駐車場が目につく。ほとんどが数台程度しか止められないような零細の駐車場である。

用途地域は大通り沿いに商業系が、それ以外に住宅系が配されるわかりやすい構造である。西陣は準工業地域になっているが、実際は住宅地化が進行している。

ルートⅡの周辺地域は、上京や西陣の核となった部分、そこから20世紀にスプロールしていった部分、それに歯止めをかけるべく設けられた土地区画整理事業地、そして山林や寺院という同心円構造によって理解することができる。そしてルートⅡは、これらを内から外へと貫くように設定されている（図7-30）。なおこのような同心円構造は、いくつの層に分けられるかの違いはあっても、京都においてある程度汎用的な都市構造でもあると考えられる。

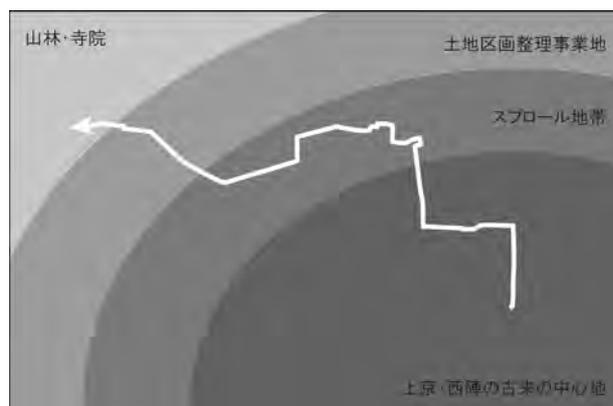


図7-30 ルートⅡ周辺地域のコンテキストのダイアグラム

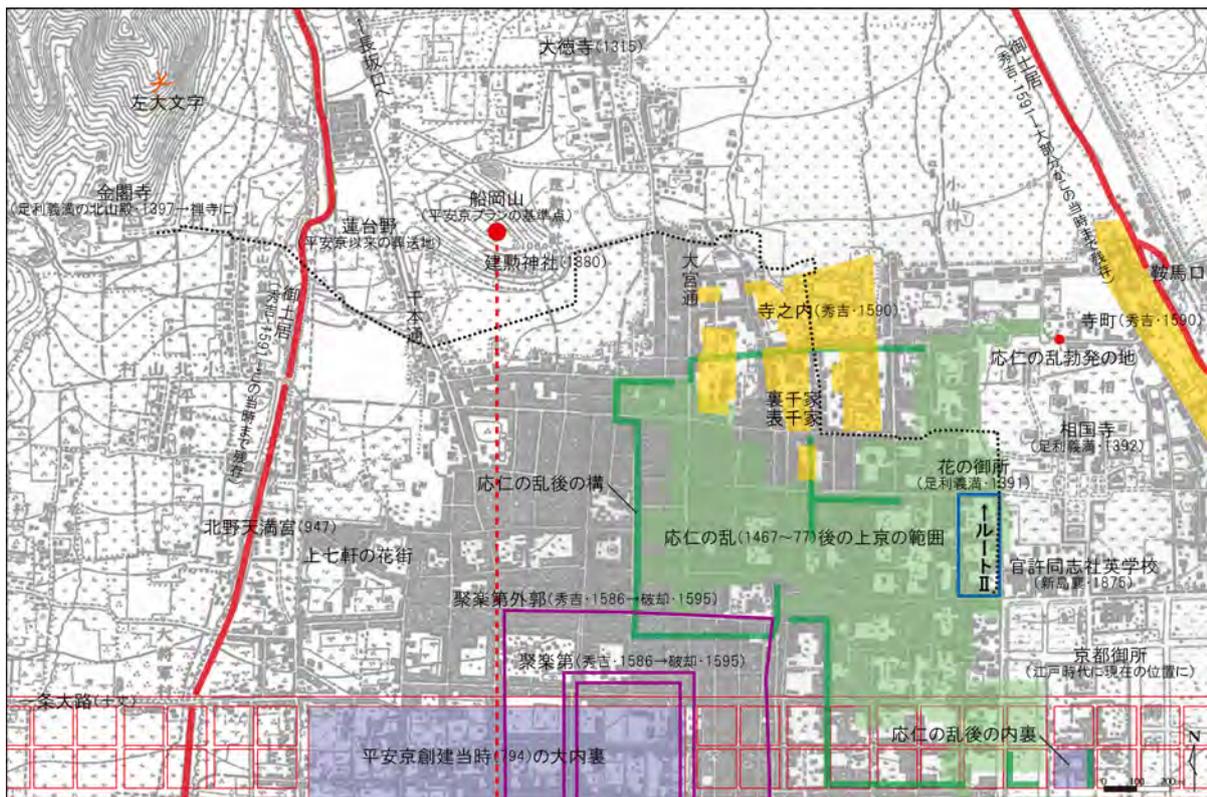


図7-24 1889年(国土地理院発行、京都市立総合資料館蔵)の仮製地形図とそれまでの都市の変遷(ルートII)

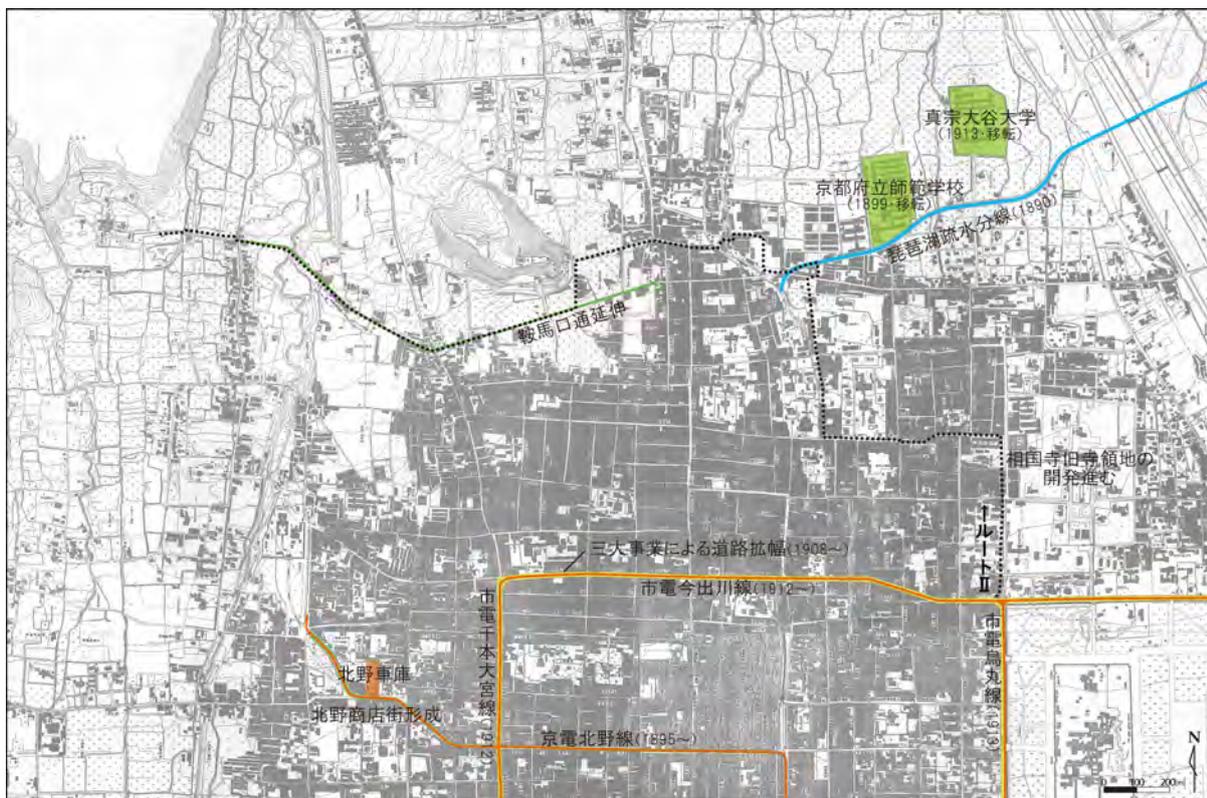


図7-25 1922年の都市計画基本図(京都市都市計画局発行、京都市立総合資料館蔵)とそれまでの都市の変遷(ルートII)

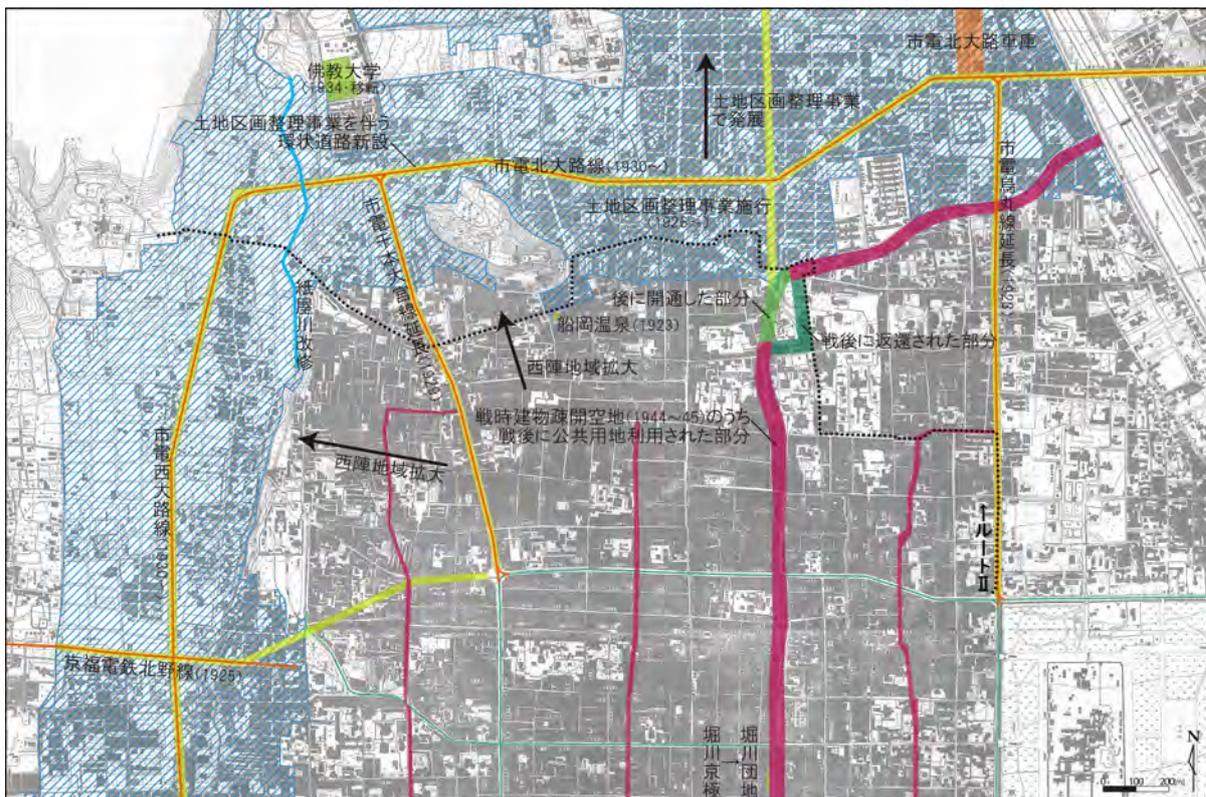


図7-26 1953年の都市計画基本図（京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵）とそれまでの都市の変遷(ルートII)¹⁴

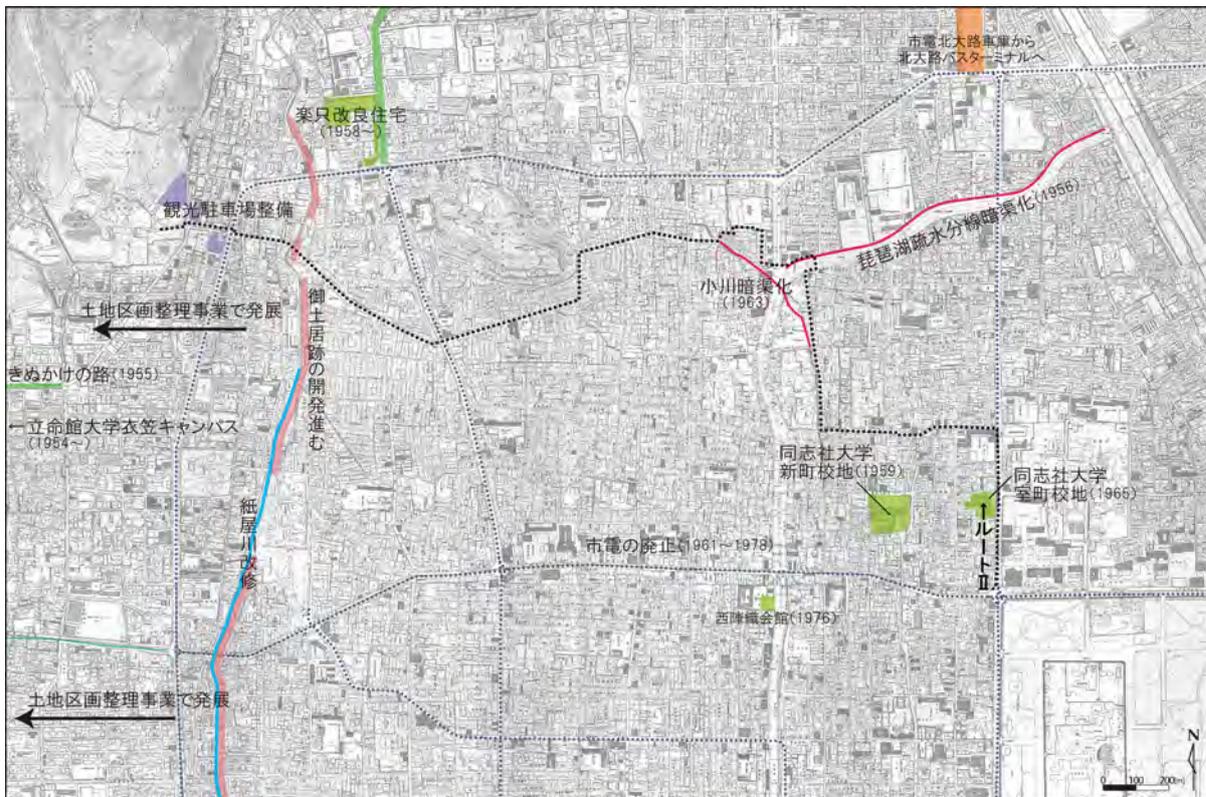


図7-27 1980年前後の都市計画基本図（京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵）とそれまでの都市の変遷(ルートII)

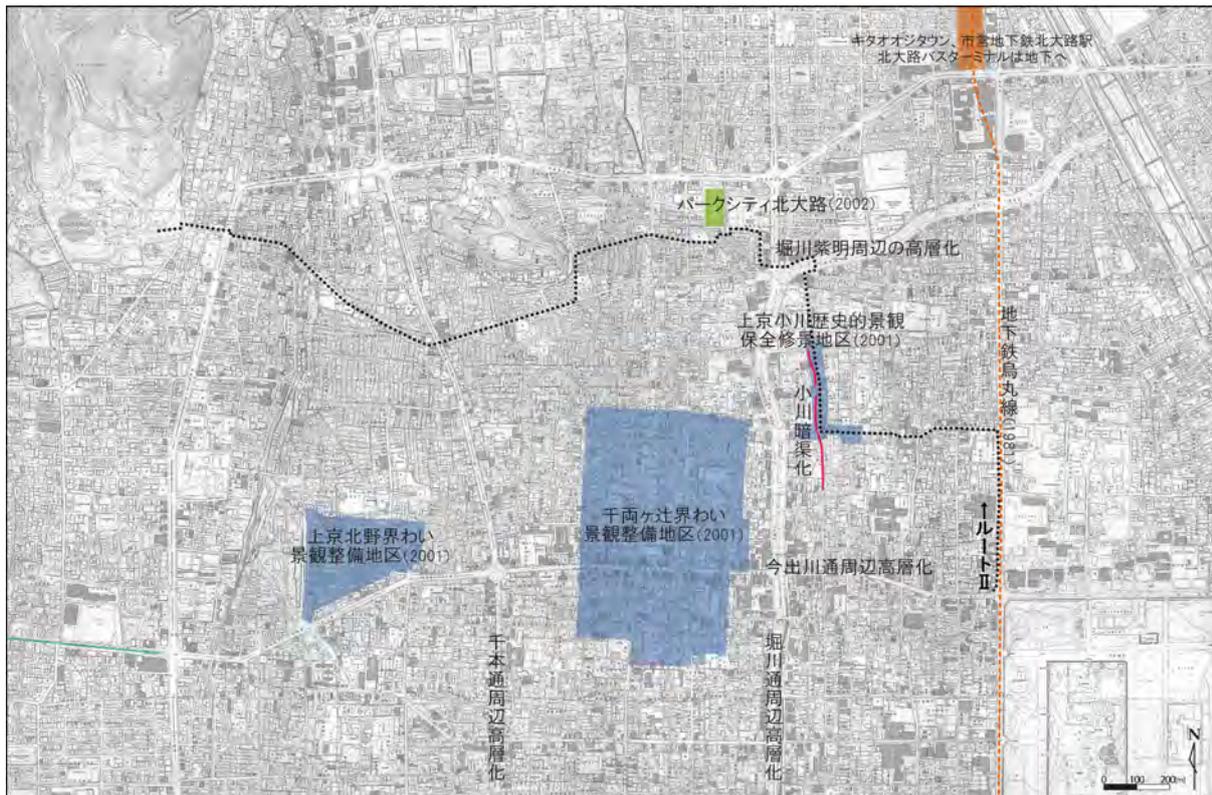


図7-28 2010年前後の都市計画基本図（京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵）とそれまでの都市の変遷(ルートII)

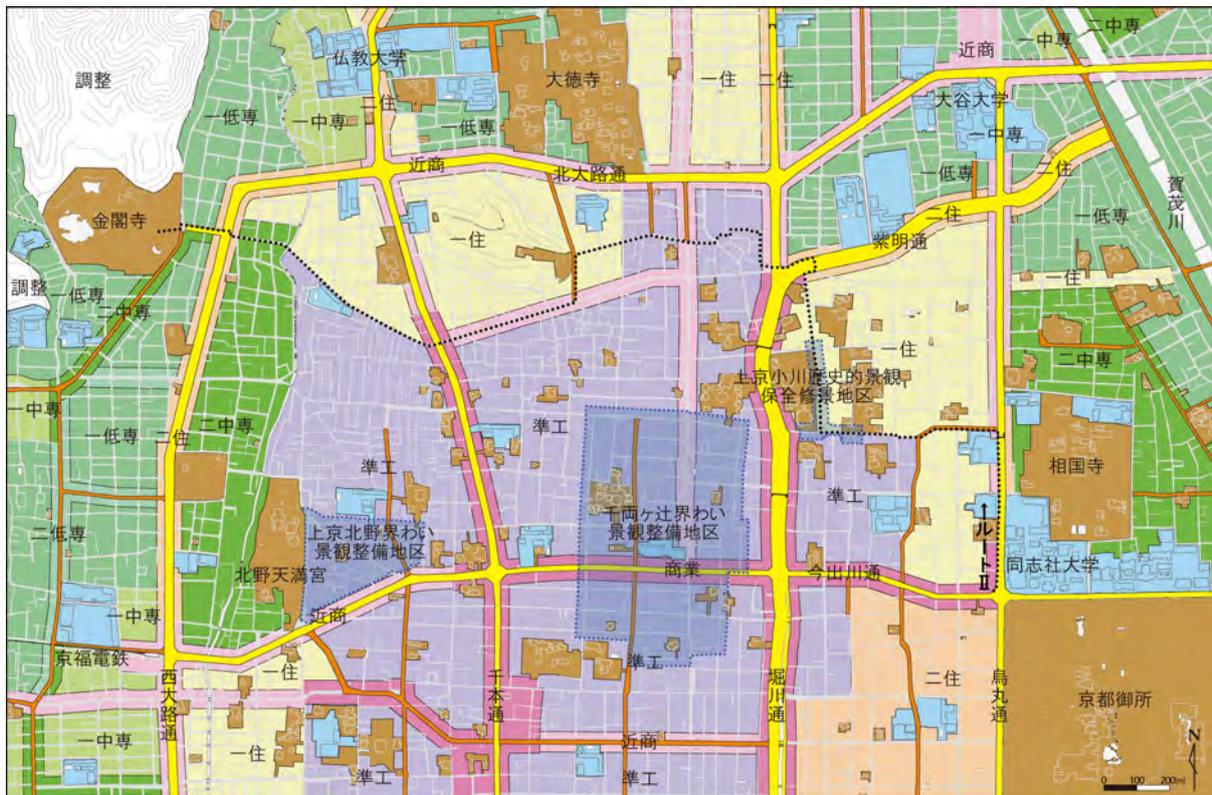


図7-29 2007年の用途および道路構造(ルートII／凡例は図7-16)

7.3.2 エッジ・エリアごとの分析

(1) A II-1

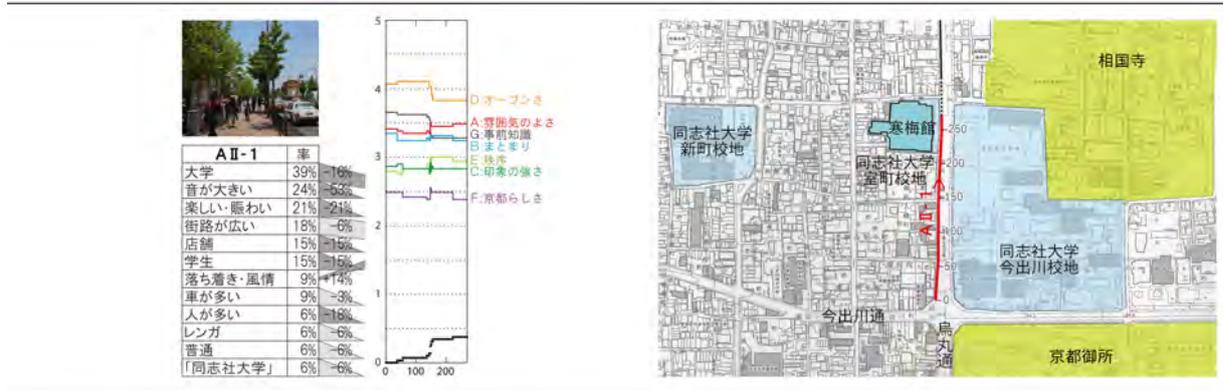


図7-31

①同志社大学の面的アトラクター

A II-1は同志社大学により特徴づけられたエリアである。新島襄開校の今出川校地にはヴォーリズらの手になるレンガ造りの校舎が並ぶが（写真7-17）、烏丸通を挟んだ室町校地に建つ「寒梅館」（写真7-19）も素材やデザインを継承してつくられている。これによって、烏丸通という大通りにもかかわらずその両側が縫合されている。烏丸通からやや西に入った場所にある新町校地も含め、アトラクターが面に拡大していると見ることができる。



写真7-19 同志社大学の寒梅館

被験者からは、大学周辺の賑わいや店舗に関する言葉も多く挙げられている。大通り沿いのエリアの中では比較的「雰囲気よさ」の評価も高い。

(2) E II-1～A II-2

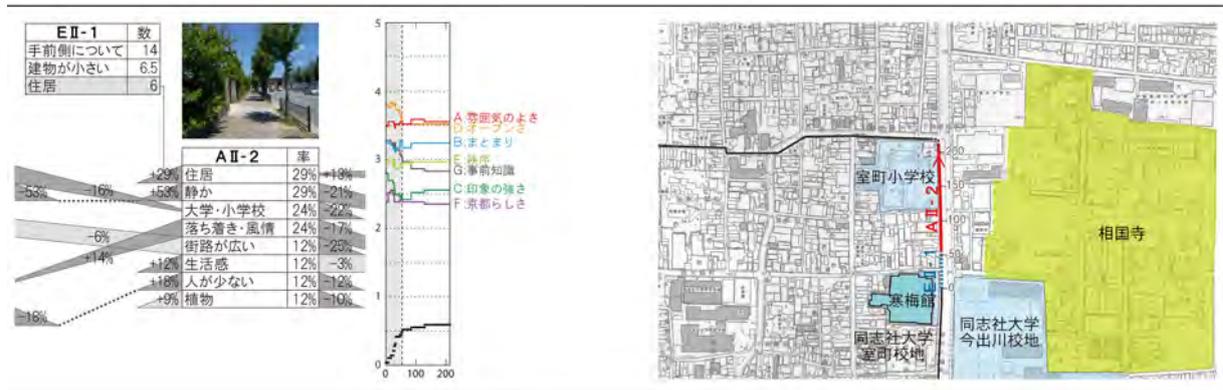


図7-32

①アクティビティの反転

同志社大学の校地の終わり、小さな住宅があらわれるE II-1では、領域表現におけるアクティビティに関する言葉がわかりやすく反転する（「音が大きい」→「静か」、「人が多い」→「人が少ない」、「楽しい・賑わい」の消滅、「落ち着き・風情」の増加）。大学というアトラクターがアクティビティの大きな吸引力になっていたことがわかる。

②相国寺の影響力の低下

このエリアの東には相国寺が位置している。かつての寺領は烏丸通までおよんでいたが、上知によ

る寺領の召し上げ、大通りの誕生、大通り沿いの開発を経て今は鳥丸通から見えない。被験者の記録にも相国寺の文字は一つもない。ルートIの建仁寺もそうであったが、かつて威容を誇ったものの今や大通りの奥にひそむ大寺院も多い。そして小さな寺院も同じく、表通りには門しか見せていないようなものが多い（写真7-20が一例、また図7-15や図7-29にもこのような寺をいくつか見つけることができる）。7.1.3では寺院が信仰や政治権力などの面で弱体化したことに触れたが、街路における様相への影響力も同様に弱め、他のものにとってかわられている。



写真7-20 街区の奥に見える報恩寺
(小川通寺之内下る)

(3)E II -2~A II -3

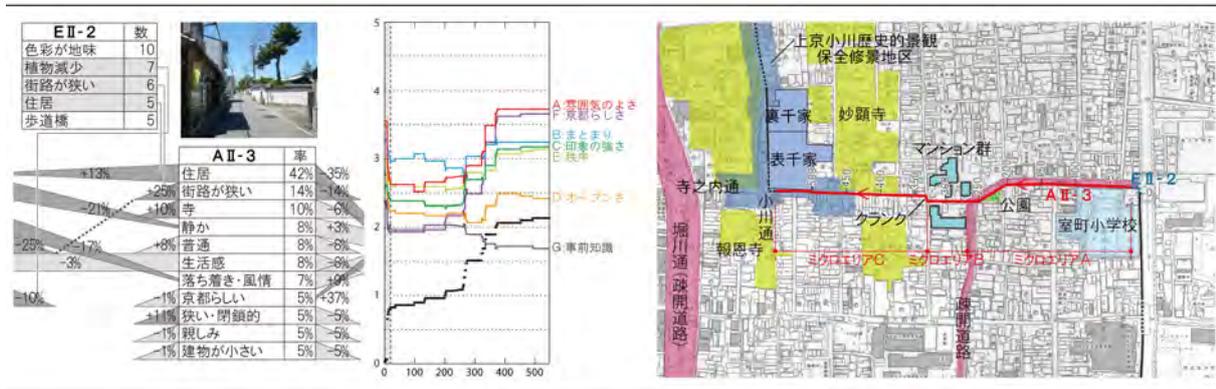


図7-33

①ガワからアンコへ

E II -2は鳥丸通から小さな通りへと折れる地点におけるエッジである。道幅が狭くなり、車は減って静かになる。道幅によるさまざまな変化が折り重なる上に、曲がり角による遮蔽縁効果もあり、非常に鋭利なエッジとなっている。

さらにこのエッジの特徴は、様相表現のトップが「色彩が地味」だということである。建物の色彩については通常、スケールや年代などに比べて記録されにくい。しかし「なんとなく白く」「くすんだ感じ」といった曖昧なものではあるが、ここでは集中している。実際、店舗や植栽が減って白～ベージュ系の住宅に切り替わる。これも、大通りから街区内部へと入ってゆく際の様相の変化の特徴と言えるかもしれない。



写真7-21 ミクロエリアA

②3つのマイクロエリアと街路構造

領域分割グラフから明らかなように、A II -3内には大きな分節が2つある。それにより区切られた3つの領域（以下「マイクロエリアA、B、C」と呼ぶ、写真7-21~23）について分析する。

マイクロエリアAは建物疎開で広げられたもので、そのスケール感や味気なさがアンコとしての性質を弱めている。街並みもあまり魅力のないものと捉えられ、大通り沿いのA II -2よりも領域評価の「雰囲気よさ」などは低い値となる。マイクロエリアBは疎開対象にならず細いまま残された道である。マンションが出現し、新しさが際立つ。マイクロエリアCは秀吉のつくった寺之内である。



写真7-22 ミクロエリアB

右手に見える妙顕寺を中心に建物は古く、空が大きく開ける。「雰囲気よさ」「印象の強さ」「京都らしさ」などはここで一気に上昇し、烏丸通での値を越える。

いずれの分節点でも道幅について集中的に記録されている。マイクロエリアAの疎開道路からBの細い道に入り、そして次のBとCの間にはクランクがある。このクランク部分は道幅にかかわらず多くの車が走り抜け、道の細さが際立つ。このような街路の微妙なずれは、もともとグリッドプランの敷かれていなかった上京や西陣の特徴で、様相が細かく切り替わる要因となっている。



写真7-23 ミクロエリアC

(4)E II-3~A II-4

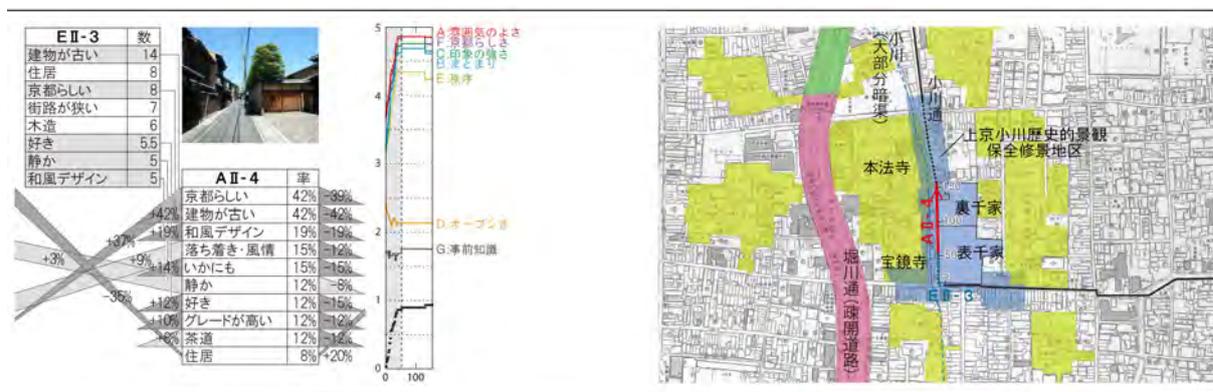


図7-34

①差異のはっきりとした典型的エッジ

E II-3は小川通入口における鋭利なエッジである。曲がり角による遮蔽縁効果、道幅が狭まる効果、そして表千家（写真7-24）と裏千家（写真7-25）の並ぶ木造の古い家並みの登場というさまざまな要素が重なり合い、静けさや京都らしさ、街並みへの称賛の言葉が連なる。差異が様相を顕在化させる典型的パターンである。

A II-4でもエッジで記録された内容がそのまま領域表現の上位を占める。建物機能に関する領域表現は高い値を示さず、茶道の街だということにさえ気づかない被験者も多い。統一された建物が集積することで、ここには機能の如何を感じさせないような強烈な様相が生まれている。

「オープンさ」と「事前知識」を除き、領域評価指標は急上昇し、数値は5に近づく。予備知識がほとんどなく、また前エリアにより「このあたりは普通の住宅街だ」という印象がフレームにおいて固定化しつつあったことも、この現象を強める一因であろう。



写真7-24 表千家不審庵の表門

②使い方も含めたコンテクストの継承

時間的な視点から見たこの街並みの大きな特徴は、茶道の家元としてずっと使われ続けていることである。本来の機能や理念が読み替えられて観光地化した街並みや寺院とは、この点で異なっている。両千家の向かいには土産物屋ではなく茶道具屋が並び（写



写真7-25 裏千家今日庵の兜門

真7-26)、観光客も見当たらない。お茶の稽古に通う和装の女性の一団、門の前の通りを掃き清める男性などが見られるだけである。建物の古さだけではないそうした通り全体の在り方が、いわば「本物の古さ」を感じさせる(6.5.2参照)。6.5.3でも取り上げた、このエリア前後の「タイムスリップする」という表現はこのことを表わしている。

おそらく、意匠的デザインや機能的デザインとは異なる「様相論的デザイン」とは、このような全体的状況のデザインということになるだろう。この街並みは、見た目だけではなく静けさ、厳かな雰囲気、使い方やしきたりを含めた全体性をうまく継承し、独特の様相をつくりあげている。



写真7-26 茶道関係の店舗の街並み

(5)E II-4~A II-5

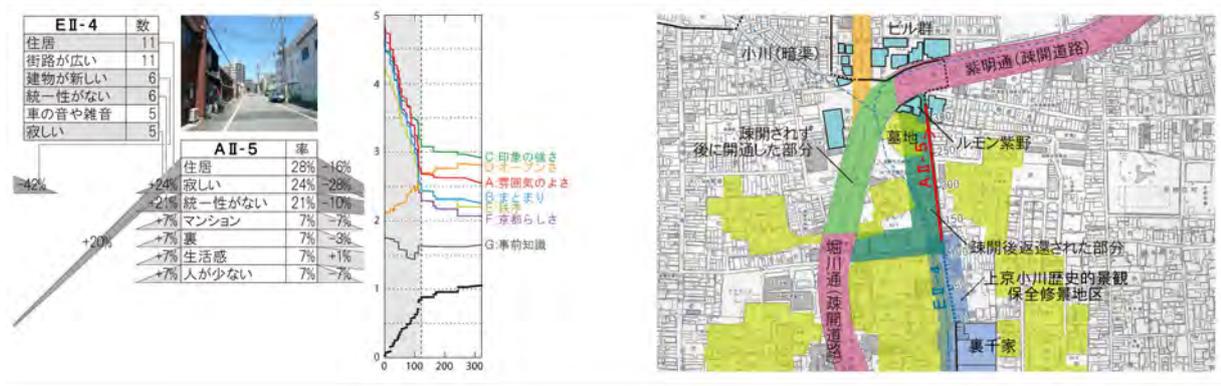


図7-35

①「戻る」エッジ

E II-4では大きく新しい建物の増加、道幅と交通量と雑音の増大などE II-3とは反対の現象が起こる。その結果各領域評価値はどんどんと下がり、単調で寂しいという言葉も見られる。また前方に見えてくる高層マンション(写真7-27、「ルモン紫野」)への気づきが、これに拍車をかける。「現代に戻る」「普通の街に戻る」といった表現は、ここでの様相の変化をよく捉えている。その結果A II-4はアトラクターとして浮かび上がることになる。



写真7-27 「ルモン紫野」

②コンテキストの切断

A II-5でも基本的にはエッジ内で書かれた言葉がコネクターとなっており、領域表現にもネガティブな言葉が並ぶ。その歴史的要因を探ると建物疎開にたどり着く。堀川通の疎開地と紫明通の疎開地は、なめらかにつながる現在の通りの線ではなく図7-35に示すようなクランクする線によってつながられており¹⁵、A II-5の範囲はいったん疎開され、戦後に地主に返還された部分にあたる。

このコンテキスト切断の経緯が如実にあらわれ、被験者からは「寂しい」「統一性がない」「裏」などの言葉が発せられる。時間の流れをすっぱりと断ち切られた跡に一軒家、集合住宅、市の清掃局の事務所などがめいめいに建つ。戦前からあった墓地も相俟って、殺伐とした雰囲気を感じさせる。それが前エリアとの対比によって、なおさら浮き立つのである。

(6)E II-5~A II-6

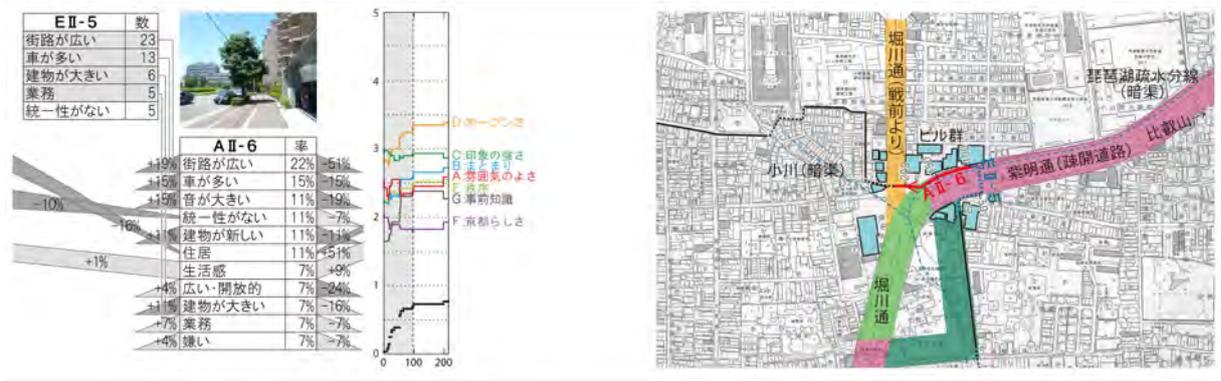


図7-36

①変化を強めるエッジ

E II-5では小川通から紫明通（写真7-28）へと移り、道幅と交通量がさらに増し、車の音も目立つ。建物では大きなマンションやオフィスビルが並ぶ。前のエッジで起こった様相の変化をさらに強める類のエッジである。ただ様相の本質的なところに変化はないため、領域評価指標の変動は小さい。



写真7-28 紫明通

紫明通はかつての琵琶湖疏水分線をトレースした曲線状の道である。その影響でのこぎり状の平面形をもつ建物が多く、それに対して違和感を表明する記録も見られる。

②人工と自然

紫明通沿いには木々が植えられ、前方には一瞬比叡山が見えるが、ポジティブな評価には至っていない。一般的に自然は好印象をもたらす傾向があるが、人工物環境との組み合わせも大切なのである。

(7)E II-6~A II-7

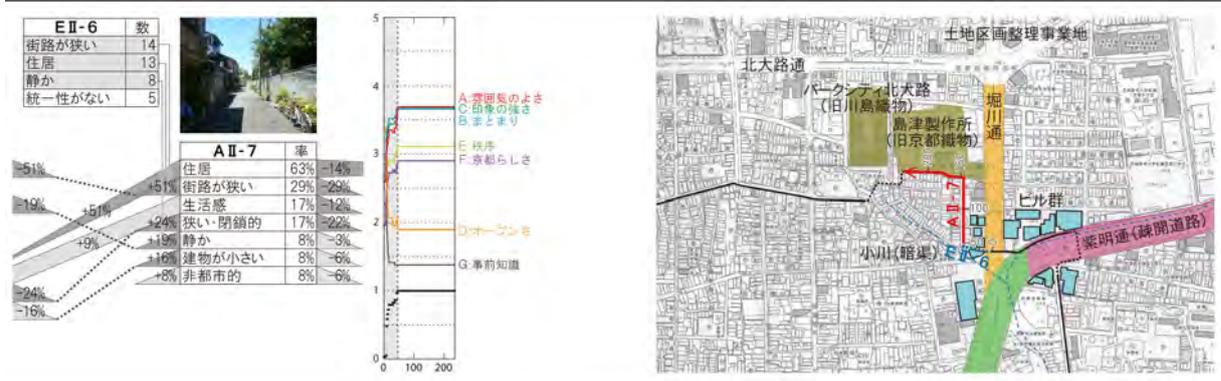


図7-37

①外から内へ

E II-6は、疎開空地跡のスケール感から一気に細い道に入る場所にある「外」から「内」へ、という鋭利なエッジである（写真7-29~30）。住宅街になり、道幅が狭まり閉塞感を感じ、静けさが増す。領域表現の多くの言葉が反転し、シフターとなる。ここでは堀川通そのものはエッジとはならず、外の秩序として前エリアに含まれている。

②隙間の街

歴史的経緯をたどるとAⅡ-7は、南東方向へ流れていた小川とその北にある「京都織物」の工場（当時）との間に、20世紀前半に形成された住宅地である。狭い範囲に強引に宅地割をしてつくられており、家屋と工場のブロック塀が向かい合う状況も発生している。

しかしそのおかげで道は細くなり、またエリアの前後に曲がり角が発生することで内的秩序が高められる結果となった。そして右手の長い壁という視覚的に大きな変化があらわれても、領域分割はまったくない。前の2エリア同様ごちゃごちゃしてはいるが、生活感や落ち着きに加え楽しさまでもが感じられ、領域評価値も高い。元来は隙間に形成された街であったが、結果的に周囲と異なる強い特徴を得るに至った。



写真7-29 堀川通との交差点



写真7-30 路地に入る

(8)EⅡ-7～AⅡ-8

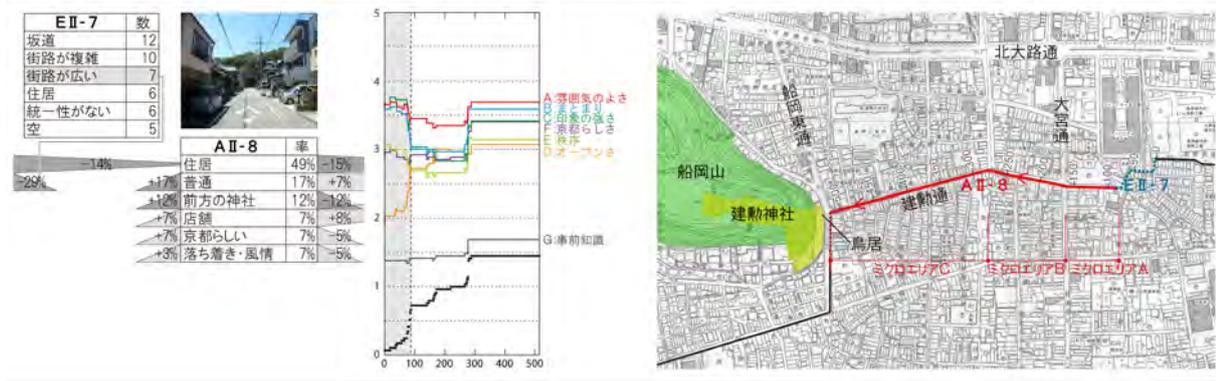


図7-38

①特徴を打ち消すエッジ

EⅡ-7ではエッジ内の様相表現と次エリアの領域表現との関連性は薄く、むしろ前エリアと関係がある。このエッジの役割は新しくコネクターをつくるというより、前エリアのコネクター（路地性）を打ち消したことにある。その結果、「普通」とされるAⅡ-8に至る。

②弱いアトラクター

AⅡ-8の領域分割グラフを見ると、AⅡ-3と同様に大きく3つのマイクロエリアに分かれていることがわかる。特に3番目のマイクロエリアは船岡山と建勲神社の鳥居による典型的な「山アテ」の景観（写真7-31）があらわれ、そのことへの気づきがかなり集中的に記録される。領域分割グラフは0.5近く上昇し、領域評価指標もすべて上昇する。

ただし、エリア全体では「普通の住宅街」というコネクターが存在する。建勲神社は領域を完全に支配するような強いアトラクターではなく、依然普通の住宅街のままで山と鳥居という新たなコネクターが生じたという程度の捉えられ方である。明治以降の



写真7-31 建勲神社の鳥居

歴史しかもたない建勲神社は門前町を形成せず、知名度もなく、住宅街にひっそりとたたずんでいる。

(9)E II-8~A II-9

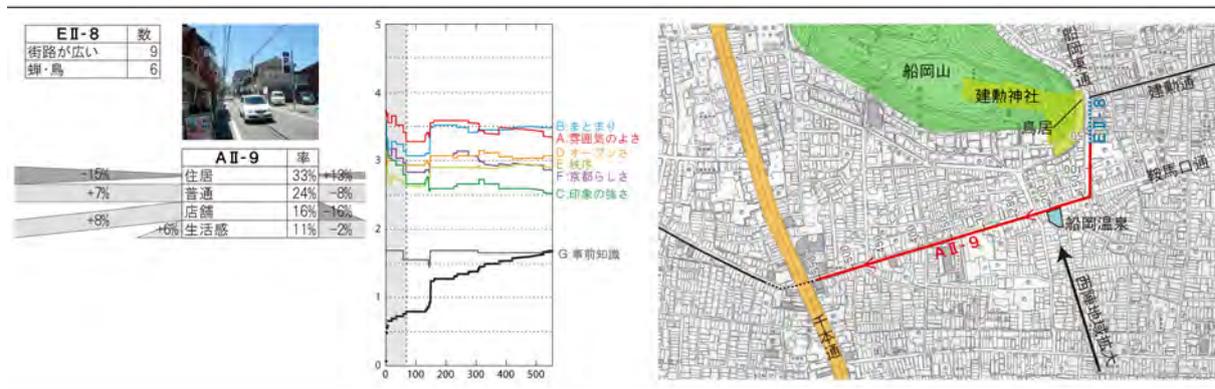


図7-39

①「普通の街」の形成要因

建勲通から船岡東通に出てアトラクターから離れるに従い、いよいよ「普通」という言葉が多く見られる(図6-17参照)。A II-9のメインとなる鞍馬口通は、歴史的には1922年の地図(図7-25)により確認できる決して古くはない通りである。店舗や集合住宅が増え、建物のスケールや年代は混在し、駐車場や工事、そして車も多い。主に昭和以降につくられた計画性や統一性に欠ける街並みが、「普通の街」の形成要因として挙げられる。指定されている近隣商業地域も、住居と店舗の混成を承認し、また助長している。

ただし鞍馬口通はスプロールの開発に先立って田んぼの中にまっすぐとひくことができ、街路構造が乱れがちなこの地域の主要軸の一つにもなっている。

(10)E II-9~A II-10

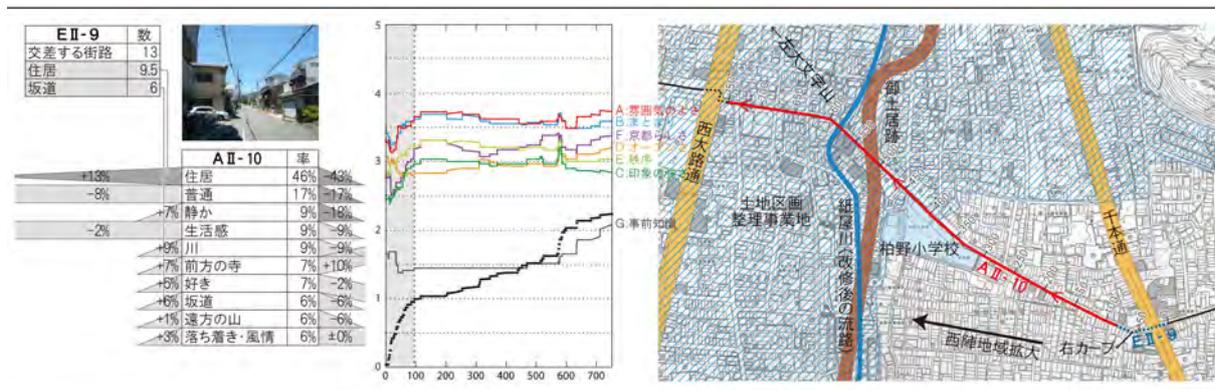


図7-40

①領域感と様相

大通り(千本通)との交差と、その後のなだらかな右カーブ(写真7-32)の連なる場所にE II-9はある。大通り前後の領域評価「雰囲気の高さ」などの値は比較的高いため、千本通との交差点でのみ評価値が下がるという現象が見られる。ガワの部分はずっと歩くルートIとは違い、ガワとアンコの明確な違いがここにもあらわれている。

ただし前後での領域評価の変動は大きくなく、主に領域感だけ



写真7-32 E II-9の右カーブ

を切断する大通り型エッジの一つと見てよい。なだらかなカーブも、エッジのゆるやかさに寄与している。

しかし前後に共通点が多いだけに、店舗が減り坂道がやや急になるなどの微妙な変化を被験者たちはよく捉えている。

② 洛中と洛外との境界

580m付近で交差する紙屋川（写真7-33）は、被験者に大きな驚きをもたらした。道路との高低差が激しく、その崖に張りつくように集合住宅が建っている。この紙屋川を境に領域分割をする被験者も多く、紙屋川周辺だけを一つの領域としている被験者さえいる。

この紙屋川は、かつては御土居の濠として利用されていた。そこから先はかつての洛外であった。また土地区画整理事業による整然としたグリッド街路が展開される¹⁶（写真7-34¹⁷）。「家の間隔が広がる」などといった様相表現も散見され、異なる原理によってできていることが多少は様相把握にも反映している。



写真7-33 紙屋川



写真7-34 土地区画整理事業地

(11) E II-10 ~ A II-11

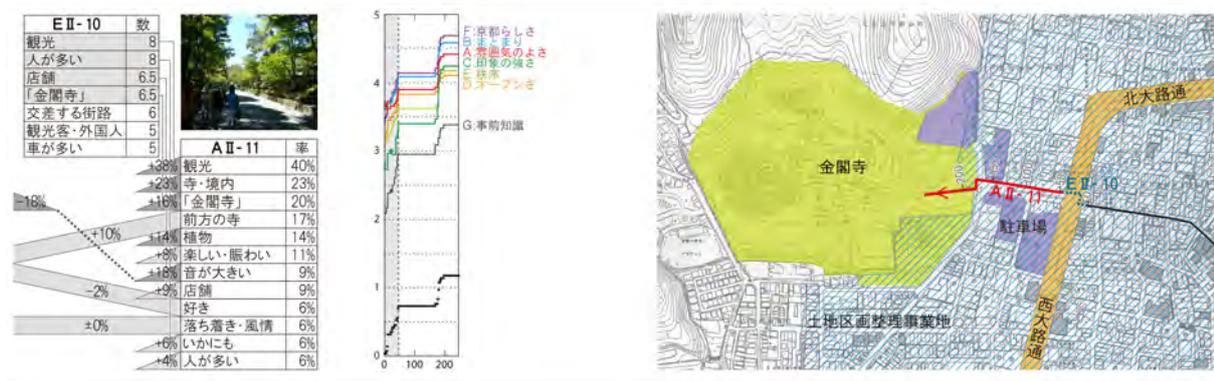


図7-41

① 強力なアトラクター

西大路通がE II-10となっている。大通りで車が多いということの他に、観光客や外国人の増加や観光客向け店舗の出現、木々の増加が記録される。エッジの段階から金閣寺という言葉も多く見られる。大通りによる切断効果もさることながら、強いアトラクターの出現によるところが大きいエッジである。領域評価指標はいずれも上昇しており、室町以来の景勝地はいまだ健在である。この現象には歩く以前からの知識と、それまでかなり長い間「普通の街」を歩いていたという長期・短期のフレームのはたらきも寄与していると考えられる。

なお、観光地化に伴って金閣寺参道の左右ともかなりの数の駐車場がつくられているが、植え込みや土産物屋でうまく隠されていて被験者からの指摘はない。参道の雰囲気壊さないよう演出がなされている（写真7-35）。



写真7-35 植え込みの裏の駐車場

7.3.3 ルート全体からの考察

(1) リズミカルな様相の変化

ルートⅠのように直線ではなく、全体的な構造を理解しづらいルートである。しかし個々の場所をとってみると、マイクロエリアを含めてははっきりとしたエッジ・エリアが多い。曲がり角や道幅の変化、大通りとの交差などが繰り返され、様相はリズミカルに切り替わる。短期的フレームも次々と書き替えられてゆく。これはルート選択の恣意性によるところもあるが、実際に地図を見ても、この地域全体に曲がり角やT字路は多い(図7-42)。

この要因として考えられるのが開発の経緯である。地域全体に直交グリッドのような街区計画がなされておらず、どちらかというと場当たりの発展を遂げた。特に昭和以降のスプロール期においては街路構造も建築様式もかなり混沌としている。

ただし街路構造を歪ませている遠因は地形にもある。この地域には小川の流路、船岡山、紙屋川や金閣寺に向けた斜面が存在し、さらには琵琶湖疏水分線による人工的な曲線もある。ここでは街路や区画割りは地形に沿って変形されている。なおこれと対照的に地形にかまわずグリッド街路をひいたのがサンフランシスコで、この街路計画ゆえに、急斜面や突然の海への眺望といったダイナミックな景観が生まれている¹⁸。地形と構造のどちらに重きを置くかで様相が随分と異なっている。

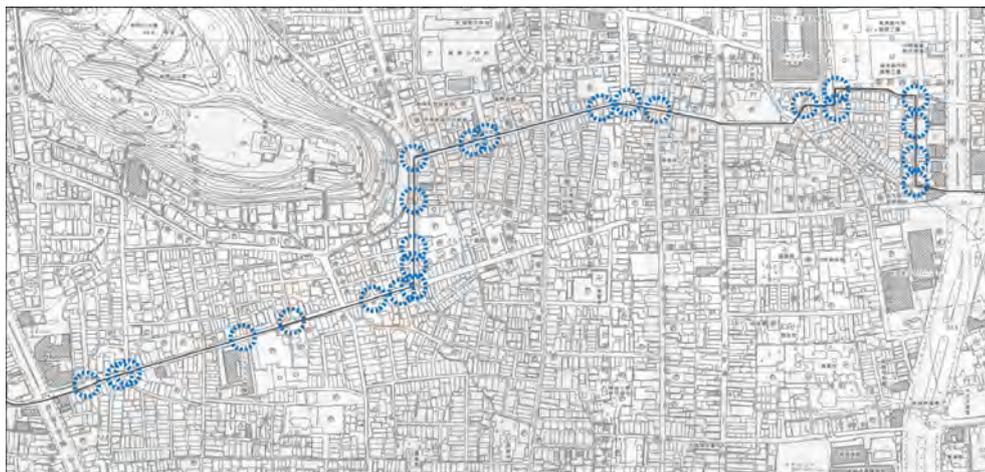


図7-42 堀川通～千本通間でルートⅡ上にあらわれる曲がり角とT字路

(2) 京都の中心一周縁構造

この地域には上京の旧市街、20世紀に入ってからスプロールした西陣外縁部、環状道路周辺の土地区画整理事業地、それらを取り囲む山という同心円構造があり、ルートはそれを中心から周縁へと横断してゆくものであった。このうち旧市街から土地区画整理事業地までは、いくつかのアトラクターは見られたものの「普通の住宅街」というコネクターが基底としてあった。

しかし最後にあらわれる大文字山と金閣寺は、いずれも強いアトラクターとなった。昔から三山は信仰や遊興の場であり、ルートⅠでもそうであったように空間的にもアクティビティ的にも求心性を發揮している。京都は中心と周縁の両方にアトラクターをもつ。そしてその両者の間に、「普通の住宅街」が分布している。

中心から周縁への都市の拡大プロセスを説くモデルに、バージェス (Ernest Watson Burgess) の「同心円理論」がある¹⁹。京都も大まかには中心から周縁への拡大を経験してきたが、その先には三山が待ち構えており、拡大を制限するとともにアトラクターともなっている。この点で京都は、アメリカの広々とした平原を舞台に考えられたバージェスの同心円理論とは異なっているのである。

(3) 時間を継承するデザイン

ルート全体の基調となる「普通の住宅街」において光るアトラクターは、やはり両千家や金閣寺、大文字のような古来のものであった。中でもAⅡ-4の小川通はその機能やしきたりを含めた全体的な在り方を長く継承することで、今でも本物性の高い街並みとなっている。また同志社大学の存在もおもしろい。建築様式を継承して展開することで、都市の中に面的アトラクターを構成している。

一方新しい街は、AⅡ-3のマイクロエリアAや、AⅡ-5～6の疎開空地跡をはじめとして評価が低い。継承すべきコンテクストをすべて断ち切られると、その後のデザインは厳しくなるようだ。その結果、ノーコンテクストとばかりに形態も機能も好き勝手につくられた建物が並び、通りは荒涼としたものとなっている。

しかし、だからこそコンテクストをつくらねばならない。古いものばかりが高評価を受けるという現状を脱すべく、今後継承されるような魅力的な様式を生み出すべきである。そのためには一人ひとりの地主に任せる従来の方法では難しく、何らかの計画が必要となる。しかもそれは用途指定や高さ制限のような限られたツールによるものではなく、両千家の街並みや同志社大学に見るような、様相論的なデザイン計画である。

1 森谷尅久監修：ビジュアル・ワイド 京都の大路小路，小学館，2003，p.230.

2 岡田孝男：京の茶室 千家・宮廷編，学芸出版社，1989，p.12. および 注釈1の文献，p.231.

3 岩田英彬：京の大文字ものがたり，松籟社，1990，p.80.

4 片方信也：西陣 織と住のまちづくり考，つむぎ出版，1995，p.17.

5 新創社編：京都時代MAP 幕末維新編，光村推古書院，2003，pp.12-17.

6 梅原猛監修：古寺巡礼京都21 金閣寺，淡交社，2008，pp.100-102.

7 京都市編：京都の歴史 第八巻 古都の近代，京都市史編さん所，1975，pp.213-214.

8 土地区画整理事業には、都市計画法12条に基づく民間の組合施行、同13条に基づく都市計画としての施行の二種類が定められている。13条施行は京都が全国初となった。

9 南北に長い街区に比べ、日照面で有利とされる。またスケールは既存宅地の有無などによって地区ごとにかなりばらつきがあるものの、概ね東西100m×南北50m前後で南北中央に背割線が引かれ、街区の間に設けられた道路は幅員6mが主流である(鶴田佳子・佐藤圭二：近代都市計画初期における京都市の市街地開発に関する研究：1919年都市計画法第13条認可土地区画整理を中心として，日本建築学会計画系論文集，vol.458，1994，pp.104-106.)。

10 注釈4の文献，pp.18-20.

11 注釈6の文献，pp.10-11.

12 2007年の新景観政策で31mに引き下げられている。

13 注釈4の文献，pp.45-53.

14 土地区画整理事業地については、京都市の換地図(金閣寺・西第二・西第三・西第五・衣笠鏡石・西紫野・東紫野・紫野門前町・紫竹・今宮・北第二の各地区)より概形を作図。

また返還された疎開空地については、ルートIの部分のような都市計画基本図の「×」表記がほとんどないため、堀川通～紫明通の屈曲部分以外は省略している。

15 個々の疎開対象地の決定理由を明らかにできる資料はないが、後花園天皇火葬場や、ここを流れていた小川の流路が影響したと推測される。このクランクは1946年の米軍撮影の航空写真にも確認できる(国土交通省国土政策局ホームページ<http://archive.gsi.go.jp/airphoto/ViewPhotoServlet?workname=USA&courseno=R275-A-7&photonono=38>)。

16 正確には土地区画整理事業地は紙屋川以东にもおよび、またAⅡ-6～8あたりも対象となっている(図7-26参照)。しかしこれらの場所では整理事業の指定以前の街路の影響が大きく、少なくともルート上においては土地区画整理事業地に特有の整然とした長方形街区は形成されていない。

17 この写真はルート上から見える風景ではなく、金閣寺の北東に位置する住宅街である。土地区画整理事業地の典型的風景と考えられるため掲載した。

18 竹山実：街路の意味，SD選書，鹿島出版会，1977，pp.74-78.

19 バージェス，E.W.：都市の発展—調査計画序論，奥田道大訳，都市化の社会学 V，鈴木広編，1965，pp.113-126.

7.4 ルートⅢの総合分析

7.4.1 ルートⅢ周辺の時間的・空間的コンテクスト

(1) 明治中期まで(図7-43)

これまで見てきたルートⅠとルートⅡは、7.1で述べたような京都都市史のメインストリームとの関連が強い。それに対し嵯峨地域¹にあたるルートⅢは、そうした洛中の動き（特に中央権力の趨勢）と密接に関連しながらも、それとは異なった独自の変遷を遂げてきた。よって一枚目の地図に至るまでの過程も、時代区分ごとにやや詳細に述べておきたい。

① 平安時代以前

平安京の創設以前、嵯峨は秦氏が治めていた。葛野大堰や霖原堤を築造し、広い範囲で灌漑を行なったという。この頃には条里プランが敷かれているが、嵯峨地区では正方位ではなくやや西に傾いたものとなっている。長辻通、愛宕街道などの古道もほぼこれに沿っている。

またこの時代に創建されていたものとして秦氏の松尾大社や、行基による法輪寺がある。渡月橋は本来この法輪寺に参詣するための橋でその名も「法輪寺橋」と呼ばれており、現在の位置より約100m上流に架けられていた。

② 平安時代～鎌倉時代

平安前期には皇族をはじめとする貴族の別荘地となる。まず桓武天皇の息子にあたる嵯峨天皇が嵯峨御所を建設、これがのちの大覚寺となる。その皇后・橘嘉智子は壇林寺を創建。現在の野々宮神社付近を占める大寺だったという。さらに嵯峨天皇の息子になる源融は別荘・棲霞観を結ぶ。このような状況のもと、882年には陽成天皇によって嵯峨を禁野とする布告さえ出されている²。嵯峨の地は、限られた貴族だけの遊ぶ場所となっていた。

平安後期になるとこの状況に変化が生じる。秦氏の出自になる僧・奄然は宋に渡り、生前の釈迦を表現した模像を持ち帰った。彼は釈迦像を故郷に納めるという志を果たせぬまま没したが、弟子の盛算が棲霞観の跡地にあった棲霞寺に釈迦像を安置し、清涼寺と号する³（1019年）。この釈迦像が生き仏として評判を呼び、庶民がこぞって参拝するようになった。その後、同寺を訪れた法然によって興された浄土宗が広まると、清涼寺も浄土宗寺院となり、ますます多くの信徒を集めるようになる。

また庶民の通うもう一つの場所が化野であった。鳥辺野、蓮台野と並ぶ三大葬送地であり、もとは風葬、やがて火葬をするようになった。化野念仏寺もやはり法然によって整備されている。

嵯峨を語る上では文学作品も欠かせない。まず10世紀初頭に成立した古今集では、時の貴族たちによって秋の美しさが語られる。11世紀初頭の源氏物語では野々宮神社などを舞台に悲恋が繰り広げられ、嵯峨の地に「もののあはれ」が見出されている。この傾向は平家物語やさまざまな謡曲に引き継がれ、地域は文学によって意味づけられてゆく。そしてこの意味づけが翻って嵯峨の風景づくりにも影響した⁴。

さて鎌倉時代中期になると新たな動きがある。後嵯峨上皇が桂川岸に亀山殿を造営し、院政を開始。周囲に関連施設も立ち並び、一帯は都市の景観となる。この亀山殿前から清涼寺に至る古来の道（現在の長辻通）は、朱雀大路と呼ばれるようになった。当時すでに荒廃しきっていた京内の朱雀大路に代わる、新しい時代、新しい拠点の中心軸である。渡月橋の名も後嵯峨上皇の息子である亀山天皇の「くまなき月の渡るに似たり」の言葉に由来している⁵ように、現在の嵐山一帯の基礎がこのときに築かれたと言える。

③南北朝時代～安土桃山時代

鎌倉後期から室町前期にかけての南北朝時代、嵯峨は歴史の中心的舞台となる。まず亀山殿に入った後醍醐天皇は夢想疎石（夢想国師）を開山として臨川寺を創建。鎌倉幕府を滅ぼし、建武の新政を始める。

しかし倒幕に活躍した足利尊氏との確執がつのり、後醍醐天皇は吉野に逃れて非業の死を遂げる。北朝を擁して幕府を開いた尊氏は、やはり夢想疎石の助言により後醍醐天皇を弔うために天龍寺を開く（1345年）。これは亀山殿の跡を継ぎ、さらに長辻通（朱雀大路）にまで面する大伽藍である⁶。

以後天龍寺は京都五山の第一位に列せられ繁栄する。周囲には次々と塔頭が建てられ、その数は150にのぼったという⁷。鹿王院も義満によってつくられた天龍寺塔頭であり、臨川寺も天龍寺の下に収まる。ここに、一大禅宗都市が出現した（図7-44）。

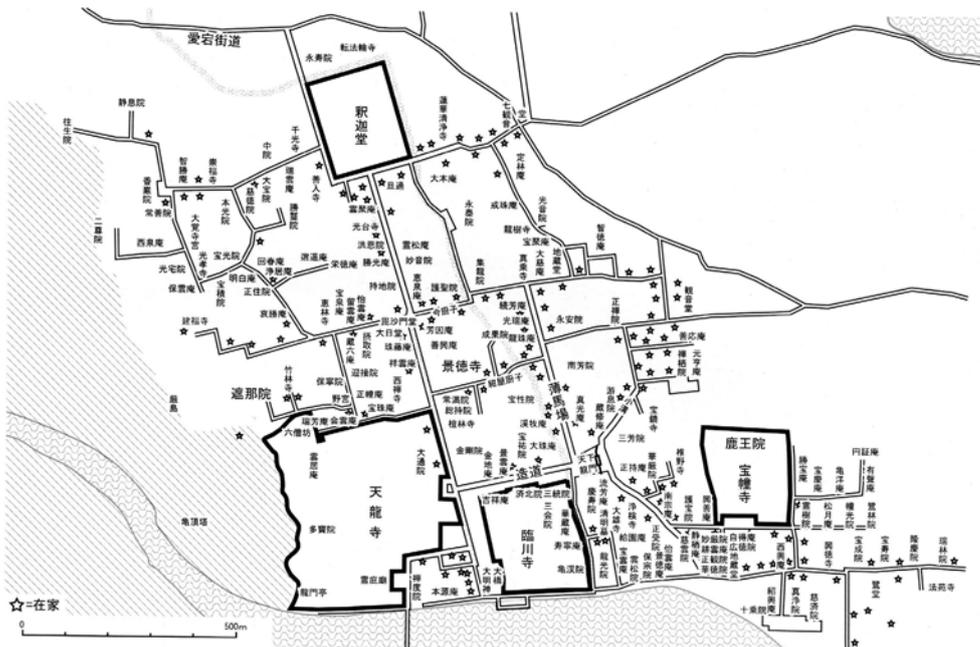


図7-44 室町時代の嵯峨

(山田邦和：中世都市嵯峨の変遷，平安京—京都 都市図と都市構造，金田章裕編，京都大学学術出版会，2007，p.173.)

その後天龍寺は応仁の乱の兵火に遭うなど、実に八度も火災を経験している⁸。それでも屈することなくまた再興されるのは、この寺の格を表わしているとも言える。

④江戸時代～明治中期

江戸期には嵯峨は新たな発展を見せる。それ以前から桂川は、材木の運搬機能を担っていた。丹波などの材木を筏に組んで流していたのである（写真7-36）。材木は嵯峨の地で集積され、西高瀬川を通じて洛内に運ばれ、西高瀬川沿いには材木商が軒を並べていたという⁹。この運送の利便を増すために江戸初期の豪商・角倉了以は私財で川を開削する。以後、嵯峨の製材業はますます発展することとなる。

また古来火除けの神として親しまれてきた愛宕神社は、都市が高密度化し大火に悩まされた江戸期にはより信仰を強める。それが嵯峨観光と結びついたとき、愛宕山への参道となる愛宕街道、鳥



写真7-36 明治期の桂川に浮かぶ筏
(白幡洋三郎：京都百年パノラマ館，淡交社，1992，p.66)

居本の街並みが発展する。もともと農業と林業を生業とするこの地の村に、茶屋や旅館も加わる。それによって鳥居本は、茅葺き農家と都市的町家が入り交じる独特の街並みが形成されている。

そして幕末、蛤御門の変（1864年）の際には天龍寺は長州藩の陣地が張られていたことから攻撃を受け焼失。また多くの寺社が例にもれず上知令による大打撃を受け、図7-43が表わす明治中期を迎える。この図にかつての伽藍都市の面影はない。主要街道沿いの人家と三条通・西高瀬川近辺に集積する材木商の他は、地図のほとんどが田園、竹林で占められている。

(2) 明治後期～大正(図7-43～45)

国鉄の山陰本線（開業当時は京都鉄道）、嵐山電鉄（のちの京福電鉄嵐山線）が開業した。市中心部の鉄道の開通が道路拡幅などの苦勞を伴ったのに比べ、これらの鉄道は田園や竹林の中を悠々と通されている。嵐山電鉄は長辻通沿いの好位置に駅舎を得た。

これに伴い中ノ島が公園として整備されて建物が立ち並び、渡月橋の南北それぞれにも集積があるなど、渡月橋近辺を中心に観光地化が進んでいると見られる。しかしそのペースはゆっくりとしたもので、主要街路沿い以外にはおよんでいない。

(3) 昭和初期～戦後(図7-45～46)

引き続き長辻通などに建物が増加する他、市営住宅・府営住宅に見られるように主要街道から内側に入ったところでの住宅地開発も徐々に始まっている。

またこの時期特有なのが愛宕山鉄道である¹⁰。1929年に開業した観光鉄道で鳥居本の先の清滝まで運行し、ここからさらにケーブルカーに乗り継いで愛宕山山頂付近にまで行ける仕組みである。清滝には遊園地、愛宕山頂にはホテルやスキー場が建設される。しかし開業直後から資金難に陥ると、1944年には戦時下には不急不要として政府より休止命令。戦後再開されることなく、結局15年の短命に終わった。

これまで目立った動きのなかった桂川右岸でも、新京阪鉄道（のちの阪急電鉄）嵐山線が開業。既存集落を貫く直線道路も開通し、南方向との連絡も生じてきている。

なお昭和10年頃から、材木輸送は筏に代わりトラックが主体となってゆく。製材工場の立地も西高瀬川沿いから三条通沿いへと変化する¹¹。

(4) 昭和中期(図7-46～47)

モータリゼーションの爆発を背景に道路整備が進む時期である。戦前から計画されていた新丸太町通がようやく開通した他、桂川の新堤によって南の四条通に連絡する道路がつくられる。さらにこの両者をつなぐ高架道路が愛宕山鉄道の跡地を利用して設けられ、高辻通に対するバイパスとして機能した。

三条通沿いには巨大な観光駐車場もつくられ、多くの自家用車、観光バスが乗りつけるようになる。この観光駐車場をはじめとして臨川寺旧境内地の開発が甚だしい。わずか参道と最小限の境内地を残すのみとなっている。

そして地域全体に急速な宅地化が進行。新丸太町通の南側をはじめ、清涼寺南の周辺や化野念仏寺の裏あたりにも開発がおよぶ。これらの開発により、従前の農道に新道が加わってかなり不規則な街区構成となる。住宅の規模は丸太町通の南で小さく、北にゆくほどゆったりとしている。

1970年代には国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンがヒットし、嵯峨巡りが一つのブームとなる。特に「アンノン族」と呼ばれる、少人数で旅をする女性客がたくさん見られたようだ¹²。愛宕街道を中心に北嵯峨地域にも店舗が増加している。鳥居本の茅葺き農家も耕作地を宅地とし、農林

業から観光業へとシフトしてゆく。そのような中、1979年には嵯峨鳥居本伝統的建造物群保存地区の指定がなされている。

(5) 昭和後期～現在(図7-47～48および図7-49)

地域全体に、水田や竹林といった空隙を埋めるかのように宅地化が進んでいる。嵯峨地域では、1995年までのおよそ100年間で竹林面積は1/5程度に縮小しているという¹³。ただし1966年に指定された歴史的風土保存地区、歴史的風土特別保存地区の指定域内では竹林が比較的保存されていることも指摘されている¹⁴。また図7-48と図7-49を照らして見ると、明らかに大沢池以東の市街化調整区域で田園地帯が残っている。制度が空間に対して長期的に影響を残している。

観光開発の面では、まず阪急嵐山周辺、天龍寺前に大規模な駐車場が増えている他、観光地需要を背景に小さな駐車場も多くなっている。現在では京福嵐山駅の真正面にも広大な駐車場がある。また保津川溪谷を縫うように走っていた旧山陰線がトンネルと橋を組み合わせた直線ルートに変更され、その廃線がトロッコ列車として再生され、嵯峨観光の新たな名物となった。

また長辻通の観光地化についてはより詳細に述べておきたい。筆者らが以前行なった調査¹⁵によると、戦後の長辻通は渡月橋を起点に南から北へと観光地化が進行している(図7-50)。また1970年代までは主に住宅が店舗へと替わっていったが、その後は地元向け店舗が観光客向け店舗へと替わったり、あるいは観光客向け店舗のままでも内容や経営主体が替わったりするケースが多い。さらに近年では地域外の人が建物を賃借して店舗を経営するケースも増えている。そしてバブル前後にはタレントショップの開店が相次ぎ「西の原宿」と呼ばれるほどにもなったが、現在までにほとんどが姿を消した。このように長辻通は、入れ替わりの激しい経済原理の街並みという側面がある。

この地域は雄大な山々と肥沃な平野、そして桂川が、時代を越えて全体の枠組みをつくっている。街路構造は条里制に端を発しているが、それでも洛内と同じく、ほぼ現代まで引き継がれている。渡



図7-50 長辻通の店舗の種類や配置の変化

(北雄介・門内輝行：地域特性と店舗プロフィールの比較：嵐山とホイアンにみる観光地化に伴う地域の変化 その1，日本建築学会学術講演梗概集，F-1，2007，pp.847-848より作成)

月橋から長辻通、清涼寺へという軸線がはっきりとあらわれた都市構造である。

その中でさまざまな歴史が積み重ねられている。王朝の別荘地、室町幕府の伽藍都市、物語文学や俳諧の地、農林業の集積地、そして昨今の観光地・郊外住宅地といった変遷を経、あるものは消え、あるものは残って現在に至る。

その人間の歴史のどれもが、山や川、肥沃な平野という自然環境に依拠している。人々は常に、古来変わらぬ自然の恩恵を受けながら生きてきた。しかし、たとえば嵐山の松と桜の混合林は人為的につくられ¹⁶、天龍寺などの努力で守り継がれてきた景観である。竹林も筍や竹材を採るために管理され、もちろん田園も人の手でつくられたものである。この人工と自然が一体となった景観こそが、いつの時代も人々を惹きつけてきた嵯峨の原風景なのである。

近年、増殖した鹿が幼木を食べることで山枯れが起きて土も痩せるという問題や、上流の日吉ダムの建設によって桂川に汚物が堆積するといった問題も起こり、地元では対策を急いでいる¹⁷。われわれを楽しませてくれる嵯峨の「手入れされた自然」の維持には、絶え間ない努力が必要なのである。

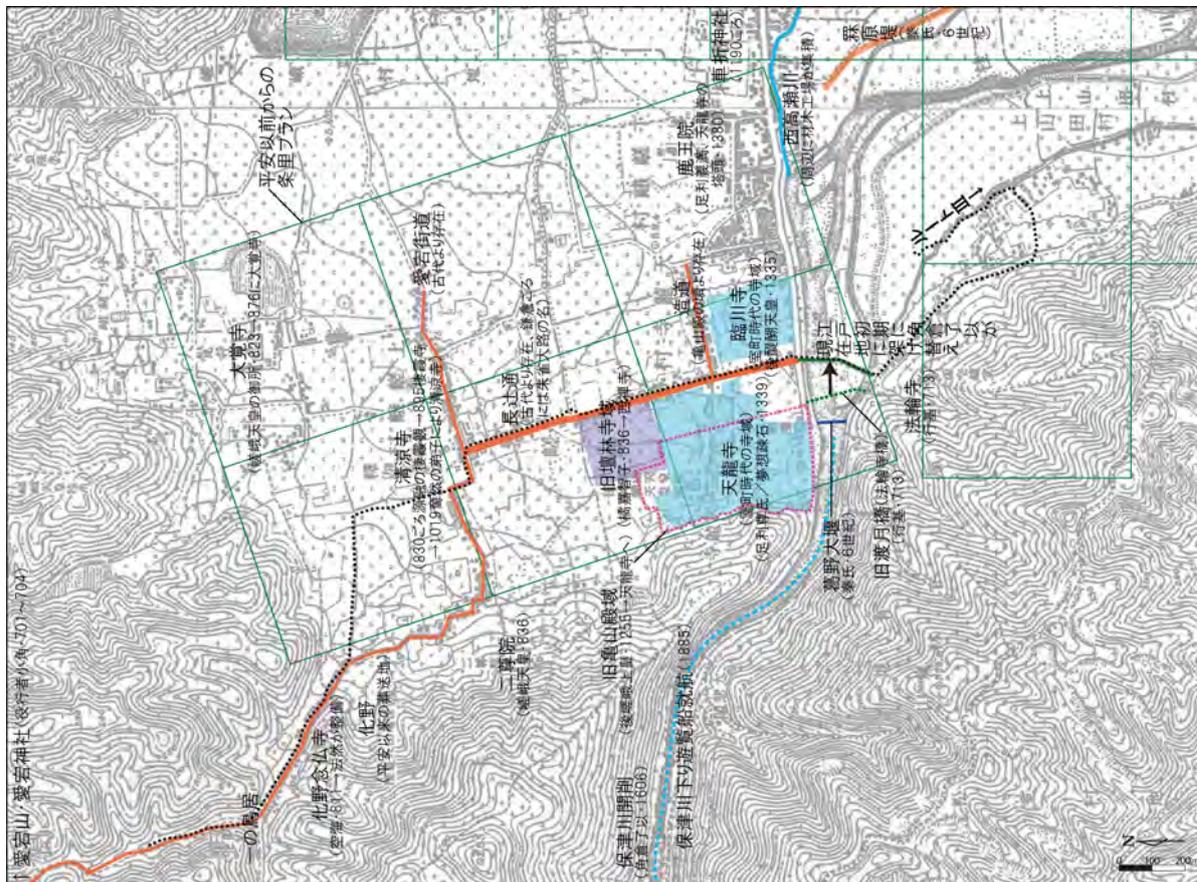


図7-43 1889年の仮製地形図 (国土地理院発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートⅢ)



図7-45 1922年の都市計画基本図（京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵）とそれまでの都市の変遷（ルートⅢ）



図7-46 1953年の都市計画基本図（京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵）とそれまでの都市の変遷（ルートⅢ）

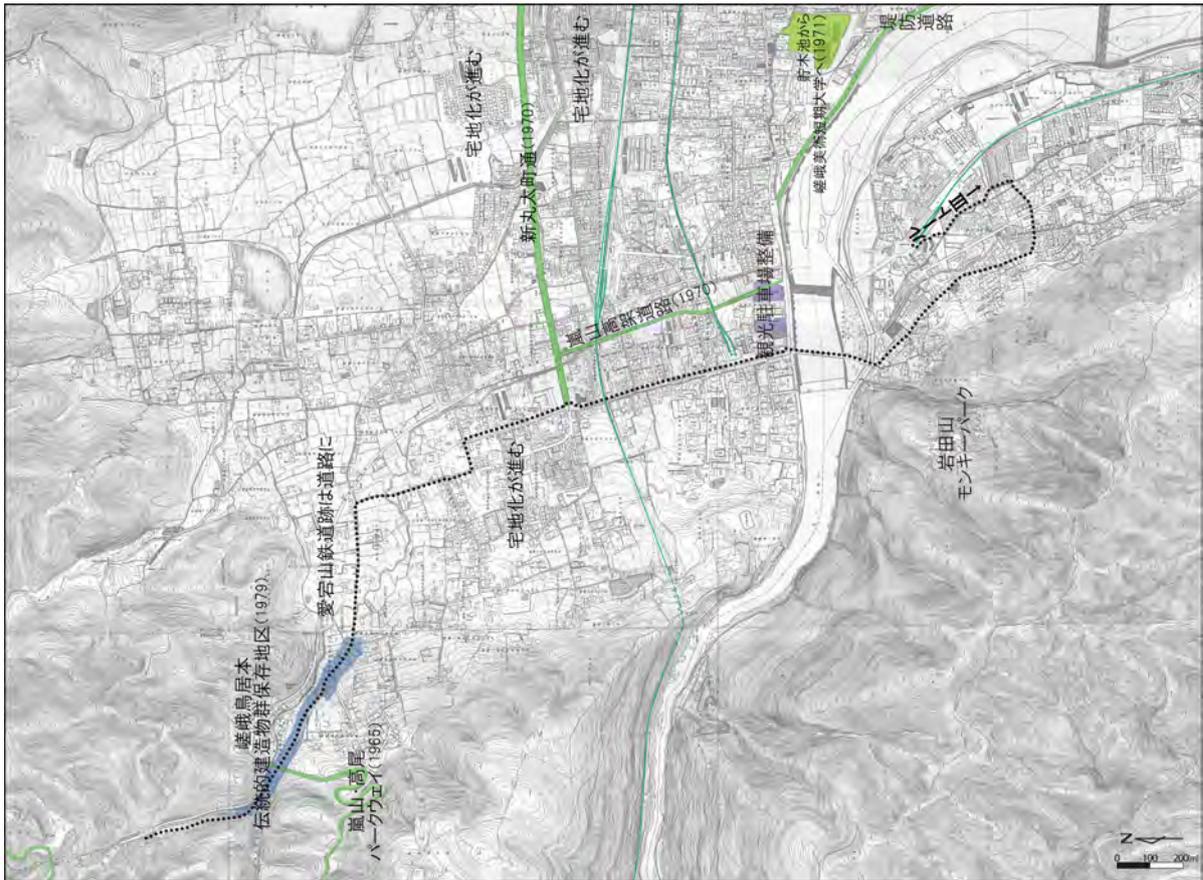


図7-47 1980年前後の都市計画基本図 (京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートⅢ)

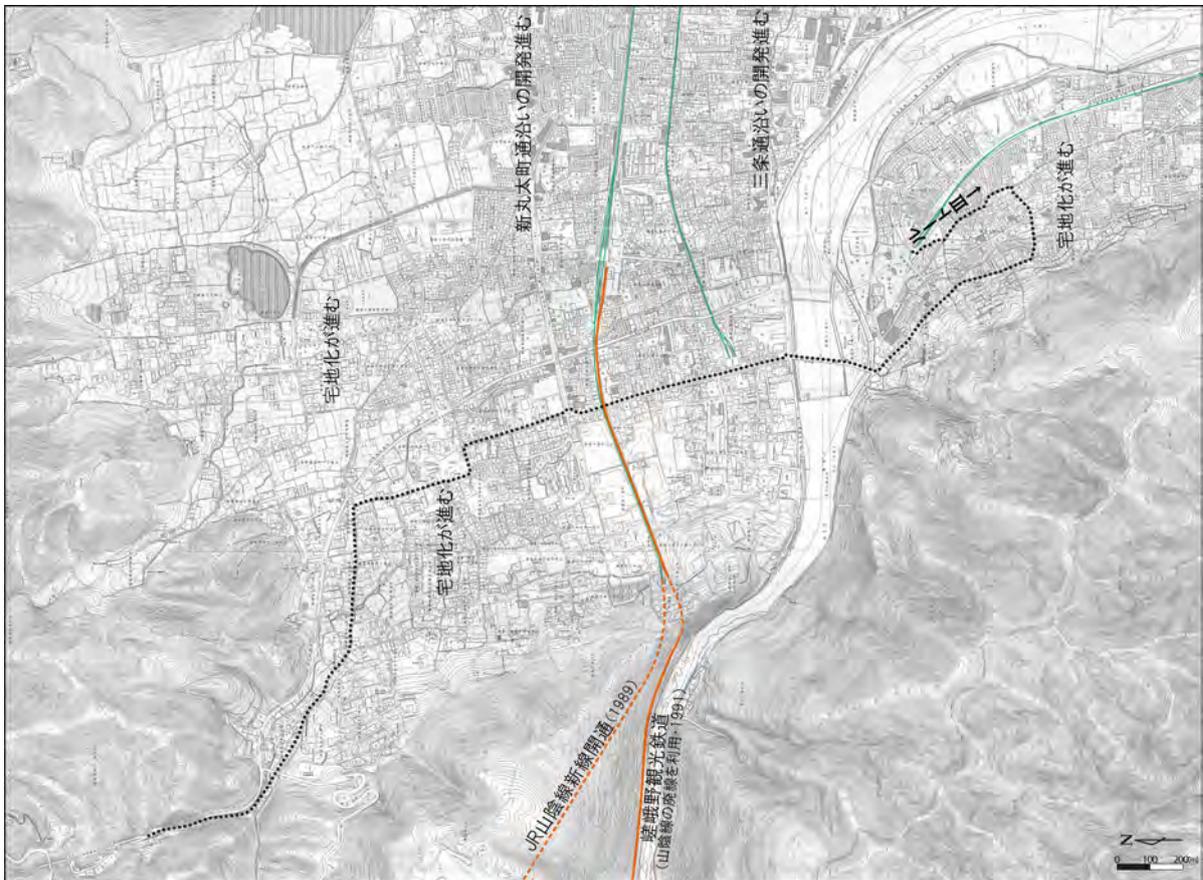


図7-48 2010年前後の都市計画基本図 (京都市都市計画局発行、京都府立総合資料館蔵) とそれまでの都市の変遷(ルートⅢ)

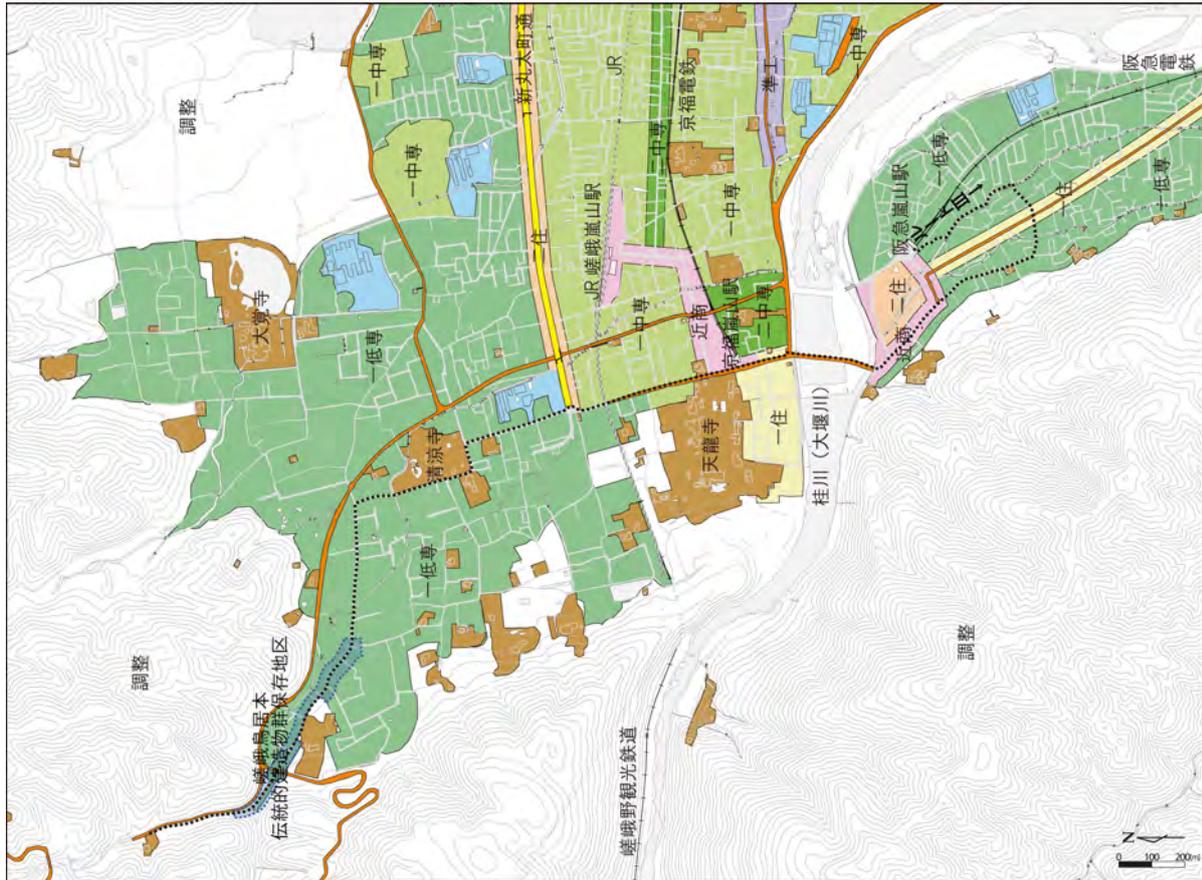


図7-49 2007年の用途および道路構造(ルートⅢ／凡例は図7-16)

7.4.2 エッジ・エリアごとの分析

(1) AⅢ-1

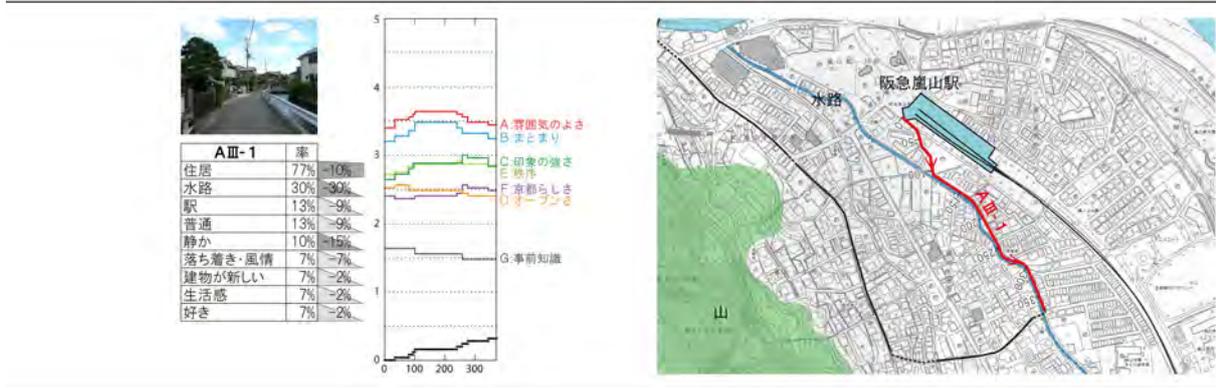


図7-51

①自然による特徴づけ

大まかには「普通の住宅街」である。100m付近で水路（写真7-37）沿いに出ると、これがエリアを特徴づける。現在では住宅街になっている桂川右岸地域であるが、戦前は小さな集落が見られる程度でほとんどが水田であった。この水路も灌漑用のものであった。

水路と同時に遠方の山も見え始め、音や気温などでも自然を感じることができるようになる。それにより、静かで落ち着いた場所だという記録が増える。この、自然との関係によって把握される様相



写真7-37 ルート沿いの水路

は、今後ルートⅢのさまざまな場所であらわれる。特にルートの西に迫る山は全体としてアトラクターとなり、似たような街路同士も、山との関係によって異なる様相を見せることになる。

(2)EⅢ-1～AⅢ-2

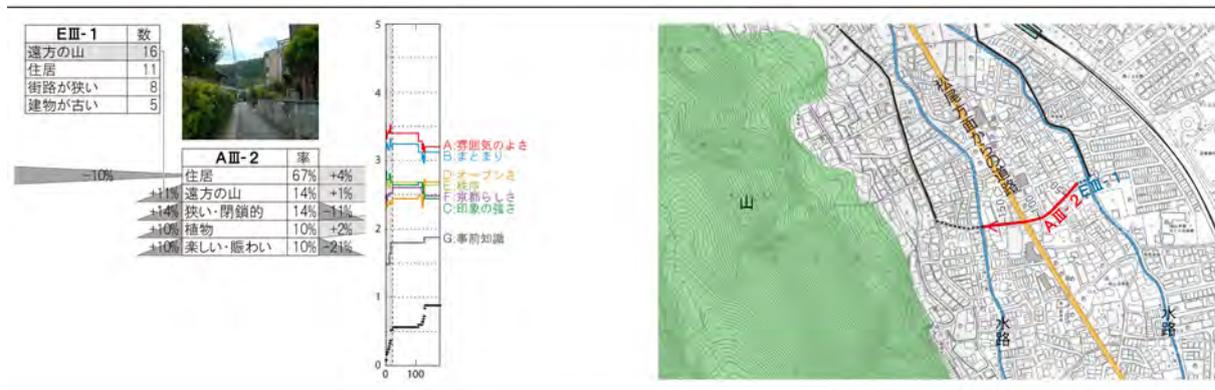


図7-52

①曲がり角を介したマクロエリアの形成

角を曲がり道幅が狭まるという強力な要素が重なり、EⅢ-1は鋭いエッジとなっている。前方に山が見えること、道の両側に塀や垣根が迫ること、古い瓦屋根の住宅の増加に関する記録も集中している。ただ、領域評価値の変動は少ない。鋭利なエッジをまたいだものの、住宅街というもっとも強いコネクターは持続するからである。曲がり角でも領域感だけ切断され、様相は変わらないパターンである。

これは次のEⅢ-2も同じである。AⅢ-1～3では住宅街というコネクターは領域表現の占有率70%前後という高い値で持続し、典型的なマクロエリアを形成している。

(3)EⅢ-2～AⅢ-3

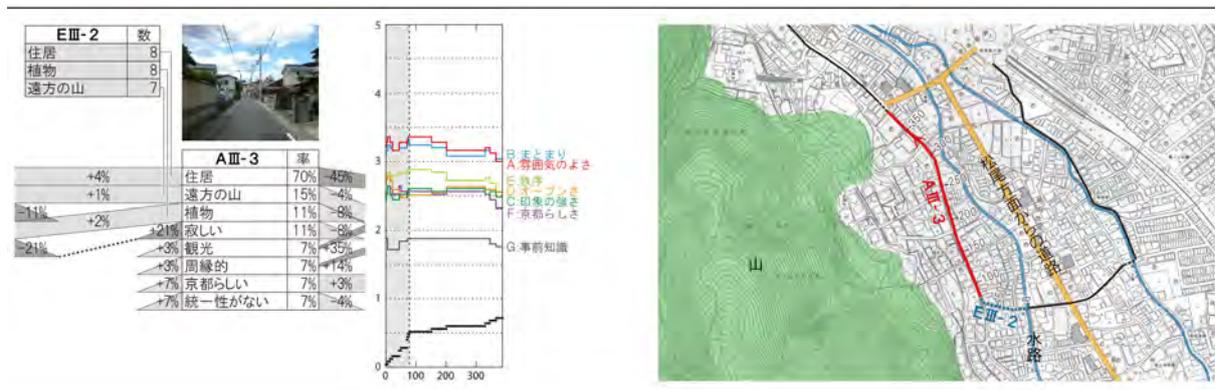


図7-53

②山と街路

マクロエリアとなっているAⅢ-2～3では、住宅街の他に山が第二のコネクターとなっている点も前エリアから引き継いでいるが、山との距離と見える方向がシフターとなる。このエリアでは山は左手に大きく見え、交差する道や駐車場から見える山（写真7-38）についての記録がエリア全体に分布する。左右の違いについても盛んに記録される。

ここから渡月橋に至る街路は明治中期にはすでに存在し、南の



写真7-38 交差する道から見える山

松尾大社まで続いている（図7-43）。沿道には家屋も立ち並んでいるが、集落は水田と山とのほぎまにあった。桂川の水害から逃れ、また自らの耕作地を見渡せる好位置と捉えられたのであろう。山や自然との関係は都市のデザイン過程から重要視されていたのである。

(4)EⅢ-3～AⅢ-4

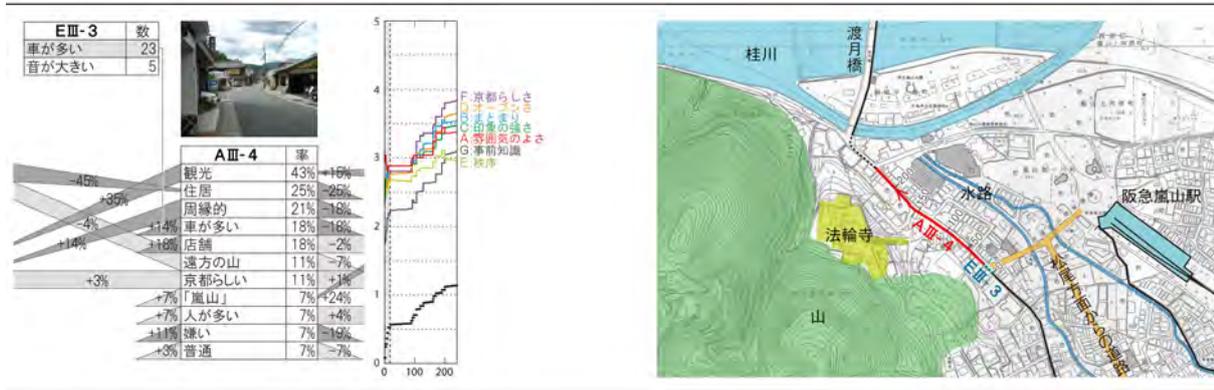


図7-54

①過密交通によるエッジ

EⅢ-3は、古くからの街路という点では前エリアと変わらないにもかかわらず、シャープなエッジとなっている。様相表現には車やバスに関する記録が飛びぬけて多い。明らかに、ルート右方向から合流する道路の影響である（写真7-39）。

この右からの道路は、昭和初期から戦後までの間に整備された。松尾方面から北上してT字路になり、一方は阪急嵐山駅に通じ、一方がEⅢ-3あたりで旧道と合流している（図7-55）。渡月橋や長辻通を目指す車がこの道に集中し、狭い割にかなりの交通量となっている。バスが通過するときには離合が困難であるため一時的に一方通行とされ、その交通整理のための係員もいる。これに対し被験者からは「危ない」「うるさい」という言葉が出ている。

南からの道路を通す際にこの状況を想定できておらず、明らかな計画の失敗である。また現在では、松尾橋付近と渡月橋や長辻通の間の道は、この細い道（図7-55の青矢印）以外に桂川左岸を通る広い道も利用できる（図7-55の赤矢印）。そこを利用せずこの旧道を通る通過交通も多く、それは交通誘導の不足のせいでもある¹⁸。

②観光地周辺の曖昧なエリア

領域分割グラフが示すように、AⅢ-3はかなり性格の曖昧なエリアとなっている。法輪寺への参道が左手に見えて空間が開け、同時に観光客向け店舗、宿泊施設があらわれて様相のさらなる変化が起こる。それに従い、領域分割グラフの各指標はどんどんと上昇してゆく。この現象はEⅡ-4からさらにAⅢ-4序盤まで続き、実質的には法輪寺付近から渡月橋手前までの広い範囲で様相が変化を続けると考えてよい。

このような曖昧なエリアを捉える領域表現として「観光地に向かってゆく」「観光地のはずれ」という表現が多い。店舗と住居が混じり、車が多く、店舗以外に見るべきものがないという状況は、観光地という強力なアトラクターが生み出す周縁部である。左手の山に関する記録は減少し、領域を支配



写真7-39 合流地点での過密交通



図7-55
松尾駅付近と渡月橋付近との間の道路

するアトラクターは山から観光地へと交代している。

(5)EⅢ-4～AⅢ-5

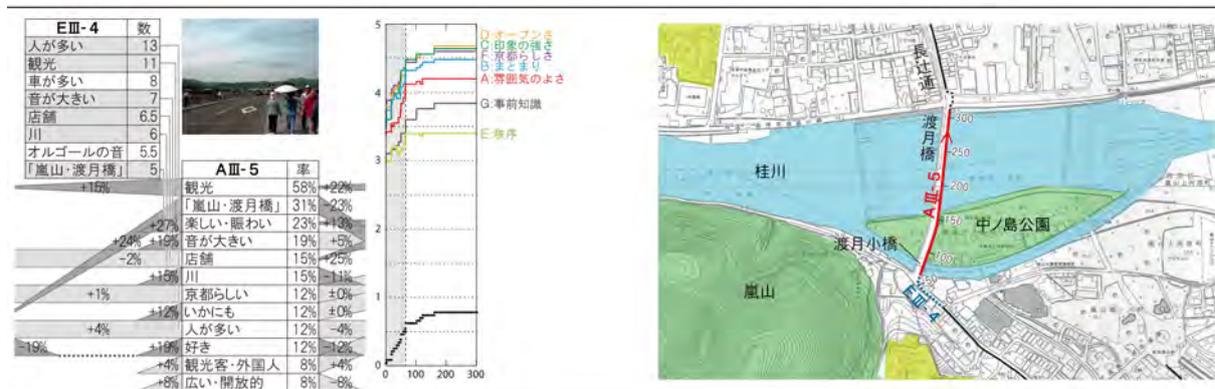


図7-56

①自然を上回るアクティビティ

渡月橋にかかると、視界が開けて左に嵐山が見え(写真7-40)、川の音、涼しさなど五感で自然を感じることができる。何度も歌に詠まれ、古くから愛でられた景観である。領域評価値は「オープンさ」「印象の強さ」「京都らしさ」が4.5を超える。

その一方で「秩序」の値は3.4程度に留まり、雑多な印象は残る。観光客の数は一貫して多く、人力車も見られる。領域表現では山や川よりも観光や賑やかさ、人の多さが上位にきており、自然よりもアクティビティによって領域把握がなされている。EⅠ-5の鴨川とはやや異なる点である。



写真7-40 渡月橋と嵐山 (ルートから振り返って)

(6)EⅢ-5～AⅢ-6

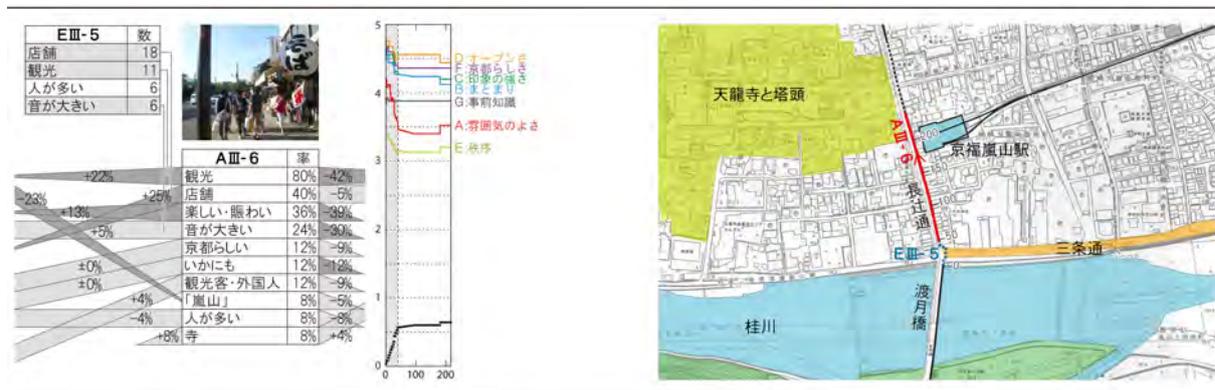


図7-57

①川の役割の違い

渡月橋を渡り終えて長辻通に入ると、観光客向け店舗が一気にあられ、人がますます増え、賑やかになる。「いかにも観光地」という言葉もこのエッジに集中する。鴨川もそうであったように、川の開けによって前方領域への組織化が行なわれた結果、川を渡り終えた途端に鋭く領域が移り変わる。

ところがAⅠ-5(鴨川)とAⅠ-6(祇園)にほとんどコネクターがないのに比べ、AⅢ-5(桂川)とAⅢ-6(長辻通)では領域表現のほとんどの言葉が維持されている。鴨川が河原町周辺と祇園を隔てる境界にもなっているのに対し、桂川はその兩岸とともに観光地というより大きなアトラクターに

包み込まれ、兩岸を縫合する役割が強い。目に見える景観が大きく変わっても、桂川と長辻通はアクティビティで結ばれているのである。この両者の違いは、ダイアグラムで図7-58のように表される。

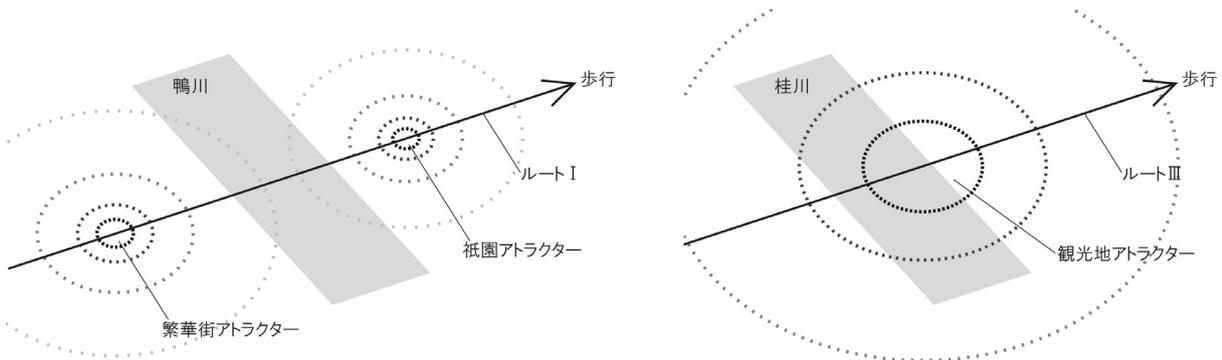


図7-58 ルート I における鴨川とルート III における桂川の把握のされ方の違いのダイアグラム

②経済原理への批判

領域評価「雰囲気よさ」の値は前エリアよりも下がり、「秩序」もやはり高くない。気持ちのよい自然の体験できる環境から人工環境への移行が要因の一つであろうが、単にそれだけでなく、うそくささや、商業意識の強い街に対する嫌悪感を示す言葉も多く見られる。実際7.4.1で見たように、戦後のこの街を動かしてきた原動力の一つは経済原理であった。そして今回の被験者のもつデザイン志向のフレームが、批判を強めている。

(7)E III-6~A III-7

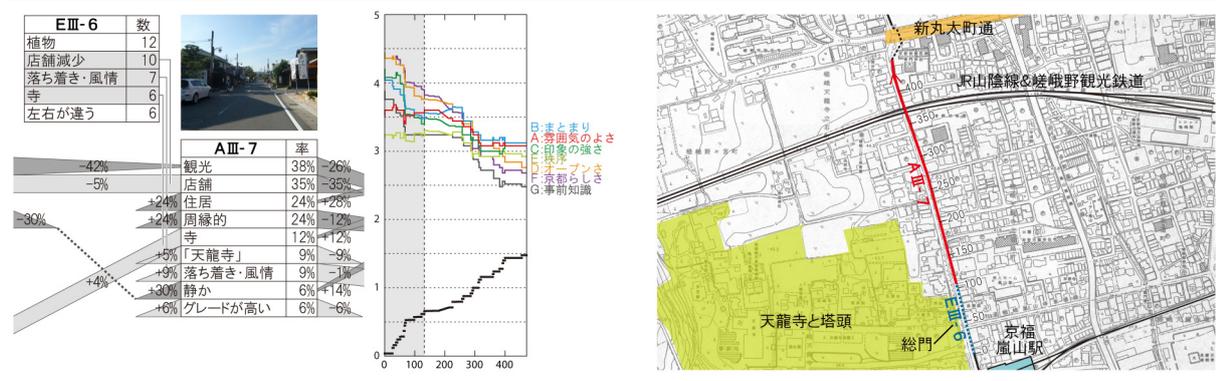


図7-59

①観光地周辺の曖昧なエリア

E III-6は天龍寺の総門（写真7-41）や、同寺の塔頭寺院の前にあたる長い距離のエッジで、領域分割グラフの傾きは緩やかである。右手は店舗が減少して住居があらわれ、左手には木が増える。人の数はまだ多いもののピークを越え、落ち着きや静けさも出てくる。このように、ゆるやかで一目では分かりにくい変化が重なっている。A III-7に入っても変化は続き、周縁的という領域表現もあらわれる。つまりA III-4~E III-4と全く同じ現象が、経路上に裏返しになって生じているのである。



写真7-41 天龍寺の総門

嵯峨地域の広域的な機能ベースは住宅街であるが、図7-50に見るような渡月橋近辺を起点とした発

展経緯によって、その南北両方に観光と住宅の入り交じった遷移地帯が生まれている。再び経路のダイアグラムに表現すると図7-60のようになる。筆者らの以前の研究ではこのような現象がベトナムのホイアンでも起こっていることを確かめており¹⁹、観光地周辺で起こりやすい現象だと考えられる。

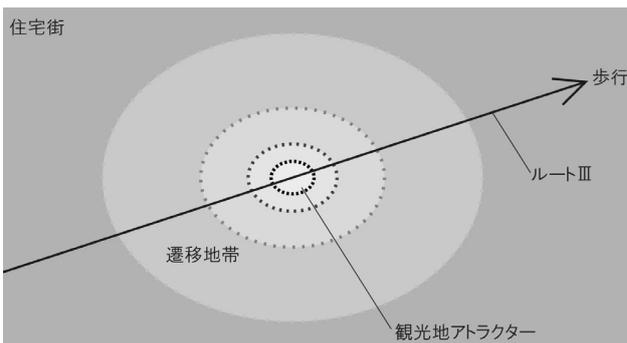


図7-60 観光地と周辺の遷移地帯のダイアグラム

②天龍寺の影響力の低下

かつての仏教都市嵯峨の中心であり、現在でもその名をよく知られた代表的観光スポットでありながら、天龍寺の存在感は前エリアを含めて大きくない。長辻通にはほとんど顔を見せず、観光地アトラクターに飲まれている。ルートIの建仁寺やルートIIの相国寺と同様に上知のあおりを大きく受け、土地への開発圧力も強い立地条件で、地域の様相への影響力は低下している。

(8)EⅢ-7～AⅢ-8

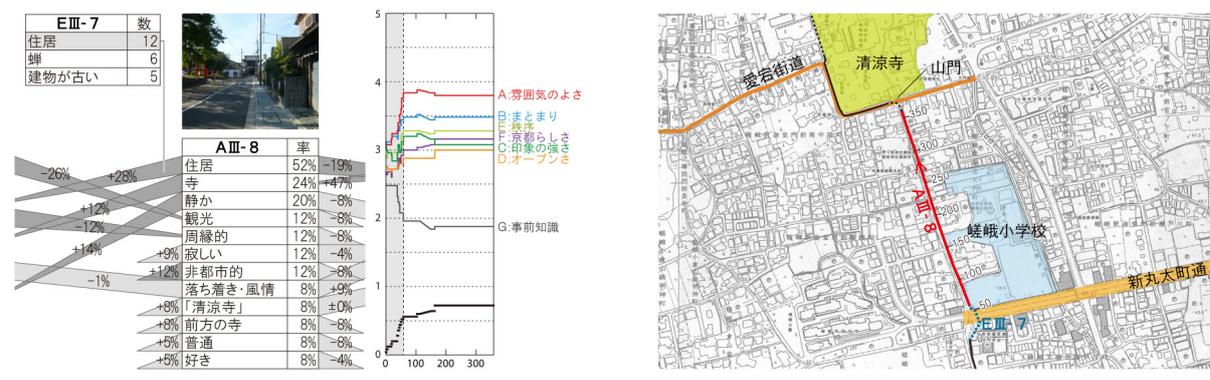


図7-61

①清涼寺を前にした全体的様相

AⅢ-8の突き当たりにある清涼寺は天龍寺ほどの知名度はないが、山門の位置と形態の象徴性によって強いアトラクターとなっている。そして周囲は住宅街や小学校で占められ、観光色は弱い。この静けさと清涼寺のたたずまいが合わさって、風情のある様相となっている。天龍寺周辺とは大きく異なる様相の成り立ちである。

(9)EⅢ-8～AⅢ-9

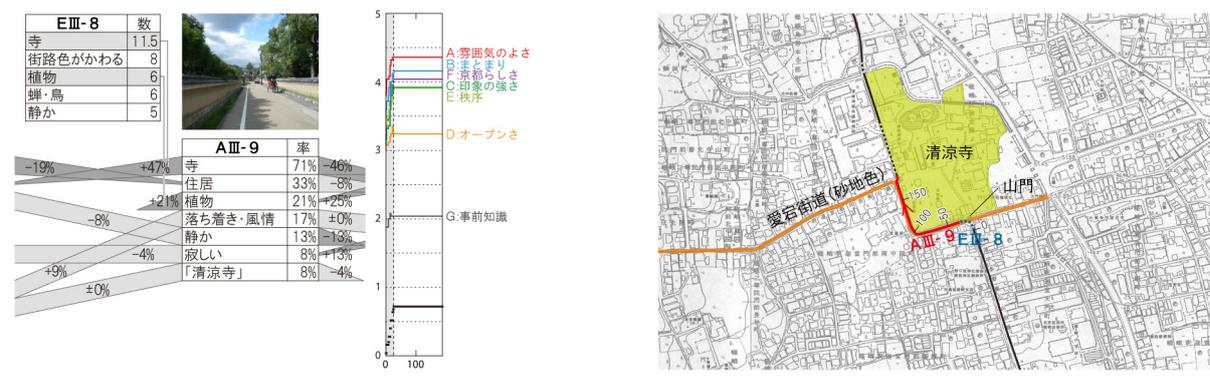


図7-62

①清涼寺中心の全体的様相

清涼寺の山門前から塀沿いに南から西へと回り込むAⅢ-9では、AⅢ-8以上に清涼寺が支配的である。あまり知られてはいないが、清涼寺の西向かいには宝篋院もある。これらに加えて住居や植物といったさまざまな要素も結び合い、京都らしく落ち着いた全体的様相をなしている。途中曲がり角があるが、道路と塀の形状が直角ではなくカーブを描くことも(写真7-42)、エリアの一体感を高めている。



写真7-42 清涼寺の塀のカーブ

②路面テクスチャの役割

EⅢ-8では路面がアスファルトから砂地色に変化すること(写真7-43)が多く記録されるが、AⅢ-9の中では様相表現にも領域表現にも登場しない。5.3.1の境界率の高さに見たように、路面テクスチャは境界においてのみ言葉になる。しかしこれも、京都らしく落ち着いた街という全体的様相に昇華されていると考えるべきであろう。このテクスチャは愛宕街道を一の鳥居まで続いており、通りに一体感をもたらしていると考えられる。



写真7-43 路面テクスチャの変化

(10)EⅢ-9～AⅢ-10



図7-63

①墓地の様相と役割

AⅢ-10では木々に囲まれる。木々の印象は、涼しさや心地よさなどのポジティブなものを通り越し、寂しく不気味なものになる。右手の木々の裏にある清涼寺の墓地(写真7-44)がそれに拍車をかけている。

嵯峨には多数の寺院があるが、そのぶん裏手には多くの墓地がある。葬送地化野の名残もあって、墓地は嵯峨のもう一つの顔でもある。地図(図7-43～48)で確認する限り、少なくとも大正の頃から墓地は宅地化の対象とはなっておらず、乱開発への抑止力となっていることがわかる。そして檀家制度の鍵でもあり、寺院継続の経済的支柱にもなっている。ただし、墓地に気づいた被験者たちの「怖い」という言葉が示しているように社会的フレームにおけるイメージは悪く、NIMBY (Not In My Back Yard) の側面ももつ。



写真7-44 木々の奥に見える墓地

(11)EⅢ-10～AⅢ-11

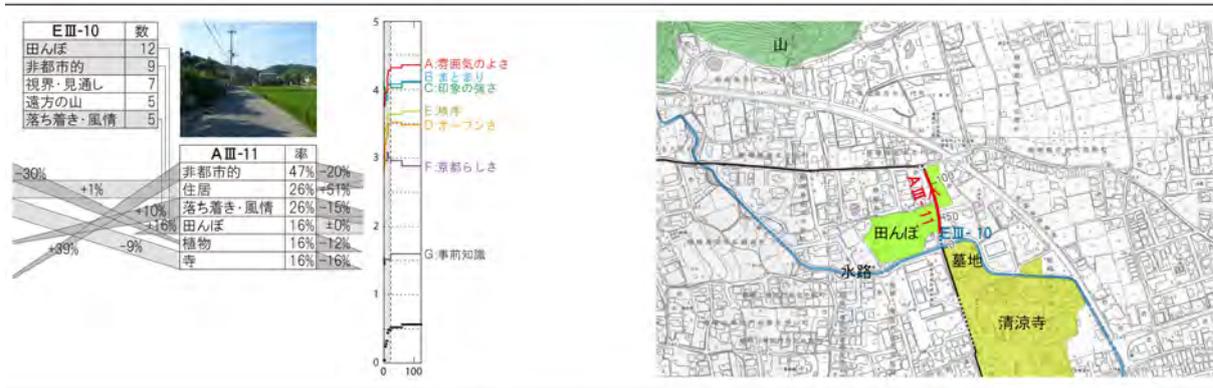


図7-64

①京都らしさの都市性

林を抜けると一気に視界が開け、田んぼや山も見えて、かつての嵯峨らしい風景が広がる（写真7-45）。あらゆる要素が全体的な様相を練りあげており、イメージのわかりやすいエリアだと言える。林でいったん落ちていた「雰囲気よさ」の値も、清涼寺周辺並みに回復する。AⅢ-10の林は幅のある境界としての役割も担っていた。



写真7-45 田んぼと山々

ただ通常は雰囲気よさと相関性が高い「京都らしさ」は下落の一途となっている。山と田んぼの一体となった風景がこの嵯峨の伝統であるにもかかわらず、被験者たちにとってのデフォルト的京都らしさは、町家や寺院の立ち並ぶ都市的景観のようである。

(12)EⅢ-11～AⅢ-12

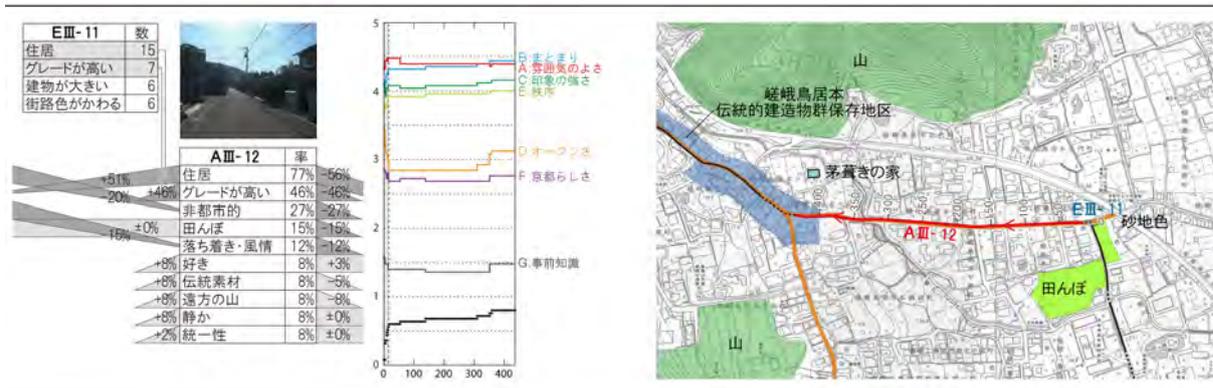


図7-65

①地域の様相を継承した開発

EⅢ-11では角を曲がったことで前方と左右に山が見え、その手前には大きな住宅が並ぶ（写真6-1）。この道は、かつては水田の中を通るあぜ道のような存在で、宅地化が進むのも1980年代以降のことであった。広い敷地にゆったりと構える家々に、「高級」「金持ち」という言葉が多く使われ、「雰囲気よさ」などはかなり高い値を示す。グレードについてここまで集中的に記録される場所は他に例を見ない。

同じ田園地帯の宅地化でも、高密度に建てこんだAⅢ-1～3との差がはっきりと出ている。AⅢ-1～3は駅に近いために高密度の開発が誘致された側面もあるだろうが、このAⅢ-12が貴族たちの別

荘地の趣を残していると見ることもできそうだ。他のルートを含め戦後の開発に対する評価が総じて低い中、古くからの自然との関係を引き継いでつくられたこの住宅地の存在は貴重である。

(13)EⅢ-12～AⅢ-13

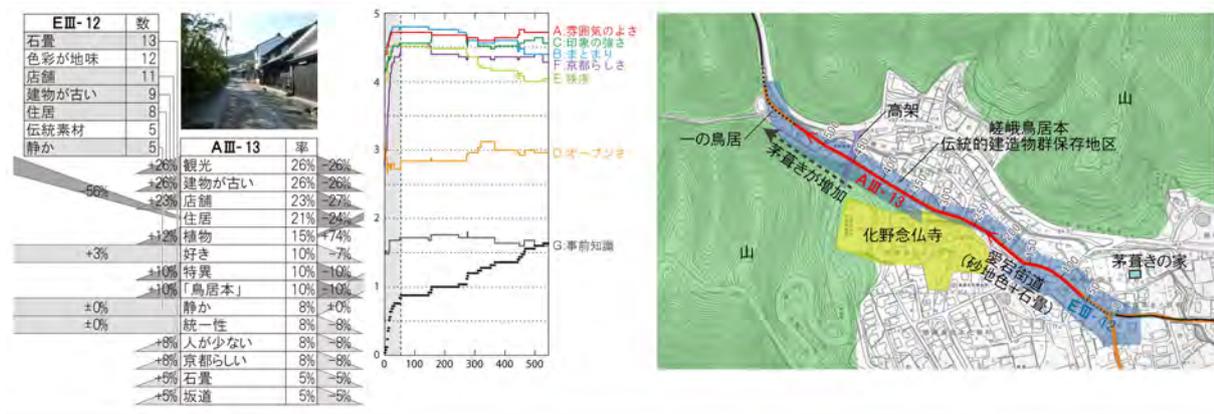


図7-66

①様相の類似と街並みの差異

愛宕街道と再び合流し、嵯峨鳥居本伝統的建造物群保存地区の入口付近にEⅢ-12が形成される。農家型と都市型の混在する江戸時代頃の街並みがよく保存されている。被験者の評価はさらに上がり、渡月橋をしのいで小川通にも迫る。田舎っぽい前2エリアで低かった「京都らしさ」の値も急上昇しており、やはりデフォルト的京都らしさには建築様式が重要であることを伺わせる。

AⅢ-13の中では、建物は都市型主体から農家型主体へと変化する(写真7-46～47)。それでも領域評価値にはあまり変動がない。人工と自然が織りなす景観の魅力や、静けさや落ち着きなどがコネクターとなってエリアをまとめている。様相が類似性を保つ中で、街並みが変わってゆく。

なおアイストップにある愛宕神社の一の鳥居(写真7-48)は、象徴的な位置や形態にもかかわらずアトラクター性は弱い。ルートIの八坂神社と同じく、周囲の様相に沿うような意味合いをもつ。

②観光地の不自然さ

ただし6.5.2でも検討したように、この鳥居本では「わざとらしい」「つくられた感じ」「観光化した感じ」という言葉がちらほら見られる。小川通のようにそのままの用途を継承せず土産物屋が多いため、本物性が弱められている。観光と風情がトレードオフになるという、観光地に常につきまとう難しい問題である。

また観光地化している割に人が少ないという点も被験者に違和感を与えている。デフォルト的な観光地は、渡月橋前後で見たように人で溢れているものだからである。



写真7-46 AⅢ-13の序盤



写真7-47 AⅢ-13の終盤



写真7-48 愛宕神社の一の鳥居

(14)EⅢ-13～AⅢ-14

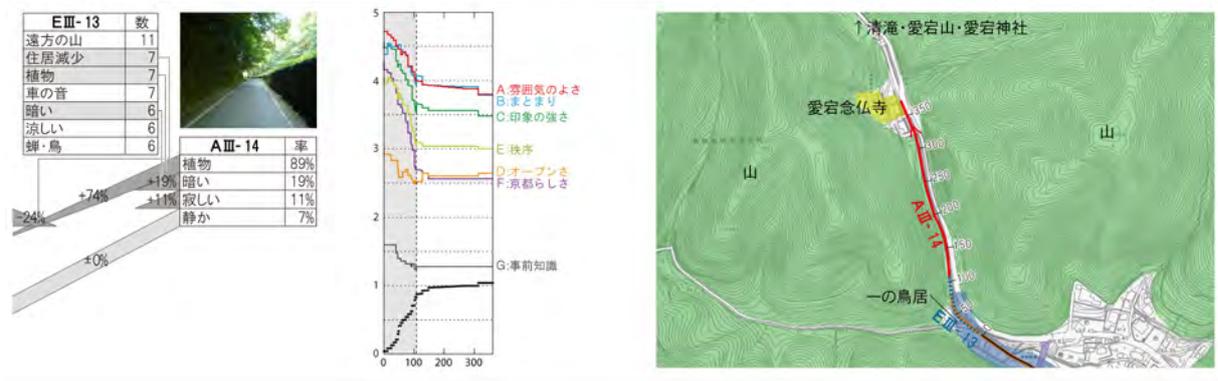


図7-67

①山道の様相

一の鳥居を前にして上り坂を右に入ると、家屋がなくなり木々に囲まれる。暗くなって蝉や鳥の音が聞こえ、涼しくなる。木々の間を進み、右上方の道路との距離が近づき、前方に清滝方面へのトンネルが見え、ルートⅢのゴールに着く。

各領域評価指標は前エリアに比べて著しく下降する。AⅢ-10と同じく、木々は寂しく不気味な印象を与えている。AⅢ-10が領域間の境界という意味合いもあったのとは違い、ここは完全に山に入ってゆく場所であるから、不気味さはなおさらである。実はこの道も試峠、清滝から愛宕山に至る参道の一部なのであるが、被験者たちにとっては暗くて寂しいただきの山道である。

7.4.3 ルート全体からの考察

(1)わかりやすく魅力的な様相

ルートⅢは桂川右岸の住宅街に始まり、渡月橋を中心とした嵐山の観光地を経、田舎っぽい北嵯峨エリアに至るといった構図をもつ。その基底にあるのはルートⅡのような「普通の住宅街」ではなく、「自然と一体となった住宅街」である。

嵐山の観光地帯を除けば、各エリアの様相は概ねわかりやすいものになっている。建物のスケールや年代、素材や立ち方が比較的統一され、寺社や路面テクスチャ、そして木々や山、水路、田園といった自然的要素、さらにはアクティビティとも一体となり、非常にシンプルな様相を練りあげている。それぞれの断片が互いに強めあっているのである。この結果ルート全体に、落ち着きたい雰囲気だという高い評価を得ている。これは個性的アトラクターがひしめきあって雑然としていたルートⅠや、場当たりのスプロールによって全体的に「普通の」様相となっていたルートⅡとは大きく異なる点である。

個々のエレメントが、その集合を超えた全体性を醸し出すその様は、様相論的デザインの目指すべきところだと考えられる。

(2)交通体系と様相

ルートⅢは3ルートの中でもっとも郊外部に属し、公共交通網は未発達で、自動車への依存率が高い。それゆえに、場所ごとの様相には交通体系との関係が如実にあらわれていると考えられる。

渡月橋付近には阪急電鉄、京福電鉄、JRの三線が乗り入れている。京都市の中心部や大阪などからアクセスでき、観光地化の大きな要因となっている。観光客は駅を起点、終点として街を歩くから、駅付近は観光開発にとって有利なのである。駅はアクティビティの中心という意味でも観光地化の中心という意味でもアトラクターである。そしてこの観光地化が、その周辺に曖昧な遷移ゾーンもつく

っている。

一方北嵯峨・鳥居本エリアは公共交通の便が悪い。領域評価などでも渡月橋に勝るとも劣らない鳥居本や愛宕街道には観光客の姿は少ない。地元商店主たちによると、1970年代の嵯峨ブームの終息以降鳥居本近辺の客足は減り、現在ではJR山陰線を境とした南北で観光格差も生じているという²⁰。

住宅地についても、この二地域間で違いが見られる。駅周辺では高密度な開発、北嵯峨エリアは大きな家に二台分以上の駐車場がつくようなゆったりとした開発が進められている²¹。

さらにEⅢ-3では、渡月橋近辺への通過交通によって住宅地の静けさが破壊されているという例も見られた。図7-47に記載している「嵐山高架道路」も、長辻通の観光地を迂回するために1970年に開通したバイパス道路であった。

このように、現代社会においてはマクロな交通体系も地域の様相に対する重要なコンテクストとなっているのである。ただしその交通網の開発過程にその場所のもともとの様相が関係していることも、言うまでもない。

(3)人と自然と産業

ルート全体に共通するわかりやすい様相は、何度も述べてきたように人と自然が一体となって作りあげてきたものであった。そのことが歴史を知らない被験者たちにも体感され、高い評価へとつながったのであった。

ただそれだけに開発と風致との関係が難しい。1976年に発行された『嵯峨野鳥居本町なみ調査報告』ではすでに、今後の嵯峨が危惧すべきこととして、スプロール化による宅地開発と観光地化による環境破壊（特に外部資本の参入）が挙げられている²²。この両者はその後実際に進行しており、実験でも長辻通の観光商店街やその周縁部の様相に対する評価の低さに観光地化の弊害があらわれている。

嵯峨の自然景観は、農業や林業といった産業によって支えられてきた面が大きい。しかし田んぼが住宅地になり、林業も衰退する中で、地域の産業構造は、農林業から観光業へと確実にシフトしている。この構造転換は、自然に直接かわり、手を入れてゆく産業の消滅を意味する。人と自然の織りなす景観が魅力の嵯峨地域にとって、この状況は決して好ましいものとは言えないであろう。

また特に北嵯峨に新しく移り住んだ人は農地も店ももたず、自動車を使って市の中心部へと通勤することになる。このような人たちは観光地化を望まない²³。その一方で、自然は残したい、それでも観光客は増えてほしいという願いが長辻通の商店主たちの本音である²⁴。地域間、業種間でビジョンに食い違いが生まれているのである。

このように嵯峨地域では、現状では心地よい様相が生まれているように見えても、洛内とはまた違った複雑な問題が生じている。その解決のためには単純な対立構図に落としこむのではなく、地域が育んできた様相の全体性に立ち返って考えることが必要となるだろう。

以上で本章の分析を終える。

本章の目的の第一は前章までに得られた知見の適用と発展であった。第5章で主に統計的プロセスによって得たモデルは各々のケースにうまく適用されたが、同時にそのモデルだけでは語れない具体的で個別的な差異を見つけることもできた。

第二の目的は時間的・空間的に広いコンテクストから様相を理解することであった。曖昧でうつろいやすい様相も、その場所のもつコンテクストによってかなり説明できることが明らかになった。また3つのルートではコンテクストが大きく異なり、得られる知見も個性的なものであった。ルート選択にも十分な妥当性があったと考えている。

本章で得られた知見は前章までのものとあわせ、第8章でモデルに統合する。

-
- 1 ルートⅢの通るあたりの地域の呼び名としては「嵯峨」「嵯峨野」「嵐山」「嵯峨嵐山」などがあるが、本論ではこの地域全体を「嵯峨」と呼ぶこととし、必要がある場合は渡月橋周辺からJR山陰線までを「嵐山」、JR山陰線の北を「北嵯峨」と呼び分ける。
- 2 梅原猛監修：古寺巡礼京都39 清涼寺，淡交社，2009，p.93.
- 3 注釈2の文献，pp.93-94.
- 4 京都市都市計画局編：嵯峨野鳥居本町なみ調査報告，日本の町並み調査報告集成第9巻 近畿地方の町並み<1>，東洋書林，1976，p.446.
- 5 財団法人嵯峨教育振興会編：嵯峨誌 平成版，1998，p.333.
- 6 南北は法輪寺から清涼寺、東西は嵐山から太秦まで達するという表現もある（注釈5の文献，p.273.）。これは天龍寺境内地に限らず塔頭や山林も含めた実質的な支配地と見るのがよいであろう。
- 7 注釈4の文献，p.443.
- 8 注釈5の文献，pp.275-276.
- 9 藤岡謙二郎・西村睦男：北白川と嵯峨野 一大都市周辺地域の人文地理的モノグラフー，地人書房，1968，pp.104-107.
- 10 田中真人・宇田正・西藤二郎：京都滋賀 鉄道の歴史，京都新聞社，1998，pp.256-260.
- 11 注釈9の文献，pp.107-110.
- 12 2011年4月15日の「嵯峨嵐山おもてなしビジョン推進協議会」のミーティングにおける、地元商店主へのヒアリングによる。これは筆者らが推進している、嵯峨嵐山地区におけるリサーチやデザインによる街づくり活動「嵯峨嵐山プロジェクト」（Appendix-Eにリサーチ活動例を詳述）の一環として行なったヒアリングである。
- 13 狩野英子：京都嵯峨野周辺のここ一世紀の竹林分布の変化，*Bamboo Journal* 13，1995，pp.1-8.
- 14 木村栄理子・深町加津枝・古田裕三・奥敬一・柴田昌三：嵯峨嵐山における竹林景観の実態と景観保全施策に関する研究，ランドスケープ研究：日本造園学会誌，70(5)，2007，p.607.
- 15 北雄介・門内輝行：地域特性と店舗プロフィールの比較：嵐山とホイアンにみる観光地化に伴う地域の変化 その1，日本建築学会学術講演梗概集. F-1，2007，pp.847-848. および 山口純・北雄介・門内輝行：商業者の意見に基づく街づくりへの提案：嵐山とホイアンにみる観光地化に伴う地域の変化 その2，日本建築学会学術講演梗概集. F-1，2007，pp.849-850.
- 16 注釈4の文献，p.447.
- 17 嵯峨嵐山地域商業ビジョン策定委員会：嵯峨嵐山地域商業ビジョン 嵯峨嵐山おもてなしビジョン，2010，p.6. および 注釈12のヒアリングによる。
- 18 なお桂川右岸を北上してT字路にさしかかったとしても、ここを右折して阪急嵐山駅前から渡月橋の手前へと回り込む道もあるが、ほとんど利用されていない。T字路の突き当りにも、渡月橋に行くには左折するように指示する看板が設置され、中央線も左の道へとつながっている。
- 19 注釈15の文献。
- 20 注釈12のヒアリングによる。
- 21 地域内に地元向けの食料品、日用品店がほとんどないことから、自動車社会であることが伺える。もともと、新丸太町通以北のほとんどに第一種低層住居専用地域が設定され、店舗の建設が大幅に制限されている。ゾーニングはモータリゼーションを助長する側面がある。
- 22 注釈4の文献，p.449.
- 23 注釈12のヒアリングからもこのことが確かめられている。
- 24 注釈15の後者の文献 および 注釈17の文献。

第8章 都市の様相のモデル化

これまで諸理論の導入や多様な分析によって、都市の様相に関するさまざまなモデルを得てきた。それらは都市の様相が備えている曖昧性や複雑性を反映して、多様で分散的な記述となっている。そこで本章では、これらを統合的に論じることで都市の様相のモデル化を試みる。すなわち、現代の京都における経路歩行実験という限られた対象と手法に基づく分析から、一般化できると判断される論点を抽出し、都市の様相のモデル化の可能性を探究する。

まず8.1では、様相という概念の捉え方や把握のプロセスについて再考する。8.2では、都市の様相が空間的にどうあらわれるか、あるいは都市空間の成り立ちと把握される様相との関係について論じる。この2節が本研究で得られた知見に基づく主要なモデルとなるが、最後に8.3では、主に第7章の分析をもとに都市の時間的な推移について考察することで、デザイン論への展開を試みたい。

なお本章は本論文全体のまとめにも相当するため、これまでに示した知見やモデルについては、本文中または括弧書きにてその該当箇所を示す。

8.1 様相のモデル化

ここでは第2章で示した基本的モデルに基づいて、第5章～第7章の分析によって得られた知見を踏まえながら、様相という概念の捉え方、およびその把握の仕組みなどについてまとめる。まず8.1.1から可能態、経路、フレーム、身体、共有という5つの視点を示し、8.1.6でそれらの関係性を整理する。また本論の中で提示したモデルを示すダイアグラムを、図8-1にまとめておく。

8.1.1 可能態

(1) 様相のうつろい

アリストテレスによって構想されて以来、様相とは常に可能的なものの在り方を指示してきた。本論は、この様相概念を都市においてわれわれが把握することからの全体的な様態として捉えるものであった。そこでは時間・空間からなる世界にわれわれ人間が在るというモデルによって、様相のうつろいを理解しようと試みた(図8-1(a)/2.3.1)。

うつろいは第一義的には時間的である。日が昇って暮れ、雨が降り、また季節が変わることで様相は移り変わってゆく。こうした周期的なうつろいに加え、ロングスパンで見ると都市はドラスティックに変わり続けている。たとえば今や京都の目抜き通りとして不動の地位を得ている四条通も、応仁の乱後にはほとんどの部分が焦土であったし、また明治の拡張後でさえも沿道には町家が軒を連ねていた(7.2.1)。

様相の空間的なうつろいは、経路歩行実験が明らかにしようとした主たる対象であった。街路空間を移動するに従って次々とあらわれる様相、その移り変わりをグラフや言葉によって記述してきたのであった。そこでは様相が概ね一定した空間的領域(エリア)と、その領域の間で様相が大きく変化する境界(エッジ)のあることが示された(4.1)。

(2) 可能的な時間・空間

クリプキらの可能世界意味論では、可能世界群は自由に約定されるが、その中でも現実世界というもののはっきりと峻別されている(2.1.5)。上で考察した様相は「いま・ここ」という実際に経過しつつある時間、私が居る空間についてのものであった。

しかしわれわれは、この現実世界における様相把握に留まらず、可能的な世界を移動することができる。もみじを見れば「秋はきれいだろう」と言い、墓を見れば「夜は絶対怖い」と言う。小川通では「タイムスリップしたよう」と表現する。これらは可能的時間を言い表している。また「さっきと

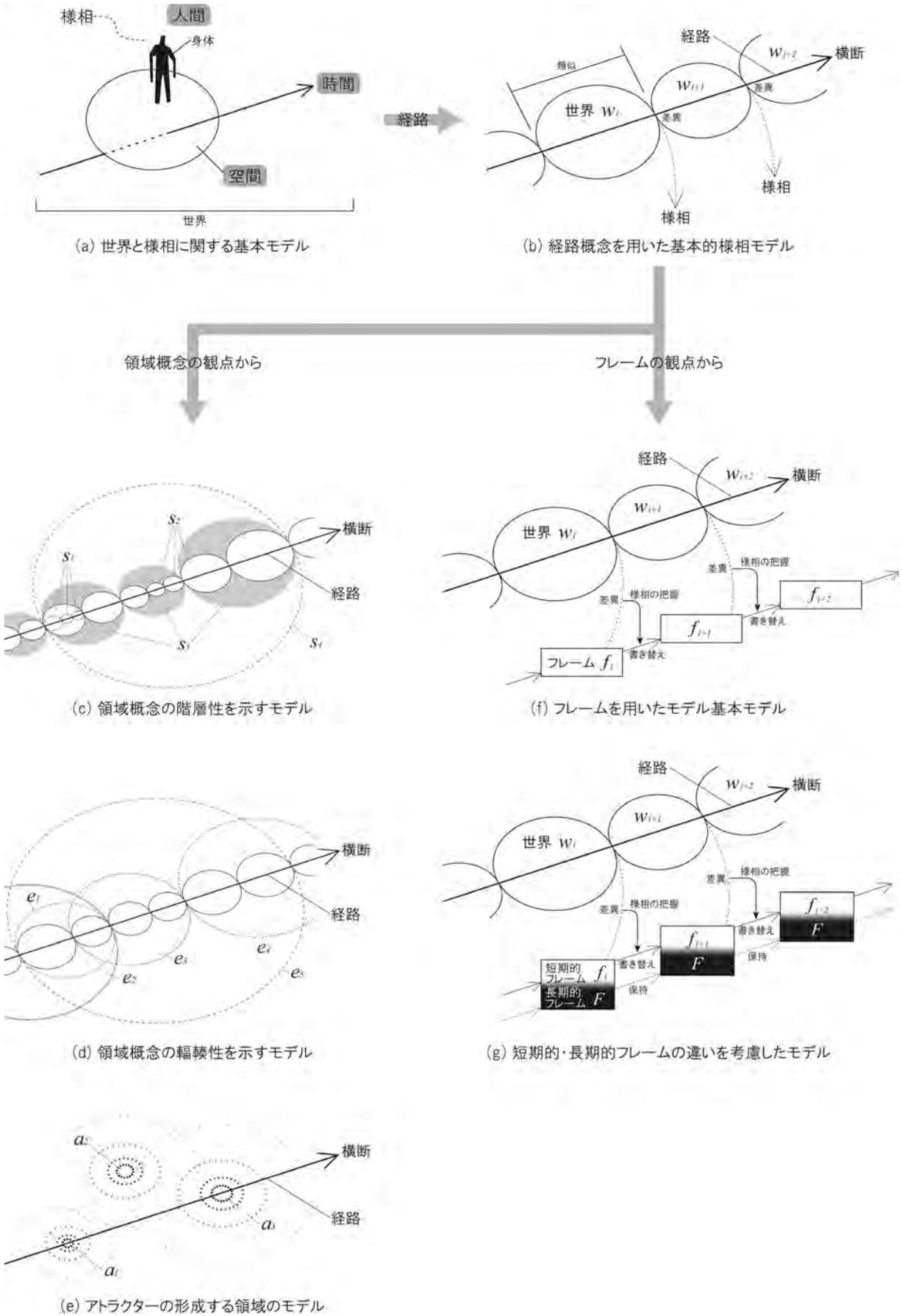


図8-1 様相モデルに関するダイアグラムのまとめ

は違って」「フランス的」などは可能的空間の例であった。われわれはこのように可能世界を自由に思い描くことができ、それが翻って「いま・ここ」における様相を変容させる（6.5.3）。

このような可能世界間の移動を可能としているのがフレームである。「秋になるともみじが色づいてきれい」「フランスの街はこのような景観である」といった記憶がフレームの知識構造の中にあり、現実世界の中の移動において目の前の情景がそれと結びつけられるのである。そもそもフレームとは可能世界である。ある秋にある場所でもみじがきれいだったという経験からフレームは形成されるが、そのエピソード的記憶がもっている特定の時間と場所は漂白され、フレームにおいては時間的・空間的なタグをもたないものとして蓄積されている。このような膨大な可能世界のネットワークこそがフレームであり、われわれの様相把握は常に何らかの可能世界を参照しながら行なわれていると言える。

(3) 真偽の非決定性

2.1で振り返ったように、古典的哲学は総じて真理の探究の学であった。存在論では絶対的に実在する真理が、認識論では人間が認識することがらの真理が追い求められた。それに対してパースは探究の過程では常に誤りうるという可謬主義をとり、究極の真理を共同体に委ねた。ジェイムズのプラグマティズムでは私にとって役に立つものこそが真であり、絶対的真偽の探究を放棄した。

われわれの様相把握にもそのような面がある。様相はその時々に変容し、絶対的な姿を示さない。また街を歩けば、手持ちのフレームでは解決できないさまざまな疑問に出会う。あるものにはアブダクションによって仮説を与え、あるものはうやむやにする。その非決定的状態のまま経路は進行し、あるものには偶然答えらしきものが見つかるが、大部分は忘れ去られる。日常的にわれわれが把握している様相は、このようなルーズな真理観に支えられているのである（6.3.2）。

(4) 志向性

時間と空間に加え、様相の不確定性の大きな要因となっているのが人間である。人間は世界を客体として見、受動的に感知しているだけではなく、世界の中に住みこみ、世界に向かっている。

実験においてそれはまず、被験者の示す極端な記録傾向というかたちであらわれた。それぞれの被験者は世界に対して固有の態度を示していた。しかもその態度は必ずしもはじめから形成されていたとは限らず、経路での様相把握によって何らかの態度が喚起され、それが持続することもあった。つまり志向性さえも可能態なのである（6.5.1）。

またわれわれのフレームは単なる静的な知識構造ではなく、世界の在るべき姿を思い描き、そして世界にはたらきかける願望をも秘めている（6.5.2）。志向性はそれぞれの人に固有のフレームの使い方でもある。さらに願望は実際に世界を変容させる原動力となる。第7章で見たように、被験者たちが歩いた京都の街も、さまざまな先人たちの願望や意図の集積体であった。

8.1.2 経路

(1) 様相を束ねる経路

様相のうつろいを理解するための重要な概念が経路である。本論で繰り返し用いている、異なる世界を経路が横断するダイアグラム（図8-1(b)）がそれを表現している。このときの経路は時間的／空間的、現実的／可能的といったさまざまな視点から理解できる。ただし街路の歩行という体験に大きな特徴を与えているのは、空間的経路性である（2.3.2）。

様相は経路に沿ってあらわれるものであるから、様相は経路によって束ねられる。様相は時間・空間に人間が定位したときに生じるが、その一点では様相としてはただの全体的で不可解なあらわれにすぎない。それに対し構造を与えたり解釈を加えたりできるのは、時間的・空間的な経路において類

似した様相が継続的にあらわれることによる。それにより、あたり一帯の全体的な在り方として様相が束ねられ、連続的な世界が理解される。

この様相を束ねるといふ現象は、ある種の法則化や一般化を意味する。ある場所で「いい雰囲気だなあ」と感じることは、その一帯の様相に関する法則性の把握でもある。様相はきわめて原初的で直観的なあらわれでいて、なおかつ経路性によって一般化されてもいる（6.2.2）。

さらに経路は、それに沿って可能的に伸びてゆく。ある場所での様相把握によってこれまで歩いて来た道もそうであったことに気づいたり、あるいはこれからの道への予想をなしたりする。いま・ここから離れ、過去と未来、後ろと前に向かって様相を束ねることができるのも、経路のはたらきによるものである（6.2.1）。

(2) 差異を生み出す経路

領域内にはある種の類似性があるが、その領域同士の間には差異を生み出すのも、また経路である。エッジとエリアの概念（これは境界と領域が多主体間で共有された姿である）、またコネクターとシフターについての考察も、類似と差異を基本としていた（4.4.3）。

様相は差異によって顕在化され、差異のあるところに被験者の言葉も集中した。これらの言葉は基本的に、今までよりどうなったとか、今までなかったものがあらわれるとかいったように、比較の意味合いを帯びている。比較は今まで形成されてきた法則性や類似性に対する差異を表わしており、この差異の現象により様相は特にきわだったものとなるのである。

多くの場合、エッジにおいて前のエリアとの差異をつくり出すシフターとなったものが、次のエリアでのコネクターとして作用した。それに比べコネクターがなくなることにに関しては言葉にされにくかった。境界とは、後ろと前を等価に置いて見比べる場所ではなく、古いコネクターが忘れられ新しく形成されるコネクターへと関心が移る、明らかな方向性をもった場所である（5.2.3）。

(3) 領域概念の捉え方のバリエーション

同じく5.2.3では、都市の領域概念に関する実践的な知見をいくつか提示した。まず互いに異なるエリア同士もその差異の度合いによってさまざまなスケールで結び合い、領域概念は階層性をもつことを示した。図8-1(c)は、さまざまなスケール(s)で領域がまとめあげられていることを示している。さらに、領域同士はさまざまな言葉で結びつけられ、その関係が一意に割り切れないセミラティス構造をなすこともわかった。図8-1(d)は、異なる表現(e)による領域のまとまりを表現している。こうして見ると、領域と境界、類似と差異のあらわれ方も決して固定的なものではないことがわかる。

本論では基本的に、類似と差異をその原理とするモデルによって領域を理解してきた。これは原の用語で言う「容器」としての空間の理解であるが、もう一つ、「場」として空間を理解した方がよい場面もあった。それがアトラクターによって生み出される空間領域である。アトラクターは自らを中心とし、そこから周縁に向かって影響がだんだん薄まってゆくような領域を形成している(図8-1(e))。訪れる前はそこに「向かって」ゆき、過ぎてからも「離れて」ゆくものとして記録される。アトラクターは経路を遠く離れていても様相にあらわれたり、あるいは相互に競合しあったりもする(6.4.4/アトラクターの種類や空間的なあらわれ方については8.2.5で詳述する)。

また考慮すべきなのが、領域の切り替わりと様相の切り替わりが必ずしも対応しないことである。たとえばルートIにおける堀川通の東西(AI-1とAI-2)に代表されるように、似たような様相であっても別領域だと捉えられる場合がままある。本論ではこのことについて、様相とは別に領域感という語を提示して論じた(5.2.1)。

(4) 経路上の気づき

境界と領域を可能的なものにしている大きな要因が、様相把握が基本的に気づきに依拠することである。類似や差異は誰もが確実にわかるように提示されているのではなく、われわれが気づくものである。気づけば様相は変容し、気づかなければ変わらない。身近なものに気づかないこともあれば、はるか遠方の山に気づいてその地を思い浮かべることもある。先に述べた、経路に沿った前方や後方への組織化も、気づきをもたらすものであった(6.2.1)。

ただし気づきとて偶然のものではなく、その裏にフレームが作用していることは言うまでもない。

8.1.3 フレーム

(1) フレームの基本的な考え方

経路における様相把握を下支えしているシステムとして、本論ではフレームを想定してきた。フレームは人が歩いてきた経路、生きてきた経路を記憶として蓄えるとともに、これからの経路への予想をなす。その基本的ダイアグラムは図8-1(f)のように示されるが、ここには図8-1(b)のダイアグラムから人間が加わっている。フレームは、時間と空間のつくり出す世界構造に対して人間を含みこませるためのキーになる概念なのである。さらに6.1.3では、スクワイヤの示している記憶の時間分類と対応して、短期的フレームと長期的フレームに分けて考えるのが有効であることを示した(図8-1(g))。

またフレームは単なる知識構造ではない。8.1.1で述べた志向性はフレームの使い方に相当し、フレームは世界へはたらきかける意志や、世界に対する価値観を含意している。また8.1.5で述べる共有性とも関連し、常識(common sense)の概念と深くかかわるものである。

(2) 短期的フレームとその変容

短期的フレームは、経路上において次々と変容する様相を把握するためのシステムとなっている。ある場所で把握した様相はフレームに記憶され、それをもとにして次なる場所での様相との類似性や差異性を見出すことができる。

短期的フレームは類似性を保管する基盤であり、気づきと比較という仕組みによって差異性を把握させる。比較される二つの空間の隔たりはさまざま、目の前の街並みの左右のようなほとんど短期的フレームを必要としないようなものもあれば、経路上の連続空間の比較、また距離を隔てた比較、さらにはルートを歩く以前の体験との比較など、より長期的なフレームに強く依存するものもある。このうち経路上の様相継起の基本となっているのは、連続空間における比較であった(6.2.2)。

そしてこの過程で、フレーム自身も次々と書き替えられてゆく。新しい記憶がフレームの中心的な位置を占め、古い記憶は薄れてゆくのである。すべての記録がこのような変遷を示しているという見方もできるし、言葉の線条性という性質一つとってみても、その後ろにフレームが見え隠れする(6.2.3)。フレームは、その存在を仮定することで言葉を深いレベルで読み込むことを可能にする概念装置でもあった。

(3) 長期的フレームとデフォルト構造

一方長期的フレームとはその日に通った経路とはほとんど関係なく、その人の人生という長大な経路の中で形成されてきたもので、その全体を描き出すのが不可能なほどの膨大な知識ネットワークである。われわれはしかし、その途方もない知識体系を特段意識もせずごく当たり前用いている。これが長期的フレームに備わっているデフォルトという性質である。あるフレームのターミナルに既定で割り当てられている値をミンスキーはデフォルト(値)と呼んだが、本論ではフレーム間のつなが

りに関してもデフォルト構造という考えを導入し、より広い現象の理解に応用した（6.1.2）。

このデフォルト性をもった長期的フレームはあまりに当然にはたらいっているため、記録に顕在化することはほとんどないし、逆に読み込もうと思えば際限なく読み込めるものである。先ほどと同じく記録の線条性はフレームに迫る一つの手掛かりとなっていて、逆接表現の裏にフレームのデフォルト構造があることが示された。驚きや疑問の表現も、デフォルト構造からのずれを表わしている（6.3.2）。またデフォルト性を明示する「いかにも型」「普通型」の両表現は、アトラクターとの強い関連性を示しており、デフォルト構造が都市の空間構成と強いつながりをもつことが示唆されている（6.3.1/6.4.4）。

デフォルト構造は頑強である。経験による書き替えは起こりにくく、デフォルト構造からずれた出来事はほとんどが例外として処理される（6.3.3）。このことは、主要軸の周りに例外が結びつけられているという構図で表されたシャンクのスクリプトの考えとも通じる。

(4)組織化と活性化

本論ではさらに、様相とフレームとの関係を考えるために組織化と活性化という言葉を導入した。組織化とは得た知識をフレームのネットワークにしっかりと組み込むことである。特定の時間や空間に依拠していた短期的フレームを一般化し、長期的フレームへと受け渡すことに相当する。これによって、知識は当たり前のもので扱えるようになる。

この当たりのフレームのはたらき方が、不活性状態というものである。様相把握の多くはこの不活性のフレームのはたらきによってなされている。しかしときにわれわれは、フレームという可能世界の中を意識的に探索することや、フレームの中身を言葉に明示することもできる。これが活性化という作業である（6.1.2）。

組織化と活性化は必ずしも真逆のプロセスではなく、組織化されたまま活性化することもできる。フレームは様相把握の際に通常不活性的に、ときに活性的にはたらき、そしてそのはたらきがまた様相の全体性を変容させる。様相とフレームは、一体的な系として再帰的な振る舞いを示す。これはナイサーが知覚循環として示したことと関連する（6.1.1）。

(5)フレームの全体性

ミンスキーやシャンクら人工知能分野では、フレームを可変的なものと捉えながらも、何らかの対象（事物や概念）に関する知識として扱う傾向がある。しかし様相とは、個々の対象に先立つ全体性であったはずだ。

そのような全体的な在り方も、フレームに保存されていると考えるべきである。個々の知識に加え、その間のマイクロな関係性、そしてそれらの織りなす全体的な「在り方」が保存されているのである。要素の指摘に先立って「楽しい」「京都らしい」などという全体性を指す言葉が飛び出すのは、このようなフレームと世界の「在り方」同士が結びつけられた結果だと考えられる。

そしてフレームの全体的な在り方もやはり、可能的なものである。知識を自由につなぎ合わせることも、さまざまな全体性をなすこともできる。フレームは、様相という曖昧なあらわれを解明するのに適した、非常に可変的な考え方であり、また経路性とも密接な関係をもっている。

8.1.4 身体

(1)行動による様相把握

本論では身体を、長期的フレームの一部をなすものとして捉えた。明確で説明可能な知識、つまりスクワイヤの分類で言うところの体の動かし方や空間との距離の取り方などの手続的記憶を、身体に

埋め込まれたフレームとして考えるのである。

われわれは常に何らかの行動を起こしながら様相を把握している。空間的経路を横断できるのも、歩行という行動によってのものである。ただし被験者が自らの行動について記すことはほとんどなかった。これは歩いたり立ち止まったり角を曲がったりといったことが文字通り身体化されており、フレームにおいて不活性に行なわれているためであろう(6.4.1)。しかし角を曲がることによって様相の急激な変化が促されたり、大通りと交差するのとそれに沿って歩くのでは把握する様相が異なったりしたように、行動は都市空間に対して経路を当てはめ、運用する手段となっている。

(2) 身体—空間構造

身体という世界における中心が定められることで、空間との関係が生じる。6.4.2では身体中心座標系と鳥瞰的座標系という二つの座標系をわれわれが併用していることや、内と外の概念による空間把握、アトラクターとの関係による様相把握、諸感覚の連動関係などが指摘された。また5.3.1で触れた様相における図と地という概念も、身体—空間構造の一側面である。

この後8.2で述べるような都市の様相の空間的構成はすべて、都市そのものの構成に依存していると同時にわれわれのもつ空間図式にも依拠していると言える。たとえば京都の場合、直交グリッドの街路構造とわれわれの鳥瞰的座標系という条件がそろふことで、東西南北軸を用いた空間把握がなされていた(6.4.2)。

この都市空間と空間図式との関係は、ノルベルグ＝シュルツが建築的空間、実存的空間として論じたものであった(2.2.3)。身体はこの二つの空間の結節点と理解することができる。

8.1.5 共有

(1) 重ね合わせによる共有性の仮定

第2章で断わったように、様相がたちあられるのは基本的に個人においてである。他者との間にまったく同一の様相を共有することはできず、共通している(あるいはそう信じている)程度であると考えられる。しかし本論では、多数の人々の把握した様相を重ね合わせることで、共有された様相(都市の様相)を仮定したのであった。

このことは本論に限らず、多数の被験者を用いた実証的研究に通底する考え方である。しかも、われわれも普段似たようなことをしていると言える。つまり、自分が感じたことをお互いに伝え合うことで、共有された様相を想定している。また多くの人々が示す共通した行動や思考をもって、あたかもそれが共有されたフレームであるかのように振る舞っている。

(2) 社会的集団と共有

今回の実験では、たとえば建築を学ぶ学生という被験者の共通項から、彼らに特有と思われる様相把握方法が浮かび上がった(6.6.2)。このように共有という概念は、その共有される集団の特性と強く関連している。その中でも特にスケールの大きな集団が想定されているのが、世論や常識と呼ばれているものである。

個人と社会の間には、個人的なフレームに基づいた言動の集合が社会的フレームをつくり、また社会的フレームが個人のフレームへとフィードバックされるという再帰的關係がある。本研究で読み解いてきたフレームのはたらきも、個人的であると同時に社会的だと考えるべきである。ただし「京都市らしさ」の分析にみたように、共有された様相やフレーム自体も常に揺れ動き書き替えられつつある。世論や常識のような一見安定的に思われる価値基準も、絶えず変化の可能性に曝されている(6.6.2)。

(3) 共有の媒体としての都市

この社会的共有のための道具の一例として、6.6.2ではマスメディアを指摘した。確かにテレビや雑誌などのマスメディアは、様相やフレームを多くの人に向けて発信する装置となる。

しかしそれ以上に、都市そのものも共有のための媒体だと言うべきである。「京都らしさ」をはじめとする「らしさ」の表現のほとんどは空間に関連づけられており(6.3.1)、都市空間を介して人々のフレームが共有されていると言える。

ルドフスキーらも指摘していたように都市は表現体であり、そのつくり手の価値観を伝えている。たとえば平安京の直交グリッドは王権による支配の意志を世に知らしめる媒体でもあり、庶民や貴族たちはその媒体を通じて権力に従った。しかもアルヴァックスらも指摘しているように空間は時間的に安定しているから、王権の主体が消え去った現在でも、グリッドがあるからこそ東西南北を基軸とした空間図式がわれわれのフレームに共有され、またこのことが京都らしさの一要因ともなっている。

このような公共的な性格は、都市という空間に備わった特質であると言える。さまざまな思想や行動様式も空間化されることで時間的に安定し、多くの人が共有できるのである。都市は空間化と共有の起こる場である。

8.1.6 全体の関係性

以上が、複雑な様相を理解するために本論で提示した5つの切り口である。最後に項目間の関係について述べる。その関係性を、図8-2に簡単に図示しておく。

様相の前提となるのが時間・空間・人間という三要素であるが、これらはともに不確定的で、うつろいやすい状態にある。これにある程度の構造を与えているのが経路である。経路は、領域を束ね、類似性や法則性を見出させるとともに、領域間の差異をつくりだし、比較させる役割をも持ち合わせている。アトラクターも経路において方向性をかたちづくる。また、経路はただの線分ではなく、一方向に向かって常に進行している。

この経路的な様相把握の進行を下支えするのがフレームであり、また進行の媒体となっているのが身体である。われわれはフレームにより経路を記憶し、予想し、また志向する。身体は現実世界に根ざした一つの実体であり、肉体化されたフレームでもある。ここに人間と空間との間に実存的な関係性が生まれる。フレームも身体もともに、自己を中心としながらも世界の変化に対応できる柔軟性をもった枠組みである。

そしてこのようなシステム全体が多数の主体によって共有されることで、社会的フレームというメタシステムが生じている。メタシステムは個人のシステムと相互に影響し合いながら変容を続ける。

最後に可能態とは、このような系全体について適用されるべき根本概念である。様相とは、これらの複雑で可変的な系の全体において、たちあられる現象なのである。

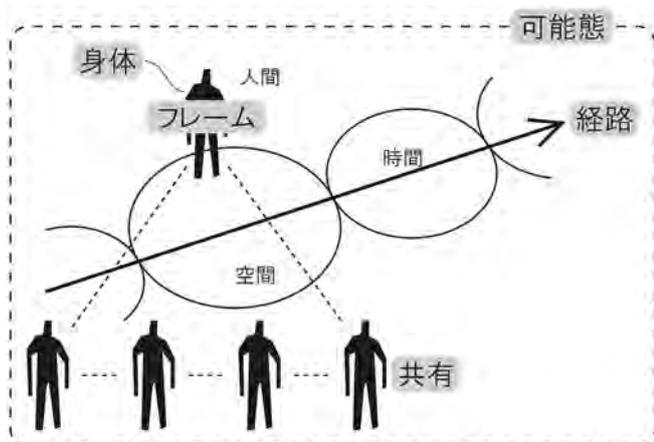


図8-2 様相を理解するキーワード同士の関係

8.2 都市の様相の空間的なあらわれ方のモデル化

次に、本研究の様相解読の直接の舞台であった都市についての考察をまとめる。都市の様相が、都市のどのような空間的構成のもと、どのようにあらわれてくるのかという視点である。論の進め方は8.1と同じく、まず街路、自然と地形、建物の機能、建物の属性、アトラクター、アクティビティ、その他の要素、様相の全体性という8つのトピックによって視点を示し、最後に8.2.9でその相互関係について考察するという流れになる。

8.2.1 街路

(1) 街路と身体

都市の様相、とりわけ本研究の方法論においてまず着目すべきなのが、街路である。街路はそこにわれわれが居る場所であり、空間的経路が根を下ろす場所である。都市の中に張り巡らされた街路を縫う経験の繰り返しにより、都市は面的に把握される。

街路の経験はきわめて身体的である。われわれは街路空間の中に居り、地上1.5m程度の目線から空間を見回し、そして路面を踏みしめて歩く。そこに、さまざまな身体-空間構造が生まれる。

特に街路の幅や形状により、特徴的な現象が数多く見られた。そのトピックを図8-3にまとめ、以下それぞれについて述べる。

(2) 街路の幅

街路の幅とわれわれの身体との関係は、芦原の提示した内と外という考え方で理解することができた。被験者は細い街路に対しては必ず「入る」という言葉を使うように、そこは内的な空間であり、安心感を表明していた(図8-3①)。一方大通りは外的空間であり、そこでは概ね疎外感を感じていた(図8-3②/6.4.3)。

第7章で見たように、街路の幅は歴史的にも沿道に立ち並ぶ建築や交通との関連をもってきた。平安京の大路は祝祭性や象徴性を備えていた。近代以降の大通りは市電や自動車、そして歩行者の流路となり、沿道には高い容積率が与えられ、商業機能が誘致された。一方で辻子や路地のような細い道には現代でも再開発の手がおよばず、大通りとの間に明快な対比を見せている。このように、街路幅は以降の小節で述べる群機能やアクティビティなどに対する大きな影響力をもつのである。

街路を挟む両側について理解するためのモデルが、竹山の示した切断と縫合という概念である。一般的に広い道ほど切断の、細い道ほど縫合の作用を強くもつ。しかし大通りの多くはその両側を領域感としては切断しても、様相という意味では切断しないという、二重の役割を担っていることも見た(図8-3③/5.2.1)。

このように道幅は身体性とも都市の発展の仕方とも大きな関連をもつため、道幅の変化は鋭い様相の変化をもたらした(図8-3④)。ガワとアンコの間の差異も非常に大きなものがあり、ルートIではガワを歩きながらアンコを覗き見るような記録が断続的に見られた(図8-3⑤/6.

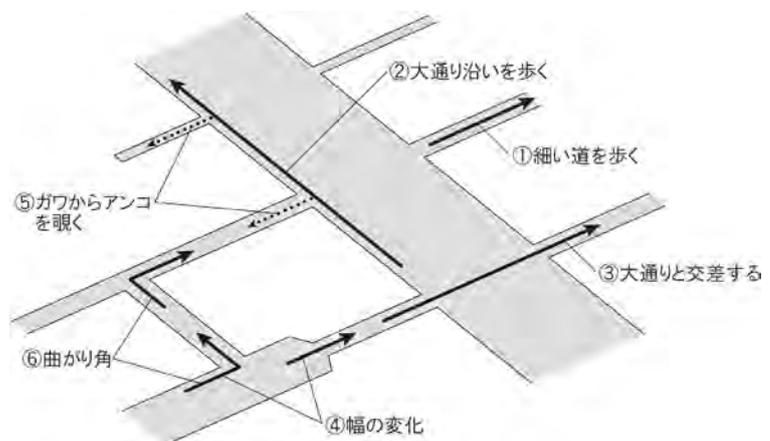


図8-3 街路と様相に関する特徴的な現象のまとめ

2. 2 / 7. 2. 3)。

(3) 街路の形態

街路幅と並んで様相の急変を促すのが曲がり角である。遮蔽縁の効果によって見える情景が一気に変わり、鋭い境界となる(図8-3⑥)。切断と縫合の語を曲がり角にも応用するのであれば、少なくとも領域的には切断作用が強く、様相としても切断されていたところが多かった(5. 2. 1)。

ただし道幅とは違って、角を曲がること自体はほとんど記録されない。非常に身体化されたことがらであり、またルートがあらかじめ指定されていることも影響しているだろう。実際曲がり角の有無は街路網の中で歩く経路のとり方、つまりわれわれの行動に依存している。しかし京都の場合、中心部を離れると曲がり角やT字路が多くなることもまた事実である(7. 3. 3)。

その京都の街路構造を特徴づけている直交グリッドは平安京以来1200年の間、さまざまな変容を受けながらも残存し、われわれの空間構成方法に影響している。正方位に置かれたグリッドは東西南北による鳥瞰的座標軸を明確にしていることが実験で確かめられたし、交差する通り名に「上る」「下る」「東入る」「西入る」を付す地点表示法もこの街路構造の賜物である。直交グリッドから外れたルートⅡやルートⅢではこの座標はあまり用いられず、身体中心座標が優越する(6. 4. 2)。

また例は多くないものの、路面テクスチャの変化も様相の変容と大きく関連し、領域にまとまりを与える役割をしていた。路面テクスチャに関してはアスファルトというデフォルト値があるため、そこにずれを生み出すことは大きな効果があった(7. 4. 2)。

8. 2. 2 自然と地形

(1) 都市の様相における位置づけ

自然物は人工的環境である都市においてよく目立ち、様相因子としても占有率の高いものとなった。特に自然に寄り添うようにつくられてきたルートⅢにおいては、自然物に関する記録が非常に多かった(7. 4. 3)。

植物があることで概ね評価は高くなり、また「蟬の声」「木陰で涼しい」「川のにおい」などといったように視覚以外の諸感覚も伴って把握されるところにも大きな特徴がある。6. 4. 5では、「緑や川を見ただけで涼しい」というような、フレームのデフォルト構造を介した諸感覚のつながりさえあることを指摘した。自然物はこのように総合的にあらわれる。

山は遠方であっても記録され、主要なアトラクターの一つとなっている。特に京都の場合は三山がある。その中でもルートⅡの途中に登場した比叡山や、同じくルートⅡ終盤の左大文字山をはじめとする「送り火」の五山などは特別な位置づけをもつと考えられる(6. 4. 4 / 7. 3. 2)。

川は地表の大きな面積を占める線状要素という意味で街路と似た役割を果たし、切断と縫合の作用をもつ。ルートⅠの鴨川は河原町と祇園という個性的な地域を分かち切断作用をもつが、大通りとは異なり同時にまとまりのある領域ともなっている(7. 2. 2)。一方ルートⅢの桂川は兩岸の観光地を縫合する役割が強くなっている(7. 4. 2)。

(2) 都市の形成過程における役割

自然や地形は都市の発生以前に存在し、その形成に大きな影響を与えてきた。あらゆる都市の構造は、この自然条件を抜きにして考えることはできない。

京都で言えば、平安京の立地選択の決め手になった「四神相応」という言葉自体が、理想的自然環境を表現している。盆地の中央では厳格な直交グリッド街路が敷かれたが、周縁部にゆくほど地形の影響でそれが乱れている。嵯峨地域では地形をコンテクストとして街がつけられただけでなく、自

然は愛でる対象とされ、丁寧に育てられてきた。そしてこのような人間と自然のかかわり合いの歴史は、そのまま現在の都市の様相に反映されているのである（以上第7章）。

8.2.3 建物の機能

(1) 様相把握のベースとしての群機能

群であられる建物の機能は多くの記録に登場し、様相把握におけるベースとして用いられることがわかった。特に領域表現において占有率が高く、広がりをもつ領域を捉える言葉として機能は飛び抜けている（5.3.1）。

この性質が特に強いのは住宅街である。住宅街は都市全体に広がり「普通の街」を形成している。その面積の広さに加え、被験者自身が直接（買い物や観光などで）かかわることがなく、あまり知らないことも、住宅街を大まかにまとめて捉える視点につながっている。

ここに店舗や観光施設、オフィスなどが混じると、様相はぼやけたものになってくる（AⅠ-2、AⅡ-9など）。しかしそれらは集積してくると、今度はアトラクターとしてはたらくようになる。アトラクターとなるにはこれらの集積度合いがキーになる。ルートⅠの前半やルートⅢの観光地の前後に、集積の空間的グラデーションを観察することができる（第7章）。

また集積している機能ごとに様相が大きく異なることも示された。住宅街はクローズドで知られておらず、店舗や観光が多いとオープンでよく知られている。マンションやオフィスが多いと印象が悪くなる傾向にある（5.3.1）。このような価値的側面においても、機能は様相のベースをなす。

この機能の集積は、歴史的には庶民の手によって自発的に起こってきた面もあるが、秀吉の職業別棲み分け策のように意図的に誘導されることもあった。現在では用途地域の指定が、各地域の機能の配置を固定化しつつある。その結果、近隣商業地域の指定によって住居と店舗が混在してAⅡ-9がぼやけた様相となることや、あるいは嵯峨地域において市街化調整区域に明らかに田園が残されていることなどが確認されている（第7章）。

なお寺社や学校、駅など単体であられる建物は、ベースよりもアトラクターとしての性質が強くなる。これらについては8.2.5で検討する。

(2) 総合的なあらわれとしての機能

6.1.3の「家」という言葉の分析において、この言葉が発せられるために複雑なフレームのはたらきがあることを指摘した。建物を構成する諸要素、形態、スケールから人の動きまで、それにまつわるさまざまな要素がデフォルト的な家と一致したときに、家と認められる。住宅や店舗というのは単にその機能を満足するだけではなく、そのビルディングタイプに固有の仕方をもって都市にあらわれているのである。住宅であれば切り妻屋根の一軒家や、ベランダ付きのマンションとして。オフィスなら高さや広い床面積をもち、四角いガラス窓を通りに向けているといったように。街路は、そうした機能を表現する記号が表象する場になっている。

こうした記号そのもののもつ魅力を残したまま機能を読み替えてきたのが寺社や鳥居本の街並みで、かつては信仰や生活に深い意味合いをもっていた建物が現代では観光資源となっている。一方小川通の茶道の街並みでは昔の使われ方やしきたりまでもが継承されており、被験者たちに本物性を感じさせるものとなっている（6.5.2）。

8.2.4 建物の属性

(1) 建物の年代

建物にはさまざまな属性があるが、中でもっとも様相を左右するのが年代である。年代は領域

を語る言葉として多用される他、建物が古い地域ほど評価が高いという明確な傾向があった（5.3.1）。

年代の古い建物は、木や瓦といった素材、町家のようなデザイン、渋みのある色彩といったように他のさまざまな属性と連動している。いわば様式があったのであり、個々の要素同士が強めあって全体的な様相をつくりあげていた。それが京都らしさのイメージにもなっている。古い建物がもっとも集積した小川通では「タイムスリップして、また戻る」という表現さえ見られた。一方現代の建物はその様式を引き継がず、素材も色彩もバラバラである。昭和以降の建物が多いエリアでは「統一性がない」という言葉につながっていた。様式が不在なのである。その不統一性の中で古い建物が「残る」という表現も目立つ（6.5.3）。

現存建物の年代は、都市の経てきた歴史によって決定されている。その地域がどの時代に形成され、どの時代に大きく変えられたのか。またコンテキストはどのように引き継がれ、あるいは分断されてきたか。このような時間的経緯が建物を通じて現在の都市に表象し、様相に大きく影響しているのである。

(2)スケールその他

スケールは様相表現でこそ年代を上回る占有率となったものの、領域表現では存在感を薄める。第7章の分析でも登場の機会は多くない。大まかには建物スケールも年代と連動していると言えるし、大通り沿いに高い建物を誘致する現行法規制が原因で街路幅との関連も強い。また建物の素材やデザインも年代に包含されている上に、現代的・人工的素材がデフォルト構造を占めるため、古い自然素材についてはばかり記される傾向があった（5.3.1）。

景観関連の現行法ではスケールや意匠デザインについて多くの規制がなされているが、それが望ましい様相を生む効果を得ているとは言い難い。より本質的には、どのような建物がデフォルト構造になればふさわしいかという視点、つまり先にも述べた様式の問題が大切だと考えられる。

8.2.5 アトラクター

(1)アトラクターの意味

都市の様相把握に方向性を与える要素として、本研究ではアトラクターという概念を用いて考察し、特に6.4.4で詳しく述べた。領域はアトラクターを中心に把握され、その前後はアトラクターに向かい、アトラクターから離れる道筋として理解された。

アトラクターはその見えがかりとして領域を支配するだけではなく、アクティビティの結節点でもある。そのためよく知られており、パブリックイメージが集中する場所である。言葉としては「いかにも型」のデフォルト表現が多分に見られ、ベースをつくる「普通の街」の中にアトラクターが散在しているという構図を描くことができる。ルートIでは古来のアトラクター群が四条通上にひしめき合い、競合しているという現象も見られた（7.2.2）。

さらにアトラクターは都市の変容をも方向づけてきた。都心から郊外への発展、寺社を中心に形成される門前町、また観光地のスプロール現象などもこれによって説明できる。

(2)アトラクターの種類

アトラクターとしてまず重要なのが、都市の中心である。店舗やオフィスが群であらわれ、アクティビティを引きつけることによって、「都心」を形成している。次に寺社や大学、駅などの単体の建物はそれ自体でアトラクターとなりうる。店舗やオフィス、観光のための店舗などは集積することでアトラクターをなすが、小川通の街並みのように機能の如何を問わず古い建物の集積によってアトラク

ターとなったものもある。さらに山や川といった自然要素も重要である。

またアトラクターは、一つの鳥居からまとまりをもった地域、あるいは雄大な山々までさまざまなスケールをもって現象する。形態的にも点・線・面がある。たとえば鴨川は線状、三山は環状のアトラクターであると言える。リンチの五要素はランドマークとノードが点、パスとエッジが線、ディストリクトが面を指すものであったが、アトラクターとはこれらすべてを包含しうるメタ概念である。

以上のような多様なあらわれをもったアトラクターを都市のマクロスケールから考えると、グローバルアトラクター (global attractor) とローカルアトラクター (local attractor) に分けて考えることが可能である。京都の場合、グローバルアトラクターとして中心一周縁という構造があった。都市の中心はマクロレベルでの一大アトラクターとなっており、京都の場合は四条河原町や四条烏丸がそれに相当する。都市の中心は活動の中心という意味でも都市拡大の発端という意味でも重要なアトラクターである。そしてまた周縁にも三山と寺社という環状アトラクターを備えていることが、京都の独自性である。中心一周縁はグローバルアトラクターのもっともベーシックなタイプだと考えられるが、他にも多極構造や線状の極をもつ構造 (山間の街道筋の集落など) も考えられる。

この大きな構図のもと、ローカルアトラクターが散在する。それぞれのアトラクターはそれぞれの場所で中心一周縁構造をつくり出す。たとえば嵐山の観光地にその典型を見ることができる。川や商店街は線状のアトラクターをなす。

(3)アトラクターと様相モデル

6.4.4で挙げた強いアトラクターとなるための条件は、8.1で示した様相モデルのさまざまなパートと関連していた。つまりよく知られていることは長期的フレームやその共有と、内部での類似性と周囲との差異性という点では経路上の短期的フレームと関係する。また象徴的スケールや位置、そして把握する人が生活においてかかわっていることなどは身体性に依拠するものであった。

様相のモデルと深くかかわっているからこそ、アトラクターの概念は非常に応用性の高いものだと考えられる。この語の都市論への導入者である原は、建築設計の理論としてもアトラクターを用いている¹⁾。マクロに見れば都市間関係の分析にも応用できるであろうし (たとえば日本において東京は明らかなアトラクターである)、人間関係に応用するならば組織のリーダーはアトラクターである。

8.2.6 アクティビティ

(1)アクティビティの特質

空間に固着して安定性を得ている他の要素とは異なり、アクティビティはきわめて流動的で可変的なものである。それにもかかわらず様相を表わすための主要な言葉となっており、コネクターやシフターとして作用することも多かった (5.3.1)。

その特質について考えると、まずアクティビティは複合的な概念である。人や車の量や種類、行動の他、音や楽しさ、落ち着きなども含まれている。アクティビティの変節点では、これらが一気に変容する傾向がある (5.3.1)。

また人にとってアクティビティはきわめて身体的なあらわれとなる。人は周りの人々の流れを観察しながら、自らもその内において流れている。身体を起点とした距離感覚や密度感覚、さらには音や温度によって周囲の人の流れを把握し、それが賑やかだとか静かだとか、あるいは歩みにくいかいったような様相につながる。このことは相手が車であっても同様であり、狭い道に車が多いとそれは身体の危険につながる。

さらにアクティビティは公共的な一面をもつ。多くの人たちが向かう場所があれば、それは社会的フレームが存在することを示し、同時にその場所はアトラクターとなる。祇園や金閣寺では多くの観

光客や外国人の存在が指摘されたが、これが観光名所の証にもなっている。

このように可変性、全体性、身体性、公共性などと強い関連のあるアクティビティは、きわめて様相論的なあらわれ方をしている。だから、空間に固定されていなくても非常に影響力のある要素となるのである。

(2) アクティビティの空間的現象

人の多さや賑やかさという意味でのアクティビティは、アトラクターに引き寄せられる。繁華街や観光地、駅や大学などである。アトラクターがそこからの距離に応じて減衰するような影響力をもつと同様、人の数もピークと裾野のあるような分布を示す。アトラクターの他には、都市のマクロな交通体系もアクティビティに大きく影響する。特にルートⅢでは鉄道網が歩行者と自動車の両方の流れに影響し、ひいては地域の様相を左右していた（以上第7章）。

車は大通りに多いのが常であるが、歩行者にとってのあらわれ方として重要なのがその増減や、車との距離である。ルートⅠでは四条通はずっと車通りが多いのだが、歩道が設けられていて被験者と干渉することがないので、ほとんど記されない。その一方、歩道のない細い道でも車が多いところでは被験者と車との距離がぐっと縮まり、車について集中的に記録されるのである（Appendix-C参照）。

またアクティビティの絶対量だけではなく、質が空間にあらわれることもある。たとえばルートⅡの古い商店や路地に置かれたプランターなどに対しては、生活感や地域コミュニティの存在を感じ取る被験者が多かった。しかもそうした感覚は懐かしさや好印象をもたらす。他に小川通では、使われ方やしきたりが街並みに表象している（7.3.2）。

アクティビティは空間との関係においても多様な側面を有するのである。

8.2.7 その他の要素

(1) 沿道の離散的要素

看板や駐輪、空地や工事現場などは、離散的にあらわれる上に付随的、一時的なもののみなされる。歩いているときには気になっても、領域の把握には効力をもたない（5.3.1）。

(2) 空

空の見えるは街路と同様に鋭い変化をもたらす。空の見えるは解放感とよく関連し、ポジティブな評価をもたらすものであった。そしてアーケードの始まりと終わりは集中的に記録される。自らの真上に何かがあるという状態がデフォルトから外れるため、人はそのことに敏感になるのである（5.3.1）。またアーケードは内的な感覚をもたらす要素の一つであった（6.4.3）。

(3) 視覚以外の諸感覚

都市を歩行する局面では視覚の優越は顕著である。それに対し音やにおい、気温などは、視覚で捉えうる現象に対する補完的な役割を担っていた。音はアクティビティの活発さを表わしており、蟬の声を通じて自然とも関連する。気温は涼しさというかたちでやはり木々や川との関連性が強い。諸感覚はフレームを通して緊密に結びあっているため、川を見ただけで涼しく感じるというような現象も観察された（6.4.5）。

8.2.8 様相の全体性

(1) 領域と全体性

ここまでは様相の全体性をつくり出すさまざまな要素について振り返ってきた。しかし全体的な印

象を直接表わそうとする言葉もたくさんあった。これらの言葉は、特定の対象を指す言葉と違って何を指すかが曖昧で、言い回しも多様である。そのため様相表現においては集中度の低い、共有されづらいものであった。しかし領域表現になると、やはり集中度は高くないもののその占有率が大幅に増す。まとまりをもった領域の様相は、要素の集合よりも全体として捉えられる傾向がある(5.3.1)。

この曖昧な全体性を知るために、指定の形容詞による領域評価は有効な手段であった。恣意的に共有の土台を与えたのである。領域評価グラフの変動が領域分割グラフから検出されたエッジやエリアと強い関連性をもつことから、被験者の捉える全体的な在り様も境界においてドラスティックに変容することがわかる(4.2)。ただ大通り型エッジに代表されるように、領域としては切り替わっても様相としてはあまり変わらないこともあり、領域把握と様相把握との間に必ずしも密接な関係性があるとは限らないことに注意が必要である(5.2.1)。

(2) 全体性のわかりやすさ

全体性が共有されにくい中で、ルートⅢでは渡月橋と長辻通の観光地を除けば全般に、落ち着いた静かな雰囲気として捉えられていた。小川通界限も同様に表現されている。これらの場所では、いろいろなものが入り混じるのではなく、個々の住居やアトラクターとなる寺社、アクティビティや音、自然も含めてさまざまな要素が強め合い、全体としてわかりやすい様相をつくりあげていた。部分と全体が結びあっている(7.4.3)。

逆にルートⅠの前半では、不統一性がコネクターとなるような現象さえ見られた。ルート後半になると個々のアトラクターには個別のテーマがあるものの、それらが競合しあって領域はぼやけている(7.2.2)。

このように全体性のわかりやすさは、都市の中心一周縁構造やアトラクターと関連していると考えられる。都市の中心やアトラクターはアクティビティの結節点となるがゆえに、雑多な要素をひきつけるのである。ただしルートⅢの清涼寺や鳥居本、周囲の山々はアトラクターではあるがそこまで多くのものをひきつけず、全体的様相の中に調和している。

(3) 場所性

全体的な様相を語る際に、その場所に固有の特質を表現したものが多数あった。日本らしさ、京都らしさ、地域らしさ、通りらしさ、そして「いかにも型」表現。こうした表現は高い評価につながり、レルフやトゥアンらが指摘した(2.2.3)場所性の重要性を示している。方や没場所性を示す「普通型」デフォルト表現は、低い評価とつながっている(5.3.1/6.3.1)。

場所性の諸段階の中でも京都らしさはもっとも重要なレベルであった(5.3.1)。京都らしさと関連するのが伝統的街並みで、田園風景のような非都市的景観は京都らしいものとは異なる(7.4.2)。さらに京都らしさというイメージでさえも、現代において変容しつつある(6.6.2)。

他に「中学校らしい」「阪急(百貨店)らしい」といった建物固有のデフォルト構造との結びつけの表現まで含め、空間にはそれぞれ、何らかの共有されたイメージが付随していると思えるべきである。

8.2.9 全体の関係性

(1) 都市の様相のマクロな成り立ち

これまでに述べてきた諸々の要素が都市においてどのようなマクロ構造をもち、様相がどのように空間的にあらわれているかを述べる。まず全体構造を図8-4としてまとめておく。この図8-4は、都市の様相の形成に重要な役割を果たす要素を、いくつかのレイヤーに分けて理解するという方法をとっている。この考え方はマクハーグ(Ian L. McHarg)が「レイヤーケーキ法」として提唱している

ものに近い。ランドスケープアーキテクトであるマクハークは、自然も人工も含めたさまざまなレイヤーにより地域を理解し、ランドスケープデザインを行なってゆく方法を論じた。なお図8-4では、より空間に固着し時間的に安定していると考えられるものを下のレイヤーに置いている。都市の発展の経緯を完全に規定しているわけではないが、下のレイヤーが上のレイヤーに影響する傾向が強いものと考えられる。

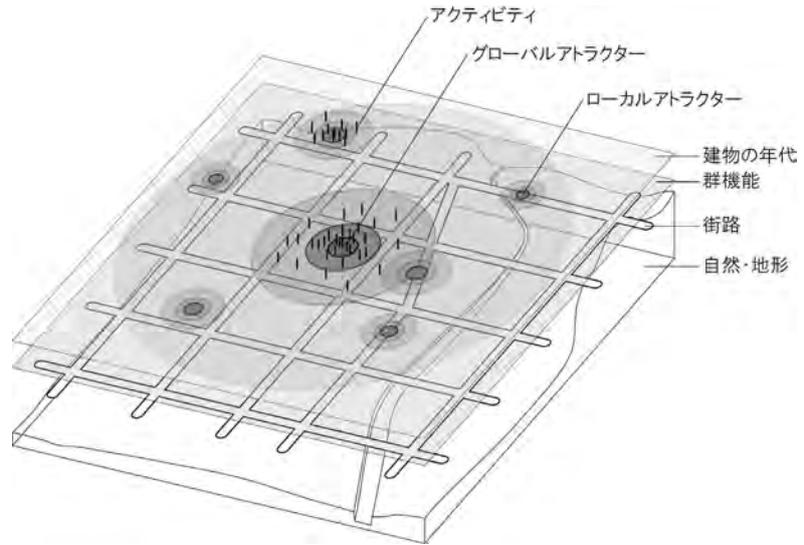


図8-4 都市の様相の空間的なあられ方を説明するダイアグラム

まず自然や地形は都市の形成、特に街路の構造やアトラクターの配置に大きく影響する。京都の場合は盆地状の地形や川が重要である。そして様相においても領域同士の見えがかりを決定し、そして緑は都市との対比で引き立っている。

その上で都市としての空間的な骨格を与えているのが街路である。京都の場合は大まかに大通りと細街路の二重の直交グリッド構造が支配的である。これは平安京グリッドの敷かれた中心部から、周縁に対してもある程度同じ原理で押し上げられている。この街路幅と街路形態による構造が、われわれの空間把握構造にも影響している。そこまで構造が明確ではない他の都市でも、街路の幅と形態の在り方は実存的空間にとって非常に重要なものとなる。

街路網の上に、全体のベースとして群であられる機能が広がる。多くを占めるのは住宅街で都市における地となり、その中に店舗や観光地、オフィス、あるいは工場³などが混じる。印象のよさやオープンさ、知名度などはこの群機能とよく相関する。

建物の属性も都市の全域に広がるものであるが、特に年代が重要である。他のレイヤーとは異なり明らかに時間軸が関係しているが、現在の様相に直接影響するのは歴史的経緯そのものよりも現在における実際のあられである(7.2.3)ことから、現在の建物年代のあられ方の配置を、一枚のレイヤーとして取り出すものである。なお時間軸はすべてのレイヤーに流れており、各レイヤーは可能態である。

これらの上に、アトラクターが方向性を与える。ただしアトラクターはそれ自身が固有のエレメントを指すのではなく、自然や機能集積、古い建物の集積などこれまで述べてきた諸要素の配置の結果形成されるものである。アトラクターは、都市全体の大きな空間構成を決定するグローバルアトラクターと、グローバルアトラクターがつくる全体的構造の中に散在するローカルアトラクターに分けて考えることができる。ダイアグラムではグローバルアトラクターの例として中心-周縁構造を描いている。またダイアグラム上のアトラクターは便宜的に点ないし面を示すものとして描いているが、線の要素もアトラクターとなる。

アクティビティはここまで述べてきた空間構造と無関係にあるのではなく、これらと高い相関性をもっていると見るべきである。特にアトラクターの多くにアクティビティを引き寄せる力がある。もちろん都市形成史としては都市構造とアクティビティはトランザクショナルな関係にあったが、長期的時間の視点をいったん取り払ってみると、アクティビティは基本構造に対し従属的であるという見方ができる。

様相は、これらの全体的構造の上にたちあらわれる。

各々のレイヤーは複雑に関連しあっているが、同時にそれぞれが何らかの様相（在り方、あらわれ方）を備えている。そしてレイヤーごとの様相がうまく整合したときにわかりやすい全体的様相が生じると考えられる。たとえばAⅢ-9は雄大な山々に囲まれ（自然のレイヤー）、寺（アトラクター）の周りに住宅（群機能）だけが建ち、人も少ない（アクティビティ）ために、全体に落ち着いた様相となり評価も高い（7.4.2）。逆に、木々（自然）はあるのに戦時疎開によりコンテキストを断ち切れ（年代）、住居やオフィスの入り交じる（群機能）AⅡ-6は、ぼやけた印象の悪い様相となっている（7.3.2）。

（2）様相がたちあらわれる場所としての街路空間

様相が実際にあらわれるのは、われわれが街路空間に定位したときである。上述の構造により面的に展開する都市が、街路空間において一気にわれわれの前に現象するのである。

そのことは、5.3.2の自己組織化マップを用いた分析によって得られた、歩行者の視野のダイアグラム（図5-20）に端的に表現されている。これを図8-4の構成レイヤーに対応づけて描き直したのが図8-5である。

自然や地形は足元の坂や川、沿道の植物、あるいは遠方の山としてあらわれる。街路は足元の広い面積を占め、様相を鋭く変化させる。群機能と建物の年代は沿道左右の建物にあらわれ、非常に多く記録されるとともに、領域をまとめる言葉となる。そしてローカルアトラクターは沿道の随所に配されて街路空間に方向性をつくる。グローバルアトラクターはたとえその場所から直接見えていなくても、都市全体に方向づけをしていると考えられる。最後にアクティビティは街路上に、歩行者自身を巻き込んだ身体的あらわれを見せる。このような諸要素の折り重なった空間において、様相は把握される。そしてすべてのレイヤーが時間的に移り変わっているから、様相もまた変わり続ける。

都市は面的な系として振る舞いながらも、街路にはその全体性の一断面が見事に切り出され、提示されている。したがってわれわれがある場所で捉える様相も、その都市全体の在り方と常に呼応しあっているのである。

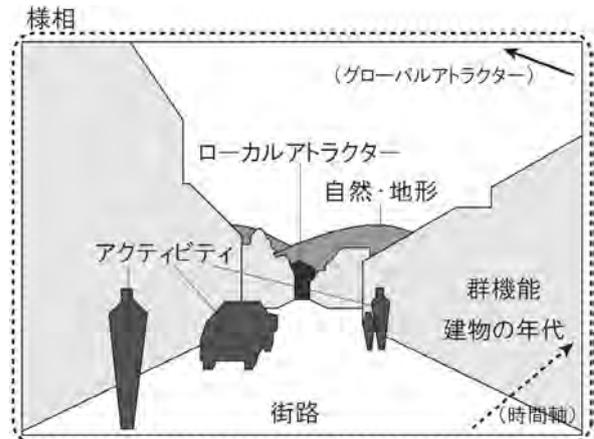


図8-5 図8-4の各レイヤーの視野内でのあらわれ方

以上の2節のモデルが、第2章での理論構築から実験・分析を経ることで得られた、本研究の主要な成果である。

¹ 原広司：《空間の文法》レファレンス 京都駅と宮城県図書館の〈場〉と〈記号場〉，GA JAPAN, vol.32, A.D.A. EDITA Tokyo, 1998, pp.126-131.

² McHarg, I.L. : Design with Nature, Natural History Press, 1964.

³ 今回の実験のルート沿いには工場はほとんどあらわれなかった。ルートⅡの後半部分にあたる西陣はかつての工業地帯であるが、西陣織産業の衰退とともに現在では住宅街として把握されている。

8.3 都市の様相と時間に関する考察

経路歩行実験は2007年の夏という特定の時代、季節において行なわれたため、このデータの分析にあたってロングスパンの時間の影響をほぼ捨象することができた（第5章と第6章）。しかし第7章の時間的・空間的コンテキストの導入により、都市のたどってきた時間的経路と現代においてわれわれが把握している様相との間に密接な関連性があることが明らかになった。そこで本節では、都市の様相の時間的特性について若干の考察をしておく。

8.3.1 時間と様相

(1) 現在において捉える時間

様相とは基本的に現在に立脚するものであるが、そのことは当然であるので「今～」という記録はほとんど見られない。可能的時間の項で触れた「夜は…」 「秋は…」 といった表現は、一日、季節という繰り返し到来する時間に関して、フレームに蓄積された法則をもとにシミュレーションしたものであった。そして「昔にタイムスリップ」「現代に戻る」など時代を飛ばした表現もやはりフレームにおけるイメージの活用であるが、ややメタフォリカルな側面を帯びてくる（6.5.3）。

つまり現在を起点とした都市の時間把握は、フレームにおいて安定した構図を描いていると見ることができ。この安定性を担保しているのが空間の時間的持続性である。空間は概ねわれわれのイメージしている通りに持続し、長期的フレームもそれに応じて作りあげられる。だから知っていた建物が建て替わったような場合は驚きが起こり、フレームが書き替えられる（6.3.3）。

(2) 歴史的時間と現在の様相

しかし、われわれが思い描いているほどに都市が時間的に安定しているかという点、そうでもない側面がある。河原町通の賑わいは昭和初期の拡張以降のものにすぎず、秀吉の時代にはここに御土居も走っていた。嵐山の地もかつては一大禅宗都市であった。このように現在から遠く時間が離れるほど、都市の様子は現代に生きるわれわれのフレームではイメージしづらいものとなる。失われた御土居や禅宗都市は現在の都市を離れた「歴史的知識」となり、それを知らない被験者の記録には全く登場しない。現在においてわれわれが把握する様相は、現在の都市のあらわれにおいてのものである（7.2.3）。

とはいえその都市のあらわれに対し、歴史的な経緯が脈々と受け継がれているのも確かである。個人的アトラクターの連なる四条通の様相は、下京の商業中心地、寺町の芝居小屋、鴨川、東山を背にした祇園の歓楽街といった古来の大きな構図でほぼ正確に理解できた（7.2.3）。狭い道に大量の車が通過して被験者に嫌がられたEⅢ-3あたりの現状も、道路がつくられた経緯をたどることで説明できた（7.4.2）。歴史的知識そのものが様相把握の対象とはならなくても、現在の都市の様相をつくりあげているのはやはり歴史的経緯なのである。

8.3.2 都市のデザイン

(1) デザイン主体とデザイン行為

都市の歴史的経緯とは、大まかにはわれわれ人間によるデザインの歴史である。大まかには、と言うのは天災や戦災なども都市を大きく変えてきたからであるが、それ以外は人間が何らかの意志をもって、都市をデザインしてきたのである。

都市のデザイン主体はさまざまである。まず為政者や都市計画者が想定される。京都で言えば桓武天皇や豊臣秀吉である。しかし平安京の街区や街路の使いづらさを見て巷所や辻子の開発を進めた庶

民も立派なデザイン主体であるし、四条烏丸にビルを構える企業も、路地にプランターを置く住民もそうであろう。様相の観点から言えば、都市の様相に影響する行為はひとしくデザイン行為であると呼ぶことができ、その行為の主体はデザイン主体である。街路を歩きながら都市に対する理想や願望を表明していた被験者たちも、可能的なデザイン主体である。

都市を表現体として捉える都市記号論においてルドリュ (Raymond Ledrut) は、このような主体の多様性によって都市が「擬似テキスト」(pseudo-text) となっていることを指摘している¹。この擬似とは、単一作者によってつくられた物語や音楽などの純粋なテキストとは異なることを意味している。現代都市の複雑さの大きな要因である。

(2) 様相把握とデザイン

ここまで考察してきた様相把握とデザインという二つの行為の間には、密接な関係がある。様相把握は都市のデザイン行為のプロセスの中に組み込まれているのである。まず都市の発生過程においては、自然環境の把握がデザインの出発点であった。たとえば桓武天皇は山背国の盆地に四神相応の理想的地形を読み取り、嵯峨の地に貴族たちが移り住んだのもその自然の豊かさや美しさに惹かれたからである。そして都市化以降は、平安京の庶民たちは道の広さを把握することで巷所開発を始めたし、逆に明治期の拡幅は道の狭さによる危険や不便を感じ取ってのものであったように、先人のデザイン行為の結果生まれた都市空間において、何らかの様相を把握しながら都市をデザインしてきた。

このように都市とは、さまざまな主体が様相を把握し、それをデザインによって都市にフィードバックするというプロセスが連続と繰り返される、ダイナミックな場である。そして8.1.5でも述べたように、1200年前のグリッドプランが今でもわれわれの空間把握構造を規定している。都市はさまざまな時代の多くの人々がフレームを共有する土台にもなっているのである。

(3) コンテキストの継承

ルート内において被験者からの高い評価を集めたのは、以前の様相をコンテキストとして読み込み、それを継承するかたちでデザインされた地域であった。伝統的な街並みや寺社の周りは概ね好印象で、とりわけ小川通は現代に至るまで表面的街並みだけではなく茶道のしきたりもが継承され、昔に戻ったような感覚さえ抱かせた。近現代のものでは同志社大学が、明治の開学以来の歴史をうまく引き継いだデザインによって面的なアトラクターをなしていた(7.3.3)。これらの場所では先人の意図をしっかりと読み取り、かつ少しずつ改善しながらじっくりとデザインを進めてきた。そして記憶が継承された都市の在り方が、そのような記憶を直接もたない被験者たちにも魅力的に感じられたのである。

反面、時間的なコンテキストを裁断したデザインへの評価は低い。堀川通や紫明通などの疎開道路跡がその代表例である。そこでは、今後を引き継いでゆくべき新しいコンテキストの生成も、少なくとも現在のところ、なされていない。

(4) 都市にはたらく非空間的な力

ところで都市のデザインの契機は、必ずしも様相把握だけではない。むしろ都市空間を離れたさまざまな事情こそが、都市をドラスティックに変えてきた感がある。たとえば巷所開発が促進されたのは、巷所が無税地であったことも原動力である。平安京のプランには中国由来のコスモロジーが反映されていたし、秀吉の都市改造は自身の覇権の確立という政治戦略があった。大通りの延伸や市電の廃止も、経済成長や技術開発による自動車の普及がその要因となっている。

都市のデザインには、政治、経済、軍事、宗教、技術…といったさまざまな力がはたらいている。

空間に直接関係せず生成、変化するようなイデオロギーやコンセプト、つまり社会的フレームである。空間において把握した様相と、これらの社会的フレームが主体のフレームにおいて統合され、デザインが決定されるのである。

この両者の関係は本論の直接の研究対象ではなかったが、大変興味深いテーマである。ゴットディーナー (Mark Gottdiener) とラゴプーロス (Alexandros Ph. Lagopoulos) は、都市の変容を空間にかかわる文化的プロセスと、政治や経済といった社会的プロセスによってモデル化しようと試みている²。

さて、このような非空間的な社会的フレームに起因したデザインは都市の変容にダイナミズムを与えてきたが、近年では同時にさまざまな問題を引き起こしている。町家から高層マンションへの建て替えは地主や企業が営利を追求した結果であり、行政の諸制度もそれを容認している。評価の低い堀川通の様相は戦災を恐れた建物疎開とその跡地を自動車に明け渡したことに起因する。嵯峨地域では景観と観光のジレンマを巡って地域間・業種間の相克が起こっている (7.4.3)。空間における様相を重視する考え方は現在のところ、このような諸問題を前に弱い理論となっている。

(5) 様相論的都市デザイン

明治維新以降の250年足らずで都市は急速に発展し、確かにわれわれは便利で経済的な都市生活を手に入れた。しかし現在、そうした発展がわれわれに本当の豊かさをもたらしたのかという疑問の聲が上がっている。利便性、経済性、効率性などを追求するあまり、肝心の様相を置き去りにしていたのである。われわれ人間が求めているのは、もっと身体的な心地よさであったはずだ。

現代都市には様相論的なデザイン方法が求められている。具体的には以下のような方法が考えられる。

まず様相論的な都市デザイン方法は必然的に多目的かつ多方法となるが、その全体をまとめ、目的と方法をつなぐのが様相概念である。よって個々の方法の実行とともに、効率主義や要素主義から様相主義への発想の転換が必要である。経済や効率もちろん大事ではあるが、思考の土台を様相へと戻さなければならない。

次に実践的デザイン方法としては、小川通やルートⅢの各所に見られたような、さまざまな要素が互いに強めあって全体的な様相を織りなすような在り方が一つの手掛かりになる。そのためには地域の街並み形成はもちろんのこと、街路構造やアトラクターなどのマクロなプランニングも重要になる。またこれまで形成されてきた豊かなコンテクストを継承することは有力な指針となろう。しかしすでにコンテクストが断ち切れつつある現代都市においては、これから引き継がれてゆくべき望ましいコンテクストを創造することもまた、重要な課題になっている。

¹ 門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究，東京大学学位論文，1997，p.159.

² 注釈1の文献，pp.131, 161-164。また筆者らもすでに、京都の都市史を題材としてこのことについての試論を展開している（北雄介・門内輝行：京都の都市史をもとにした三層構成モデルの提示—都市のデザインプロセスのモデル化に関する研究（その1），日本建築学会学術講演梗概集E，2012，pp.443-444。および山崎圭史・北雄介・門内輝行：二つの部分プロセスの類型化—都市のデザインプロセスのモデル化に関する研究（その2），日本建築学会学術講演梗概集E，2012，pp.445-446。）。

第9章

結論

9.1 結論

9.1.1 各章のまとめ

第1章では、まず大きな文脈における本研究の位置づけや、研究の目的を明示した。20世紀的な成長スキームの限界が叫ばれつつある現代において、新しい都市の在り方を提示するための端緒となる意義を、本研究はもっている。また同分野の既往研究を概観し、様相という全体性を捉える理論によってモデルを構築すること、街路空間における身体化された様相把握について論じること、曖昧な様相について定量・定性を合流させた方法で分析することなどが本研究の独自性として浮かび上がった。

第2章では、本研究が立脚する基本的な様相のモデルを提示した。まず様相について論じられてきた主要分野である哲学の流れを振り返り、様相が可能的なものの在り方を指すが、その意味するところは歴史的に変化してきてもいることを示した。次に都市論・空間論において本研究と関係の深いものについて概観した。そしてこれらをもとに本論におけるさしあたりの様相モデルを示した。そこでは特に、時間・空間の中に人間が定位するときにはたちあられるのが様相であることや、経路の概念によって様相のシークエンシャルな移り変わりを理解できることを述べた。また都市の様相のもつ特性として、高度な複雑性や空間的経路性、公共性を指摘した。

第3章では、本研究のメインの方法となる経路歩行実験についてその構想と内容を詳述した。指定された3つのルートを実験者に歩いてもらい、歩行中に捉えた様相の記録、歩行後に全体を要約した記録の両方を得るとというのが経路歩行実験の特徴である。それによって書かれた言葉は空間的な位置をもつことになる。また、言葉で様相を記すという方法には有限性があると同時に、様相を浮かび上がらせるためのすぐれたツールになることも指摘した。

第4章では、すべての被験者の記録を重ね合わせ、様相を定量的に記述した。まず領域分割のデータを用いてルートにおける領域の移り変わりを記述し、共有された境界と領域であるエッジ・エリアを検出した。7指標の領域評価からは様相の大まかな変遷を示した。そして言葉を用いた重ね合わせ記述のために、78の様相因子を抽出した。これをもとに領域表現はエリア別に割り振り、様相表現は位置と対応づけたプロットグラフとして記述した。これらの4つの記述手法により、曖昧な様相を誰の目にも明らかなたちで可視化し、また定量的分析の土台をつくることができた。

第5章では相関分析、主成分分析や自己組織化マップなど多彩な手法を用いて記述された様相を定量的に分析した。言葉については11の様相因子指標を導入した。この分析の結果、都市の空間的構成に即した実践的な知見が多数得られた。たとえば街路構造、群であられる機能、建物の年代、寺社や大学といったアトラクター、アクティビティなどの重要性を指摘した他、エリア概念がツリー状の階層性やセミラティス状の輻輳性をもつことも示した。特に、定量的アプローチをとりながらも言葉を導入して分析をすることで、都市の様相の豊かな意味的側面を明らかにすることができた。

第6章では、様相表現や領域表現にあらわれた言葉を、様相因子に分解する前の状態で直接分析した。その際にまず、われわれの様相把握プロセスにおいて大切な役割を果たす記憶や予想について、フレームの概念を用いて整理した。フレームについてはこれまでさまざまな分野で議論されてきたが、本論ではそれらの先行研究の統合を試みている。次にこの理論を踏まえて個々の言葉を読み解き、様相把握のプロセスに関する多数のモデルを得た。フレームの短期的・長期的なはたらき、身体的フレ

ームや志向性、社会性について、記録の具体例をひきながら議論を展開した。

第7章では、ここまでの知見を踏まえて3つのルートのそれぞれの場所に対して総合的な分析を行った。その際、これまでルートの様相を形成してきた時間的コンテキストと、都市のよりマクロな視点からルートを捉える空間的コンテキストを導入した。実験により得られたデータとその背景にあるコンテキストを合流させることで、各場所において固有の様相がたちあられている要因を明らかにすることができた。そしてまた前章までで得られたモデルは、個別の空間についての考察を加えてより強化された。

第8章では、ここまですべての分散的知見を統合し、都市の様相をモデル化した。様相の捉え方やその把握のメカニズム、実際の都市の空間構成と様相との関係についてモデルを構築した。ここで示したことが本研究のすべてを縮約しており、抽象的な様相概念と実際の都市の様相との間を架け渡す役割を果たしている。また都市の時間的・空間的・デザインの問題についても論じ、これからの都市のデザインのためのヒントを得ることもできた。

このうちの実験から分析まで（第3章～第7章）の作業フローを図9-1にまとめておく。本研究の目的の一端が、このような方法論の提示にあったからである。

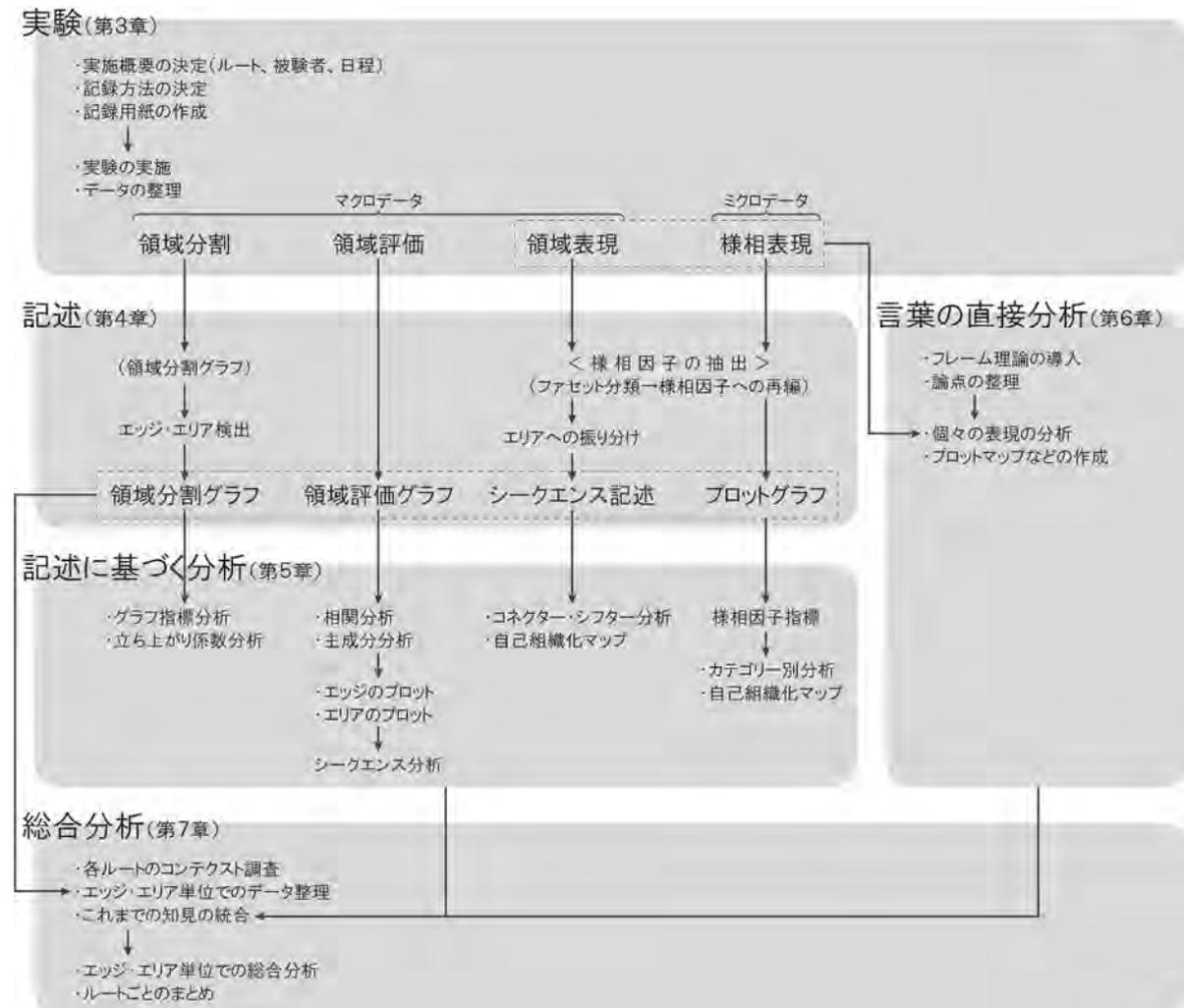


図9-1 実験から分析までの作業フロー(第5章の分析の一部は割愛)

9.1.2 全体の結論

(1) 都市の様相の理論モデル

本研究ではまず既往の様相理論をもとに基本モデルを提示し、実験データの分析を通じてこれを発展させることで、都市の様相に関する豊穡なモデルを得ることができた。8.1においてまとめたものであるが、具体的には以下のようなモデルである。

まず様相は、時間・空間からなる世界に人間が定位することであらわれる。われわれ人間が世界において把握することがらの全体的な在り方を指す概念である。ところがこの時間、空間、人間の三者がともに可能態として現象する。実際に空間が時間的に変化し、人間も変化するというだけでなく、可能的な世界の想像や、われわれのもつ志向性によっても様相は変化する。このようないつらいつろいを理解するためのすぐれた図式が、経路である。経路は様相を束ねることとそこに差異をつくり出すことという二つの役割を担い、また現実の時間や空間にも、あるいは可能世界間の移動にも適用可能な概念であった。

そしてこの可能態と経路という抽象図式に対してわれわれがかかわる仕方が、フレームと身体である。フレームは記憶を蓄えるとともに予想を形成し、次なる世界への構えを生み出す。そして柔軟に書き替えられる短期的フレームと、何度も使う知識を安定的に保持する長期的フレームの両方の仕組みがはたらいっている。一方身体はわれわれが世界に在るための媒体である。われわれは身体をもって行動し、また己の身体を起点としてさまざまな関係を空間ととり結んでいるのである。それらは肉体化されたフレームと考えることもできる。

そして都市空間はさまざまな人が互いを表象し、互いに表現し合う、きわめて公共性の高い場であった。そこでは都市を媒体として様相やフレームの主体間共有が行なわれている。ここでいう主体間は共時的存在に留まらず、時代を越えた人々をも含む。

本項で指摘している様相モデルは都市以外の分野でも応用できるものだと考えているが、都市の様相のきわだった特徴を挙げるとするならば、空間的経路性、空間を媒体とした公共性、そしてそれによって生み出される高度な複雑性の三点となろう。

これまでの諸理論を振り返ると、様相や世界に関する理論を探求してきた哲学や論理学は魅力的な体系をつくっており、本研究でも大いに参照しているところであるが、都市という現実のフィールドを読み解くためには抽象度が高すぎた。逆に都市のイメージや認知に関する研究の多くは実践的知見を得てはいるが、心身二元論や要素還元的な見方に安易に依拠し、都市とわれわれ人間についての全体性を理解する世界観の提示には至っていなかった。

これに対し本研究では、抽象論と実践論の両者を採り入れた基本モデルを構築し、そして実験を通じて得られた実証的な考察をそれにフィードバックするというプロセスを経ることによって、抽象的な論理性と実践的な適用可能性の両方を備えたモデルを構築できたと考えている。

(2) 実験と様相記述の方法の有効性

上述の理論モデルに基づいて実験の方法を考案し、実施することで膨大な記録を得、その記録をもとに様相を記述した。様相というものは本来曖昧な全体性を指すが、本論の方法はこの全体性をなるべく失わないままに、なおかつ可視的に記述できる方法であったと考えている。

実験方法のすぐれた点は以下の五点にあったと考えている。

- ・人間を実際の街路におろして歩かせることで、空間的経路性や身体性をもった様相の理解が可能となった
- ・歩いているときに把握した様相の記録とルートを振り返った要約的記録の両者を得ることで、ミクロとマクロの両スケールにおける様相のあらわれ方を知ることができた

- ・被験者の生身の言葉を記録させることで、様相のもつ多面性や意味性、フレームのはたらきなどについての知見を得ることができた
- ・言葉は時空間的、特に空間的に固有の座標をもってあらわれており、様相やフレームについて知るためのデータとしてより豊穡なものとなった
- ・多数の被験者の記録を定量的に重ね合わせることで、多くの人に共有されたパブリックな様相を記述することができた

様相表現、領域分割、領域評価、領域表現という4種類のデータによる4種類の記述は、それぞれ様相の側面を鋭く描き出している。この記述の過程で取り入れたエッジとエリア、コネクターとシフター、あるいは様相因子などの考え方は、経路上の様相の変遷を理解するための基本概念となった。

この実験から記述に至る一連の方法の有効性は、次に述べるような分析によって被験者間に共通の傾向が多く見出され、そこから多数の考察が得られたことによって示されたと言える。つまり本研究の方法が、共有された様相の有効な記述手法として実証されたのである。

(3) 都市の様相に関する実践的な知見

本研究では記述したデータをもとにした定量的分析と、記録された言葉の直接的分析の両者を行なった。前者では主に都市の空間的構成と様相との関連性を描きだし、後者では身体やフレームなど(1)で述べたような様相モデルとも関連した分析を展開した。さらに時間的・空間的コンテクストを加味した考察を加え、様相をより広い視点から捉えようと試みた。実験から分析までの流れは図9-1のようになっており、この全体で一つの方法論を構築できたと考えている。

分析の結果については8.2にまとめているが、ここではその要約を記しておく。

まず自然や地形が都市のあらわれる場を用意する。その上で、街路は非常に強力である。特に街路の幅と、曲がり角や交差点、方向性といった形状の構成が都市の様相に大きく影響する。これは内と外の秩序、遮蔽縁効果などわれわれの身体と直接関係していることはもちろんのこと、都市形成史上でも街路構造の役割は大きかった。ここに、都市全体に広がる住宅や店舗などの建物群の機能と建物の年代が加わって、都市の様相のベースが形成される。

これに対して都市の様相に方向性を付与するのがアトラクターであった。アトラクターは自らを中心としてその周囲に独特の領域をつくり出す。またアトラクターは(1)で述べた様相モデルと深く関連していることも指摘した。具体的には京都の場合は都心、三山と寺社、川などが大きな構図を描き、その中に寺社や商店街などがローカルなアトラクターとして存在する。

これらのベースとアトラクターによってアクティビティが生み出される。アクティビティは流動的で可能的なものでありながらも様相を大きく規定するものであった。さらに離散的な沿道要素、全体性をあらかず言葉などが加わるが、これらは比較的構造の曖昧なものとなっている。

都市において面的に展開する上述のような諸要素が、われわれの前に一気に現象するのが街路空間である。街路空間は都市の面的構成の縮約装置になっており、そこでの様相把握は常に都市の全体像と呼応している。

本研究の3ルートはすべて京都におけるもので、直交グリッド街路やガワとアンコ、三山やアトラクターの配置などは、確かに京都に固有性の強いものである。それでもなお本研究で得た諸レイヤーに着目した都市の様相の読み解きは、他の都市においても有効な見方になると考えている。たとえば都市の様相のマクロな構成をレイヤーの重ね合わせによって描画した図8-4のダイアグラムは、考えうるさまざまなレイヤーの中から、都市の様相を理解する上で特に有効なものを取り出したものと言える。それぞれのレイヤーに関するデータを収集し、マッピングして重ね合わせることで、それぞれの場所の大体の様相を推し量るような手法への発展も期待できる。

(4) 様相論的デザイン方法に向けた端緒

これまでの都市のデザイン方法は、利便性や安全性、高さ規制、歴史的街並みの保存などといった単一的な視点に偏りがちであった。それに対し本研究の示した様相という考え方は、都市においてわれわれが身体的に把握するあらわれ、またそこに見出す意味などを指している。このような全体性に基づき、なおかつそれを理解するための汎用的なモデルを提示したことで、従来の都市デザイン方法に対して一石を投じることができたと考えている。

様相論的デザインの具体的な方法については、その端緒となる考え方を8.3にまとめている。個々の要素が強めあって全体を成すようなデザインを心掛けること、魅力的なコンテキストをしっかりと読み取り継承あるいは発展させること、そしてこれからの都市の骨格を形成する新しいコンテキストをつくるべきことなどである。

また(2)で述べた実験から記述という流れ自体が、デザインプロセスの中において重要な役割を發揮すると考えられる。まず都市を自らの足で歩いているいろいろなことに気づくことで、固定観念で捉えがちな都市を身体化することができる。また共有された様相の可視化は、多くの主体がデザインの議論に参画するための土台となるであろう。そしてこのプロセスは、われわれが自らのフレームを鍛錬し、都市に対してすぐれた観察眼、デザイン眼を獲得することにつながるのである。

9.2 本研究の展開可能性

9.2.1 調査・研究手法としての面展開や汎用化

経路歩行実験という本論の手法は、都市の調査・研究手法として汎用化できる可能性を秘めている。まず本研究での調査範囲は指定したルートに限られていた。これを指定した領域を自由に歩き回ることで「領域歩行実験」(walkaround experiment)へと展開することが考えられる。線を面に拡張できれば、普段われわれが街をぶらついているときに把握する様相により接近する方法となる。また街路構造による見え隠れの効果やアトラクターのもつ力などについては、人間の選好行動や経路探索の問題とあわせてより精緻に検証されることとなるであろう。

次に、本研究でのスタディをもとに実験方法を簡易化し、より気軽に用いる手法とすることが考えられる。たとえばグラフィックソフトと連動したコンピュータ言語や地理情報システム(GIS)を導入すれば、データを入力すれば様相の記述が自動的に行なわれ、さらに新たなデータの追加によってそれを成長させてゆけるような簡便かつ柔軟なツールを構築できると考えられる。また言葉の分析には多大な労力を要するため、8.2で指摘したキーエレメントの分析に集中したり、あるいは厳選された領域評価指標によって評価したりすることもできる。様相の記録方法としても書くだけではなく、全地球測位システム(GPS)やスマートフォンのような携帯用機器を用いたものも考えられる。

これにより手法が汎用化できれば、さまざまな応用が可能である。様相は時間・空間・人間に依存しているから、時間帯や季節を替えたり、対象とする都市を替えたり、あるいは特徴ある複数の被験者集団を選択したりすることによってさまざまな知見を得ることができる。その知見には本研究と共通するものもあれば、異なるものもあろう。比較研究を展開することで、モデルの発展も期待される。

9.2.2 方法や理論のデザインへの活用

(1) ワークショップ形式によるデザイン

9.1.2でも述べたように、本研究の方法やモデルはデザイン方法へと応用することが可能である。その可能性の一つはワークショップを用いた草の根的なデザイン手法であり、もう一方はトップダウン的な都市計画の枠組み自体のデザインである。

まず前者についてはたとえば、以下のようなワークショップ形式によるデザインが考えられる。

- ①歩行実験と同様の手法でワークショップ参加者による歩行調査を行なう。まずは歩くことによって都市を身体的に把握してもらうのである。
- ②記録データをもとに様相を記述する。これにより曖昧で属人的な様相を、多主体で可視的に共有できる。
- ③望ましい様相像を参加者たちに思い描いてもらう。日常の固定観念や、経済性、利便性といった制約をいったん取り払い、都市の魅力を最大化するための方法を探る。
- ④歩行調査で調べた現状の様相と理想像とを突き合わせ、このギャップからデザインの解を編み出す。このときデザインの効果として予想される様相の変化を再び記述することもできるし、模型やコンピュータグラフィックスなどのツールによるシミュレーションも可能である。

これは考えるプロセスの一例である。観光を中心とした街づくりであれば被験者を観光客に絞ることもできる。建築設計事務所がデザインのヒントを得るために自らを被験者として街を歩くこともできる。歩くことでフレーム、つまり都市を見る目が鍛えられるという教育的効果も大きい。

なお筆者はすでに、デザインプロセスの一環として歩行実験の手法を用いる試みをいくつか行なっている。筆者が中心となり友人の建築家らと進めている街づくり活動である「嵯峨嵐山プロジェクト」における2事例、「京都大学サマーデザインスクール2011」において筆者の所属する研究室の開催した

ワークショップにおける1事例がある（全事例の概要をAppendix-Eに掲載）。いずれも領域歩行実験の手法を用い、参加者に自由に地域内を歩いてもらっている。また様相の定量的記述こそ行っていないが、すべての事例でデザインの提案につながっている。

(2) 都市計画の枠組みのデザイン

近年は上述のようなワークショップによるデザインが盛んになってきているものの、現代都市の複雑な状況を解きほぐすためにはそれだけでは足りないことも明らかであろう。第7章でも見てきたように、為政者による計画は都市の行方の大枠を決定してきたのである。

本研究の成果を都市計画に活かす実践的な方法としては、歩行実験を都市のアセスメント手法として採用することが考えられる。多主体の参加する歩行実験を行なうことで、人々の実感に即した都市計画決定を行なおうというものである。記録の重ね合わせによって定量化ができるから、決定の際の論拠としても説得力がある。

それにも増して重要なのが、都市計画の発想の抜本的な転換である。現在適用されている都市計画法や条例による規制の網は、はたして望ましい都市の様相をつくってきたであろうか。8.3でも指摘したように、戦後の都市計画は利便性や経済性に大きく支配され、街に立ったときのわれわれの実感をおざなりにしてきた感がある。それらは高度成長期のフレームによってつくられた方法論であったが、そのフレームが制度を通じて低成長期の現在にまで残存し、時代にそぐわなくなっている。

これまでの制度は要素主義、定量主義的な発想に基づいていた。これを、全体性を基軸とした様相主義的なものに切り替えることが肝要である。たとえば建築デザインについては、高さやセットバック、庇や広告物といった個々の要素に先立って、様式についての議論が必要であろう。このとき、様相の理論モデルをいかに制度設計にまで昇華させるかということが重要な課題となる。

9.2.3 関係分野や異領域への応用

様相はきわめて包括的な概念であるがゆえに、本論の知見は広く展開可能である。

まず都市や建築のさまざまな研究分野への応用が考えられる。たとえば歩行実験は建築の内部で行なうこともでき、そうすれば建築計画論につながる。街路構造やアトラクターに関する知見は、都市形態論や都市形成論とのなどとの関連において有用であり、アクティビティに注目すれば、様相と人間行動との関連を探ることもできる。歩行実験ではなく自動車運転時に捉える様相についての実験を行えば、1.3.2で紹介したアプルヤードらの研究のように道路計画論へと展開できる。

さらに本研究で構築した様相モデルは異領域へも応用できる。なぜならわれわれが生きている限り、常に何らかの様相を把握しているからである。たとえば会話をしているときの様相、食事をしているときの様相、インターネットサーフィンをしているときの様相…。これらの研究のために経路概念を用いた様相モデルやフレームの考え方が有効であることは容易に察しがつく。都市とはかけ離れたこれらの領域での試行が、翻って本研究のモデルを鍛え、成長させてゆくことも期待できる。

このように、理論的にも方法的にもさまざまな展開可能性を内包していることも、本研究の大きな意義である。

参考・引用文献一覧

本論文で用いた参考・引用文献を、以下の領域別にまとめる。それぞれの領域内では著者名のアイウエオ順（同一著者内では出版年順）に並べている。また内容が複数領域にまたがる文献については、番号の若い方の領域にのみ記載している。

- (1) 都市論・建築論・空間論
- (2) 哲学・論理学・社会学
- (3) 言語学・記号論
- (4) 認知科学・生命科学・知識工学
- (5) 京都の都市史
- (6) 地図データ
- (7) その他

(1) 都市論・建築論・空間論

1. 芦原義信：街並みの美学，岩波書店，1979.
2. Appleyard, D., Lynch, K. and Meyer, J.R. : The View from the Road, The MIT Press, 1971.
3. Appleyard, D. : Livable streets, University of California Press, 1981.
4. 歩くまち京都推進室 ホームページ (<http://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/soshiki/9-5-0-0-0.html>)
5. あるっ神戸！ ホームページ (<http://arukobe.com>)
6. アレグザンダー, C. : 都市はツリーではない, 押野見邦英訳, 別冊國文学・知の最前線「テキストとしての都市」, 前田愛編, 學燈社, 1984, pp.25-46.
7. アレグザンダー, C. : パタン・ランゲージ—環境設計の手引, 平田翰那訳, 鹿島出版会, 1984.
8. Anderson, S. : Studies Toward an Ecological Model of the Urban Environment, on *STREETS*, Anderson, S. (ed.), The MIT Press, 1978, pp.267-306.
9. 大野隆造：環境視の概念と環境視情報の記述法 環境視情報の記述法とその応用に関する研究（その1）, 日本建築学会計画系論文集, No.451, 1993, pp.85-92.
10. 大野隆造・辻内理枝子・稲上誠：屋外空間での移動に伴い変化する感覚の連続的評定法 環境視情報の記述法とその応用に関する研究（その2）, 日本建築学会計画系論文集, No.570, 2003, pp.65-69.
11. Carr, Lynch and Sandell, Inc. ホームページ (<http://www.carrlynchsandell.com>)
12. Kasmar, J.V. : The development of a usable lexicon of environmental descriptors, *Environmental aesthetics*, Cambridge University Press, 1988, pp.144-155.
13. 北雄介・門内輝行：京都の都市史をもとにした三層構成モデルの提示—都市のデザインプロセスのモデル化に関する研究（その1）, 日本建築学会学術講演梗概集E, 2012, pp.443-444.
14. ギブソン, J.J. : 生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳, 1985.
15. ギャラリー・間編：空間から状況へ, TOTO出版, 2001.
16. 京都げのむ編集委員会：京都げのむ no.1,3,4,5, 京都CDL, 2001~2005.
17. 京都市：京都のデザイン原理, 京都市計画局, 1977.
18. 箭内亮一・長谷川諭・小林美紀・大野隆造：環境視情報の計測に基づく街路空間の分節化に関する研究 その1 実空間実験, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1, 1998, pp.941-942.
19. Küller, R. : Environmental Assessment from a Neuropsychological Perspective, *Environment, Cognition, and Action—An Integrated Approach*, Gärling, T. and Evans, G.W. (ed.), Oxford University Press, 1991, pp.111-147.
20. [建築2010/2011] 総括と展望, GA JAPAN, vol.108, A.D.A. EDITA Tokyo, 2011, pp.64-75.
21. 小嶋一浩：アクティビティを設計せよ！—学校空間を軸にしたスタディ, 彰国社, 2000.

22. 小林重敬・山本正堯：新時代の都市計画3 既成市街地の再構築と都市計画，ぎょうせい，1999.
23. 小林美紀・長谷川諭・大野隆造：環境視情報の計測に基づく街路空間の分節化に関する研究 その2 環境視情報の計測，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-1，1998，pp.943-944.
24. コフカ，K.：ゲシュタルト心理学の原理，鈴木正爾監訳，福村出版，1988.
25. 小柳武和・篠原修・田村幸久・中村良夫・樋口忠彦：土木工学体系13 景観論，彰国社，1977.
26. 材野博司：かいわい [日本の都心空間]，SD選書，鹿島出版会，1978.
27. Thiel, P.：People, Paths, and Purposes: Notations for a Participatory Envirotecture, University of Washington Press, 1997.
28. 志水英樹：街のイメージ構造，技報堂出版，1979.
29. シュライバー，H.：道の文化史 一つの交響曲，関楠生訳，岩波書店，1962.
30. 鈴木信弘・志水英樹・塩田洋：参道空間における視覚・記憶構造に関する研究，日本建築学会計画系論文集，vol.457，1994，pp.93-100.
31. 妹島和世+西沢立衛/SANAA・長谷川祐子企画・監修，三宅拓也他編：建築、アートが作り出す新しい環境，ACCESS，2011.
32. 竹山実：街路の意味，SD選書，鹿島出版会，1977.
33. 積田洋・関戸洋子・菅原綱治：指摘量分析によるエレメントの特性とエレメント構成の類型化 街路空間における「気配」の研究（その1），日本建築学会計画系論文集，No.583，2004，pp.47-52.
34. 積田洋・関戸洋子・濱本紳平：心理量分布図による街路空間の雰囲気と指摘エレメントの相関分析 街路空間における「気配」の研究（その2），日本建築学会計画系論文集，No.607，2006，pp.41-48.
35. トゥアン，Y.：空間の経験 身体から都市へ，山本浩訳，ちくま学芸文庫，1993.
36. トゥアン，Y.：トポフィリアー人間と環境，小野有五・阿部一訳，ちくま学芸文庫，2008.
37. DNIAS翻訳グループ“建築”：CI/SfB分類法入門，DNIAS Annual Report, vol.27，1969，pp.2.1-2.2.
38. ノルド，C.：Emotion Mapホームページ (<http://www.emotionmap.net>)
39. ノルベルグ＝シュルツ，C.：実存・空間・建築，加藤邦男訳，SD選書，鹿島出版会，1973.
40. ノルベルグ＝シュルツ，C.：ゲニウス・ロキ 建築の現象学をめざして，加藤邦男・田崎祐生訳，住まいの図書館出版局，1994.
41. バージェス，E.W.：都市の発展—調査計画序論，奥田道大訳，都市化の社会学 V，鈴木広編，1965，pp.113-126.
42. 長谷川諭・添田昌志・小林美紀・大野隆造：環境視情報の計測に基づく街路空間の分節化に関する研究 その3 模型シミュレーションによる検証，日本建築学会大会学術講演梗概集，E-1，1998，pp.945-946.
43. 原広司他：都市領域の様相論的研究（その1～その18），日本建築学会大会学術講演梗概集，1985～1995.
44. 原広司：空間〈機能から様相へ〉，岩波書店，1987.
45. 原広司：様相と経路，スペースデザイン，vol.352，鹿島出版会，1994，pp.49-64.
46. 原広司：空間の文法「予定」，GA JAPAN，vol.24，A.D.A. EDITA Tokyo，1997，pp.116-117.
47. 原広司：空間の文法「場(1)—基本概念」，GA JAPAN，Vol.27，A.D.A. EDITA Tokyo，1997，pp.134-139.
48. 原広司：空間の文法「場(2)」，GA JAPAN，Vol.29，A.D.A. EDITA Tokyo，1997，pp.94-99.
49. 原広司：《空間の文法》レファレンス 京都駅と宮城県図書館の〈場〉と〈記号場〉，GA JAPAN，vol.32，A.D.A. EDITA Tokyo，1998，pp.126-131.
50. 原広司：空間の文法「横断(2)」，GA JAPAN，vol.38，A.D.A. EDITA Tokyo，1999，pp.116-121.
51. 原広司：集落の教え100，彰国社，1998.
52. 船越徹他：参道空間の研究（その1～その15），日本建築学会大会学術講演梗概集，1977～1989.
53. 舟橋國男：建築学における「トランザクショナルリズム」を巡る一考察，人間・環境学会誌，vol.26，2010，pp.48-61.
54. ホール，E.T.：かくれた次元，日高敏隆・佐藤信行訳，みすず書房，1970.
55. 横文彦他：見えがくれする都市，SD選書，鹿島出版会，1980.
56. McHarg, I.L.：Design with Nature, Natural History Press, 1964.
57. 宮宇地一彦：人間移動に伴う視覚的シークエンスの研究（その1）：ショッピングモールを事例として，日本建築学会計画系論文報告集，No.440，1992，pp.99-109.
58. メッツガー，W.：視覚の法則，盛永四郎訳，岩波書店，1968.

59. 門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究，東京大学学位論文，1997.
60. 山崎圭史・北雄介・門内輝行：二つの部分プロセスの類型化—都市のデザインプロセスのモデル化に関する研究（その2），日本建築学会学術講演梗概集E，2012，pp.445-446.
61. Ladd, F.C.: Perceived Quality of Residential and Industrial Environments: *Research Needs and Priorities*, Perceiving Environmental Quality, Plenum Press, 1976, pp.149-157.
62. Lynch, K. and Rivkin, M.: A WALK AROUND THE BLOCK, *LANDSCAPE*, vol.8, no.3, 1959, pp.24-34.
63. Lynch, K.: The Image of the City, The MIT Press, 1960.
64. リンチ, K.: 都市のイメージ, 丹下健三・富田玲子訳, 岩波書店, 1968.
65. リンチ, K.: 時間の中の都市 内部の時間と外部の時間, 東京大学大谷幸夫研究室訳, SD選書, 鹿島出版会, 2010.
66. ルドフスキー, B.: 人間のための街路, 平良敬一・岡野一字訳, 鹿島出版会, 1973.
67. Rubin, E.: Visuell wahrgenommene Figuren: Studien in psychologischer Analyse, Gyldendalske Boghandel, 1921.
68. レルフ, E.: 場所の現象学, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳, ちくま学芸文庫, 1999.
69. レルフ, E.: 都市景観の20世紀 モダンとポストモダンのトータルウォッチング, 高野岳彦・神谷浩夫・岩瀬寛之訳, 筑摩書房, 1999.

(2) 哲学・論理学・社会学

1. アリストテレス：カテゴリー論・命題論・分析論前書・分析論後書，アリストテレス全集1，山本光雄・井上忠・加藤信朗訳，岩波書店，1971.
2. アリストテレス：自然学，アリストテレス全集3，出隆・岩崎允胤訳，岩波書店，1968.
3. アリストテレス：形而上学，アリストテレス全集12，出隆訳，岩波書店，1971.
4. アルヴァックス, M.: 集合的記憶, 小関藤一郎訳, 行路社, 1989.
5. Altman, I. and Rogoff, B.: World Views in Psychology: Trait, Interactional, organismic, and Transactional Perspectives, Stokols, D. & Altman, I.(ed.), *Handbook of Environmental Psychology*, John Wiley & Sons, 1987, Chap.1, pp.7-40.
6. 飯田隆：言語哲学大全Ⅱ 意味と様相（上），勁草書房，1989.
7. 飯田隆：言語哲学大全Ⅲ 意味と様相（下），勁草書房，1995.
8. 岩崎武雄：カント，勁草書房，1958.
9. 岩田靖夫：ヨーロッパ思想入門，岩波ジュニア新書，2003.
10. 太田裕彦：現象学的心理学からみたトランザクショナルリズム，人間・環境学会誌，vol.26，2010，pp.62-68.
11. オールウッド, J.・アンデソン, L.-G.・ダール, O.: 日常言語の論理学, 公平珠躬・野家啓一訳, 産業図書, 1979.
12. 木田元：現象学，岩波新書，1970.
13. 木田元：反哲学史，講談社学術文庫，2000.
14. クリプキ, S.A.: 名指しと必然性, 八木沢敬・野家啓一訳, 産業図書・1985.
15. 澤瀉久敬：ベルクソン哲学の素描，世界の名著53 ベルクソン，澤瀉久敬責任編集，中央公論社，1979，pp.5-60.
16. 椎野信雄：ドラマトウルクギから相互行為秩序へ，ゴフマン世界の再構成，安川一編，世界思想社，1991，pp.33-64.
17. ジェイムズ, W.: プラグマティズム, 榊田啓三郎訳, 岩波文庫, 1957.
18. ジェイムズ, W.: 心理学（上），今田寛訳，岩波文庫，1992.
19. ダウティ, D.R.・ウォール, R.E.・ピーターズ, S.: モンタギュー意味論入門，井口省吾他訳，三修社，1987.
20. デカルト, R.: 方法序説，谷川多佳子訳，岩波文庫，1997.
21. ヒューズ, G.E.・クレスウェル, M.J.: 様相論理学入門，三浦聰・大浜茂生・春藤修二訳，恒星社厚生閣，1981.
22. ブルトン, A.: シュルレアリスム宣言・溶ける魚，巖谷國士訳，岩波文庫，1992.
23. ベルクソン, H.: 物質と記憶，ベルクソン全集2，田島節夫訳，白水社，1965.
24. 保坂和志：世界を肯定する哲学，ちくま新書，2001.

- 25.三浦俊彦：可能世界の哲学 「存在」と「自己」を考える，日本放送出版協会，1997.
- 26.メルロ＝ポンティ，M.：知覚の現象学，中島盛夫訳，法政大学出版局，1982.
- 27.安川一：〈共在〉の解剖学，ゴフマン世界の再構成，安川一編，世界思想社，1991，pp.1-31.
- 28.ロック，J.：人間悟性論（上），加藤卯一郎訳，岩波書店，1940.
- 29.ロック，J.：人間知性論（二），大槻春彦訳，岩波書店，1974.

(3)言語学・記号論

1. 池上嘉彦：記号論への招待，岩波新書，1984.
2. 上山春平：アブダクションの理論，人文學報vol.45—西洋論理思想史の研究—，京都大学人文科学研究所，1978，pp.116-124.
3. ウォーフ，B.L.：言語・思考・現実，池上嘉彦訳，弘文堂，1988.
4. 笠松幸一・江川晃：プラグマティズムと記号学，勁草書房，2002.
5. Canter, D. (ed.) : Facet Theory, Springer-Verlag, 1985.
6. 辻幸夫編，池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修：認知言語学への招待，シリーズ認知言語学入門 第1巻，大修館書店，2003.
7. 中尾佐助：分類の発想 思考のルールをつくる，朝日選書，1990.
8. バルト，R.：零度のエクリチュール 付・記号学の原理，渡辺淳・沢村昂一訳，みすず書房，1971.
9. バルト，R.：記号学と都市の理論，篠田浩一郎訳，別冊國文学・知の最前線「テキストとしての都市」，前田愛編，學燈社，1984，pp.47-61.
- 10.バルト，R.：表徴の帝国，宗左近訳，ちくま学芸文庫，1996.
- 11.松本曜編，池上嘉彦・河上誓作・山梨正明監修：認知意味論，シリーズ認知言語学入門 第3巻，大修館書店，2003.
- 12.レイコフ，G.：認知意味論 言語から見た人間の心，池上嘉彦・川上誓作他訳，紀伊國屋書店，1993.

(4)認知科学・生命科学・知識工学

1. シャンク，R.C.：ダイナミック・メモリ 認知科学的アプローチ，黒川利明・黒川容子訳，近代科学社，1988.
2. スクワイヤ，L.R.：記憶と脳 心理学と神経科学の統合，河内十郎訳，医学書院，1989.
3. ナイサー，U.：認知の構図 人間は現実をどのようにとらえるか，古崎敬・村瀬旻訳，1978.
4. ピアジェ，J.：ピアジェに学ぶ認知発達の科学，中垣啓訳・解説，北大路書房，2007.
5. ミンスキー，M.：知識を表現するための枠組，コンピュータービジョンの心理 第6章，ウィンストン，P.H.編，白井良明・杉原厚吉訳，産業図書，1979，pp.237-332.
6. ミンスキー，M.：心の社会，安西祐一郎訳，産業図書，1990.
7. ユクスキュル，J.・クリサート，G.：生物から見た世界，日高敏隆・羽田節子訳，岩波文庫，2005.
8. Roberts, R.B. and Goldstein, I.P. : The FRL Primer, A.I. Memo 408, MIT, 1977.

(5)京都の都市史

1. 秋山國三：条坊制の「町」の変容過程について—平安京から京都へ—，京都社会史研究，同志社大学人文科学研究所編，法律文化社，1971，pp.1-78.
2. 足利健亮編：京都歴史アトラス，中央公論社，1994.
3. 伊東宗裕：京都古地図めぐり，京都創文社，2011.
4. 伊藤之雄：近代京都の改造—都市経営の起源 1850年～1918年—，ミネルヴァ書房，2006.
5. 岩田英彬：京の大文字ものがたり，松籟社，1990.
6. 植村善博・上野裕編：京都地図物語，古今書院，1999.
7. 植村善博・香川貴志編：京都地図絵巻，古今書院，2007.
8. 梅原猛監修：古寺巡礼京都21 金閣寺，淡交社，2008.

9. 梅原猛監修：古寺巡礼京都39 清涼寺，淡交社，2009.
10. 大菅直：街路はいかに造られたか 一戦後を中心とした京都市街路建設事業史一，京・まちづくり史，高橋康夫・中川理編，昭和堂，2003，pp.198-211.
11. 大槻洋二：京都・新京極の成立母胎としての寺町：伝統都市の近代における歓楽街形成に関する史的研究所の1，日本建築学会計画系論文集，vol.514，1998，pp.199-206.
12. 大場修：近代京都における上知令による寺社境内地の変容と番組小学校への転用：明治期の小学校校舎に関する地方史研究 その11，日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系，vol.46，2006，pp.797-800.
13. 岡田孝男：京の茶室 千家・宮廷編，学芸出版社，1989.
14. 片方信也：西陣 織と住のまちづくり考，つむぎ出版，1995.
15. 狩野英子：京都嵯峨野周辺のここ一世紀の竹林分布の変化，*Bamboo Journal* 13，1995，pp.1-8.
16. 北雄介・門内輝行：地域特性と店舗プロフィールの比較：嵐山とホイアンにみる観光地化に伴う地域の変化 その1，日本建築学会学術講演梗概集. F-1，2007，pp.847-848.
17. 木村栄理子・深町加津枝・古田裕三・奥敬一・柴田昌三：嵯峨嵐山における竹林景観の実態と景観保全施策に関する研究，ランドスケープ研究：日本造園学会誌，70(5)，2007，pp. 605-610.
18. 京都市：換地図（金閣寺・西第二・西第三・西第五・衣笠鏡石・西紫野・東紫野・紫野門前町・紫竹・今宮・北第二の各地区）
19. 京都市：用途地域図・景観保全の指定地区図（2007年、http://www5.city.kyoto.jp/tokeimap/search_main.htm）
20. 京都市編：京都の歴史 第八巻 古都の近代，京都市史編さん所，1975.
21. 京都市の統計情報のホームページ（<http://www.city.kyoto.jp/sogo/toukei/>）
22. 京都市都市計画局編：嵯峨野鳥居本町なみ調査報告，日本の町並み調査報告集成第9巻 近畿地方の町並み<1>，東洋書林，1976，pp.433-516.
23. 京都市都市計画局編：祇園新橋町なみ調査報告，日本の町並み調査報告集成第9巻 近畿地方の町並み<1>，東洋書林，1992，pp.517-583.
24. 京都市都市計画局都市企画部都市計画課編：京都市の都市計画，京都市，2009.
25. 京都市都市計画局都市景観部景観政策課編：京都の景観，京都市，2009.
26. 建設局小史編さん委員会編：建設行政のあゆみ 一京都市建設局小史一，京都市建設局，1983.
27. 国土交通省国土政策局ホームページの航空写真
（<http://archive.gsi.go.jp/airphoto/ViewPhotoServlet?workname=USA&courseno=R275-A-7&photonono=38>）
28. 小寺武久：中世京都の都市空間に関する考察（2）一道路一，日本建築学会論文報告集，vol.239，1976，pp.133-140.
29. 財団法人嵯峨教育振興会編：嵯峨誌 平成版，1998.
30. 材野博司：都市の街割，SD選書，鹿島出版会，1989.
31. 嵯峨嵐山地域商業ビジョン策定委員会：嵯峨嵐山地域商業ビジョン 嵯峨嵐山おもてなしビジョン，2010.
32. 白幡洋三郎：京都百年パノラマ館，淡交社，1992.
33. 新創社編：京都時代MAP 幕末維新編，光村推古書院，2003.
34. 新創社編：京都時代MAP 安土桃山編，光村推古書院，2006.
35. Stanislawski, D. : The Origin and Spread of the Grid-Pattern Town, *Geographical Review*, vol.36, No.1, American Geographical Society, 1946, pp.105-120.
36. 妹尾達彦：長安の都市計画，講談社，2001.
37. 高橋康夫・中川理編：京・まちづくり史，昭和堂，2003.
38. 田中真人・宇田正・西藤二郎：京都滋賀 鉄道の歴史，京都新聞社，1998.
39. 鶴田佳子・佐藤圭二：近代都市計画初期における京都市の市街地開発に関する研究：1919年都市計画法第13条認可土地区画整理を中心として，日本建築学会計画系論文集，vol.458，1994，pp.99-108.
40. 中村武生：豊臣政権の京都都市改造，豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城，日本史研究会編，文理閣，2001，pp.89-112.
41. 藤岡謙二郎・西村睦男：北白川と嵯峨野 一大都市周辺地域の人文地理的モノグラフ一，地人書房，1968.
42. 丸山俊明：町触、町式目とまちづくり，京・まちづくり史，高橋康夫・中川理編，昭和堂，2003，pp.78-93.
43. 森谷尅久監修：ビジュアル・ワイド 京都の大路小路，小学館，2003.

- 44.八坂神社編：八坂神社（改訂新版），学生社，1997.
- 45.山口純・北雄介・門内輝行：商業者の意見に基づく街づくりへの提案：嵐山とホイアンにみる観光地化に伴う地域の変化 その2，日本建築学会学術講演梗概集. F-1，2007，pp.849-850.
- 46.山田邦和：中世都市嵯峨の変遷，平安京—京都 都市図と都市構造，金田章裕編，京都大学学術出版会，2007.
- 47.山田邦和：京都都市史の研究，吉川弘文館，2009.
- 48.矢守一彦：都市図の歴史 日本編，講談社，1984.

(6)地図データ

1. 仮製地形図，国土地理院発行，京都府立総合資料館蔵，1889.
2. googleマップ (<http://maps.google.co.jp>)
3. Zmap-TOWN 2 京都市地図データ，ゼンリン，2008.
4. ゼンリン住宅地図 京都市中京区・東山区・上京区・北区・西京区・右京区，ゼンリン，2006.
5. 都市計画基本図，京都市都市計画局発行，京都府立総合資料館蔵，1922・1953・1974～1983・1997～2011.

(7)その他

1. 岩下豊彦：SD法によるイメージの測定 その理解と実施の手引，川島書店，1983.
2. 金明哲：テキストデータの統計科学入門，岩波書店，2009.
3. 建築基準法施行規則別紙 (<http://www.kakunin-s.com/dl/kakunin/youtokubun.pdf>)
4. コホネン, T. 他：自己組織化マップ，徳高平蔵他訳，シュプリンガーフェアラーク東京，2005.
5. 高木幹雄・下田陽久：画像解析ハンドブック，東京大学出版会，1991.
6. 永井荷風：新版 断腸亭日乗（第1巻～第7巻），岩波書店，2001～2002.
7. 永井荷風：ふらんす物語，岩波文庫，2002.
8. ヒルシュ, M. W.・スメイル, S.・デバナー, R. L.：力学系入門：微分方程式からカオスまで，桐木紳他訳，共立出版，2007.
9. ベンヤミン, W.：パサージュ論（第1巻～第5巻），今村仁司・三島憲一他訳，岩波書店，2003.

発表論文一覧

本研究に関してこれまでに発表した論文の一覧を掲載する。全文審査付論文には「*」を、アブストラクト審査付論文には「**」を付す。

1. 北雄介・門内輝行：様相概念と実験方法－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その1），日本建築学会学術講演梗概集E, 5466, pp.957-958, 2008.8.
2. 南野友子・北雄介・門内輝行：マクロ・ミクロの様相記述手法－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その2），日本建築学会学術講演梗概集E, 5467, pp.959-960, 2008.8.
3. 石黒紘介・北雄介・門内輝行：記述に基づく様相の分析－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その3），日本建築学会学術講演梗概集E, 5468, pp.961-962, 2008.8.
4. ** 北雄介・門内輝行：経路歩行実験による都市の様相の記述と分析，デザインシンポジウム2008 講演論文集，pp.373-378, 2008.11.
5. * 北雄介・門内輝行：経路歩行実験による都市の様相の記述－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その1），日本建築学会計画系論文集，Vol.75, No.651, pp.1159-1168, 2010.5.
6. 北雄介・門内輝行：エッジ、エリアの類型化－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その1），日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系，Vol.50, 7054, pp.597-600, 2010.6.
7. 平井慎一郎・北雄介・門内輝行：エッジ、エリアの記述指標とシークエンスの分析－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その2），日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系，Vol.50, 7055, pp.601-604, 2010.6.
8. 北雄介・門内輝行：エッジ、エリアの類型化－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その4），日本建築学会学術講演梗概集E, 5417, pp.879-880, 2010.9.
9. 平井慎一郎・北雄介・門内輝行：エッジ、エリアのシークエンスの分析－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その5），日本建築学会学術講演梗概集E, 5418, pp.881-882, 2010.9.
10. 加藤大騎・北雄介・門内輝行：エッジ、エリアの記述指標の分析－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その6），日本建築学会学術講演梗概集E, 5419, pp.883-884, 2010.9.
11. ** 北雄介・門内輝行：自己組織化マップを用いた都市の様相の分析，Designシンポジウム2010 講演論文集，2010.11.
12. * 北雄介・門内輝行：様相因子による都市の様相の分析－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その2），日本建築学会計画系論文集，Vol.76, No.661, pp.625-634, 2011.3.
13. ** 北雄介・門内輝行：Description and Analysis of Urban Modality based on Walkthrough Experiment, EDRA42Chicago Conference Proceedings, pp.305-306, 2011.5.
14. 北雄介・門内輝行：都市の様相把握モデルについての考察－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その3），日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系，Vol.51, 7039, pp.549-552, 2011.6.
15. * 北雄介・門内輝行：エッジ、エリアの特性による都市の様相の分析－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その3），日本建築学会計画系論文集，Vol.76, No.666, pp.1433-1442, 2011.8.
16. 北雄介・門内輝行：道路構造と都市の様相との関連性についての考察－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その7），日本建築学会学術講演梗概集E, 7089, pp.215-216, 2011.8.
17. 酒谷粹将・北雄介・門内輝行：用途の配置と都市の様相との関連性についての考察－経路歩行実験による都市の様相の記述と分析（その8），日本建築学会学術講演梗概集E, 7090, pp.217-218, 2011.8.
18. ** 北雄介・門内輝行：A Framework for Modeling Urban Modality, EDRA43Seattle Conference Proceedings, p.186, 2012.6.
19. 北雄介・門内輝行：フレーム理論の導入とそれに基づく様相表現の基礎的分析－都市の様相の解説とそのデザイン方法に関する研究（その4），日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系，Vol.52, 7058, pp.589-592, 2012.6.
20. 北雄介・門内輝行：京都の都市史をもとにした三層構成モデルの提示－都市のデザインプロセスのモデル化に関する研究（その1），日本建築学会学術講演梗概集E, 7193, pp.443-444, 2012.9.
21. 山崎圭史・北雄介・門内輝行：二つの部分プロセスの類型化－都市のデザインプロセスのモデル化に関する研究（その2），日本建築学会学術講演梗概集E, 7194, pp.445-446, 2012.9.

22.** 北雄介・門内輝行：都市のデザインプロセスと様相との関連性の分析，Designシンポジウム2012 講演論文集，2012.10.

あとかき

どうにか、学位論文を書き終えることができた。ここでは学術的な筋からやや離れ、今の私の率直な思いを書いておきたい。

この研究は、本文中にも触れたように私自身の街歩き体験に由来する。欲張りで意地っ張りな私は、旅に出るととにかく歩き回る。着想に至ったもっとも直接的な経験は、2007年の5月に友人Tと二人で行なった「しまなみ海道」の歩破であった。三日間で約90kmの道のりをひたすら歩き続ける旅であったが、それはそれは変化に満ちたものであった。小さな峠を越えた瞬間に目の前にみかん畑と鄙びた造船所、そして瀬戸内の海が一気に視界に飛び込んできたときのえもいわれぬ感動。夜中に野宿をする適当な場所を見つけられず、風の吹きすさぶ海岸線を歩いていたときの寂しさ。これらのさまざまな「感じ」が、三日間歩き続ける中で次々と継起してきたのである。

この「感じ」はどのように起こっているのか、そしてどのように移り変わっているのだろうか。この素朴な問いが本研究の出発点である。それを知るために私は、いろいろな人に街を歩いてもらい、そこでの「感じ」を語ってもらうことにした。そしてどこで「感じ」がかわったか、その「感じ」はどのように評価できるのかを書いてもらう。これで、「経路歩行実験」のできあがり。予備実験をやってみると存外うまくいきそうだったので、勢い込んで一気にデータを取り、分析し、修士論文を書き上げた。これが2008年2月のことだった。

論文に満足した私は、意気揚々と東京に働きに出た。ところがあるうことか、入社後半年で会社が破綻。濃密な1年間の社会勉強の後、私は京都に戻ることにした。

このときの私に敗北者の感があったことは否めない。しかし振り返ってみると、この研究が私を京都に呼び戻し、私にとって最良の道を指し示してくれたのかもしれない。というのも改めて修士論文を見直すと、そこには理論面でも分析面でも、やりたいことが山のようにあるのだった。ここから私の研究の第二段階が始まった。

まずデータの分析である。修士時代にとったデータは、定量分析だけをとっていても宝の山であった。また言葉というものがそれ以上に厄介で、かつ豊穡な成果を生んでくれることもわかった。分析は必然的に定量と定性が合流したものになった。さらに京都の歴史という隠れたデータが、さすがの奥行きをもっていた。

様相という研究対象はそれ自体複雑であり、さまざまな分野と関係するらしいこともわかってきた。都市論や空間論をはじめ、認知科学、歴史学、そして私がもっとも避けてきた（恐れていた）哲学や記号論にも手を伸ばした。あの哲学嫌いの私が、よもや『アリストテレス全集』を紐解くことになろうとは…！

短い期間にあまりに多くの分野に同時に着手せざるを得なかったために、どの分野においても私はいまだ浅学である。したがって本研究で提示した理論モデルがいまだ発展途上にあることは門内先生にも何度も指摘されたし、私自身も十分自覚している。ただ一方で、被験者たちの残してくれたきわめて扱いづらいデータ群と、全力で戦い続けてきたという自負はある。曰く、「くちゃっとした感じ」。曰く、「ビラ・ティッシュ配りのおねえさんがかわいい」。本論は歩行実験の被験者たちが好き勝手に記したこれらの「感じ」と、私との格闘の記録でもある。

それは同時に、私自身の「感じ」との対話でもあった。この論文にはデータと向き合う中で、そしてまた街を歩く中で得られた私の「感じ」が随分と反映されていると思う。つまりこの論文は理論と

データに基づいた「客観的な」展開を装いながら、私自身の都市論という一面も多分にもっている。実証性を重視する学術の見地からはそのことに関する批判は免れえないが、私は理論とデータに忠実であるとともに、私自身の「感じ」に対しても忠実でありたいと願っている。

以上のような経緯を辿って学位論文を書き上げたのが2012年の8月、あの真夏の歩行実験からちょうど5年後のことであった。長かったような気もするが、おそらくこのテーマをまとめる期間としては短かったのだろう。とはいえこの論文には研究者としての私のすべてが流れ込んでおり、同時にここからまた幾筋もの小川が流れ出てゆく、泉のようなものになるのではないかと思っている。

研究自体の成果とは別に、私がこの論文を通じて学んだことが二点ある。

まずは研究の長期的プロセスである。博士課程では国内外の学会や学内セミナーなど、研究について発表する機会が何度もあった。しかし振り返ると、完全に満足できるものは一つとしてない。つまり一つのテーマについて何度論文をまとめても、その論文は常に改善点を含んでいる。いったん作りあげたものを崩す、崩してはまたつくる。そうして理論を深く、豊かなものにしてゆく。こうしたプロセスは企業では決して経験できないものだと感じている。

もう一点は思考することの自由である。私は建築を学ぶ者として、やはり「ものをつくってナンボ」という考えをもっていた。修士課程の後の進路として迷わず企業への就職を選んだのもそのためだった。しかしこうして論文を書いてみると、「理論をつくる」というのも存外おもしろい。何が知りたくて、どのような方法をとるのか。どのような理論を採り入れ、また構築するのか。そうしたことはすべて研究者に任されていて、研究者がつくりあげるものである。そこには建築基準法や予算による制限もなく、クライアントもない。考えようによっては思考こそ究極に自由であり、創造的なのであるまいか。

研究成果そのものの善し悪しの判断には多くの人の評価を待つよりないが、少なくともこのようなことを身をもって学び得ただけでも、私は幸せであったと思う。

ここまで随分と一人称で語ってきたが、研究の推進、学位論文の執筆にあたってはたくさんの方々にお世話になった。

まずはなんと言っても、偉大なる恩師・門内輝行教授である。

門内先生は2004年に京都大学に赴任してこられた。先生の楽しく濃密な講義に私はすぐに夢中になり、その年の後期のデザインスタジオでは直接ご指導をいただいたことになった。この出会い以来、実に8年間もの間お世話になっている。当時まったく勉強をせずに我流で設計課題を進め、そもそも建築への興味自体が乏しかった私の眼を見開かせてくれたのは他ならぬ門内先生であった。私にとって、建築をする喜び、学問をする喜びはあのときに始まったと思う。

私は門内先生ほどの研究者、そして研究の指導者を他には知らない。本研究は私のふとした思いつきで始まり、その後もとにかくがむしゃらに前に進むという私自身のペースで進めてきた。そのような私に対し門内先生は、ときにはなだめるように、ときには厳しく、導いてくださった。あるときはその膨大な理論体系の中から私に合う枠組みを示してくださり、あるときは私のやろうとしていることの中から本当におもしろい部分をすっとすくいあげてくださった。特に先生の示してくださった様相という魅力的なコンセプトのおかげで、本研究がここまでの広がりをもつようになったと感じている。

論文の草稿を書けば、門内先生は必ず赤を入れてくださる。この学位論文もそうで、大変多忙なス

ケジュールの中、最後の製本に出すその日まで面倒を見ていただいた。深夜の3時に先生からのメールが届くことも度々あった。

また先生には研究者としての生き方を、その言葉でそして行動で、教えていただいた。常に勉強を重ねること、広い視野をもつこと、誠実であること。学生に対する接し方、組織の動かし方といった社会での振る舞いまで含め、先生の側で学んでこられたことはこれから研究者として身を立ててゆく者として、本当に幸せなことであった。

正直に言うと、師があまりに偉大なので心がくじけそうになったことが何度かある。しかし私も、そんな先生に少しでも近づけるように、これからも先生の姿を見ながら日々研鑽を積み重ねていく。

次に、学位論文を審査して下さった小林正美教授と神吉紀世子教授に、厚くお礼を申し上げたい。

私は学部生の頃から小林先生のファンで、都市論の講義でのユーモラスでニヒルな語り口はいつも楽しみにしていた。直接お話しをさせていただく機会は今回がはじめてであったが、やはり本質を鋭く突くようなご指摘をいくつもいただいた。小林先生との議論には、研究者としての態度、現象への態度を問われるような感覚があった。そしてそのような大きな視点からのご指摘と同時に、草稿をお渡しするとすぐに隅々まで目を通し、手法や言葉づかいに至るまで細かなチェックいただけたことも、私にとって大変励みになった。

神吉先生には年に1回の学内のセミナーでも毎回質問をいただいております、研究をずっと見守ってくださっていたように感じている。学位論文の審査に際しても、私自身が気づいていない研究の魅力を教えてくださり、どのように人に伝えるか、どのように社会に活かしてゆくかというような点についてもたくさんのアドバイスをいただいた。特に地域の街づくりの現場に多数かかわっておられる立場から本研究のポテンシャルを示して下さったことは、今後の研究の展開にとっても大変ありがたいものであった。

その他にも学内セミナーや国内外の学会、論文の査読などで貴重なご意見をくださった、たくさんの先生方に感謝の意を表したい。

研究室の皆にも感謝したい。特に守山基樹助教、木曾久美子さん、山口純君という同世代の三人は、学位論文という泥沼の中で戦った仲間である。よきライバルであり、相談相手であり、また愚痴のこぼし先でもあった。ひとまずは私が一歩先に泥沼から抜け出すことになるけれど、将来的には門内先生の門下生として、四人で一緒に、この世界に新風を吹かせられればと思っている。

研究室の同級生や後輩にも、研究に協力していただいた。被験者として、実験のアシスタントとして、あるいはビデオ撮影や、地図をスキャンしてつなぐなどという非常に地味な作業にも手を貸してもらった。私の研究室在籍が長いせいで、多世代の後輩たちにお世話になることになった。

また忘れてはならないのが、経路歩行実験の被験者になってくださった方々である。酷暑にもかかわらず、56人もの同級生や後輩などに実験に参加してもらった。皆さんの書いてくれた一つひとつの言葉が私を5年間苦しめ、そしてそれ以上の実りを与えてくれた。今では記録された言葉を見るだけで、誰が書いたかを思い出せるまでになった。そんな素敵なデータを提供してくれた皆さんに、改めてお礼を言いたい。

その他にもお世話になった方はたくさんいる。

大西麻貴さん、百田有希君をはじめとする「嵯峨嵐山プロジェクト」の仲間たち。皆と一緒にやった調査やディスカッションが、論文の随所に反映されている。特にルートⅢの分析が深まったのはこ

のプロジェクトのおかげである。またプロジェクトに意見をくださる地元の方々にも感謝したい。特に鳥澤ブルース・リーさんには、論文の内容を含めていつも相談させていただいている。

東京での1年間はつらくもあったが、たくさんのお会いがあり、素晴らしい友人や先輩に恵まれた。とりわけ、わずか半年しか一緒に働けなかったものの、13人の同期たちは本当にかげがえのない仲間である。今では北海道から沖縄、そして中国とばらばらになったけれども、それぞれの場所で頑張る皆の姿が、いつも私の励みになっている。

西院のシェアハウスの仲間たち。心地よい私の居場所である。私が深夜に家に帰っても、リビングには誰かがいる。作り置いてある誰かの手料理をつまみながら、ちびちびと酒を飲む。おかしなメンバーとの不思議な日常が、論文ばかりにのめりこみがちな私の心を癒してくれている。

そして家族。ほとんど実家に帰らず、決して親孝行とは言えない私を、母は常に心配してくれていたし、父は好きなようにやらせてくれた。随分と学生生活が長くなり心配をかけたが、この論文をもってようやくそれも終わる。これからはしっかりと、恩を返してゆきたいと思っている。なお弟と妹は散々「学生、学生」と馬鹿にしてくれたので、今度は私の方から、愛情をこめて「社畜」と呼んであげようと思う。

また東京での試練に思い悩む私に博士課程進学を勧めてくださった、叔父である津田敏秀岡山大学教授にもお礼を申し上げたい。

最後に、私に数々のインスピレーションを与えてくれる、この京都の地をはじめとする世界中の街々にも、感謝。

さて学位論文を書き終え、お世話になったたくさんの方々への謝意を述べたものの、正直に言うと私は、達成感や解放感に満たされているわけではない。先にも述べたように、この様相についての研究はここで終わるわけではないからだ。学位論文は確かに大きなマイルストーンではあるが、私にとって書いたものはすべて崩されるべきものであり、道はまだその先に伸びている。本論で繰り返し用いた語を使うならば、この研究はいつでも「可能態」なのである。

門内先生は常々、「一つの分野で一人前になるのに10年はかかる」とおっしゃっている。あの真夏の実験から、今でやっと5年。残りの半分も、しっかり前を向いて歩いてゆきたいと思う。

2012年8月

北 雄介

Appendix

Appendix-A 実験時の配布資料・記入用紙サンプル

実験時に被験者に配布した以下の資料を、いずれも原寸大で掲載する。

タイトル	概要	ページ
本日の歩行実験のご説明	実験の概要、流れ、注意事項などについて記載した用紙（歩行開始前に配布）	1
記入方法のご説明	記入用紙と様相表現の記入方法を説明した用紙（歩行開始前に配布）	2
歩行終了後の作業	領域分割、領域評価、領域表現の記入方法を説明した用紙（歩行終了後に配布）	2
記入用紙サンプル	ルートⅡの1ページ目のみサンプルとして掲載	1

なお、この実験の説明や指示の段階では「様相」「把握」など一般になじみがなく、共通の理解を得難い言葉は用いていない。「雰囲気」の言葉で代表しておき、記入例によってあらゆることを書いてほしいということを指示している。

また、すべての資料の上部のマージンが広いのは、実験時にバインダーで綴じるための綴じしろである。記入用紙をバインダーで綴じたのが下写真である。



本日の歩行実験のご説明

2007年7月

■はじめに

本日は、我々の歩行実験にご参加いただき、誠にありがとうございます。

この実験は、人が街を歩くとき、どのように街を見、そして感じているかを調べるのが目的となっています。普段街をぶらぶらと歩いているときのように、リラックスして実験に臨んでいただければ幸いです。

暑い中の街歩きで疲れるかとは思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

■本日の流れ

- 1) 実験の概要や記入方法などについてご説明します。
- 2) スタート。適当に散らばって、スタートしていただきます。
- 3) 用紙に記入しながら、約4 kmの道のりを歩いていただきます。
- 4) ゴール地点に着いた後、さらにいくつかの記入作業をしていただきます。
- 5) 記入ミスなどがないか、こちらでチェックさせていただきます。
- 6) 解散。気をつけてお帰りください。

■注意事項その他

- ・実験中、他の被験者の方が歩いたり書いたりしているのを意識しないで、マイペースで歩いてください。
- ・万一実験中に事故が起きても、責任を負いかねます。車や自転車に十分注意し、また水分をしっかり補給しながら歩いてください。
- ・街の人から「何をしているの?」と聞かれることもあるかと思いますが、そのときは、簡単に「街の雰囲気について調査しています」と答えてください。もしも何かトラブルになりそうなことがあったら、北まで電話でご連絡ください。
- ・実験中にルートを外れてしまった場合、来た道に戻ってルートに復帰してください。もし迷って戻れなくなったら、北まで電話でご連絡ください。
- ・なお、お名前、電話番号などの個人情報、他人に伝わらないよう厳重に管理いたします。また、皆様にご書いていただいたデータは研究目的（修士論文、その他の論文などの執筆及び発表）以外には使用いたしません。

京都大学大学院 工学研究科建築学専攻 門内研究室

北雄介

電話番号：090-8482-2573

■記入方法のご説明

①境界を記入する

歩いていて、雰囲気が変わったと思ったら、以下のようにマークしてください。

(かわったのがわかるのは通り過ぎてからなので、かわったと思ったら、地図と照らし合わせながら、どこが境界か探してください)

右側のA~Gの欄は空欄にしておいてください
(後で使用します)

境界をこのように横線で示します

一箇所ではなく、ある同じ性質の範囲の前後 (A, B) に境界がある場合、
このように } で、その範囲を示してください

だんだんと雰囲気がかわっていった場合は、
このように ↑ で、かわっていった範囲を示してください

雰囲気はかわっていないけれど、特に気になったことがあれば、
☆マークをつけて示してください

どれほどの変化で「かわった」とするかは、個々人の判断にお任せします。

ただし、実験中は判断基準をなるべく一定にするように心がけてください。

また、周りの人の書いているのを気にせずにやってください。

②その境界はどのようなものであったかを書く

以下のように、なぜ境界であると感じたかを書いてください。

前方に大きなビルが見えてくる

A B C D E F G

感じた変化を、感じた場所を書いてください
目に見えるもの（上下左右前後すべて）だけでなく、
音、におい、風、そして「なんとなく感じた」と
いうようなことでも結構です

なんとなく寂い雰囲気は

道幅が狭くなった
小さい家ばかりになった

同じ場所で複数の変化があった場合は
すべて書いてください

〇〇通りが見える
車がゆっくり走る
空が大きく開けている

〇〇通りなどの固有名詞だけで書くのは避けて、
そこでどのような変化があったかも書いてください

木が生い茂っていて
森のよう

範囲の前後2カ所の境界がある場合、
その範囲の性質を記して下さい

↑ 店がだんだんと増えてきた
寂い雰囲気は

だんだんとかわっていった場合も、
その変化を書いてください

☆ 右側に大きな火煙突が見える

☆ マクドナルドの看板

☆のものは、固有名詞だけでもかまいません
気になったことを書いてください

以上の手順を、歩きながら繰り返してください。

なお、歩いた後に、ルートを思い出しながらいくつかの質問に答えていただくので、歩きながら感じたことをよく覚えておくようにしてください。

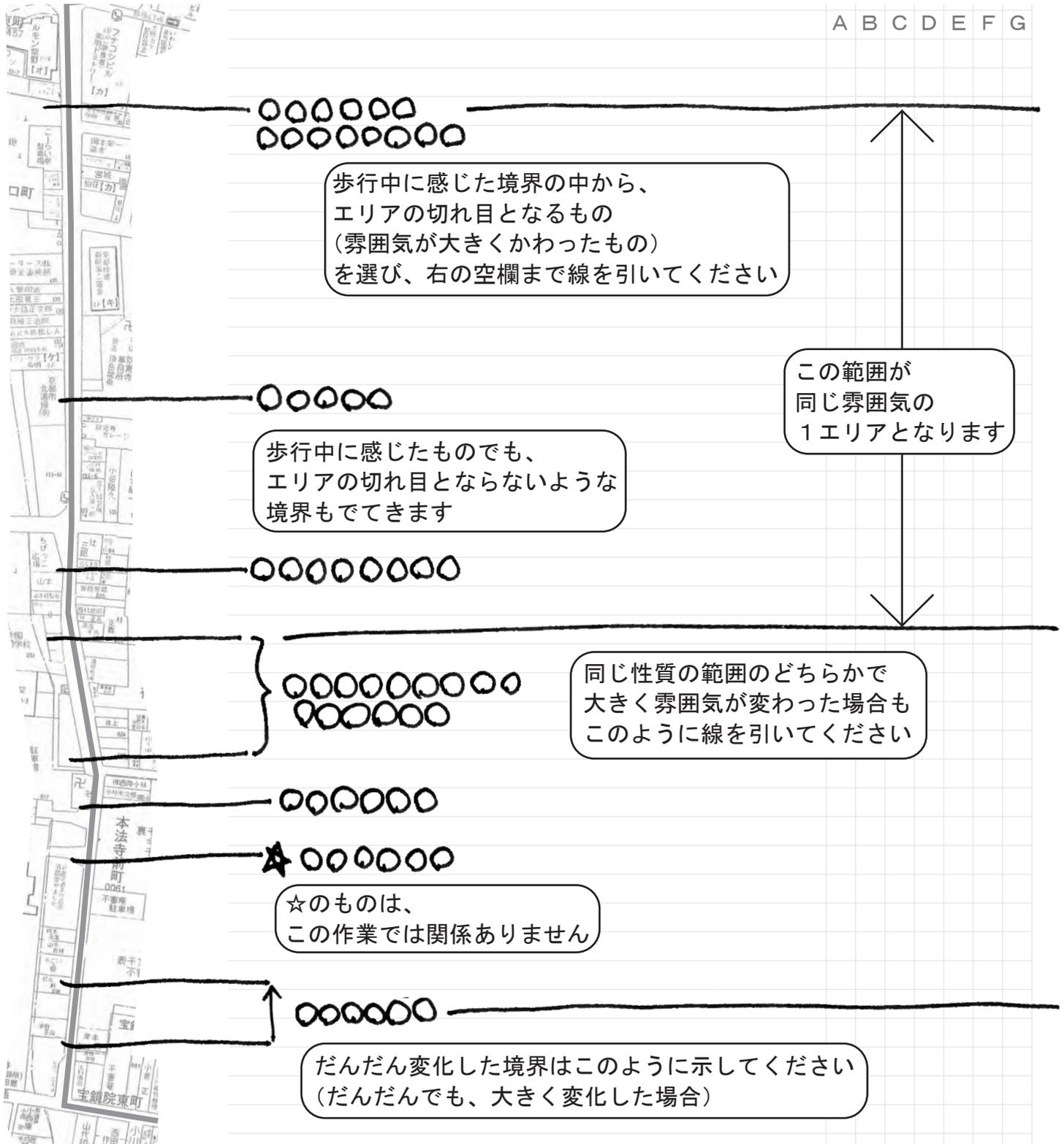
■歩行終了後の作業

①エリア分け

歩いた全ルートを、雰囲気が大きく異なるいくつかのエリアにわけてください。

いくつに分けてもらってもかまいません。

記入方法は以下の通りです。



②各エリアに対する印象を記入する
 まず、分割した各エリアについて、

- A いい雰囲気だ
- B エリア全体のまとまりを感じる
- C 印象に残っている
- D オープンな雰囲気だ
- E 秩序がある
- F 京都らしい
- G 以前からよく知っている

の7指標に対し、
 それぞれ

- 1 とてもあてはまる
- 2 ややあてはまる
- 3 どちらでもない
- 4 やや違う
- 5 まったく違う

のいずれかを選んで、右欄に書いてください。

次に、それぞれのエリアの特徴を、言葉で簡潔に表わし、数字の下に書いてください。

	A	B	C	D	E	F	G
	4	4	3	1	5	2	3
	寂しい住宅街						
	○○○○○○ ○○○○○○○○						
							
	○○○○○						
	5 3 3 2 5 4 1						
	人通りが少なく にぎやかなエリア						
	○○○○○○○○○						
							
	○○○○○○○○○ ○○○○○						
	○○○○○○○						
	★○○○○○○○						
	3 3 4 3 1 5 1						
	広場を中心に まとまったエリア						

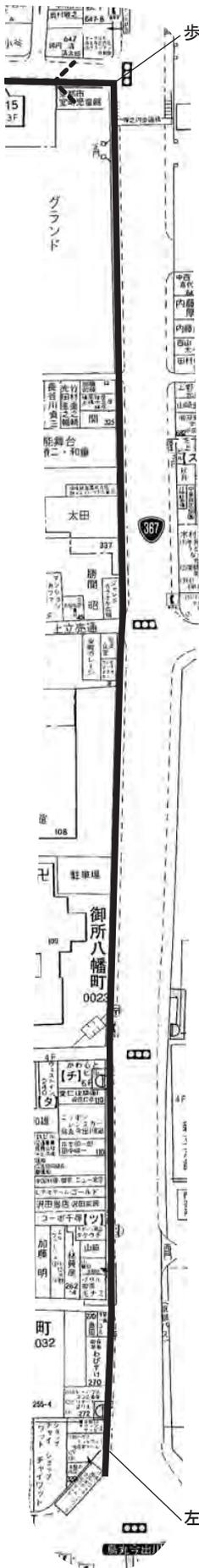
このようにエリアごとに記入してください

エリアを表現する言葉も、境界と同様に
 どんな言葉でもかまいません

エリアが複数ページにまたがる場合、
 どちらかにまとめて書いてください

次のページへ

A B C D E F G



歩道橋を過ぎた角を左折

左側の歩道を進んでください

ルートⅡ 1/8
 2007.07.30 10:15-
 氏名
 所属 / 学年

境界
 同一性質の範囲
 徐々に変化した境界
 ☆ 特に気になったもの

Appendix-B 全記録データの被験者別一覧

すべての記録データを、被験者ごとに掲載する。表の読み方は以下の通りである。

<種別>

- …地点表現
- ↑ …変遷表現
- } …範囲表現
- ☆ …特異表現

<始点・終点>

各ルートのスタート地点からの距離を2mの精度で入力している。終点は変遷表現、範囲表現の場合のみ表示する。

<様相表現>

自由記述をそのまま記載することを基本としながら、明らかな記録ミスであるものは修正した。地図上の特定地点や特定建物を直接指定しているものや、言葉の代わりにスケッチで表現したりしているものについては、適宜《 》で補足をしている。

同じ場所に同じ種別の記録があり、かつ文章がつながっていない、別のタイミングで書いたと考えられる、内容が異なるといった場合には「/」の記号で区切った。その基準は非常に微妙なものであるが、全様相表現を通じて、筆者の基準を変えずに区切るよう努めた。

<領域分割>

領域表現と領域評価が記入されている場所は、領域分割がなされたことを示す。その場合は様相表現の種別が地点表現、範囲表現だった場合は不連続分割、変遷表現だった場合は連続分割されたことを示す。範囲表現の終点や、特異表現の位置などで領域分割がなされていた場合、便宜的に様相表現が《記録なし》の行をつくり、そこでの不連続分割として処理している。各被験者の1行目の《記録なし》の行も最初の領域の領域表現、領域評価を入力するための便宜的なものである。

<領域表現>

領域分割があった場合、その領域分割から次の領域分割（またはゴール）までの領域に対する領域表現を入力している。ただし各被験者の1行目の領域表現はスタート地点から最初の領域分割までの範囲の領域表現である。内容は、被験者による記録を原則そのまま掲載した。

<領域評価>

領域表現と同様に、その領域分割から次の領域分割（またはゴール）までの領域に対する領域評価値である。被験者に記入してもらったのは実験用尺度であったが、ここでのデータ整理には4.2で置き替えた下記の分析用尺度を用いている。記入漏れがある場合「-」としている。

名称		尺度		
実験時	分析用	実験時	分析用	
A：いい雰囲気だ	A：雰囲気のよさ	1	5	↑ 高
B：エリア全体のまとまりを感じる	B：まとまり	2	4	
C：印象に強く残っている	C：印象の強さ	3	3	↓ 低
D：オープンな雰囲気だ	D：オープンさ	4	2	
E：秩序がある	E：秩序	5	1	
F：京都らしい	F：京都らしさ			
G：以前からよく知っている	G：事前知識			

☆	2,196		右、和風のたてもの																
—	2,200		2〜3階だてのたてものがふえる／古そうなたてものがふえる／やねがはじまる、みどりの柱とみどりのやね																
}	2,254	2,430	車のおりはずか																
—	2,258		和風な店がふえる																
☆	2,278		お寺、せんこうのにおい／おくが見える																
}	2,280	2,328	しまっている店が多い《左》																
}	2,378	2,424	商店のおくのマンションなどがみえる《左》																
☆	2,388		洋風のステキなたてものがやねのせいでみえない《右》																
—	2,414		左に少し高いたてものがふえる	交差点	3	1	5	2	2	4	1								
☆	2,428		京都っぽい道																
}	2,432	2,466	やねがない																
☆	2,436		和風(?)なへい、とイヌヤライ《右》／電線がとても多い通り《左》																
—	2,466		《記録なし》	静かな商店街	2	3	1	2	2	3	1								
}	2,520	2,566	やねがない																
—	2,522		前方に山のみどりが迫ってくる／空がひらけた																
☆	2,582		右手にみどり																
—	2,608		車がうるさい	どうろ	1	3	2	5	3	4	5								
—	2,620		空がひろい																
}	2,642	2,664	歩道のもようがひし形																

被験者109

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	駅の雰囲気が残る	3	3	2	2	3	2	4
—	16		囲まれている感じ								
☆	38		阪急大宮駅《左》								
☆	90		ロータリー、大將軍								
}	100	158	交差点の雰囲気が残り、ざわざわしている								
☆	160		通りをのぞくと意外と静か《左》								
☆	178		和菓子屋さん《右》								
↑	194	274	交通量は多いが大宮のざわつきから離れていく感じ／町並みとしては静けさがへっていく								
—	274		左方向への抜け。緑がふえた	通りに支配されている	3	4	4	3	4	3	5
}	274	332	高いマンションが多く、広いのに圧迫感がある／車のスピードが速く、せわしない								
—	352		人通りが急にへった。	雑多な印象	3	3	2	2	2	2	4
☆	398		亀屋良長のかんばんが目につく《左》								
—	420		朝日生命のビルが見下ろしているようだ。《左》								
—	460		南北の通りの交通量がふえた								
—	474		南側は古いお店があり、いいにおい。	街に近づいている感じがするが、少し静かな通り	2	3	3	3	3	3	4
—	546		高いマンションや雑居ビルがふえてきた。／一方で、ガソリンスタンド、100円パーキングなどのヴォイドも目立つ								
—	584		右前方に視界が抜ける。その先のマンションが茶色っぽく似かよっているので妙なかんじ								
—	608		低い→古い／高い→新しい の関係が出てくる								
☆	614		やたら細長いマンション《右》								
☆	636		左右に和の建て物があつてなごむ								
—	668		右から涼しい風がふく、古いまちなみ								
☆	692		やたら細長いマンション、十字の窓が気になる《左》								
—	730		看板が増えてきた／商店が多い	街に向かってざわつきだす	3	3	2	2	2	3	4
☆	782		ふと電柱に気づく、今までの道にもあったことに気づく								
☆	834		住友ビル、でかい《左》								
—	852		ざわざわしてくる(車)	駅前！	3	3	4	4	3	3	5
☆	874		バス停→バスの音が気になる／京都産業会館								
—	888		若い人が増えてくる								
—	924		自転車ごとまっていて歩きにくい								
—	964		高い位置に軒があるがこちよい								
—	1,002		交差点という感じがする	人と車といっしょに流されていく	3	4	3	2	3	4	5
—	1,026		アーケードがはじまる、空がなくてさみしい								
}	1,026	1,134	雑多で、一見なんの店かわからない、北側の方がわかりやすい／アーケードがあり上に何があるのか分からないが、北側の通りみたいなのだろう。／風通しがわるく、不快								
☆	1,122		緑のビルと								
☆	1,148		赤のビル								
—	1,166		急にへこむ(西村証券のビルなど)《歩道沿いにヴォイドがある平面図》								
—	1,204		車がふえ、排ガス臭い								
}	1,272	1,332	通り沿いを歩くとあつい、店側を歩くとすずしい								
—	1,340		路上駐車が目立ってくる								
☆	1,426		「京信」のガラス(今までの道ではあまりなかった道沿いにつづくガラス)								
☆	1,434		電気系の白いボックスが邪魔である《右》								
☆	1,440		田中彌の上が抜けていてこちよい《左》								
—	1,544		道の広さが実感できる一四条／東山がよく見えてくる／行く先の車の	はたらく→遊ぶへの過渡期	3	4	3	2	3	3	5

被験者116

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	高層ビルと昔からの建物が混在するエリア	1	1	3	3	2	1	3
—	18		道がいくつも交差しててごちゃごちゃした感じ								
—	98		四条通りのビル群が見える								
☆	150		一軒だけ古くて浮いている印象《右》								
☆	172		一軒だけ古い昔ながらのお店、懐かしいかんじ《右》								
☆	270		一軒だけ古いお店、孤立してるかんじ《右》								
—	296		高層マンションが交差点の角に立ち並ぶのが見える／交通量が多い／新しい建物ばかりで、“京らしさ”のようなものをかんじない								
—	314		北を向くと山と空がよく見える								
—	350		駐車場《左》								
}	350	372	《駐車場とサラ地により》通りが分断されてる印象								
—	372		サラ地《左》								
—	390		意外なところに京都の有名菓子を売ってるお店があった(『ふたば』)、古いお店								
}	396	416	工事中のビルと、閉まった状態のお店								
—	530		建設中のマンションが見える《左》								
—	592		時間帯のせいであまり暗い								
—	618		かわいいお惣菜屋さんが見える								
}	620	656	低い建物がつづく								
☆	630		京らしい建物(町家? 商屋?)かと思ったけど、どこか違和感を覚える								
—	664		右(南)を向くと古い家が見える。通り一帯が日かげになっていて涼しそう／風も涼しい								
—	716		工事で手前がサラ地になっている／奥の変なデザインのビルが見える《左》								
—	728		八坂神社より向こうの山の緑が見える								
}	732	808	路上駐車が多い								
—	754		着物屋さんの前に商品が並べてある、ここで立ち止まって見てたら通行のジャマになりそう《その様子の平面図スケッチ》								
—	780		学校の入口に赤じゆうたんが敷いてあるのが見えた								
☆	808		細い暗い路地の先に町家の虫こ窓が見える								
—	822		オフィス街という感じ／こころへんからずっと高層ビルが立ち並ぶ								
—	888		この建物の前だけ道幅が広い(←バス停があるため?)《右》								
}	910	926	放置自転車が並んでいるのが目に付く《右》								
—	982		立ち止まると涼しい風(地下鉄の入口の方から)《右》								
—	998		四条大宮からここまで工事中のビルが多かった／また大きい(背の高い)ビルと背の低い商店がバラバラに建ち並んでいて統一感がない	オフィス街	3	4	4	2	4	1	4
—	1,004		南を向くと京都駅と京都タワーが見える								
☆	1,024		銀行の建物の角のデザインが三条通りによくあるのに似ている								
—	1,034		アーケードが始まる／少し暗い								
}	1,034	1,104	自転車おいてある								
☆	1,134		ちょうど5時に通り過ぎたので、どこかから5時を知らせる音楽(オルゴール)が聞こえた								
—	1,136		ここから徐々に人が多くなる／アーケード下にそれぞれのお店の看板が付いているので、人が多くてもお店の位置を特定しやすい	オフィスと商店が併存するエリア	3	3	3	4	3	1	5
—	1,174		ここから四条通りを見ると同じぐらいの背の高さのビルがつづく								
☆	1,246		ヴェインの入り口から涼しい風／高級感が漂う								
—	1,328		煙草のおいがする、不快								
☆	1,428		一軒だけ背の低い古い建物、瓦屋根で違和感《右》								
—	1,622		四条烏丸からこころへんまで、こっ側の歩道には銀行や証券会社等のビルが多く見えた								
—	1,642		急に人の量が多くなる、歩くのが大変	最も人で賑わうエリア	2	4	4	5	2	1	5
—	1,660		放置自転車がなくて交通のジャマになってる								
☆	1,692		商店が立ち並んでいるところに寺								
☆	1,752		パチンコ屋の店内の音がうるさい《右》								
—	2,002		地下鉄入口横でパフォーマンス(音楽)をしている人たちが見える《左》								
—	2,086		視界がひらける／風が涼しい／セミの声が聞こえる／納涼床が見える								
—	2,132		野菜を売っている人、猫を売っている人がいた／南座の建物が目立つ《右》								
—	2,172		ここから雰囲気が変わる／アーケードに吊り下げられている照明とか、京らしい								
—	2,256		ここから背の低い建物がつづく(2~3階建程度)	全体的に見て京らしいエリア	4	4	3	4	4	4	3
}	2,262	2,368	昔からの商店が多いせいか、少しさびれたかんじ								
↑	2,262	2,302	徐々に人も少なくなった								
☆	2,358		パチンコ屋の音楽がうるさい《右》								
—	2,368		ここからまた少し背の高いビルが増える								
☆	2,380		辻利に並ぶ大勢の人が見える(名物?)《右》								
—	2,428		花見小路、京らしい街が見える《右》								
—	2,530		八坂神社の入口が見える								
—	2,554		なんとなく	新しい店が立ち並ぶエリア	2	2	3	2	2	2	3

↑	1,402	1,544	人も店も増え、ワクワクする感じになってきた																
}	1,544	1,878	まさに、繁華街	”ザ・繁華街”的なエリア	3	3	5	4	3	2	4								
}	1,878	1,932	タクシー多い、広い	中心から離れていく落ち着いていくエリア	3	3	2	3	2	3	4								
↑	1,932	2,070	中心部から遠ざかっていき、少しずつ落ち着いてくる																
}	2,070	2,144	涼しげ																
—	2,174		”古い”感じになる	京都を感じさせるエリア	4	5	4	3	4	5	3								
—	2,246		外人さんが目立つようになる																
—	2,256		女性が多い																
}	2,256	2,562	京都名物＝みやげもの屋さんばかり																
—	2,426		花見小路は”京都”に来たという感じがめっちゃする																
—	2,660		緑が多い／人が減った																
☆	2,672		工事中																

被験者126

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	駅前の錆びれかけた商店街	3	4	1	1	1	2	1
↑	160	194	店と店との間隔が狭くなり始める	地域密着型人情通り	3	4	2	1	4	3	2
}	202	262	地域密着型の店舗が多い／田舎の商店街のような雰囲気								
↑	348	400	高層なビルなどが建ち並び始める	学生の町	3	4	3	3	2	2	2
}	400	454	パーキングも目立ち繁華街に近付いて来た感じ								
↑	454	590	徐々に人も多くなり始めた／心なしか、歩いて来る人の顔に疲労感が見える								
}	590	662	マンションが多い								
}	662	724	飲食店が多い／行き交う人は学生風の人が多い								
—	724		前方の景観が都会って感じ								
}	724	994	金融機関、商社、学校法人、不動産関係の建物が散見された／人も更に増えてきて、親子連れも多くなった様に思う								
—	818		《記録なし》	京都のオフィス街	2	5	4	3	5	1	2
}	994	1,028	今までの中でも一際大きな交差点／三井、住友の荘厳なビルが建ち並ぶ								
—	1,028		アーケード街に入った								
}	1,028	1,278	行き交う人は若年層と高齢者に二分される様に思う／相変わらず金融機関が多い／建物がさらに高層となり、空はほとんど見えない								
↑	1,278	1,458	行き交う人々の年齢層は相変わらずだが、高齢者の服装が若干、若々しいものになった								
↑	1,458	1,544	金融機関が減り始め、飲食店やドラッグストアが増え始める								
}	1,544	1,620	アパレル関係の店が散見される								
—	1,580		《記録なし》	若者向けの京都繁華街	4	5	5	5	3	2	4
—	1,620		建物が少し低くなる。／空も開けて見えるように								
↑	1,620	1,664	人が急激に増える。大丸に行く人達だろうか？								
—	1,664		寺町京極の商店街が見える／周辺は老舗らしい店が多い								
—	1,694		新京極。人混みはここがピーク。								
—	1,702		金融機関のビルはほぼなく、若者向けの繁華街に。								
}	1,866	1,920	繁華街の中心的な雰囲気								
—	1,972		建物は更に低くなり始め、店舗間も少し空間的余裕が出始める／建ち並ぶ店は飲食店がほとんど	人ゴミは嫌やけど、ちよつと遊びたい時行く感じのエリア	4	5	3	3	3	4	2
—	2,172		一気に下町調の雰囲気。／外国人も増えた。	京の下町。当に「京都」って感じのエリア	5	5	5	3	5	5	4
}	2,340	2,516	京都らしいお土産屋、軽食のできる喫茶店が建ち並ぶ。								
☆	2,340		少し店舗の対象年齢が変わった気がする。								
}	2,516	2,568	スタバがある事で、少しこの辺りに於ては異色を放つ通り								

被験者127

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	超有名には届かない会社が多く、そこそこ人通りの多い道	3	3	3	2	2	2	3
☆	6		憲法改せいなどのマイクがうるさい								
}	20	88	ひらけたかんじ								
—	140		堀川通の車が目に入る								
}	158	166	ひらけたかんじ								
}	268	324	ひらけたかんじ								
☆	412		工事中で少し暗い(・´)落下物が通行人に当たらないようにする出っぱったものがあるから)								
☆	416		濃い茶色の高いビルで少しあつ感あり								
—	546		西洞院を通る車が目に入る								
}	546	592	右側は左側よりひくい建物								
}	742	768	左側に不動産屋が多い								
—	870		からすまの車が目に入る								
}	870	914	右側の通路が少し広い／バス停多い								
☆	964		工事中で少しくらい《左》								
—	1,020		両サイドの通路に屋根がつかだし暗くなり、人通りが増えた気になる。／涼しくかんじる／高いビルが多くなる。	超有名な会社が多々あり人通りも多いが、意外に涼しい道	3	3	4	2	2	2	4

}	276	338	歩道、車道ともすごい太い／特に車の量が多い									
☆	392		和菓子「ふたば」、豆もちが人気									
—	484		道に面した建物の中で、大きい、新しい、高いものが増える									
}	554	588	大きな高い建物の中に何軒か小さな昔からありそうな建物が並ぶ									
☆	598		意外に幅広いのに片側1車線の西洞院通									
☆	638		新しく高いビルの中のきもの屋									
☆	668		ビルの中に昔からの町並(路地)が残る、涼しい風が吹いてる									
☆	714		立面が不思議なビル									
—	750		東山が見え始める	どこにでも、ありそうな都市の風景に東山	3	3	2	3	2	3	3	
—	880		建物が大きくなり、高さがそろってくる									
☆	896		DIPLOMAXの思い出《右》									
☆	910		バス停に人がたくさん《右》									
}	992	1,022	交通量が思ったより多い烏丸通									
—	1,028		アーケードがかかる	町の中心だけど、そんなに人は多くない	2	3	3	3	3	4	5	
☆	1,040		いつの間にか、新しい建物ができてる《右》									
}	1,060	1,088	歩道に自転車がたくさんとめられている									
☆	1,094		ビルの中の憩いの場《右》									
↑	1,130	1,636	銀行とか金融関係の建物がへっていく									
}	1,218	1,268	タクシー乗り場、タクシーも止まっているが、自転車の駐輪も多い									
☆	1,254		グイトン、そういえば永山ゆう子は可愛かったです									
}	1,402	1,464	アーケードでクリスマス・正月の装飾案のコンペ、その関係者っぽい人が多い									
—	1,572		歩道のチャリの路駐が多くなる									
☆	1,620		信号待ちの向かいにかわいい女の子									
—	1,640		買い物客っぽい人が増える、かわいい子も	買い物客が多いエリア、人がごったがえす	3	4	4	4	2	4	5	
☆	1,660		寺町通にとめてあるチャリの多さにひく、昔はよくとめたよね									
☆	1,670		ゆかたの人									
}	1,704	1,750	北側の建物の高さが低くおさえられている									
}	1,814	1,850	高島屋の高級感がただよう									
☆	1,872		ピラ・ティッシュ配りのおねえさんがかわいい									
}	1,878	1,908	車の量よりも、横断歩道を守つて人の多さにおどろく									
☆	1,950		待ち合わせの人が意外に少ない									
}	1,998	2,016	一旦、アーケードなくなる／木屋町は緑が多い									
—	2,054		アーケードなくなり、視界開ける	鴨川が中心の自然が多いエリア	5	4	4	4	4	5	5	
}	2,080	2,132	鴨川、川の音、風、川床、北山が見える／魚とってる人も。／橋を歩く人がみんな日がさしている									
☆	2,142		浴衣の女の子2人									
☆	2,190		外国人いっぱいいる									
—	2,204		アーケードがかかるが低い暗い／四条通に面した建物が低層／看板少ない	観光客の多いエリア	4	4	4	3	4	5	3	
}	2,374	2,392	つじりに並ぶ人の行列									
☆	2,424		花見小路のまちなみ									
}	2,432	2,464	お茶屋の赤いへい									
☆	2,432		カラオケ屋《左》									
☆	2,532		こんな所にスタバあったっけ？《右》									
☆	2,600		ゆかたの女のこ×3									
☆	2,614		ローソンの青くさき《右》									
☆	2,642		セミの声がきこえる									
☆	2,678		門が工事中だ！									

被験者130

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	これといった特徴のないエリア	2	3	1	5	2	1	1
—	28		直線道路が続く、ずっと先まで見通せる								
}	268	316	大きな交差点、開けた感じ								
—	326		ビルが多くなってきて上の視界が少し狭まる	少しにぎやかでまとまりのないエリア	2	1	2	3	1	1	1
}	600	780	割りと小さい建物も多い								
☆	632		電線のない電柱が3本程ある								
—	656		ビルに張り出したテナントの縦看板が目につく。								
☆	918		駐めてあるチャリの数多い《右》								
—	1,002		四方にドンッリした建物								
—	1,024		路上駐車が多くなる。車の量も増えた気がする／歩道に屋根が付いて空が見えなくなる／“街”に入った感じがする。	街の中心部エリア	4	4	4	4	4	2	4
—	1,548		先に見えるビルの上部のゴチャゴチャ感がなんとなく弱まった気がする								
—	1,608		先に見える建物の背が低くなる、空が見える／人が増えた気がする								
☆	1,692		神社社務所？								
—	1,808		また見える建物が高くなった、空見えない								
☆	1,890		渡る時、左右が一直線に抜けているのがいい。								
—	1,970		また建物が低くなって空が見える／交通量が減り、車が滑らかに進むようになった								
—	2,064		歩道の屋根がなくなる。上の視界が開ける。／前方に、川沿いの《柳	老舗の土産物屋っぽい店が多いエリ	5	5	4	5	5	5	3

—	1,888		暗い／壁が圧迫感ある								
☆	1,924		赤ちゃんが泣いてる								
☆	1,980		敷地が低い《右》								
—	1,996		左は古い民家、右は新しいマンション、融合してる								
}	2,040	2,118	高い建物がなくて空が見える	間口の狭い家が並ぶ街並み	4	3	3	2	2	5	1
☆	2,040		道が変わってる								
—	2,118		商店街／あんまにぎわってないけどざわついてる								
—	2,210		静か								
}	2,210	2,472	鳥居までゆるやかな坂／間口の狭い家が並ぶ								
—	2,612		《記録なし》	温泉街	4	4	3	3	4	4	1
—	2,654		高級感ある温泉が多い								
}	2,686	3,024	坂のぼる／間口狭い家の連続	再び間口のせまい家が並ぶ街並	4	4	4	2	4	5	1
—	3,024		木材のいいにおい	パチンコ	2	2	2	2	2	2	1
☆	3,070		パチンコ								
}	3,140	3,336	坂きつい／さっきの坂とずっと同じような景色／なんか単調	家が立ち並ぶ単調なエリア	4	4	4	2	4	5	1
—	3,336		ちょっと景色が変わって、視界が広がる	間口の広い家が増えた住宅街	4	4	4	4	4	3	1
—	3,342		遠くの方で子供の遊び声								
—	3,372		落ちついた雰囲気／静か								
—	3,528		山に“大”の字が見える								
—	3,600		水／いい音								
}	3,620	3,706	家の間隔が他のところより広がる								
—	3,706		《記録なし》	きれいに整備された街	5	5	4	4	4	5	1
}	3,786	3,960	緑が多くて風が気持ちいい／けど車が多くてやだ								
—	3,786		広い通り、きれいに整備されてる								
—	3,960		すずしい／光と陰の感じがいい								

被験者203

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	大学を中心としたにぎやかなエリア	4	3	2	4	2	4	5
—	298		大学の敷地を過ぎると、建物の高さが急激に低くなった	小学校を中心とした緑の多いエリア	3	4	2	4	4	1	4
↑	298	490	だんだんと自然が増加(小学校の影響?)								
—	490		大通りから一転色彩が少ない風景	静かな住宅街	3	3	1	3	3	4	1
—	690		さくら広場／緑が場所のイメージを変える								
—	746		新しい住宅街が広がる／道は細いがそれほど閉そく感はない	お茶の伝統を中心とした格式高い街並	5	4	5	2	4	5	1
↑	746	1,036	だんだん古い家の割合が高くなっていく								
☆	746		オリジンが見える《左》								
—	1,042		道幅がさらにせまくなる(車一台分)／古い建物も多く、見るからに古い街並								
☆	1,100		表千家 不審庵?								
—	1,296		道幅が戻り、少し高い建物も見え始める	少し暗い住宅街	3	3	2	3	4	2	1
—	1,524		大通りに入る／交通量も多く雰囲気はガラッと変わった								
—	1,726		小道／住宅街の中	閉そく感すら感じる街並	1	3	4	2	3	3	1
—	1,866		右側に壁が続く、圧迫される感覚を受ける								
—	1,956		右手のマンションが明るさを付加								
—	2,042		視界が開け、道幅も広く	どこにでもある感じの住宅街	2	2	2	3	2	4	1
↑	2,236	2,472	だんだん建物が密集しまた元に戻る								
☆	2,472		神社の奥の森／うっそうとおい茂っていて、町の中にあるのが不思議な感じ								
↑	2,890	3,036	だんだん町並みが明るく(大通りに近づくにつれ)	少し高級そうな住宅街	2	3	2	3	3	4	1
—	3,050		古い住宅と新しい住宅が並立／工事多い								
}	3,116	3,360	なだらかな登り								
↑	3,116	3,360	徐々に山に向かっていく印象／目に入ってくる緑も増えてくる								
—	3,478		学校をすぎたあたりから住宅の密度がうすく								
☆	3,602		川／涼しげな印象								
}	3,612	3,784	家一軒一軒が広い(大きい)								
—	3,818		観光地の雰囲気	金閣寺へ向かっていく観光地のエリア	4	5	3	4	4	5	5
—	3,954		観光地といえど寺院だけあって木々に囲まれて静寂								

被験者204

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	大学エリア	4	5	5	5	5	4	5
—	150		人通りが急に減った／大学の敷地が終わり始め一軒家増加	人通りが減っていく大学町エリア	3	3	1	4	4	2	5
—	298		建物の高さが低くなり、空がひらける								
☆	316		伝統的町屋アリ								
—	388		学校が現れ、研究施設が右手に見えるが、木の数が増加し、見える範囲狭くなる								
—	490		道は狭くなる	古い住宅エリア	2	2	1	2	3	1	3
—	516		一軒屋が急に増加／小さなアパート増加								
↑	516	684	京都らしくない建物増加するが徐々に再び減少								
☆	684		一軒のみ木造が角に建っている／小さな公園?広場?								
—	746		道がさらに狭くなる／新しいマンションが増加								
—	816		更に道狭くなる	お茶を中心としたエリア	5	4	5	3	3	5	1

☆	1,288		町家《右》																	
☆	1,304		町家《右》																	
☆	1,324		緑がある／空が開けた感じに																	
—	1,374		前にマンションがみえる／町家風の店																	
—	1,522		大通りに／車が多くなった																	
☆	1,576		車のせいでより暑さを感じる／空気が悪い、排ガスのおい																	
—	1,598		さびれた感じ、殺風景になった																	
—	1,604		小ざれいな感じに／でも、なんとなくさみしい感じがする	最近の京都さのある町																
☆	1,714		大通り／車が多い		4	4	3	3	4	4	3									
—	1,734		路地に入っていった	裏道	4	4	4	3	4	5	2									
—	1,770		住宅が多くなった																	
☆	1,794		大通りが見える《右》																	
☆	1,820		車で暑さが感じられる																	
—	1,870		カゲが多くなった／物静かですずしい感じになった																	
—	1,900		正面が開けて空がみえるようになった																	
}	1,900	1,954	まさに裏道という感じに																	
☆	1,980		坂道																	
☆	1,992		見はらしがいい／大通りの車が見える																	
☆	2,018		石造りのへい《右》																	
—	2,030		道幅が少し広くなった／裏道という感じが少しなくなった																	
☆	2,116		徐々に車通りのある道にでた																	
—	2,126		静かだけれど、人の生活が感じられる																	
☆	2,232		車がよく通る／車通りの多い通りが見える《右》																	
—	2,238		正面に緑と鳥居が見えるようになった／緑が見えてなんとなく安心感																	
↑	2,238	2,320	住宅ばかりになってきた																	
☆	2,262		町家																	
☆	2,322		坂道																	
☆	2,390		小学校(?)が見える																	
—	2,470		少しい大きな通りになった／木陰のおかげですずしい感じがする／風鈴の音が聞こえる	京都の路じという感じのするところ	5	4	5	3	4	5	3									
—	2,612		なんとなく京都っぽい感じになった																	
☆	2,780		オシャレな家《右》																	
☆	2,786		車が多い／暑く暑い／空が開けている																	
—	2,862		少しさびれた感じがしてきた																	
—	2,930		所々に真新しい建物が見られる																	
☆	3,040		大通り／車が多い																	
↑	3,064	3,150	独特な雰囲気になってきた／ちらほらと、人や車とすれちがう	《記録なし》	5	4	3	3	4	4	3									
—	3,064		路地へ入った感じになった																	
☆	3,196		正面に、小学校が見える																	
☆	3,262		町家《右》																	
↑	3,372	3,444	緑が目につくようになってきた／正面に、山も見える																	
☆	3,372		小学校／わたりろうかが見えた／なんとなくつかしい《左》																	
☆	3,412		町家《右》																	
—	3,450		住宅街になった																	
☆	3,534		左大が見えるようになった																	
☆	3,584		現代的な建物																	
☆	3,602		川がある／水の音が聞こえる、その横を車が通る／空間的な広がりを感じられる																	
—	3,634		正面に大通りを通る車が見えるようになった／町は依然静かなままだ																	
—	3,722		緑が多く目につく／大通りから多くの車が入ってきた																	
☆	3,774		古風な和な建物																	
↑	3,798	3,940	観光客が多くみられるようになってきた																	
☆	3,798		大通りに出た／さわがしい																	
—	3,824		車通りの多い通りに入った／松の木が多く植えてある／他の緑も多く目につく／観光地という感じ																	
☆	3,866		《右手に》静かな雰囲気のある町並が見える																	
☆	3,954		木々の緑／セミの鳴き声、車の音／木陰に入れた、すずしい																	
—	3,962		人の話し声／セミの鳴き声より大きく聞こえる／観光客が多い／木々の緑、コケがきれい／じやり道になった																	

被験者206

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	学生の多い道	2	1	3	3	2	2	1
—	150		人(学生)が少なくなる								
☆	260		周りとは違った大きな建物								
—	302		見える木が多くなる	やさしい感じの道	3	3	3	2	3	2	2
—	438		子供の声が聞こえ、おちついたかんじがする《左》								
☆	468		子供と出会うことが多い								
—	492		木が一気にへる／車との距離が近くなる／道が狭くなる／信号がへる(なくなる)	ふつうの道	1	2	2	2	2	1	1
☆	682		緑(木)が目につく《左》								
☆	738		信号がないのに車のおりがはげしく、子供にとっては危い								
—	752		住宅街に入った感じがし、少しあっぱく感がある								
—	816		道がせまいわりに交通量がちょっと多い	ちょっと京都な感じの住宅地	3	2	3	3	2	4	1

—	2,472		《記録なし》	病院のある少ししりのある街並み	3	4	3	4	4	3	1
☆	2,472		神社の森が気になる								
}	2,532	2,578	右側タイル貼りの家が多い／路上駐車が増えた								
↑	2,532	2,578	町っぽさがアップ								
—	2,606		コンビニが唐突にあった、と思ったら曲がると店舗が増えた	古い小さな商店街	4	4	4	3	4	3	1
—	2,620		看板が増えた								
☆	2,642		雰囲気と合わない店《右》								
☆	2,668		入ってみたいと思わせる荘厳な門構え《左》								
—	2,730		さびれた店が多い／家の音がきこえる								
☆	2,784		アーバンな小さいマンションがふえてくる								
↑	2,950	3,018	だんだん町っぽくなる	きゆうくつな住宅街	3	3	3	3	2	3	1
}	2,950	3,018	家が密になっている、高さはないが圧迫感あり／車通りも多くなってきた								
—	3,040		《記録なし》	奥に引張られるような静けさ	4	4	4	4	4	2	1
☆	3,040		パチンコ屋が急にあらわれた								
—	3,078		奥ゆきがある《右》								
—	3,140		静か								
☆	3,232		Times								
—	3,370		山が見えた／緑も増えた	楽しい坂道	4	3	3	3	4	3	1
☆	3,370		手すり								
—	3,474		赤いものが多くなり目につきだした								
☆	3,488		はっぱだらけの家《左》								
☆	3,534		左大文字								
—	3,600		川の低さが気になる	暗さのある通り	4	3	3	3	3	3	1
—	3,654		横切る道が気になり出した								
—	3,736		車もふえてきた								
☆	3,746		暗い建物《左》								
☆	3,774		ほどよいピンクがなかなかアクセントになっている家《左》								
—	3,786		急にひらけた								
—	3,820		《記録なし》	寺への期待が胸を弾ませるアプローチ	4	4	3	4	3	3	2
—	3,880		車道と歩道が分けられてきゆうくつだ								
—	3,954		寺の静けさがある	美しい！！	5	5	5	3	4	4	3

被験者215

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	大学が近くにあり、わりとにぎやかで活気のあるエリア	3	4	2	4	2	2	5
—	38		派手な店がへっておちついた雰囲気になってくる	にぎやかさを残しつつ、おちついた感じのエリア	2	1	3	5	1	2	4
—	148		視界が開ける(たぶん寺がひっこんでいるから)								
☆	184		かわら								
☆	244		赤レンガの前に原チャ原チャ原チャ…(でもキレイに並んではいる)								
☆	304		ジャンカラの旗、向こうにはなかくの旗 色とりどり								
—	316		さらにおちついた雰囲気になる	人通りは少なく静かなエリア	3	4	2	3	3	3	2
↑	316	490	大学のにぎやかさはきえる								
☆	442		緑のかべ、並木と両サイド緑にはさまれる								
—	490		人通りへる！／色がじみだ／道がせまくなる建物が高く感じる。／ちよいと圧迫感	わりと寂しい住宅エリア	2	2	1	2	2	1	1
}	490	682	電柱と電線が目に入る。								
☆	668		木材の香り♪《左》								
—	680		視界が開ける／横道の奥にずっと家がみえる								
☆	706		濃い緑 しげる。つかのまのやすらぎ。花の色 赤、黄、白、ピンク…《左》								
—	742		道はさらに細くなり、さらに静かなふんいきに								
☆	752		レンガタイルの赤色がやたら目につく。／京都新聞《右》								
☆	818		小さい道なのに車がやたら通ってそうぞうしい。								
—	850		右サイド寺、左サイド小さい家。／よく空が見えるようになった気がする。／生活感ある。	右手と左手でずっと表情が違うエリア	3	3	2	3	4	3	1
—	952		家の軒がひくい。／身近なスケール感。								
—	1,042		細い道／車も通らなくなり、小さな古い家ばかりでおちつく。	静かで独特の雰囲気のあるエリア	5	4	5	1	4	5	1
}	1,042	1,202	ものすごくおもむきがある／門の奥へ入りたい。《門のスケッチ》／京都っぽーい！								
☆	1,090		木の壁、ちよっと黒ずんでカッコイイ！／門がまえすごし。								
—	1,202		向こう側にビルが見えてくる／ふつうの住宅街にもどっていく。	寂しく少し雑多なエリア	3	2	2	3	3	3	1
☆	1,284		ちびっこ広場、さびれてんなあ…《左》								
—	1,298		道が広がる／団地とか小さなビルがぼつぼつと出てくる／建物は表情をなくしていく。								
☆	1,474		お墓だ！！墓のすぐ隣に家 墓の向こうにビル、とり残されたような墓地《左》								
—	1,520		広い道路／味けないビルと、緑とたぶん東山	車通りはあるがさつぱつとしたエリア	2	2	2	1	1	1	1
}	1,600	1,726	広い道路								
☆	1,630		なんかボロボロしたマンション。バルコニーの曲線が気になるう								
—	1,720		視界がぬける								
—	1,736		きゆうに道がせまくなる／ゴミゴミした印象	密度の高いごちゃごちゃとした住宅地	3	5	4	1	1	2	1

☆	1,866		道の左側は生活感、右側は閉じている																	
—	1,892		住宅地のただ中／道がさらにせまくなる／静か																	
}	1,892	1,956	植木のみどりがへいの圧迫感をへらしている／ずっと右側にはへいがある																	
—	2,040		視界が開ける／空が大きくみえる	整った住宅エリア	2	2	2	2	3	4	1									
☆	2,058		神社の鳥居の塗装がはげているの見える《右》																	
—	2,120		やはり小さな家ならぶ／ところどころ古くからの商店																	
☆	2,234		つきあたりに、鳥居が見える／家の高さがバラバラな気がする																	
☆	2,238		鳥居の奥にこんもり緑																	
☆	2,290		子供の通学路になっているらしい。注意のカンバンがちらほら																	
—	2,320		家の高さがそろってくる／道が少しひろくなる																	
}	2,396	2,472	ぼつぼつ古い家がある／織り物やとか																	
☆	2,472		木のどけい、奥に朱ぬりのどけい／緑のおかげで少しすずしい																	
—	2,476		車道になる／新しいビルも少しだけ街なみに気がつかっている	整然とした住宅エリア	3	3	2	2	2	2	1									
☆	2,608		ローソンの鮮やかな青																	
☆	2,640		工事ネットの緑色《右》																	
☆	2,668		岩デカイ、私くらいある《左》																	
—	2,700		商店が多く、まちに動きがあるようす／たくさんのクロスした電線が空をきっている	人が活動しているのが感じられるエリア	3	2	3	3	2	3	1									
}	2,700	2,798	路駐多いなあ。たぶん店の車																	
—	2,798		新しいマンションなどがでてくる	人々の交流や生活のにおいが感じられるエリア	2	2	1	2	2	2	1									
☆	2,884		トロフィーショップ キラキラしている《左》																	
☆	2,954		商店、生活感あふれる《右》																	
☆	3,000		木のかおり《右》																	
—	3,042		大きな道路、そうぞうしい／視界が開ける	広い道路、そうぞうしいエリア	2	2	2	2	2	1	1									
—	3,090		《記録なし》	ととのった住宅エリア	3	4	3	2	4	4	1									
}	3,090	3,226	左手のまちなみはそろっている。2階だてのかわらやね。茶色っぽい雰囲気																	
☆	3,090		工場地帯のにおい																	
—	3,226		《記録なし》	日本によくありそうなふつうの住宅エリア	2	2	2	3	2	3	1									
↑	3,226	3,350	徐々にフツの家のまじってきて色がふえてくる																	
☆	3,378		えんとつかッコイイ																	
☆	3,450		レンガの壇の上に長屋《右の一带》																	
☆	3,512		緑におおわれた家《左》																	
—	3,600		川の流れがすずしい／川つぶちに建つ家のごちゃごちゃとしたふんいき／住宅地																	
—	3,736		少し観光客向けの店がでてきてふんいきがかわる	観光地らしく、にぎわいのあるエリア	4	4	3	4	3	4	4									
☆	3,744		そば処《左》																	
☆	3,770		食事処《右》																	
☆	3,820		よーじや《左》																	
☆	3,942		目の前は緑																	
☆	3,988		すずしい																	

被験者216

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	同志社の町	4	5	5	5	5	3	5
—	24		シャッターが閉まっている								
—	70		レンガが多い								
—	146		同志社が見えてしっとりとした感じ								
—	218		塀が低くなって開けた感じ								
☆	284		めっちゃ細い建築、幅2000くらい								
—	302		少し色調が暗めでしっとり	しっとりした空気感のある小学校中心のエリア	5	4	3	4	2	2	4
—	384		緑の塀で少し涼しい／学校の子供の声								
☆	474		さびた歩道橋								
—	496		生活感が出てくる	街のうら側みたいなエリア	2	2	2	1	1	2	2
—	522		裏の雰囲気								
☆	576		地蔵								
—	582		高いファサード群の圧迫感								
☆	640		たくさんのノボリ								
☆	668		木のおい								
—	682		少し奥にセットバック								
—	702		斜めの道の違和感／緑の涼しさ								
☆	730		急に現れる高いファサード								
☆	740		織陣《左》								
—	752		一気に細い道／住宅街の雰囲気	生活のにおいがすごく強い場所	3	2	2	1	1	3	1
—	820		車一台ギリギリの細い露地								
—	840		道幅が広がり空が開けて開放的								
☆	874		黒い木造の建売住宅《左》								
—	910		店が並ぶ								
—	940		住宅の雰囲気とそれに反する車の雑踏感								
—	1,054		細い庭のような公園／京都の雰囲気／板塀のファサード	京都らしいほんやりとしたエリア	5	5	4	3	5	5	1

被験者217

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	人通り多い。特に学生	3	2	3	3	1	4	5
}	0	56	駐自転車多い								
—	56		東側学生の賑やかさ、西のさびしさ	人がどんどん少なくなっていく、静かになる	2	2	1	3	3	2	5
}	152	216	寺の塀								
}	152	282	東側にグラウンド、建物の圧迫感が減								
}	216	282	洋館⇄寺の塀 対比								
}	282	296	そびえ立ってる《左》								
}	296	354	食べ物屋多い								
↑	296	354	建物が減ってくる／人も減ってくる								
—	354		《記録なし》	植栽の壁が和ませてくれる	4	4	4	3	4	2	2
}	386	490	植栽の壁。子供の声／東側のなんとも言えないぼつしなさ								
}	494	682	道が狭くなり、建物の高さを感じる／RC造、mass感／植栽がない／車が近い	道が狭くなり、建物の圧迫感を感じる	2	4	3	2	4	3	3
}	692	714	公園の少しの余白がほつとする《左》								
}	746	804	マンション、駐車場ばっか	マンション、駐車場多し	2	4	2	2	4	3	3
—	804		車多い、危険	建物のバラバラ感、狭い道なのに車が通る、いかにも京都	3	2	3	3	2	5	3
☆	814		「無事故宣言モデル地区」の張紙《右》								
}	850	974	寺あり、戸建住宅あり、町家あり、狭い道なのに車が多い、のいかにも現代京都								
☆	908		途中、変電所								
☆	942		壁面に窓いっぱい《左》								
☆	960		幼稚園、子どもは車に気をつけましょう《右》								
☆	980		茶道具問屋《右》								
☆	998		ラーメン缶の自販機《左》								
}	1,064	1,182	門、町家、木造が続く／いかにも伝統、が多い／静かな落ち着いた雰囲気	静かな落ち着いた雰囲気。昔の京都は、こんな感じ？	5	5	4	1	5	4	5
↑	1,182	1,288	徐々に、木の雰囲気が減る	建物のまとまりのなさ	3	2	3	4	2	4	4
☆	1,186		こんなに駐車場があるとは《左》								
☆	1,210		警察官立寄所？長屋？《左》								
—	1,294		広さを感じる交差点								
}	1,294	1,524	戸建て、RC造、massのマンションが増えた／建物の高さ、大きさもバラバラ、全体としてもバラバラ／ちらほら、人が外で雑談している／路駐の車が目立つ								
☆	1,540		1Fスーパー、オバちゃん元気《右》								
—	1,558		交通量多し。動いてる車と止まっている車	道が大きく、建物一つ一つも大きい	3	4	2	5	4	3	2
}	1,600	1,702	一つ一つのスケールが大きい								
}	1,728	1,870	人が入っていきにくい感じ	小さい家の密集地帯、まとまりを感じさせる	3	5	5	1	5	4	2
☆	1,734		そびえ立つ壁《左》								
}	1,792	1,832	違法建築群？《左》								
}	1,870	1,956	北側に寺のような壁／南に1980～1990くらいそうな建物／植栽が多い								
}	1,870	2,016	町家がほとんどないのが意外								
—	1,948		あまりにでかいマンション《右》								
}	2,030	2,112	建物減ったなあ	建物の密度が下がる。建物の統一感も下がる	2	2	1	4	2	3	1
☆	2,112		ぼろぼろの鳥居《右》								
}	2,128	2,222	まばらに人／車も通っている／なんだか、バラバラ								
}	2,222	2,472	いかにも現代の見慣れた京都だなあ、という感じ	古い町家あり、マンションあり、の、いかにも現代の京都という感じ、まとまりのなさが特徴	4	5	4	3	4	4	2
—	2,234		神社の森が目に入る								
☆	2,384		風鈴の音。涼しい《左》								
—	2,402		木の匂い《左》								
}	2,472	2,496	セミの鳴き声。鳥もいるみたいだ《右》	神社のおかげで、少し落ち着いた雰囲気。	4	4	5	4	3	3	2
}	2,472	2,610	建物の密度が薄い								
}	2,506	2,530	赤の柵《右》								
☆	2,604		ゲストハウス《右》								
—	2,610		《記録なし》	路駐が目立つ	3	3	1	3	3	4	2
}	2,650	2,676	温泉／でかい岩がいっぱい《左》								
}	2,676	2,776	路駐がちらほら／車もよく通る								
—	2,776		《記録なし》	マンションや、古い戸建(町家ではない)が多く、あまり印象がはっきりしない	3	4	1	3	4	3	1
}	2,776	3,080	特に目立つ感じがなく、覚えていない								
—	2,800		大きなマンション、駐車場、周りは小さいのに《左》								
☆	2,816		変わった工事現場《右》								
—	3,010		明らかに大きなマンション《右》								
}	3,080	3,144	車多いなあ	町家、戸建、マンションが混ざり、大きさや質感でバラバラに感じる。なんだ	3	5	4	4	4	3	2

}	1,900	1,950	鉢植えがならべてある、自転車がうまっている！大好き！！テンションが上がる															
}	1,980	2,010	ひさぶりの大きな高低差。リズム感☆															
☆	2,012		木の電柱だ。															
—	2,038		道のややこしさが、ローカルな雰囲気	一般的住宅地	4	4	2	3	3	2	1							
—	2,120		全部看板が少し古い感じ／歩いている人もおばあちゃん多い															
—	2,230		目の前に森がみえる／のどか															
☆	2,472		カッコいい鳥居															
—	2,528		樹がなくなり、神社を抜けた															
—	2,578		みなれた町並という感じで、さつきから区切ろうと思わない。															
↑	2,618	2,696	いつのまにか落ち着いた感じに。／木のテクスチャーが増えた。															
☆	2,756		右の奥にみえる森が安心。															
—	2,780		戸建てから左にマンション出現。風景のスケールが、突然大きくなってしまっ嫌	スケール大きいエリア	1	4	4	5	2	1	1							
—	2,846		戸建てにもどる	一般的住宅地	4	4	2	3	3	2	1							
↑	2,846	2,900	雑多な感じに。歯抜け、or工事多い															
☆	3,044		整った道、好きだ															
↑	3,080	3,140	まとまった街並になってきて、歩いていて楽しい	少し雰囲気の住宅地	4	4	2	3	4	4	1							
↑	3,222	3,282	家の高さが低くなったのか、少しひらけた感じに															
}	3,336	3,378	左側、小学校だとは分かっているけど壁ばかりで少しさびしい															
☆	3,468		左の曲がり道、不思議な感じ、くねくねして下って行って、両側に特に、癒らしいかない															
—	3,500		あまり人が歩かなさそうな場所に思える															
—	3,534		目の前の山に気がついた。安心する。															
}	3,598	3,608	いい！！突然の落差！川にかかる緑、そのまわりの家の雑多な感じ	町中の素敵な小川	5	5	5	5	5	4	1							
—	3,608		《記録なし》	ゆったりめの住宅地	4	3	2	3	2	2	1							
—	3,612		川を渡ると、ゆったりした感じに変わった気がした															
↑	3,612	3,680	あんまりいやな音(セミ、車とかの)がしなくなってきた気がする。															
↑	3,710	3,762	手前の緑がたくさんみえてくる															
☆	3,804		車たくさん。でも道のまん中から見ると、植樹がきれい															
↑	3,828	3,898	ゆったりとした気分になってくる、でも歩道せまい															
☆	3,908		大文字がすぐ近くにみえてびっくり！！															
☆	3,940		人の笑い声がきこえた															
—	3,960		深呼吸。影。すずしい。きれいな黄緑色。／あと、さつきまで、こんなに人、あるいてたっけ？	金閣寺！！もみじ並木	5	5	5	4	5	5	4							

■ ルートⅢ

被験者301

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	建てづまった住宅街	4	4	2	2	3	3	5
—	100		川は緑が多くなった								
—	192		道がせまくなった／川の流れはやめ								
☆	310		新築の家《左》								
—	408		山が見え始める								
—	498		少し大きな道／車が多い／店がぼつぼつ								
}	498	576	建物が大きい／建て詰まっていない								
}	576	622	少しつまる								
—	698		少し開けた、お寺								
☆	736		山へ行く道								
—	740		マンションがちらほら								
↑	740	954	大きな家が増えた、だんだん								
—	920		山が近くなった								
—	948		車が増えた	嵐山の観光スポットの始まり	2	2	3	2	2	3	5
☆	976		帯のお店								
—	1,048		法輪寺入口／少しひらけた								
↑	1,066	1,210	観光のお店が増えてきた、旅館も一、二つ								
☆	1,168		嵐山分譲地								
—	1,180		車が増えた	嵐山の観光スポット	3	4	5	4	4	3	5
—	1,248		川が見え始める								
↑	1,274	1,484	だんだん観光地になってくる								
—	1,310		公園がある								
—	1,324		松の木が減って川が広がる								
—	1,512		道がまっすぐに／建物の高さが抑えられている／お店ばかり／観光客ばかり								
—	1,604		木がある／横道奥によさそうなお店								
—	1,690		駅とお寺があつて少し開けた／駅が新しく、セットバックしていて、そろっていない								
—	1,748		天龍寺 正面からの景色								
↑	1,784	1,900	店が減って民家に《右側》／石垣と植さい《左側》								
↑	1,900	1,956	左右に店が増えた								
—	1,956		竹林が見える／こっちに人が流れてまっすぐ行く人減る	嵐山観光エリアの終わりに近づいてい	2	2	2	2	2	1	4

				くエリア															
—	2,090			踏切 観光地終わりっぽい															
☆	2,130			一ばん星見つけた 壁面が															
—	2,208			山側に竹林／右側に学校、コンビニ／明確に境界と思える／住宅地になった	清涼寺の門前町	4	2	3	3	2	2	1							
☆	2,348			お寺の門が見えた															
☆	2,424			門前町らしいお店、他にはあんまりない															
—	2,528			嵐山より道が広くて人少ない、店もないし、なんとなくいい感じ	清涼寺周辺エリア	5	5	5	5	5	4	1							
☆	2,528			古い家 旅館みたい／しょうきさんが屋根の上ではなく玄関の上にある															
—	2,602			六角堂のあるあたり、気分がよるしい《寺の内側の六角形の建物の平面図…正確には八角形》／庭、緑が嵐山よりきれい															
—	2,764			清涼寺終わり	住宅地と田んぼの風景が広がるエリア、田舎エリア	3	4	3	4	3	2	1							
—	2,880			林終わり／住宅地と田んぼ															
}	2,990	3,106		住宅が多い															
↑	3,106	3,312		大きな家が増えてきた															
—	3,332			右側に山がせまっている															
—	3,444			観光地になった	あだしの念仏寺およびお土産物屋さんエリア	4	5	3	3	4	3	5							
—	3,704			お店途切れた	昔の雰囲気のある住宅地エリア	5	4	5	4	3	4	3							
↑	3,704	3,890		家がだんだんまばらになってきた															
☆	3,952			いい感じ、ぎふっぽい印象															
—	4,066			家も途切れた／バスの音、車の音が気になる	車道と山(林)に囲まれた一本道エリア	3	3	2	3	3	2	1							
↑	4,098	4,354		車道が近付いてくる															
—	4,272			木陰が途切れる															

被験者302

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	いまどきの住宅地エリア	4	3	2	4	2	2	1
—	104		川！！ひらけた								
☆	324		窓がかわった家《右》								
—	386		川がなくなった／両方すぐに家								
☆	558		下町、昔のイメージ								
—	624		道はばが広がった／庭つきの家多い								
☆	784		△の屋根の家《右》								
—	946		そうぞうしい、車多い	宿泊街	4	2	4	3	2	4	2
}	946	1,034	店ポツポツ出現／バス案内のおじさん								
—	1,060		店、宿がたくさん見える、高級／他県の車、観光地のイメージ全開								
—	1,244		人が多い、音楽(ミスチル！！)流れてる店ある、にぎやか／おみやげやさんみえてくる／一般								
☆	1,360		つりしてるおじさん《右》								
—	1,482		《記録なし》	おみやげやさんエリア、ごみごみした感じ	4	4	3	5	2	4	4
☆	1,482		カメラっ子多い、名所感《右》								
—	1,514		おみやげ通り、試食登場／ザ・観光地のド中心感いっぱい								
—	1,762		おみやげやさん減で少し落ち着いた雰囲気／寺の緑がさわやか								
—	1,900		お食事処があらわれる、また少しにぎわい								
—	1,992		おみせ通り終了、民家、再びおちつき、でも車多い	ちょっとさびれたエリア	3	4	2	3	3	4	2
}	1,992	2,080	主張しすぎない家、家がみせ、みせが家								
☆	2,070		taiwa！！CMの！！《右》								
—	2,090		家ばかりに／人も車も減、静	ひと昔前の住宅地	3	3	2	2	3	4	1
☆	2,332		小学校が、小学校つぼくはない門《右》								
—	2,548		お寺、木、山が見えて純日本的雰囲気。古い家、木造。								
☆	2,598		おせんこうのにおい《左》								
—	2,744		家が減る／林のにおい、ひんやり感がある	林エリア	5	5	5	2	3	2	1
☆	2,756		古い感じのてすり《左》								
—	2,874		田舎になった、たんぼ、山、ひらけてる、のどか	田舎エリア	5	3	4	3	2	2	1
—	3,004		お金もちそうな雰囲気／かまへのしっかりした家、でも新しい	田舎の高級住宅エリア	4	4	4	2	4	4	1
☆	3,342		かやぶきの家がみえる。タイムスリップ《右》								
—	3,442		つくられた感／店／静か／店に統一感	めざせ観光地エリア、がんばりがみえる	5	5	3	3	4	4	1
—	3,582		すずしい／ひだっぽいイメージ	ぎふ(ひだ)エリア、のぼり坂&おみやげ屋エリア	5	5	4	4	4	1	3
☆	3,760		かやぶき「水」の字《右》								
—	3,926		タイムスリップした感じ／徒然草のイメージ	非現代エリア(日の出とともに起き、日の入りとともにねる)	5	5	5	3	4	2	1
☆	3,970		屋根にこけ、風流《左》								
—	4,076		道だけ	山ごえエリア	4	3	3	4	2	1	1

被験者303

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	静かな住宅街	4	1	3	3	1	2	5

被験者306

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	人通りのある和やかな雰囲気住宅街	4	4	3	4	2	3	1
☆	10		選挙の看板があって1週間前が思い出される								
}	38	70	ハイブリッド美術館周辺、緑が多くおちついた感じ								
}	106	182	虫の音+川の側ということでもリラックスできる雰囲気、静かだった								
☆	370		視界が開けて右手に山が見える								
}	378	494	住宅街、和やかな雰囲気だった								
↑	378	494	徐々に賑やかに								
☆	494		ライブ嵐山、ひとつの建物に飲食店、公文、衣料品店があり、インパクトが大きかった。《左》								
☆	560		やき鳥屋 源、つい立ち寄ってしまいたくなるロケーションだった								
}	574	938	閑静な住宅街、人もまばら、寂しい雰囲気	寂しい雰囲気の住宅街	1	3	1	1	4	1	1
☆	868		集合住宅？古い旅館？みたいな建物が目についた《左》								
—	942		突然交通量が増えた	交通量が多く、賑やかなエリア	2	3	4	3	3	4	3
}	942	1,204	狭い通りを大型バスが通り危険な箇所が多く感じた。								
↑	942	1,204	住宅街から一転、店が増え、賑やかな雰囲気に								
—	1,204		《記録なし》	様々な店が軒を連ねる華やかな観光名所エリア	5	4	5	4	2	5	4
☆	1,238		宇多田ヒカルの“Flavor of Life”オルゴールver.も良い感じだった。								
—	1,326		一気に華やかな雰囲気に								
☆	1,326		屋形船などが見えてくる								
}	1,368	1,486	嵐山の自然を存分に味わえた／左手に山の雄大なパノラマ／川のせせらぎも心地良い								
}	1,508	1,690	両側にみやげ物屋、飲食店が立ち並び、まさに「観光地」といった雰囲気								
}	1,704	1,814	片側がお寺、片側がお店となり、少し落ちついた雰囲気に／風に揺れるのれんが京都らしさを演出していました。								
}	1,824	1,970	飲食店が立ち並びゆったりとした雰囲気に／「ソフトクリーム」「氷」の文字が多く見かけられ、涼しさを感じられた								
☆	1,956		豆腐ソフトを衝動買い《左》								
}	1,982	2,080	おしゃれな店が多く、洗練された感じ								
}	2,080	2,188	庶民的などこか懐かしい雰囲気	清涼寺を中心にまとまった、落ち着いたエリア	4	5	4	2	4	4	1
☆	2,192		Time'sマート、嵐山で2件目を発見、嵐山専門のチェーンか？								
}	2,200	2,530	セミの音が夏を感じさせる								
↑	2,200	2,530	徐々に落ち着いた雰囲気に								
☆	2,334		嵯峨小学校、歴史を感じる佇まいでした								
☆	2,416		鐘の音が聞こえてくる、何となく癒される／嵯峨釈迦堂がはっきりと視界に入ってくる								
}	2,538	2,706	寺の脇道は何となく落ち着いた雰囲気／セミの声と小鳥の鳴き声が絶妙のハーモニー「夏」だな～！！								
☆	2,570		「あぶり餅」の女性の看板がやたら目立つ／入り口がかなり怪しく入りにくい								
}	2,706	2,874	背の高い木々に囲まれ、天然のトンネル／セミの声、涼しい！！								
☆	2,728		前方に木のトンネルが見えてくる、涼しそう								
}	2,874	2,992	一気に田園風景、懐かしい雰囲気です。								
}	2,992	3,456	立派な豪邸が立ち並び、閑静な感じ／高級外車多数+レクサスも意外と多い／鳥、虫の音が心地良い／引き続き高級住宅街	洗練された高級住宅街エリア	3	4	3	1	4	3	1
—	3,338		一気に視界がひらける								
☆	3,338		右手に合掌造りまい家が見えて、気になる								
}	3,436	3,576	石畳の道になり、風情を感じる／歴史を感じさせる白塗りの店が多数／一見さんお断りのオーラを感じる	石畳の道を中心に歴史を感じさせるエリア	5	5	5	1	5	5	1
}	3,656	3,714	比較的庶民的な感じがした								
☆	3,742		道端にきれいな小川、犬が飛び込んでおり、涼しそう								
}	3,750	3,776	おちついた雰囲気の民家が並び、竹が生い茂り、いっそう涼しさを感じる								
☆	3,858		あじさいの花がキレイだった								
↑	3,890	4,100	徐々に自然(=山)に続いていく感じ／民家とのつながりが自然で途切れた感じはなかった(強いていえば、山に入ったところで、石畳⇒アスファルトになっているのはギャップを感じた)								
☆	3,956		苔むした屋根、風情を感じる《左》								
☆	3,968		苔むした屋根、風情を感じる《左》								
☆	3,996		苔むした屋根、風情を感じる《左》								
—	4,100		小鳥のさえずり、鈴虫の音で大変心地良い気分／「自然」を感じる	鳥、虫の音を中心に自然を感じさせるエリア	4	2	4	4	4	4	1
☆	4,268		果物のような甘い香りがした。桃かな？								
☆	4,338		愛宕寺の閑静な佇まいから、心が落ち着く								

被験者307

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	セキスイハウスの川・住宅地エリア	2	2	2	3	4	2	1

}	1,506	2,030	道路上を横断する電線がなく視界がきれい																
☆	1,596		美空ひばり館《左》																
—	1,652		土産屋がなくなり人が少し減って、左側に緑が多くなって少し静かになった																
☆	1,744		天竜寺に続く道が見えて視界が開ける感じがする《左》																
—	1,762		道路の両側に緑が多くなり、うるさいが落ち着いた雰囲気がある																
}	1,762	1,978	交通量はそこそこ多い																
—	1,978		お土産屋がまったくなくなって人が少なくなる																
—	2,060		道路上を横断する電線が出現	明るい住宅地	4	3	4	3	3	2	1								
—	2,082		住宅街のような雰囲気が出てくる																
—	2,216		小学校からの子供の声で住宅街だと感じる／また車の量が極端にへる																
☆	2,288		いい感じの木造住宅《右》																
—	2,350		正面に大きな門が見える																
}	2,350	2,538	人通りがほとんどない／車は時々通る																
☆	2,470		《記録なし》《左》																
—	2,538		《記録なし》	寂しい住宅街	4	3	3	2	3	3	1								
☆	2,546		《記録なし》《右》																
—	2,556		地面が普通のアスファルトじゃなくなる																
}	2,656	2,706	緑が多くて、少し涼しく感じる																
—	2,706		道幅が狭くなり、人も車もほとんどこない																
}	2,746	2,874	両側の木がうっそうとおおいげっていて暗い。涼しい																
—	2,928		前、左、右に建物がなく、空がよく見えてきれい。周りに田んぼがでてきて田舎のように感じる	寂しい住宅地	5	4	5	1	4	1	1								
☆	3,000		紅葉がきれい《右》																
—	3,004		人通り、交通量が増えて生活感が感じられる																
}	3,004	3,222	敷地の広い家が多く高級住宅街の雰囲気(高級車多い)																
}	3,240	3,322	人通り、交通量共にまばら、静か																
—	3,322		周囲が田畑だけになり、昔ながらのかやぶきの建て物も見え、田舎の雰囲気																
—	3,444		歴史的な雰囲気のため(道路や)町なみに変わった																
—	3,482		白・黒の街並み	伝統的木造住宅の多い道	5	5	5	4	4	5	1								
}	3,482	3,780	歴史的な建物が並び、静かで落ちついた雰囲気／人通り、車の流れはほとんどない																
☆	3,644		ひげだるま《右》																
—	3,668		左側に緑が多くなり、暗く感じる																
☆	3,760		かやぶきの家《右》																
—	3,780		橋が見える／割と現代風の建物増える																
}	3,900	3,970	歴史的建築多い																
—	3,954		《記録なし》	山道	5	5	3	4	5	2	1								
☆	3,954		屋根にコケがふいてきれい《左》																
}	3,970	4,010	鳥の鳴き声が心地よく和む／周囲に木々が多く、かなり涼しい																
—	4,010		周囲に木がととても多く、人通りはほとんどなく、少し不気味／車は時々通る／かなり静かで、涼しい																

被験者311

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	用水路のある静かな住宅地	4	3	2	3	3	4	2
☆	64		駐車場								
—	112		山が見える／用水路が流れて水の音がする								
—	196		道が細くなる								
—	266		民家の木が繁ってて陰ができてる／静かで、落ち着いた								
—	388		細い道になって、家が両側にたくさんある／前に山が見える	少し栄えてる住宅街	2	2	2	3	2	3	2
—	494		広い道に出て車が多く少し騒々しい								
☆	542		花に水をやってる人がいて生活感								
—	570		用水路の水の音								
—	624		壁のある家があり閉じられた感じが増える	京都らしい街並	4	3	3	3	4	4	3
—	698		一気に視界が切り開かれてすがすがしい感じ								
—	742		また家にはさまれる								
}	742	830	同じような街並								
↑	830	930	徐々に緑が減って庭のない家が多くなる								
}	918	930	左に雑木林	さわがしい大通り	1	1	1	2	1	1	2
—	930		交通量多くさわがしい								
—	952		車の量が増えて人にもよく会う	京都らしい街並	4	3	3	3	4	4	3
↑	952	1,064	基本今までと同じ街並だけど、だんだん山が広く見えてくる								
}	1,064	1,182	食べ物屋や飲み屋が増えて今までの住宅街とは異なる感じ／人や車が多くにぎわっているが落ちついてる	京都っぽい観光地	3	5	4	3	5	5	4
—	1,216		超高級そうな料亭があって周りの雰囲気も高級感ある。落ちついた感じ／みやげ屋のオルゴールの音	にぎわう観光地	3	4	4	4	3	5	5
—	1,240		広場があって大勢の人が集う／ゆかたの人も多くて夏らしい感じ								
—	1,280		左側にカヌーしてる人、その奥は山で自然があふれる								
—	1,298		みやげ屋がとて多くの観光客でにぎわってる／排気ガスの臭いが大きい／右側も広い川で自然が多く気持ちいい								
}	1,728	1,968	左側は庭園では見えないけど緑が多い／古い建物がよく落ちつい	京都らしい少し静かな店通り	4	3	4	3	4	5	3

—	860		RCのビルが見える／車も増、バス																
—	882		《記録なし》																
☆	882		アパート？旅館？《左》																
}	926	990	高さが2階建て以上																
—	990		高さ低くなる／新規分譲地、アパートなど一区画の土地面積広く																
—	1,046		《記録なし》																
☆	1,046		法輪寺																
—	1,178		川が見える、旅館など増、車も増																
—	1,230		渡月橋見える／タクシー、人／観光地の雰囲気／オルゴールの音うるさい																
—	1,310		視界開ける																
—	1,496		商店、新しい素材、うそくさい																
}	1,496	1,692	商業丸出しの空気に嫌悪感																
—	1,724		天竜寺で雰囲気落ち着く																
—	1,924		歩道なくなり、人も少しへる／飲食系																
—	2,058		一般の民家に、商から住に																
☆	2,196		丸太町通りで視界開ける																
—	2,214		民家古く、本物																
☆	2,238		小学校《右》																
☆	2,312		清涼寺の門が見える、が、あまり参道のイメージなし																
—	2,550		家の格上げ、植栽など																
—	2,660		車の気配なくなる／境内の植栽と壁																
—	2,702		森林風																
}	2,758	2,868	木が茂ってうっそうとした感じ																
—	2,868		視界が開ける／田んぼなど、田園																
—	2,994		住宅に																
}	3,050	3,326	石垣多し／1区画の土地面積大／比較的新しい家あり(左側)／前庭、門、セットバック																
—	3,226		視界開ける／山際																
—	3,478		白壁、黒の木／伝建の雰囲気／民家規模縮小／商店／道に面して家																
—	3,742		民家に／木材が本物の古さ																
☆	3,900		かやぶき																
—	3,920		鳥居が見える、参道																
☆	4,006		鳥居																
—	4,018		山道へ変化																
—	4,070		グレーのアスファルトへ／伝建というよりただの山道																

被験者324

種別	始点	終点	様相表現	領域表現	A	B	C	D	E	F	G
—	0		《記録なし》	全体的に割と静かな住宅地	4	4	3	2	4	5	1
—	14		駅前には人がたくさんいたけれど急に少なくなる								
☆	52		美術館								
—	102		景色が開ける、前方には山が見える								
—	118		駐車場がなくなり、住宅街へ／川がいい感じに流れている								
—	184		道が狭くなり、静か								
☆	300		新築の家、周りの家と雰囲気が全然違う								
—	386		背景に山が見えているのがきれい、アイストップ？山あて？								
}	398	484	この辺の家は純和風な外観／前方には大きな通りがあり、車も多い								
↑	398	484	だんだんと現代風に								
—	500		急に店が多くなり、にぎやか	商店街	2	4	2	5	2	1	1
—	556		川が直線的で見通しがよい								
—	596		道も狭くなり、再び落ち着いた住宅街へ	住宅が並んでいた	4	4	3	3	3	2	1
—	622		と思いきや、道が広くなり車が多い								
☆	708		西光院								
☆	808		住宅が並んでいる中に駐車場があるのが気になる								
☆	872		嵯峨亭								
—	944		車通りが多くなる／店も多くなる／にぎやかに								
—	1,046		開けた場所に出る	京都の観光地らしい、人がかなり多かった	2	4	5	5	2	5	4
—	1,102		料理屋が並ぶ／人も多くなる								
—	1,230		渡月橋に近付き、お土産店が多くなる／観光地な雰囲気／人はかなり多い								
☆	1,338		渡月橋／山と川がきれい								
—	1,508		店ばかりに、観光地らしい								
↑	1,524	1,756	だんだんと店が減っていく								
☆	1,742		天龍寺								
—	1,766		この辺から急に店が途切れて人通りも減る	観光地から普通の場所へと変化	2	2	2	4	1	1	1
—	1,840		また店が増える								
☆	1,968		踏み切りが見える								
—	2,104		人通りが減った気がする／店もお土産とかじゃなく普通の店に変わってきてる								
—	2,220		店とかがなくなる／でも車の量は多い	《記録なし》	4	4	3	4	4	4	1

		の足音しかきこえない。									
—	4,120	空を木でおおっていたのがなくなり明るくなる。	山道	5	5	4	4	3	3	1	

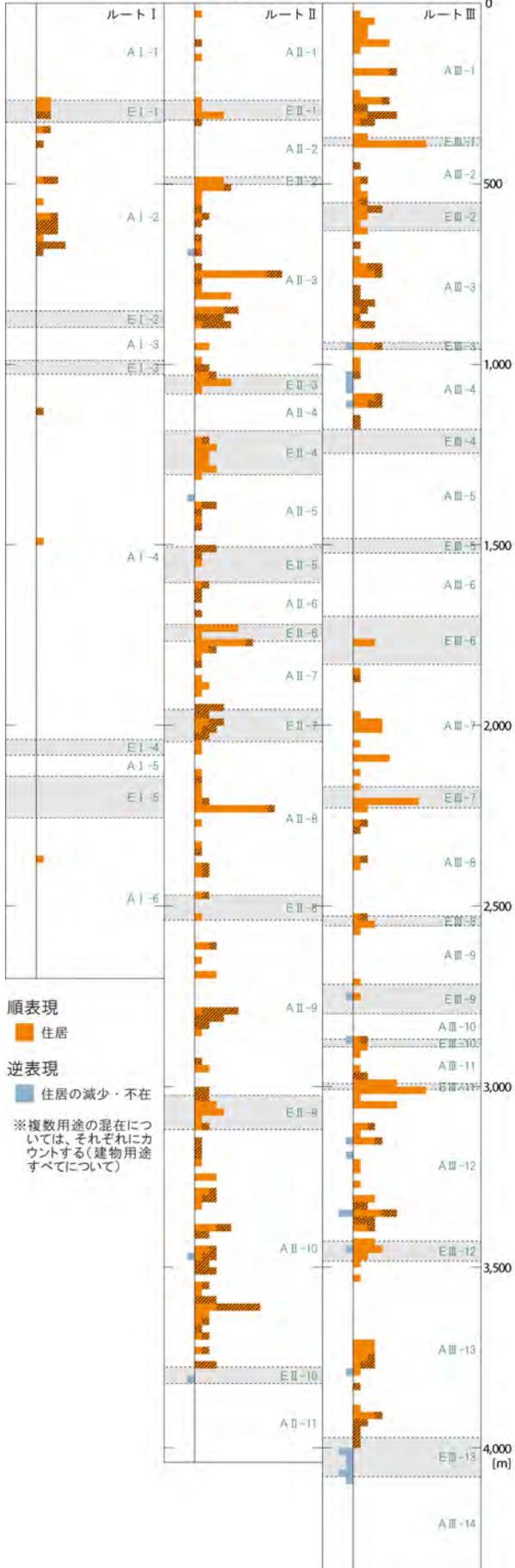
Appendix-C 様相表現プロットグラフ

全様相因子（下表）についての、様相表現プロットグラフを掲載する。なおグラフの見方については4.5に詳述している。

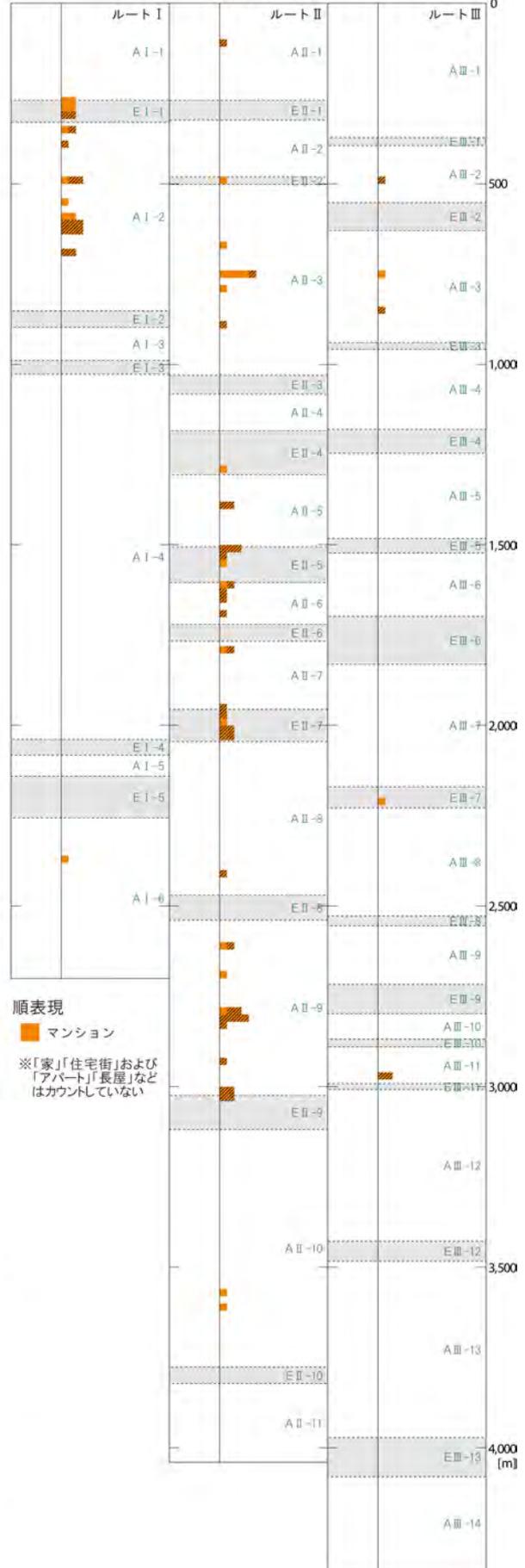
大分類	番号	様相因子名	順表現の内容	
視覚	群建物	[1] 住居	ある・多い・増加	
		[2] マンション	ある・多い・増加	
		[3] 店舗	ある・多い・増加	
		[4] 観光	ある・多い・増加	
		[5] 業務	ある・多い・増加	
		[6] 茶道	ある・多い・増加	
		単体建物	[7] 寺社・境内	ある・多い・増加
			[8] 教育施設	ある・多い・増加
			[9] 駅	ある・多い・増加
			[10] デパート	ある・多い・増加
			[11] その他単体建物	ある・多い・増加
	建物の属性	[12] 建物のスケール	大きい	
		[13] 建物の素材	伝統素材	
		[14] 建物のデザイン	和風・町家	
		[15] 建物の色彩	無彩色	
		[16] 建物の年代	古い	
		[17] 建物の密度	高い	
		[18] 建物の立ち方	記録あり	
		[19] 建物の付属物	ある・多い・増加	
		[20] 建物内部の様子	オープン	
		人車	[21] 人の数	ある・多い・増加
	[22] 観光客・外国人		ある・多い・増加	
	[23] 子ども		ある・多い・増加	
	[24] 学生		ある・多い・増加	
	[25] 人の行動		記録あり	
	その他沿道の要素	[26] 車の数	ある・多い・増加	
		[27] 空地	ある・多い・増加	
		[28] 塀・壁	ある・多い・増加	
		[29] サイン	ある・多い・増加	
		[30] 工事	ある・多い・増加	
		[31] 駐輪	ある・多い・増加	
		[32] その他沿道の人工物	ある・多い・増加	
		[33] 沿道の植物	ある・多い・増加	
		[34] 沿道の生物	ある・多い・増加	
		[35] 川・水路	ある・多い・増加	
		[36] その他沿道の地形	ある・多い・増加	
	上	[37] 空	見える	
	下	[38] アーケード	ある・多い・増加	
		[39] 街路の幅	太い	
		[40] 街路の色彩・テクスチャ	アスファルト以外	
		[41] 街路の勾配	ある・多い・増加	
		[42] 街路の形態	記録あり	
		[43] その他ルート上の街路について	記録あり	
		[44] 交差する街路について	記録あり	

大分類	番号	様相因子名	順表現の内容
視覚	全体・遠方	[45] 明るさ・陰影	明るい
		[46] 空間の広さ・開放感	開放的
聴覚	[47] 視界・見通し	ある・多い・増加	
	[48] 前方の寺社	見える	
	[49] 遠方の山や森	見える	
	[50] 音環境	静か	
	[51] 人の声	記録あり	
嗅覚	[52] 人工的な音	記録あり	
	[53] 自然の音	記録あり	
触覚	[54] 人工的なにおい・空気質	いいにおい	
	[55] 自然のにおい	記録あり	
印象	[56] 気温	涼しい	
	[57] 風	ある・強まる	
その他	[58] 好み	好ましい・美しい	
	[59] 統一性	統一性がある	
	[60] 普通さ	普通・特徴がない	
	[61] 調和・特異	調和している	
	[62] 楽しさ・賑わい	楽しい	
	[63] 落ち着き・風情	落ち着きがある	
	[64] 都市性	都市的	
	[65] 中心性	中心的	
	[66] 日本らしさ	日本らしい	
	[67] 京都らしさ	京都らしい	
	[68] 地域らしさ	その地域らしい	
[69] いかにも	いかにも○○だ		
[70] グレード	高級		
[71] 生活感	生活感がある		
[72] 親しみ	親しみがある		
[73] 裏	裏的だ		
[74] 歩きやすさ	歩きやすい		
[75] 固有名詞(場所)	記録あり		
[76] 固有名詞(建物)	記録あり		
[77] 街路の左右の比較	左右が同じ		
[78] 街路のサイド	記録あり		

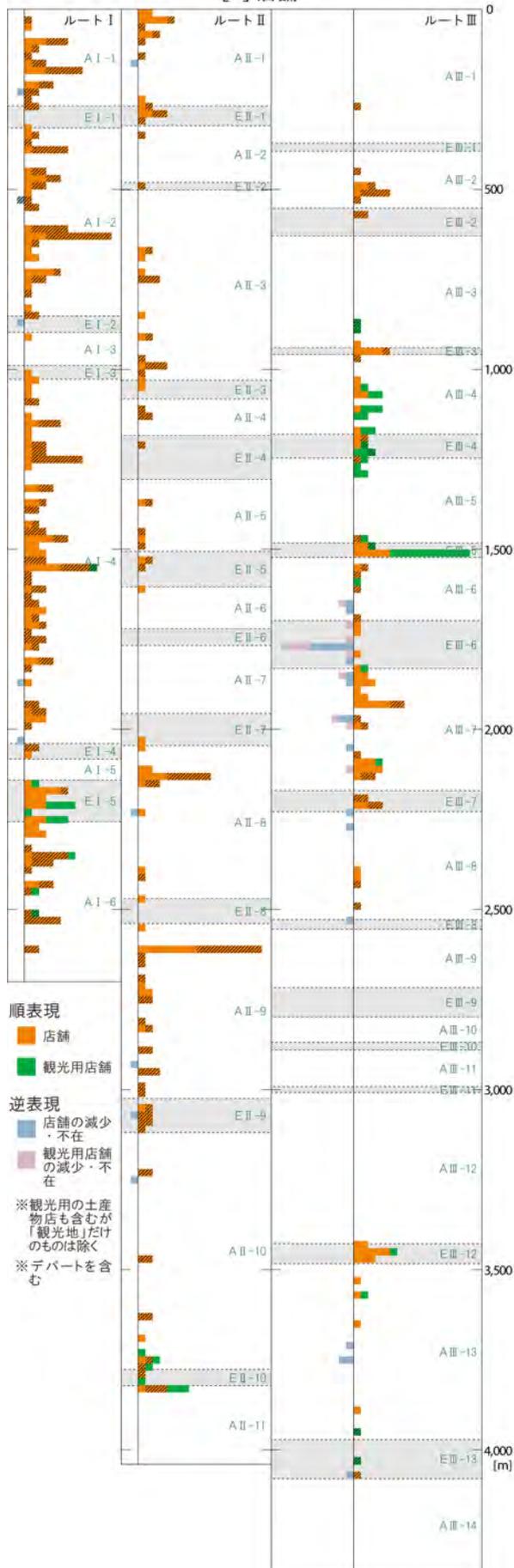
[1] 住居



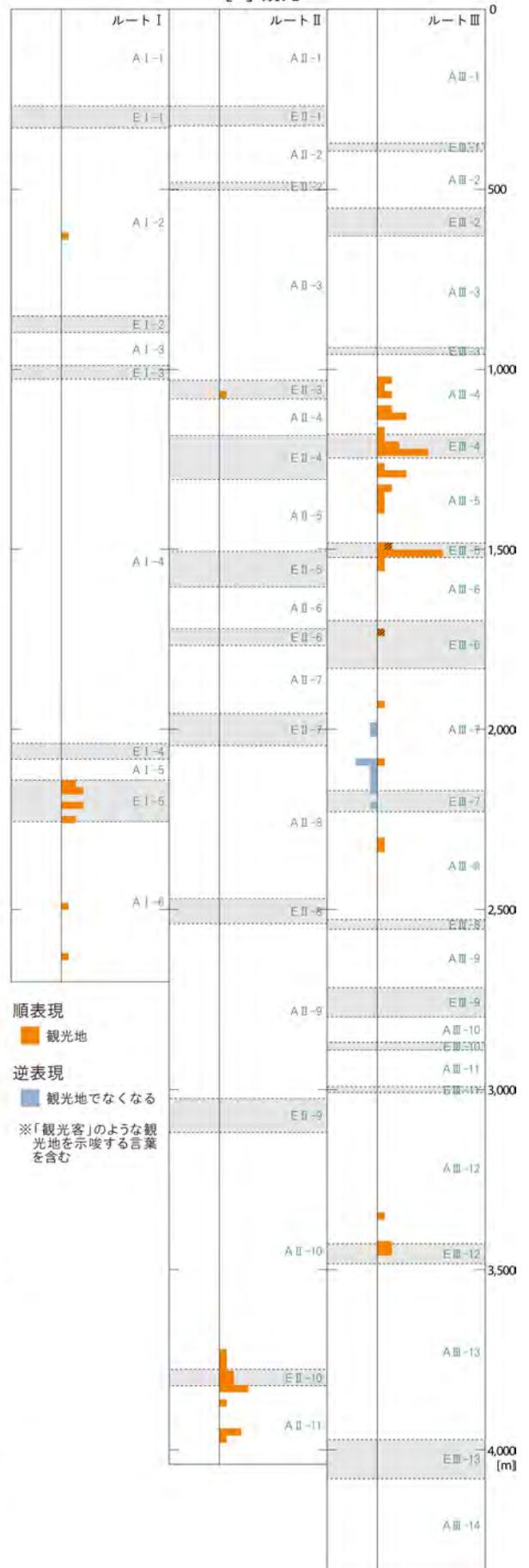
[2] マンション



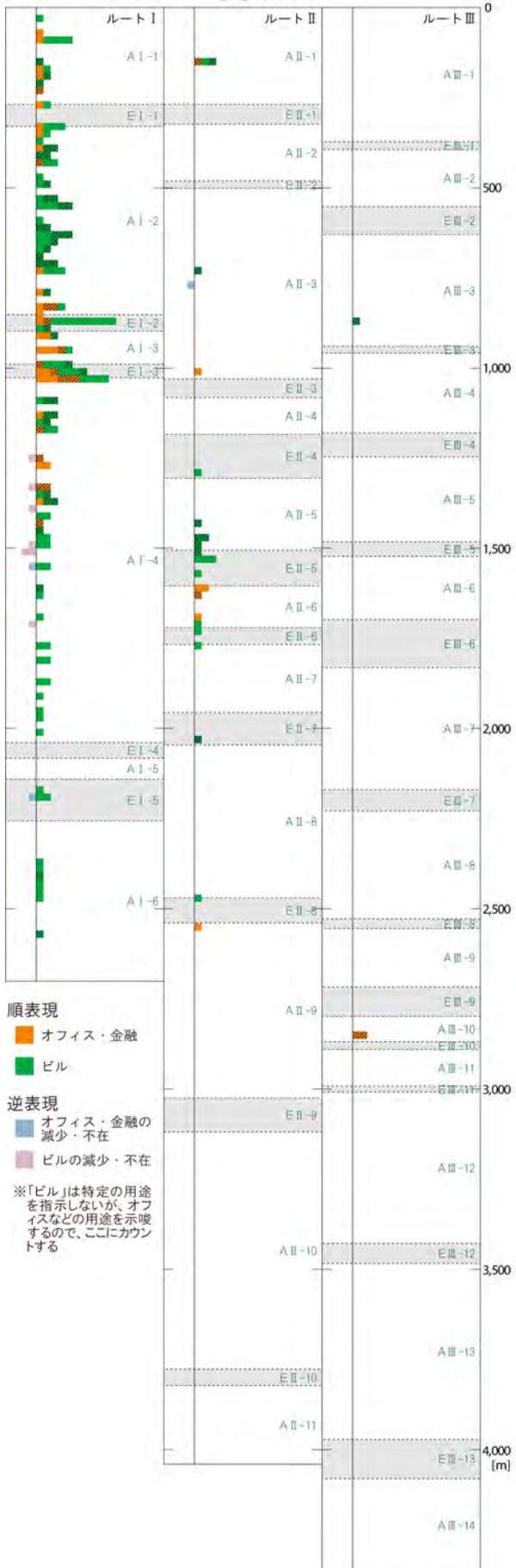
[3] 店舗



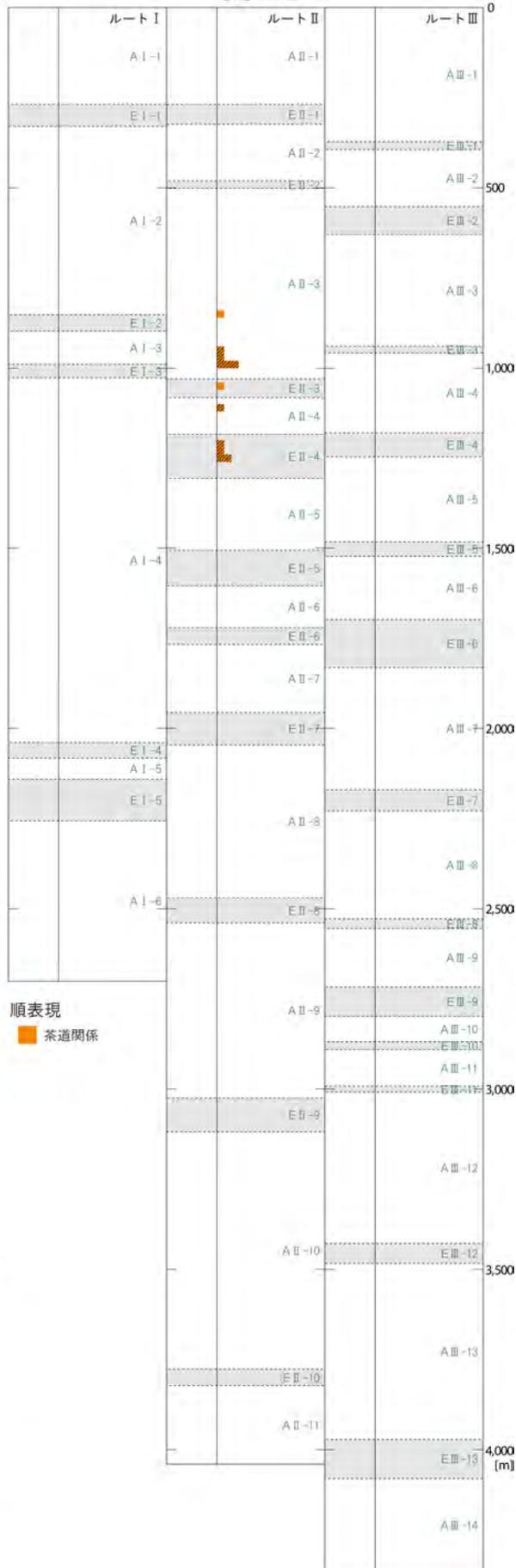
[4] 観光



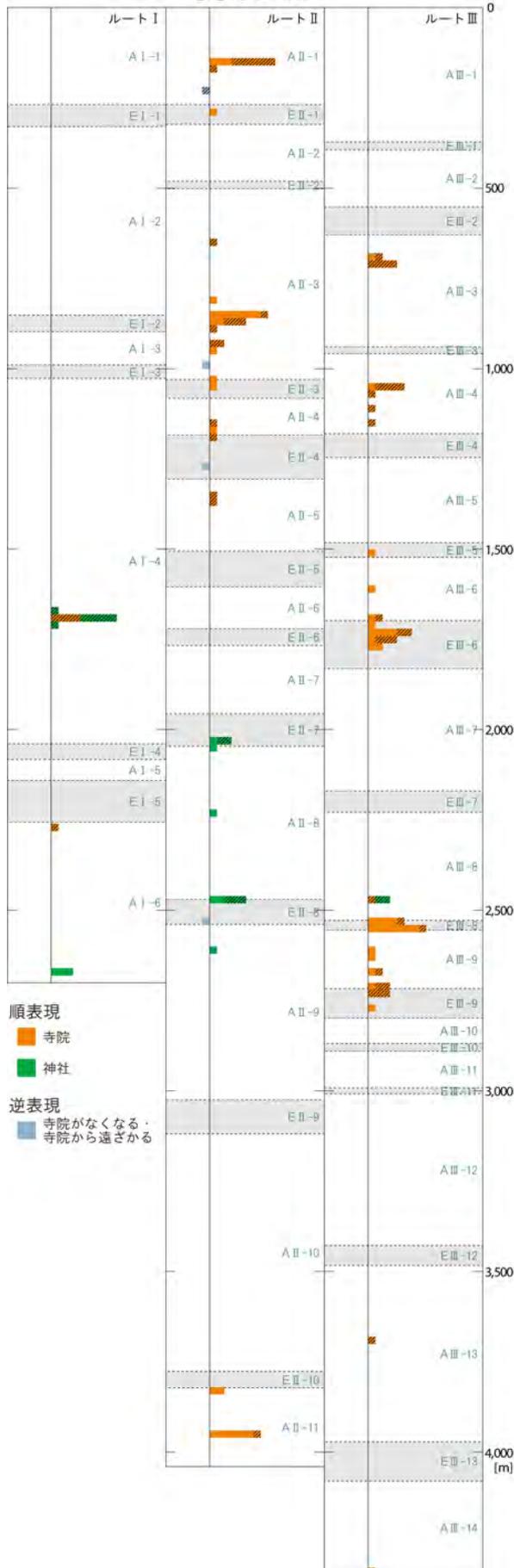
[5] 業務



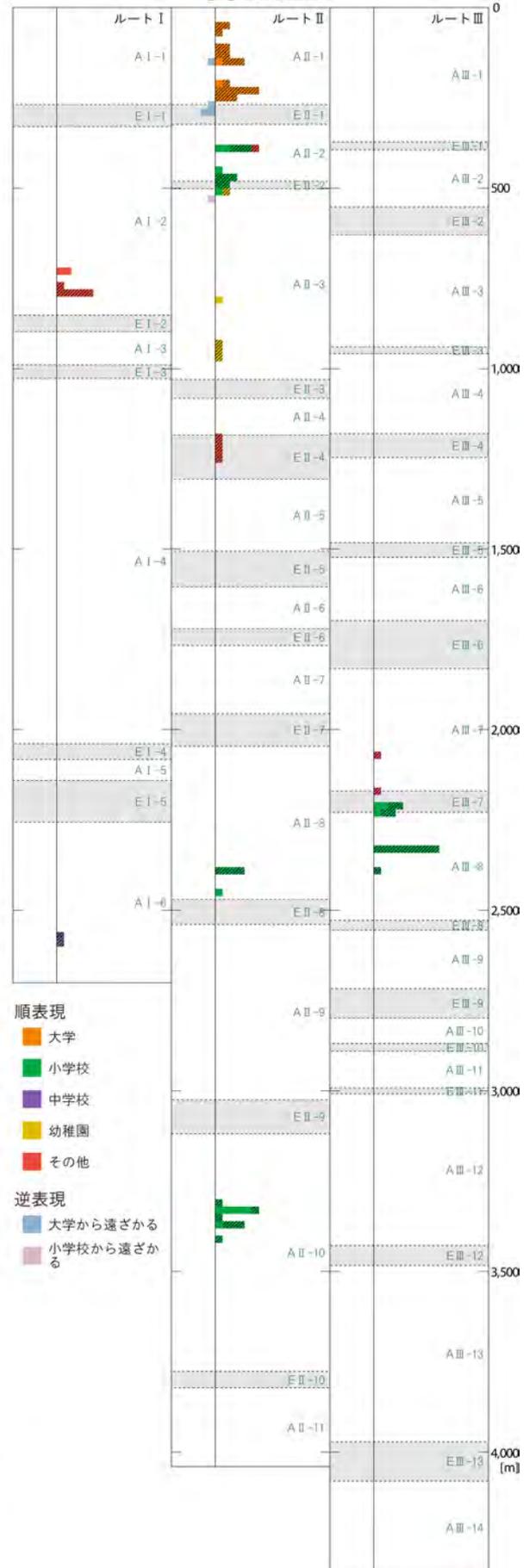
[6] 茶道



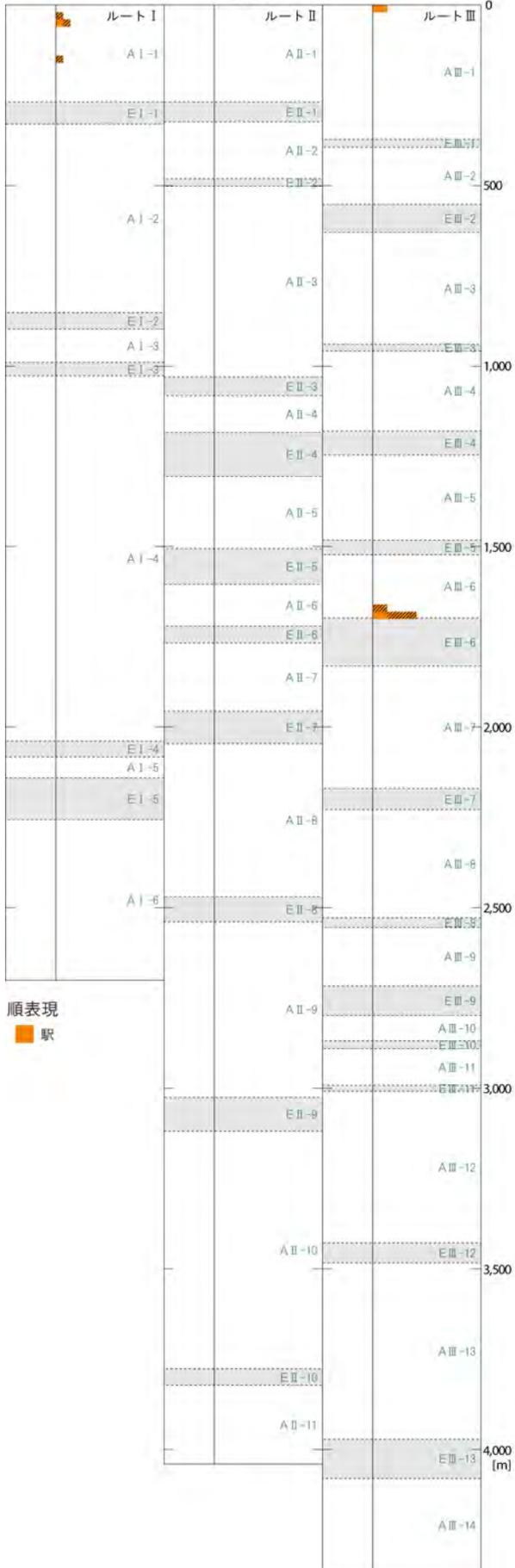
[7] 寺社・境内



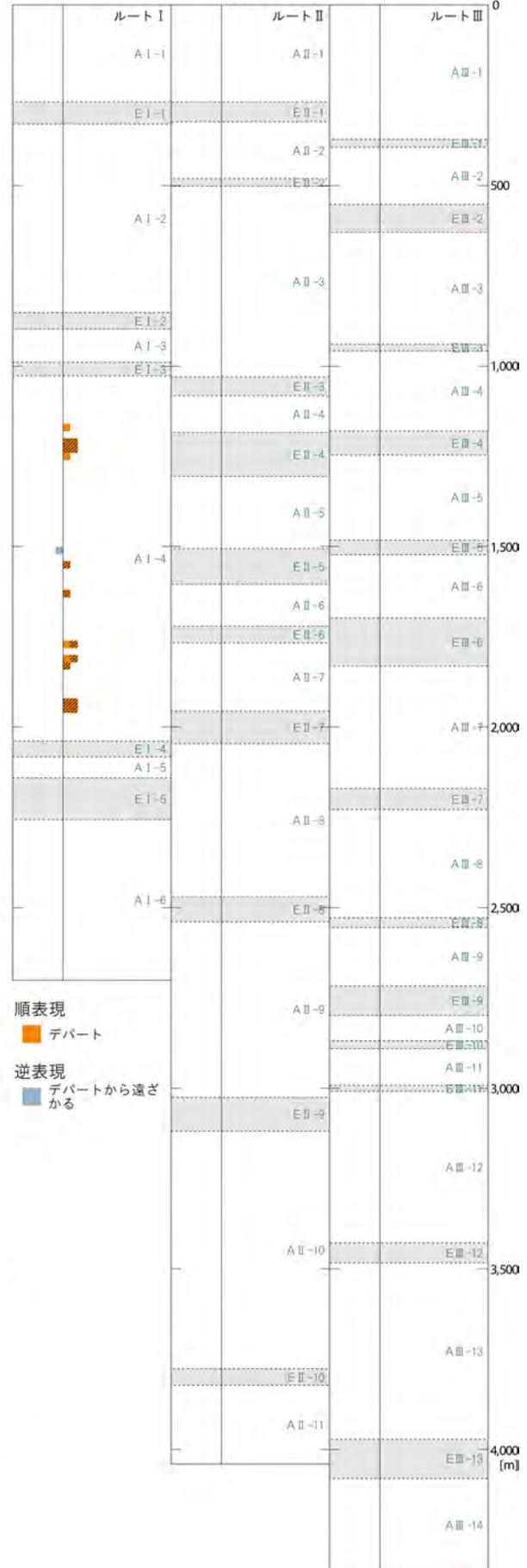
[8] 教育施設



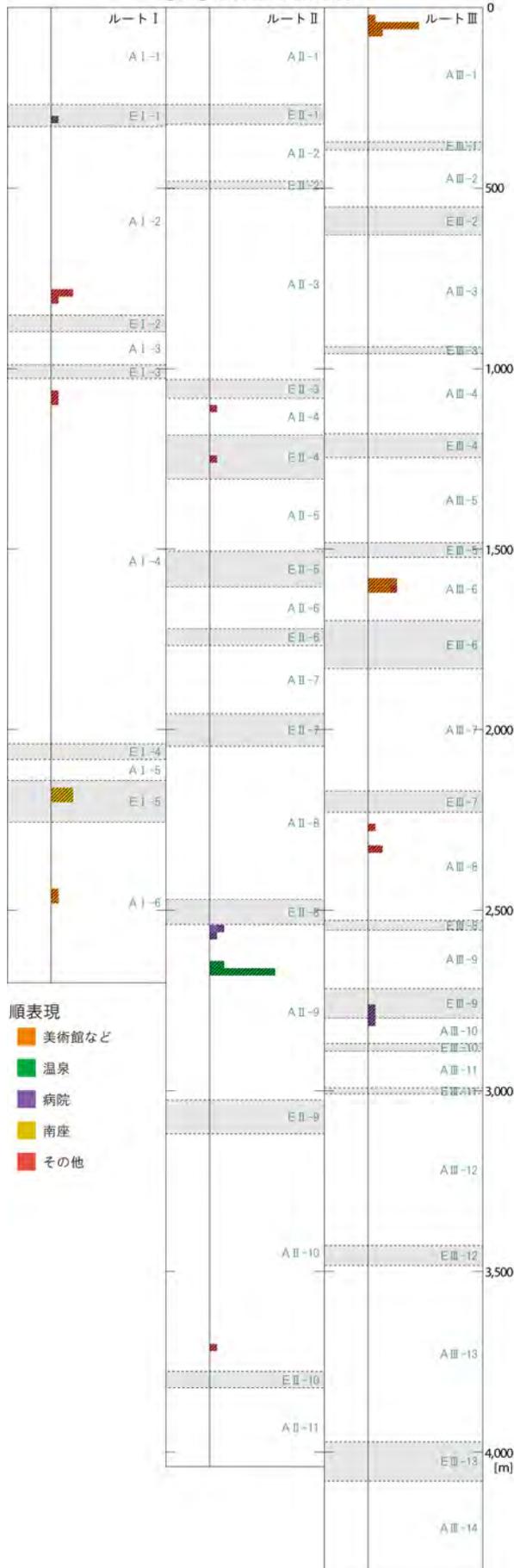
[9] 駅



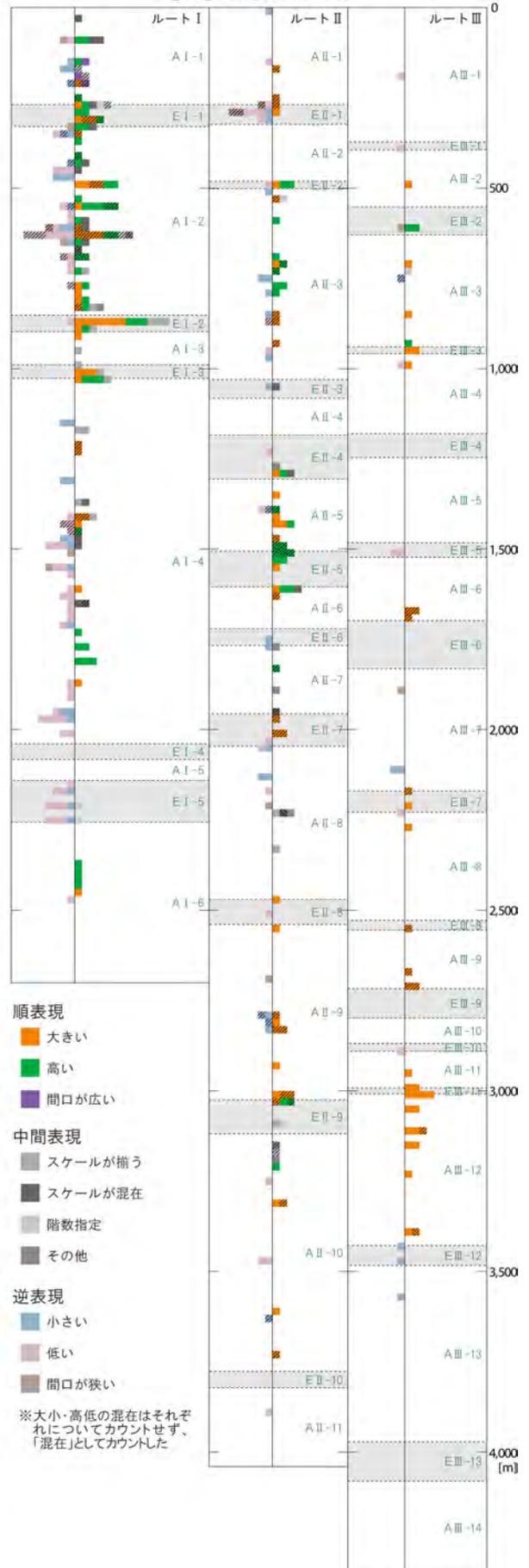
[10] デパート



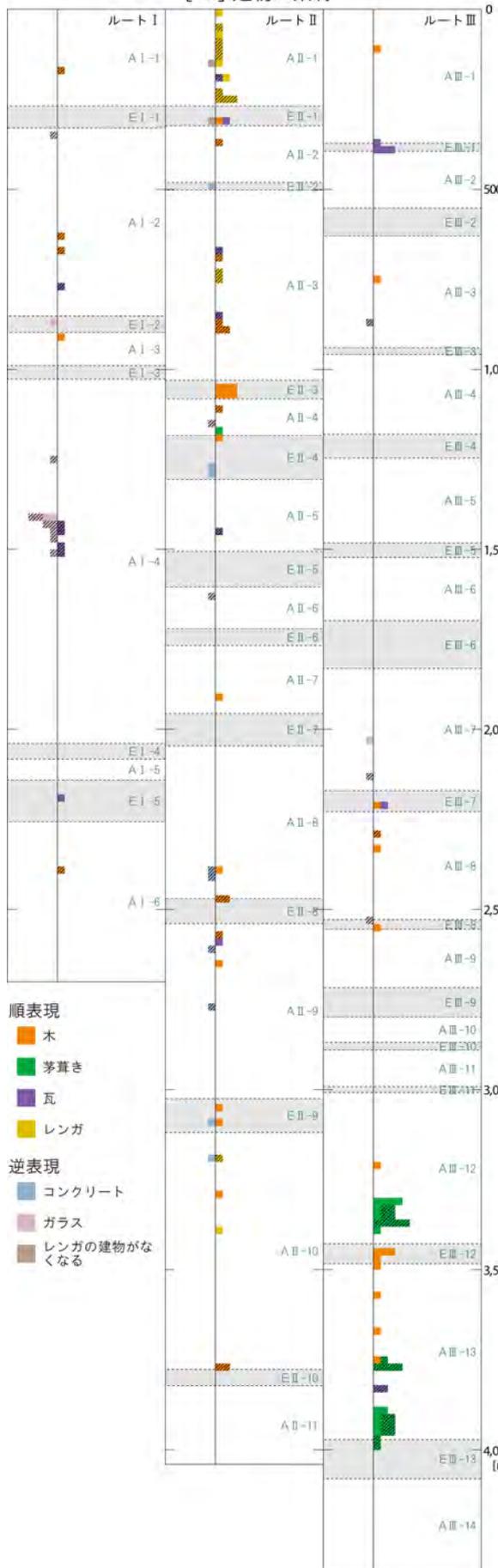
[11] その他単体建物



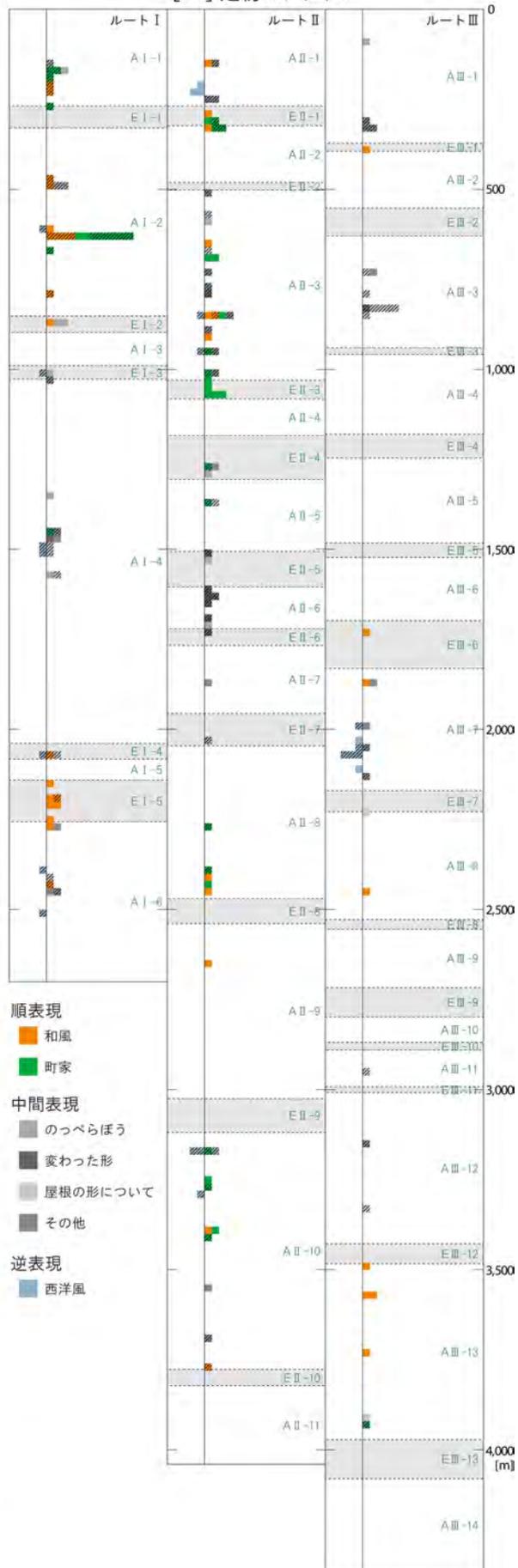
[12] 建物のスケール



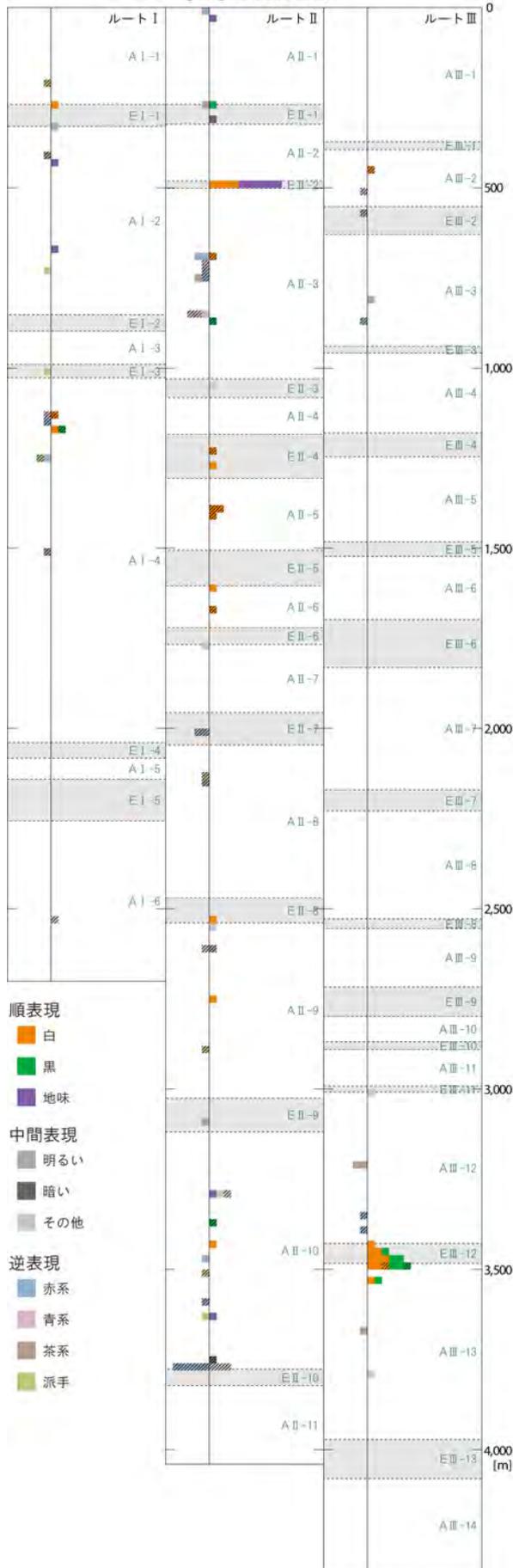
[13] 建物の素材



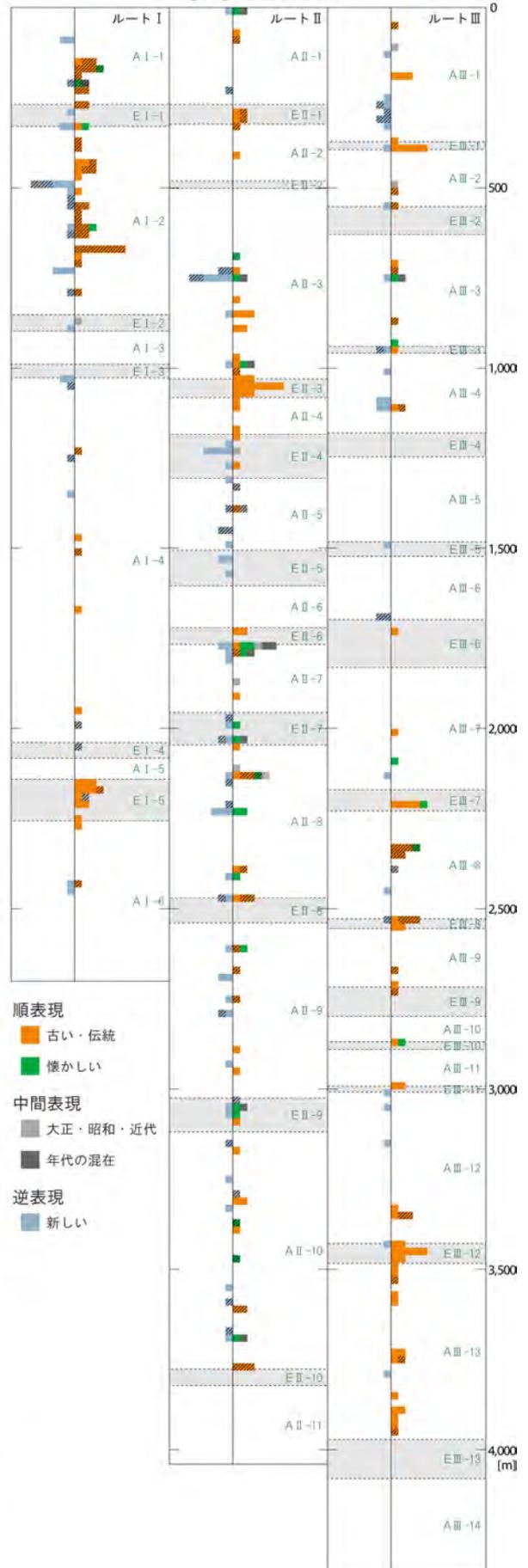
[14] 建物のデザイン



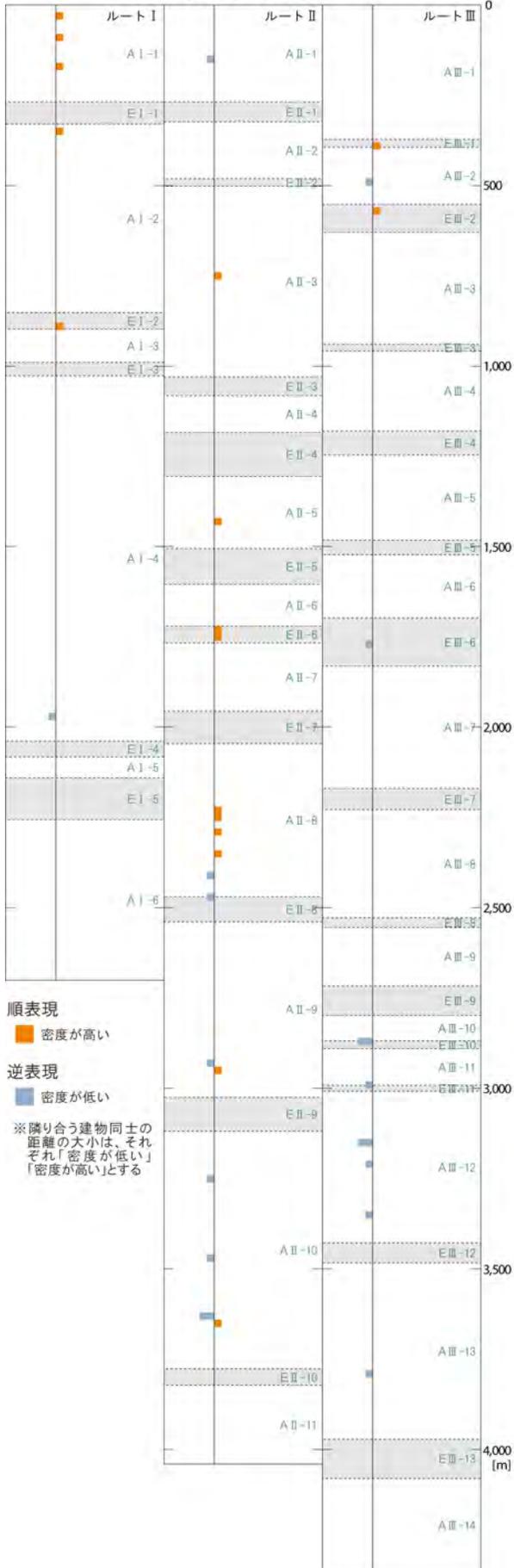
[15] 建物の色彩



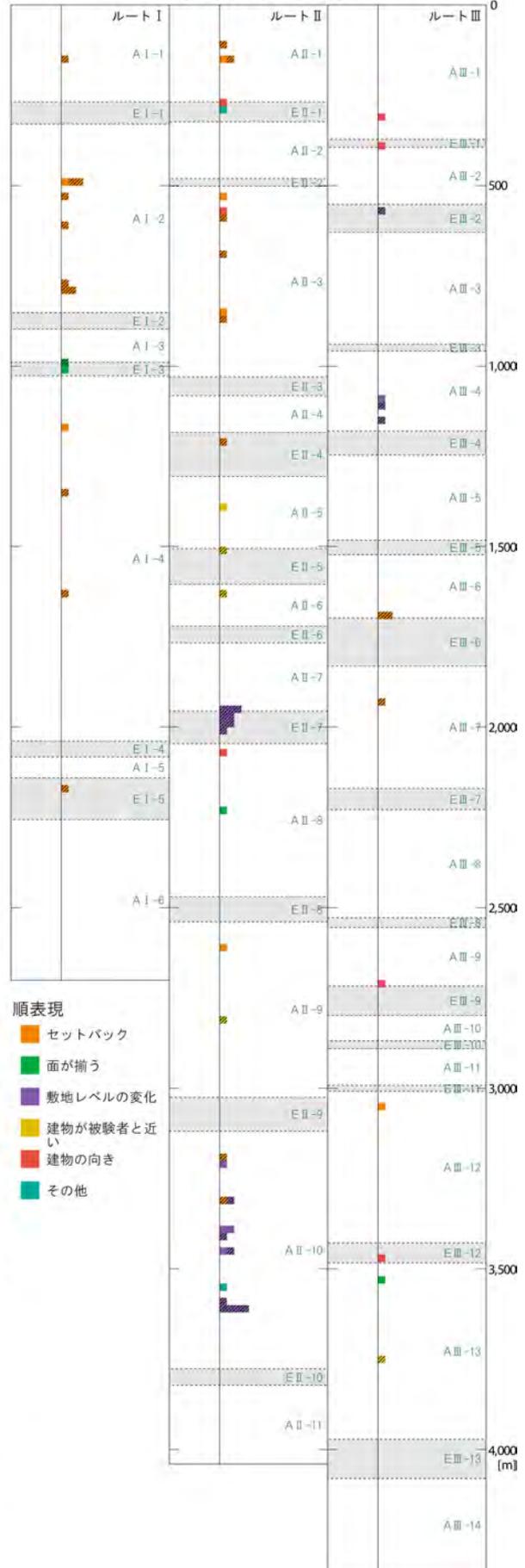
[16] 建物の年代



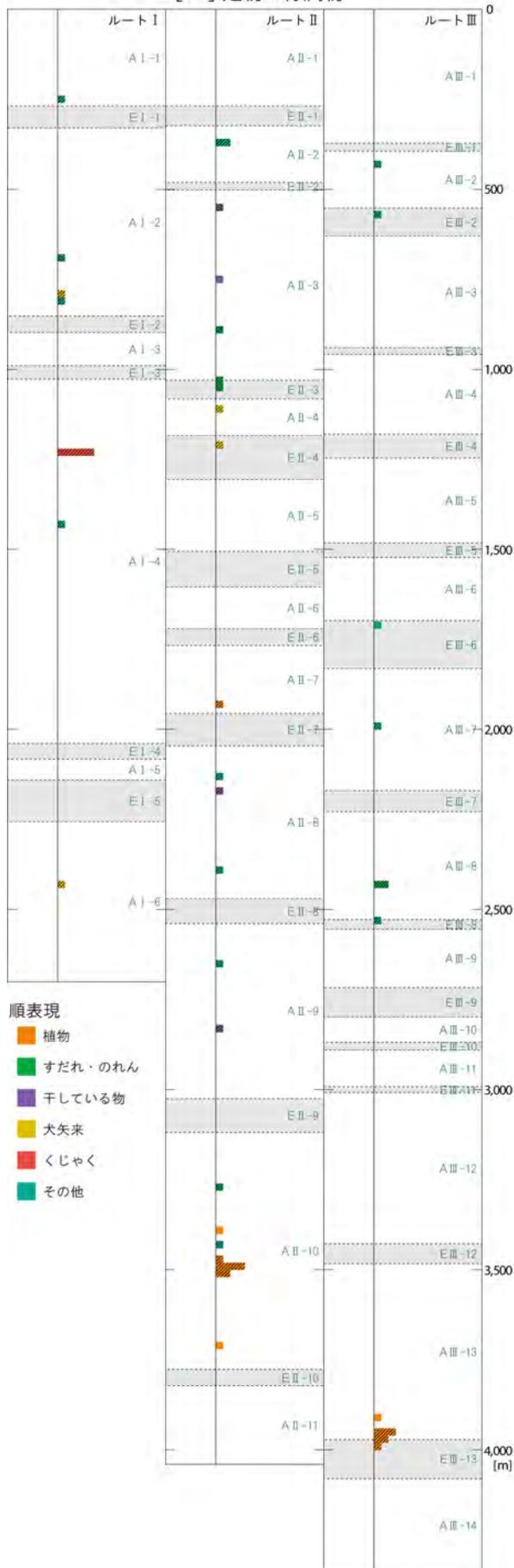
[17] 建物の密度



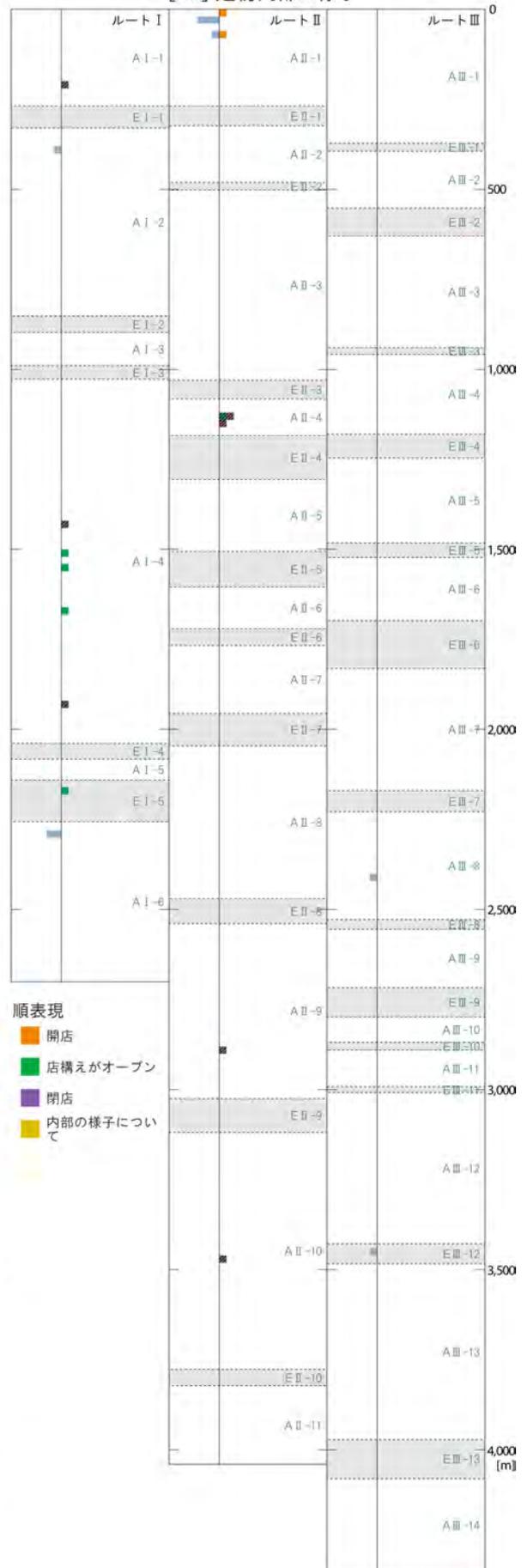
[18] 建物の立ち方



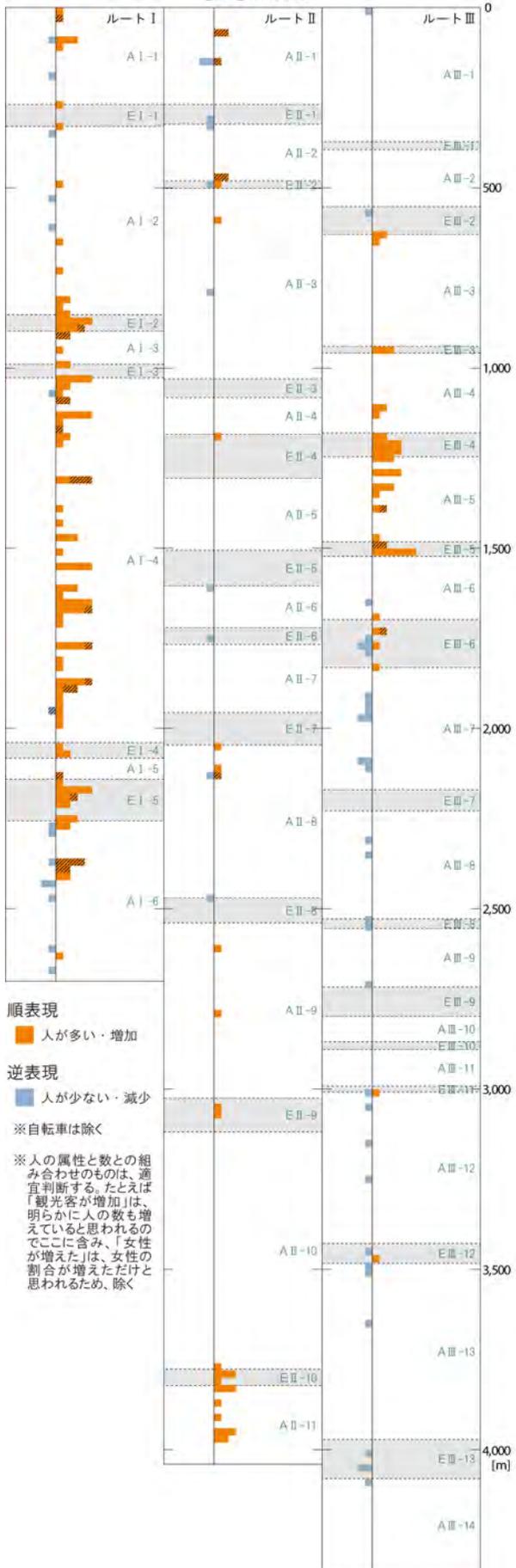
[19] 建物の付属物



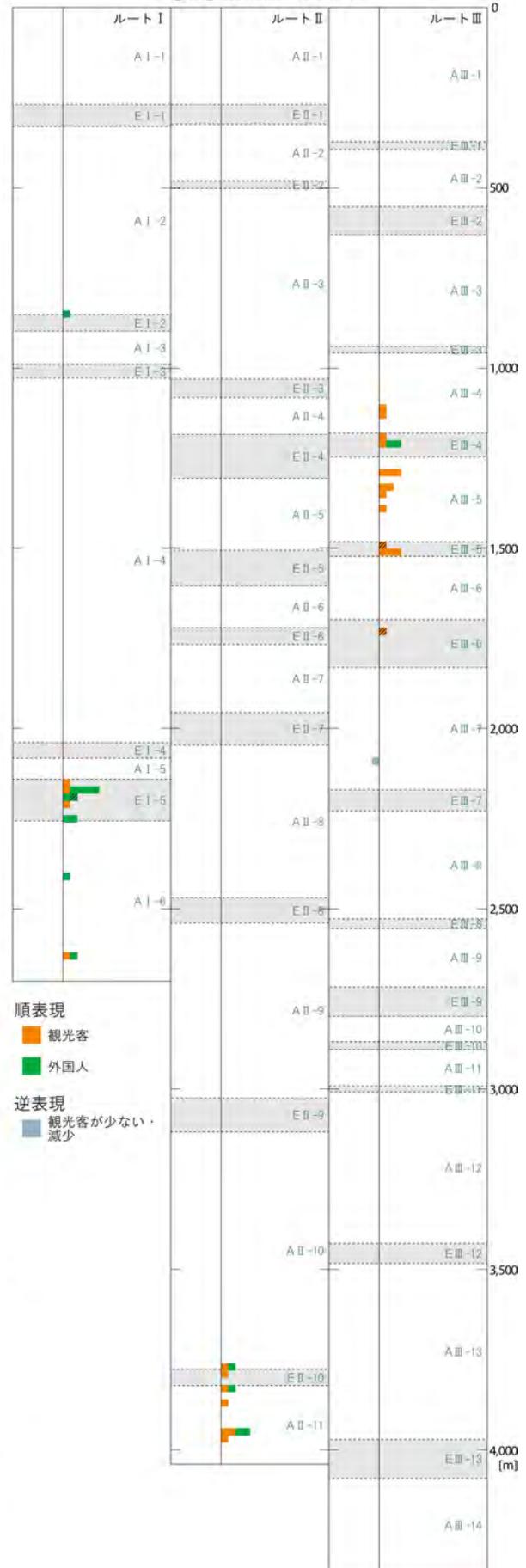
[20] 建物内部の様子



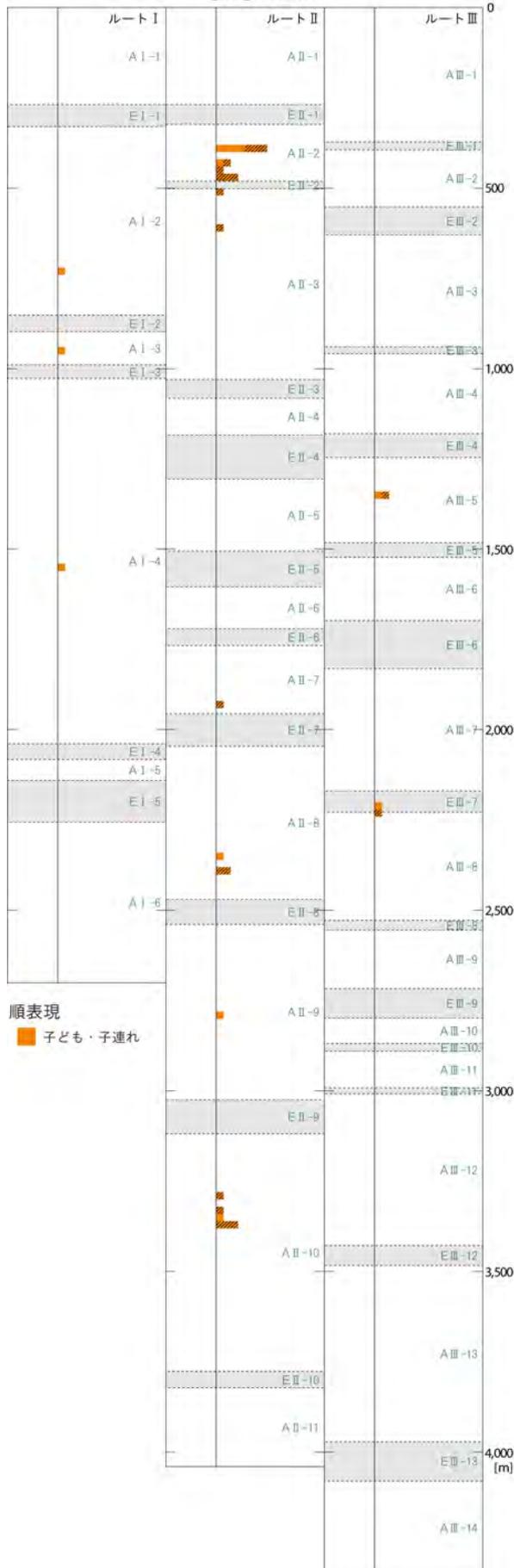
[21] 人の数



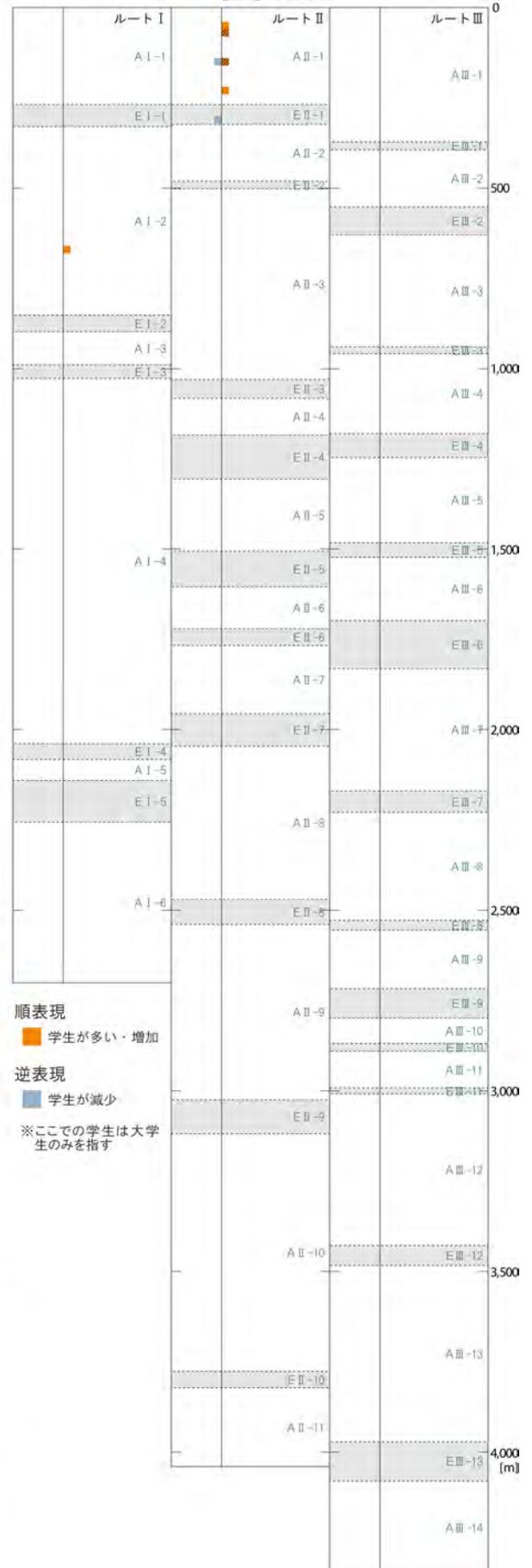
[22] 観光客・外国人



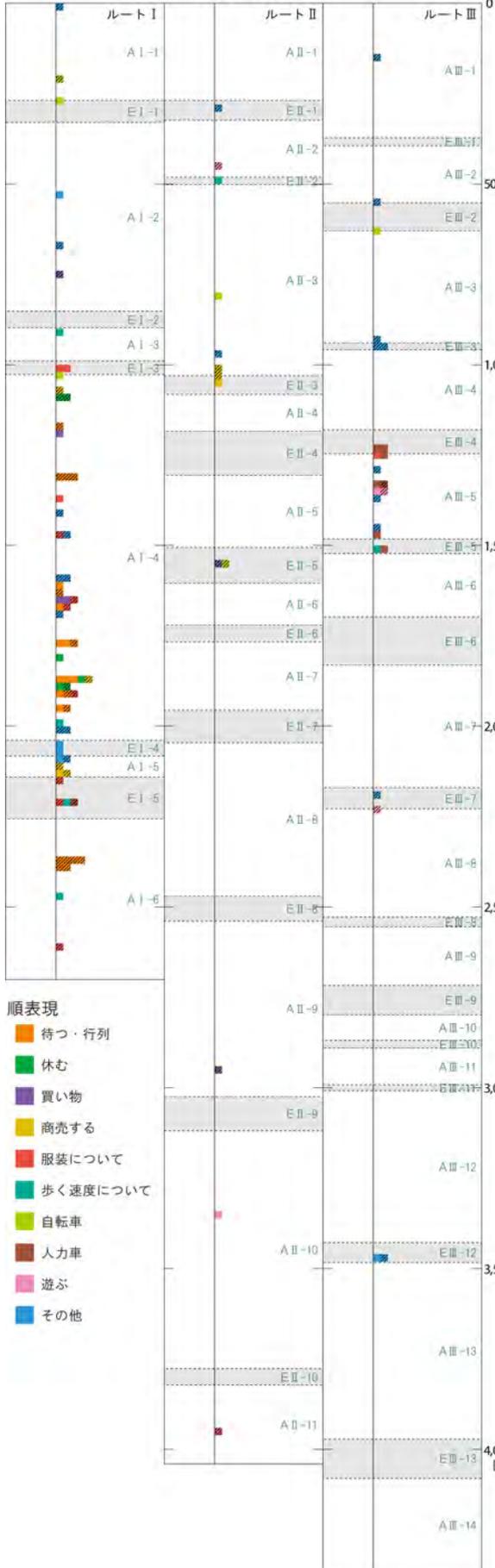
[23] 子ども



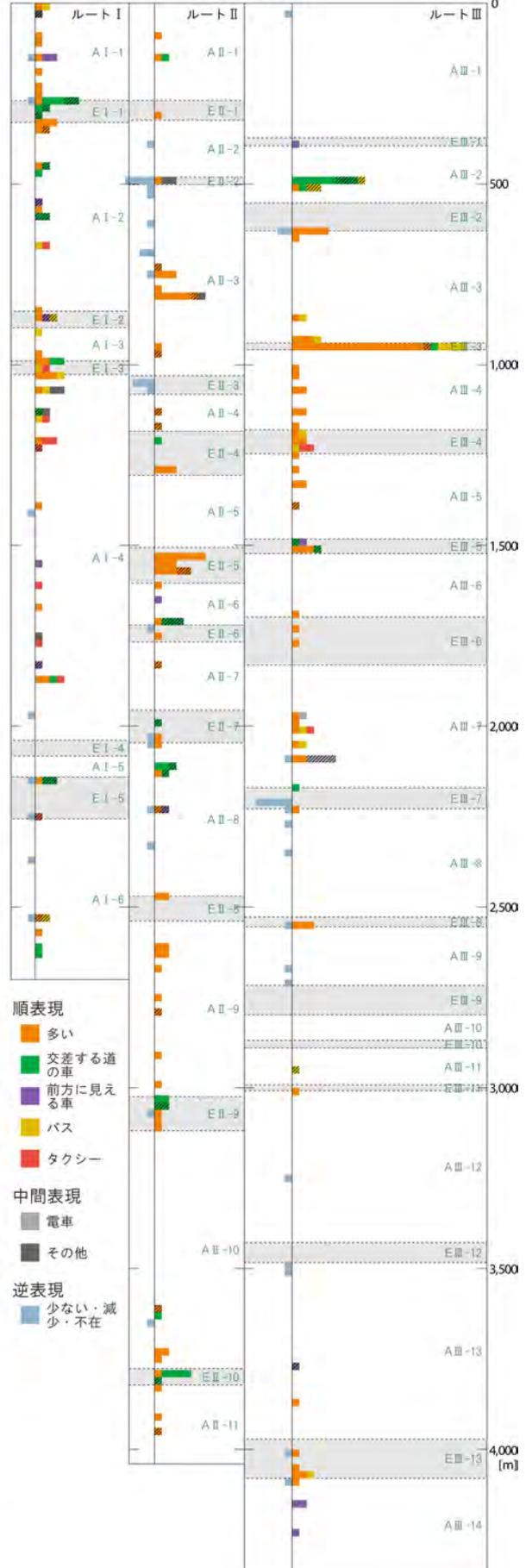
[24] 学生



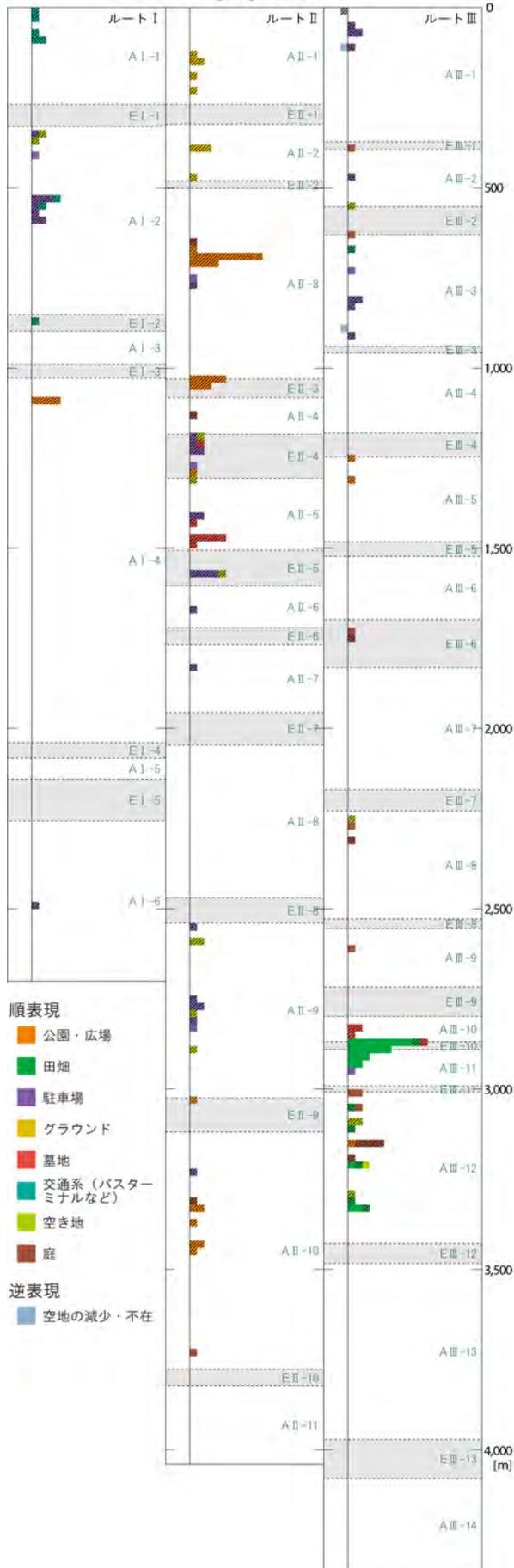
[25] 人の行動



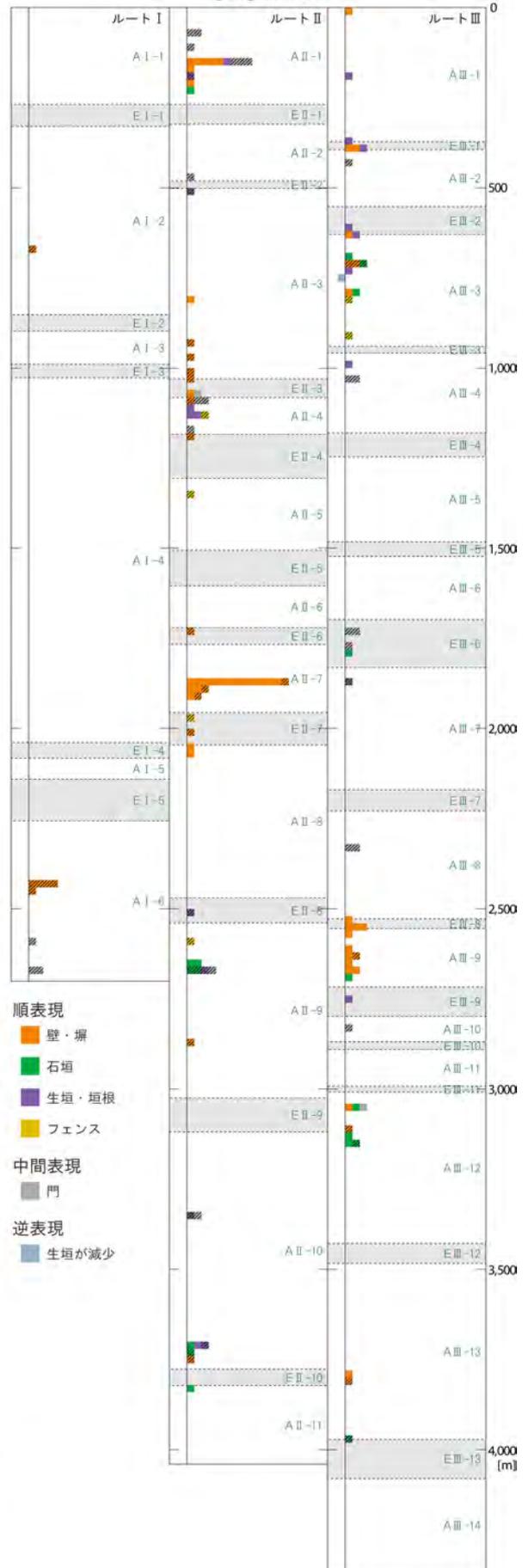
[26] 車の数



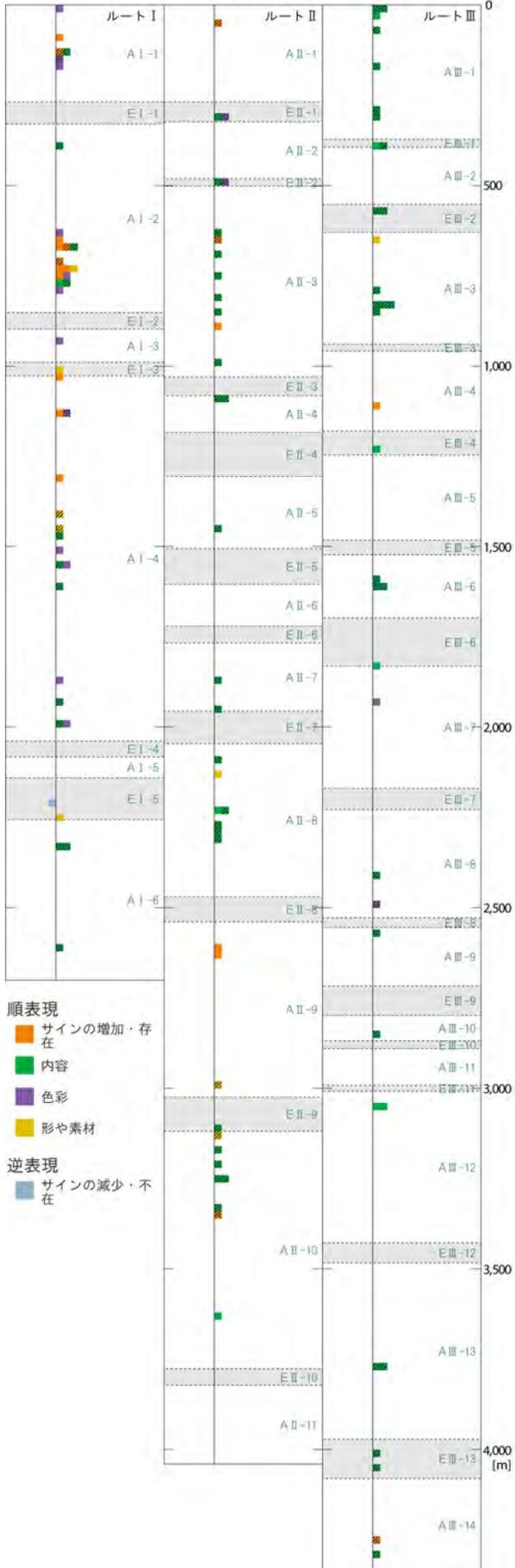
[27] 空地



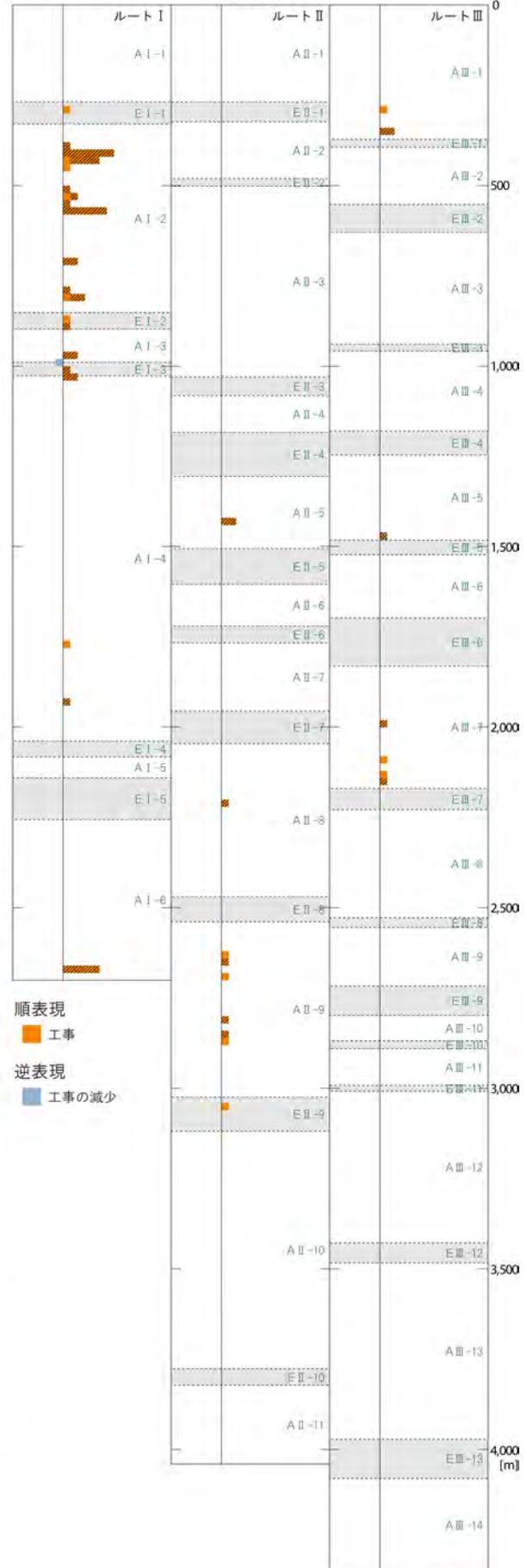
[28] 塀・壁



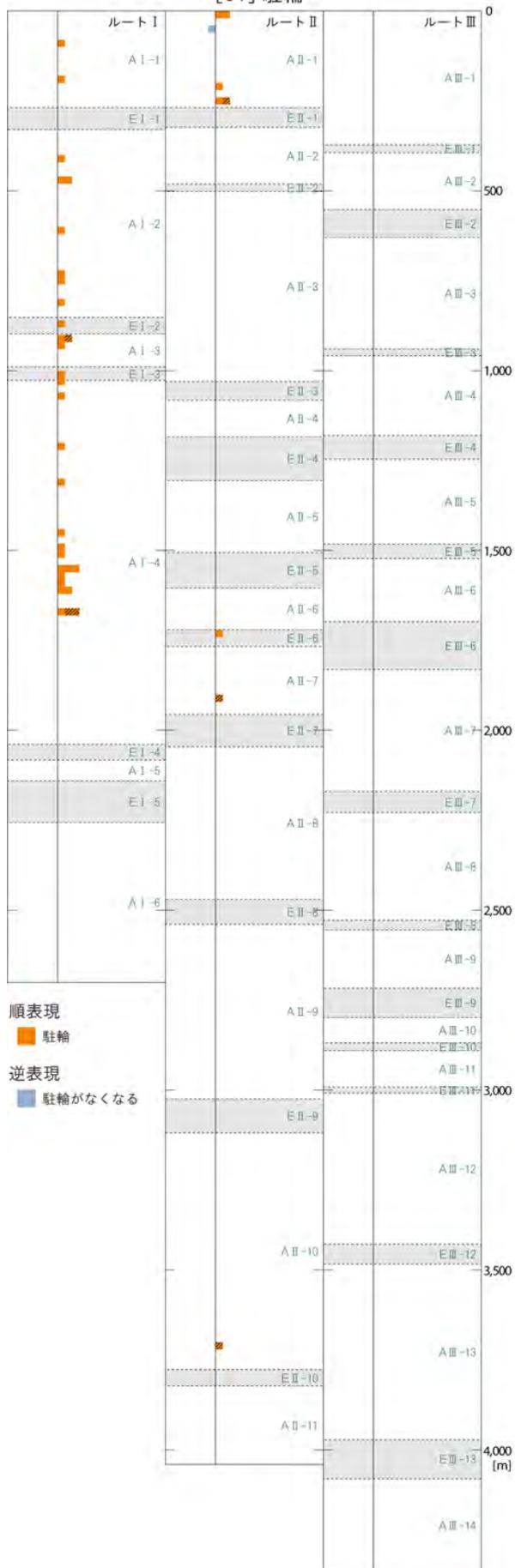
[29] サイン



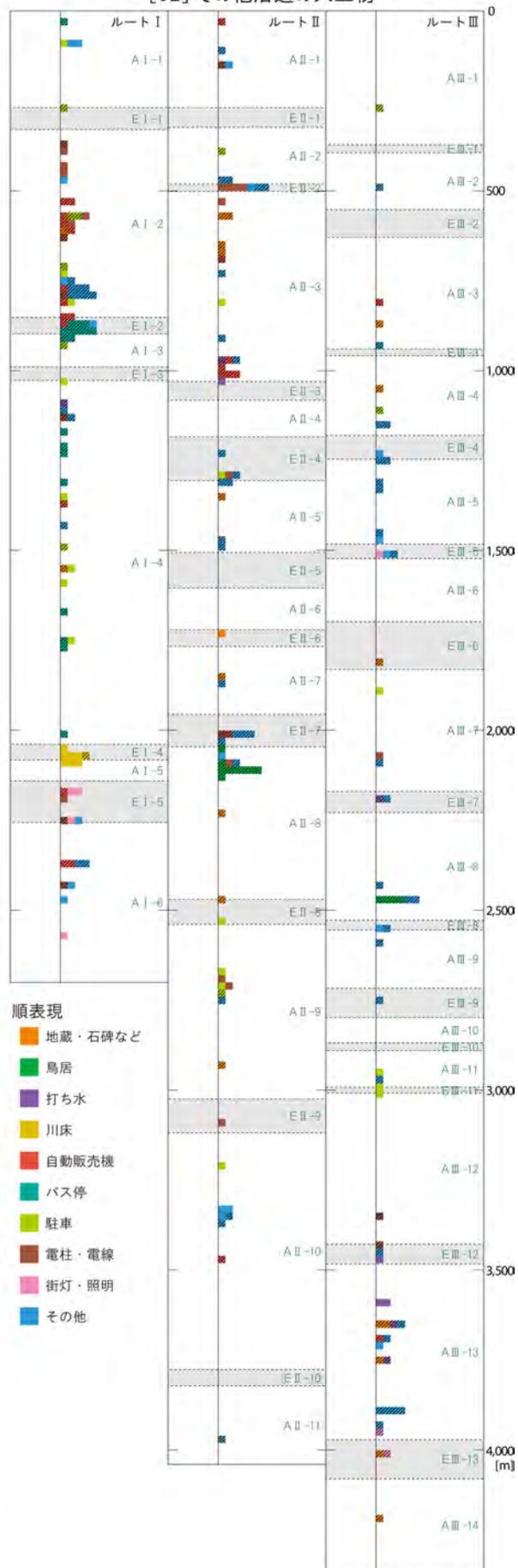
[30] 工事



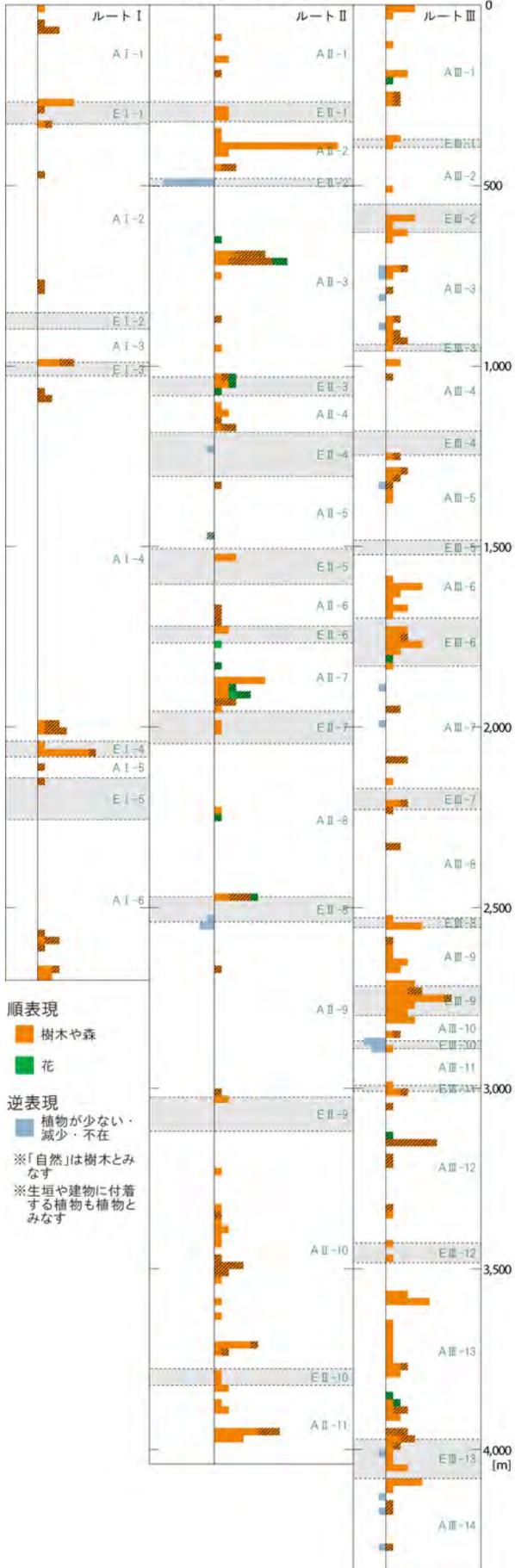
[31] 駐輪



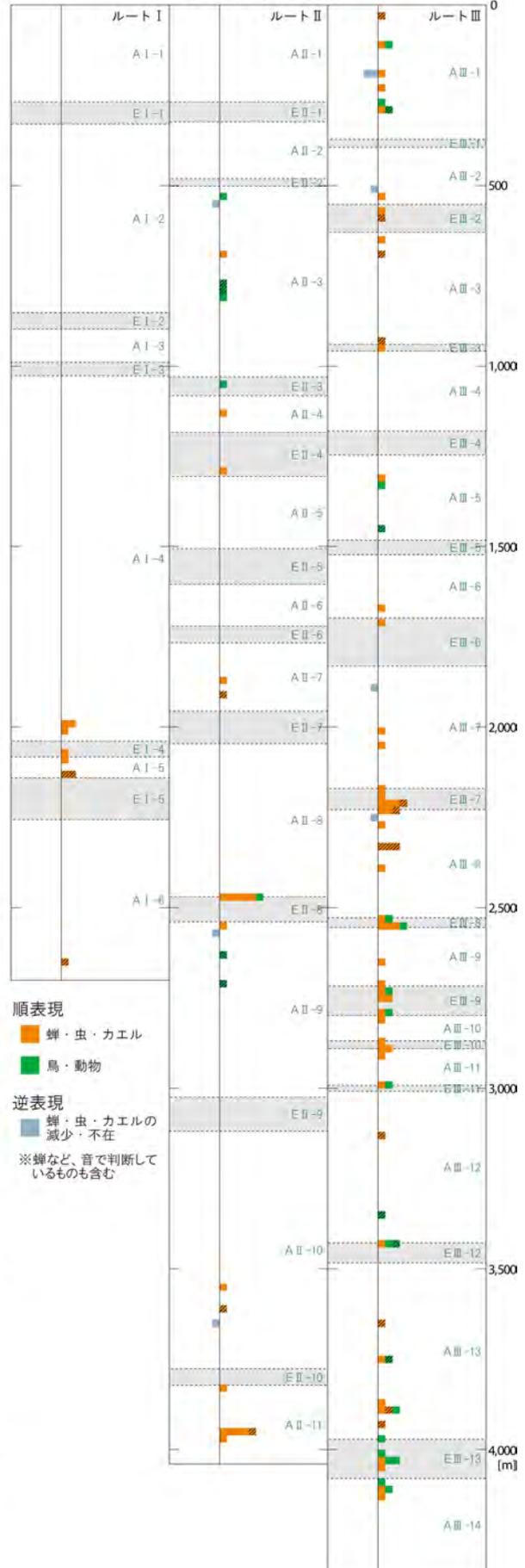
[32] その他沿道の人工物



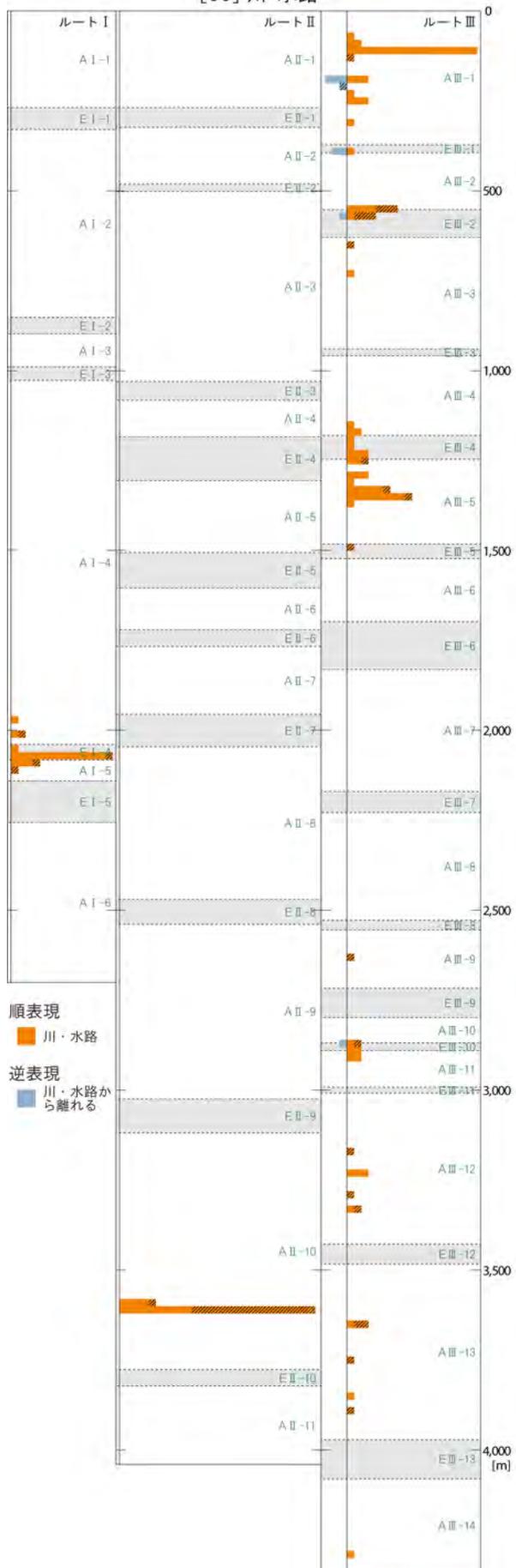
[33] 沿道の植物



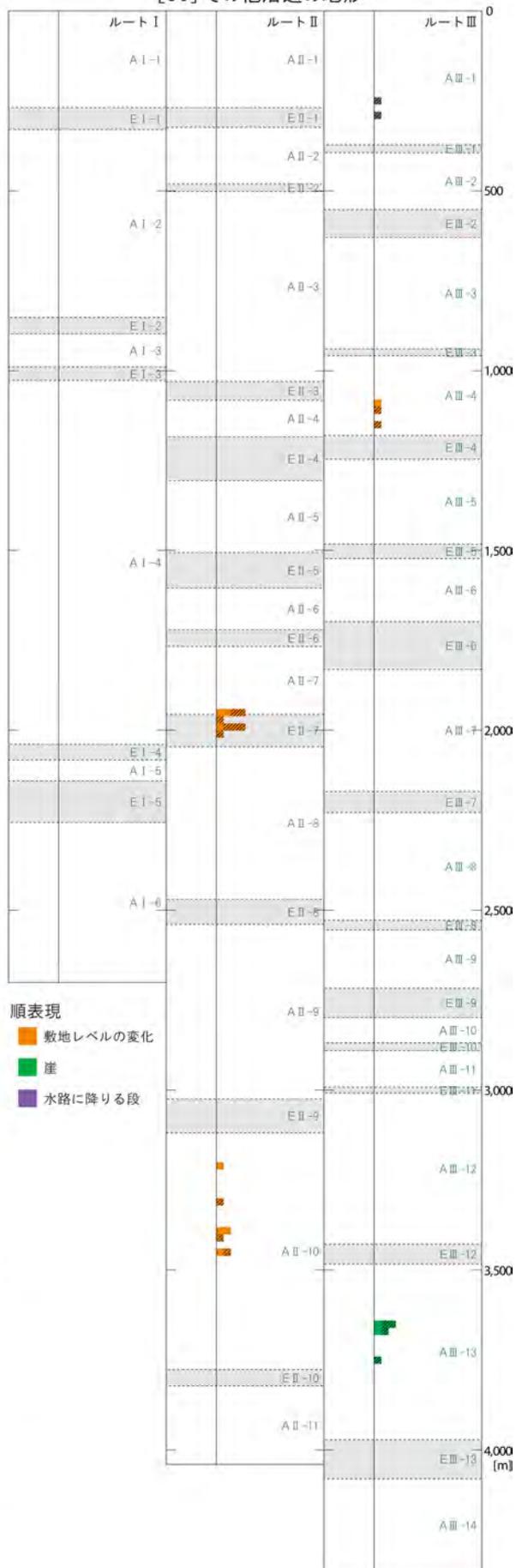
[34] 沿道の生物



[35] 川・水路



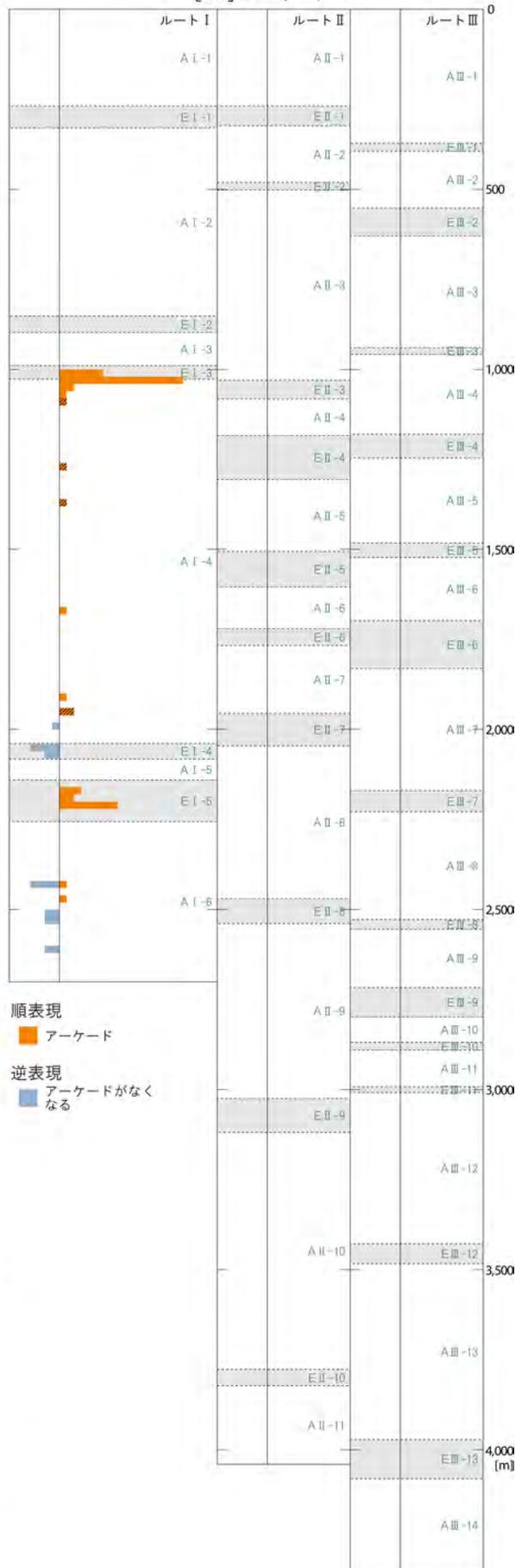
[36] その他沿道の地形



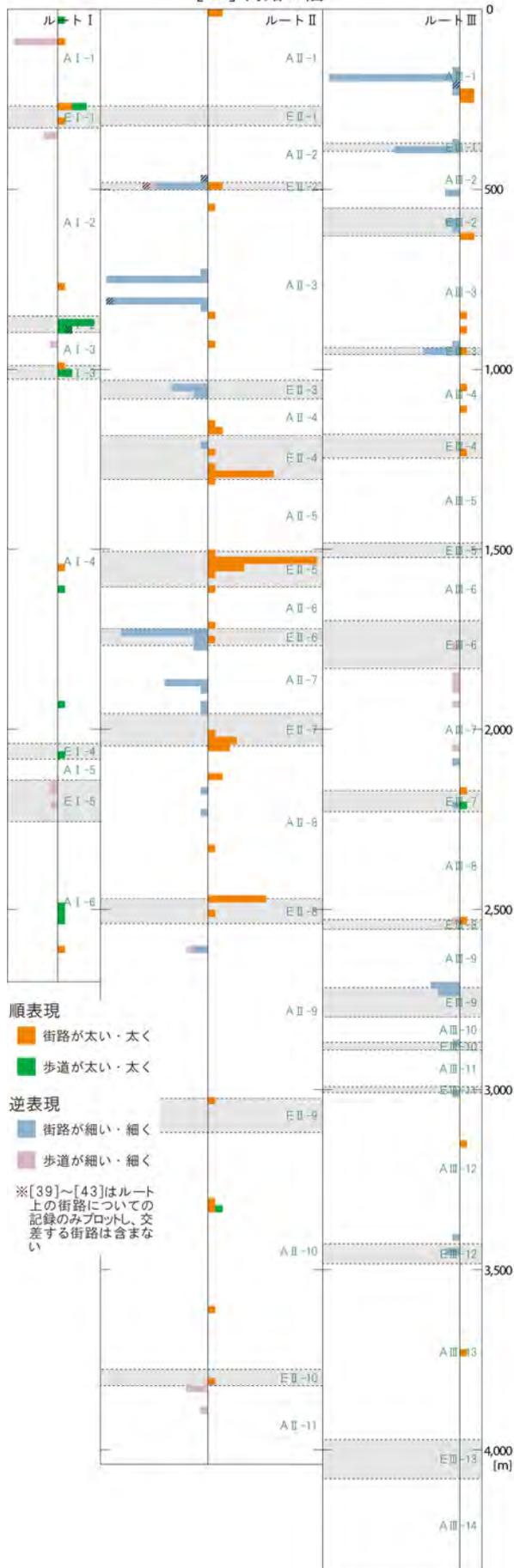
[37] 空



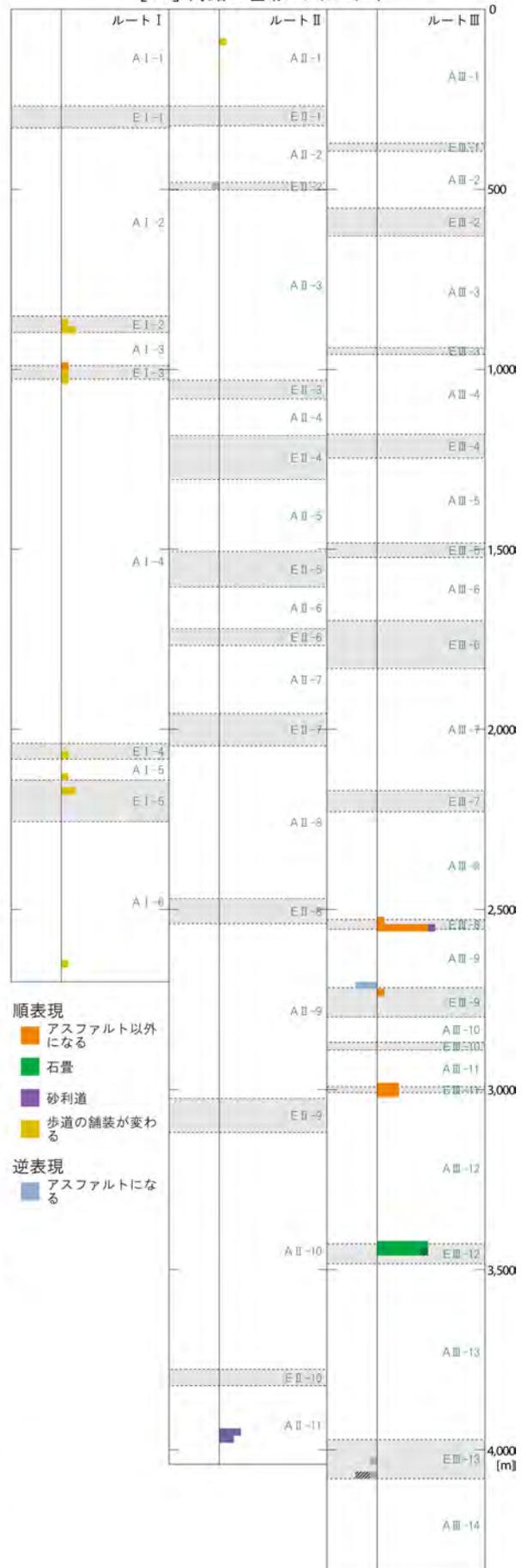
[38] アーケード



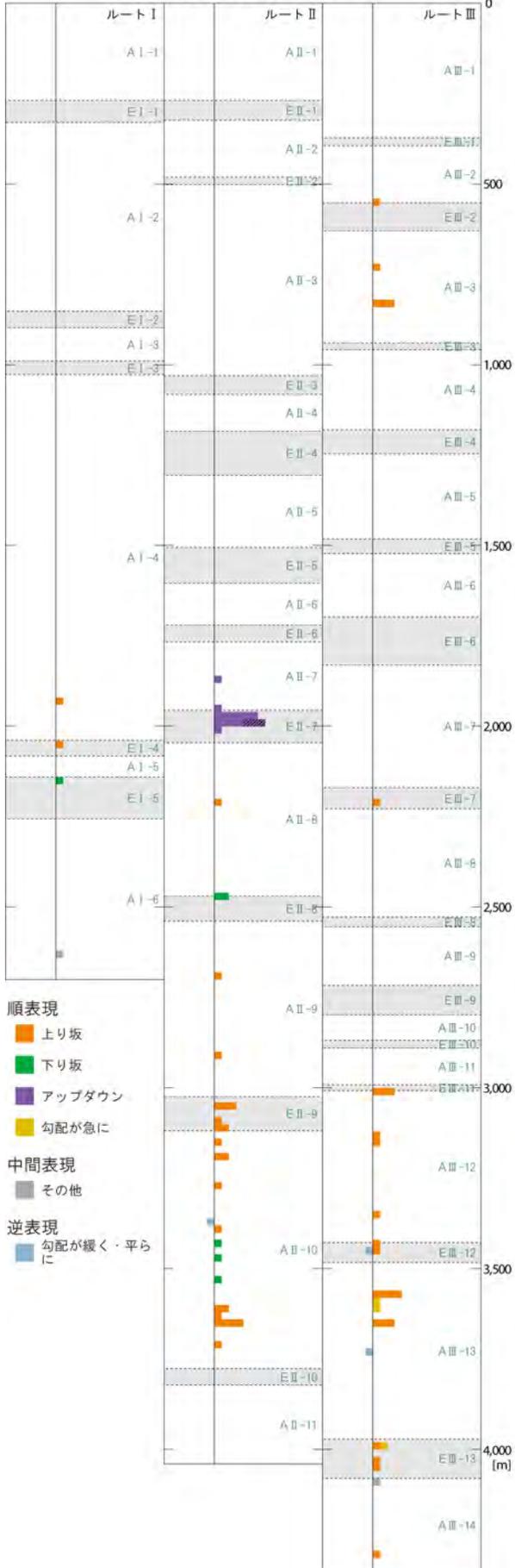
[39] 街路の幅



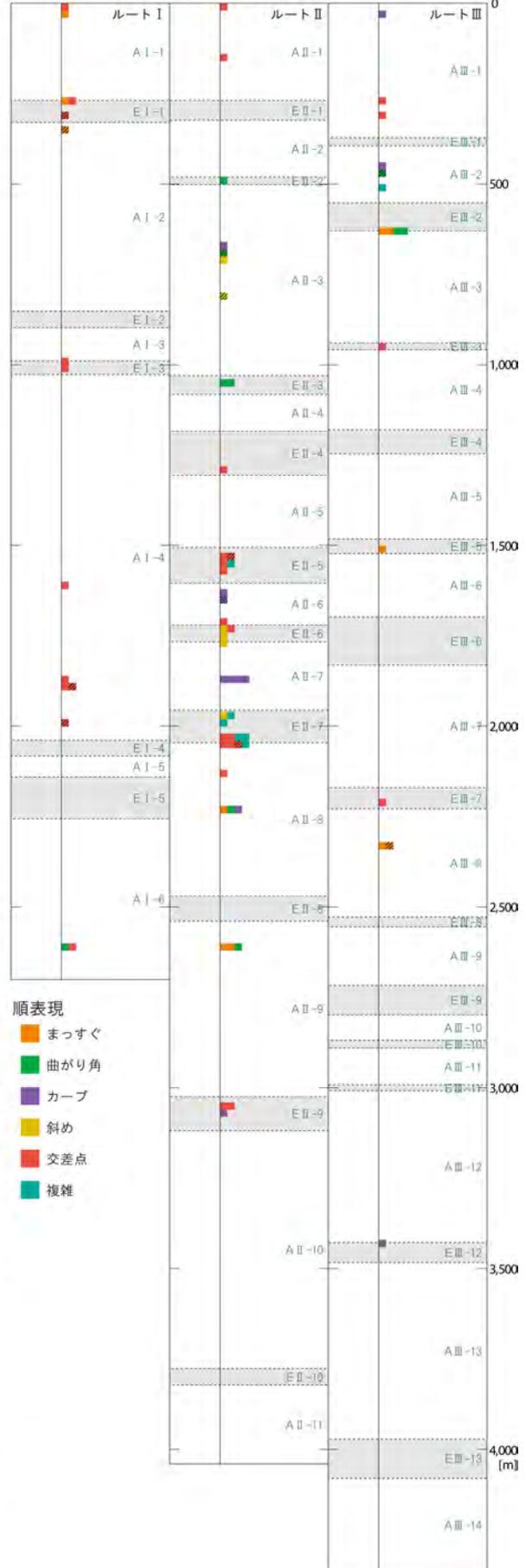
[40] 街路の色彩・テクスチャ



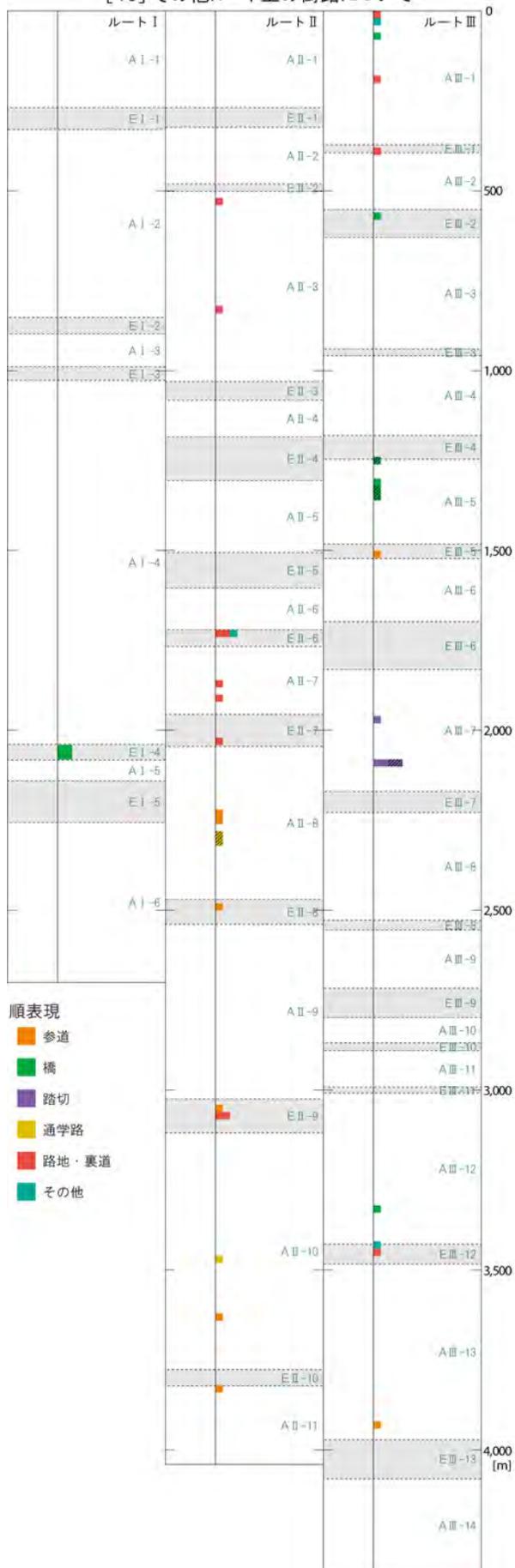
[41] 街路の勾配



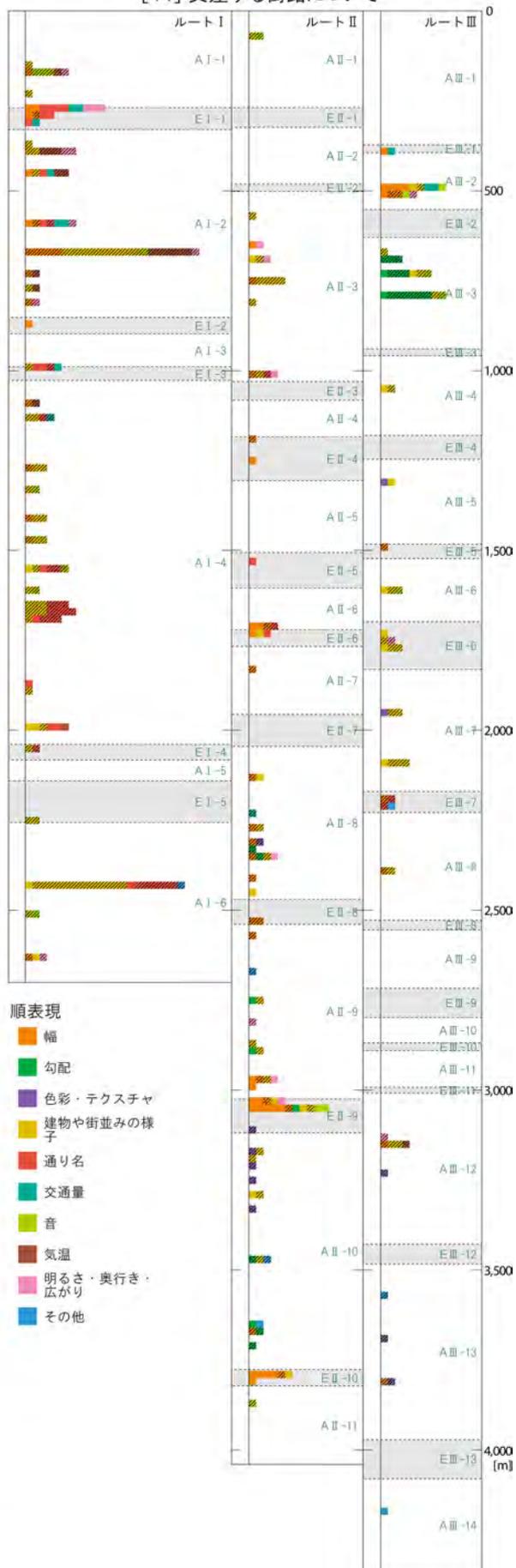
[42] 街路の形態



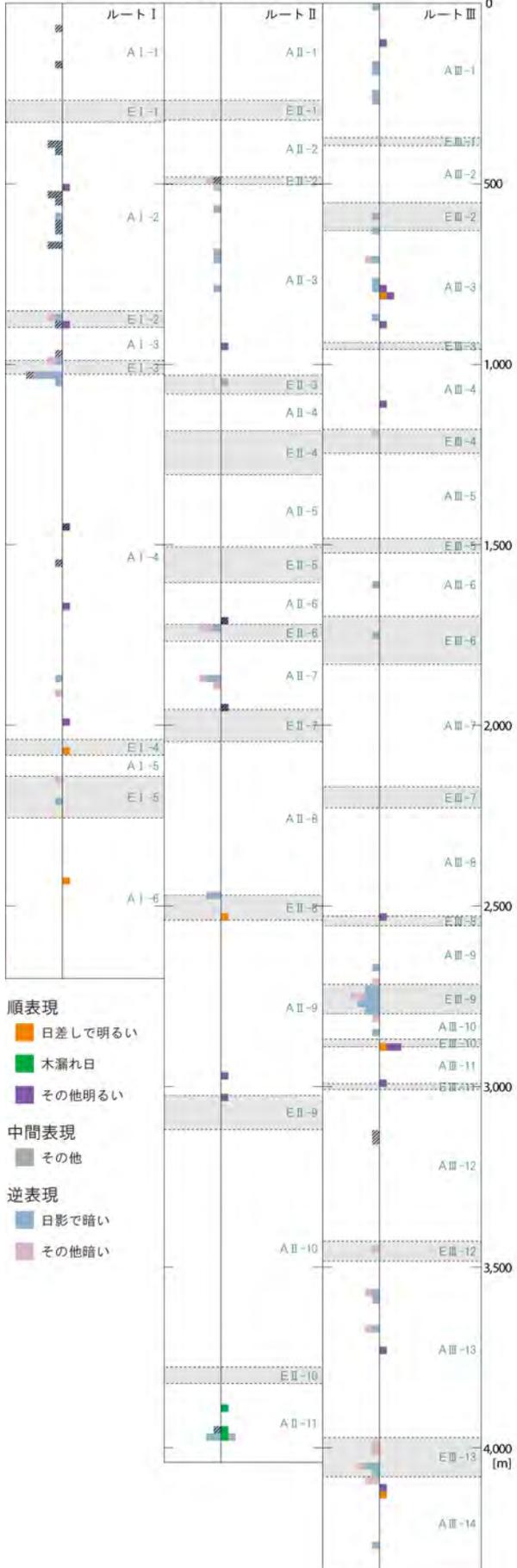
[43] その他ルート上の街路について



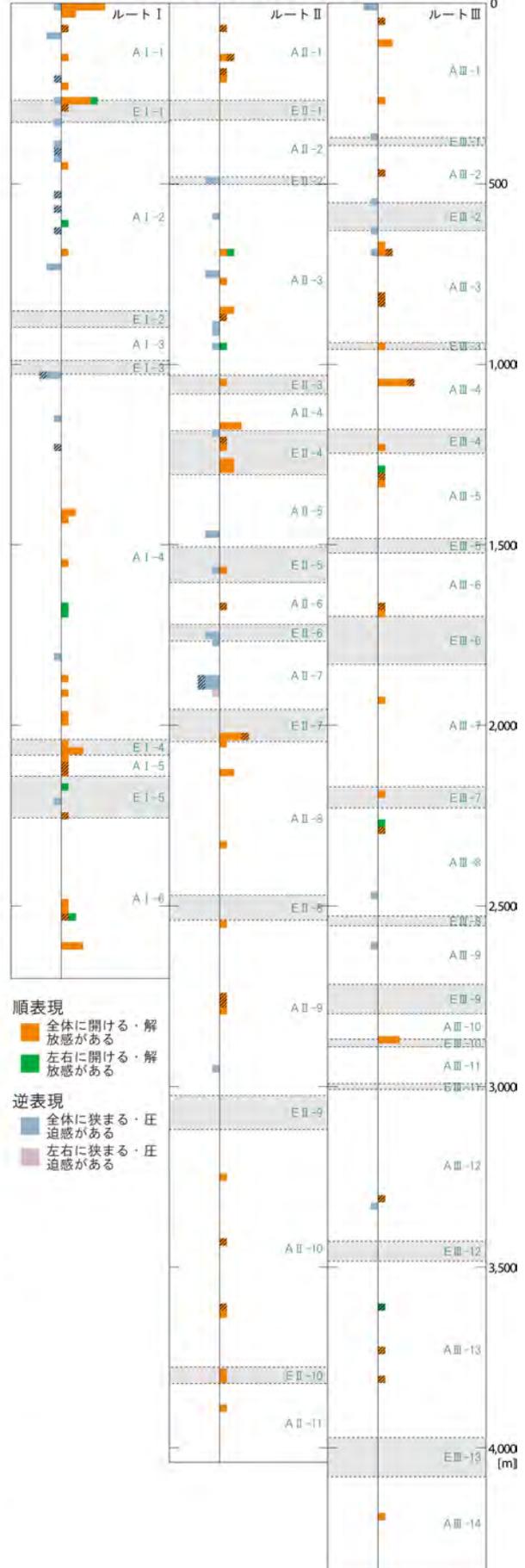
[44] 交差する街路について



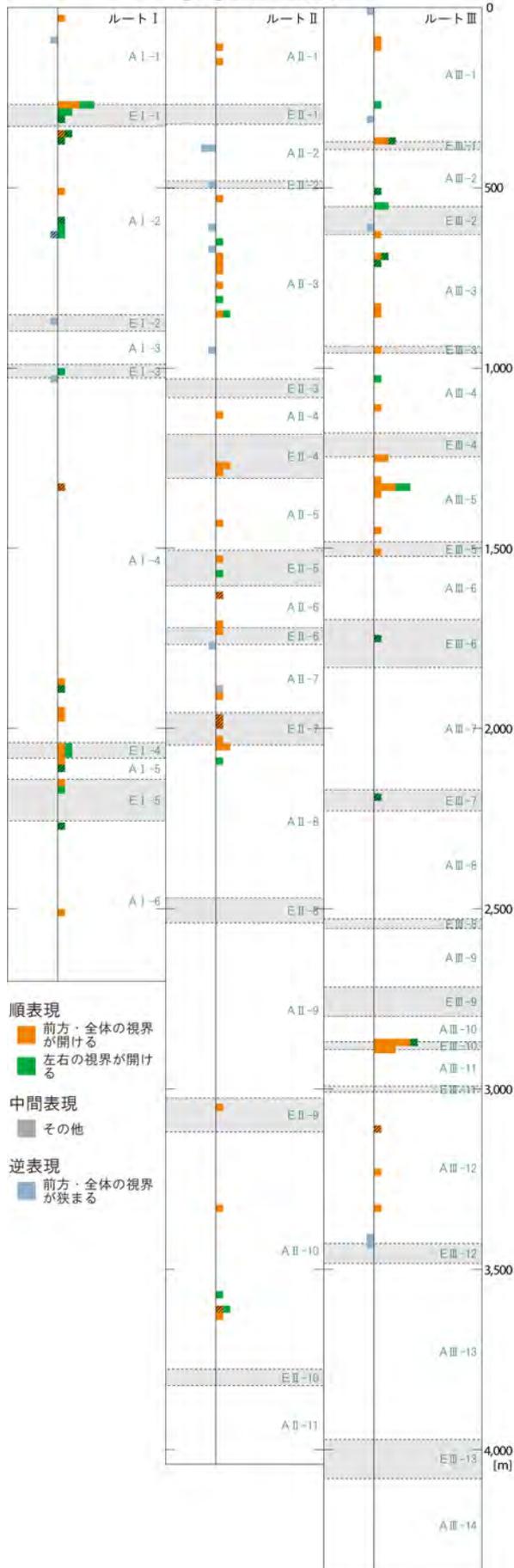
[45] 明るさ・陰影



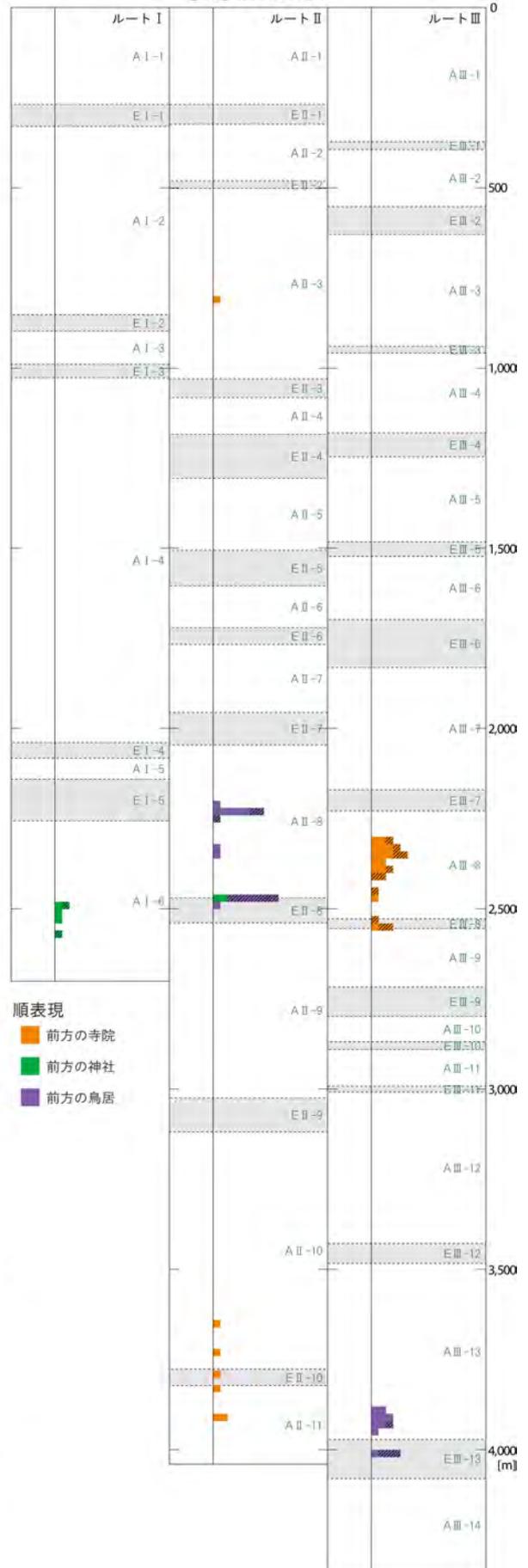
[46] 空間の広さ・開放感



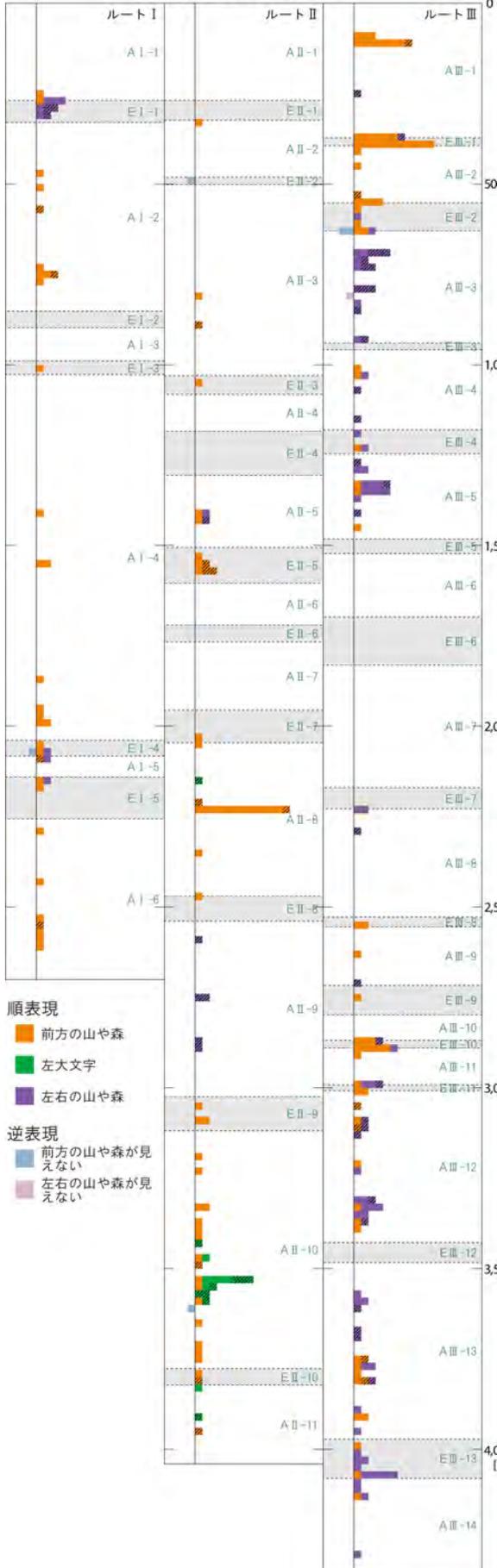
[47] 視界・見通し



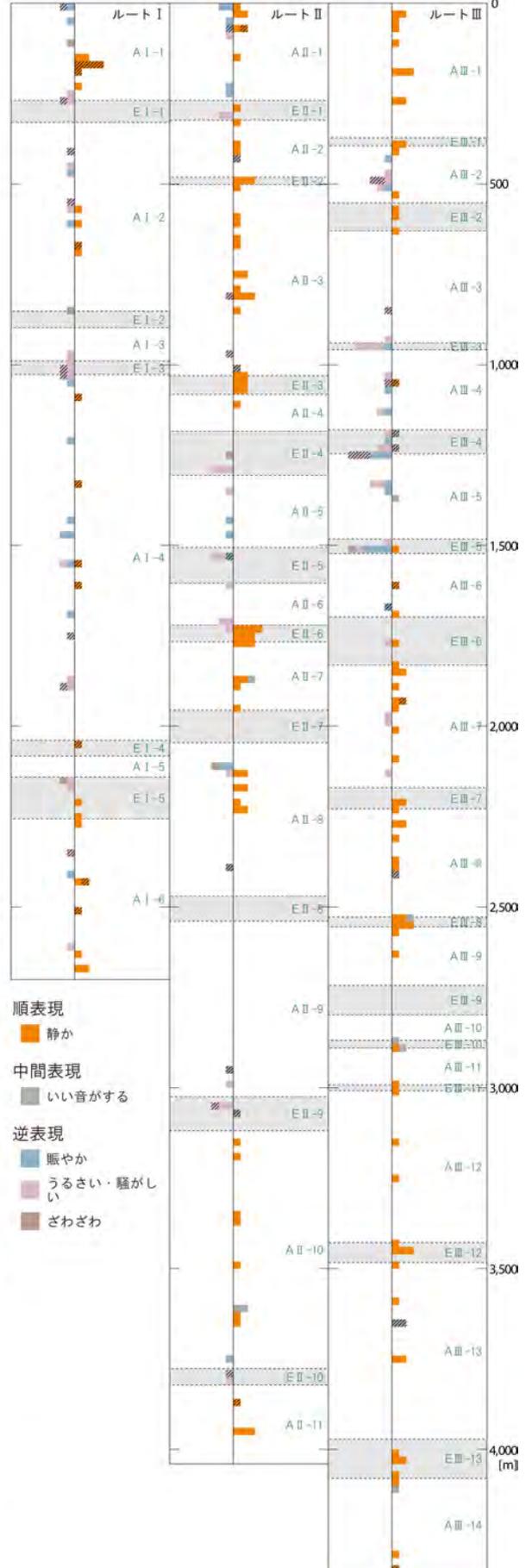
[48] 前方の寺社



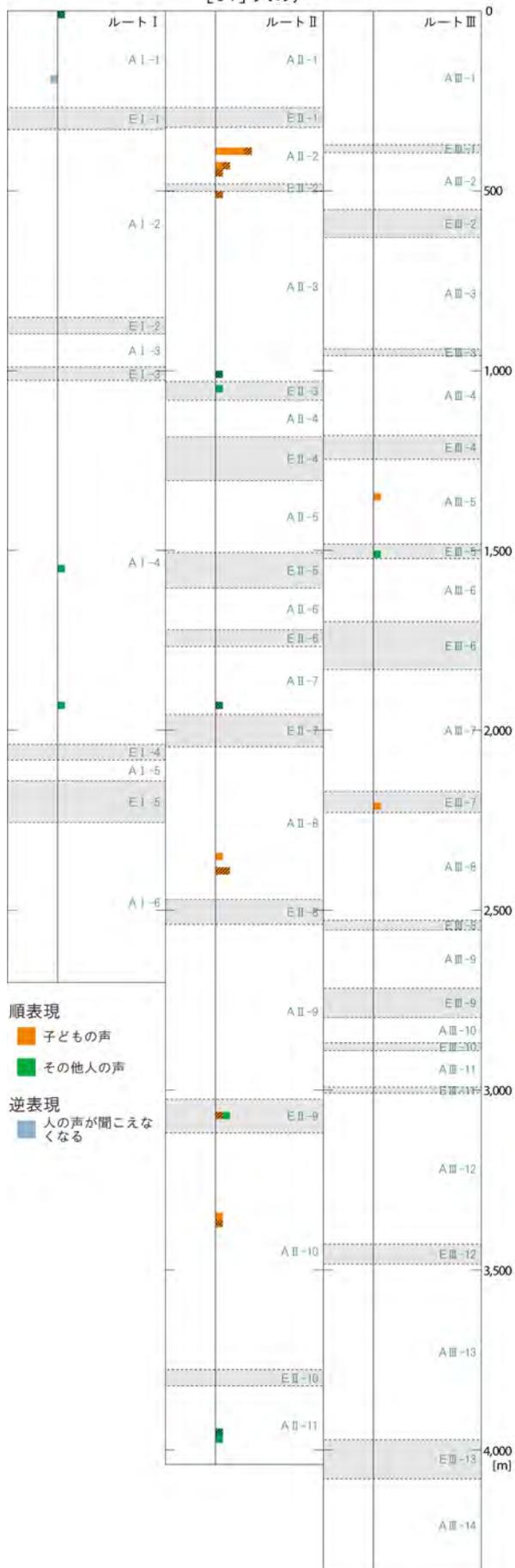
[49] 遠方の山や森



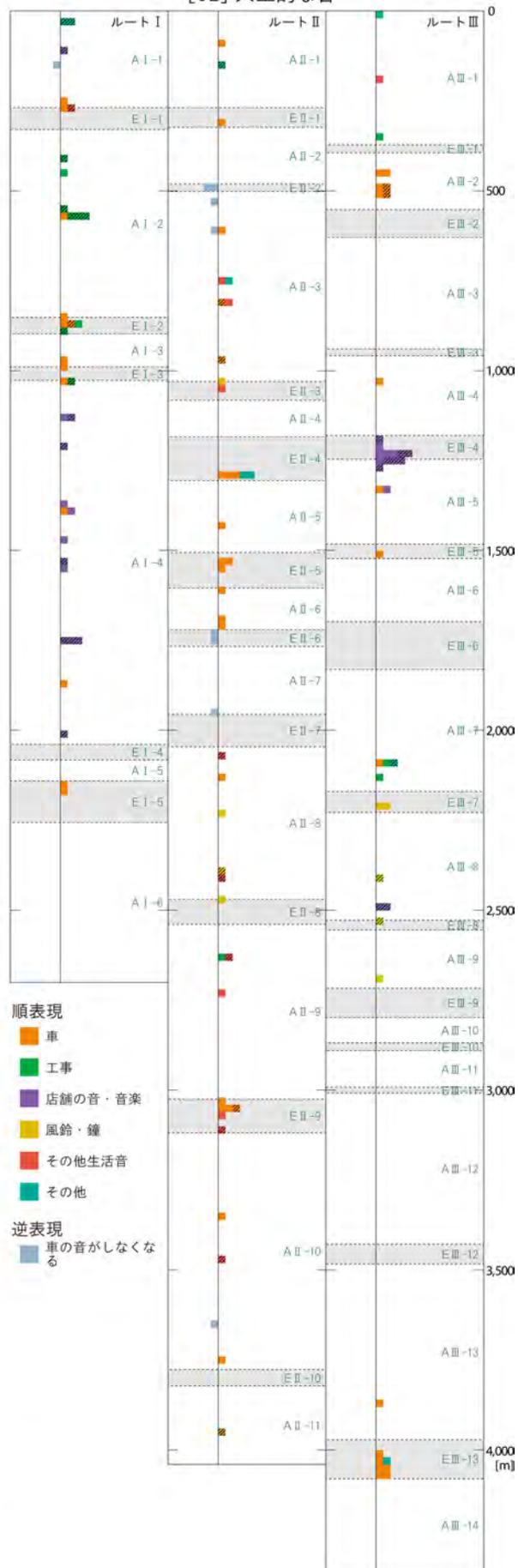
[50] 音環境



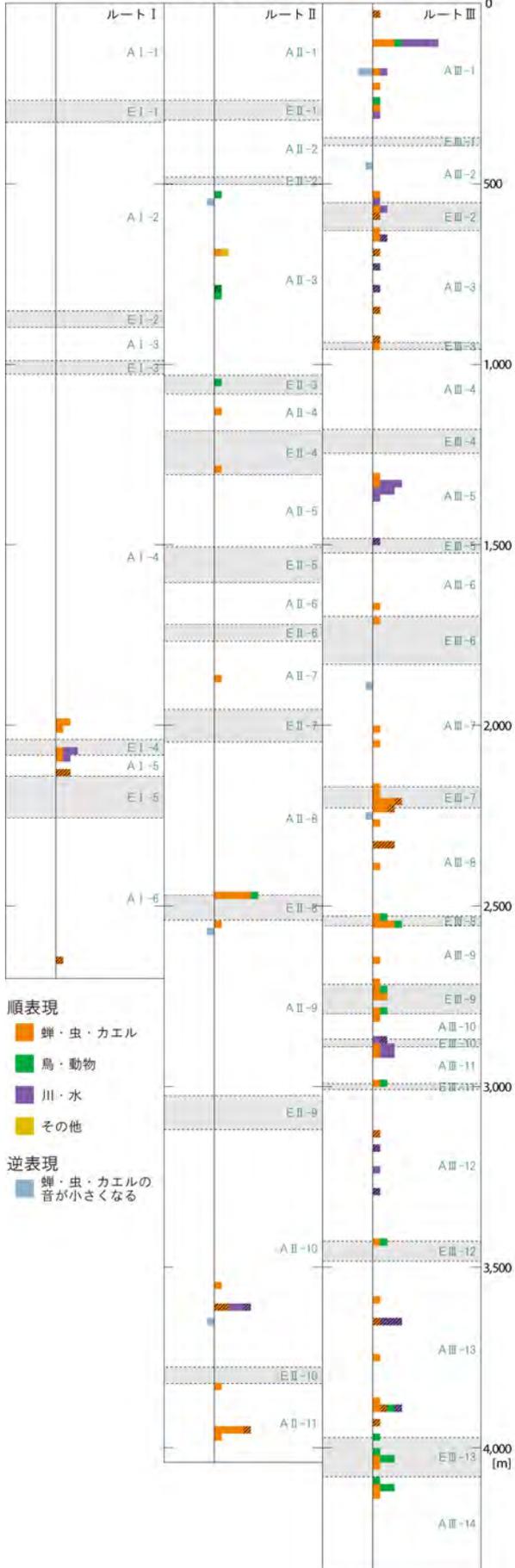
[51] 人の声



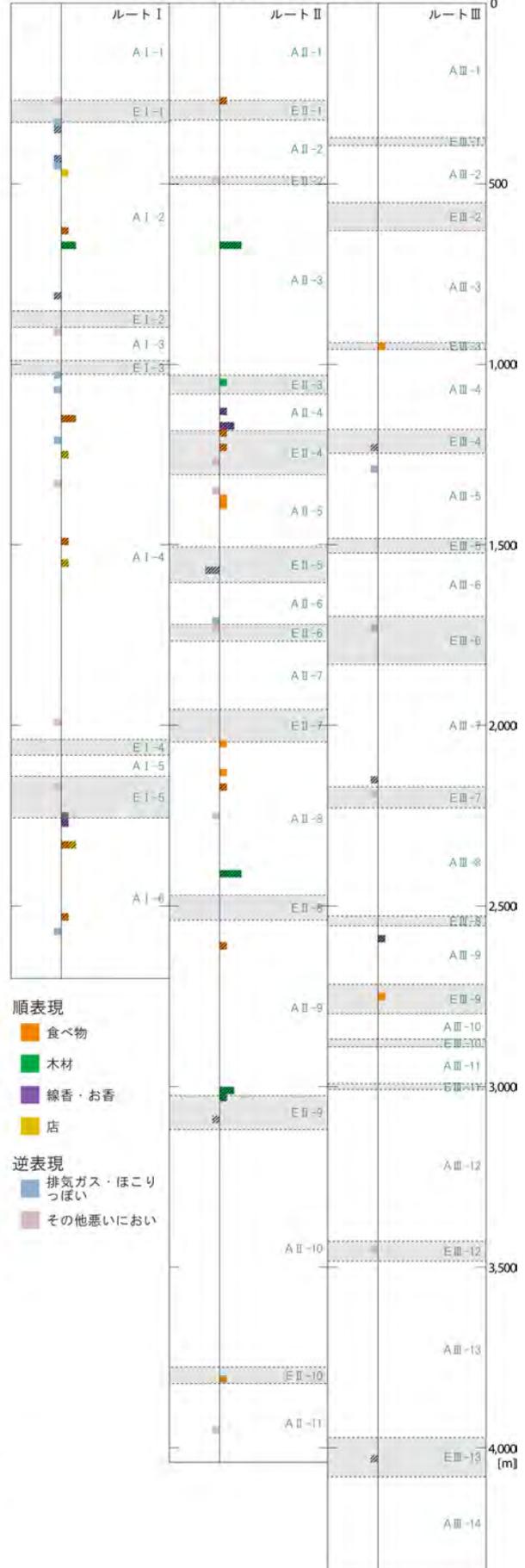
[52] 人工的な音



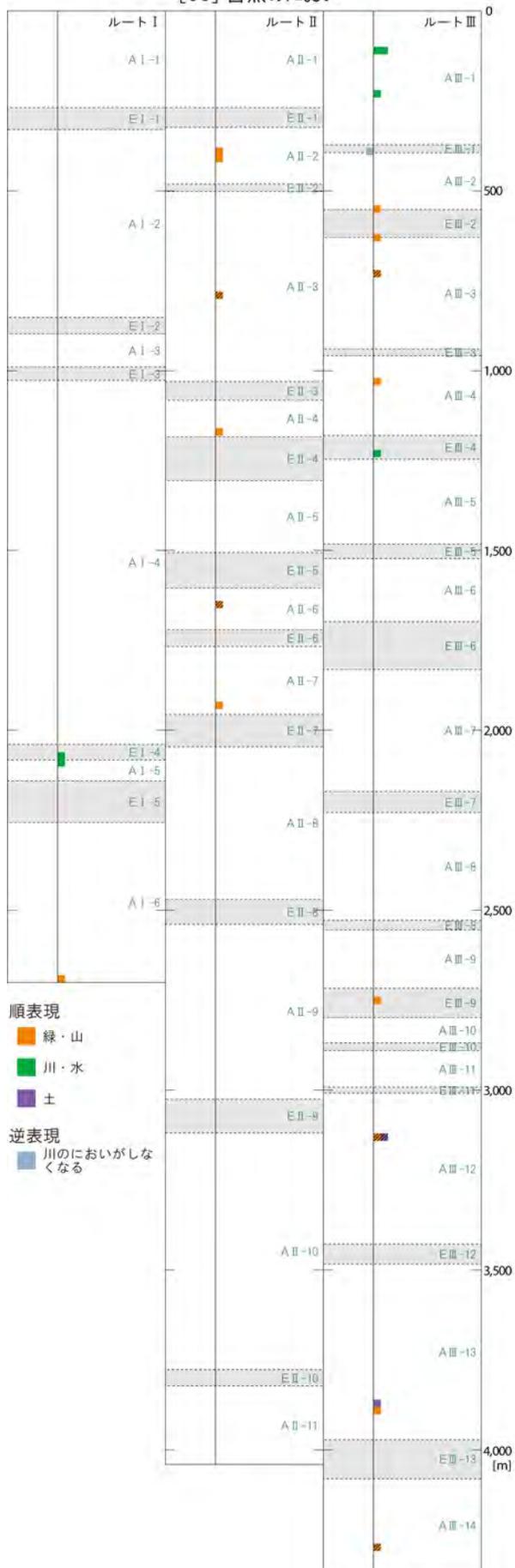
[53] 自然の音



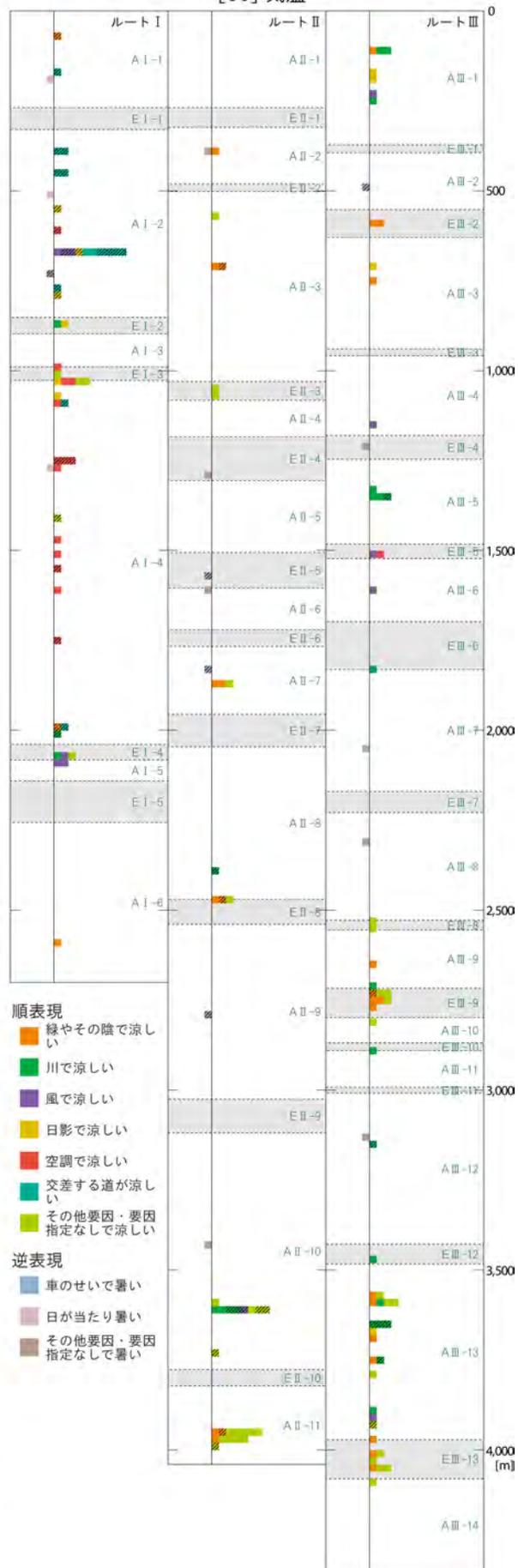
[54] 人工的なにおい・空気質



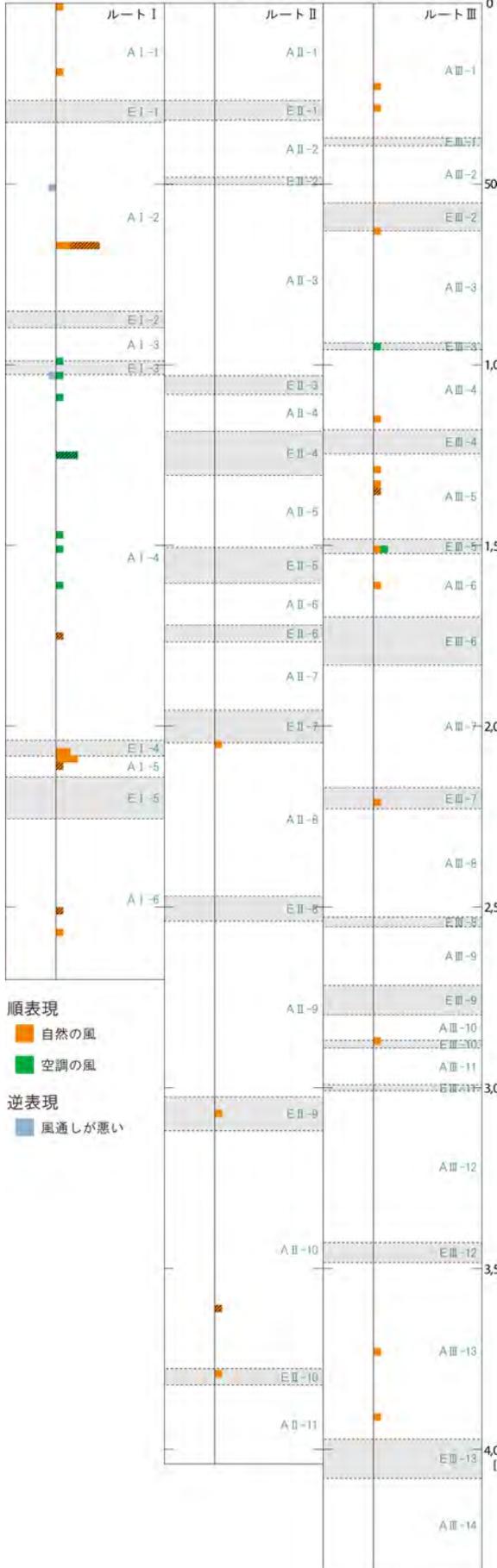
[55] 自然のにおい



[56] 気温



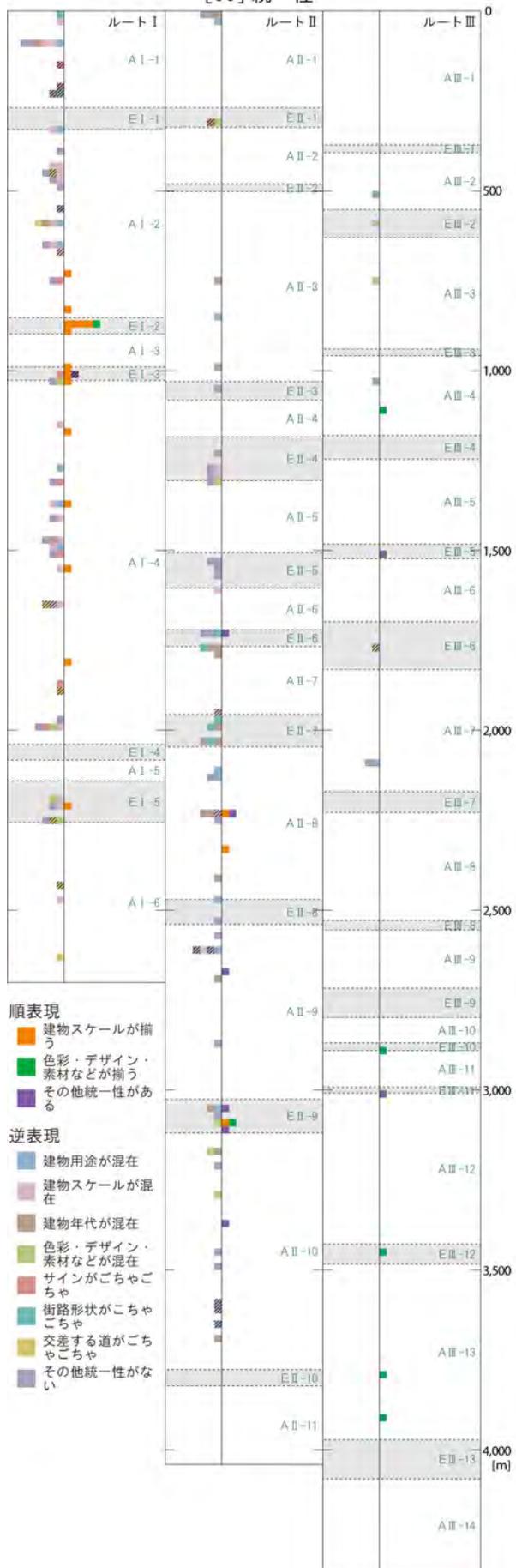
[57] 風



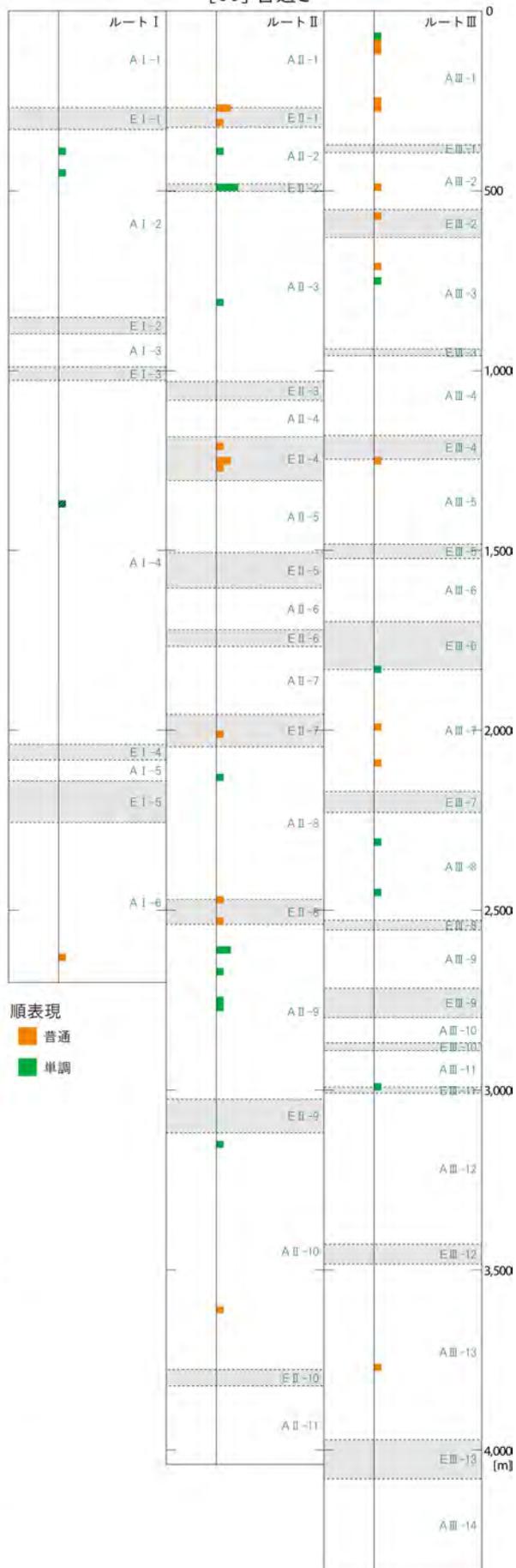
[58] 好み



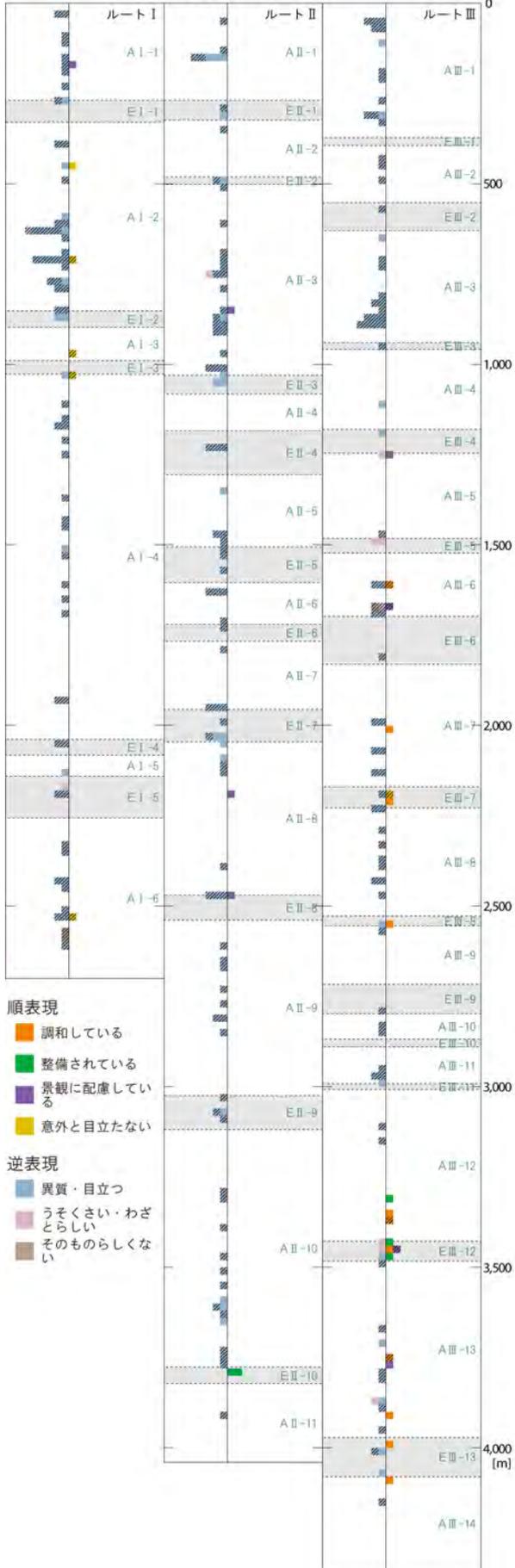
[59] 統一性



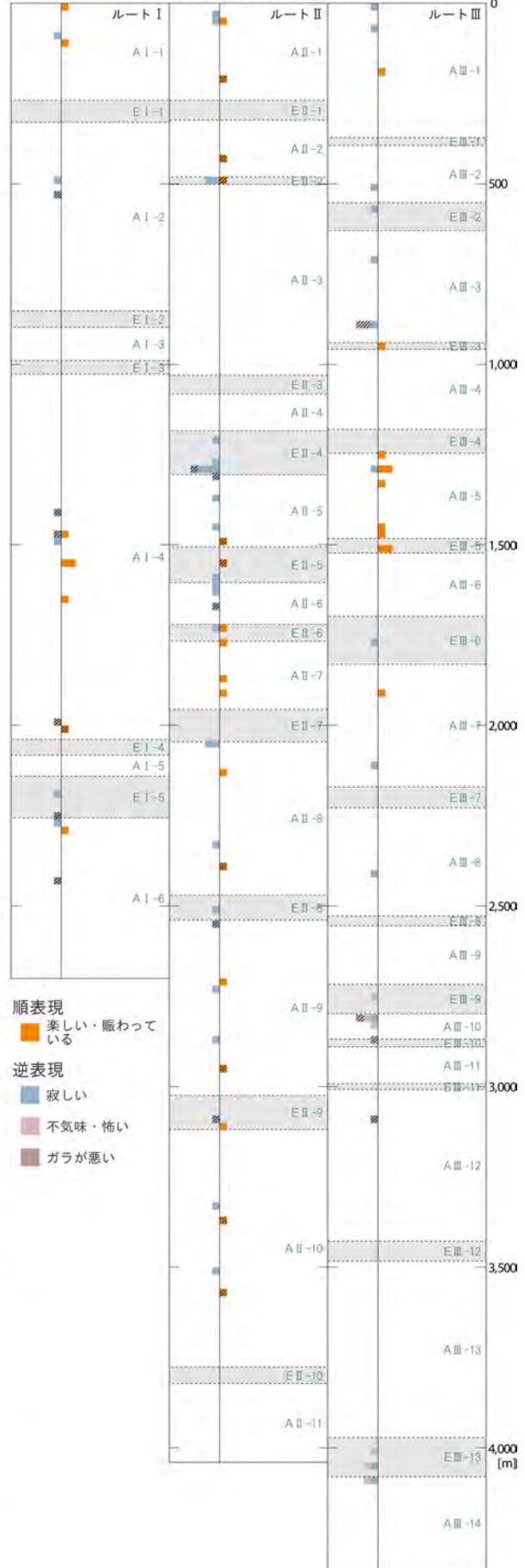
[60] 普通さ



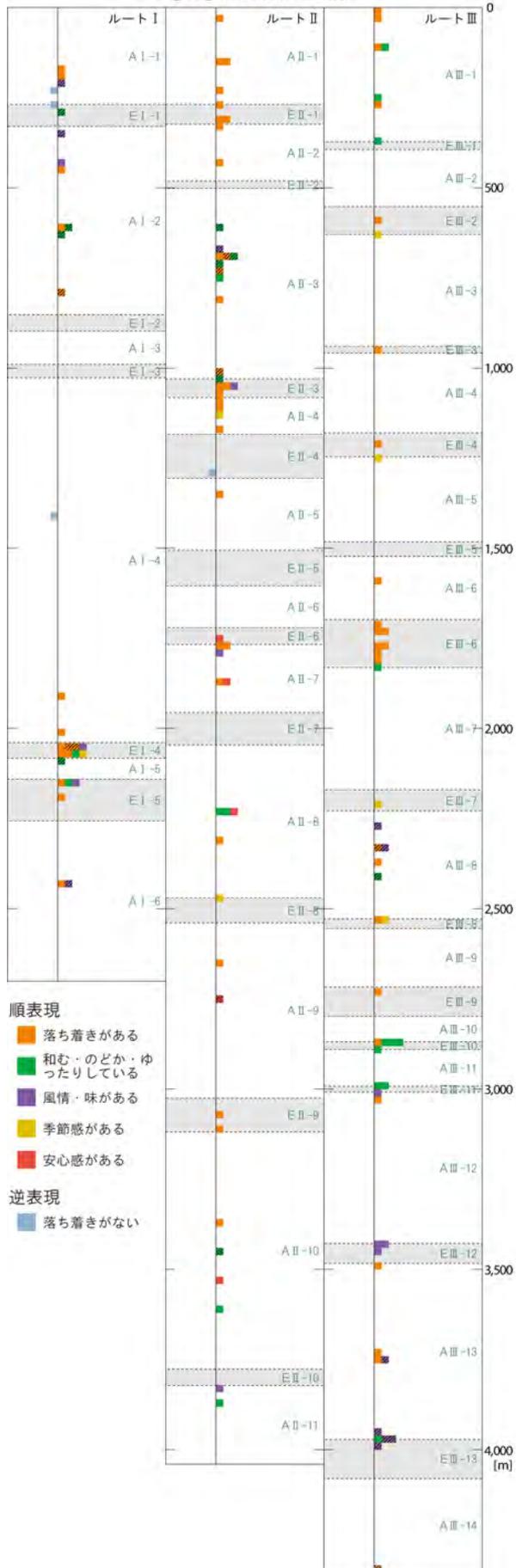
[61] 調和・特異



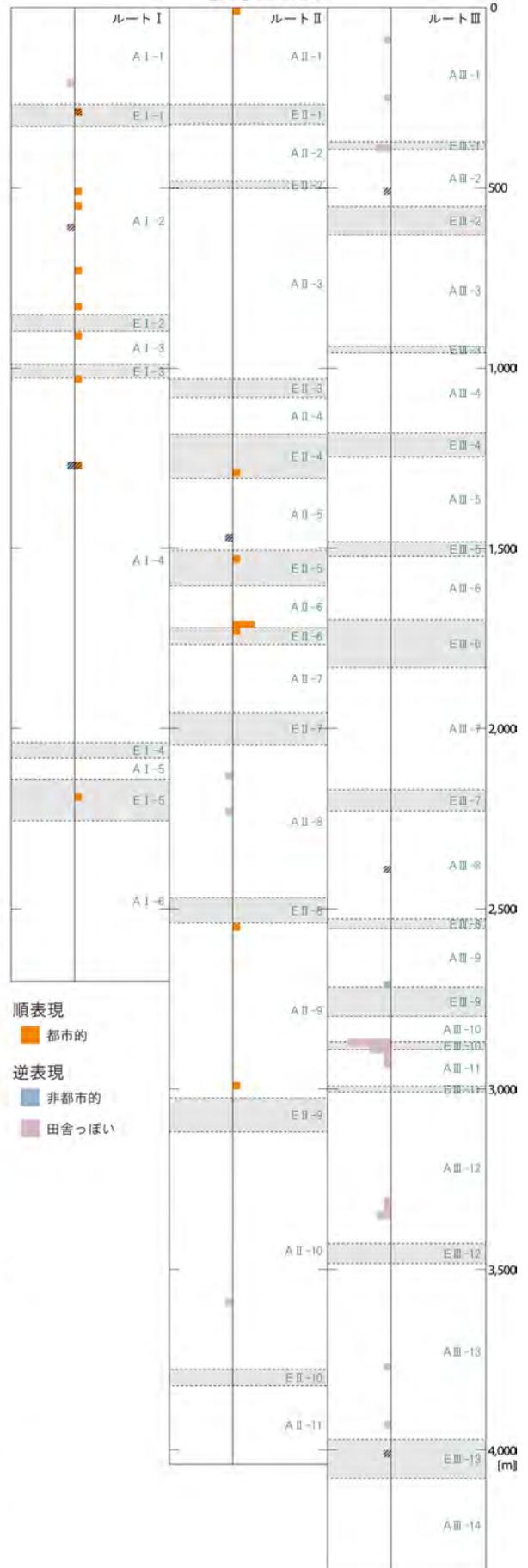
[62] 楽しさ・賑わい



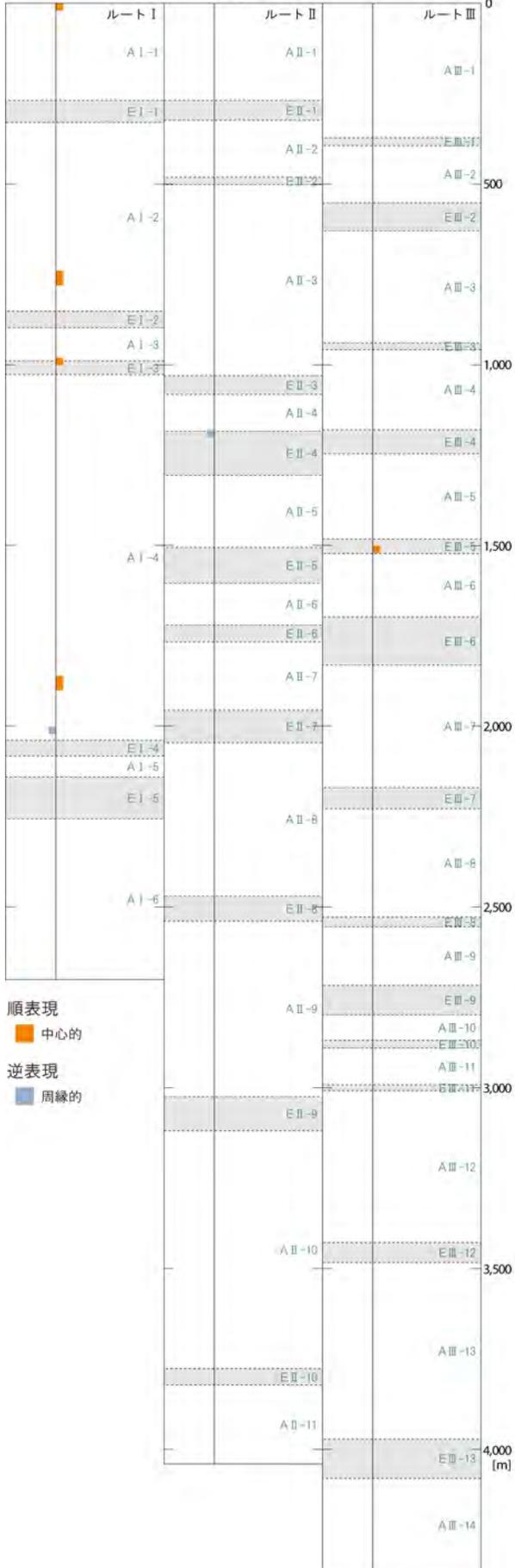
[63] 落ち着き・風情



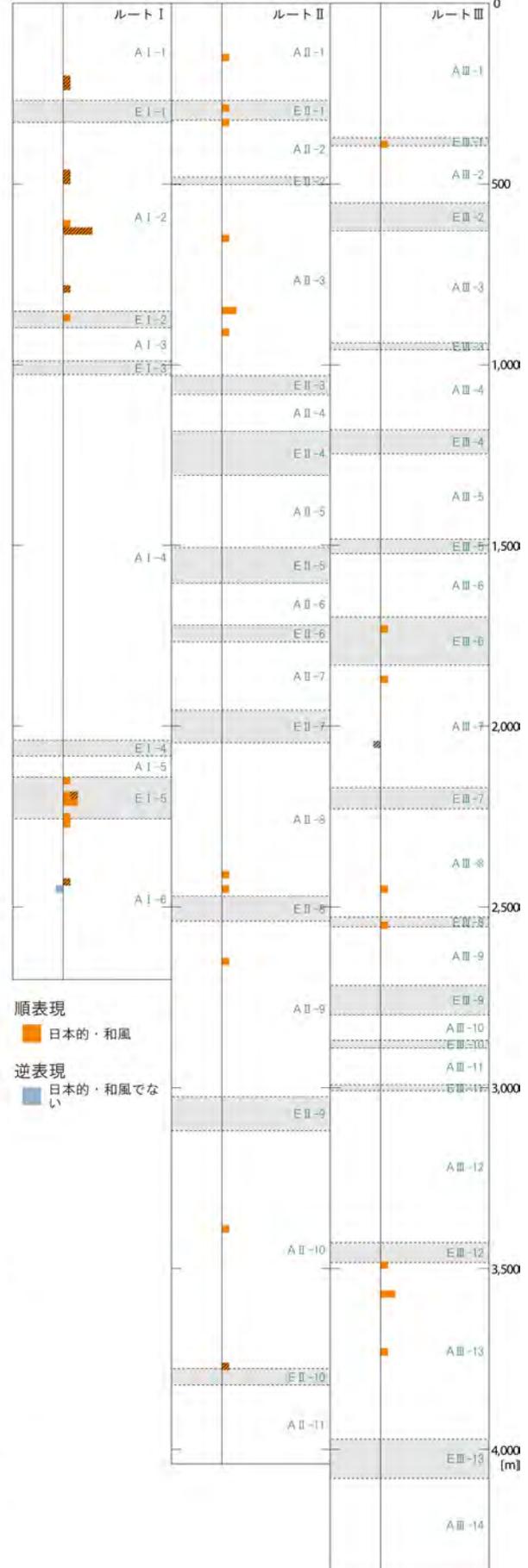
[64] 都市性



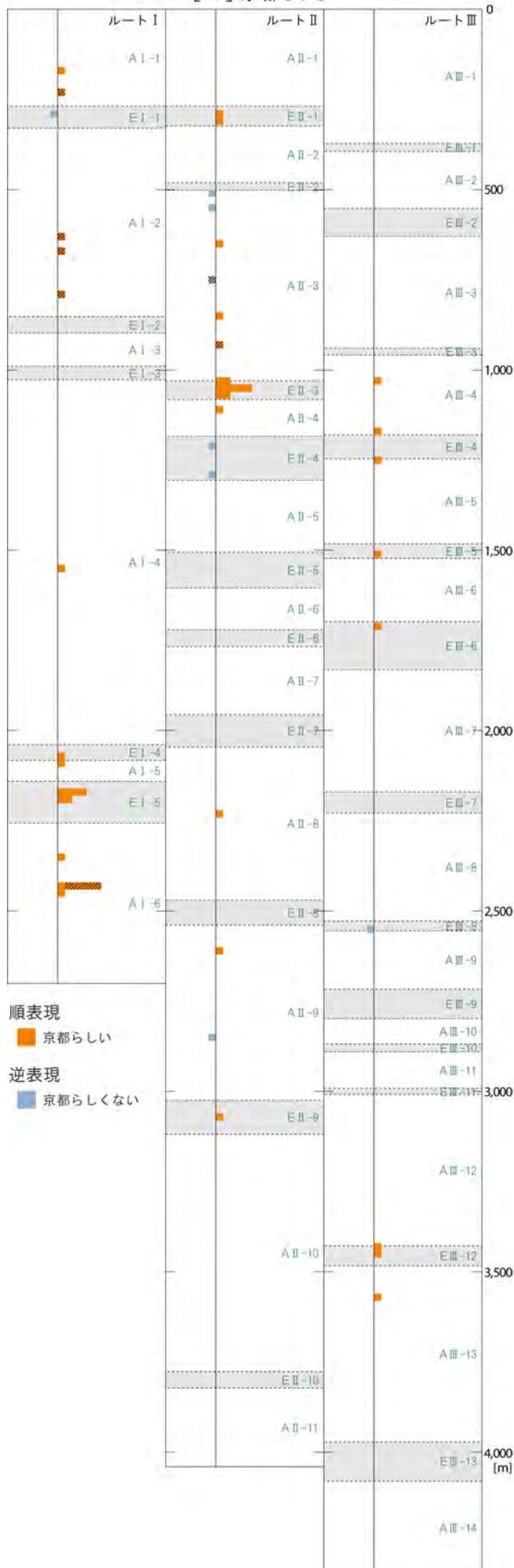
[65] 中心性



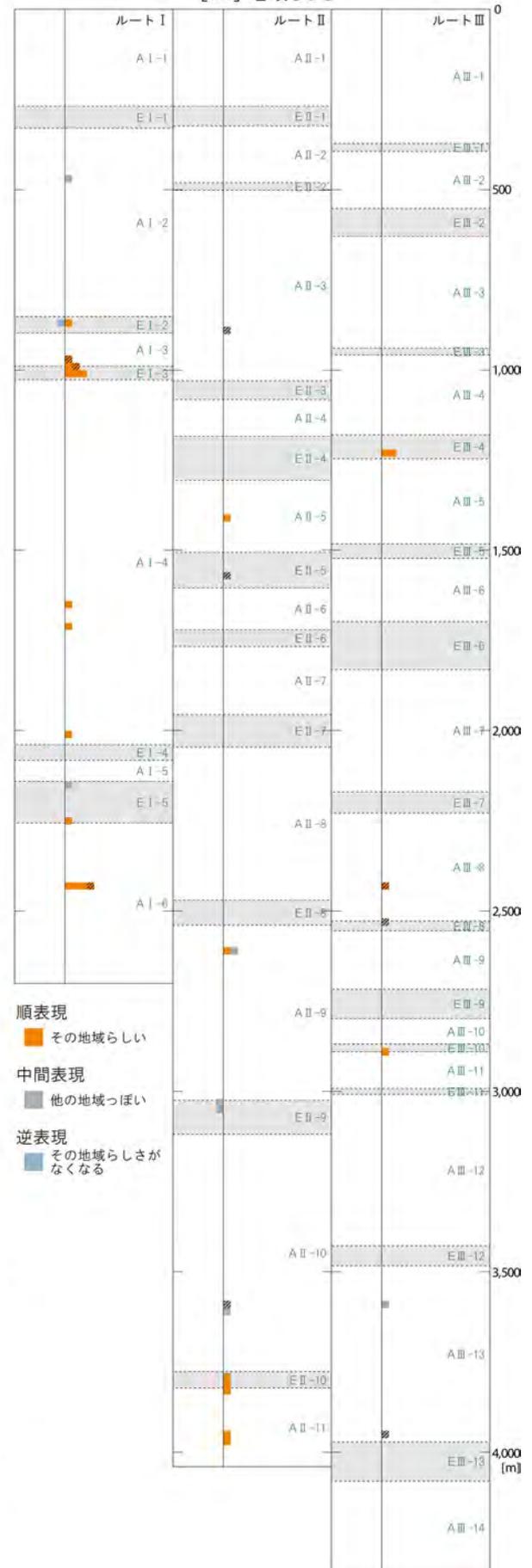
[66] 日本らしさ



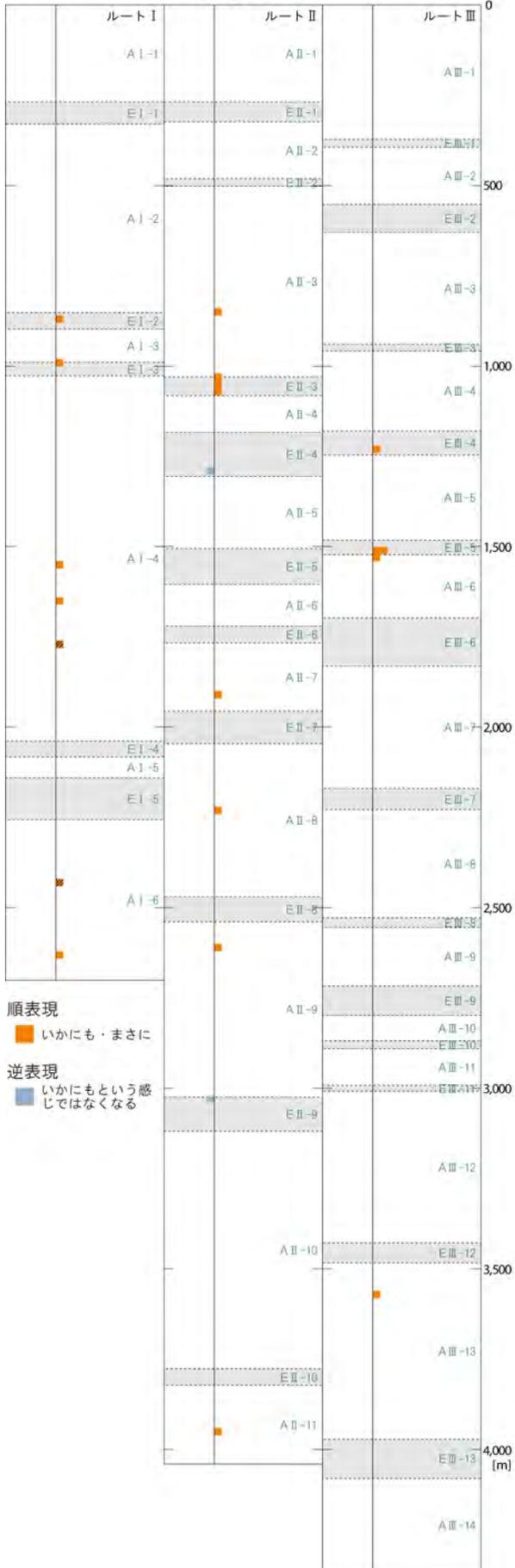
[67] 京都らしさ



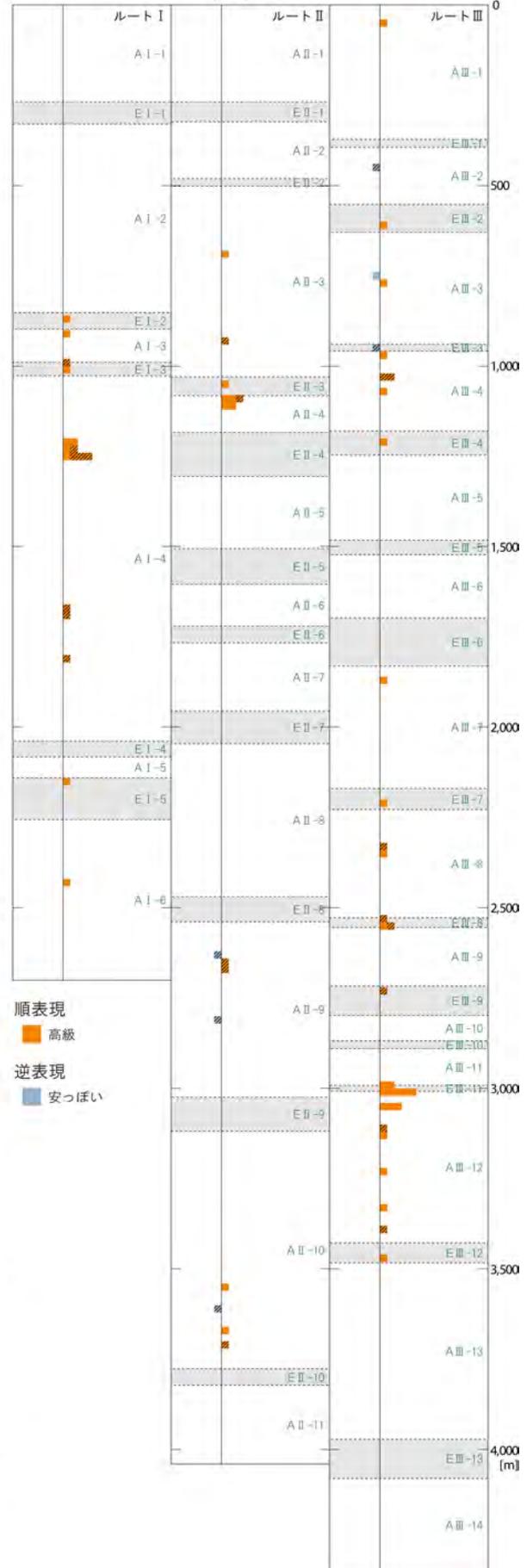
[68] 地域らしさ



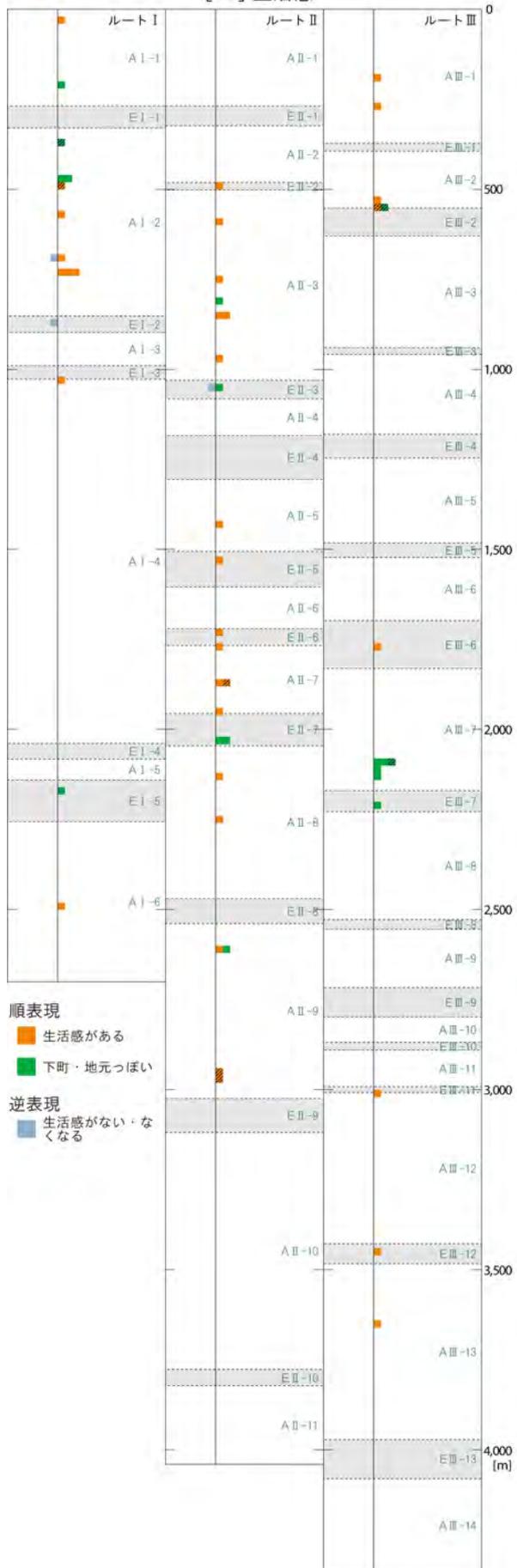
[69] いかにも



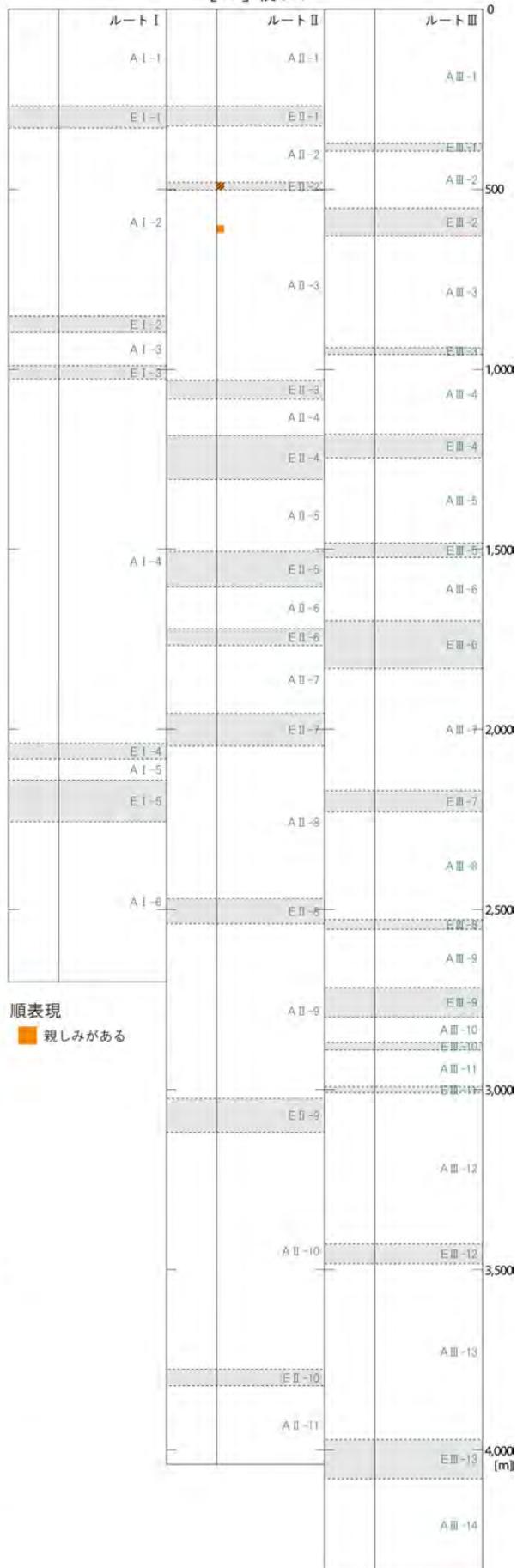
[70] グレード



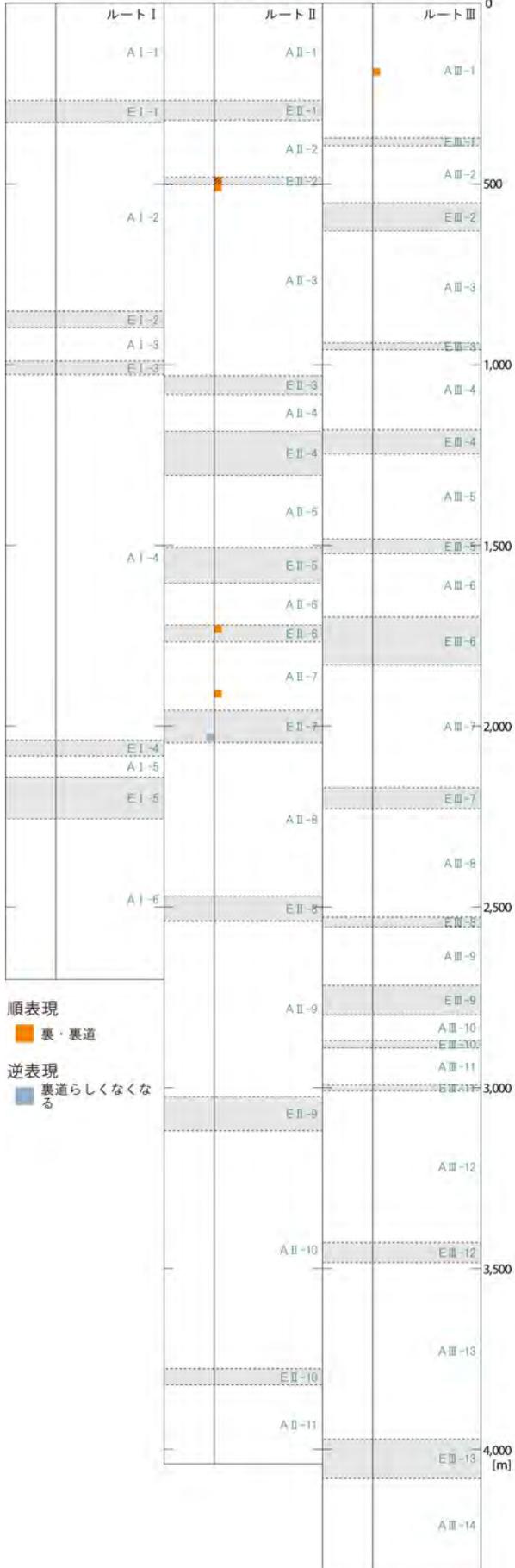
[71] 生活感



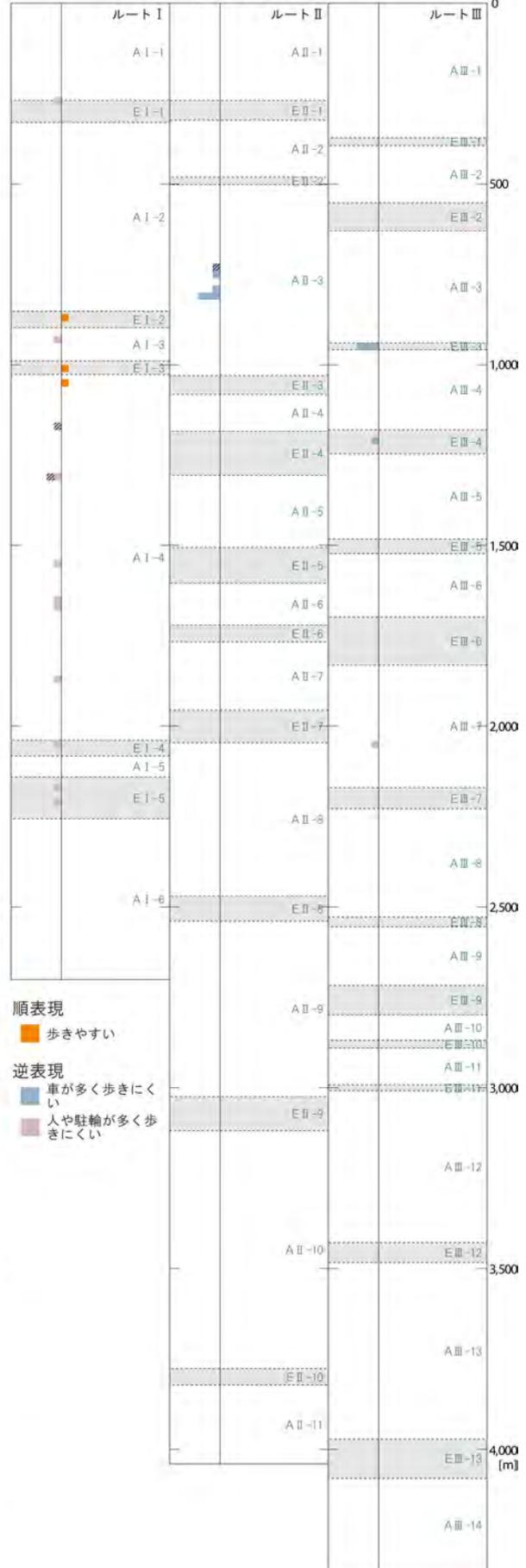
[72] 親しみ



[73] 裏



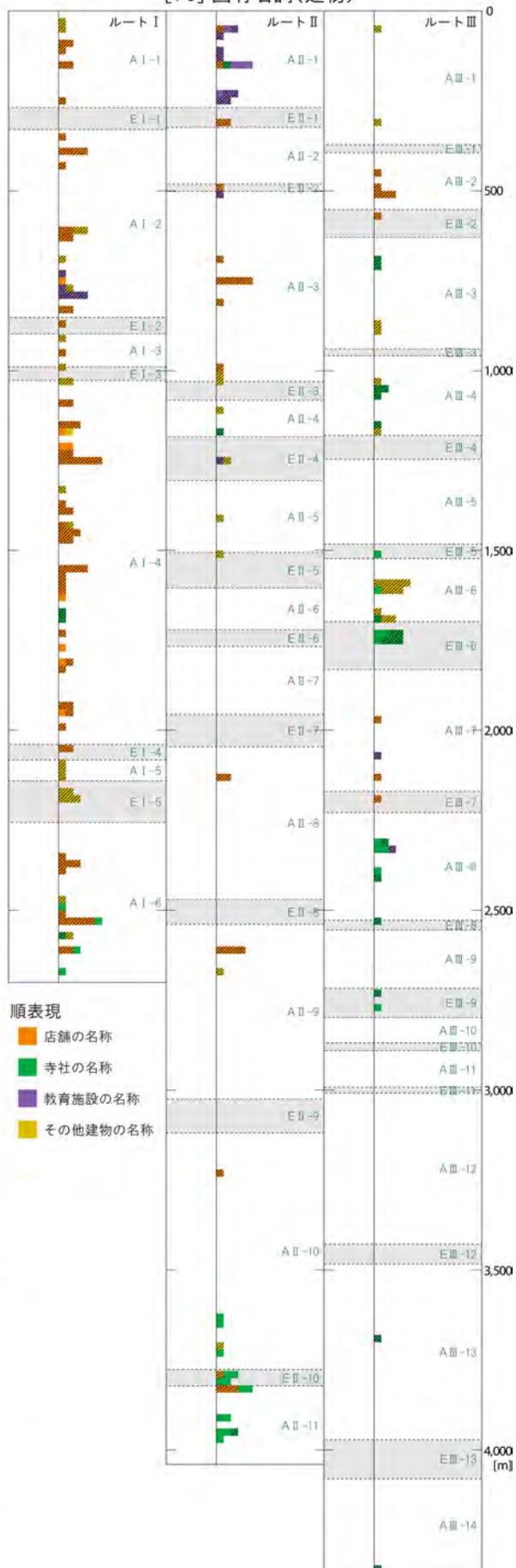
[74] 歩きやすさ



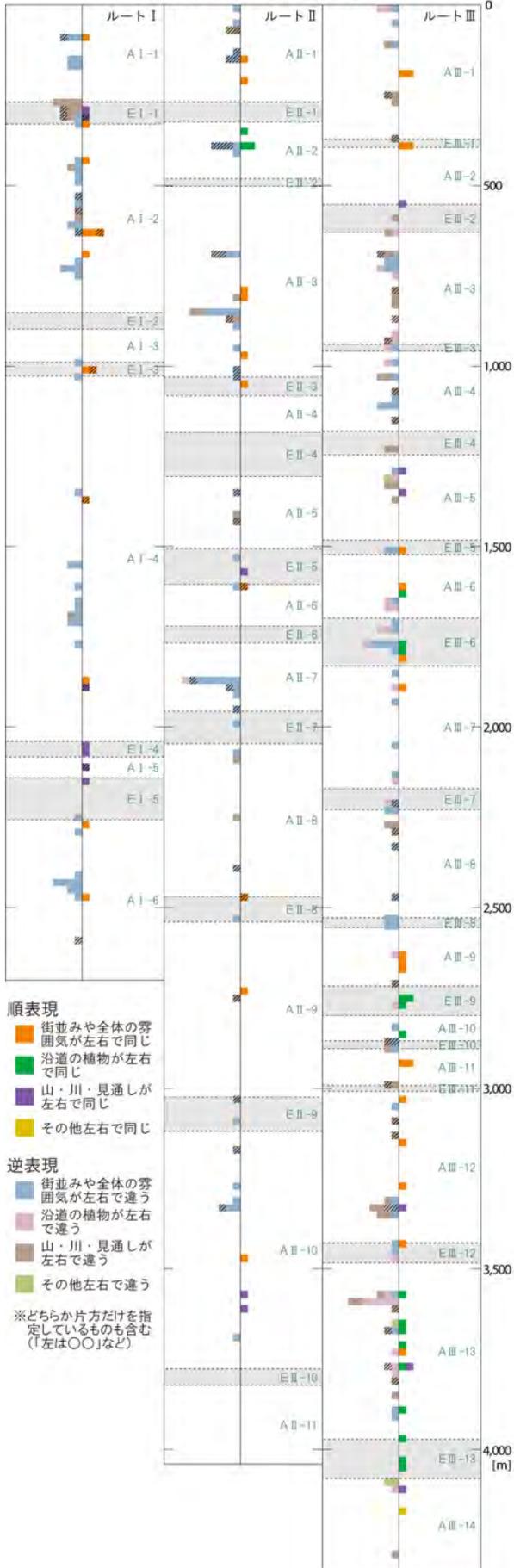
[75] 固有名称(場所)



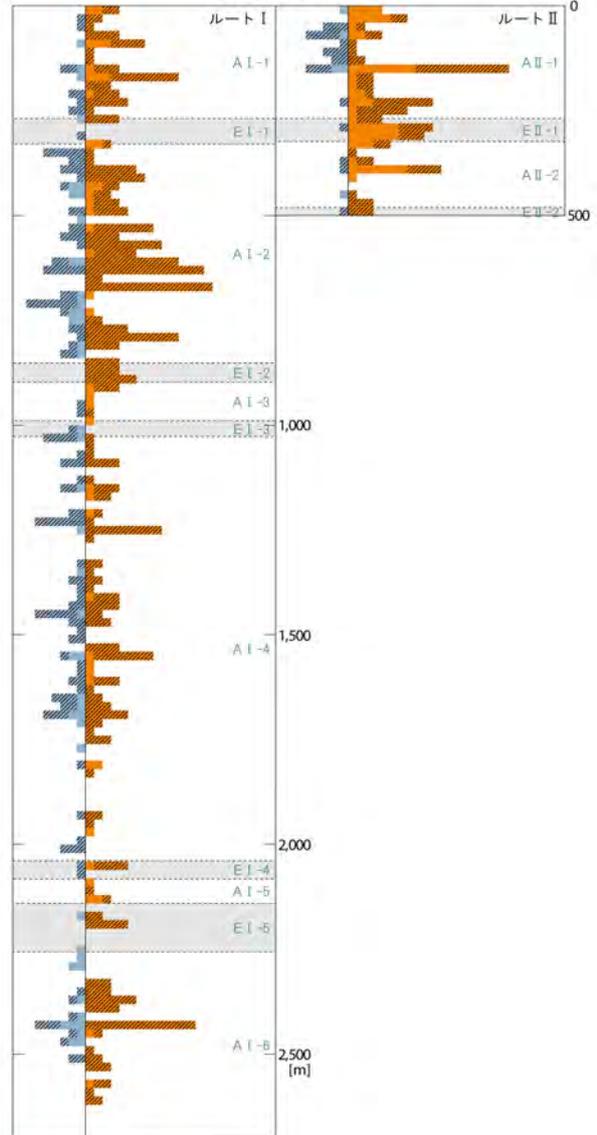
[76] 固有名称(建物)



[77] 街路の左右の比較



[78] 街路のサイド



Appendix-D 京都の都市史年表

京都の都市史についてまとめた年表を掲載する。これは文献『京・まちづくり史』の年表（高橋康夫・中川理編，昭和堂，2003，pp.30-66.）をベースに、本文中で参照している各種文献の内容を加えて作成したものである。それぞれの出来事は以下の項目立てでまとめている。

- A. 年 …都市の変容が起こった年
- B. 主体 …都市を変容させた主体
- C. 都市の変容 …形態的、意味的、制度的などさまざまな面での都市の変化。大半が意図をもったデザイン行為の結果であるが、天災などそうでない場合もある
- D. 背景 …デザイン行為や都市の変容を引き起こした背景。すでに形成されている空間からの影響、デザイン主体の意図、時代の状況などがある
- E. 影響 …同時代の他者や後世の人々に対して与えた影響。特に長期にわたって、あるいは長い時間を隔てた後に大きな影響をおよぼしたものや、主体の意図とは違う面で影響があったものについて記載している

このうちBとCについては下表のように類型化し、各行の冒頭に記している。

B. 主体		C. 都市の変容			
皇	天皇、皇室	住	住居	地	地域
政	為政者(前近代)	商	商業施設	鉄	鉄道
国	国家、政府(近代以降)	観	観光施設、観光道路	イ	その他インフラ
地	地方自治体	工	工場	制	制度
宗	宗教勢力	政	政治拠点	祭	祭、イベント
住	都市住民	宗	宗教施設	暮	暮らし
企	企業	教	教育施設	戦	戦争、戦災
他	その他	建	その他建築、建築一般	災	その他災害
×	なし	景	景観	他	その他
		路	街路、自動車交通		

	年	主体	都市の変容	背景	影響	
×	他	100~200 万年前	なし	断層運動により京都盆地発生	-	その後の歴史の舞台がつけられる
他	イ	5~7世紀	秦氏	桂川の治水	桂川は水運の大動脈、葛野は豊穡の地であるが、桂川は度々氾濫大陸の治水技術	桓武天皇の長岡京遷都にも財政面で影響
皇	制	784	桓武天皇	長岡京遷都	政權交代、旧勢力との縁を切る 桂川~淀川の水利	
皇	制	794	桓武天皇	平安京遷都	早良親王の怨恨による長岡京への厄災 自然景観 水陸の便 四神相応 これまでの諸京の経験	千年の都の創立
皇	路 政 宗 商 住 工		平安京グリッドプラン 船岡山を基準点、朱雀大路を中心として東西1500丈×南北1751丈四丈(12m)モジュールの採用 高い築地塀	長安を参照 中国のコスモロジーや都市計画論 これまでの諸京の経験	その後の都市構造を大きく規定 朱雀大路のオーバースケールが右京衰退の一因に。他の大路小路も巷所化	
皇	制		平安京の土地所有制度 既存の百姓は代替地を与え追い出し 京内は荘園領主が所有、住民(「京戸」と呼ばれる)へ貸出	律令制による支配	のちには崩れ、住民が自ら所有するようになる	
皇	地	9世紀	天皇家	空閑地の有効利用を奨励	宅地よりも畑、空閑地が目立ち、有効利用	
住	暮	9世紀~	住民	街路の治安が悪化、夜は百鬼横行、昼は放牧場	広すぎた街路、築地塀	

	年	主体	都市の変容	背景	影響
住 路	10世紀	寺社などの諸領主、住民	巷所化が進む	広すぎた街路 土地の有効利用、生産力の拡大	街路幅の減少 街路のゆらぎ 街路中心空間への転換
住 路			辻子を開通	大きすぎた街区に対し、生活に合わせた空間利用	宅地割の変更 突抜、路地へ継承される
住 路	10世紀	住民	二面町から四面町へ築地堀取り壊し	二面町が機能せず 街区重視から街路重視へ	街路中心空間への転換
住 路 書			通りの俗称が成立	街区重視から街路重視へ	街路中心の鳥瞰的空間概念の成立
住 祭			坊条による呼称からの移行 祇園祭が成立	疫病の流行	現代にまで続く京都の一大イベント 祝祭空間としての街路
政 住 地	10世紀	全体	左京は北と東へ発展 右京は田園化	右京は低湿地(粘土質) 鴨東の開発	都市の重心が移動 右京は明治期まで田園
皇 政	10世紀	天皇家	大内裏に代わり里内裏、仙洞御所を用いるように	大内裏の火災 左京の発展、右京の衰退	左京偏重の加速
政 皇 地 政 宗	10世紀	藤原氏	鴨東に別院	鴨東は土地がよく清い水	都市の重心がさらに東へ
政 皇 地 政 宗	1075~	白河天皇	法勝寺など、白川周辺の開発 のちの上皇にも引き継がれ、六勝寺など白川の繁栄	摂関政治の終わり 藤原時代の否定、権力の誇示 交通の要衝 京内の新規寺院の禁止	都市の重心がさらに東へ
皇 政	1086~	白河上皇	鳥羽離宮の造営	院政の新拠点 交通の要衝	京を大きく飛び出し南に新拠点
住 住 商	11世紀半ば	住民	店舗兼住居が成立	街路中心空間への移行 内裏の弱体化により町民は自営を求められる 律令制の弛緩とともに東西の市以外でも商取引が始まる	その後のプロトタイプに
住 路 書	11世紀末	住民	面(おもて)と頬(つら)の地点表記が出現	街路中心空間の進化	
政 政	12世紀半ば	平家	六波羅に拠点	平治の乱以降の平家台頭 武家社会の成立	鴨東のさらなる発展
住 建	12世紀後半	住民	京町家の原型が成立	街路中心空間 普請技術	その後のプロトタイプに
住 商 地			町小路(新町通)の三条、四条、七条あたりが賑わう	下京はもとから町人中心 産業の集積	下京の中心地に
政 制	1180	平清盛	福原遷都	平氏が宋との貿易拡大を狙う	源氏に敗れて頓挫
政 制	1192	源頼朝	鎌倉幕府の成立 京都は首都機能(行政機能)を失う 幕府は六波羅探題を置いて京都を監視	軍事的要衝として頼朝は鎌倉を選択	京都の地位低下
× 災	1227	なし	火事、大内裏の焼失	-	その後再建されず 跡地は「内野」と呼ばれるように
住 商 工 地	1234頃	住民	七条町の成立、多様な商工民が活動	東市周辺の民間の市	
政 制	1336	足利尊氏	京都に室町幕府 京都は再び首都へ	1333年に鎌倉幕府滅亡 足利尊氏と北朝との関係	
宗 政	14世紀後半	寺院	禅宗寺院の進出、交通の要衝に立地	禅宗の起り、権力掌握	
政 宗	1377	足利義満	室町殿(花の御所)の造営	義満の代で支配確立 都の中心の新拠点	上京の発展、武家と公家の街
政 宗	1392	足利義満	相国寺建立	権力の誇示 禅宗への帰依 室町殿に隣接	さらに上京発展 のちにまで残る広大な寺院
政 政	1397	足利義満	北山殿(のちの鹿苑寺)建立	権力の誇示 新たな政治拠点	北山文化 京都を代表する観光名所に
住 地 書	14世紀末	住民	洛中、上京・下京、上ル・下ルの呼び名が広がる 公家社会の上京、町人社会の下京	北に内裏があることから北が「上ル」 公家町と町人町の分離	京都特有の空間秩序の成立
住 書	15世紀初頭	住民	町(ちょう)の形成~両側町の成立 町人という呼び名	街路中心空間の進化	地域コミュニティの主要単位に
住 住 書 他	15世紀前半	住民	市中の山居の流行	都市の中に自然や静寂を求める	茶の湯文化とともに発展
住 他 戦	1467~77	細川氏、山名氏ら	応仁の乱 京都のほとんどが焼失、荒廃	足利義政の跡目争いを中心とする権力闘争	公家の上京と町衆の下京の分離促進 商工業者の南部は被害少なく、復興を担う 鴨東の寺社も焼け、江戸時代の開発につながる 公家が地方へ流れ、文化を普及し、各地で小京都建設 守護で下剋上の風潮、戦国時代へ
住 工 書	15世紀後半	住民	「構」の建設 自衛コミュニティ形成 堀川などの水面空間の開発	応仁の乱以来の治安悪化を受け、戦闘、防御のため 上京はごく小規模で高密	
住 政 工 政	1482	足利義政	東山山荘(のちの慈照寺)の造営開始	義政は政治を放棄し風流を楽しむ	東山文化 京都を代表する観光名所に

		年	主体	都市の変容	背景	影響
×	災	1489	なし	大火、上京で二千戸ほど焼失	-	
住	地	15世紀末	住民	応仁の乱で離散した大宿直の織り手が帰還、西陣を形成	山名軍跡地	京都の一大産業に成長 秀吉や江戸幕府も庇護
住	祭	1493	住民	祇園祭が再興	応仁の乱からの再興 町衆の地力	
×	災	1494	なし	大火、下京の過半が焼失	-	
×	災	1500	なし	大火、上京で二万戸ほど焼失	-	
他	建	16世紀	戦国武将	京都盆地には50近い数の城 将軍家も築城(中尾城、霊山城など)	幕府の弱体化 首都攻防戦	現代にはほとんど残らず
住	イ	1527	住民	「町の囲い」構築	治安の悪化、自衛	
住	地	16世紀前半	住民	町名が定着	街路中心空間	現代にまで続く場所の呼び名の完成
住	制			町人の土地所有が安定	中央政権に対し町衆の実力が大きくなる	家持と借家人、裏借家成立 町家の急激な発展
住	藩	1534	住民	内裏の近辺で「六町」を結成 初の町組成立	町よりマクロな自治単位	以下順次町組が成立、コミュニティ 基盤に
宗	戦	1536	延暦寺	天文法華の乱 法華21寺焼き討ち、上京の三分の一、下京のほとんどもに延焼	延暦寺と法華宗の宗教戦争	法華宗は禁じられる 延暦寺も武家との対立を深め、信長からの焼き討ちに遭う(1571年)
政	政	1559	足利義輝	洛中最初の城を建設	洛中の軍事支配の強化(応仁の乱後は洛外の山城が拠点だった)	義昭の二条城に引き継がれる
政	政	1569	織田信長	足利義昭の旧二条城建設	信長の上洛の野望 上京と下京をつなぐ狙い	上京と下京の一体化進む
政	戦	1573	織田信長	上京焼討	義昭との確執 義昭側につく公家衆への懲罰 下京は信長に金銭を支払い従属	信長の上京復興 室町幕府滅亡、旧二条城破却
住	工	1573	住民	新在家絹屋町の建設	信長による復興策として、町衆の力を生かして織物産業再興	
他	他	1581	明智光秀	本能寺の変、信長の死	怨恨説など諸説あり	秀吉の台頭
住	制	1585	住民	はじめての町式目が見られる 以後各町に広まる	自治体制の強化	江戸時代には支配体制の末端に組み込まれる 街並み規制の始まり
政	政	1586	豊臣秀吉	聚楽第建設 周辺を城下町、大名屋敷として整備	天下統一 権力誇示、拠点形成	城下町としての京都への変貌
政	制	1587~	豊臣秀吉	洛中検地	混乱していた土地所有の是正 租税のシステム化 支配体制の確立	筆界特定による道幅の固定 草の根的都市改造を公に認める
政	路	1590	豊臣秀吉	天正地割の導入	大きすぎる街区による未利用地に対する街区単位の是正 辻子の考えを採り入れる	短冊型は諸城下町に採用される
政	地			内裏と公家町の整備	公家の支配	ほぼ現在の御所の範囲に
政	地			寺院の移転(宗派ごとにまとめて寺町、下寺町、寺之内、大宮通西へ) 本願寺も大阪天満から移転	寺院の弱体化 町衆と寺院の分断 第二の防御壁 強力な本願寺勢力を支配下に置く	現在にまで残る寺町形成 寺町通は繁華街に
政	地			身分別の居住地域の指定(武家町、寺町、公家町)	集中的管理	諸城下町に採用される
政	イ	1591	豊臣秀吉	御土居建設	防御 治水 街を広く囲うことによる人心掌握	洛中と洛外との分離 江戸以降も治水や竹の払い下げに利用される のちに取り壊し、河原町、木屋町、先斗町、七条新地が成立
政	制			地子免除	荘園領主の領有権剥奪 町衆の権利を認める	
政	路	1591頃	豊臣秀吉	木戸門の撤去	町衆の自衛体制から権力による保護へ	
政	建			すべての家屋を二階建てにする命令	街並景観の整備	二階建町家の発達
政	政	1595	豊臣秀吉	聚楽第を破壊	世継ぎ問題 伏見への移転	
住	住	16世紀末	住民	裏借家の建設進む 路地が多つくられる	高密度な都市	敷地の有効利用策として定着
政	政	1601	徳川家康	二条城建設	武家の権威の象徴 将軍家の宿所、政治拠点	江戸末期には政治の表舞台 のちの観光名所に
政	制	1603	徳川家康	江戸幕府成立 京都は首都機能(行政機能)を失う	後北条氏征服以来の徳川家の拠点 新都市の開発	京都も朝廷、公家社会として江戸幕府に対して一定の存在感 安定した治世のもと、都市の成熟
他	イ	1606	角倉了以ら	保津川開削	材木運搬	川下りの名所に
他	イ	1611	角倉了以ら	高瀬川開削	伏見港への水運	風情のある景観
住	イ	1670	武家、町民	御土居の東に鴨川新堤を建設、御土居を破却	時代が平和に 鴨東の開発	御土居が屋敷、町に変貌(他の部分も同様) 洛中と洛外が連続
住	建	1674	住民	この頃棧瓦が発明され、一般家屋に普及	本瓦は重く一般家屋には使われていなかった 板葺きやこけら葺きは火に弱かった	街並みが一変 耐火能力向上

		年	主体	都市の変容	背景	影響
政 × 住	路 景 災	1690	幕府	道幅を広げ、街並みを直すよう命令	景観保全	
		1708	なし	宝永の大火、14,000戸焼失	-	
政 × 住	地 景 災	18世紀前半	住民	祇園など新地の開発 鴨東の市街地化	寺社領に残された耕地の宅地化	現代まで続く繁華街、祇園の成立
		18世紀前半	幕府	木戸門の設置を義務化	防犯	夜は閉め切られた閉鎖的街並みに
政 × 住	路 景 災	1730	なし	西陣焼け、西陣がほぼ全焼	-	
		18世紀	住民	町家の様式が確立	都市の高密化、発展 美意識の洗練	京都らしい建築のプロトタイプと目されるようになる
× 住	災 建	1788	なし	天明の大火、京の8割が罹災、 39,720戸焼失	-	天皇は仮御所へ
		18世紀後半	住民	ミニ開発が流行	都市の高密化 投機的目的	地代だけで生計を立てる仕舞屋を生み出す
× 他	災 戦	1830	なし	京都大地震	-	
		1864	長州、薩摩、会津軍	蛤御門の変 攘夷派(長州)と幕府派(薩摩、会津)の戦闘、長州が敗北 元治の大火(どんだん焼け)、27,500戸焼失、長州の宿泊所の天龍寺も焼失	黒船の来航に起因する攘夷派と佐幕派の激しい対立	戦災による荒廃は東京奠都のきっかけの一つにもなる
皇 政	制	1868	明治天皇、政府	天皇が東京へ移る 京都が首都機能を完全に失う	大政奉還(1867年) すでに天皇の力のおよんでいた西日本よりも、佐幕派の多い東日本をおさえるため	多くの公家も従い、公家町消滅 西陣も顧客を失う 京都は沈滞ムードに 人口の激減
		1868~81	京都府	第一期京都策(政治経済や学校制度の改革)	沈滞からの打開策	
地	制	1869	京都府	町組改正(上京下京各33番組) 上京と下京の境は三条通	町組ごとの町数均一化 小学校開校のため	
地	教	1869	京都府、住民	番組小学校開校(64校) 日本初の近代小学校	町組からのコミュニティを基礎とした小学校運営	新しいコミュニティの核 京都の誇りの一つに
国 宗	制	1870	政府	廃藩置県、京都府が成立	近代的支配体制確立のため	
		1871	政府	上知令	寺社勢力の弱体化方針 神仏分離、廃仏毀釈	寺社の統廃合 山林の荒廃が進む 寺社領の開発
地 企 国	観 祭	1872	京都府、京都博覧会社	第一回京都博覧会 以後1896年(第14回)まで毎年開催	博覧会を中心とした観光策 京都の産業の復興策 観光都市としての出発	地方での博覧会の先導役
		1872	京都府	木戸門の撤去 新京極通を開設	交通優先 京都に賑わいを取り戻す新たな繁華街の創出 すでに芝居小屋が並んでいた寺の境内地を利用	以降街路に固定物はなくなる 現在に至る繁華街
住 国	祭 鉄	1872	住民	祇園祭が再興	大火からの再興	
		1875	政府	京都一神戸間で鉄道開通 以降続々と新線開通 七条停車場開設	都市間連携の強化策 鉄道技術の輸入	鉄道の時代へ 舟運や馬車の衰退
他 国 皇	教 景	1875	新島襄	官許同志社英学校開校(のちの同志社大学)	新島の留学経験をもとに、キリスト教教育の私学を目指す	大学の街・京都の始まり
		1877	京都府、明治天皇	京都御苑の整備	京都の荒廃を見た明治天皇の願い	現在の御苑の形が定まる
× 地	災 路	1877	なし	京都大洪水、多くの床上浸水	-	
		1878	京都市、伏見市	新築家屋の間引き下げ令	道路拡幅のため	反対が強く廃止
他 地	景 工	1881	岩倉具視ら	保勝会結成	都市美を残したい	現在も各地で活動
		1883~85	京都市(北垣国道知事)、技師田辺朔郎ら	琵琶湖疏水建設	内陸都市ゆえの不利(臨海部に近代産業)、石炭産地からも遠い 水車動力による工業や精米 琵琶湖から大阪湾への運輸 洛北の田畑の灌漑 疏水で防火強化 飲料水 河川の浄化 →途中でアメリカの技術を採用入れ、水力発電が加わる	京都の近代化の象徴 銀行や電気など数々の会社が誕生 水力発電はのちの京電の電力に
地 地	制 路	1885~95	京都府	第二期京都策(琵琶湖疏水など)	産業振興	
		1886	京都府	新京極通の諸車通行禁止	歩行者で賑わう繁華街をつくる	現在につながる新京極通の姿
地 地	制 イ	1888	京都府	現在の左京区南部の一部を併合	市街地の拡大	
		1889	京都府	蹴上インクライン完成	物資の運搬	近代化の象徴
国 建	教	1889	政府	第三高等中学校、吉田に新築移転(のちの京都大学)	高等教育の強化 北垣知事の招致 京都市民の期待	吉田周辺の学生街としての発展 大学の街としての求心力強化
		1889	京都市	市制特例発布	特に重要な東京、京都、大阪の三市は直接国の統治下に置く	

	年	主体	都市の変容	背景	影響
企	1895	京都電気鉄道	塩小路東洞院－伏見下油掛間開業以降続々と新線開通	水力発電所による電力供給 縦横の街路が都好合 観光都市ゆえの集客 内国勲業博覧会	
国	1895	政府	第四回内国勲業博覧会 114万人が来場	京都、日本の産業と歴史をアピール 強いナショナリズム	岡崎の開発 寺社の修理や発掘など文化財の整備、および交通の整備が進む メディアも通じて京都全体の観光も活発化
地	1895	京都市	平安遷都千百年紀年祭 大極殿を模した平安神宮を建設	同上	同上
地	1895～1912	京都市	第三期京都策(三大事業など)	産業振興、都市整備策	
国	1897	政府	古社寺保存法を公布	全国での寺社調査	以後数々の法律が整備され、文化財の保護が進む
国	1898	政府	東京、京都、大阪の三市の市制特例が廃止、市制実施	政治的重要性から自治が制限されてきたが、叶う	
他	1900	中川小十郎	京都法政学校開校(のちの立命館大学)	京都大学からの派生	御所東にキャンパス、のちに衣笠移転
地	1901	京都市	西陣で機数半減を決議	金融恐慌	西陣の衰退
地	1902	京都市	現在の南区北部の一部を併合	市街地の拡大	
地	1908	京都市	三大事業(第二琵琶湖疏水、上水道の整備、道路拡張・市電開通)開始	都市内部の着実な近代化を目指す 日露戦争後の好景気	大通りによる骨格形成
国	1908	陸軍、京都府	第十六師団を深草に設置	日露戦争時の兵力強化で新設された師団の移駐	師団街道の整備 深草市街地の形成
企	1910	横田永之助ら	二条城南西に京都最初の映画撮影所	映画ブーム	太秦中心に「東洋のハリウッド」を形成
地	1912	京都市	市電の運転開始 以降続々と新線開通	市の交通整備策	
企	1912	大丸	大丸呉服店、四条高倉に鉄筋木造三階建新店舗	四条通のメインストリートとしての機能	現在まで残る立地
企	1912	京都綿ネル	衣笠園を賃貸開始	新中間層に向けた郊外住宅地開発が始まる	
地	1912	京都府	市電開通に伴う祇園祭の中止勧告、大きな議論に	伝統が都市の発展を妨げかねない存在に	
企	1915	三井	三井銀行京都支店が四条烏丸に新築	東西の目抜き通りの交差点	現在まで残る立地
皇	1915	皇室、京都市	大正天皇即位大典 博覧会も開催	明治天皇の崩御(1912年) 行幸道路などの道路整備	博覧会場の当初の予定地は植物園として整備、1924年開園
地	1918	京都市	京都電気鉄道を買収	路面電車事業の統一	
地			現在の右京区東部、北区南部、左京区南部の一部を併合	市街地の拡大	
国	1919	政府	都市計画法の制定 翌年には京都でも委員会設置	税制格差によるスプロールの是正 市街地開発に法的根拠をつける	全国の都市計画の均質化
地	1921	京都市	街路整備事業を都市計画決定	郊外部に先行的に道路建設	
地	1922	京都市	都市計画区域を決定 四条烏丸を中心とした半径23kmという広大な範囲を指定	京都を公園都市とする 景観保全と観光振興のため	
地	1924	京都市	用途地域の第一回指定 商業・工業・住居・未指定の四区分	開発のコントロール	都市計画法の新法(1968年)後に細分化するが、現行の用途地域の骨格がほぼできている
企	1925	近江倉庫	宅地分譲を開始 以降日本土地商事と改称、宅地分譲を展開 この当時、他社も約20社存在	土地を扱う近代資本の成立	後追いで公共交通整備が進む
地	1925	京都市	都市計画法第12条による土地区画整理事業を実施	民間の開発意欲の高まり	
地	1926	京都市	都市計画法第13条による全国初の土地区画整理事業を都市計画決定(西大路通、北大路通、九条通などに沿う425万坪)	特に新しく市に編入された地域では街路が未整備 外郭道路のための用地買収が難航	その後の事業のお手本に 郊外都市開発の新しいフォーマットの成立
地	1927	京都市	京都駅前観光案内所	日本全国で一大観光ブーム	
皇	1928	皇室、京都市	昭和天皇即位大典 博覧会も開催	大正天皇の崩御(1926年)	
地	1928	京都市	市営バスの運行を開始(出町一植物園間)	市電を補完	モータリゼーションにより、市電より長く残ることになる
地	1930	京都市	下水道建設に着手	衛生対策	
地			初の風致地区を指定(東山一帯)	自然景観の維持	
企	1931	京阪電鉄	京阪線の西院－京阪京都(現・大宮)間で関西初の地下鉄を運転開始	地下を活用した都市交通の新技術	
地	1931	京都市	現在の京北町を除く右京区の大部分、北区の中部、左京区の南部、南区、山科区、伏見区の大部分を併合	市街地の拡大 独立した立場にあった伏見市との連携	

	年	主体	都市の変容	背景	影響
地			都市計画法第13条で初の京都市による代執行(西院南部)	組合事業の難航	
地	1932	京都市	国内初のトローバスが西院一大宮間で運転開始	市電の補完 実験的事業	定着せず
地			都市計画公園第一号として船岡山を指定	自然景観の維持	
地	1933	京都市	京阪国道、京津国道開通	都市間ネットワーク	
地	1934	京都市	堀川改修工事	平安期の運河で、農業用水や友禅染などにも使われていたが氾濫多かった	
企	1937	民間企業	大型ビル建設相次ぐ 丸物百貨店、丸紅商店、住友銀行、高島屋、藤井大丸など	近代資本の発展	現在に残る立地
国	1941	政府、諸外国	太平洋戦争勃発	領土拡大による衝突など	いくつもの都市計画が戦争により中止 建物疎開や供出
地	1941	京都市	巨椋池の干拓を開始	食料増産	
住	1942	住民	この年を最後に祇園祭が中止	戦争	
国	1944	政府	学徒総動員	戦況悪化	
地	1944	京都市	第一次建物疎開	戦況悪化 空襲による延焼を防ぐ 消防用地	のちに道路や公園として整備される
他	1944	連合軍	馬町および出水学区に爆弾投下	-	
地	1945	京都市	第二次建物疎開 第三次建物疎開 第四次建物疎開…実施途上で終戦	戦況悪化 空襲による延焼を防ぐ 消防用地	のちに道路や公園として整備され、大幹線道路が成立
他	1945	連合軍第六軍	京都に進駐、美術館や植物園などを接收	敗戦、アメリカ軍による統治	
地	1947	京都市	疎開土地の半数を買い上げて幹線道路整備などに利用することを都市計画決定	疎開空地を有効利用	
住	1947	住民	祇園祭が再興 1951年には戦前の規模を回復	伝統行事の維持 復興の意気高揚	
地	1948~50	京都市	現在の右京区北部、左京区北部、西京区北部、南区南部を順次併合	市街地の拡大	
地	1950	京都市、政府	国際文化観光都市宣言 特別法として京都国際文化観光都市建設法を可決	国際的な観光都市とする	
国	1950	政府	文化財保護法を施行	文化財の保護	
住	1950年代~	住民	土地区画整理事業の対象外の地域ではスプロールが進行	人口増加	
地	1951	京都市	堀川通(七条-上賀茂)完成 堀川アパート完成(全国初の下駄履き住宅)	疎開空地を有効利用	
地	1953	京都市	五条通、堀川通、御池通の拡幅工事完成	疎開空地を有効利用	
地			不良住宅改良事業の第一号棟が鹿ヶ谷に完成	災害に弱く不衛生な住宅地の改良 同和問題の解決	
地	1955	京都市	財政再建団体に転落	消費型都市に不利なシャープ税制により 税収が不足	
地			衣笠宇多野線(きぬかけの道)着工	観光道路の整備	
地	1956	京都市	屋外広告物条例を議決	美観、風致	
地	1957~59	京都市	現在の伏見区南部の一部、左京区北部の一部、西京区の大部分を順次併合	市街地の拡大	
地	1958	京都市	比叡山ドライブウェイ開通	レジャー	
地			市電全線が開通、全盛期を迎える	経済発展、都市発展	
地	1959	京都市	東山ドライブウェイが開通	レジャー	
地	1960	京都市	桑只、養正、三条地区で改良事業	災害に弱く不衛生な住宅地の改良 同和問題の解決	
地	1961	京都市	市電北野線廃止	老朽化、狭軌であったため 経営の合理化	
国	1963	政府	名神高速栗東-厄崎間開通 65年に全線開通	都市間高速交通	
企	1964	京都タワー(株)	京都タワー竣工	展望タワーブーム 中央郵便局跡地	景観論争(屋外広告物として処理した手法に対しても批判)
地	1965	京都市	西山ドライブウェイが開通	レジャー	
地	1966	政府	古都保存法公布	京都の特別な位置づけ	
国	1966	政府、京都市	国道一号線枚方バイパス、外環状線の一部が開通	1970年の大阪万博で京都でも観光客増加が見込まれ、道路整備	
国			国立京都国際会館が開館	国際化の拠点	
国	1967	政府、京都市	国道一号線東山バイパスが開通	都市間ネットワーク	
国	1968	政府	都市計画法(新法)施行	時代に即した新法	
地	1969	京都市	洛西ニュータウン事業が決定	新しい市街地の開発	

	年	主体	都市の変容	背景	影響	
地	鉄	1969	京都市	トローバス全廃	モータリゼーション コストなどで利点なし	
地	景制	1970	京都市	住居専用地区に高さ10m以下とする 高度地区を指定	景観保全	
地	観路			嵐山高架道路開通	観光地の長辻通を回避するバイパス	
地	景制	1971	京都市	京都市景観条例制定	景観保全	
地	地制	1973	京都市	新用途地域の決定	旧用途地域よりも細かく規定	
地	観路			マイカー観光拒否宣言	モータリゼーションを抑制したい	功を奏さず
地	地制	1976	京都市	現在の11区すべてが成立	合理化など	
国	地景制	1976	政府、京都市	産寧坂、祇園新橋地区が国指定重要 伝統的建造物群保存地区に指定 (1979年には嵯峨鳥居本、1988年 には上賀茂も指定)	景観保全	
地	鉄	1978	京都市	全線で市電の営業廃止	モータリゼーション	市電軌道が明け渡され、さらにモータ リゼーションが加速
地	鉄	1981	京都市	地下鉄烏丸線開業	市電に代わる新しい公共交通機関	ネットワークを形成できず、市電を補 完できず
地	路			北大路バスターミナル開設 翌年洛西にも	市電に代わる交通網の整備	
地	景制	1981	京都市	京都市文化財保護条例公布	文化財保護	
地	景制	1985	京都市	古都保存協力税(古都税)条例可決	観光行政の資金源とするため	
宗	観宗	1985	京都仏教会	拝観停止	古都税への反対 信教の自由、政教分離の原則	
地	景制	1986	京都市	京都市歴史的界わい景観地区補助 金交付規則を公布	景観保全	
地	観制	1988	京都市	古都税を廃止	寺社からの反対	
企	地	1989	外部資本	外部資本が京都参入 基準地価調査で京都市内の住宅 地、商業地の地価が全国でトップの記 録の高騰	バブル経済 投機目的	景観問題の激化
宗	建景	1990	京都仏教会	京都ホテルの計画	総合設計制度による高さ60mの計画	反対運動が起こるも、結局1994年竣 工
地	教	1990～	京都市	小学校の統廃合を実施、29校から9 校へ	中心部の人口減少、少子化	跡地を芸術センターや図書館、デイ ケアセンターなどとして活用
他	景制	1994	ユネスコ	「古都京都の文化財」が世界文化遺 産登録	景観保全と観光振興のため	国内外からの観光客さらに増加
国	地	祭	政府、京都市	地球温暖化防止京都会議、京都議 定書の採択	地球温暖化	
地	路景	1997	京都市	鴨川にフランスの「ボン・デ・ザール」を 模した歩道橋計画	日仏友好 鴨川兩岸の交通を便利に	激しい反対運動 翌年白紙撤回
企	建景	1997	JR、京都市	京都駅ビル営業開始	新しい京都の顔づくり	反対運動
地	鉄	1997	京都市	地下鉄東西線開通	地下鉄の利便性向上	
地	景景	1998	京都市	町家の悉皆調査 京都市景観まちづくりセンター設立	町家保存の機運の高まり 景観保全のための団体づくりのため	
地	景制	2000	京都市	京町家再生プラン発表	景観保全	
地	景制			歩いて暮らせる街づくり推進会議設立	反モータリゼーション	
地	景制	2002	京都市	京都市都市計画マスタープラン策定	景観と発展の両立のため	
地	景制	2004	政府	景観法制定 京都是景観行政団体に	景観保全	
地	地制	2005	京都市	京北町を併合	合理化など	
地	地景制			「時を超え光り輝く京都の景観づくり審 議会」設置	景観保全	
地	景制			京都市景観計画制定	景観保全	
地	景制	2007	京都市	新景観政策実施	景観保全	

Appendix-E 歩行実験の手法の展開例

歩行実験の手法を調査やデザイン提案に活用した3つの事例について述べる。

■嵯峨嵐山リサーチワークショップ

1. 概要

(1) 目的

筆者らが2009年4月にスタートさせた「嵯峨嵐山プロジェクト」の推進のために、フィールドとなる嵯峨地域のポテンシャルや問題点を明らかにする。この背景には、新しいものをつくってゆくだけの街づくりではなく、すでにある魅力を発見し、いかにそれを最大化できるかを探求する活動のコンセプトがある。またその結果をもとに、実験に協力してくれた地元企業に地域デザインの提案を行なうことも一つの目的である。

(2) 対象地

嵯峨地域一帯と、トロッコ列車（トロッコ嵯峨駅～トロッコ亀岡駅）

(3) 日程

2009年5月16日(土)～18日(月)

(4) 対象者

近畿6大学の主に建築系の学生 のべ65名

2. 記録方法

(1) 用紙と書き方

B4大の地図にトレーシングペーパーを重ね、そこにカラーペンで書き込んでもらう(図1)。記録内容は図2の通り。地域内を自由に歩行できる領域歩行実験の手法を用いたことや、ポイント、広域、眺望というような記録方法が特徴である。また自由記述の他スケッチを用いることも推奨した。

(2) 聞き取り事項

歩行後には一番よかったところ、驚いたところの他、問題点を聞き取った。

3. 重ね合わせ記述方法

トレーシングペーパーをスキャンし、記録内容別に取り出して重ね合わせた(図3)。

これだけでは地域の様相を共有可能なかたちで可視化できるとは言えないが、今回は定量化ではなくプロジェクトメンバーによる地域のポテンシャルの把握が主な目的であったので、その目的は果た



図1 記録例

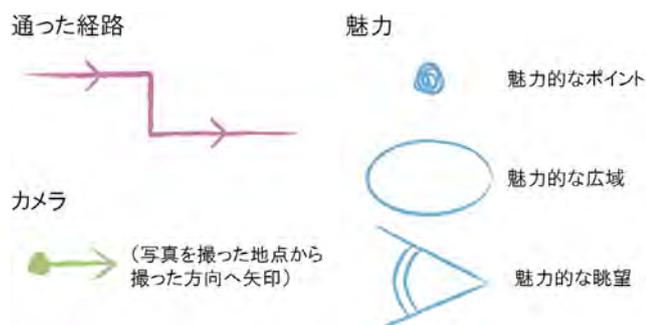


図2 記録内容

すことができた。

4. デザインへの活用

地元協力企業に対しプレゼンテーションを行なった（図4がその概要）。それぞれの場所を具体的にどのようにデザインするかというよりも、地域をどのように捉え、観光客らにどのように歩いてもらうかという地域再編の提案となっている。

5. まとめ

領域歩行実験は定量的記述につなげるためには苦勞が多いが、実験者が地域の面的ポテンシャルを具体的に把握するには簡明な方法であることがわかった。また長辻通や清涼寺周辺などで捉えられた様相は、本研究の結果とよく合致している。JR線以北やトロッコ列車沿線はあまり知られておらず、参加者からは驚きや魅力を感じたことが報告された。

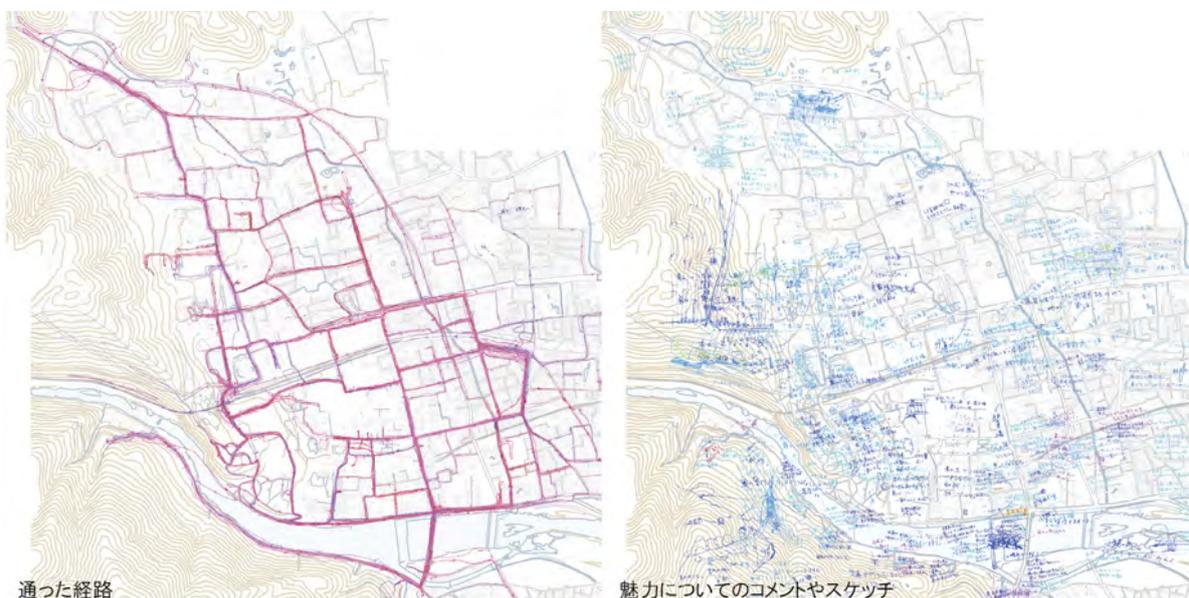


図3 重ね合わせ記述



図4 地区別の傾向や今後とるべき方針の整理

■嵯峨嵐山 発見！リサーチ

1. 概要

(1)目的

同じく「嵯峨嵐山プロジェクト」において、今度は地域を訪れる観光客が実際にどのように歩き、どのような魅力を発見しているのかを調べることを目的とした。また捉えた様相だけではなく観光客のプロフィールや地域を訪れた理由などについてもインタビューし、街づくりにも活かせる実践的な提案ができるよう計画した。今回は協力企業だけではなく地元の商店主らへのプレゼンテーションも目的としている。

(2)対象地

嵯峨地域一帯（トロッコ嵯峨駅、京福電鉄嵐山駅、阪急電鉄嵐山駅の駅前にて聞き取り）

(3)日程

2010年8月21日(土)・22日(日)

(4)対象者

観光客 3 駅合計223名

2. 記録方法

(1)用紙とシール

各駅から散策に出かける観光客に声をかけ、A3大の地図を手渡す。この地図の上に、歩きながら魅力を感じた場所にシールを貼ってもらう（図5）。今回は特に「五感で感じる魅力」をテーマとし、五感別に色分けしたシールを用意した。

(2)聞き取り事項

散策を終えた地図を再び各駅前で回収し、訪れたスポットやその順番、シールが指す内容などについてヒアリングした。またどこから来たか、前後にどこを訪れるか、嵯峨を訪れるのは何度目か、なぜ嵯峨を選んだか、職業や年齢といった多彩な事項も聞き取った。



図5 シールの貼られた地図

3. 重ね合わせ記述方法

手渡し地図に貼ってもらったシールを、各駅前に用意した大きな地図に再びシールで貼り重ねることで、共有された地域の魅力をその場で可視化した（写真1, 2, 3, 図6）。ここでも五感別のシールを用い、時間が経つにつれて地図がカラフルに彩られていった。

またデータをもとに観光客の歩行ルートを隣接グラフに表現する（図7）などの記述を行ない、ヒアリングデータによるデータマイニングも行なった。



写真1 京福電鉄嵐山駅前



写真2 トロッコ嵯峨駅前



写真3 貼り重ねられるシール

■岡崎エリア 街歩き調査

1. 概要

(1)目的

多分野の専門家が連携しながら実社会のさまざまな課題を解決することを目指す「京都大学サマーデザインスクール2011」において、筆者の所属する研究室では「岡崎地域のパブリックスペースデザイン ～持続可能社会のための都市エリアの再設計に向けて～」という3日間のワークショップを主催した。岡崎エリアの将来ビジョンを、地域の中央にある広場の具体的なデザインとともに提示することがワークショップ全体の目的である。その1日目に、対象地域でのフィールドワークにおいて、歩行実験の手法を採り入れた街歩き調査を実施した。自らの身体をもって地域の実情を掴み、デザインへのヒントを得ることが調査の目的である。

(2)対象地

岡崎地域一帯

(3)日程

2011年9月27日(火) (ワークショップ自体は27日～29日)

(4)対象者

ワークショップ参加者 3チーム計17名 +記録者、指導教員など5名

2. 記録方法

対象エリアの住宅地図をA4大の用紙9枚に分けてバインダーに綴じ、それを持って自由に歩いてもらう(写真4, 5)。今回は記入方法について特に指定しなかったが、提案を見据えながら魅力や問題点を見つけてもらうよう促した。

3. 重ね合わせ記述方法

ワークショップ2日目の最初に3チームそれぞれで、各メンバーが歩いたルートやそこで感じたことを一枚の地図にまとめ、共有した(写真6)。今回はデザインのための論点の洗い出しが目的であるので、重ね合わせ記述の際にも定量化よりもスピードとコミュニケーションを重視したものと言える。

4. デザインへの活用

フィールドワークの結果の共有以降は、どのようにデザインの提案に結びつけるかは各チームに一任された。ワークショップ2日目にこの議論を行ない、3日目に「サマーデザインスクール」全体の場でプレゼンテーションを行なった。チーム1では岡崎エリアを電気自動車などの先端技術のテストフィールドとする提案(図9)、筆者がファシリテーターを務めたチーム2では広場に設けた池泉回遊式庭園を中心に地域に循環を生み出



図9 チーム1の提案のイメージバース



写真4 手法の説明



写真5 調査の様子



写真6 調査結果のチーム内での共有

す提案、チーム3ではエリア全体に水盤を導入することで地域に一体感や解放感をもたらす提案がなされた。

5. まとめ

地域デザインを提案する主体自らのための調査ということが今回の特徴であるが、歩きながら感じたことを地図に書くという手法はフィールドワークの手段として有効であった。また建築以外の分野の専門家にも概ね好評であった。

■3プロジェクト全体のまとめ

以上の3プロジェクトはそれぞれに目的が異なり、デザインのプロセスも異なるため、それによって柔軟に記録方法や参加対象を変えてきた。しかし様相を記録しながら街を歩き、それを重ね合わせて様相を記述するという方針は共通しており、それによって多くの人々の間で様相を共有することができた。またデザインプロセスの一環として領域歩行調査を組み込むことの有用性も示された。

今後、本論9.2.1で述べたような簡便な記述手法の開発ができれば、領域歩行をより魅力的で汎用的な調査ツールとすることができ、またさまざまなケースの知見を蓄積することができるようになると期待される。

